九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—49—

朝倉郡杷木町所在
楠田遺跡　小覚原遺跡　二十谷遺跡
陣内遺跡　上野原遺跡

1998
福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—49—

朝倉郡杷木町所在
楠田遺跡　小覚原遺跡　二十谷遺跡
陣内遺跡　上野原遺跡

序

この報告書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告は、朝倉郡杷木町所在の国指定史跡杷木神籠石を挟んで両側に位置する、楠田遺跡・小覚原遺跡・二十谷遺跡・陣内遺跡・上野原遺跡についてのものであります。その内容は、縄文時代の竪穴住居群や墓地、中世の建物跡等と、出土した貴重な縄文土器・石器類であります。

他に例を見ない重要な成果を公開することができた本報告書を、文化財愛護思想の普及、研究・教育等の資料としてご活用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり、地元の方々をはじめ、数々の御協力をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表します。

平成10年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安常喜

例　言

1　本書は、昭和61・62年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて、九州横断自動車道建設に伴って発掘調査を実施した報告である。

2　本書に収録した遺跡は、楠田遺跡（51地点）・小覚原遺跡（52－A地点）・二十谷遺跡（52－B地点）・陣内遺跡（53地点）・上野原遺跡（54地点）である。ともに、福岡県朝倉郡杷木町に所在する。

3　本書掲載の各発掘現場における遺構実測図・測量図の作成者は以下のとおりである。

楠田遺跡：井上裕弘・高橋章・中間研志・伊崎俊秋・小田和利・木村幾多郎・日高正幸・高田一弘・田中康信

小覚原遺跡：木村幾多郎・伊崎俊秋・中村光恵・後藤カミヨ・矢野静子

二十谷遺跡：佐々木隆彦・高田一弘・武田光正・中村光恵・後藤カミヨ・矢野静子

陣内遺跡：佐々木隆彦・高田一弘・武田光正・中村光恵・後藤カミヨ・矢野静子

上野原遺跡：井上裕弘・高田一弘・中村光恵・後藤カミヨ・矢野静子

4　出土遺物の実測は、楠田遺跡が中間、小覚原遺跡が伊崎・木下修・大野愛里、二十谷遺跡が佐々木・杉原敏之・岡泰子、陣内遺跡が佐々木・杉原・大野・岡、上野原遺跡が井上裕弘・辻啓子が担当した。

5　各遺跡の遺構・遺物の製図は、塩足里美・江上佳子・秋吉邦子・豊福弥生が担当した。

6　出土遺物の整理は、九州歴史資料館岩瀬正信氏の指導のもとに、県文化課甘木事務所にて行い、同事務所に保管している。

7　遺構の写真撮影は各現場の担当職員が行い、空中写真はフォト・オオツカの大塚清美氏による。出土遺物は九州歴史資料館にて石丸洋氏の指導のもとに北岡伸一が撮影した。

8　本書で使用した方位は、すべて座標北である。

9　本書の執筆・編集は以下のとおりである。

Ⅰ・Ⅶ……井上裕弘

Ⅱ・Ⅲ……中間研志

Ⅳ……伊崎俊秋（石器のうち、黒曜石・サヌカイト製品については木下修氏の教示を受ける）

Ⅴ・Ⅵ……佐々木隆彦（打製石器は杉原敏之）

Ⅴ－4……大澤正己

本 文 目 次

頁

Ⅰ　調査の経過……1

Ⅱ　位置と環境……5

Ⅲ　楠田遺跡……11

1　はじめに……11
2　竪穴住居跡……15
3　竪穴状遺構……19
4　土　壙……22
5　溝状遺構……55
6　押型文グリッド……55
7　縄文包含層……60
8　おわりに……100

Ⅳ　小覚原遺跡……107

1　はじめに……107
2　竪穴住居跡……108
3　土坑……116
4　その他……138
5　C14年代測定……150
6　まとめ……150

Ⅴ　二十谷遺跡……153

1　はじめに……153
2　遺跡の概要……153
3　遺構と遺物……155
4　鍛冶関連遺物の金属学的調査……207
5　おわりに……237

Ⅵ　陣内遺跡……239

1　はじめに……239
2　遺跡の概要……239
3　遺構と遺物……241
4　おわりに……249

Ⅶ　上野原遺跡……251

1　はじめに……251
2　火葬墓……251
3　溝状遺構及びピット群……252
4　旧谷部及び包含層……255
5　おわりに……257

図 版 目 次

（楠田遺跡）　　本文対照頁

図 版 1 (1) 楠田遺跡遠景（南東から）……11
(2) 楠田遺跡全景（上層）（東から）……11
図 版 2 (1) 楠田遺跡全景（下層）（南から）……11
(2) 下層北端中央付近遺構集中部分（南から）……11
図 版 3 (1) 1・4号竪穴住居跡付近遺構集中部分（北上空から）……15
(2) 遺跡中央部十字トレンチ付近（南上空から）……15
図 版 4 (1) 押型文グリッド付近（北上空から）……55
(2) 1・4号竪穴住居跡（北から）……15
図 版 5 (1) 1号竪穴住居跡（北から）……15
(2) 2・3号竪穴住居跡（北から）……17
図 版 6 (1) 2号竪穴住居跡（南東から）……17
(2) 4号竪穴住居跡（北西から）……19
図 版 7 (1) 1号竪穴（西から）……19
(2) 2号竪穴（北から）……19
図 版 8 (1) 3号竪穴・4号土壙（北から）……19
(2) 4号竪穴・32号土壙（南から）……20
(3) 5号竪穴（南から）……21
図 版 9 (1) 4号土壙（西から）……22
(2) 11号土壙（東から）……26
(3) 12号土壙（北西から）……26
図 版 10 (1) 5・6・8号土壙（北から）……24
(2) 10号土壙（北から）……24
(3) 15号土壙（南西から）……26
図 版 11 (1) 14号土壙（南東から）……26
(2) 16号土壙（南から）……26
(3) 17号土壙（北から）……28
図 版 12 (1) 18号土壙（北から）……28
(2) 20号土壙（北から）……28
(3) 21号土壙（南東から）……28

図版 13 (1) 22号土壙（東から）……28
(2) 23号土壙（東から）……32
(3) 24号土壙（東から）……32
図版 14 (1) 28号土壙（南から）……34
(2) 30号土壙（北から）……34
(3) 31号土壙（南東から）……34
図版 15 (1) 29号土壙（東から）……34
(2) 29号土壙（西から）……34
(3) 34号土壙（南から）……36
図版 16 (1) 38号土壙（北西から）……36
(2) 40号土壙（西から）……36
(3) 41号土壙（東から）……39
図版 17 (1) 42号土壙（北から）……40
(2) 45号土壙（西から）……40
(3) 45号土壙縄文土器出土状態……40
(4) 43号土壙（東から）……40
図版 18 (1) 44号土壙（東から）……40
(2) 101号土壙（南から）……41
(3) 103号土壙（北から）……42
図版 19 (1) 102号土壙（南から）……42
(2) 104号土壙（南東から）……44
(3) 105号土壙（北から）……45
図版 20 (1) 106号土壙（北から）……45
(2) 107号土壙（北西から）……45
(3) 107号土壙押型文土器出土状態……45
図版 21 (1) 108号土壙（北東から）……49
(2) 110号土壙（北から）……50
(3) 115号土壙（北から）……52
図版 22 (1) 109号土壙（南西から）……49
(2) 113号土壙（北西から）……50
(3) 114号土壙（北東から）……52
図版 23 (1) 112号土壙（北から）……50
(2) 118号土壙（南から）……55

(3) P151（北西から）……22
図版 24 (1) 107号土壙出土押型文土器……45
(2) 107号土壙出土押型文土器……45
図版 25 (1) 押型文グリッド出土押型文土器……55
(2) 押型文グリッド出土押型文土器……55
図版 26 (1) 縄文早期・前期・中期土器……60
(2) 縄文後期土器……62
図版 27 (1) 104号土壙出土縄文後期精製深鉢……44
(2) 同上 細部……44
図版 28 (1) 縄文後期精製深鉢……62
(2) 縄文後～晩期精製深鉢……62
図版 29 (1) 縄文晩期精製深鉢……68
(2) 縄文晩期精製浅鉢……64
図版 30 (1) 縄文晩期浅鉢……64
(2) 同上 裏面……64
図版 31 (1) 縄文晩期マリ・浅鉢……68
(2) 縄文晩期浅鉢……64
図版 32 (1) 縄文晩期定型深鉢……71
(2) 縄文晩期定型深鉢……71
図版 33 (1) 縄文後～晩期刻目土器・粗製深鉢……78
(2) 縄文後～晩期刻目土器・粗製深鉢……78
図版 34 (1) 縄文晩期粗製深鉢……71
(2) 縄文晩期粗製鉢……71
図版 35 (1) 刻目凸帯土器……78
(2) 刻目凸帯土器……78
図版 36 (1) 刻目凸帯土器……78
(2) 刻目凸帯土器……78
図版 37 (1) 刻目凸帯土器……78
(2) 刻目凸帯土器……78
図版 38 (1) スクレイパー・使用剥片……91
(2) 同上 裏面……91
図版 39 (1) 打製石鏃・石錐……89
(2) 磨製石斧・偏平打製石斧……92

図　版　40　(1)　偏平打製石斧……92
　　(2)　偏平打製石斧……92
図　版　41　(1)　偏平打製石斧……92
　　(2)　弥生・歴史時代土器……98
　　(3)　円形土製品・鉄器……99
図　版　42　楠田遺跡調査風景（縄文土器多量出土状況）……11

（小覚原遺跡）

図　版　43　(1)　小覚原遺跡遠景（南から）……107
　　(2)　小覚原遺跡全景（気球写真）……107
図　版　44　(1)　1号住居跡（東から）……110
　　(2)　2号住居跡（南から）……110
図　版　45　(1)　3号住居跡（西から）……112
　　(2)　4号住居跡（東南から）……112
図　版　46　(1)　5号住居跡（東から）……112
　　(2)　6号住居跡（西から）……112
図　版　47　(1)　7号住居跡（西から）……113
　　(2)　8号住居跡（東南から）……114
図　版　48　(1)　9号住居跡（西から）……114
　　(2)　10号住居跡（北から）……116
図　版　49　(1)　11号住居跡（北西から）……116
　　(2)　12号住居跡（西から）……116
図　版　50　(1)　24号土坑（西から）……116
　　(2)　25号土坑（北西から）……118
　　(3)　28号土坑（西から）……118
図　版　51　(1)　32号土坑（北から）……118
　　(2)　34号土坑（北から）……118
　　(3)　26号土坑（北から）……118
図　版　52　(1)　2号土坑（北東から）……120
　　(2)　35号土坑（北から）……120
　　(3)　37号土坑（東から）……120
図　版　53　(1)　11号土坑（西から）……120
　　(2)　4号土坑（西から）……120

(3) 13号土坑（西から）……120
図　版　54　(1) 21号土坑（東から）……123
(2) 33号土坑（東から）……123
(3) 31号土坑（北から）……123
図　版　55　(1) 3号土坑（東から）……123
(2) 同　上（東から）……123
(3) 同　上（東から）……123
図　版　56　(1) 5号土坑（東から）……125
(2) 同　上（東から）……125
(3) 同　上（東から）……125
図　版　57　(1) 14号土坑（東から）……127
(2) 19号土坑（南から）……127
(3) 10号土坑（北から）……129
図　版　58　(1) 39号土坑（南から）……129
(2) 1号土坑（北東から）……129
(3) 同　上（北東から）……129
図　版　59　(1) 22号土坑（東から）……135
(2) 36号土坑（東から）……137
(3) 作業風景……107
図　版　60　小覚原遺跡出土土器……139
図　版　61　小覚原遺跡出土土器・陶磁器……139
図　版　62　小覚原遺跡出土石器　①……139
図　版　63　小覚原遺跡出土石器　②……139
図　版　64　小覚原遺跡出土石器　③……139
図　版　65　小覚原遺跡出土石器　④……139
図　版　66　小覚原遺跡出土石器　⑤……139

（二十谷遺跡）

図　版　67　二十谷遺跡俯瞰……153
図　版　68　(1) 二十谷遺跡俯瞰……153
(2) Ⅱ区竪穴住居跡群……155
図　版　69　(1) 1号・24号竪穴住居跡、28号・33号土壙、2号溝……155
(2) 2号・26号竪穴住居跡、20号・29号土壙、2号溝……155

図　版　70　(1)　３号～５号竪穴住居跡、７号～９号・23号土壙、１号落し穴……156
(2)　４号～７号・25号竪穴住居跡、24号土壙……157
図　版　71　(1)　８号～15号竪穴住居跡、11号・12号・24号土壙……161
(2)　８号～12号竪穴住居跡……161
図　版　72　(1)　11号～15号竪穴住居跡、12号土壙……161
(2)　16号・17号・19号・20号竪穴住居跡、25号土壙……167
図　版　73　(1)　16号・21号竪穴住居跡、３号掘立柱建物、25号土壙……167
(2)　18号竪穴住居跡、44号土壙……168
図　版　74　(1)　22号・23号・25号竪穴住居跡、10号・11号・32号土壙……171
(2)　22号・23号・27号・28号・31号・32号竪穴住居跡、32号土壙……171
図　版　75　(1)　１号・２号掘立柱建物とその周辺……175
(2)　18号土壙（小鍛冶関連遺構）……182
図　版　76　(1)　20号竪穴住居跡出土土器……199
(2)　２号掘立柱建物Ｐ－１……176
図　版　77　(1)　２号掘立柱建物Ｐ－２……176
(2)　Ｐ－17（２号掘立柱建物に伴うものか）……176
図　版　78　(1)　Ｐ－15（２号掘立柱建物に伴うものか）……176
(2)　Ｐ－14（２号掘立柱建物に伴うものか）……176
図　版　79　(1)　１号～３号・５号土壙……178
(2)　８号土壙（東から）……180
図　版　80　(1)　17号土壙（北から）……182
(2)　25号土壙（東から）……185
図　版　81　(1)　28号土壙（南から）……185
(2)　32号土壙（東から）……187
図　版　82　(1)　44号土壙（北から）……188
(2)　45号土壙（西から）……188
図　版　83　(1)　46号土壙（西から）……188
(2)　１号落し穴（東から）……191
図　版　84　(1)　２号落し穴（東から）……192
(2)　３号落し穴（東から）……193
図　版　85　(1)　４号落し穴（北から）……193
(2)　５号落し穴（東から）……195
図　版　86　(1)　６号落し穴（南東から）……195

(2) 7号落し穴（南から）……195
図 版 87 (1) 8号落し穴（南から）……195
(2) 9号落し穴（東から）……196
図 版 88 (1) 8号・9号落し穴ピット断面……195
(2) 10号落し穴（北西から）……197
図 版 89 二十谷遺跡出土遺物……199
図 版 90 二十谷遺跡出土遺物……200
図 版 91 二十谷遺跡出土遺物……202
図 版 92 二十谷遺跡出土遺物……203

（陣内遺跡）
図 版 93 (1) 陣内遺跡遠景（南から）……239
(2) 陣内遺跡全景（東から）……239
図 版 94 (1) 炭焼窯炭化物出土の状態（西から）……242
(2) 炭焼窯完掘の状態（西から）……242
図 版 95 (1) 1号掘立柱建物（北から）……242
(2) 2号掘立柱建物（東から）……242
図 版 96 陣内遺跡出土遺物……244
図 版 97 陣内遺跡出土遺物……244

（上野原遺跡）
図 版 98 (1) 発掘区全景（北から）……251
(2) 発掘区南半部全景（西から）……251
図 版 99 (1) 発掘区南端（西から）……251
(2) 1号・2号火葬墓全景（北から）……251
図 版 100 (1) 1号火葬墓（西から）……251
(2) 2号火葬墓（北から）……252
図 版 101 (1) 溝1・ピット7出土土器……252
(2) ピット7出土土器・包含層出土土製品・石製品……253
図 版 102 (1) 旧谷部・包含層出土土器 ①……255
(2) 旧谷部・包含層出土土器 ②……255

頁

写 真 1 小覚原遺跡より楠田遺跡をのぞむ……137

頁
Photo.1　鉄滓の顕微鏡組織……223
Photo.2　鉄滓の顕微鏡組織……224
Photo.3　ガラス質鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織……225
Photo.4　鉄塊系遺物・羽口・炉壁の顕微鏡組織……226
Photo.5　鉄塊系遺物と付着鍛造剝片の顕微鏡組織……227
Photo.6　鉄塊系遺物と付着鍛造剝片の顕微鏡組織……228
Photo.7　鉄塊系遺物（ＮＧＴ−6　その1）表皮スラグの特性Ｘ線像と定量分析値
（×1,500　縮小0.53）……229
Photo.8　鉄塊系遺物（ＮＧＴ−6　その2）表皮スラグの特性Ｘ線像と定量分析値
（×1,500　縮小0.53）……230
Photo.9　小鉄塊・鉄滓の顕微鏡組織……233
Photo.10　鉄滓と羽口先端溶融スラグの顕微鏡組織……234
Photo.11　二十谷遺跡出土鍛錬鍛冶滓（ＦＫ10）の特性Ｘ線像……235
Photo.12　二十谷遺跡出土羽口先端溶融スラグ（ＦＫ14）の特性Ｘ線像……236

挿　図　目　次

頁
第1図　九州横断自動車道路線図……2
第2図　周辺主要遺跡分布図（1/10,000）……6
第3図　楠田遺跡・小覚原遺跡・二十谷遺跡周辺地形図（1/5,000）……8
第4図　楠田遺跡・小覚原遺跡周辺地形図（1/2,000）……12
第5図　楠田遺跡上層遺構全体図（1/600）……13
第6図　楠田遺跡下層遺構全体図（1/600）……14
第7図　楠田遺跡基本層序……15
第8図　楠田1・4号竪穴住居跡実測図（1/60）……16
第9図　楠田2・3号竪穴住居跡実測図（1/60）……17
第10図　楠田1・2号竪穴実測図（1/60）……18
第11図　楠田3～5号竪穴実測図（1/60）……20
第12図　楠田4・5号竪穴出土土器実測図（1～3：4号竪穴、4：5号竪穴）（1/3）……21
第13図　楠田1～4号土壙実測図（1/40）……23
第14図　楠田5～9号土壙実測図（1/40）……25

第15図　楠田10～13号土壙実測図（1/40）……27
第16図　楠田14～18号土壙実測図（1/40）……29
第17図　楠田12～45号土壙出土土器実測図（1/3）……30
第18図　楠田19～23号土壙実測図（1/40）……31
第19図　楠田24～28号土壙実測図（1/40）……33
第20図　楠田29～31号土壙実測図（1/40）……35
第21図　楠田32～35・37号土壙実測図（1/40）……37
第22図　楠田36・38～40号土壙実測図（1/40）……38
第23図　楠田41・42号土壙実測図（1/40）……39
第24図　楠田43～45号土壙実測図（1/40）……41
第25図　楠田101～104号土壙実測図（1/40）……43
第26図　楠田102～105号土壙出土土器実測図（1/3）……44
第27図　楠田105～107号土壙実測図（1/40）……46
第28図　楠田107号土壙出土押型文土器実測図（1/3）……47
第29図　楠田108～110号土壙実測図（1/40）……48
第30図　楠田108～117号土壙出土土器実測図（1/3）……49
第31図　楠田111～114号土壙実測図（1/40）……51
第32図　楠田115・116・118号土壙実測図（1/40）……53
第33図　楠田117号土壙実測図（1/40）……54
第34図　楠田遺跡下層十字トレンチ土層実測図（1/120）……56
第35図　楠田遺跡下層押型文グリッド遺物出土状態実測図（1/60）……57
第36図　楠田遺跡押型文グリッド出土土器実測図（1/3）……59
第37図　楠田遺跡包含層出土縄文早～中期土器実測図（1/3）……61
第38図　楠田遺跡包含層出土縄文後期土器実測図（1/3）……62
第39図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期浅鉢実測図（その１）（1/3）……65
第40図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期浅鉢実測図（その２）（1/3）……66
第41図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期マリ等実測図（1/3）……68
第42図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期精製深鉢実測図（1/3）……70
第43図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期粗製・定型深鉢実測図（その１）（1/3）……72
第44図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期粗製・定型深鉢実測図（その２）（1/3）……74
第45図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期粗製・定型深鉢実測図（その３）（1/3）……76
第46図　楠田遺跡包含層出土刻目・刻目凸帯土器実測図（その１）（1/3）……79
第47図　楠田遺跡包含層出土刻目・刻目凸帯土器実測図（その２）（1/3）……81

第48図　楠田遺跡包含層出土刻目・刻目凸帯土器実測図（その３）（1/3）……83
第49図　楠田遺跡包含層出土縄文土器底部実測図（その１）（1/3）……86
第50図　楠田遺跡包含層出土縄文土器底部実測図（その２）（1/3）……89
第51図　楠田遺跡出土打製石器実測図（その１）（実大）……90
第52図　楠田遺跡出土打製石器実測図（その２）（実大・2/3）……91
第53図　楠田遺跡出土石斧実測図（その１）（1/2）……93
第54図　楠田遺跡出土石斧実測図（その２）（1/2）……94
第55図　楠田遺跡出土石斧実測図（その３）（1/2）……95
第56図　楠田遺跡出土石斧実測図（その４）（1/2）……96
第57図　楠田遺跡出土石斧実測図（その５）（1/2）……97
第58図　楠田遺跡包含層出土弥生～歴史時代土器実測図（1/3）……98
第59図　楠田遺跡出土土製品・鉄器実測図（1/2）……99
第60図　楠田遺跡主要遺構と生活痕跡（1/600）……101
第61図　小覚原遺跡区割図（1/600）……108
第62図　小覚原遺跡遺構配置図（1/300）……109
第63図　小覚原１・２号住居跡実測図（1/60）……110
第64図　小覚原３・４号住居跡実測図（1/60）……111
第65図　小覚原５・10号住居跡実測図（1/60）……113
第66図　小覚原６～８号住居跡実測図（1/60）……114
第67図　小覚原９・11・12号住居跡実測図（1/60）……115
第68図　小覚原24・25・28号土坑実測図（1/30）……117
第69図　小覚原２・26・32・34号土坑実測図（1/30）……119
第70図　小覚原11・33・35・37号土坑実測図（1/30）……121
第71図　小覚原４・13・21・31号土坑実測図（1/30）……122
第72図　小覚原３・５号土坑実測図（1/20）……124
第73図　小覚原１・10・14・39号土坑実測図（1/30）……128
第74図　小覚原６～９・12・16号土坑実測図（1/60）……131
第75図　小覚原15・17～19号土坑実測図（1/30）……132
第76図　小覚原20・22・23・27・29・30号土坑実測図（1/60）……134
第77図　小覚原36・38・40号土坑実測図（1/60）……136
第78図　小覚原グリッド遺物出土位置（1/300）……138
第79図　小覚原遺跡出土土器等実測図（その１）（1/3）……140
第80図　小覚原遺跡出土土器等実測図（その２）（1/3）……141

第81図　小覚原遺跡出土石器実測図（その１）（1/2）……142
第82図　小覚原遺跡出土石器実測図（その２）（1/3）……143
第83図　小覚原遺跡出土石器実測図（その３）（1/3）……144
第84図　小覚原遺跡出土石器実測図（その４）（1/3）……146
第85図　小覚原遺跡出土石器実測図（その５）（1/4）……147
第86図　小覚原遺跡出土石器実測図（その６）（1/4）……148
第87図　小覚原遺跡出土石器実測図（その７）（1/4）……149
第88図　二十谷遺跡周辺地形図（1/1,000）……154
第89図　二十谷１・24号竪穴住居跡実測図（1/40）……155
第90図　二十谷２号竪穴住居跡実測図（1/40）……156
第91図　二十谷３号竪穴住居跡実測図（1/40）……156
第92図　二十谷４・５号竪穴住居跡実測図（1/40）……157
第93図　二十谷６号竪穴住居跡実測図、24号竪穴住居跡実測図（1/40）……158
第94図　二十谷７・25号竪穴住居跡実測図（1/40）……159
第95図　二十谷８・９号竪穴住居跡実測図（1/40）……160
第96図　二十谷10号竪穴住居跡実測図（1/40）……162
第97図　二十谷11・12・14号竪穴住居跡実測図（1/40）……163
第98図　二十谷13号竪穴住居跡実測図（1/40）……164
第99図　二十谷15号竪穴住居跡実測図（1/40）……165
第100図　二十谷16・21号竪穴住居跡実測図（1/40）……166
第101図　二十谷17・19号竪穴住居跡実測図（1/40）……167
第102図　二十谷18・29・33号竪穴住居跡実測図（1/40）……168
第103図　二十谷20号竪穴住居跡実測図（1/40）……169
第104図　二十谷22・23号竪穴住居跡、11・32号土壙実測図（1/40）……170
第105図　二十谷26～28号竪穴住居跡実測図（1/40）……172
第106図　二十谷30～32号竪穴住居跡実測図（1/40）……174
第107図　二十谷１・２号掘立柱建物実測図（1/80、1/40）……174－175
第108図　二十谷３号掘立柱建物実測図（1/60）……176
第109図　二十谷４号掘立柱建物実測図（1/60）……178
第110図　二十谷１～３・５・８号土壙実測図（1/30）……179
第111図　二十谷９～12号土壙実測図（1/30）……181
第112図　二十谷17・20・29号土壙実測図（1/30）……183
第113図　二十谷18号土壙（鍛冶関連遺構）実測図（1/80）……184

第114図　二十谷25・28・31・38号土壙実測図（1/30）……186
第115図　二十谷41・44・45号土壙実測図（1/30）……187
第116図　二十谷46～49号土壙実測図（1/30）……189
第117図　二十谷２号溝土層断面図（1/40）……191
第118図　二十谷１・２号落し穴実測図（1/30）……192
第119図　二十谷３・４号落し穴実測図（1/30）……193
第120図　二十谷５・６号落し穴実測図（1/30）……194
第121図　二十谷７・８号落し穴実測図（1/30）……196
第122図　二十谷９・10号落し穴実測図（1/30）……197
第123図　二十谷遺跡出土縄文土器実測図（1/3）……198
第124図　二十谷遺跡出土土器実測図（1/3）……200
第125図　二十谷遺跡出土土製品・石器実測図（1/3）……201
第126図　二十谷遺跡出土鉄器実測図（1/2）……202
第127図　二十谷遺跡出土壁体・鉄滓・鉄塊実測図（1/3）……203
第128図　二十谷遺跡出土石器実測図（その１）（2/3・1/2・1/4）……204
第129図　陣内遺跡周辺地形図（1/2,000）……240
第130図　陣内遺跡遺構配置図（1/400）……240－241
第131図　陣内遺跡炭焼窯実測図（1/60）……241
第132図　陣内遺跡１・２号掘立柱建物実測図（1/60）……243
第133図　陣内遺跡竪穴状遺構実測図（1/40）……244
第134図　陣内遺跡出土土器実測図（その１）（1/3）……245
第135図　陣内遺跡出土土器実測図（その２）（1/3）……246
第136図　陣内遺跡出土土製品実測図（1/2）……247
第137図　陣内遺跡出土石器実測図（その１）（2/3）……248
第138図　陣内遺跡出土石器実測図（その２）（1/2）……248
第139図　陣内遺跡出土石器実測図（その３）（1/2）……249
第140図　上野原遺跡火葬墓実測図（1/30）……252
第141図　上野原遺跡遺構配置図（1/300）……252－253
第142図　上野原遺跡溝１・Ｐ７出土土器実測図（1/3）……253
第143図　上野原遺跡谷部土層断面図（1/60）……254
第144図　上野原遺跡谷部包含層出土土器実測図（1/3）……256
第145図　上野原遺跡出土土製品・石製品実測図（1/2）……257

付　図　二十谷遺跡遺構配置図（1/200）

頁

Fig. 1　鉄塊系遺物（NGT−6　その1）表皮スラグのコンピューターブログラムによる高速定性分析結果（Photo. 7と対応）……231
Fig. 2　鉄塊系遺物（NGT−6　その2）表皮スラグのコンピューターブログラムによる高速定性分析結果（Photo. 8と対応）……232
Fig. 3　Fe−0系平衡状態図……221
Fig. 4　二十谷2号掘立柱建物（P17）出土鞴羽口実測図（1/3）（分析資料番号FK14）……222

表目次

頁

第1表　二十谷1号掘立柱建物計測表……174−175
第2表　二十谷2号掘立柱建物計測表……174−175
第3表　二十谷3号掘立柱建物計測表……176
第4表　二十谷4号掘立柱建物計測表……178
第5表　鉄滓・鉄塊・壁体観察表……202
第6表　陣内1号掘立柱建物計測表……243
第7表　陣内2号掘立柱建物計測表……243

Table. 1　供試材の履歴と調査項目……208
Table. 2　供試材の化学組成……208

Ⅰ　調査の経過

この報告書に掲載する楠田遺跡、小覚原遺跡、二十谷遺跡、陣内遺跡、上野原遺跡の調査は、昭和61・62年度に実施されたものである。まだ、工事発注前ということもあって工事用道路もなく、調査地点への進入路の確保に苦慮するとともに、62年には夏場の長雨による泥水の流出や土砂崩壊に悩まされる調査となった。一方、62年度の後半には全ての工事区の工事が発注され、一部工事と調査が錯綜するきぜわしい調査となる時期もあった。

発掘調査の時期は、楠田遺跡が昭和61年12月１日から62年５月31日、陣内遺跡が昭和61年８月22日から９月27日、上野原遺跡が昭和61年10月３日から17日、小覚原遺跡は昭和62年３月10日から５月31日の間で実施された。楠田遺跡は寒さの厳しい時期の調査となり、反面、陣内遺跡の調査は、残暑厳しい時期の調査となった。

各遺跡の所在地と遺跡の立地については、楠田遺跡（第51地点：ＳＴＡ290＋40～291＋90）が杷木町大字林田字楠田にあり、筑後川の支流である赤谷川東岸の河岸段丘上に形成された縄文時代の遺跡である。小覚原遺跡（第52－Ａ地点：ＳＴＡ293＋00～293＋60）が楠田遺跡の東にあり、杷木町大字大山字小覚原に所在している。阿蘇山から南に派生する標高約88ｍの丘陵上に形成された縄文時代晩期の遺跡である。

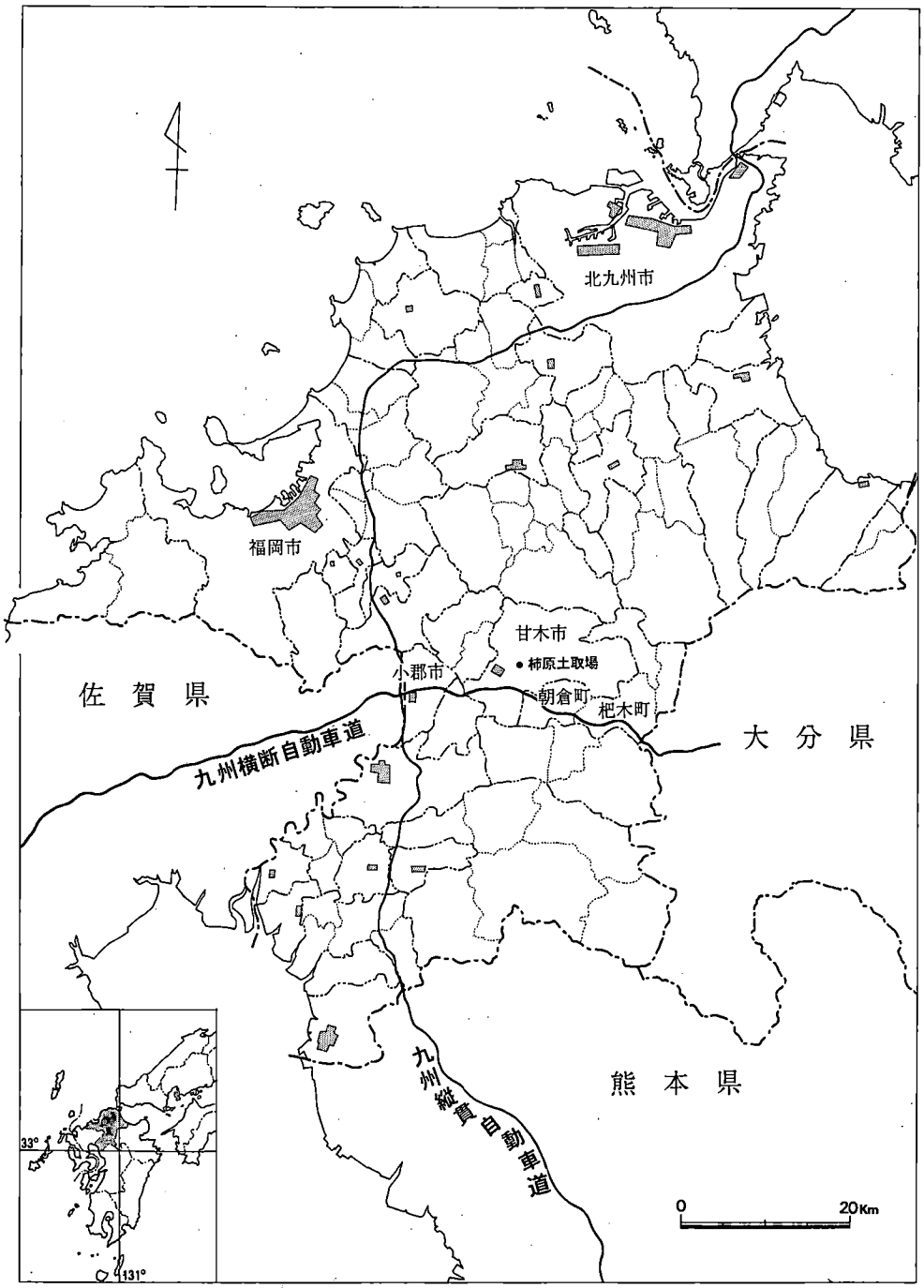
二十谷遺跡は、小覚原遺跡の東にあって第52－Ｂ地点（ＳＴＡ294＋60～295＋20）として登録されていた地点で、杷木町大字林田字二十谷に所在している。遺跡は阿蘇山北西山麓の緩やかな傾斜地に形成されている縄文時代晩期と中世の複合遺跡である。

陣内遺跡（第53地点：ＳＴＡ307＋30～308＋00）は杷木町大字穂坂字陣内、上野原遺跡（第54地点：ＳＴＡ308＋40～309＋30）は谷を挟んだ東側の大字穂坂字上野原に位置しており、陣内遺跡が阿蘇山の南東山麓斜面、上野原遺跡が南西山麓緩斜面に形成されている。

調査の結果は、楠田遺跡から縄文時代早期・前期・晩期にわたる多くの土器や石器をはじめ、竪穴住居跡、土壙墓、竪穴遺構、土壙など多数が検出された。しかし、地質的に遺構検出が難しく困難を極めた調査であった。

小覚原遺跡からは縄文時代晩期の竪穴住居跡12軒をはじめ、貯蔵穴、落し穴、土壙等20数基が発見された。

二十谷遺跡は縄文時代晩期と中世の複合遺跡で、特に総数33軒にも及ぶ竪穴住居跡群や50数基の土壙群からなる縄文時代晩期の大集落の発見は貴重であり、今後、この時期の重要な遺跡として注目されるだろう。中世のものとしては掘立柱建物跡３棟があり、製鉄関連遺跡であったらしく鉄滓やフイゴの羽口等も出土している。



第１図　九州横断自動車道路線図

陣内遺跡と上野原遺跡は狭い谷を挟んで隣接した遺跡で、いずれも内容的に希薄な遺跡であったが、陣内遺跡から中世の炭窯1基と掘立柱建物跡4棟、上野原遺跡からは中世の火葬墓などが発見された。とりわけ、中世の炭窯は類例の少ない資料であり貴重な発見となった。

なお、これら遺跡の発掘調査に当たっては、杷木町総務課をはじめ、建設課、教育委員会には御援助・御協力を得た。並びに暑い中、寒い中、作業員として参加していただいた地元の方々に対して心より感謝いたします。

昭和61・62年度の調査関係者は下記の通りである。

			昭和61年度		昭和62年度	
日本道路公団福岡建設局						
	局長		今村浩三（前任）	杉田美昭	杉田美昭	
	次長		菱刈庄二		菱刈庄二（前任）	吉岡康行
	総務部長		安元富次		安元富次	
	管理課長		森　宏之		森　宏之（前任）	副島紀昭
	管理課長代理		佐伯　豊		三野徳博	
日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所						
	所長		乗松紀三（前任）	風間　徹	風間　徹	
	副所長		西田　功		西田　功	
	副所長（技術）		中村義治		友田義則	
	庶務課長		徳永　登		徳永　登（前任）	大河尋光
	用地課長		岩下　剛（前任）	松尾伸男	松尾伸男	
	工務課長		後藤二郎彦		後藤二郎彦（前任）	豊里栄吉
	杷木工事区工事長		山中　茂（前任）	小沢公共	小沢公共	
福岡県教育委員会						
	総　括	教育長	友野　隆		竹井　宏	
		教育次長	竹井　宏		大鶴英雄	
		指導第二部長	渕上雄幸		大平岩男	
		指導第二部参事			窪田康徳	
		文化課長	窪田康徳		窪田康徳（兼任）	
		文化課長補佐	平　聖峰		平　聖峰	
		文化課長技術補佐	宮小路賀宏		宮小路賀宏	
		文化課参事補佐	栗原和彦		栗原和彦	
		文化課参事補佐	柳田康雄		柳田康雄	

庶　務	文化課庶務係長	平　聖峰（兼任）	加藤俊一
	文化課事務主査		竹内洋征
	文化課主任主事	川村喜一郎	
調　査	文化課調査班総括	柳田康雄（兼任）	柳田康雄（兼任）
	同　技術主査	井上裕弘	井上裕弘　木下　修
	同　主任技師	高橋　章　　中間研志	中間研志　佐々木隆彦
	同　主任技師	佐々木隆彦　小池史哲	
	同　主任技師	伊崎俊秋	伊崎俊秋
	同　技師	小田和利	小田和利
	同　文化財専門員	木村幾多郎	木村幾多郎
	同　臨時職員	日高正幸	日高正幸
	調査補助員	高田一弘　武田光正　佐土原逸男　平嶋文博	
		向田雅彦　田中康信	

なお、整理・報告書作成に関わる平成９年度の調査体制は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

総　括	教　育　長	光安　常喜
	教育次長	松枝　　功
	指導第二部長	竹若　幸二
	文化課長	石松　好雄
	文化課参事	柳田　康雄
	文化課長補佐	城戸　秀明
	文化課長技術補佐	井上　裕弘
	文化課調査班総括	橋口　達也
	文化課参事補佐	木下　　修
	同	新原　正典
庶　務	文化課管理係長	黒田　一治
	文化課管理係事務主査	久保　正志
	同	鶴我　哲夫
	文化課管理係主任主事	田中　利幸
整　理	文化課課長技術補佐	井上　裕弘（上野原遺跡担当）
	文化課参事補佐	中間　研志（楠田遺跡担当）

九州歴史資料館参事補佐	佐々木　隆彦（二十谷・陣内遺跡担当）
甘木歴史資料館副館長	伊崎　俊秋（小覚原遺跡担当）
整理指導員	岩瀬　正信（遺物整理担当）
同	平田　春美（遺物実測担当）
同	豊福　弥生（製図担当）
同	北岡　伸一（写真担当）

Ⅱ　位置と環境

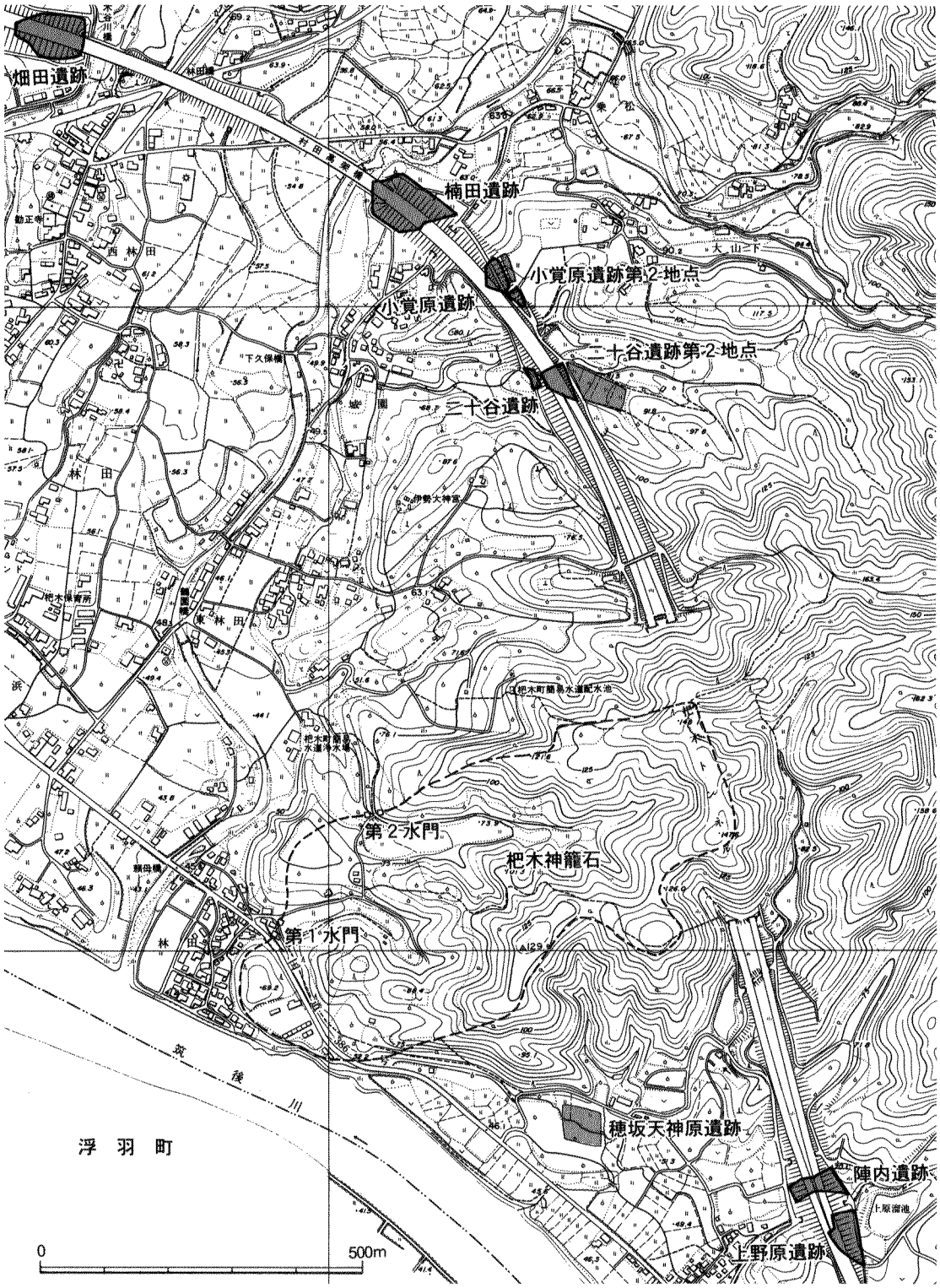
本書所収遺跡群の位置は、福岡県朝倉郡杷木町東端の山塊裾部で、筑後川が潤す筑後平野の最奥部にあたる。大分県日田市との県境まで数kmの近さで、筑後川と小石原村から南流してくる赤谷川との合流点の東側丘陵部にあたる。

その丘陵上、つまり筑後川へ突出する絶好の地には、全周2.5kmの偉容を誇る国指定史跡杷木神籠石（昭和47年指定）が存在する。この神籠石を挟んで北西側に楠田・小覚原・二十谷の各遺跡が、更に反対側の南東裾に陣内・上野原遺跡が位置する。つまり、高速道路は杷木神籠石の北東部をトンネルで抜けている訳である。本書所収の遺跡群の調査で、直接的にこの杷木神籠石に関連する遺構を明確にする事はできなかったが、重要な地区である事は間違いない。

中・近世には、この神籠石内に南北朝時代の鵜木城跡があり、更に最高部には秋月氏の端城とされる長尾城跡がある。具体的な様相は明らかにされていないが、今回調査の各遺跡中に中～近世の遺構・遺物が散見されるため、今後の山城調査結果との比較で、両者の関係が解明される可能性もあるだろう。

次に、本書所収遺跡群発掘の結果、最も多く確認された縄文後～晩期の、周辺地区での様相を見てみよう。朝倉郡東端部の朝倉町～杷木町における縄文時代の遺跡としては、殆どがこの横断道路線内の調査のものである。その理由としては、従来のほ場整備や浮羽バイパス等に伴う発掘調査は、平野部や低位段丘上が大半であり、弥生～古墳時代の集落跡を中心とするものであり、それに比べて横断道は朝倉町東半から杷木町にかけて中～高位段丘の朝倉山塊裾部斜面に建設されたため、その丘陵斜面や谷部分等でまとまった縄文時代遺跡が多く発見されたという事由による。

縄文時代早～前期の遺跡としては、本書中の楠田遺跡で中～大類の楕円形押型文土器がまと

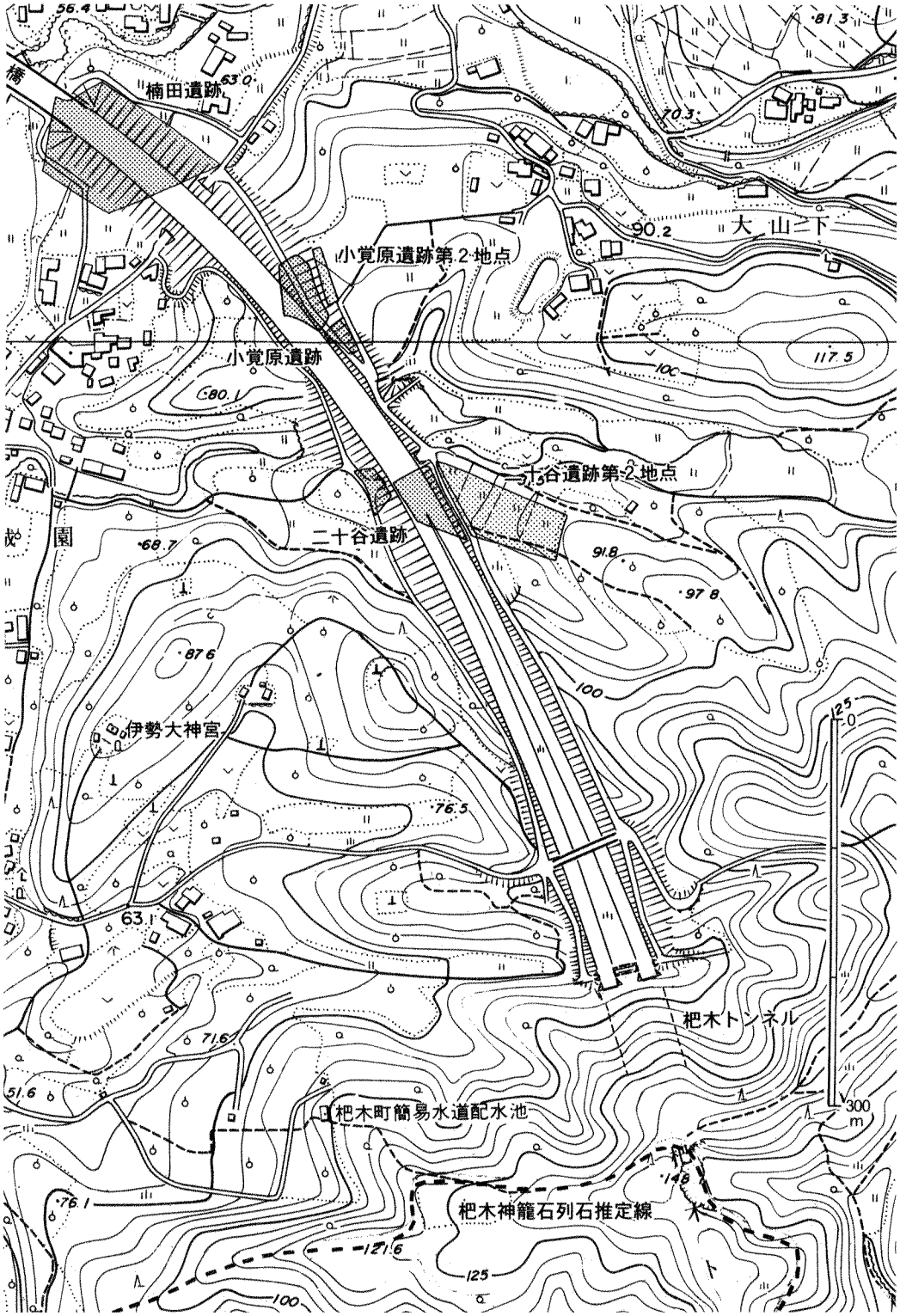


第2図　周辺主要遺跡分布図(1/10,000)

まって出土しているのをはじめ、西へ1.2kmの上池田遺跡（註１）でもわりとまとまって出土している。更に西側の杷木インターチェンジ西側の夕月遺跡（註１）でも押型文土器が出土し、その西斜面の天園遺跡（註１）では押型文土器・轟Ｂ式・曽畑式土器が出土している。ここでは轟Ｂ式土器を主体とする竪穴住居跡が検出されており、これら前期土器の出土量の多さとともに極めて注目される。天園遺跡の谷向かいの笹隈遺跡（註２）では、押型文土器・塞ノ神式土器・前期条痕文土器等が少量ずつ出土している。更に西方の杷木町西端部の志波桑ノ本遺跡（註３）では、早期の厚手刺突列点文土器と轟Ｂ式土器が少量ずつ出土している。朝倉町の最東端部に位置する外之隈遺跡（註４）では、轟Ｂ式土器がまとまりをみせて出土した竪穴住居跡が発見されており、上記天園遺跡例とともに極めて注目される。更に西方の朝倉町東半部丘陵中の上ノ宿遺跡（註５）では、押型文土器・前期前半の刺突文系土器・轟Ｂ式土器等が出土している。その近くの稗畑遺跡（註５）でも、押型文土器・曽畑式土器等が出土している。更に西方の、横断道遺跡中で丘陵上遺跡として最東端に位置する、つまり平野部から丘陵上へはじめて横断道が登った位置にある長島遺跡（註６）では、押型文土器が出土している。以上述べた朝倉町東半～杷木町にかけての中～高位段丘及びその谷部の遺跡群では、高い比率で縄文早～前期の遺物が全体に散見できる。中には高位段丘斜面の遺跡で住居等の遺構が検出されたものもあり、特徴を示している。

縄文時代中期の周辺遺跡としては、本書中の楠田遺跡で阿高式土器が出土したのをはじめ、上池田遺跡でも阿高系土器、笹隈遺跡でも同時期のものが出土している。杷木町西端の志波桑ノ本遺跡では、船元式・阿高式系土器が出土して注目される。朝倉町に入り、上ノ宿遺跡では並木式・阿高式土器が出土しており、その近くの稗畑遺跡では、並木式・南福寺式土器が出土している。以上のように、縄文中期土器出土遺跡は早～前期土器出土遺跡よりも少くなっており、各遺跡毎の出土量も数片程度と少いことから、この時期にはこれらの中～高位段丘上は簡便なキャンプ地のみとして足跡を残したものと考えられる。また、これらの中期土器出土遺跡は、必ず縄文早～前期土器をも出土しており、逆に、縄文後～晩期だけが出土する遺跡では中期土器の出土は見られないという特徴を指摘できる。ということは、中期でのキャンプ地選地においては、縄文後～晩期の選地基準と異り、早～前期の選地傾向に近いものであったと推定できよう。

次に、縄文後期での周辺遺跡について見てみよう。本書所収の楠田遺跡で、太郎迫式・三万田式の好資料が出土しているのを始め、西方の上池田遺跡で北久根山式土器がまとまりをみせ、他に鐘崎式・西平式・三万田式土器が出土している。杷木インターチェンジ部分のクリナラ遺跡（註７）では、太郎迫式・三万田式土器が少量出土している。その西側の天園遺跡からは、後期中葉土器と西平式土器片が少量出土している。その隣の笹隈遺跡でも、太郎迫式・三万田式土器が出土している。朝倉町に入って、上ノ宿遺跡では太郎迫式土器がまとまりをもって出



第3図　楠田遺跡・小覚原遺跡・二十谷遺跡周辺地形図(1/5,000)

土しており、その近くの稗畑遺跡からは鐘崎式・西平式土器が少量ずつ出土している。更に西方の長島遺跡では、御手洗A式・鐘崎式・西平式・三万田式土器が少量ずつ出土している。以上の縄文後期土器出土遺跡を見てみると、土器そのものの出土量は中期に比べると確実に増えてはいるが、遺跡数としては格段に急増しているという状況ではない。また、後期の中では後半代のものが圧倒的に多く、当地域の中～高位段丘での占地に画期があるとすれば、縄文時代の中ではこの後期中頃に重要な変革があったと見ることができよう。ただ、確実な竪穴住居跡等の集落的要素は未だ見出せず、季節的にでも定住したようなしっかりした様相は想定できない。やはりそれは晩期になってからの事になるだろう。

縄文晩期の当地域の遺跡群を見てみよう。本書所収の各遺跡の主体がこの時期のものであり、弥生早期まで連続性が認められる。当遺跡群から赤谷川を挟んだ北西隣の畑田遺跡（註8）では、支石墓群とともに縄文晩期後半代～弥生早期の土器群が出土しており、集落的様相を確実視できる。その西方の上池田遺跡でも、晩期後葉の土器がまとまりをみせて出土しており、弥生早期まで連続する。更にその西方のクリナラ遺跡では、晩期中～後葉の遺物多量と竪穴住居群が発見されており、山間部でありながら集落的様相の検討に充分値する大遺跡となっている。その西側の天園遺跡では、晩期前葉の棺と思われる横置埋甕や初葉の土器類が幾らかまとまりをみせて出土しており、至近に生活跡が推定できる。その西隣の笹隈遺跡では、晩期前～後葉の土器や竪穴住居的遺構が検出されているが、中でも中葉と後葉のものがまとまりのある出土量をなす。目の前に位置する天園遺跡と、僅かに時期的ずれがみられ、一段低い位置に選地が変化したことも考えられる。更に西方の高位段丘上の大谷遺跡（註9）では、晩期末葉～弥生早期の竪穴住居群・土坑群が検出され、意外な眺望の開けた高位置での生活跡が確認されている。次に杷木町西端の志波岡本遺跡（註3）では、晩期後葉の土器が出土しており、その西隣の志波桑ノ本遺跡からは、晩期後葉の土器がまとまりをみせて出土している。朝倉町に入って東端の外之隈遺跡では、斜面裾部付近で晩期後葉の土器類が出土している。西方の長田遺跡（註10）では、晩期後葉を主として弥生前期まで続く遺構群が確認されている。ドングリピットの発見など重要な遺跡である。さらに西方の上ノ宿遺跡では、晩期初葉の土器が出土している。その近くの稗畑遺跡では、晩期中葉～後葉の土器がまとまりを持って出土している。更に西に行った長島遺跡では、晩期初葉の土器が出土している。以上のように、朝倉町東半～杷木町においては、殆どの横断道内遺跡で縄文晩期土器が出土しており、中には集落や生活跡を確信できる遺跡が少からず見受けられる。晩期の中でも、後葉の時期と、末葉～弥生早期の時期とが大遺跡を形成しており、当地域の中～高位段丘地帯での特徴のひとつを示している。ある意味では特殊な性格のこれらの遺跡占地が、より下方の低位段丘や沖積平野上に存在すると推定される晩期集落群と、如何なる関係を有するのかが、大きな課題であり、当地域における晩期社会の復原に欠かせない所である。今後の意識的調査が期待される。

註　1）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　42」1996
2）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　44」1997
3）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　45」1997
4）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　40」1996
5）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　20」1991
6）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　34」1995
7）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　43」1997
8）　福岡県教育委員会が昭和61年度に発掘調査を実施した。平成10年度に報告書刊行予定。伊崎俊秋氏より御教示を得た。
9）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　41」1996
10）　福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　30」1994

Ⅲ　楠田遺跡

Ⅲ　楠田遺跡

1　はじめに

(1)　遺跡の位置

楠田遺跡は、福岡県朝倉郡杷木町大字林田字楠田1151・1155・1156-1・1157・1159～1162番地に位置する。筑後川の支流赤谷川が形成する扇状地に突出する丘陵の最先端に位置する。赤谷川自体がこの丘陵裾に沿って迂回しており、平野部に突出した中位段丘であることがわかる。

遺跡の高さが標高60～62m前後であり、すぐ西側直下の赤谷川河原面が標高50～53m、更に西河岸の平地が54～57mほどであるので、遺跡は西側平地から３～８m高い位置にあることになる。また、本遺跡の東側は、更に高い丘陵がせまっており、その急斜面の上面に小覚原遺跡が位置する。この両遺跡の比高差は28m前後もあり、この両者の遺跡選地の性格は自ずから異るものと考えられる。

この遺跡の基盤は、旧筑後川が形成した河岸段丘で、下層には円礫化した河原石がガラガラしている。現況は水田・畑で、遺跡の南側には現在尾根裾に沿って小集落が営まれている。

(2)　調査の概要

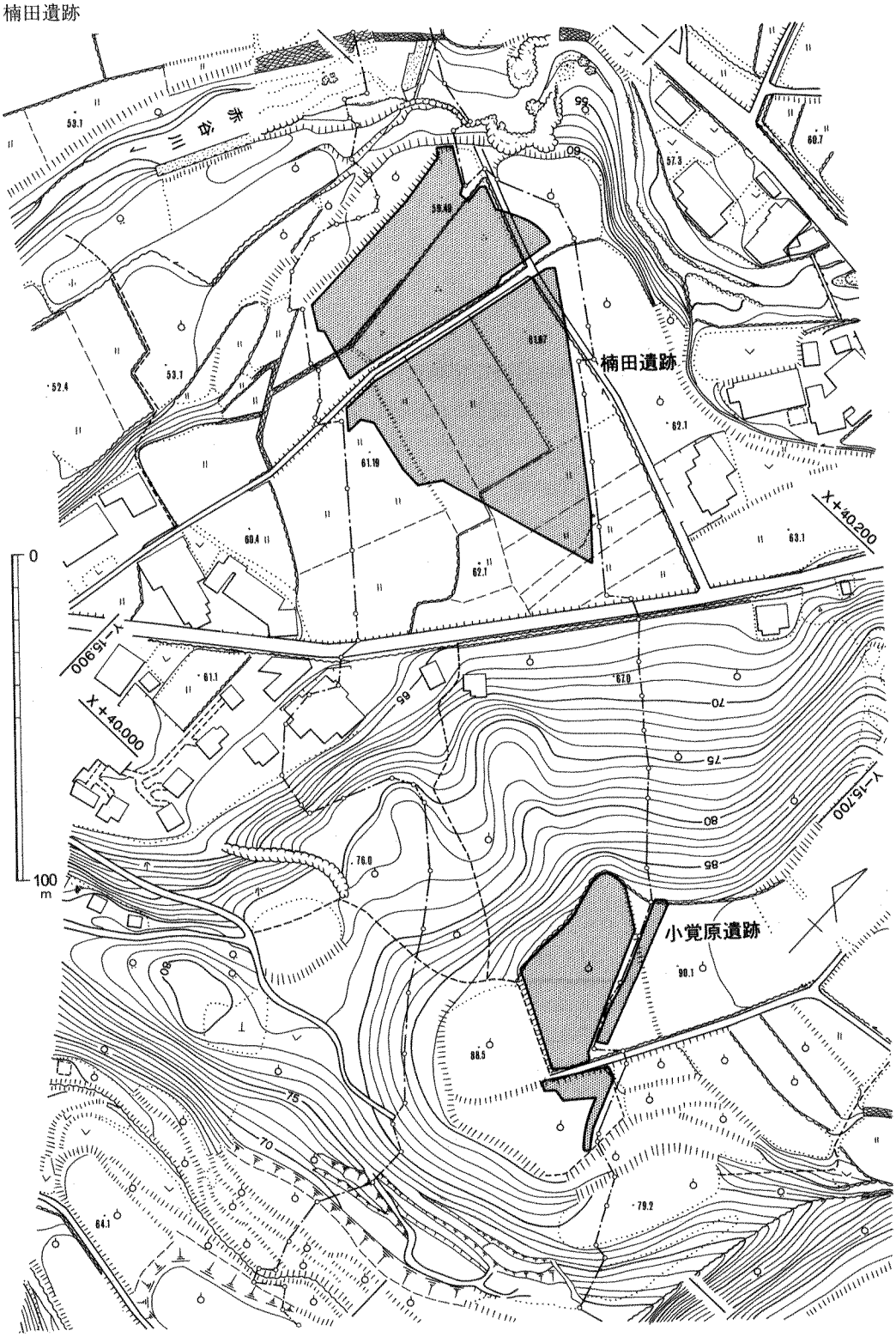
調査工程について簡単に触れておこう。現地発掘調査は、昭和61年12月１日～昭和62年３月28日の長きに及んだ。この間、年末年始の休みや、雨や雪の天候不順による作業の遅れもあった。また広い面積を上層・下層の二面に分けて調査し、更に縄文時代遺物・遺構の発掘のために慎重な調査を行った。最後には、押型文土器が集中する部分のみを更に掘り下げて、押型文の好資料を得ることができた。

発掘調査面積は、１層目が5,650㎡、２層目が3,660㎡、となり、総計9,310㎡に及ぶ。遺構は、中央部北半が特に密に所在し、東半側は上・下層面ともに疎らである。

検出した遺構は下記のとおりである。

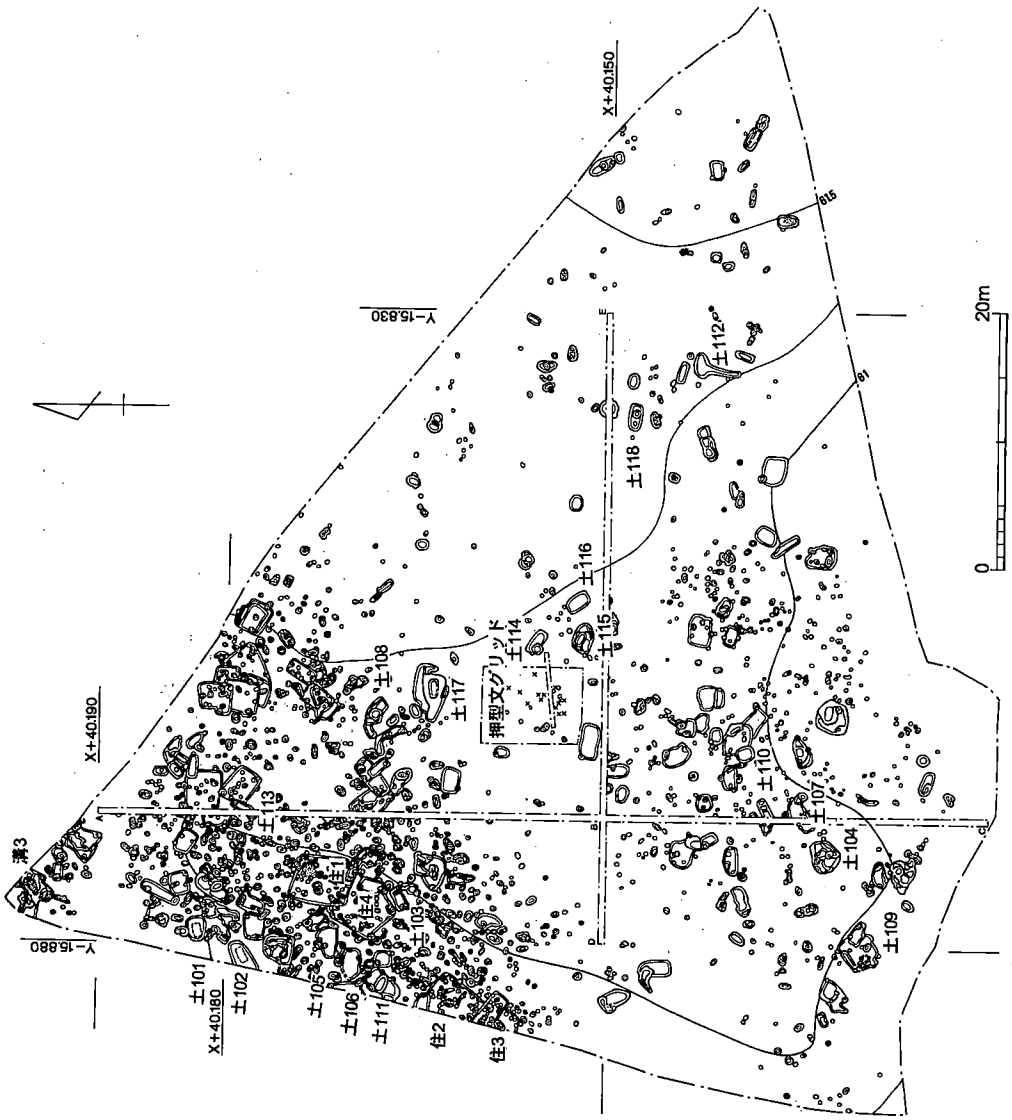
縄文後期	土壙　１基				
縄文晩期	竪穴住居跡　７軒	竪穴　１基	土壙　61基		
弥生時代中期	土壙　１基				
古墳時代	竪穴　１基				
近・現代	溝状遺構　３条				

楠田遺跡



第4図　楠田遺跡・小覚原遺跡周辺地形図(1/2,000)

第５図　楠田遺跡上層遺構全体図(1/600)

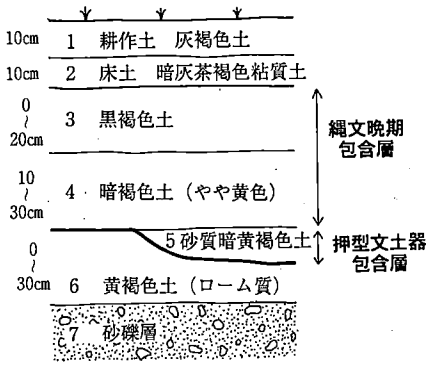


第6図　楠田遺跡下層遺構全体図(1/600)

(3)　基本層序（第７図参照）

この楠田遺跡は中位河岸段丘上に位置するが、遺構面は全体に西側（段丘先端側）へ傾斜している。更に、遺跡の東端側と、中央の農道の西側沿辺は遺構が少くなっており、畑造成等による削平がなされたのは明らかである。このように、表土下に暗褐色土が薄くあり、その直下の砂礫層となっている部分が、遺跡全体の半分以上に及ぶ。つまり、縄文晩期包含層である黒褐色土層や暗褐色土層が殆ど削られてしまっているのが現状と考えられる。

第７図に示した基本層序は、堆積状況の良好な、遺跡中央の２号住居西側付近の例である。



第7図 楠田遺跡基本層序

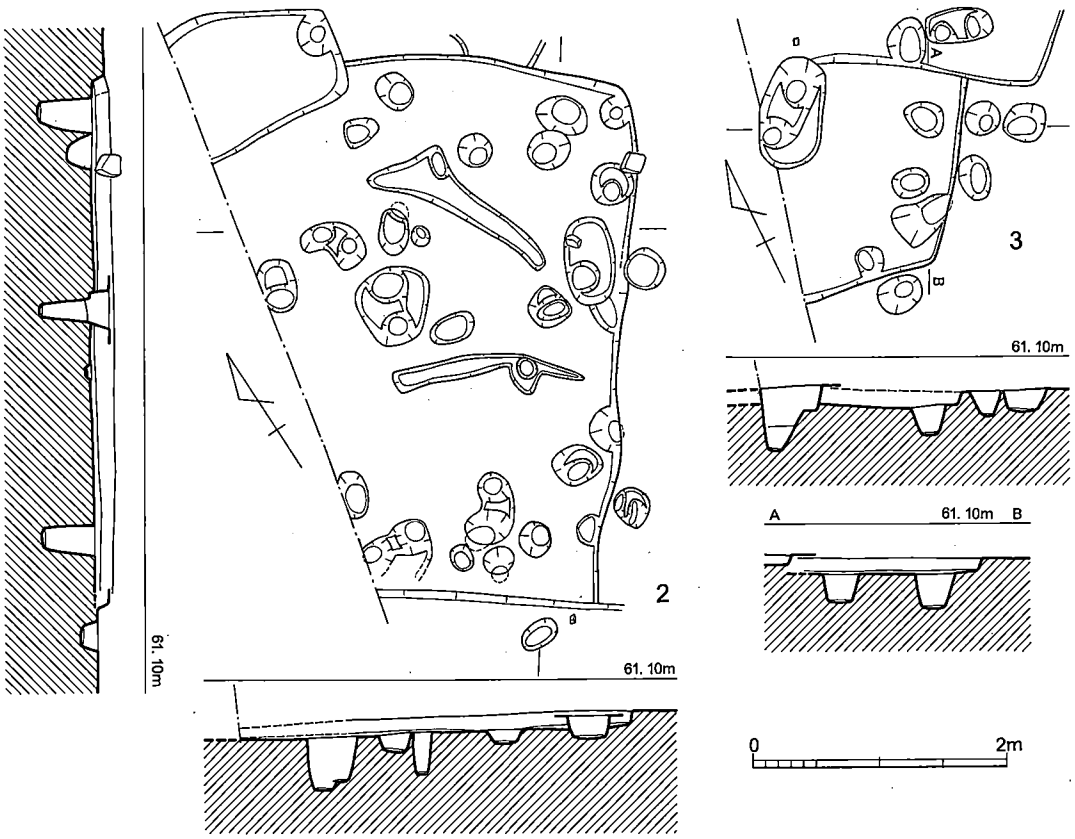
耕作土・床土の下に、晩期包含層の黒褐色土があり、この下の面が上層遺構面となっている。部分的には弥生～歴史時代の遺構も、この面以下まで掘り込まれているようで、幾らかは縄文以降の遺構もこの上層遺構に含まれよう。次の第4層のやや黄色がかった暗褐色土は縄文晩期を主とする包含層で、堆積が30cmほどと厚い部位もみられる。出土遺物のうち、「表採No○」としたものや「F-え-2包含層」とした類のものはすべてこの第4層出土品である。この層の下面が下層遺構面であるが、遺物の出土状況の観察から、縄文晩期遺構面は第4層の下面よりやや上がる可能性がある。その顕著な例は、下層面で検出した1～4号竪穴住居跡で、検出した時点では遺構全体が浅く、床面すれすれの状態で、出土遺物も僅かであったが、それ以前の第4層掘り下げの段階では第5図の上層遺構図に示した如く、多量の刻目凸帯土器がその直上から出土している。この事から、少くとも1～4号竪穴住居跡は第4層中途から掘り込まれていたものと考えられる。次の第5層の砂質暗黄褐色土は第6層と見分けにくい部分もあるが、押型文土器等を含む遺構（流水路的砂質部分も含む）となっている。その下の第6層黄褐色土層は部分的に分布せず、直接砂礫層となる場合もみられる。第6層からは遺物の出土はみられなかった。

2 竪穴住居跡

ここでは、下層面で検出した4軒分を報告するが、後述する上層面で検出した竪穴の中にも竪穴住居跡と思われるものもあり、総数は7軒となる。

1号竪穴住居跡（図版5、第8図） 遺跡の中央北寄りに下層遺構として検出された長方形住居跡で、446×380cm、床面積約16.9㎡となる。南側で4号竪穴住居を切る。床面の北東寄りに10cm大の焼土塊が散乱し、焼土と炭化物がつまった浅い掘り込みがみられる。炉跡と考えてよさそうだが、焼土塊の存在が気にかかる。中央付近に小礫が集中するが、床面より10cm弱浮いており、その性格は不明。住居内には小ピットが多く検出されたが、明確な主柱穴配置を示す類ではない。壁沿いの小ピットもうまく並ばず、或いは四隅の小ピットが4主柱となる可能性も考えられる。床面出土土器のうち図示できるものは無いが、この直上から刻目凸帯土器片が多く出土していることから、当住居跡は縄文晩期末葉～弥生早期前半のものと考えられる。

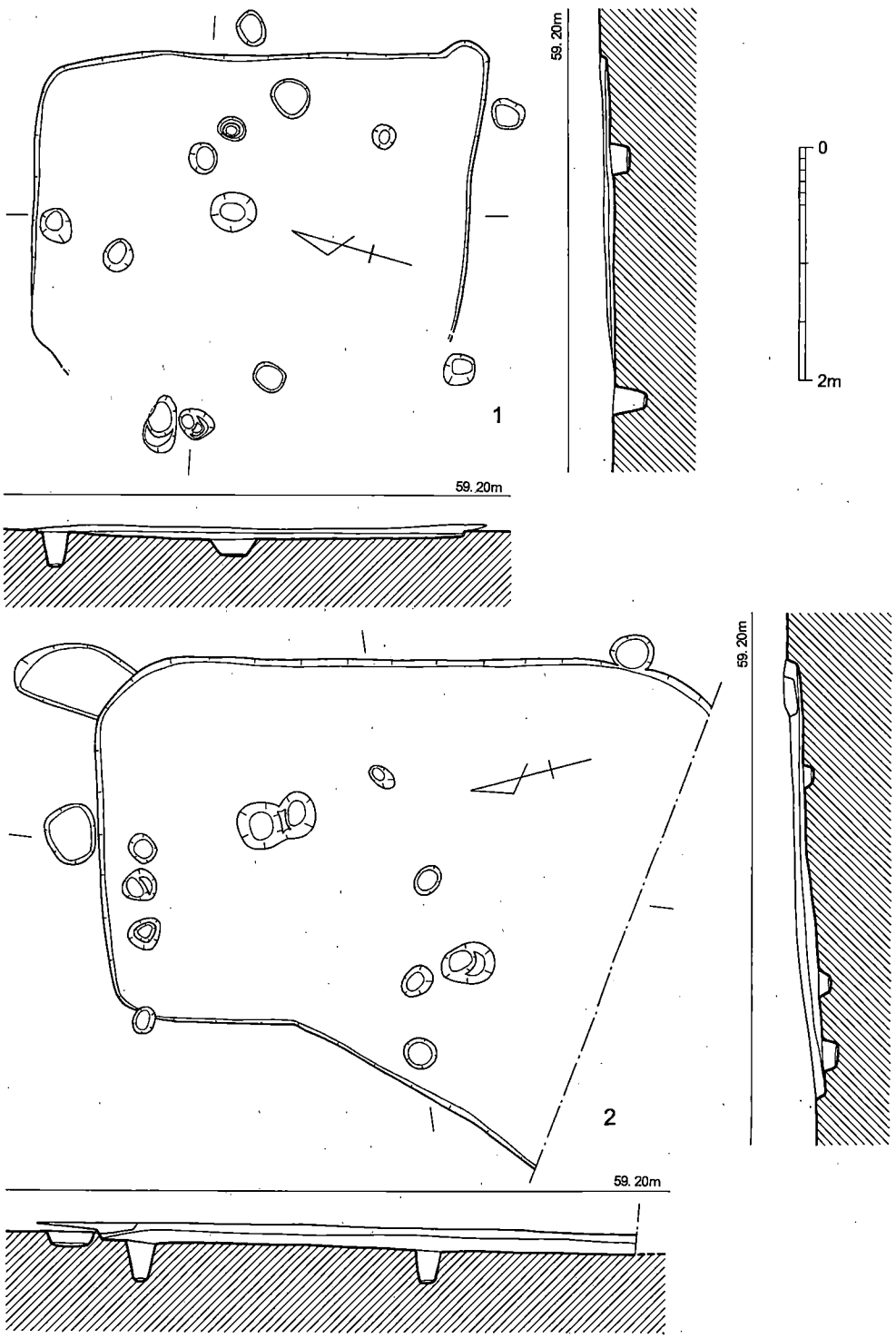
第8図　楠田1・4号竪穴住居跡実測図(1/60)



第９図　楠田２・３号竪穴住居跡実測図(1/60)

２号竪穴住居跡（図版６、第９図）　遺跡の中央に位置し、南側を浅い土壙に切られ、西半部は現農道下となり未調査のままである。東西辺350cm以上、南北辺400cm以上となり、床面積は14㎡以上と推定される。床面には多数の小ピットが検出されたが、主柱穴配置を示すような規則性は見出せない。出土遺物のうち図示できるものは無いが、直上から刻目凸帯土器等がかなり出土しており、当住居跡は縄文晩期末葉～弥生早期前葉の範囲に収まるであろう。

３号竪穴住居跡（図版５、第９図）　上記２号住居跡の南側に位置し、北側を浅い土壙に切られ、西側の大半は現農道下で未調査。つまり方形住居の南東隅のみを検出したものである。図上で復原すると北側の２号住居跡とも切り合う筈であるが、具体的には不明。また、規模・柱穴配置等も不明。時期的には２号住居跡と主軸方位等が近似しており、弥生早期前後のものと思われる。



第10図　楠田１・２号竪穴実測図(1/60)

4号竪穴住居跡（図版6、第8図）　遺跡の中央北寄りに位置し、北側を1号住居跡に切られる。380×420cmの略方形住居で、床面積約16㎡となる。床面に小ピットを多数検出したが、主柱穴配置を示すような規則性は見受けられない。炉跡も不明。図示できる遺物は無いが、この直上の包含層から多くの刻目凸帯土器が出土していることから、本来もっと上方から掘り込まれた住居であったと思われる。1号住居に切られ、主軸方位も異ることから、縄文晩期末葉の住居跡である可能性が高い。

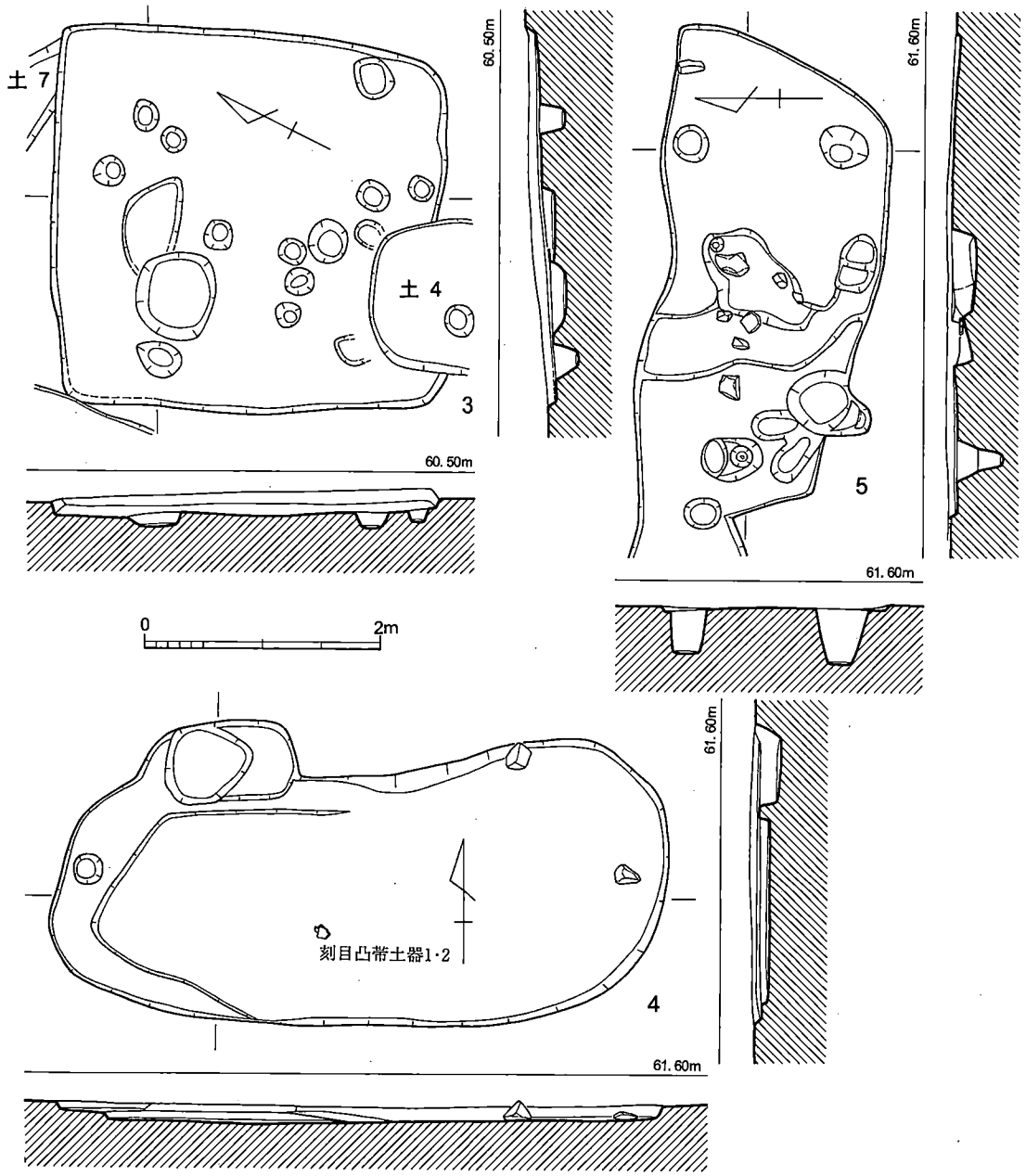
3　竪穴状遺構

上層遺構掘り下げ中に、大きな掘り込みのものを竪穴と称して遺物も取り上げた。上層遺構のため、弥生以降の遺構を想定して掘り下げて柱穴等検出に努めたが、弥生以降のもののようにしっかりした住居構造を検出できなかった。そのため、住居としての呼称を与えず、そのまま竪穴状遺構としていたため、ここではそれに従う。ただ、1・2・3号竪穴は、下層で検出した縄文晩期の竪穴住居跡と同類の竪穴住居と考えてよかろう。

1号竪穴状遺構（図版7、第10図）　遺跡の南西端に位置し、2号竪穴の5m北にあたる。南北辺380cmで方形竪穴住居跡となろう。西側は斜面下位にあたり、壁は残存していない。床面には10個の小ピットが検出されたが、主柱穴配置の規則性は見られない。図示できる遺物は無いが、規模や構造からみて、1～4号竪穴住居跡と同じく縄文晩期末葉～弥生早期のものと考えられる。

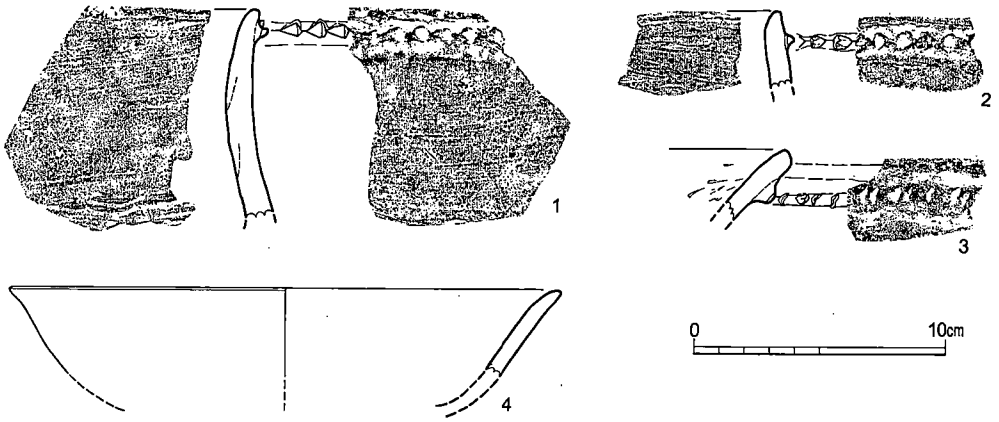
2号竪穴状遺構（図版7、第10図）　遺跡の西南隅に位置する。北半は一辺が314cmとなる方形竪穴住居跡のようであるが、南半は壁ラインが流れてひろがっている。竪穴住居跡2軒が重複している可能性もある。床面は南西隅側へ傾斜を持ち、床面上には10個の小ピットが検出されたが、主柱穴配置を示すものではない。図示できる出土遺物は無いが、構造や規模等からみて、縄文晩期末葉～弥生早期の竪穴住居跡と考えられる。

3号竪穴状遺構（図版8、第11図）　遺跡の南端西寄りに位置し、北東側で7号土壙を切り、南西側で4号土壙に切られる。330×322cmの小型方形竪穴住居跡となり、床面積は10.6㎡。床面は西側へ僅かに傾斜しており、炉等は検出できなかった。小ピットが15個みられるが、主柱穴配置を確認することはできない。他の縄文晩期末葉前後の竪穴住居と比べて小規模であるが、図示できる遺物は無いものの、略同時期の住居跡であろう。



第11図　楠田３～５号竪穴実測図(1/60)

４号竪穴状遺構（図版８、第11図）　遺跡の中央やや北東寄りに位置する。上層遺構としてはこの周辺は遺構が疎らな所だが、下層遺構は土壙等がかなりみられ、縄文遺構集中部の東端近くに含まれる。東西520cm、南北205～240cmの楕円形プランで、底面はわりと平坦で深さ14



第12図　楠田４・５号竪穴出土土器実測図（１～３：４号竪穴、４：５号竪穴）(1/3)

cmほどと浅い。

出土遺物（第12・56図）

刻目凸帯土器（第12図１～３）　１は肩の張る甕で、口縁外面下に高い凸帯を貼り付け、ヘラによる刻目を施す。内外面とも横位ナデで、内面下端には横位条痕が残る。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で外面は淡茶褐色、内面は上半が暗茶色、下半は灰褐～黒色をなす。２は口唇上端が小さな平坦面をなし、細身の凸帯には貝殻腹縁による刻目を施す。内面は横ヘラ磨き、外面は横位ナデ調整。胎土に粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面の凸帯以上は黒色、以下は暗褐色をなす。３は、強く外傾して開く異類。外面の凸帯には貝殻腹縁による刻目が施されている。内面は横位擦過の上を雑なナデ、外面は横位ナデ調整。胎土に粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は橙褐色、外面は灰白褐色をなす。作りは雑で、異類の浅鉢状、或は上下逆転して脚端部となるかとも思われる。

偏平打製石斧（第56図23）　濃灰緑色の緑色片岩製で、長さ13.6cm、幅5.8cm、厚さ1.8cm、重さ220ｇとなる。表面の右側から右側面、さらに裏面の大半は原材の河原石自然面のままである。全体に風化磨耗している。

以上の出土遺物からみて、当４号竪穴は縄文晩期末葉～弥生早期前葉の所産とされよう。なお、偏平打製石斧の出土については、当地方において刻目凸帯土器と確実に伴うという証左を得ていないので、取り敢えず縄文晩期後葉以前のものの混入品と考えておく。

５号竪穴状遺構（図版８、第11図）　遺跡中央の北端近くに位置する。東西に長い長方形的遺構で、床面中央には凹凸がみられる。420×200cmの規模だが、深さは最大10cm以下と極めて浅い。柱穴状のしっかりした小ピットが幾らかみられるが、全体の性格は不明。

出土遺物（第12図）

土師器（4）　口径22cmに復原できる高杯片で、胎土に細砂粒を幾らか含み、焼成良好で内外面ともに明橙褐色をなす。口縁や体部が丸味を持つことから、5C中頃～後半代を中心とするもので、当5号竪穴の時期を示す遺物であろう。

4　土　壙

本遺跡で検出した、円形・楕円形・長方形のしっかりした掘り込みのものや、不整楕円形・不整形・風倒木痕等の大きめの穴のうち遺物が出土したものについて、これらすべてに土壙の名を付して一連番号をとった。よって、これらの中には、性格上、墓壙・貯蔵壙・廃棄土壙・風倒木痕等々が混在している。各土壙の報告内で個別に検討してゆきたい。

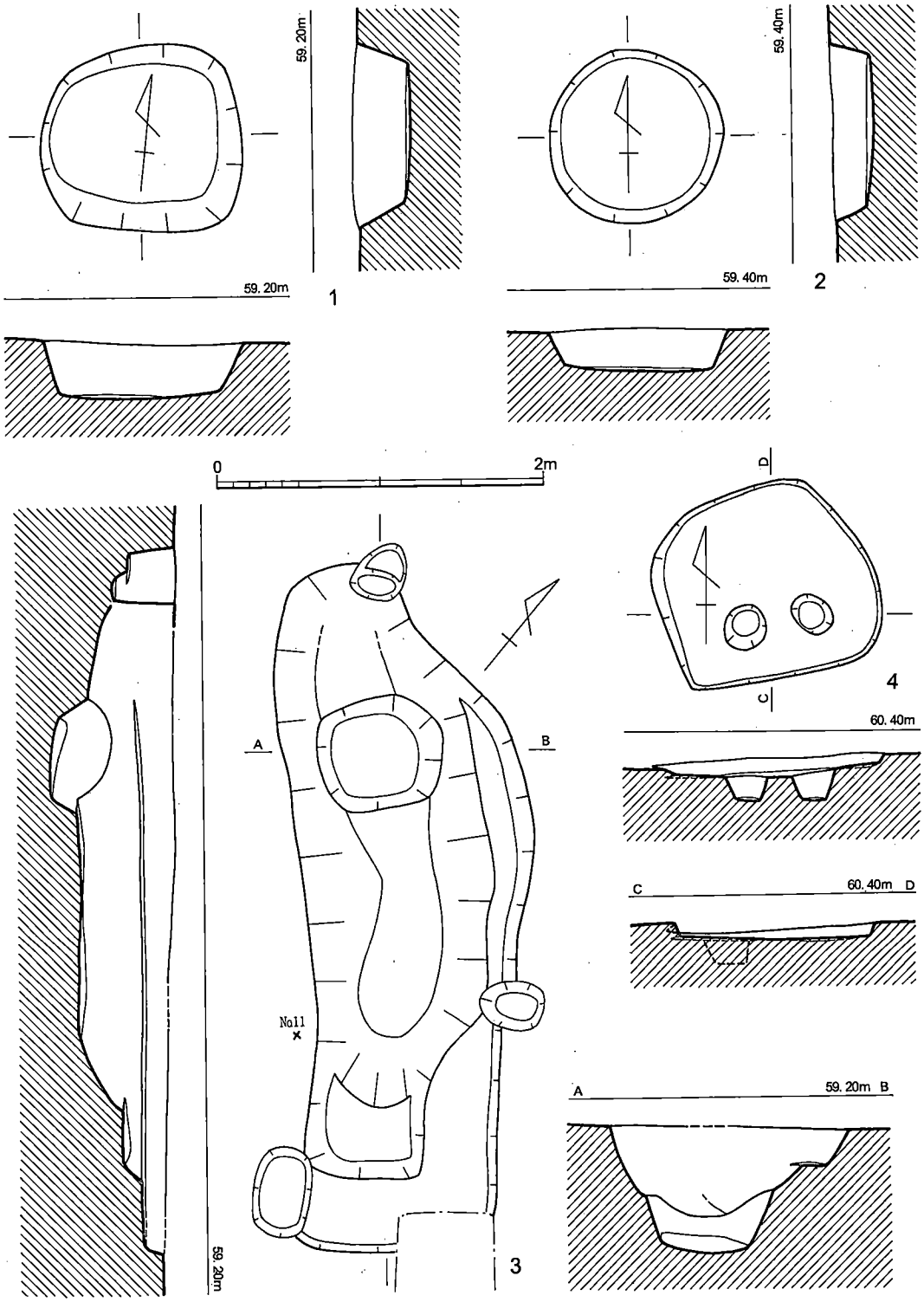
また、上層面で確認したものを1～45号土壙とし、下層面で検出したものを101～118 号土壙として区別した。実際には上層の土壙もかなりのものが縄文土壙である可能性がある。

1号土壙（図版2、第13図）　遺跡の西端部北寄りに位置する。小型で隅丸方形的プランの縄文晩期土壙である。124×114cmで深さ32cmとなる。縄文土器小片が出土したが図示できるものは無い。土壙の形状・規模からみて、甘木市柿原Ⅰ縄文遺跡や、朝倉町治部ノ上遺跡で検出されているものと同類と考えられ、方形的なものが晩期後葉新段階～末葉に限られることから、当1号土壙もその時期のものと推定できよう。

2号土壙（図版2、第13図）　遺跡の西北端近くに位置し、1号土壙の北8mの所にて検出された。直径105cmの円形プランをなし、深さ26cmとなる。埋土中から縄文土器小片が出土したが、実測に耐えるものは無い。朝倉町治部ノ上遺跡で同類の土壙が発見されており、方形類よりも古い晩期後葉中～新段階に位置付けられていることから、この2号土壙もその時期のものと推定できる。

3号土壙（図版2、第13図）　遺跡の西北端に近い位置で発見された不整長楕円形土壙である。1号土壙と2号土壙の丁度中間位置にあたる。南東端を最新の穴に切られ、北西端も小ピットに切られる。長さ418cm、最大幅148cm、底面は約60cmほどで平坦面をなすが、北西寄りに深さ75cmのピットがみられる。長大であるが、性格は不明。埋土中から縄文土器片が出土しているが時期は確定できない。

4号土壙（図版9、第13図）　遺跡の南端近くの農道のすぐ西側に位置する。3号竪穴状遺構を切る。144×140cmの隅丸方形的な平面形で、深さ10cm程度と浅い小土壙である。底面はや



第13図　楠田１～４号土壙実測図(1/40)

や平坦で、２個の小ピットがみられる。性格は確定できないが、１・２号土壙のような貯蔵施設と考えてもよかろう。出土土器のうち実測できるものは無く、時期は確定できない。

５号土壙（図版10、第14図）　遺跡の南端近くで、４号土壙の西４ｍの所に位置する。北西隅を６号土壙に切られる。218×130cmのわりと整った形の不整長方形プランをなし、深さは25cmほどと浅い。底面は平坦であるが、西側へ僅かに傾斜をみせる。底面には小ピットが１個検出された。出土遺物のうち実測できるものは無いが、全体に掘り込みがしっかりしており、墓と考えてもよさそうだ。時期は確定できない。

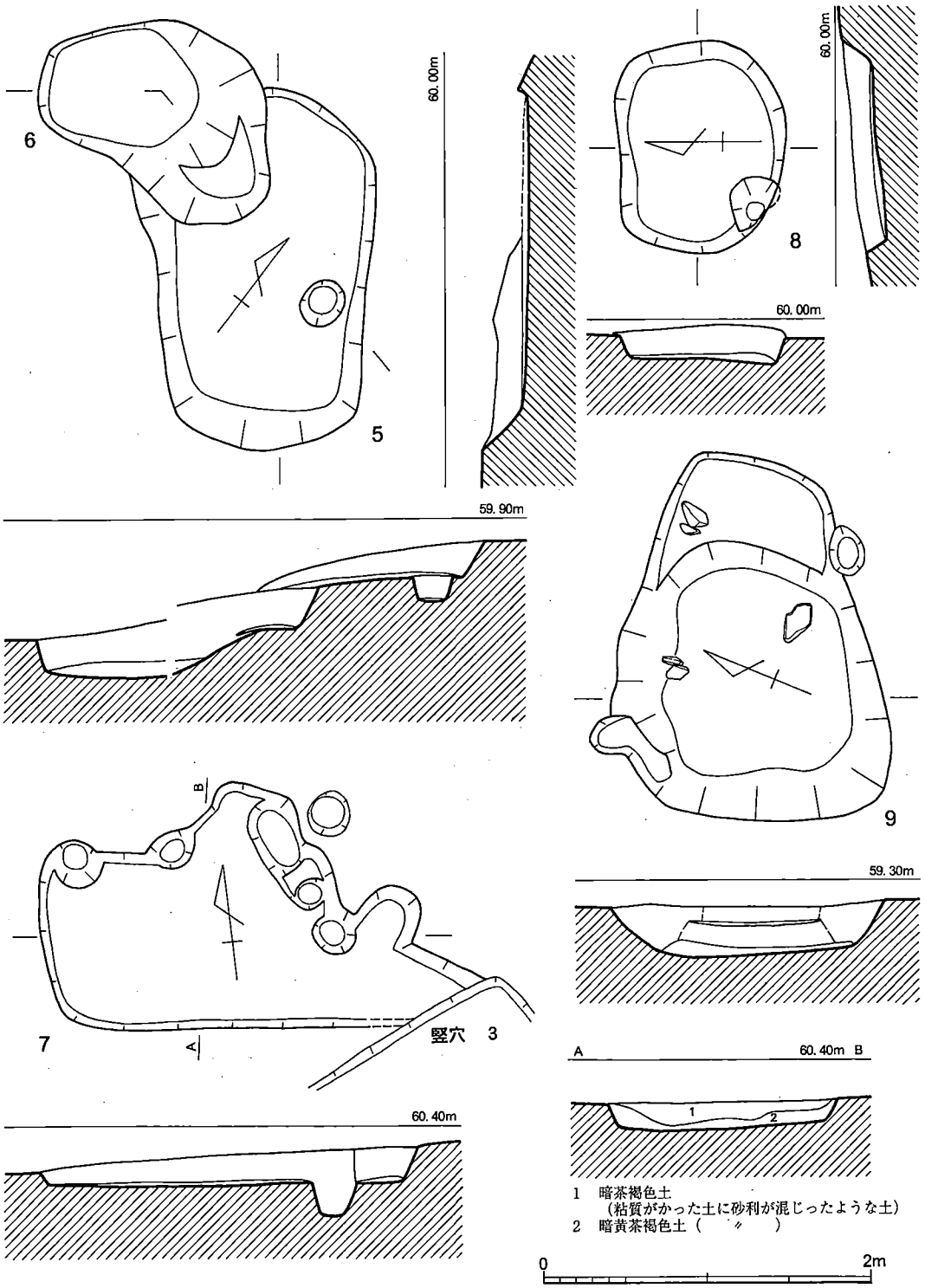
６号土壙（図版10、第14図）　上述の５号土壙を切って営まれている。長軸方向や規模・深さが５号土壙と全く異っており、性格も違った遺構なのであろう。長さ140cm、幅122cm、深さ54cmで、丁度開墾による段の斜面に位置しているところから、本来はもっと深かった可能性がある。底面は90×70cmと狭く、わりと平らである。時期は確定できない。

７号土壙（図版２、第14図）　遺跡の南側で、前述の４号土壙の３ｍ北に位置する。南東端を３号竪穴に切られている。長さ280cm以上、幅150cm、深さ22cmとなる不整形土壙である。埋土は縄文晩期包含層の暗茶褐色土であるが、土器が小片で時期は確定できない。底面は平坦で、北側壁沿いに５個の小ピットがみられる。西半部だけ見ると寸詰まり長方形土壙のようにも見えるが、性格は不明。

８号土壙（図版10、第14図）　上述の７号土壙の２ｍ南西側、５号土壙の１ｍ北東隣に位置する。130×104cmの略楕円形プランをなし、深さ17cmと浅い。底面は西側へ傾斜している。出土遺物は無く、時期不明。

９号土壙（図版２、第14図）　遺跡の南西隅近くにあり、６号土壙の2.5ｍ西側に位置する。長さ220cm、幅170cm、深さ33cmで、東側は中途に段がついている。底面はやや摺鉢状になり、若干の角礫がみられる。時期や性格については明らかにできない。

10号土壙（図版10、第15図）　遺跡の西寄り中央に位置する。長さ264cm、最大幅220cmの不整形土壙で、深さ62cmとなる。底面は摺鉢状をなし、東側が深くなっている。埋土はレンズ状の自然堆積状況を示しているが、中位に灰の層がみられ、火を焚いた可能性が考えられる。実測に耐え得る土器が無く、時期は確定できないが、土壙の形状からみて縄文晩期前後のものと推定される。



第14図 楠田5～9号土壙実測図(1/40)

11号土壙（図版９、第15図）　遺跡の西寄り中央に位置する。周辺は遺構の疎らな部位で、かなり削平を受けていると思われ、本遺構も本来もっと深かったと推定される。140×108cmの方形プランで、現存深さ17cmと浅い。埋土は、上層に晩期包含層の土である暗茶褐色土がかぶっており、出土遺物は無いが、縄文晩期の遺構と推測される。

12号土壙（図版９、第15図）　遺跡の西側中央に位置する。330×130cmの長楕円形プランで深さ30cm弱となる。底面は波打っており、小ピットが３個みられる。埋土はレンズ状に堆積しており、全体に小礫をかなり含む。中位と底面から土器片がいくらか出土した。

出土遺物（第17図）

弥生土器（１）　口径24.4cmで、口縁内外面横ナデ、胴部内面は丁寧なナデ、外面は縦ハケを施す。胎土に細砂幾らか含み、焼成良好で胴部内面は淡茶褐色、他内外面は煤が付着して暗褐色をなす。弥生中期末葉の特徴を良く残しており、当12号土壙の時期を示すものであろう。

13号土壙（図版２、第15図）　上述の12号土壙の北東隣に位置する。長軸を東北東から西南西にとる長方形土壙で、墓の可能性が強い。長さ228cm、幅72cm、深さ13cmとなる。底面は西側へ僅かに傾斜しているがほぼ平坦である。土壙墓だとすると頭位は東北東側となろう。出土遺物が無く、時期は不明。

14号土壙（図版11、第16図）　遺跡の西側中央にあり、13号土壙の1.5m北東隣に位置する。130×106cmの略円形で、深さ36cmとなる。南東側に段を作り、北東側に掘り直しがみられる。

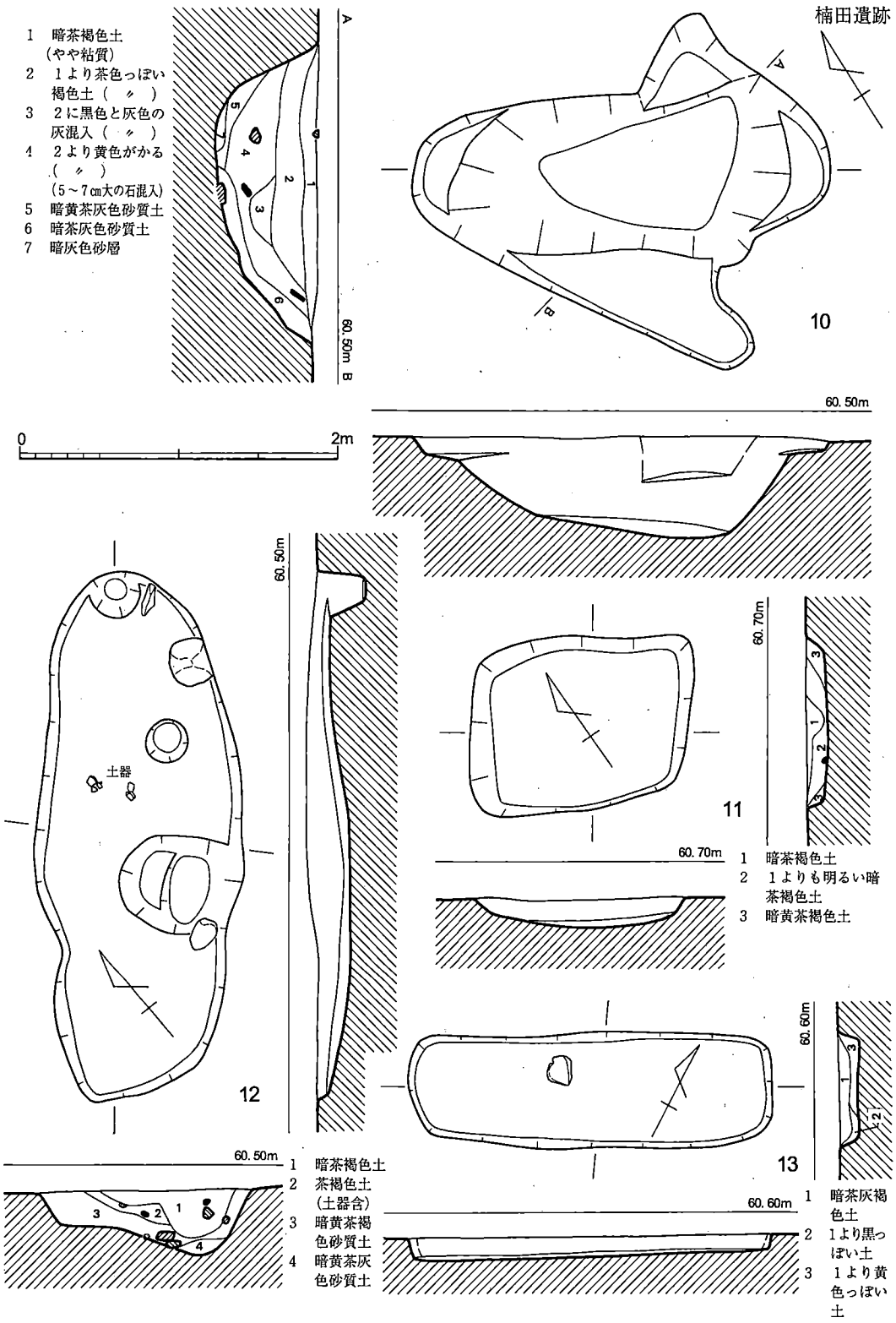
出土遺物（第54図）

偏平打製石斧（８）　暗灰緑色の緑色片岩製で、現存長12.1cm、幅4.7cm、厚さ1.7cm、重さ152ｇ。裏面は横剥ぎの素材剥離面を上半に幾らか残すが、両側からの大きな整形剥離が施されている。表面中央部平坦面は原材の自然面かもしれない。やや細身類。

この遺物だけで、当土壙の時期を確定するのは危険であるが、埋土からみても、縄文晩期前後のものとみてもよさそうである。

15号土壙（図版10、第16図）　遺跡の西寄り中央に位置し、13号土壙の北西側２mの所にあたる。134×103cmの不整楕円形プランで、深さ36cmとなる。底面の東側がくぼんでいるが、意味は不明。出土遺物も無く、時期は不明。

16号土壙（図版11、第16図）　遺跡の西寄り中央に位置し、上述の15号土壙の西側１mの隣に在る。133×96cmの楕円形プランで、深さ28cmとなる。底面は南側へかなり傾斜しており、



第15図　楠田10～13号土壙実測図(1/40)

南寄りに小ピットがみられる。出土遺物が無く、時期は不明。

17号土壙（図版11、第16図）　遺跡の西側で、前述の11～16号土壙の一群の北側に位置する。長さ182cm、幅110cm、深さ40cmとなる不整形土壙である。長軸上両端に段を持ち、底面は摺鉢状となる。埋土はレンズ状に黒褐色系の土が下半に堆積している。

出土遺物（第17図）

縄文土器（２）　復原口径26.6cmで丸味を持って開く粗製鉢形土器である。内面は横位ナデ、外面上半は雑な横位擦過、下半は全く未調整的で凹凸がかなりみられる。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は黒色、外面は煤がこびりついて黒褐色をなす。縄文晩期後葉～末葉の所産であろう。

18号土壙（図版12、第16図）　遺跡の西側北寄りに位置する。上述の17号土壙の西北西2.5ｍの所に在り、わりと大型の不整形土壙である。長さ240cm、幅123cm、深さ46cmとなる。全体に摺鉢状で、中央部が深くなる。出土遺物が無く時期・性格とも不明。

19号土壙（図版２、第18図）　遺跡の西側北寄りに位置する長円形土壙である。18号土壙の２ｍ南西側に位置し、長軸を東西にとる。長さ212cm、幅100cm、深さ43cmとなる。底面はほぼ平坦で、土壙墓的でもある。出土遺物が無く、時期・性格は明確でない。

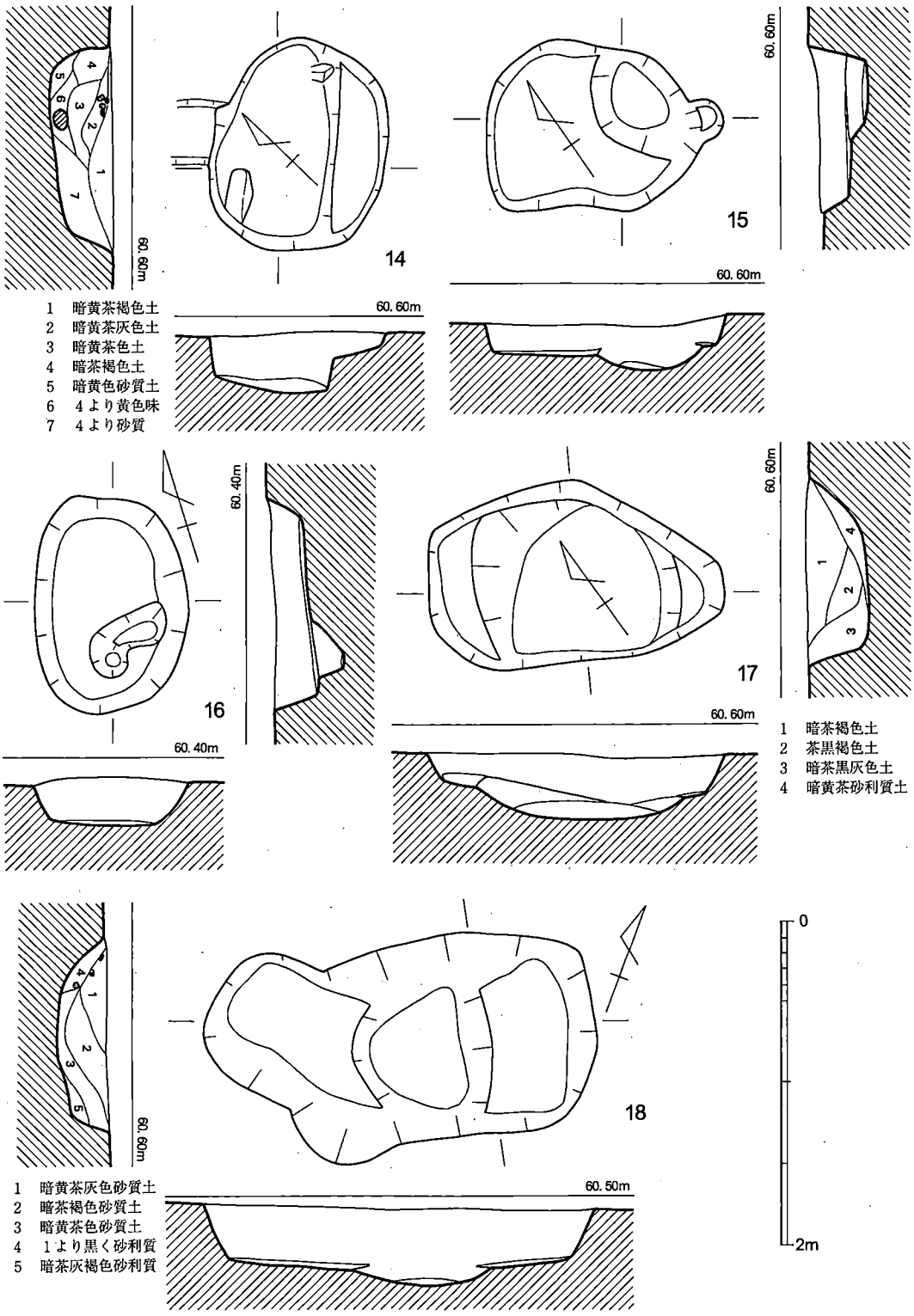
20号土壙（図版12、第18図）　遺跡の西側でやや北寄りにて検出された小型不整形土壙である。14号土壙の４ｍ北東に位置し、周辺は遺構が閑散とした部分である。120×88cmの東側が広くなるプランで、深さ20cm弱と浅い。埋土中層に炭片混入層があり、底面は摺鉢状をなす。時期・性格ともに不明。

21号土壙（図版12、第18図）　遺跡の中央南端近くに位置する大型土壙で、長さ408cm、幅154cm、深さ74cmとなる。最上層に攪乱土が入るが、全体の形状からみて、風倒木痕の黒褐色土系の土だけを掘ったものと考えられる。

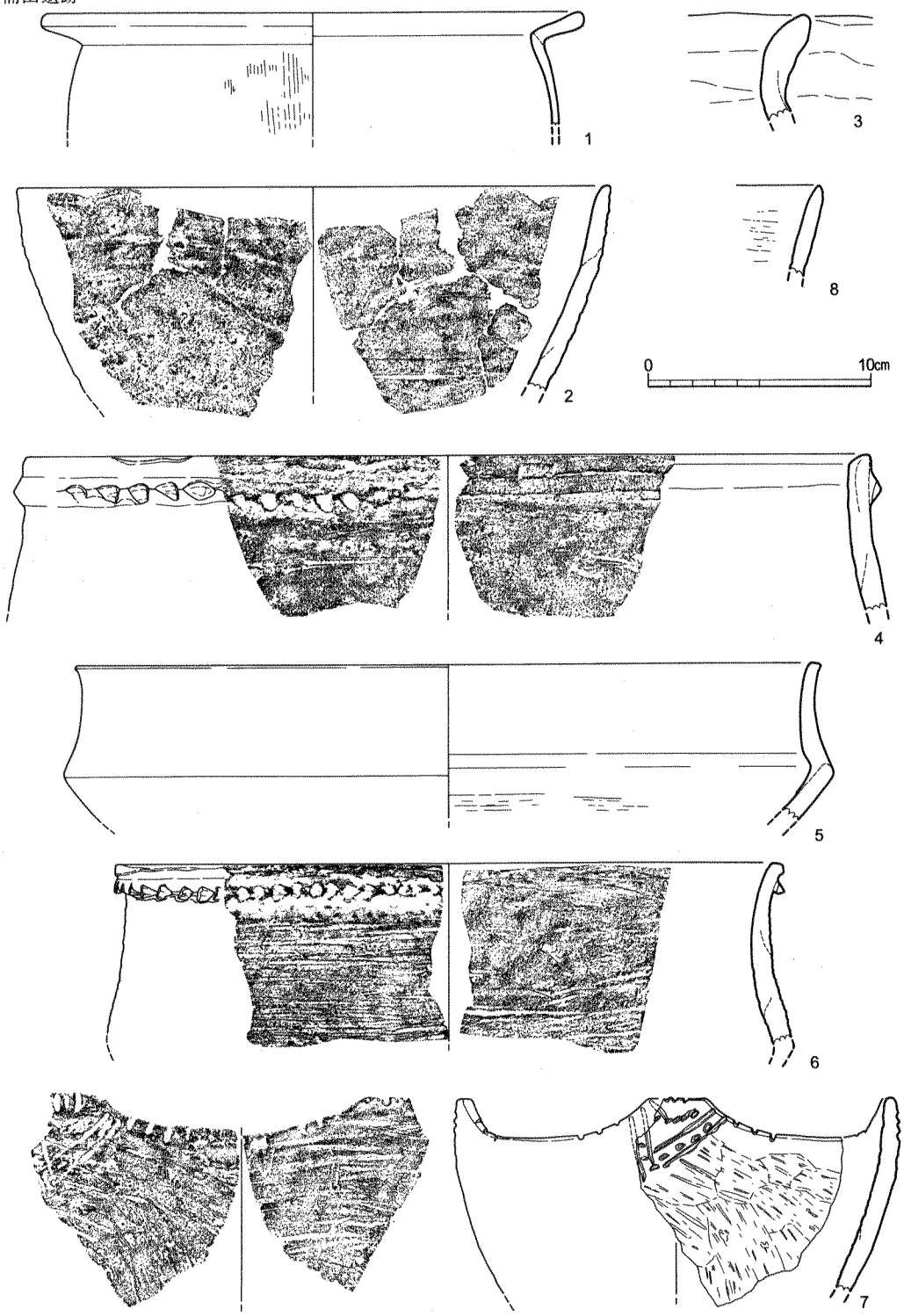
出土遺物（第17図）

縄文土器（３）　部厚い口頸部が丸く外反する類で、内外面ともに雑な横位ナデを施し、凹凸が多い。粗大砂粒幾らか、細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は明茶色、外面は黒灰色をなす。粗製の深鉢であるが、胎土や焼成から土師器甕の可能性も残る。

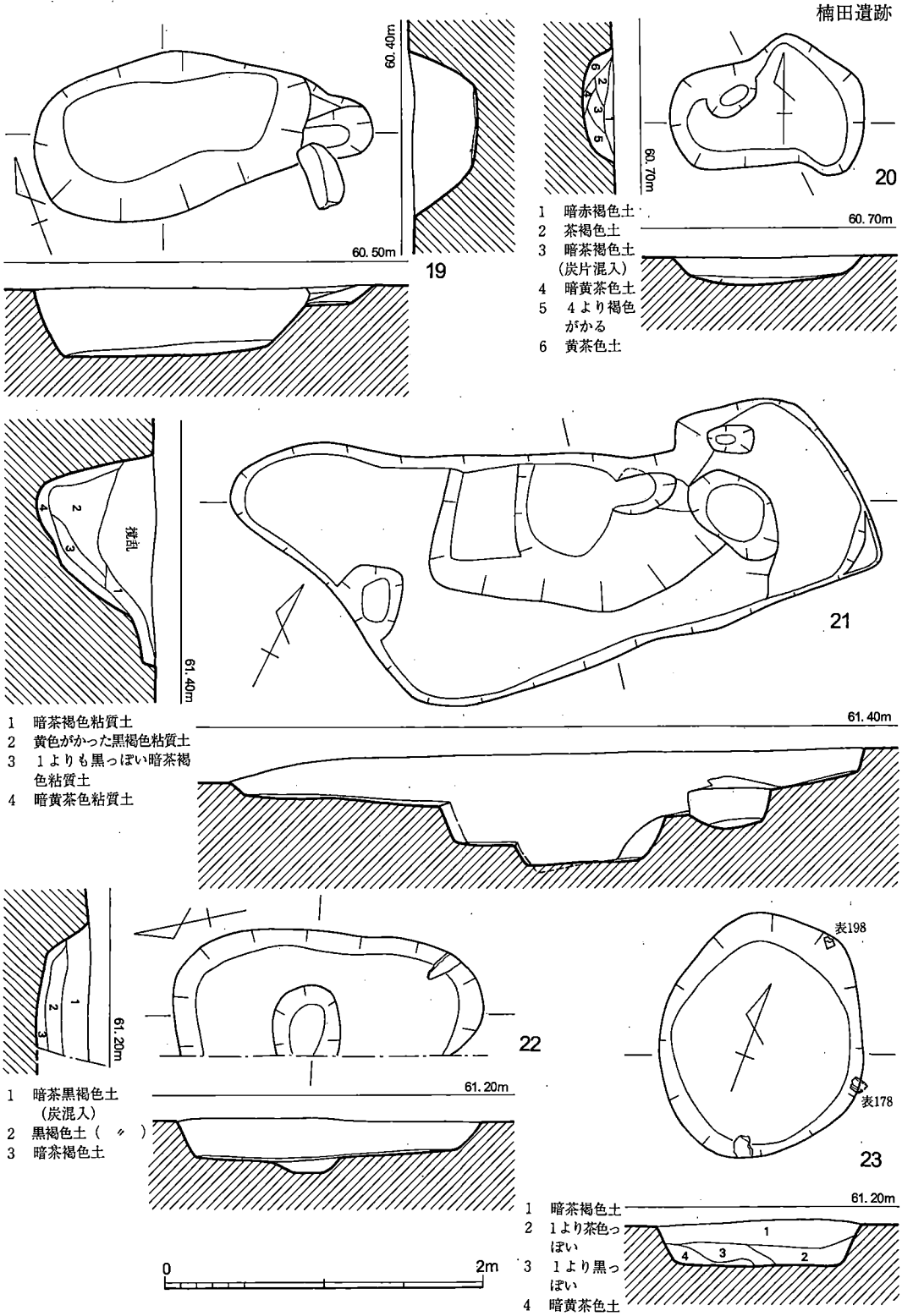
22号土壙（図版13、第18図）　遺跡の中央の現農道の東脇に位置する。西側半分は農道下と



第16図　楠田14～18号土壙実測図(1/40)



第17図　楠田12～45号土壙出土土器実測図(1/3)



第18図　楠田19～23号土壙実測図(1/40)

なり未調査。中央にくぼみのある楕円形土壙で、長さ195cm、幅80cm以上、深さ34cmとなる。上半に炭混入土がみられるが、出土遺物が無く、時期・性格等不明。

23号土壙（図版13、第18図）　遺跡の中央やや北寄りの最も遺構・遺物が密集する部位に位置する。154×130cmの楕円形土壙で、深さ28cmとなる。底面はほぼ平坦で、埋土上半には縄文晩期包含層の暗茶褐色土が堆積している。図示できる遺物が無く、時期は不明確。

24号土壙（図版13、第19図）　遺跡中央の北寄りに位置し、遺構・遺物の最も集中する部位である。長軸を南北にとる長方形土壙で、長さ160cm、幅64cm、深さ28cmとなる。底面は平坦で、形態からみて土壙墓と思われる。中央のピットは当土壙を切るものと考えられる。出土遺物が無く、時期は不明。

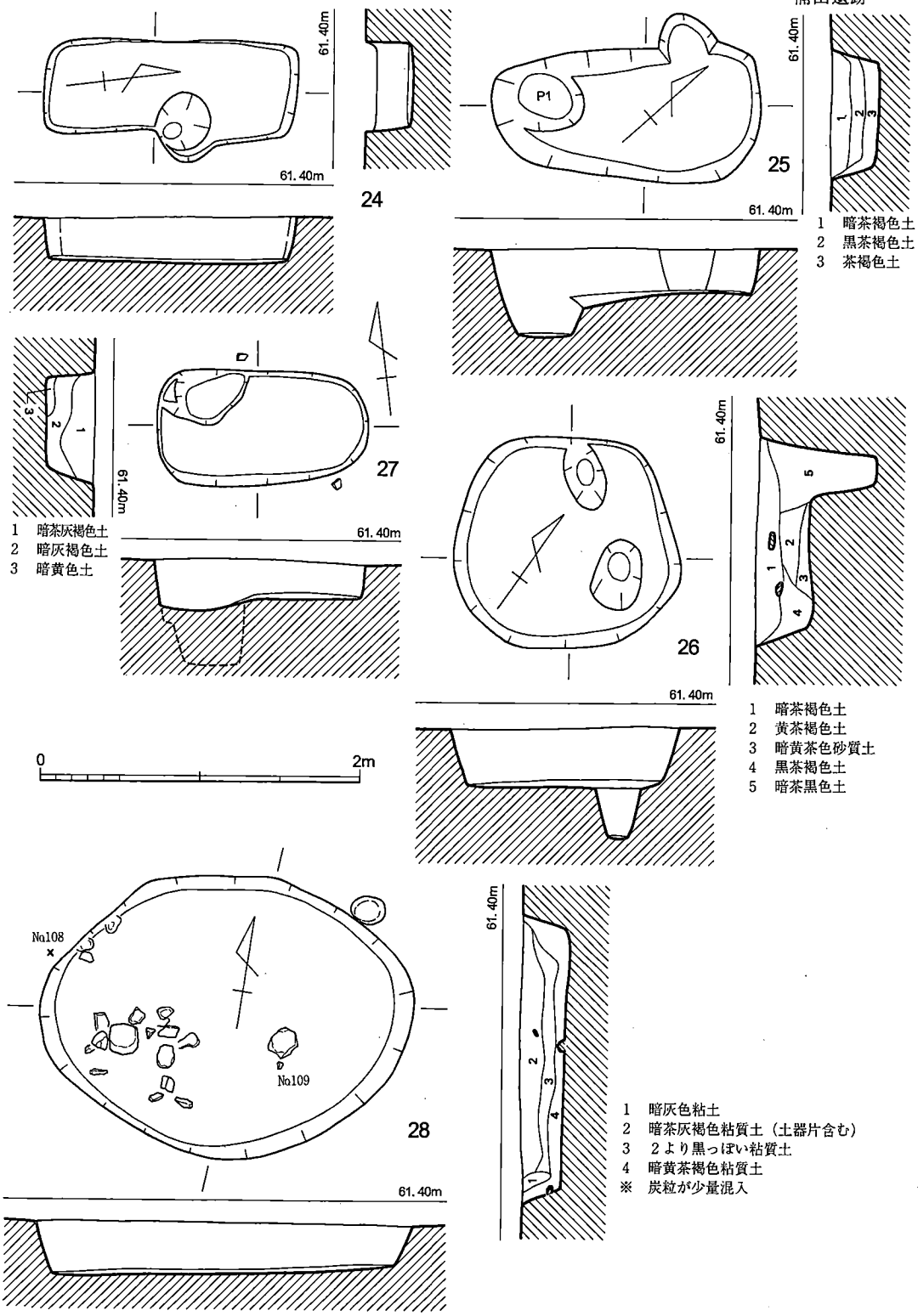
25号土壙（図版２、第19図）　遺物の中央北寄りで、上述の24号土壙の北隣に20cmしか離れずに接するようにして検出された。北側が広めの長楕円形土壙で、長さ169cm、幅83cm、深さ28～54cmとなる。南西端には更に深い穴がみられる。埋土上半には暗茶褐色土がかぶっている。出土遺物が無く時期不明確。壁はしっかりしており、土壙墓と考えてもよい。

26号土壙（図版２、第19図）　遺物の中央のかなり北寄りに位置する略円形土壙である。上述の25号土壙の４m北側にあたる。142×130cmのやや角があるプランで、深さ36cmとなる。底面は平坦で、２個の小ピットがみられる。埋土や出土土器からみて、縄文晩期末葉前後の遺構と考えられる。

出土遺物（第17図）

刻目凸帯土器（４）　復原口径38cmの大きな甕で、肩の張る器形となろう。外面口縁下の太い凸帯には貝殻腹縁で抉り取ったような大きい刻目が施されている。口縁上面から内面は雑なヘラナデ、外面の凸帯下２cm程は横位擦過、以下は横位ナデを施す。粗砂少量、細砂多く含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面は茶褐色をなす。厚手で、全体に古い様相を示しており、縄文晩期末葉のものと考えたい。

27号土壙（図版２、第19図）　遺跡の中央北端近くで、28号土壙の西側に隣接する。東西に長軸をとる小楕円形土壙で、長さ131cm、幅72cm、深さ32cmとなる。北西隅に深めのピットがみられるが、下層遺構のものであろう。形態からみて小児用土壙墓の可能性があるが、出土土器が無く、時期は不明。



第19図 楠田24～28号土壙実測図(1/40)

28号土壙（図版14、第19図）　遺跡の中央北端近くで、上述の27号土壙の東隣に位置する。東西にやや長めの楕円形土壙で、234×177cmで、深さ32cmとなる。上層に土器片を含み、全体に炭粒が少し混ざっている。小礫群もみられるが意図的なものではなさそうだ。炉跡にしては大きいし、時期・性格不明の遺構である。

29号土壙（図版15、第20図）　遺跡の中央やや東寄りに位置する風倒木痕である。直径284×298cmで、南西側に旧表土等の暗色系土層横転部がみられる。中層から土器が出土した。

出土遺物（第17図）

浅鉢（５）　復原口径33.5cmで、口唇外端が僅かに突出し、上面は平坦面をなす。内面下端部は横位擦過、他内外面は横位ヘラ磨き。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面の稜から上は黒色、以下は淡茶色をなす。

刻目凸帯土器（６）　復原口径30cmで、貝殻腹縁による深くやや雑な刻目を施している。内面下端と外面は横位条痕、内面上半は横位擦過の上を雑な横位ナデ。胎土に粗砂幾らか、細砂かなり含む。焼成やや不良で内面は黒色、外面は白褐色をなす。

以上の出土土器は２点ともに、弥生早期前葉を降るものではなく、当29号土壙の時期を示すものであろう。この時期に北東からの強風を受けて南西側へ倒れた大木が想定される。

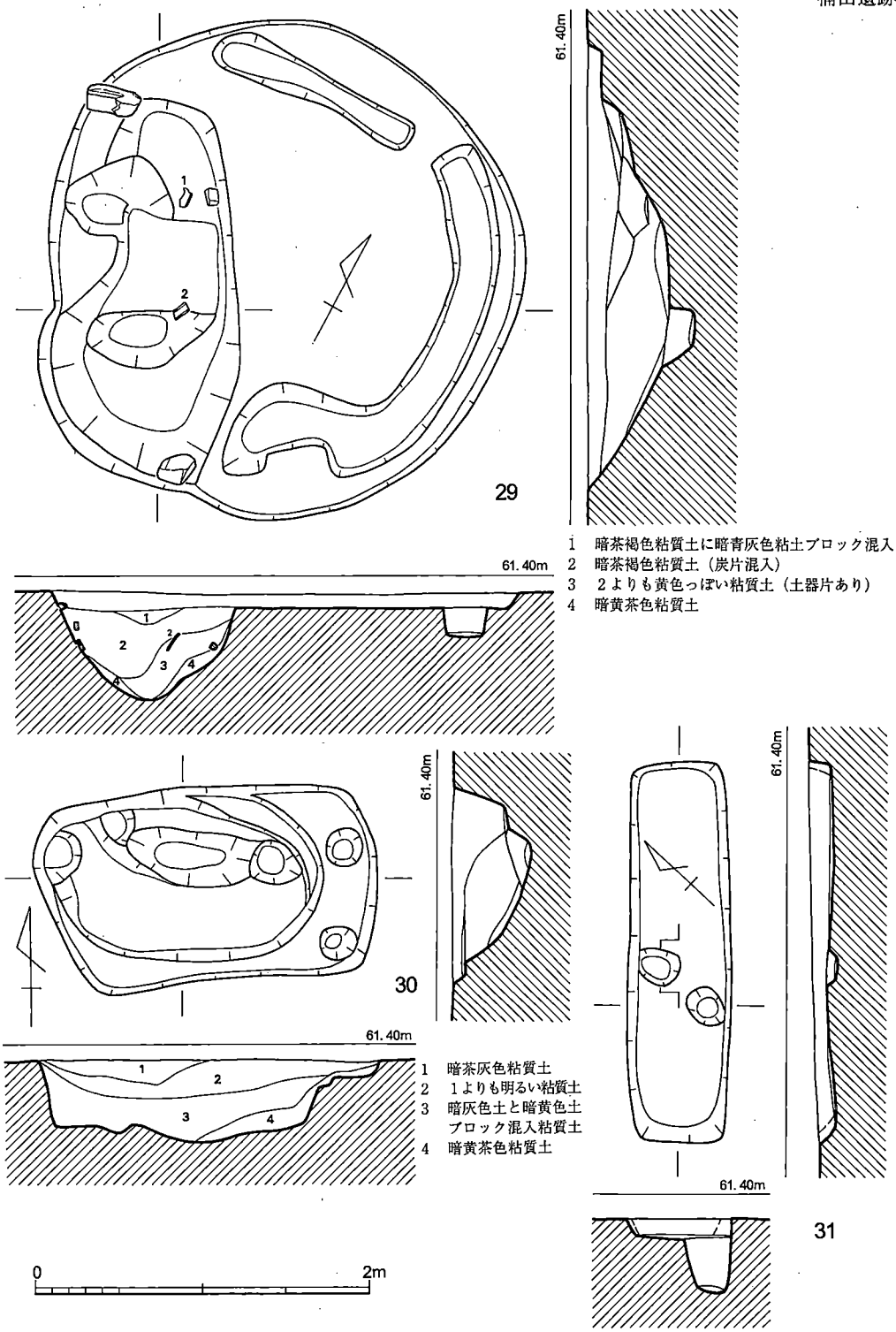
30号土壙（図版14、第20図）　遺跡の東半部の中央付近に位置する。長さ206cm、幅117 cm、深さ50cmの長方形土壙で、底面はかなり凹凸があり、小ピットもみられる。北辺沿いが深くなるなど、風倒木痕の可能性も考えられる。

出土遺物（第53図）

偏平打製石斧（３）　白い筋が入る暗灰緑色の緑色片岩製で、現存長6.6cm、厚さ1.3cm、重さ25ｇの小破片である。左側縁の刃部調整は交互剝離的で、裏面は平滑であり原材自然面と思われる。

31号土壙（図版14、第20図）　遺跡の東半中央やや南寄りに位置する。長軸を北東から南西にとる細長い長方形土壙である。長さ229cm、幅62cm、深さ13cmとなる。出土土器が無く、時期決定ができないが、土壙墓となろう。

32号土壙（図版８、第21図）　遺跡東半部の中央やや北寄りに位置する。４号竪穴状遺構の北西隣に接している。やや寸詰まりの隅丸長方形土壙で、長さ138cm、幅82cm、深さ10cmほどと浅い。出土遺物が無く、時期不明。形状からみて土壙墓の可能性も考えられる。



第20図　楠田29～31号土壙実測図(1/40)

33号土壙（図版２、第21図）　遺跡の中央やや北寄りに位置する小土壙である。上述の32号土壙の３ｍ西側にて検出された。長さ98cm、幅91cm、深さ14cmの不整台形状プランをなす。出土遺物が無く、時期・性格ともに不明

34号土壙（図版15、第21図）　遺跡の東半部のほぼ中央に位置する風倒木痕である。北東側を37号土壙に切られている。風倒木痕全体の大きさは約450×500cmほどで、深さ63cmとなる。図示できる遺物は出土していない。北西からの強風により南東側へ倒れた大木の様子が想像できよう。

35号土壙（図版２、第21図）　遺跡の東半部の北端に位置する。周辺は遺構の少い部位である。長軸を西北西から東南東にとる楕円形土壙である。長さ163cm、幅97cm、深さ25～45cmとなり、底面は東側へ傾斜をみせる。出土遺物が無く、時期・性格等不明。

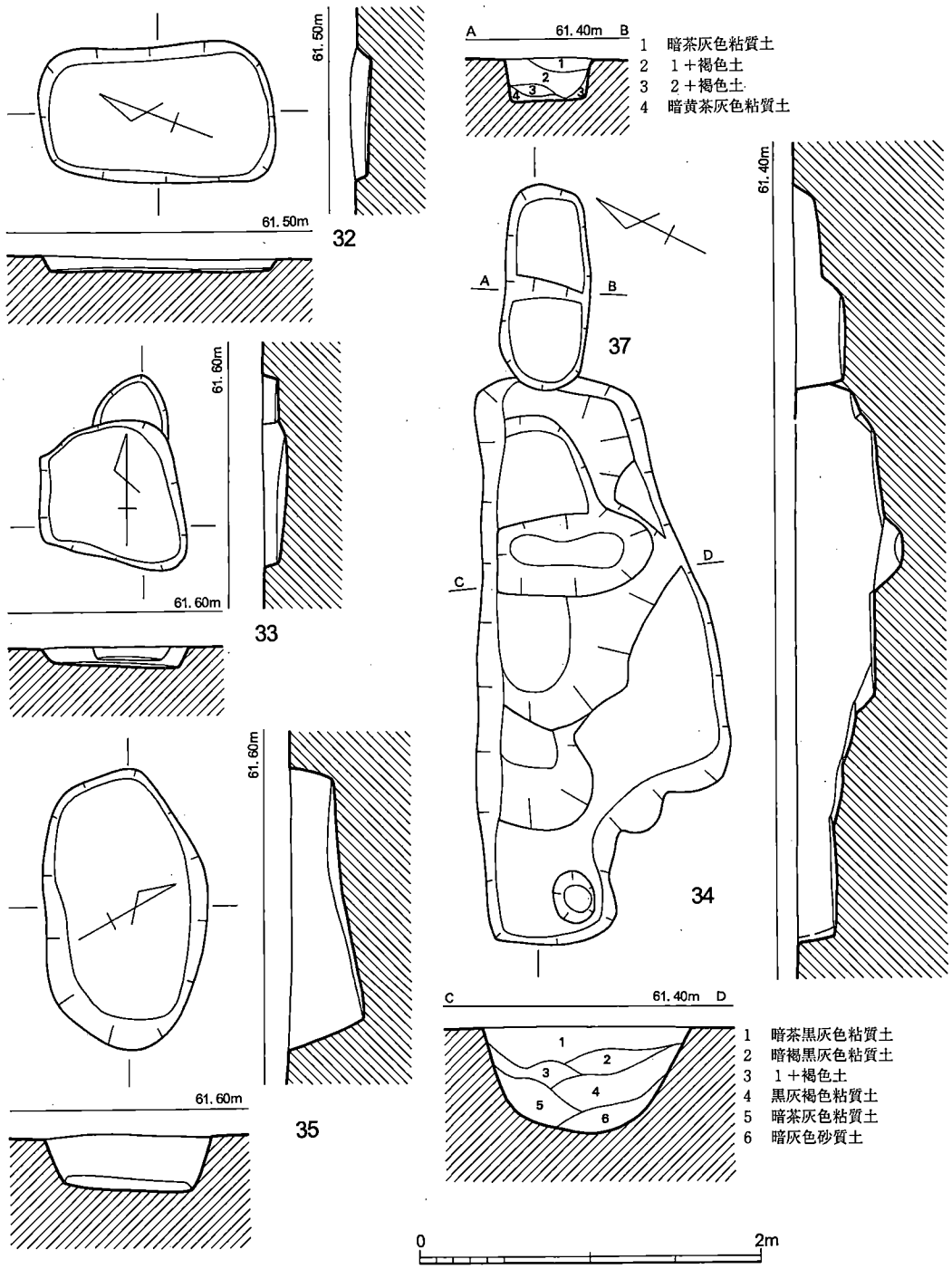
36号土壙（図版２、第22図）　遺跡の東半部中央のやや南寄りに位置する。長さ219cm、幅82cm、深さ54cmとなる隅丸長方形土壙である。埋土上層に暗茶褐色土がかぶり、縄文晩期の可能性はあるが、出土遺物が無く、時期不確定。底面は階段状に西側に深くなっていて、遺構の性格も明らかにできない。

37号土壙（図版２、第21図）　遺跡の東半部中央に位置し、東側で34号土壙（風倒木痕）を切る。長さ119cm、幅52cm、深さ30cmの小型隅丸長方形土壙である。西側半分が更に深くなっており、土壙墓の可能性もある。出土遺物が無く、時期は不明。

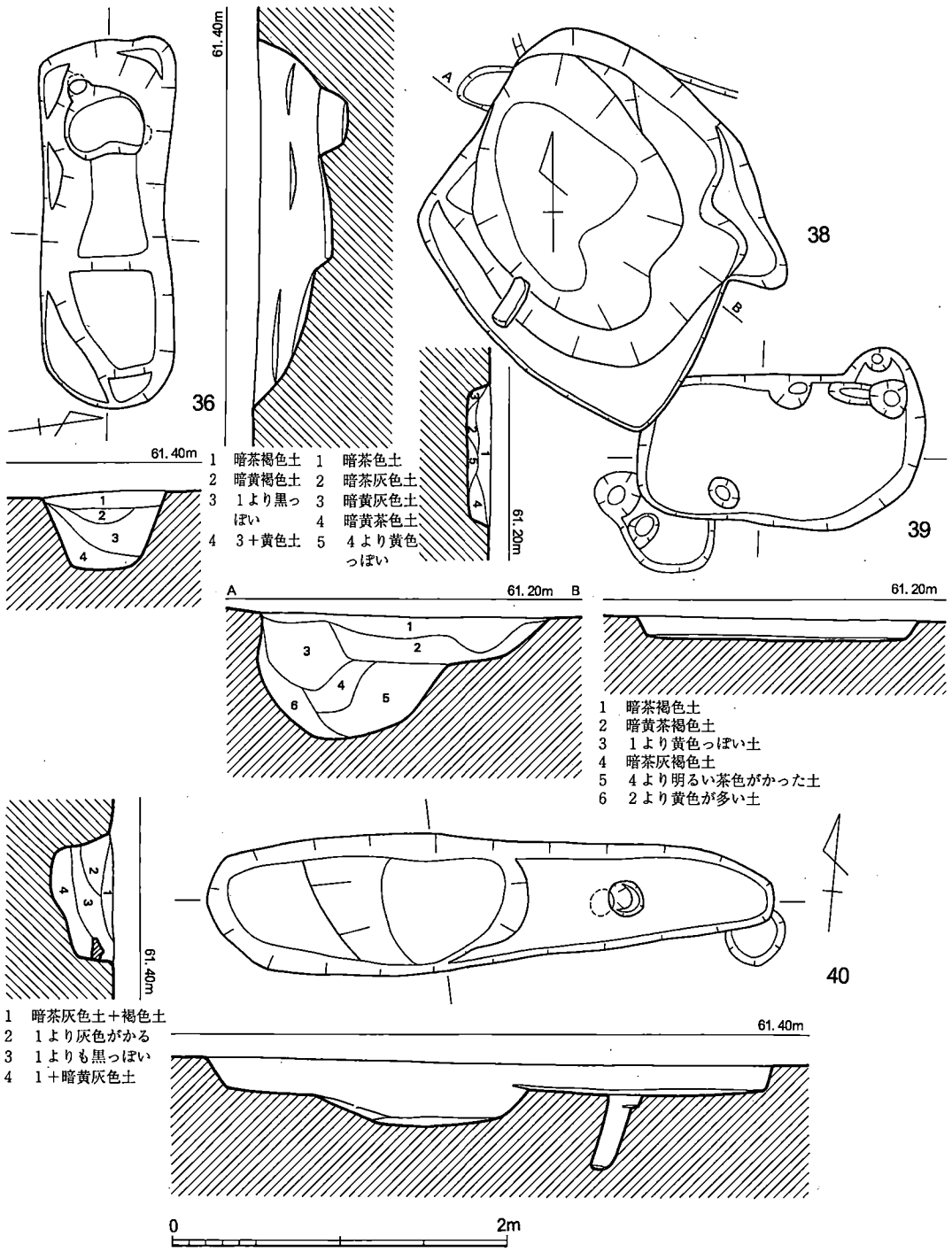
38号土壙（図版16、第22図）　遺跡の東半部中央の南寄りに、位置し、南側で39号土壙を切る。203×188cmの略方形プランをなすが、底面は摺鉢状に深くなっている。最深部で74cmとなる。土層観察では、掘り直しがあったことが考えられる。図示できる出土遺物が無く、時期は確定できない。

39号土壙（図版２、第22図）　上述の38号土壙に北西隅を切られる。ほぼ東西に長軸を持つ隅丸長方形土壙で、長さ170cm、幅92cm、深さ14cmと浅い。底面は平坦で、埋土上層に暗茶色土がかぶり、以下はブロック状に地山混土が堆積している事からみて、縄文晩期前後の土壙墓と考えられる。遺物が無く、詳細な時期は不明。

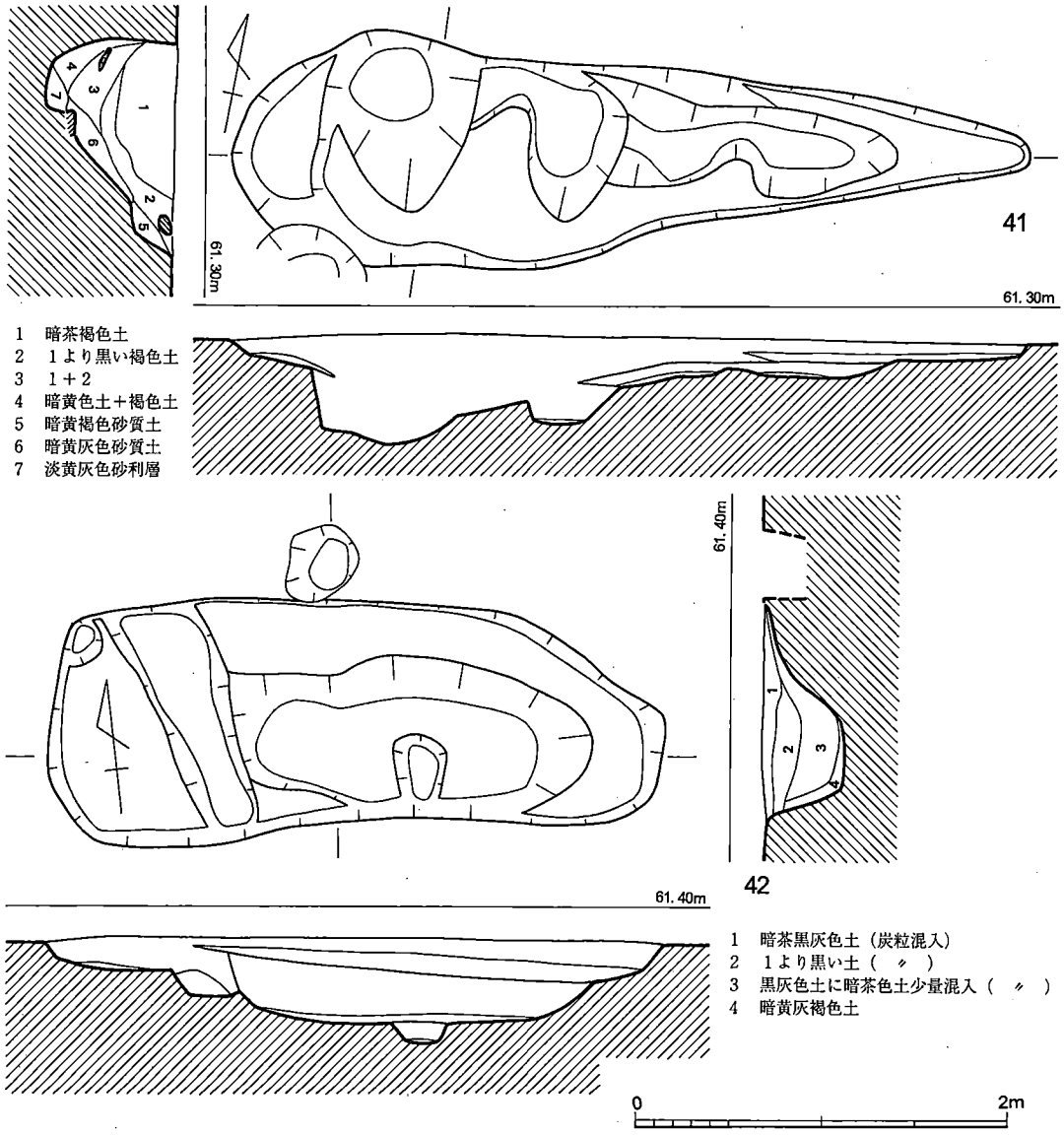
40号土壙（図版16、第22図）　遺跡東半部中央のやや南寄りに位置し、長軸を略東西にとる



第21図　楠田32～35・37号土壙実測図(1/40)



第22図　楠田36・38～40号土壙実測図(1/40)



第23図　楠田41・42号土壙実測図(1/40)

細長い土壙である。長さ338cm、幅86cm、深さ14～40cmとなる。底面はやや平坦であるが、中央部が更に一段下がっている。出土遺物が無く、時期や性格は不明。

41号土壙（図版16、第23図）　遺跡の東半部南端近くに位置する。略東西に長い土壙で、南西端で大きめのピットに切られる。長さ429cm、幅126cm、最も深い所で60cmとなる。底面は凹

凸が多く西端へ傾斜している。遺構の形態や土層の観察から、風倒木痕の暗色部だけを掘った可能性も高い。出土遺物は無い。

42号土壙（図版17、第23図）　遺跡中央の南端近くに在る。東西に長い不整形土壙で、長さ331cm、幅130cm、深さ44cmとなる。底面は階段状に中央南側へと下がって行っており、埋土中に炭粒が混入している。遺構の形状や土層の観察から、風倒木痕の暗色部だけを掘った可能性が高い。

出土遺物（第51図）

打製石鏃（２）　漆黒色良質の黒曜石製で、長さ19㎜、幅20㎜、厚さ３㎜、重さ0.8ｇ。裏面中央に素材剥離面を残し、左右非対称で全体につくりはやや粗雑である。

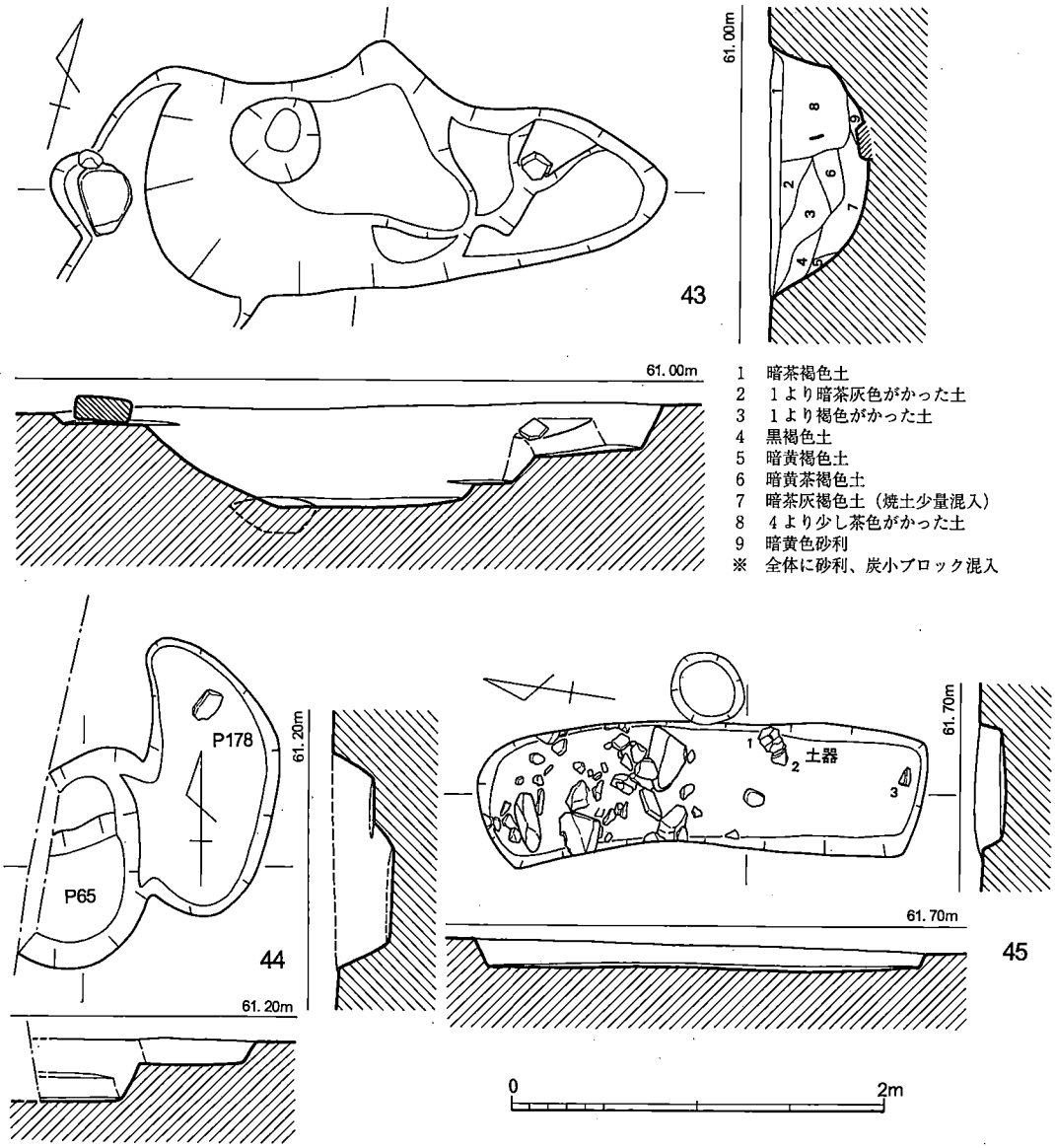
43号土壙（図版17、第24図）　遺跡の東半部最南端に位置する。東西に長い不整形土壙である。長さ330cm、幅131cm、深さ54cmとなる。埋土全体に炭小ブロックが混入している。縄文土器片が少量出土したが時期は確定できない。底面は北側中央部へと階段状に下がっている。埋土の状況や、全体の形態からみて、風倒木痕の暗色部だけ掘った可能性がある。

44号土壙（図版18、第24図）　遺跡中央の現農道東脇に位置する。当初Ｐ178とＰ65とに分けていたが、Ｐ65側の方が深くしっかりしていた為に土壙番号を付けた。本来Ｐ65側のみが土壙状掘り込みであろう。長さ114cm、幅66cm以上、深さ34cmとなる。図示できる出土遺物が無く、時期・性格は不明。

45号土壙（図版17、第24図）　遺跡の東端近くの、遺構のまばらな地区にて検出された。長さ241cm、幅70cm、深さ15cmと浅い。底面はほぼ平坦で、北半には基盤の礫群が現われている。形状からみて、縄文晩期の土壙墓と考えられる。

出土遺物（第17図）

深鉢（７・８）　７は復原口径19.6cmで、大きく山形凸起部をつくる類。凸起部とその近接部のみの口唇部に細い棒押圧の刻目を入れ、凸起部外面のみに細い棒先による刺突連点文と平行直線文を施している。内面は横位条痕、外面は斜位の削り状擦過調整のままとなる。胎土に粗砂僅か、細砂多く含む。焼成良好で内面は黒褐～暗茶色、外面は茶色をなす。山形凸起部のみを意識した文様構成であり、内湾気味に立ち上がる器形等からも、縄文後期前葉の所産と考えられる。８は、半精製の深鉢で、口縁部内外は横位ナデ、内面は横位擦過、外面はヘラナデが施される。細砂粒をかなり含み、焼成良好で、内外面ともに暗茶褐色をなす。縄文後～晩期のものだが、特に晩期後葉以前の定型深鉢になる可能性が強い。



第24図　楠田43～45号土壙実測図(1/40)

以上の出土土器は時期的に差があるが、遺構の時期としては、後者をとらざるを得ないだろう。集落からはずれた位置の墓と言えよう。

101号土壙（図版18、第25図）　この101号から後は下層遺構である。当土壙は遺跡の北端近くで、現農道の東脇に位置する。主軸をN80°Eのほぼ東西にとる木棺墓と考えられる。墓壙

自体は、長さ202cm、幅149cm、深さ22cmとなるが、墓壙の西寄りに凹部がみられ、木棺墓と判断した。地山が砂礫層になっており、礫が木棺推定部分だけ除去されていた。棺の裏込めと思われる礫が周囲に壁状に１～３段積まれた部分もみられた。これらから推定される木棺の寸法は、長さ100cm、幅50～44cm、高さ20cm以上となろう。埋土は暗茶褐色粘質土で、縄文晩期包含層と同じである。図示できる土器は無いが、102号土壙と同じく刻目凸帯土器の時期の墓と考えられる。

102号土壙（図版19、第25図）　上述の101号土壙の南々西２ｍの位置にて検出した。主軸をＮ60°Ｅにとる木棺墓と思われる。基盤が河岸段丘の砂礫層であるが、中央部のみ石が除去されており、暗茶色粘質土の埋土であった。墓壙自体は長さ270cmほど、幅157cm、深さ32cmである。二段掘り状になり、木棺推定部の寸法は、長さ116cm、幅52cmとなり、101号土壙の木棺寸法と同様、やや寸詰まりの長方形をなす。棺推定範囲の周壁は小礫で裏込め状に積まれていた。晩期土器片がかなり混入していた。

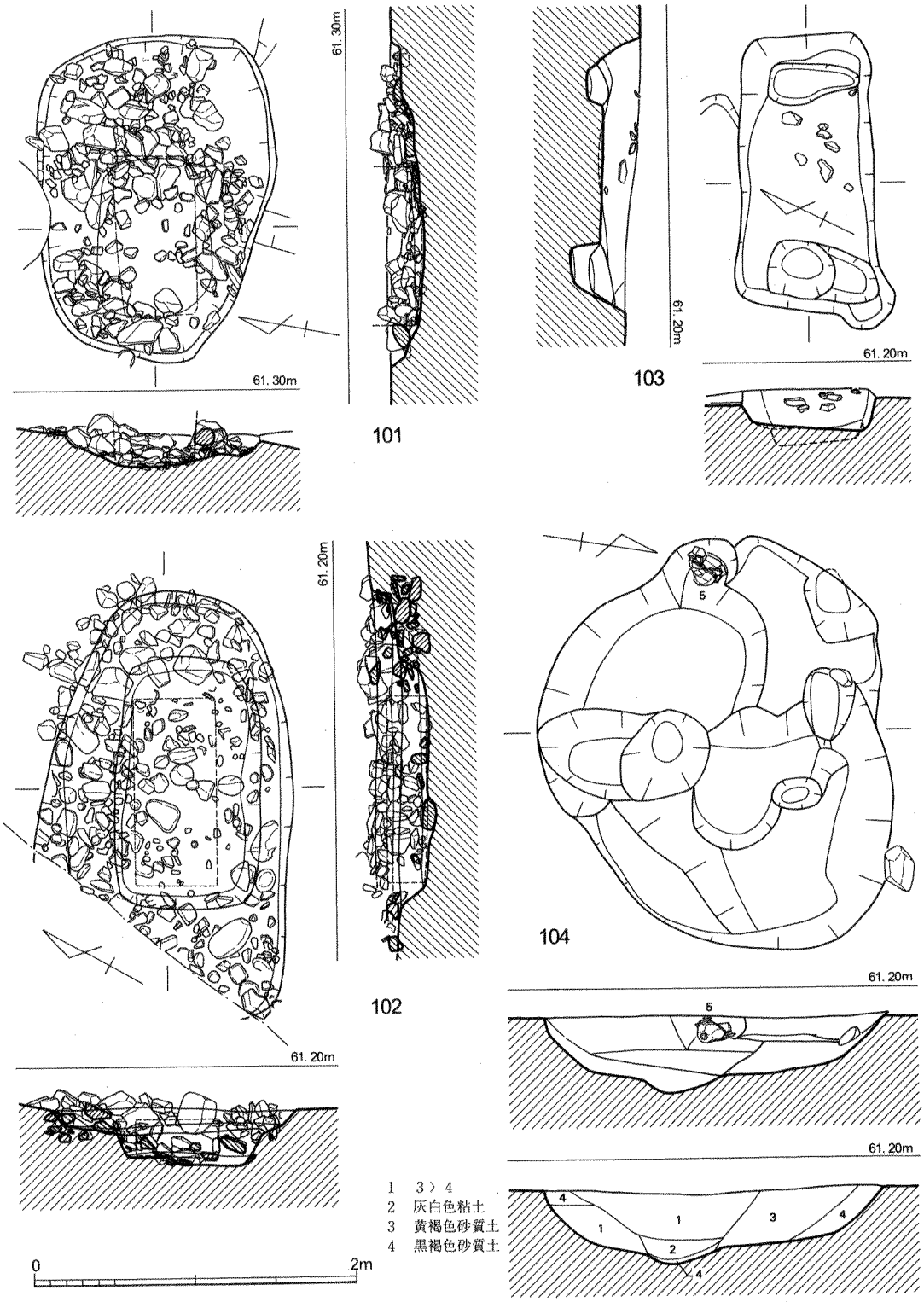
出土遺物（第26図）

刻目凸帯土器（１）　貝殻腹縁による雑な大きめの刻目を施す類で、内面は横位条痕の上を横ナデ、外面は雑な横ナデ。胎土に粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は上半が黒色、下半が茶褐色をなす。弥生早期前葉のものであり、当102号土壙の時期を示す所であろう。

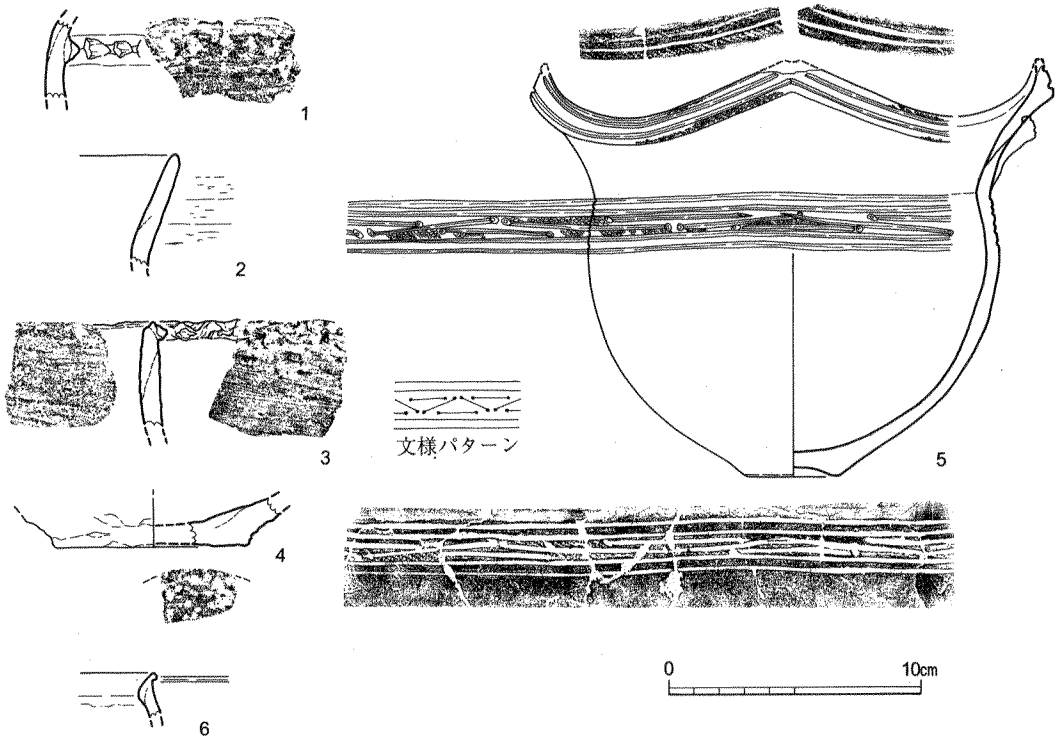
103号土壙（図版18、第25図）　遺跡中央の遺構が最も集中する部位にあり、４号竪穴住居跡の南に隣接する。長軸をＮ64°Ｅにとる長方形土壙で、長さ174cm、幅90～80cm、深さ22cmとなる。底面はやや波打っており、短壁沿いに両端とも溝状の掘り込みがみられる。以上の形態からみて、木棺墓の可能性が考えられる。棺の寸法は、長さ100cm前後で、幅は50cm程と推定でき、101・102号土壙の推定棺寸法と近似する。主軸方向も略同じである。

出土遺物（第26図）

縄文土器（２～４）　２は口縁が僅かに内湾気味に開く浅鉢で、波状口縁になるかもしれない。内面は横ヘラ磨き、外面は横位擦過で、焼成やや不良。内面は淡褐～黒褐色、外面は茶褐色をなす。胎土には細砂粒を幾らか含むのみ。「クリナラ遺跡縄文晩期後半土器分類」の精製浅鉢Ｂ３類となる。晩期後葉古段階のものである。３は、当土壙中のＰ３出土品で、口唇外端に付けた凸帯はグチャグチャで、刻目も草目類の茎を用いたような粗雑なもので、どれが刻目になるかわからない程である。内面は横位条痕で上半はその上を横位ナデ。外面はかなり雑な横位ナデで凹凸が多い。粗・細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は黒色、外面下半は白褐色をなす。第46図の９～11と同一個体或は同類と思われる。４は、復原底径7.6cmの僅かに



第25図　楠田101～104号土壙実測図(1/40)



第26図　楠田102～105号土壙出土土器実測図(1/3)

上げ底状となる粗製深鉢底部で、指頭調整による凹凸が著しい。底外面も凹凸が多く、何らかの圧痕状のものが認められる。細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で、内面は白褐色、外面は淡茶色をなす。

以上の出土土器のうち、２は既述の如く縄文晩期後葉古段階のものであるが、３の刻目凸帯土器は、凸帯の位置・形状・施文法など古い様相を示しており、晩期後葉まで遡るものなのかもしれない。以上のことから、当103号土壙は縄文晩期後葉の所産と考えられる。

104号土壙（図版19、第25図）　遺跡の中央南端近くに位置する。径255×220cm不整形プランをなし、深さ48cmとなる。底面は凹凸著しく、小ピットもみられる。土層からみて、掘り直しがあったように思われる。廃棄土壙かと思われるが、西端部から縄文後期精製深鉢のほぼ完形品が出土した。

出土遺物（第26図）

深鉢（５）　口径20cm、器高16.1cm、胴部最大径16.3cm、底径3.7cmの精製深鉢で、口縁外面に２本の沈線を施し、その上下外側にＲＬ縄文をいくらか施す。頸部直下の文様帯は、上下に２本ずつの平行沈線を施し、その間に斜位の山形となるような沈線と各山形の上下に横位の

短線を施す。山形をなす沈線とその上下の短沈線の各端部には各々刺突点文が施され、さらにＲＬ縄文が僅かに残されている。文様帯の下方3.5cmから上の外面は横位ヘラ磨き、それ以下は縦位のヘラ磨き、内面は横位ヘラ磨きが施されている。胎土に粗砂粒を僅か、細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は黒～暗灰褐色、外面は淡褐～黒褐色をなす。口縁の1/3を欠くのみの完形品である。口縁の立ち上がりが短いことや肥厚状況からみて典型西平式からははずれており、磨消縄文がかろうじて残ること、胴部上端文様帯の構成等からみて、縄文後期後葉太郎迫式の中の古段階に位置付けられよう。

105号土壙（図版19、第27図）　遺跡の中央北寄りの遺構密集部分に位置する。４号竪穴住居跡の西側に隣接する。東西に長軸をとる略長方形土壙で、東側が広くなっている。長さ246cm、幅144cm～90cm、深さ16cmとなる。地山の礫が底面に出てきている。遺構の性格は明確にできない。

出土遺物（第26図）

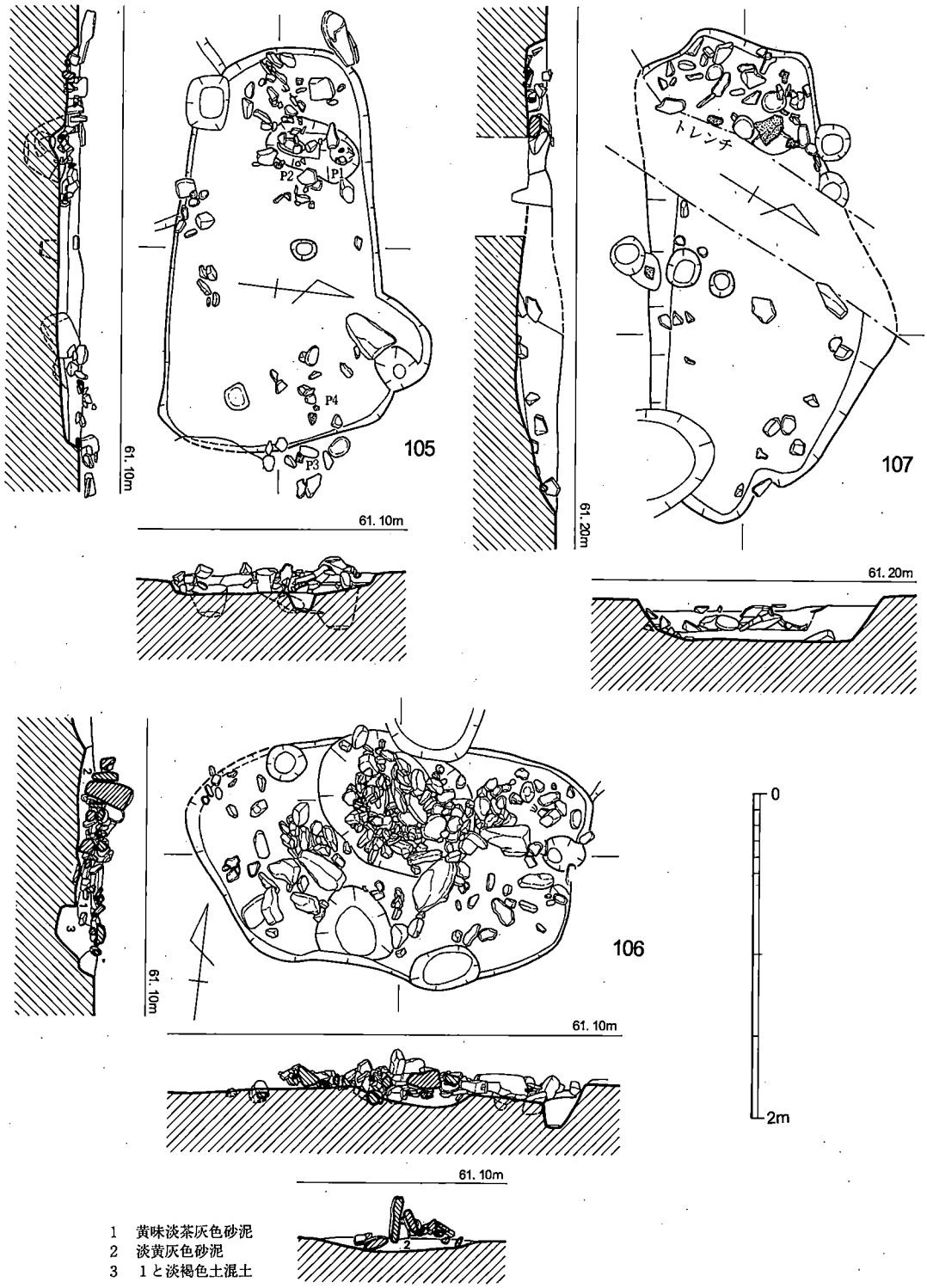
縄文土器（６）　小型マリ形土器で、口唇外端が丸く突出する特徴を示す。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土に細砂粒を幾らか含み、焼成不良で内面は黒色、外面は暗灰褐色をなす。縄文晩期後葉新段階のものであろう。

106号土壙（図版20、第27図）　上述の105号土壙の南西隣に位置する。東西に長い不整楕円形プランをなすが、掘り込みは浅く、実体は中央北寄りに検出された集石遺構である。中央集石部以外の礫は、基盤層のものである。北側中央部に72×100cmの楕円形に浅く掘り込んで、その中に礫をいくらか立てて、そのまわりに小礫を集積している。明らかに人工的に集石されたものであるが、焼けた痕跡もなく、性格を確定することはできない。時期的には、埋土と周辺の状況からみて、縄文晩期後葉～弥生早期前葉の間のものと考えられる。

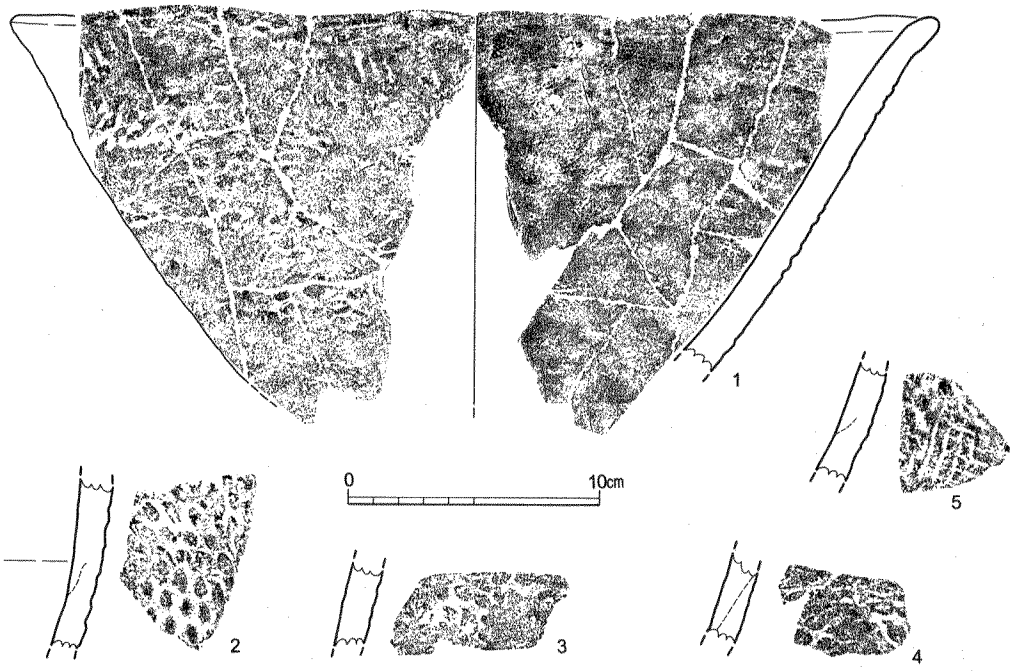
107号土壙（図版20、第27図）　遺跡の中央南側に位置する。縄文後期の104号土壙の１m北東隣である。長さ302cm、幅150cm、深さ28cmとなる。中央を土層観察用の十字トレンチで切ってしまった。埋土は黄褐色の砂混入土で、下層の押型文グリッド部の土と近似している。土壙の性格は不明だが、17m離れた押型文グリッドのものより古い押型文土器が出土した。

出土遺物（第28図）

押型文土器（１～５）　１は復原口径37cmとなる横位施文の楕円形押型文土器である。口縁外面１cm幅には部分的に横位施文がみられ、以下口縁から３cmまではナデ、以下5.5cmまでは１単位幅２cm強の施文が明瞭で、更に以下12cmまでは半分以上が消された横位施文がみられる。所謂帯状施文ではない。以下、即ち外面の下端（全体からみると下半部）は横位ナデで無文と



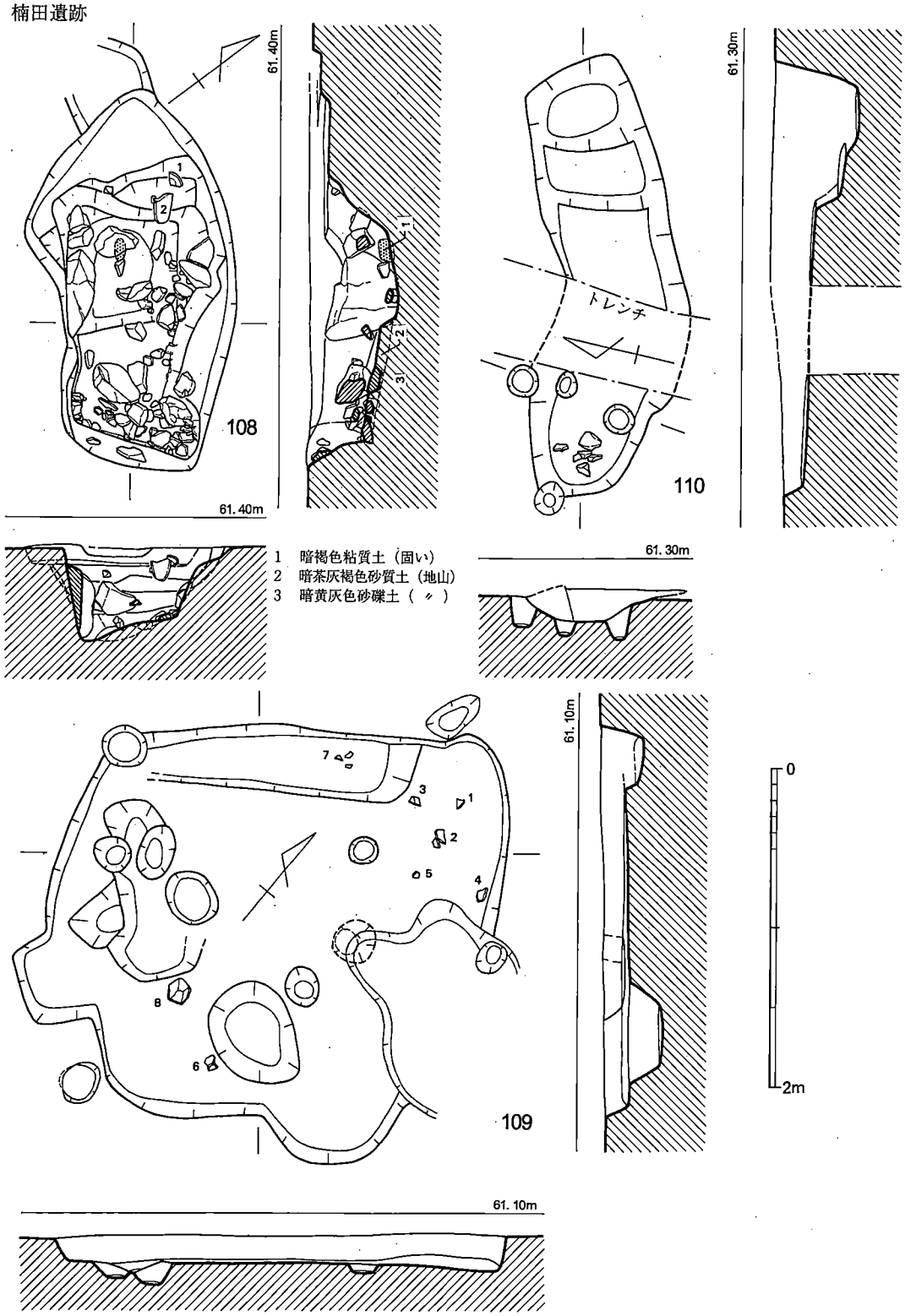
第27図　楠田105～107号土壙実測図(1/40)



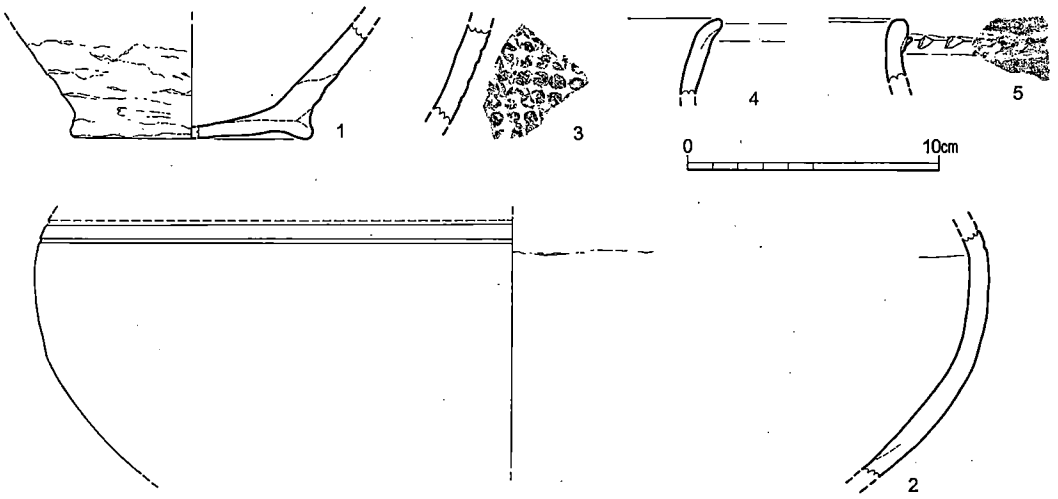
第28図　楠田107号土壙出土押型文土器実測図(1/3)

なっている。楕円文は５～８×３～５㎜の中型類である。内面は横位ナデで、上半は凹凸が多い。口縁はかなり波打っており、胎土に粗大砂粒・細砂粒を多く含む。焼成やや良好で、内面上半は茶褐色、下半は暗褐色、外面上半は煤が付着して黒～暗茶色、下半は明茶褐色となる。２は、外面上半が斜位の、下半が縦位に近い楕円形押型文を施している。８～９×５～６㎜のやや大きめの楕円文で、内面は横位ナデを施している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成良好で内面は上端に煤が付着するが以下は茶褐色、外面は淡灰褐色をなす。３は、横位の楕円形押型文（７～８×５～６㎜）が施され、内面調整はナデかと思われる。胎土に粗大砂粒幾らか、細砂粒を多く含む。焼成やや良好で、外面は茶～暗茶褐色、内面は暗褐色をなす。４は、横位の楕円形押型文（６～８×４～５㎜）が施され、内面はナデで凹凸が多い。細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗茶褐色をなす。５は、外面上端に右下がり斜位の楕円形押型文（８×５㎜）、以下に格子目に近い形状の押型文（６×５㎜）を施す異類である。内面は横位ナデで、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内面はこげ茶色、外面は茶褐色をなす。

以上の押型文土器は、１・３・４の横位施文の中型の楕円形押型文類と、２・５の縦位のやや大きめの楕円形押型文類とに大別できる。前者は大きく開く形状を残しており、雑ではあるが各部分でのナデ消しが施される特徴がみられる。後者は施文法の違いのみでなく、器形的にも異なり、胴部が立つゆるやかな長胴類となるようである。この後者は田村式段階に近くなっ



第29図　楠田108～110号土壙実測図(1/40)



第30図　楠田108～117号土壙出土土器実測図(1/3)

ており、一方、前者は器形等に古い様相は残すが、厚手でもあり、後者よりいくらか古い段階のものと考えられる。

108号土壙（図版21、第29図）　遺跡の中央やや北寄りで、117号土壙の北２ｍに位置する。長さ236cm、幅128cmの不整形土壙で、深さは60cmほどとなる。基盤の礫が底面に露出している。内部は出入りがあり、性格は不明。

出土遺物（第30図）

底部（１）　縄文晩期の深鉢底部で、底径9.7cmとなる。底外面は僅かな上げ底で、外周に沿って内側が一段とへこんでいる。内面は雑なヘラ磨きでわりと平滑。外面は未調整風の雑な横位ナデで凹凸著しい。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面上半は淡茶色、下半は黒色、外面は淡茶褐色をなす。

109号土壙（図版22、第29図）　遺跡の中央最南端に位置する不整形土壙である。270×280cmの不整方形的平面形で、深さは15cm前後と浅い。底面は大旨平坦であるが、小ピット等が多くみられる。北半部に主に集中して土器等が出土した。当土壙の東北東5.3ｍの至近に、同じく縄文後期後葉の104号土壙が在ることから、この遺跡南端付近がこの時期の生活地と考えられる。当土壙は、小型であり、他に構造上からの積極的証拠は無いが、竪穴住居の可能性を残しておきたい。

出土遺物（第30図）

深鉢（２）　当土壙内のＰ２・５・７とした北半の出土土器片が接合したもので、胴部最大

径38cm。外面上端に２本（以上）の平行沈線を施し、内外面ともにやや粗い横ヘラ磨きを施す。胎土に粗・細砂をかなり含み、焼成やや不良で内外面ともに黒～暗褐色をなす。外面上半には煤がこびりつく。縄文後期後葉太郎迫式となろう。

使用剝片（第52図15）　当土壙内北端のＰ３として取り上げた出土品で、漆黒色良質の黒曜石製。石刃状縦長剝片のバルブ側をカットして、縁辺のみに細調整を施し、ほぼ全周使用したもの。長さ59㎜、幅26㎜、厚さ10㎜、重さ14ｇとなる。一部に大きい不純物を含む。

以上の出土品から、当土壙は縄文後期後葉のものと考えられ、石刃状縦長剝片の存在も好共伴例として矛盾するものではない。

110号土壙（図版21、第29図）　遺跡の南半中央に位置し、南隣1.5ｍの107号土壙とともに押型文土器を出す土壙として重要である。東西に長い不整形土壙であり、長さ276cm、幅70～90cm、深さ13～54cmとなる。底面は東側へ傾斜し、東端でピット状となる。若干の押型文土器片が出土したが、図示出来るのは１点である。

出土遺物（第30図）

押型文土器（３）　外面に横位の楕円形押型文（６～４×５～４㎜）を施す類で、土壙107出土品よりも器壁が薄く、楕円文も小さい類である。内面は横ナデ調整で、胎土に粗砂少量、細砂幾らか含む。焼成やや不良で、内面は黒褐色、外面は茶褐色をなす。

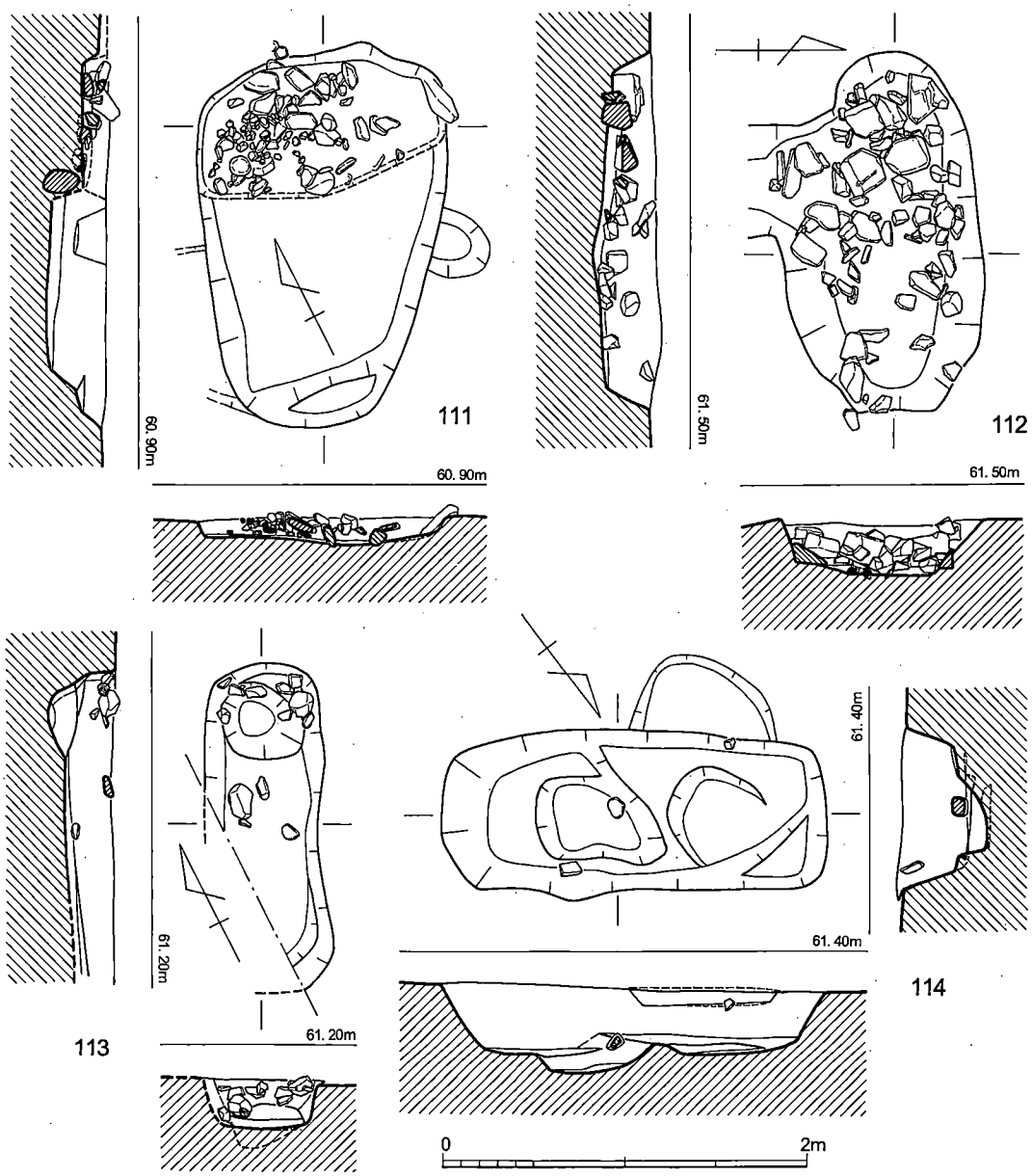
111号土壙（図版２、第31図）　遺跡のやや北寄りの現農道東脇に位置する。106号土壙の1.5ｍ南西隣である。掘り込み自体は204×138cmの楕円形プランであるが、実際は北半部は集石遺構である。東西140cm、南北76cmの浅い掘り込みの中に河原石と小さな転石が集められていた。底面には微細な炭粒が少量混入していた。時期・性格は確定できない。

112号土壙（図版23、第31図）　遺跡の東寄りに位置する東西に長い楕円形土壙である。長さ196cm、幅108cm、深さ34cmとなる。南側へ溝が2.5ｍ程延びているが、土壙との関係は判からない。土壙内部には大きめの石がかなりみられるが、具体的な性格は不明。

出土遺物（第30図）

深鉢（４）　口縁部が短く外方へ折れて開くもので、内外面ともに丁寧なナデ調整。胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は灰黄褐色をなす。縄文晩期中葉前後の精製深鉢となろう。

113号土壙（図版22、第31図）　遺跡中央の北端近くに位置する。南西側を十字トレンチに切られている。長軸を北北東から南南西にとる隅丸長方形土壙で、長さ約180cm、幅66cm、深



第31図　楠田111～114号土壙実測図(1/40)

さ24cmとなる。北端部は一段深くなっている。埋土は暗褐色粘質土で、片岩の転石が上層にみられた。出土遺物が無くて時期は確定できないが、しっかりした掘り込み等から土壙墓と考えてよさそうである。

114号土壙（図版22、第31図）　遺跡の東半部中央に位置する。最後に設定した押型文グリッドの東１ｍ隣で、主軸を北西から南東にとる長方形土壙である。北西側を方形の浅いピットで切られている。長さ212cm、幅92cm、深さ46cmとなる。底面は凹凸があり、壁も斜めに開いている。出土遺物が無く、時期・性格は不明。

115号土壙（図版21、第32図）　上述の114号土壙の南側２ｍに位置する。大きくみると二段掘状になり、全体は196×160cmの不整形、下段の掘り込みは124×68cmの長楕円形をなす。底面は深さ42cmとなり、小型ではあるが二段掘土壙墓的である。出土遺物が無く、時期は不明。

116号土壙（図版２、第32図）　上述の115号土壙の東隣１ｍに位置する。北西から南東に長軸をとる略長方形土壙で、長さ190cm、幅116cm、深さ20cmとなる。底面は平らで、東半部には基盤の礫が露出している。図示できる土器が無く、時期は確定できない。

117号土壙（図版２、第33図）　遺跡の東半部のやや北寄りに位置する。掘り下げた結果、４つの穴が重複していたことが判かった。切合いは甲主体と丙主体が乙主体に切られているようだ。以下各主体部毎に説明する。

甲主体は西北西から東南東に長軸をとる長方形土壙で、長さ298cm、幅80cm、深さ28cm程となる。北東側を乙主体に切られているので全容は確定できないが、土壙墓と考えてよかろう。

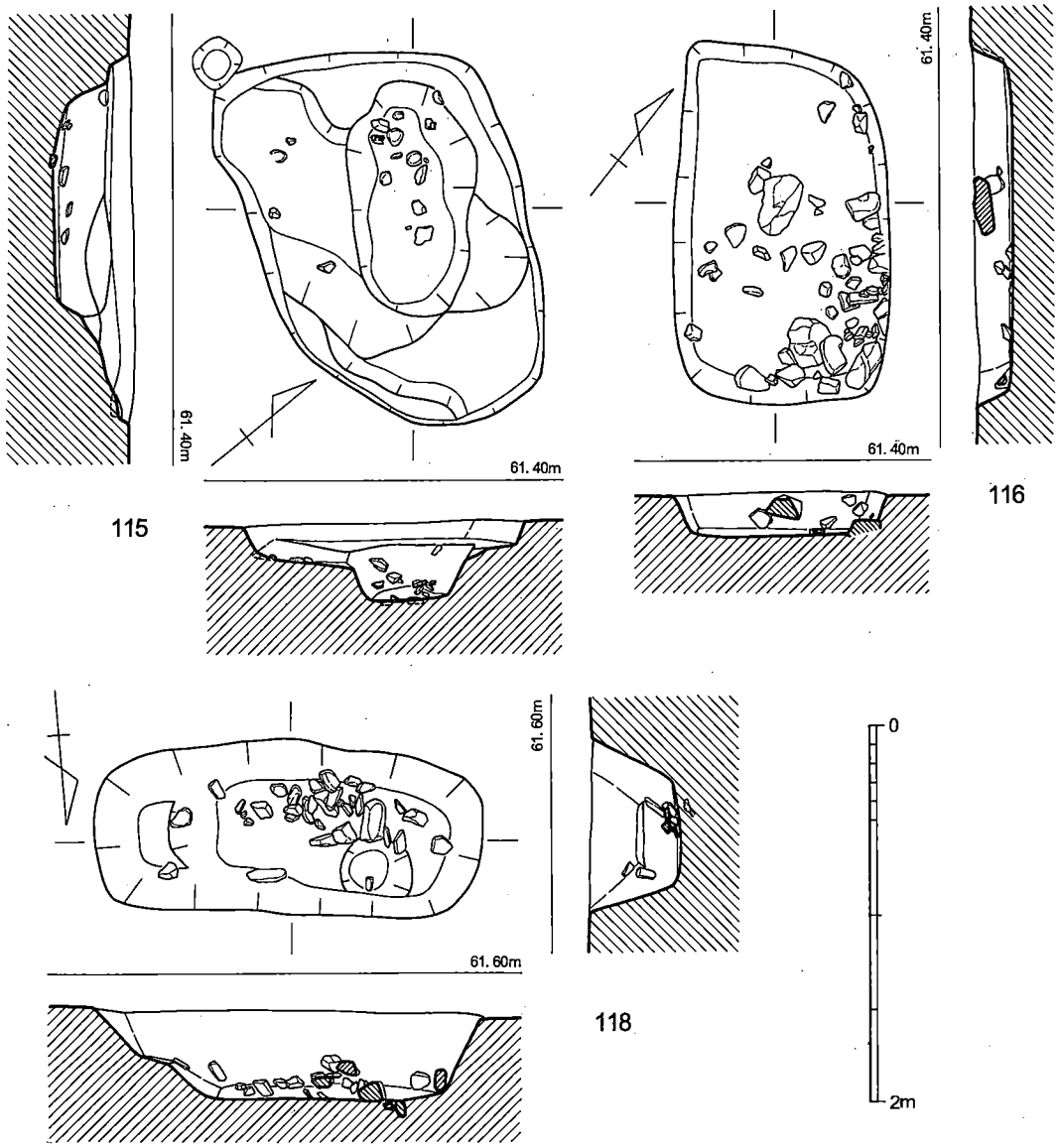
乙主体は東西に長軸をとる長方形土壙で、中途に段があり、二段掘り状になっている。全体の大きさは、長さ約230cm、幅168cm、深さ74cmとなる。底面に礫は露出しているが、ほぼ平坦で、底部の寸法は長さ115cm、幅50cmとなる。木棺墓の可能性も考えられる。この大きさは、101・102号土壙における木棺推定範囲の大きさと近似しており、同類の墓制と考えられる。時期的にもほぼ同時期となりそうだ。

丙主体は北側にあり、乙主体に南半部を切られている。本来の形状は楕円形の東西に長い土壙であったと推定され、底面に礫が敷かれている。長さ300cm程、幅100cm以上、深さ13cmとなる。底面が平坦であり、ひょっとしたらこれも土壙墓となる可能性がある。

丁主体は東端に在る小さな掘り込みである。南北に長軸をとり、丙主体を切っているようだ。長さ116cm、幅50cm、深さ31cmとなる。底面には基盤の礫が露出しているが、わりと平らになっており、この掘込み自体が小規模乍ら埋葬主体となっていると思われる。

出土遺物

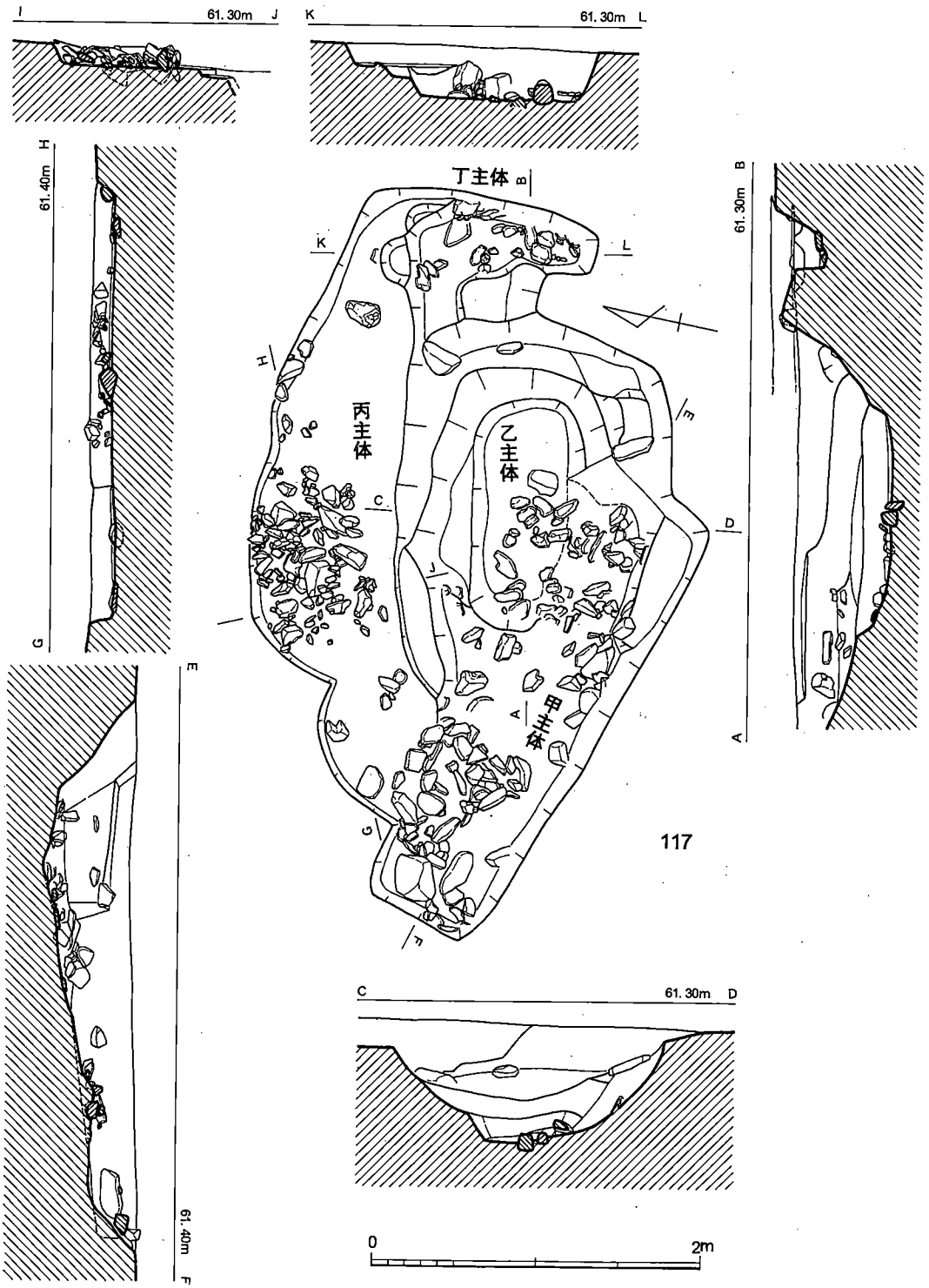
刻目凸帯土器（第30図５）　口縁外面の凸帯に貝殻腹縁によると思われる刻目を斜位に施す。内外面ともに横位ナデ調整で、胎土に粗・細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は淡黄褐色、外面は淡茶褐色をなす。



第32図　楠田115・116・118号土壙実測図(1/40)

打製石鏃（第51図１）　漆黒色良質の黒曜石製で、長さ22㎜、推定幅24㎜、厚さ４㎜、現存重さ0.７ｇの鍬形鏃である。表裏面ともに調整は細かく丁寧である。

使用剥片（第51図12）　漆黒色良質の黒曜石製で、側面に礫面を残す不定形小剥片の下縁のみに簡単な細調整を施したものである。打面は調整面で、長さ24㎜、幅23㎜、厚さ５㎜、重さ２ｇとなる。



第33図　楠田117号土壙実測図(1/40)

偏平打製石斧（第53図５）　濃灰緑色の緑色片岩製で、細身で小型の類である。全体に風化著しいが、裏面中央付近には横剝ぎ素材剝離面が幾らか残り、裏面下半には使用磨耗がかなり認められる。長さ10.8cm、幅４cm、厚さ1.6cm、重さ94ｇとなる。この種石斧としては整形のための剝離調整は丁寧な方である。

以上の出土遺物からみて、当117号土壙は縄文晩期末葉前後のものと考えられるが、各主体部毎の時期は確定できない。また、打製石鏃１は縄文早～前期とするにふさわしく、更に偏平打製石斧はこの土壙の時期よりも、もう一段古い時期のものの混入品と考えた方がよさそうである。

118号土壙（図版23、第32図）　遺跡の東端近くの遺構の疎らな部位に位置する。ほぼ東西に長軸を持つ隅丸長方形土壙で、長さ206cm、幅92cm、深さ48cmとなる。底面はやや掘りすぎたようで、礫の上面ぐらいが本来の底となろう。出土遺物は無く、時期が決定できないが、縄文晩期の土壙墓と推定されよう。

5　溝状遺構

本遺跡で検出した溝状遺構は３条である。

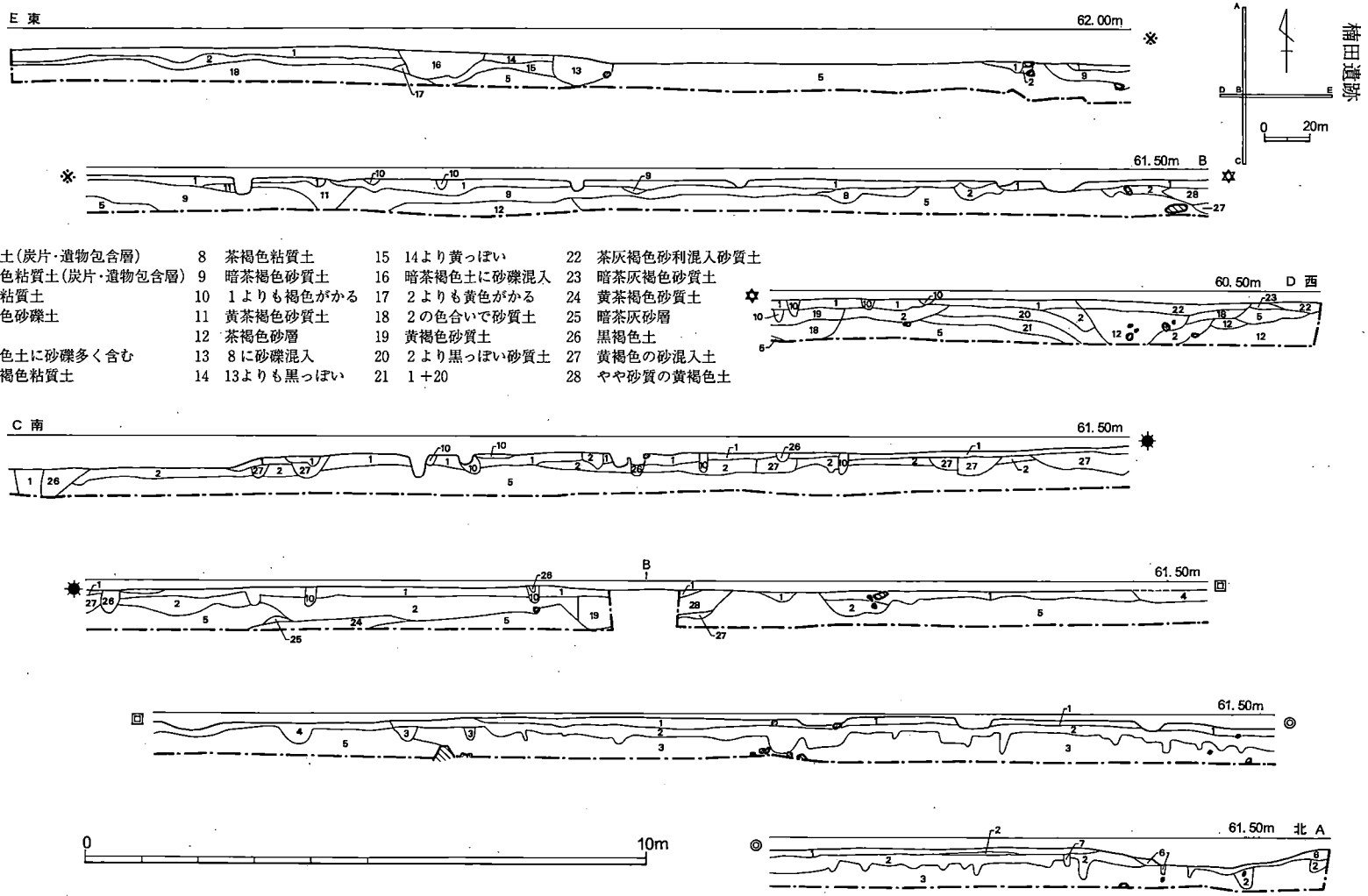
１号溝（第５図）　遺跡の西半部南半にて検出した南北溝である。上層遺構であり、３号竪穴状遺構を切る。全長19m、幅は１～0.3mとなり、全体に浅い。底面は南から北へ下がっており、排水路的でもある。現在の畑の状況と重ねて考えても、畑の排水路等と整合しないため、弥生以降、近世までの間の遺構と考えられる。遺物が無く、時期は確定できない。

２号溝（第５図）　上層遺構で、遺跡の北端に位置する。幅広の東西溝で、全長48m分を調査した。幅は0.8～４mで、底面は西へ傾斜している。この溝は明らかに現代の畑に伴う排水路であり、東西に走る農道の南側に沿って掘られていたものである。ただし、その時期的上限は定かではない。

３号溝（第６図）　下層遺構で、発掘範囲の最北端に位置する。現代の畑の排水路とは全く関係は無い。東西にまだ延びるのは確実だが、本当に溝となるかどうかはわからない。幅は１～1.5m程で、底面は凹凸が多い。溝周辺から縄文土器片がかなり出土しており、縄文後～晩期の何らかの遺構であるのかもしれない。

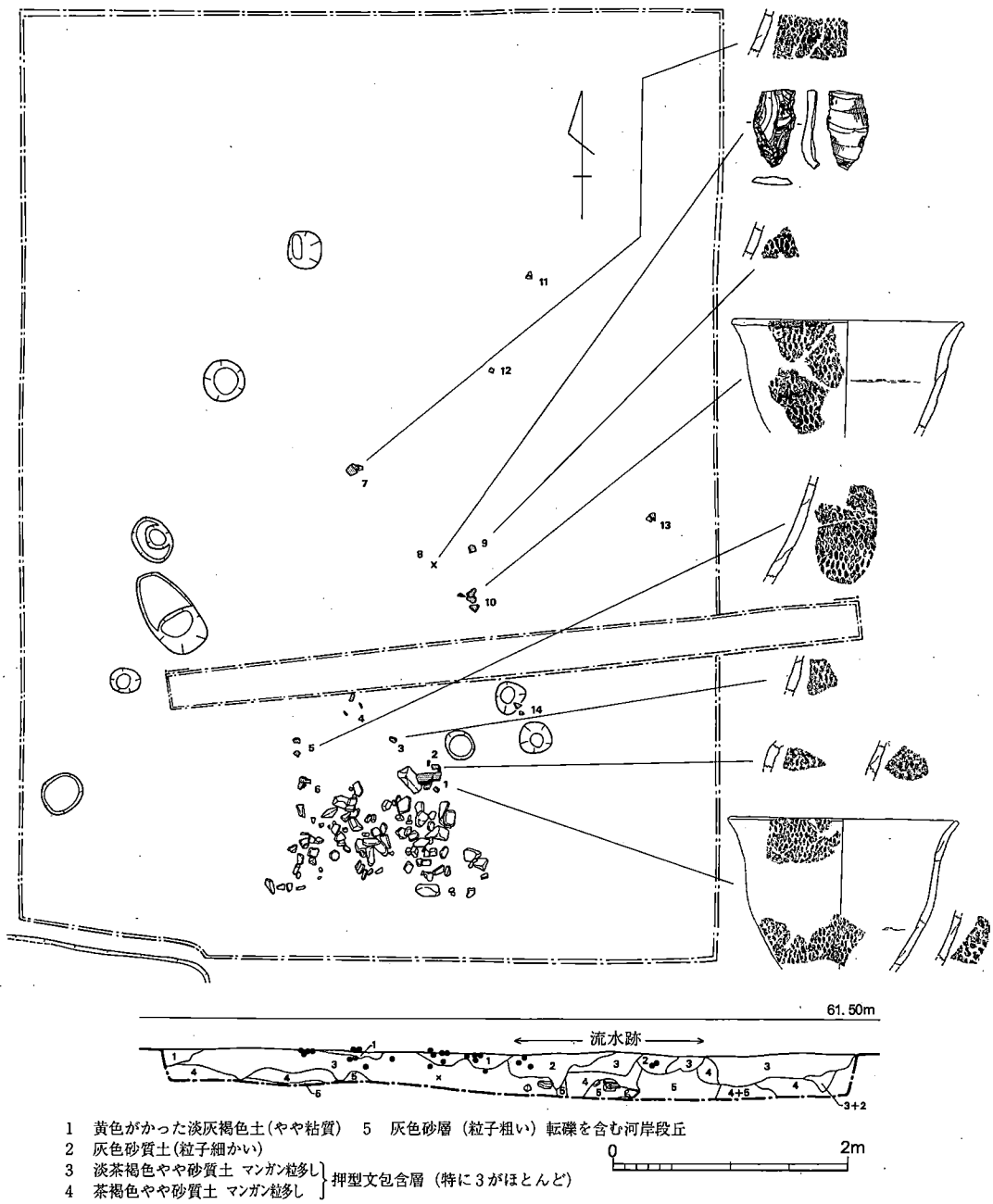
6　押型文グリッド

遺跡の東半部中央に、調査最終段階で６×８mの発掘区を設定して掘り下げた。下層遺構面



1 茶褐色土(炭片・遺物包含層)
2 暗茶褐色粘質土(炭片・遺物包含層)
3 黄褐色粘質土
4 暗茶褐色砂礫土
5 砂礫層
6 暗茶褐色土に砂礫多く含む
7 暗茶黒褐色粘質土
8 茶褐色粘質土
9 暗茶褐色砂質土
10 1よりも褐色がかる
11 黄茶褐色砂質土
12 茶褐色砂層
13 8に砂礫混入
14 13よりも黒っぽい
15 14より黄っぽい
16 暗茶褐色土に砂礫混入
17 2よりも黄色がかる
18 2の色合いで砂質土
19 黄褐色砂質土
20 2より黒っぽい砂質土
21 1+20
22 茶灰褐色砂利混入砂質土
23 暗茶灰褐色砂質土
24 黄茶褐色砂質土
25 暗茶灰砂層
26 黒褐色土
27 黄褐色の砂混入土
28 やや砂質の黄褐色土

第34図 楠田遺跡下層十字トレンチ土層実測図(1/120)



第35図 楠田遺跡下層押型文グリッド遺物出土状態実測図(1/60)

調査段階で押型文土器少量が頭を出していた為である。その結果、第35図に示す如く、まとまった資料を得る事ができた。

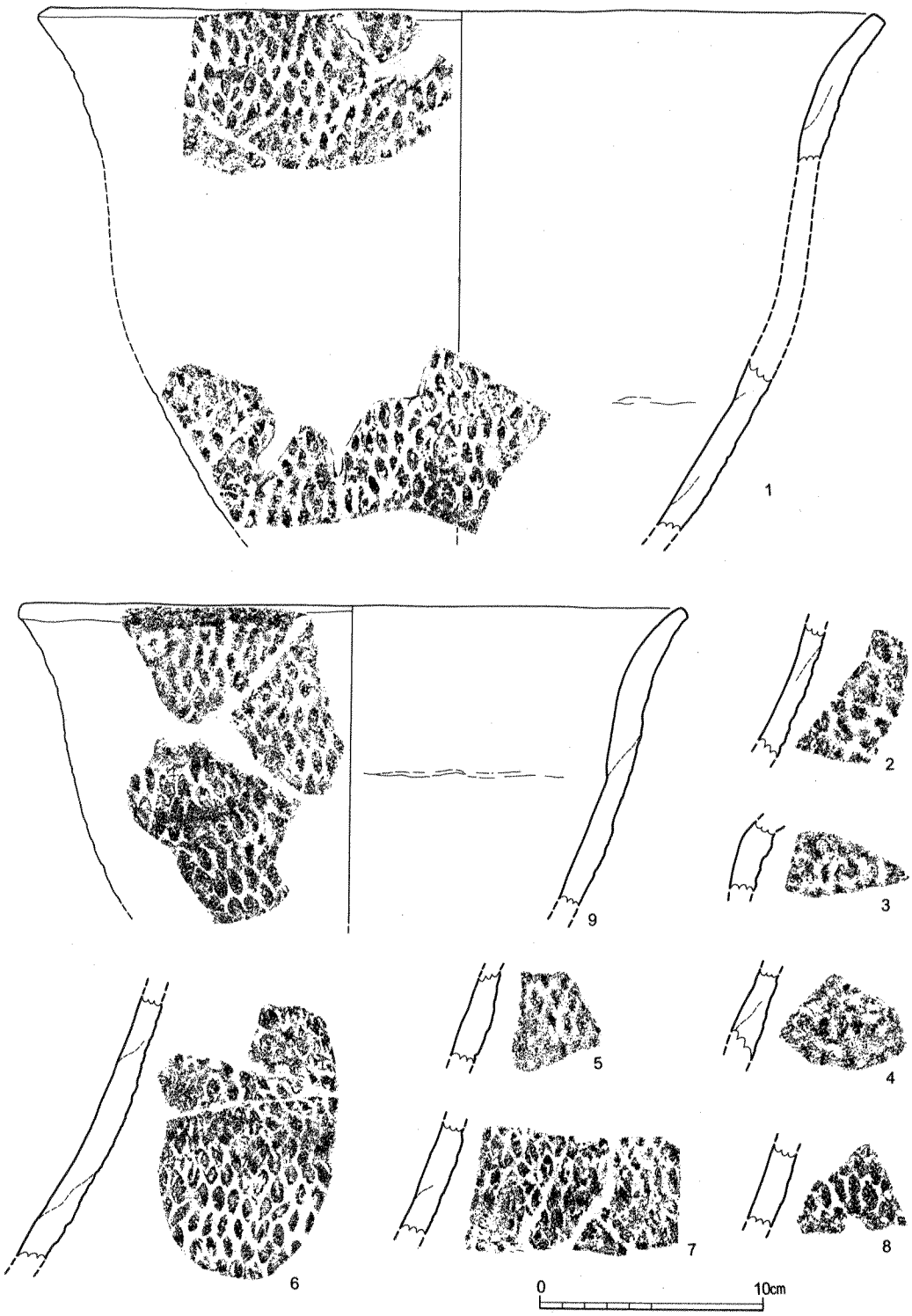
南端近くに礫群がみられたが、集石炉と確定するのは困難であろう。押型文土器片は、淡茶

褐色や茶褐色のマンガン粒の多い砂質土に含まれており、土層観察によると、これらは流水があった埋土と考えられる。ここの基盤は、転石を含み、粒子の粗い灰色の砂層で、河岸段丘によるものである。

出土遺物は、グリッド北端の図中で11とした縄文晩期土器片かと思われるものを除いて、他はすべて楕円形押型文土器片であり、良くまとまりを見せている。このあたりの、当時の生活痕跡と把えて良いと考えられる。遺跡全体からみると、この部分は遺構の無い空白地帯であり、北半の晩期遺構の密集部位とは明らかに位置を異にしている。また、より時期の古い押型文土器を出土した107・110号土壙とも離れており、各々が短期間のキャンプ地として営まれたことが判かる。

出土遺物（第36図）

押型文土器（1～9）　1は当グリッド出土品No.1で、復原口径38㎜となる。ややふくらみを持つ胴部から開く口縁を持つ器形となる。外面全面に縦位の楕円形押型文（12～11×6～5㎜）を施す。押型文の単位幅は5㎝、工具直径は5.2㎜に復原できる。内面は横位ナデで、丁寧だが上半は幾らか凹凸がみられる。粗砂粒を幾らか、細砂粒をかなり含む。焼成良好で内面は明茶褐色、外面上半は暗茶色、下半は煤が付着しておりこげ茶色をなす。2は、1と同じ部位で出土したものであるが、斜～縦位の楕円形押型文（12～10×7～6㎜）を施す別個体である。内面は横ナデかと思われ、やや薄手である。胎土に粗・細砂幾らか含み、焼成やや良好で内面は暗褐色、外面は橙茶色をなす。3はNo.2とした土器で4と同一個体の可能性が強い。外面に縦位の楕円形押型文（8×5㎜）を施し、内面は横位ナデ。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成やや良好で内面は茶褐色、外面はこげ茶色をなす。4もNo.2とした土器で、かなり磨滅しているが、外面に縦位の楕円形押型文（7×5㎜）を施す。内面は横位ナデ、胎土に細砂粒を多く含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は黒褐色をなす。5はNo.3とした土器で、外面に縦位楕円形押型文（12～10×6～5㎜）を施す。内面はナデで、胎土に粗砂幾らか、細砂多く含む。焼成良好で内面は黒褐色、外面は明橙茶色をなす。6はNo.5とした土器で、外面に縦位の楕円形押型文（13～11×6～4㎜）を施す。施文単位幅は4.5㎝、工具直径5.3㎜と想定される。内面は横～右下がり斜位のナデで、わりと平滑である。粗砂僅か、細砂多く含み、焼成やや良好で内面は黒褐～茶褐色、外面は淡茶褐色だが下端は煤が付着してこげ茶色になっている。7はNo.7として取り上げた土器で、外面に縦位の楕円形押型文（12～10×6～5㎜）を施す。内面はナデかと思われ、胎土に粗砂幾らか、細砂かなり含む。焼成やや良好で、内面は黒褐色、外面は淡茶褐色をなす。8はNo.9として取り上げた土器で、外面に縦位の楕円形押型文（14～10×6～4㎜）を施す。内面はナデで、粗・細砂幾らか含み、焼成やや良好で内面は暗褐色、外面は橙茶褐色をなす。6と同一個体の可能性がある。9はNo.10として取り上げたもので、復原口径30㎝となる。外面に縦位の楕円形押型文（14～12×6～4㎜）を施す。



第36図　楠田遺跡押型文グリッド出土土器実測図(1/3)

内面はやや磨滅しているが横位ナデであろう。胎土に粗・細砂多く含み焼成やや良好で、内面は淡茶～灰黒色、外面は暗褐色をなす。

使用剝片（第51図13）　かなり透明な小不純物を含む黒色の黒曜石製で、「押型文グリッドNo. 8」として取り上げたものである。上端は表からの加撃による折れで、左右両側辺に簡単な細調整を施しただけのものである。長さ33㎜、幅18㎜、厚さ５㎜、重さ３ｇとなる。

以上の出土遺物のうち、押型文土器は、いずれも縦位施文の中型より大きめの楕円文類で、器形も丸味を持って開く胴部からゆるやかに外反して開く口縁をもつものである。これらは、先に報告した107号土壙出土品よりも、器形・施文法ともに新しい様相を見せており、明らかに区別できる一群である。以上のことから、この押型文グリッド出土土器群は、縄文早期後葉の田村式相当の時期に比定できる。

7　縄文包含層

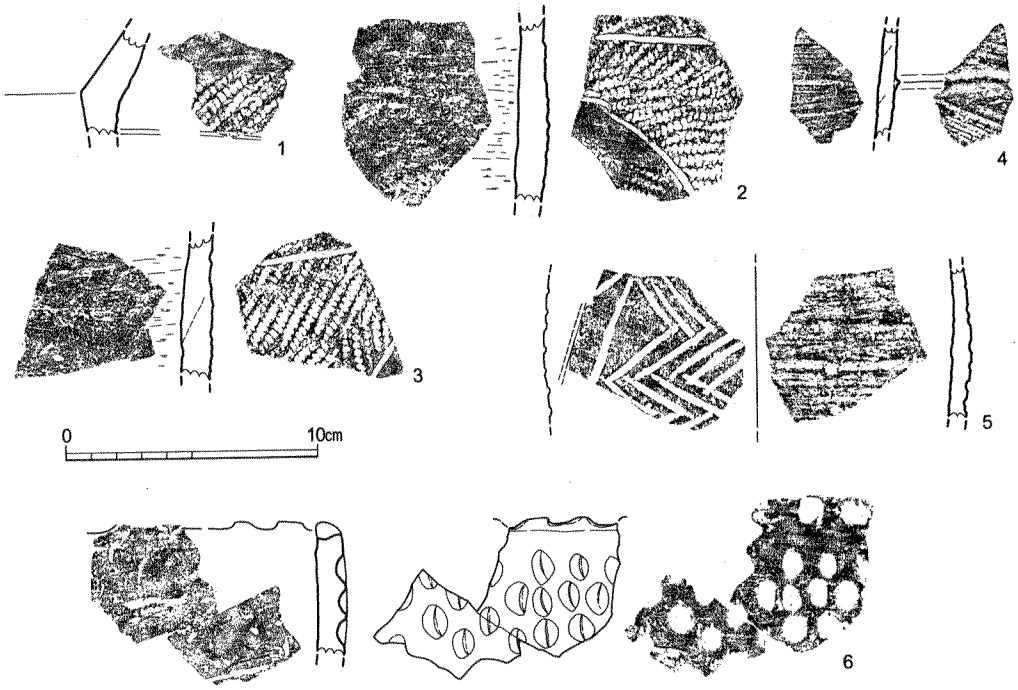
ここでは、これまでに報告した各遺構以外の小ピット、性格不明の不整形遺構等から出土した遺物、及び、遺構検出作業中に出土した遺物、及び上層から下層に下げる際に晩期包含層から出土した遺物等について、まとめて報告する。結果的には縄文晩期のものが殆どを占めることになった。

包含層の層位的確認については、既にこの報告の頭の所にて検討した。なお、以下に報告する遺物取り上げ名称のうち「表採No. ○○」としたものは、遺構検出時や包含層掘り下げ時に出土したもので、すべてその番号で１／20の実測図に位置と高さを記録して取り上げたものである。よって所謂表採品とは全く性格が異るものである。

以下、時期別に土器・石器を報告するが、最後に歴史時代のものも付け加えた。なお、縄文晩期～弥生早期の土器群については、「柿原Ⅰ縄文遺跡（九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告37　福岡県教育委員会　1995)」、「堀田遺跡（久原遺跡群Ⅲ　久山町教育委員会　1995)」、「クリナラ縄文遺跡（九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　43　福岡県教育委員会　1997)」等の調査成果を基にしている。分類呼称についてもそれらのものを使用した。

(1)　縄文早～中期土器

縄文早期土器（第37図１～３）　いずれも同一個体と思われる、ＬＲ縄文を沈線区画内に施す特徴的な土器である。１はＰ388出土品で、頸部内面に鋭い稜をつくり口縁が開く類。外面下端に横位沈線がみられ、２の上端の沈線と対応すると思われる。よって１の外面にみられる縄文は沈線の文様区画からはみ出したままの状態と考えられる。内外面とも丁寧な横位ナデで、胎土に粗砂少量・細砂幾らか含む。焼成やや不良で、内面は淡褐色、外面は黒褐色をなす。２

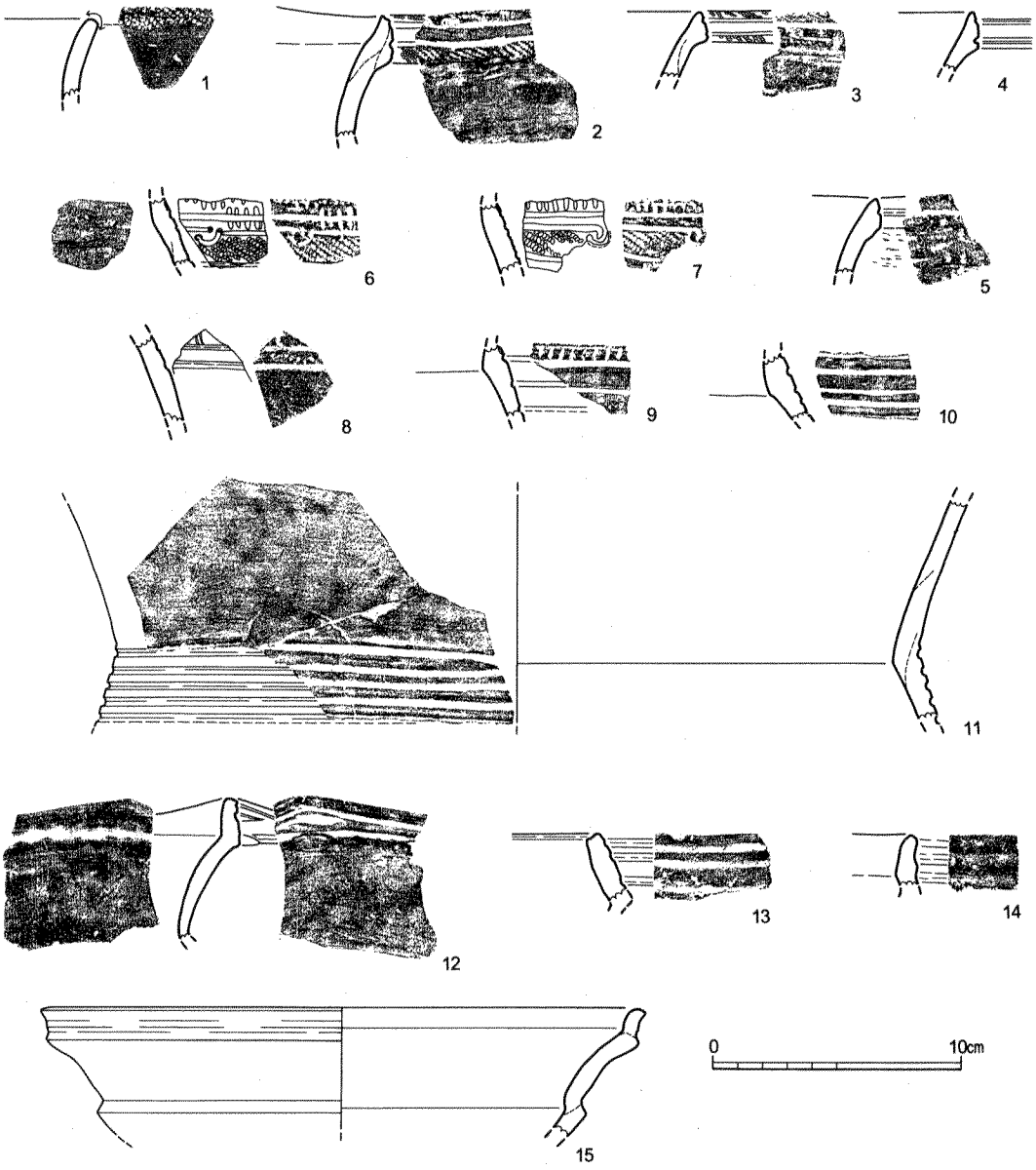


第37図　楠田遺跡包含層出土縄文早～中期土器実測図(1/3)

はP151出土品で、外面下半の区画沈線外の縄文を消している。内面は横位擦過調整で、粗砂少量、細砂かなり含む。焼成やや不良で内面は暗灰褐色、外面はこげ茶色をなす。3もP151出土品で、2と明らかに同一個体である。以上の土器は、文様構成上、2のような曲線部位の存在が気になるが、3破片から想定される器形が塞ノ神式の基本形状となることから、北部九州域での塞ノ神式系土器のバリュエイションの一つとして把えておきたい。

縄文前期土器（第37図4・5）　4は表採品で、胴部中位に細身でシャープな隆帯を持つ。内外面横位条痕だが、外面の隆帯以下は右下がり斜位の条痕となる。粗砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は煤がこびりつき黒～淡褐色となる。轟B式古段階類となろう。5は表採No.1で、胎土に滑石を含む曽畑式土器。胴部直径17cmの小ぶり類に復原でき、外面はしっかりした沈線による幾何学文で飾られる。内面は横位条痕で、焼成良好。内面は暗灰茶褐色、外面は黒褐色をなす。

縄文中期土器（第37図6）　表採No.208で、口唇部と外面に爪痕が残る指先による太い凹点を施している。内面は横位の雑なナデで、胎土に細砂粒を僅かと、滑石を幾らか含んでいる。ただ、前～中期の通有の滑石含有の土器に比べてかなり少ない含有量である。焼成不良で内面は黒褐色、外面は灰茶褐色をなす。阿高式土器の範囲に収まるものであろう。



第38図　楠田遺跡包含層出土縄文後期土器実測図(1/3)

(2)　縄文後期土器（第38図）

磨消縄文系土器群（1～11）　1はP284出土品で、肥厚せず丸っこいままの口縁にRLの縄文を施す精製深鉢である。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土に微細砂粒を含むがかなり精良である。焼成良好で内面は黒色、外面は茶褐色をなす。2は表採No.240で、断面三角形に肥厚させた口縁外面に2本の沈線を巡らせ、その上下外側にRL縄文を施した類である。明らか

に波状口縁となり、頸部外面は横ヘラ磨き、内面は丁寧な横位ナデ調整。胎土に細砂幾らか含み、焼成やや良好で内面は灰黒色、外面は灰褐色をなす。3はP62出土品で、断面三角形の口縁の外面に2条の沈線を巡らし、その上下外側にRLの縄文を施している。波状口縁となるかどうか不明。頸部外面は横ヘラ磨き、内面は丁寧なナデ調整を施す。胎土に微細砂をかなり含み、焼成やや良好で内面は黄褐色、外面は茶褐色をなす。4は、1号住居跡に混入したもので、断面三角形の口縁外面に、シャープな沈線2条を巡らせた類である。縄文はこの破片内では見られない。波状口縁となるかどうか不明。頸部外面は横位ヘラナデか。内面はナデと思われる。細砂僅かに含み、焼成やや良好で淡茶～橙色をなす。5は表採No.290で、断面三角形の口縁外面に1条の沈線を巡らすもので、波状口縁になると思われる。外面は雑な横位擦過の上をナデ、内面は丁寧な横位ナデを施す。細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は灰～白褐色、外面は褐色をなす。全体に作りは雑。6は表採No.265で、胴部外面上端に横位平行沈線、縦位の短線状刺突文、RLの縄文を配した文様帯を構成している。中位の横位沈線端部は刺突状をなし、その切れ目にJ字状の半円弧短線が施されている。内面は丁寧な横位ヘラナデ調整。胎土に細砂幾らか含み、焼成良好で内面は淡灰褐色、外面はこげ茶色をなす。7はF-え-2包含層出土品で、外面に縦位の短線、横位の平行沈線、RLの縄文等を配した文様帯を構成している。中位の横位沈線は端部を丸く曲げてアクセントを付けている。内面は横ヘラ磨きで、胎土に微細砂をかなり含む。焼成良好で内面は白褐色、外面は暗褐色をなす。8は表採No.428で、胴部上端に2条の平行沈線と、上端に半円弧の沈線がみられる。外面はヘラ磨き、内面は丁寧なナデを施す。胎土に細砂幾らか含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗褐色をなす。9はE-え-4包含層出土品で、頸部外面に縦位の短線状刺突文、以下に3条の平行沈線を施す。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土に細砂粒をかなり含む。焼成やや良好で、内面は灰褐色、外面は黒褐色をなす。10はP374出土品で、頸部外面に5条の平行沈線を施している。外面は横ヘラ磨き、内面はナデ調整。微細砂を多く含み、焼成不良で内面は白褐色、外面は暗褐色をなす。11は表採No.122で、頸部径32.5cmと大きく、外面にしっかりした平行沈線5条を巡らす。ただ、上2条の沈線は、拓本右端に見られるように、交叉する可能性がある。外面は横ヘラ磨き、内面も剝落は多いがヘラ磨きであろう。胎土に細砂粒を幾らか含み、焼成不良で内面は淡褐色、外面は暗茶褐色だが、頸部外面には煤が付着する。

凹線文系土器群（12～15）　12は表採No.221で、直立する波状口縁の外面に2条の沈線を巡らす精製浅鉢である。山形突起部直下の沈線間には横位のヘラによる削り込み部がみられ、更にその下の稜上はヘラによる凹状押さえ部分がみられる。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土精良。焼成不良で内外面とも黒褐色をなす。13は2号溝に混入していたもので、内傾する口縁外面に3条の沈線を巡らす類である。沈線はややだらっとしており一見凹線的である。内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きで、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗茶

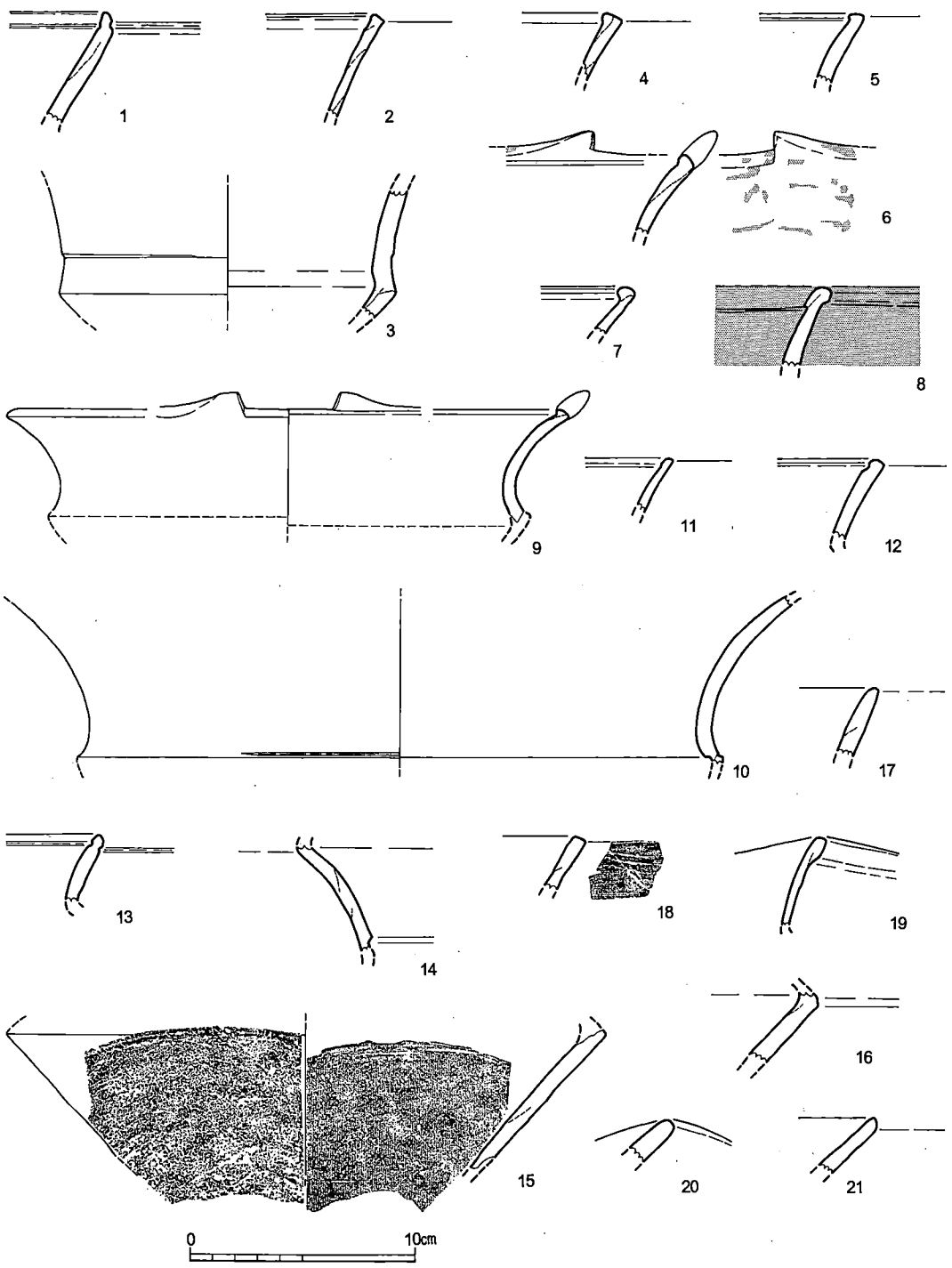
褐色をなす。14はF-え-2包含層出土品で、口縁外面に凹線2条を施す。内外面ともにヘラ磨きかと思われ、胎土に細砂粒を幾らか含む。焼成やや不良で、内外面ともに白褐色をなす。15は表採No.272で、復原口径24.6cmとなる浅鉢。口縁外面は2条の凹線を意識したように波打たせている。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土に細砂粒を幾らか含むが、かなり精良である。焼成やや良好で、内面は黒色、外面は暗茶色で部分的に煤が付着する。

以上の縄文後期土器のうち、2～11は縄文の有無等文様構成から時期幅が想定されるが、後期後葉太郎迫式期を中心としたものである。10・11のような多沈線だけの類から三万田式（狭義）の凹線文系土器群へと継がって行く。12等のように陣内式（御領式）期の黒色磨研沈線文最盛期へと連続して遺跡が営まれたことがわかる。ただし、ここでは羽状細線文系土器が見られない。北部九州ではこの種の出土が極めて限られている状況を本遺跡でも示しているものと理解できよう。

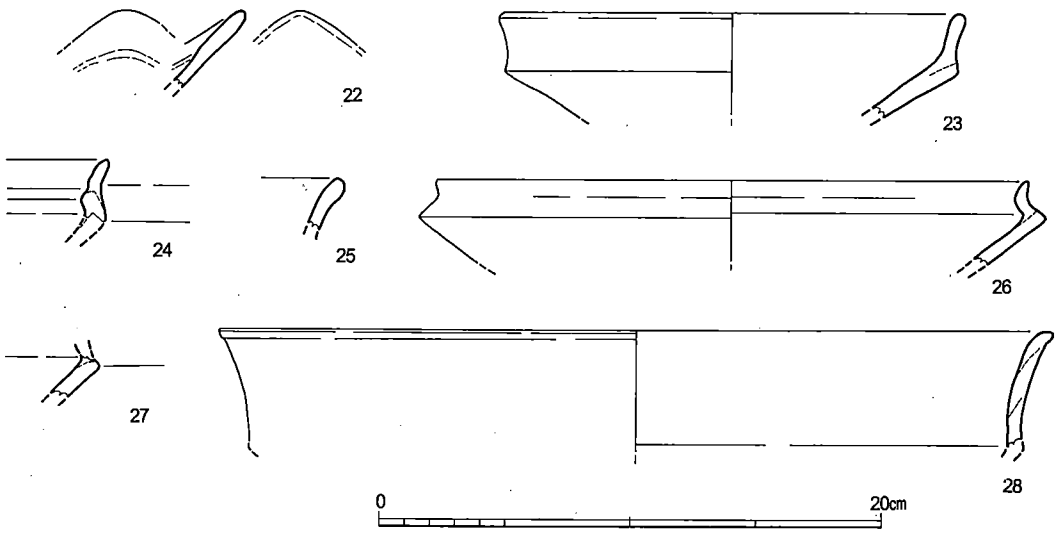
(3) 縄文晩期浅鉢（第39・40図）

ここでは、晩期初～前葉を除いた、それ以降の土器が幅広くみられるが、その主要なものは晩期後葉中～新段階の黒川式新期のものと、晩期末葉の一群とである。細かい分類毎に記述するには各出土点数が少いので、個体毎に報告しておく。尚、分類は柿原（福岡県甘木市柿原Ⅰ縄文遺跡「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　37」）及び、クリナラ（朝倉郡杷木町クリナラ遺跡「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　43」）の細分案に従う。

1は表採No.115で、口縁外面に太めの沈線、内面をヘラによる沈線的にみえる屈折部をつくる類である。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土に微細砂を幾らか含むのみ。焼成不良で内面は淡灰褐色、外面は煤が付着しており暗茶褐色をなす。晩期中葉の所産。2はP64出土品で、口縁が角張り、内端が僅かに突出気味となる。内外面横ヘラ磨きで、細砂幾らか含む。焼成やや不良で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。柿原分類の2C－1類で、晩期中葉新段階のもの。3は表採No.64で、体部屈折部上方に段をつくる類。内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きで、細砂幾らか含む。焼成不良で内面は黒色、外面は淡褐～灰黄褐色をなす。径15cmの小型類で、クリナラ分類A3類に属し、晩期中葉中段階に位置付けられよう。4～11は大きく開いて玉縁状口縁になる類で、大旨晩期後葉新段階を中心とするものである。4は表採No.300で、内端が丸く突出する。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土精良。焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は淡褐色をなす。柿原2C－2類にあたる。5はF-え-1包含層出土品で、内外面ともに横ヘラ磨きを施す。胎土精良で焼成やや不良、内外面ともに褐色をなす。柿原2C－2類。6は表採No.270で、長いリボン状突起を付ける。突起の端部側面はヘラで切った面をなす。内外面とも横ヘラ磨きで、口縁内外と外面には赤色顔料が塗布されている。胎土に細砂粒を幾らか含むが、かなり精良である。焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は褐～暗褐色をなす。外面には部分的に



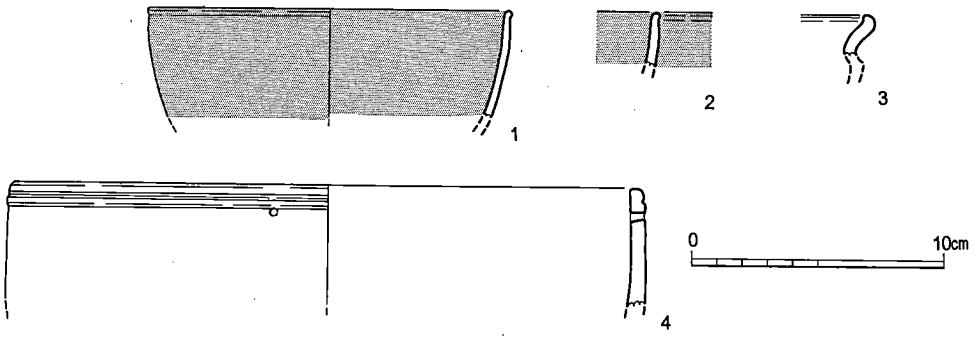
第39図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期浅鉢実測図(その１)(1/3)



第40図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期浅鉢実測図(その２)(1/3)

煤がこびりつく。柿原精製浅鉢２Ｃ－２類。７は表採No.126で、丸く玉縁状口縁につくる。口唇内端は小さな面をなす。内外面ともに横ヘラ磨きで、細砂粒を幾らか含む。焼成やや不良で、内外面ともに褐色をなす。柿原２Ｃ－２類となる。８はＰ208出土品で、口縁に大きく粘土を巻きつけて、内面は段をなす。内外面ともに暗赤色顔料を塗布している。胎土に細砂粒を幾らか含み、焼成やや良く、地の色は内面が淡褐色、外面が暗褐色をなす。柿原２Ｃ－３類で、晩期後葉新段階のもの。９は表採品で、口径25cmに復原でき、横長のリボン状突起を付ける。突起の全周での数は不明。内面は丁寧な横ヘラ磨き、外面は粗雑な横位擦過の上を横ヘラ磨き。胎土に細砂を幾らか含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗褐色をなす。柿原分類の２Ｃ－２類だが晩期後葉古段階まで上るかもしれない。頸部全体のカーブが古い様相を良く残している。10は表採No.212で、屈折稜部での直径28.6cmに復原できる。屈折稜の直上には沈線がある部分と内部分がみられる。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土に細砂粒を多く含む。焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。外面下半には部分的に煤がこびりつく。９と同じような玉縁口縁になるとすれば柿原２Ｃ－２類となり、２Ｃ類の中でも古い様相を示す異例となるが、口縁外面に沈線を持つものになるとすればクリナラＡ１・２類となり、晩期中葉中段階まで上げられよう。後者の可能性が強いと考えられる。11は表採No.147付近出土品で、小さい肥厚口縁だが内面に段をつくる類である。内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きで、胎土精良、焼成不良。内面は黒色、外面は暗褐～白褐色をなす。柿原分類の２Ｃ－３類で晩期後葉新段階のものとなろう。12はＦ-い-２包含層出土品で、口縁部は既に肥厚せずに、内面に凹状部をつくり段に近い形態とするもの。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土精良。焼成不良で内面は黒色、外面は淡褐

色をなす。玉縁類の最終形態だとすると晩期末葉の柿原２ｄ類となるが、傾きがそれ程きつくない所をみると、後期凹線文系三万田式期の精製深鉢の可能性も高い。13はＰ11出土品で、口縁内外に沈線を施す類。やや磨滅しているが内外面ともに横ヘラ磨きであろう。胎土精良で焼成不良、内外面ともに暗黄灰黒色をなす。クリナラＣ２ｂ類で晩期後葉古段階のもの。14はＦ-ろ-２包含層出土品で、丸く張る胴部の中途にシャープな段状の沈線を施す。内外面ともに横ヘラ磨きで、微細砂をかなり含む。焼成良好で内外面ともに灰黒色をなす。クリナラＣ類。15はＰ389出土品で、胴部中途で鋭角に屈折する類。内面は横ヘラ磨き、外面は横～斜位の削り状擦過。胎土に粗砂僅か、細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は灰黄色、外面は淡黄灰色をなす。クリナラＡ４～６、Ｄ類のいずれかになろう。16は表採No.147で、外面は丁寧なナデ、内面は雑な横位ヘラナデ調整。胎土に粗砂僅か、細砂かなり含む。焼成やや良好で、内面は淡褐～灰色、外面は暗褐色をなす。15と同類で晩期後葉古段階を中心とする時期。17はＰ21出土品で、内面は横位ヘラ磨き、外面は横位擦過の上をヘラ磨きしている。胎土に細砂幾らか含むが大旨精良で、焼成やや良好で内面は黒色、外面は灰黒色をなす。クリナラＤ３類となるか。18はＰ312出土品で、口唇部は平坦面をなし、内外面ともに横ヘラ磨きだが、外面に僅かに条痕が残る。胎土精良で焼成不良。内外面ともに黒褐色をなす。晩期後葉中段階のクリナラＤ３類となるか。19は表採No.167で、口縁外面を肥厚させている異例。内外面横ヘラ磨きで、胎土に細砂幾らか含むのみ。焼成良好で内面と外面肥厚部は黒色、以下外面は淡褐色。薄手で、後期末葉段階の可能性がある。20は表採No.9で、内面は丁寧なヘラ磨き、外面は丁寧なナデ調整。胎土に細砂僅か含むのみで、焼成良好で内外とも明淡茶褐色をなす。21はＰ39出土品で、内外面ともに横ヘラ磨きを施す。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で内外面ともに淡赤～灰色をなす。赤色化粧土をかけているかもしれない。クリナラ分類のＤ３類となるか。22はＦ-え-１包含層出土品で、大きく波状口縁となって開く類。内面には段を持ち、内外面とも横ヘラ磨きで、胎土精良。焼成良好で内面は淡茶～暗褐色、外面は暗褐色をなす。晩期末葉～弥生早期前葉のもの。23はＦ-い-２包含層出土品で、口径18.6cmに復原される。立ち上がる口縁内外は横位ナデ。以下体部内外面はやや粗い横ヘラ磨きが施されている。細砂幾らか含み、焼成良好で内面は黒褐色をなす。外面の稜以上はこげ茶色、以下は茶褐色をなす。晩期末葉～弥生早期のもの。24はＰ251出土品で、マリ状器形で口縁が伸びた形状をなす。内外面ともに横ヘラ磨きで、胎土に細砂粒を僅かに含むのみ。焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。晩期後葉新～末葉のクリナラＦ１ｂ類の亜種となろう。25はＰ243出土品で、内面は丁寧な横ヘラ磨き、外面も雑ではあるが横ヘラ磨きを施す。細砂粒を幾らか含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は灰褐色をなす。26は表採No.428で、復原口径23.4cmとなる。内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きで、胎土精良で焼成不良である。内面は黒色、外面は黒褐色をなす。クリナラ分類のＤ３類だが、晩期後葉新～末葉のものとなろう。27はＰ406出土品で、内面は横位ナデ調整と思わ



第41図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期マリ等実測図(1/3)

れ、外面はヘラ磨きかと推定される。胎土に細砂粒を僅かに含み、焼成やや不良で、内外面ともに淡褐色をなす。28は表採No.64で、口径33.2cmに復原される。口唇部は明らかに外方へ折り曲げられており、内外面ともに横位ヘラ磨きが施されている。胎土に微細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は黒色、外面は灰白色をなす。晩期末葉のものである。

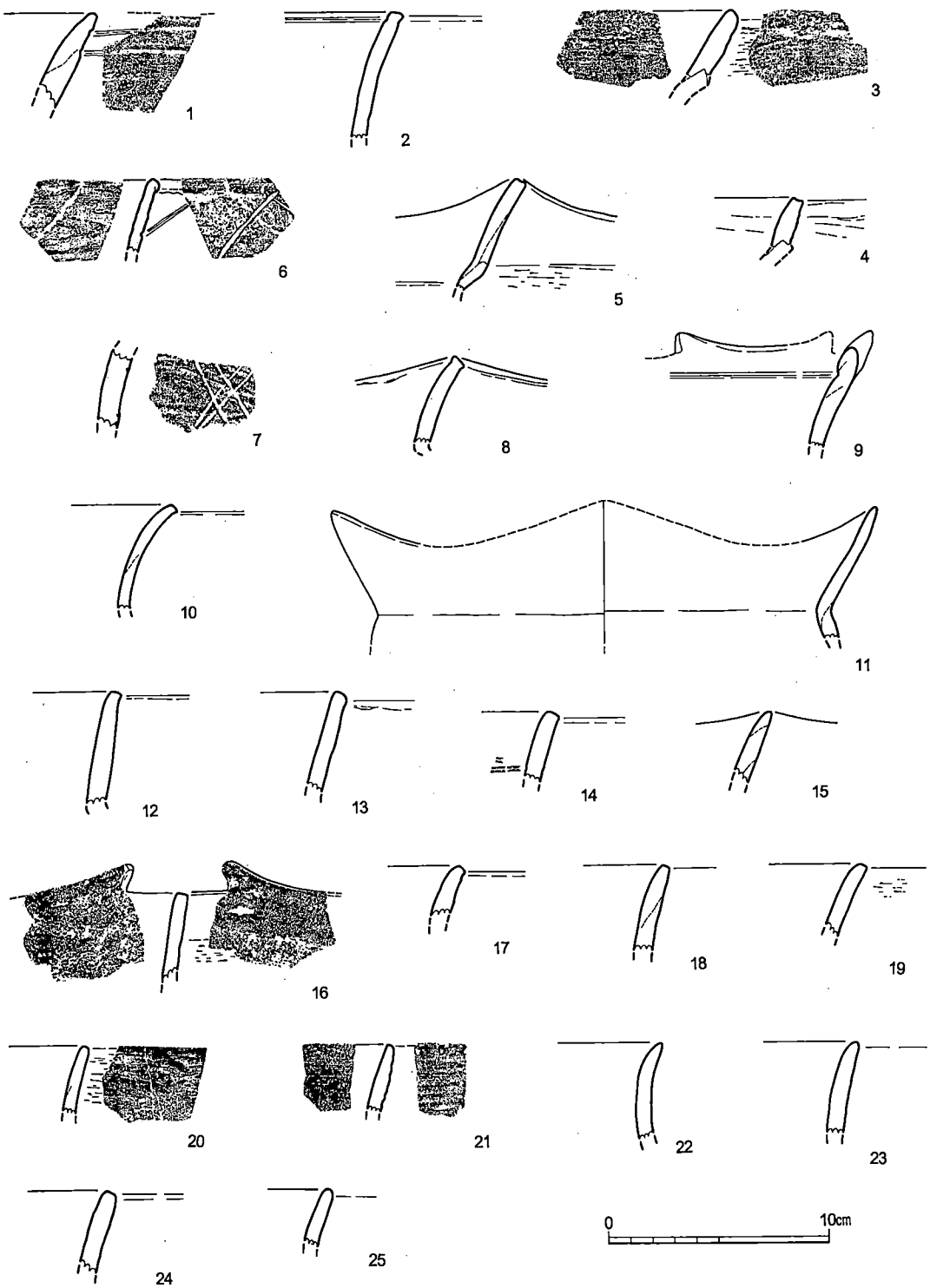
(4)　縄文晩期マリ（第41図）

1はP175出土品で、口径14.4cmに復原できる。口縁が小さな玉縁状をなし、内外面ともに横ヘラ磨きの上に赤茶色ベンガラを塗布している。胎土精良で焼成良好である。地色は淡褐色をなす。薄手精製品で、晩期末葉～弥生早期前葉のもの。2は表採No.147付近出土品で、1と酷似するもの。内外面に赤茶色のベンガラを塗布しており、胎土精良。焼成良好で地は淡黄茶色をなす。3は表採No.417で、内外面横ヘラ磨きを施す。胎土精良で焼成不良。内外面ともに淡褐色をなす。晩期中葉中～新段階のもので、クリナラ分類マリB1類となる。4は同一個体のものが4破片あり、表採No.147付近出土、土壙23、表採No.153の取り上げ分である。外面上端に低い凸帯状肥厚部2条を巡らす。この直下に焼成前の細い穿孔が1ケ所のみ残っている。2個ずつの対となり紐かけに用いられたものか。細砂粒を僅かに含むがかなり胎土精良である。焼成やや不良で、内面は黒色、外面は暗褐～暗灰褐色をなす。異形の精製品で、晩期後葉中段階前後のものであろう。

(5)　縄文晩期精製深鉢（第42図）

包含層等出土の晩期精製深鉢は、凹線文系三万田式系統の後期に上るかと思われるものから、晩期初・前葉のものを除いて、以後中葉～末葉まで各時期にわたって出土している。中でも中葉新段階・後葉古段階・末葉のものが量的にも目立つ。ここでは改めて細分類する程の出土量も無いので、柿原Ⅰ縄文遺跡・クリナラ遺跡での成果を基にして、各個別毎に報告しておきたい。

1はP407出土品で、外面に2本の沈線を巡らせている異例。上の沈線がやや斜めにも見える事から、ひょっとしたら波状口縁になるかもしれない。内外面とも横位ナデで、胎土に細砂多く含み、焼成良好で内外面ともに淡褐色をなす。後期凹線文系三万田式となるか。2は表採No.294で、内面に沈線を巡らせ、口唇上面は平坦面をなす。内外面ともに横ヘラ磨きだが凹凸が多い。細砂多く含み、焼成やや良好で内面は茶褐色、外面は褐色をなす。後期凹線文系三万田式～御領式の可能性が高い。3はP198出土品で、内面は横位擦過の上を横ナデ、外面は雑な横位擦過調整のまま。粗・細砂かなり含み、焼成やや不良で内外面ともに黒褐色をなす。クリナラ深鉢C2類で、晩期中葉新段階のもの。4は表採No.70で、口唇上面は凹状となる。内外面ともに雑な横位ナデで凹凸がある。粗砂幾らか含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面は黒褐～淡褐色をなす。3と同じく深鉢C2類。5はP127出土品で、波状口縁類。図示部位は最頂部ではないが、かなり近い部位である。内面下端の一部に沈線状のものがあり、段が付くのかもしれない。外面下半は横位擦過で、他内外面は横ヘラ磨き。細砂粒を幾らか含み、焼成やや不良。内外面ともに茶褐色で、外面下端のみ暗灰褐色をなす。クリナラ深鉢C2類で晩期中葉新段階のもの。6はP132出土品で、口縁を外側に丸く折り曲げて、外面に斜位沈線を鋸歯状に施した半精製品である。内面は雑な指先による横位ナデで凹凸が多い。外面は未調整風の雑な横位擦過～ナデ。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で内面は暗灰褐色、外面は煤がこびりついて黒褐色をなす。7はF-え-2包含層出土品で、外面に横位条痕の上から斜格子状沈線文を施す類。内面は横位擦過の上を横ナデ。胎土に粗・細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。以上の6・7のように深鉢頸部外面を沈線文で飾るのは、御領系深鉢の小型品によく見られ、晩期後葉古段階まで散見する。本遺跡出土土器の状況からみて、これらは晩期中葉新までのものかと思われる。8はP54出土品で、口唇部付近がシャープな波状口縁類。内面は横位ヘラナデ状で、下端には擦過痕が残る。外面は横位ヘラ磨き。粗・細砂粒を僅かに含み、焼成やや良好で内外面ともに淡褐色をなす。晩期中葉新段階か。9は表採No.162で、内面のみに沈線を持つ玉縁状口縁に横長のリボン状突起を付ける。内外面ともに横ヘラ磨きで、かなり胎土精良。焼成不良で内外面ともに淡褐～暗褐色をなす。晩期後葉新段階となろう。10は表採No.87で、薄手で長く外反して開く類。内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きで、胎土に細砂幾らか含む。焼成やや良好で内面は暗灰褐色、外面は淡褐～暗褐色をなす。クリナラ深鉢E2類で、晩期後葉古段階に比定できる。11は表採No.303で、小片のため突起部の正確な高さは不明であるが、口縁が内反りとなる波状口縁類。内外面ともに丁寧なナデかと思われる。細砂幾らか含み、焼成良好で内面は黄褐色、外面は淡黄褐色をなす。クリナラD3類で、晩期中葉新段階。12は3号溝混入品で、口唇外端が外方へ僅かに突出し、上面はわりとしっかりした面をなす。内面は横ヘラ磨き、外面は丁寧なナデ調整を施す。胎土に粗砂幾らか、細砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は黒色、外面は灰茶褐色をなす。晩期中



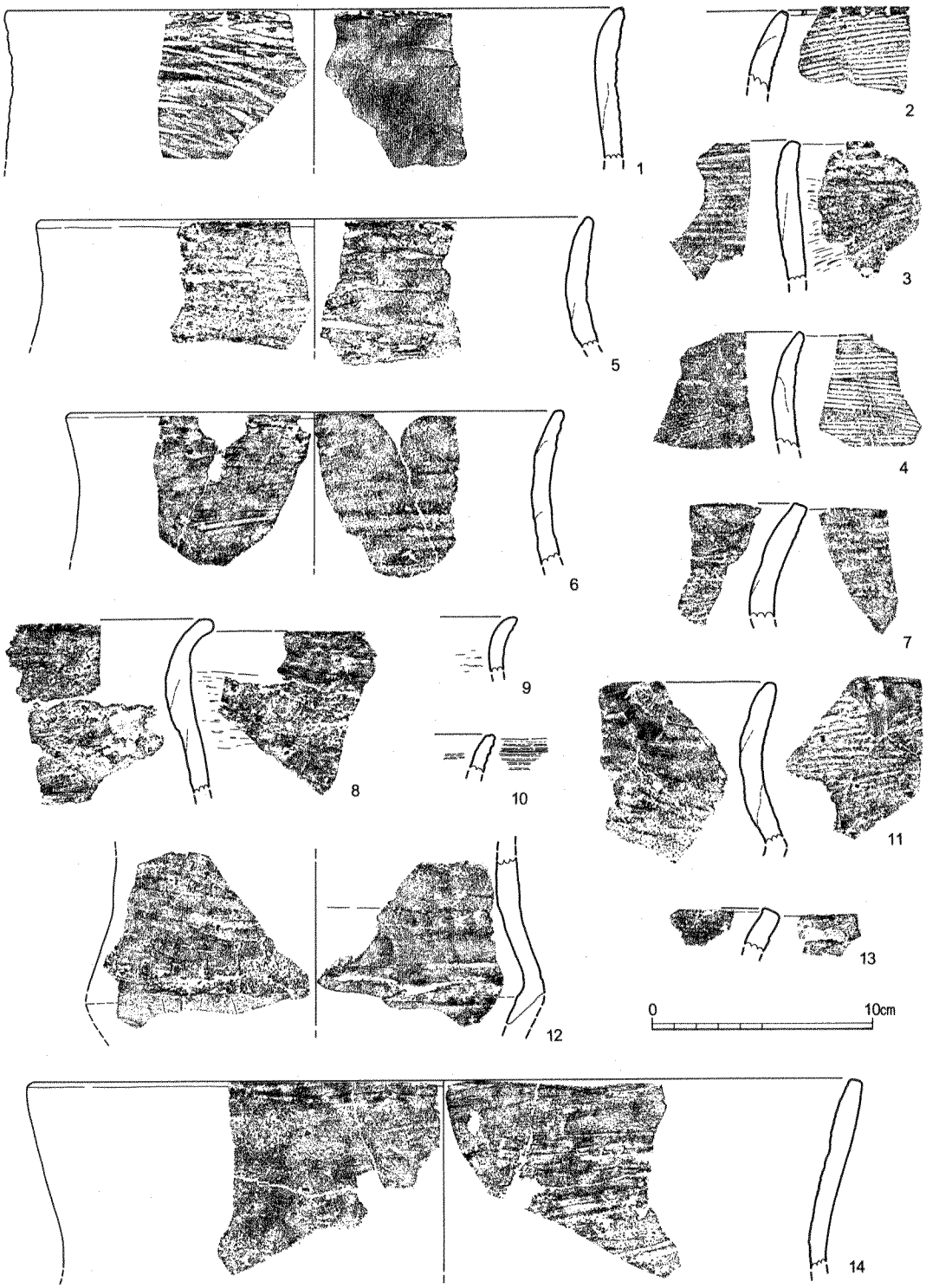
第42図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期精製深鉢実測図(1/3)

葉新段階前後か。13は2号溝出土品で、内外面ともに丁寧なナデ調整。細砂幾らか含み、焼成やや不良で内外面ともに淡褐色をなす。14は表採No.428で、口唇外端が僅かに突出するくせを持つ。内面は横位条痕の上を丁寧な横ナデ、外面は横位擦過の上を横位ナデ。細砂幾らか含み、焼成不良で内外面ともに黒色をなす。深鉢E2～E3類で晩期後葉のものであろう。15はP115出土品で、尖る口縁が波状となるもので、内外面ともに横ヘラ磨き。粗砂少量、細砂かなり含み、焼成やや不良で内外面ともに暗灰黄褐色をなす。D3類の晩期中葉新段階となろう。16はP49出土品で、片削ぎリボン状突起を持つ半精製深鉢。内面は横位擦過の上を雑な横位ヘラナデ、外面上半は横位ヘラナデ、下半は雑な横位擦過。胎土に細砂多く含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は暗黄茶褐色をなす。晩期後葉新段階のもの。17はP132出土品で、口唇部はしっかりした面をなす。外面上半は雑な横位ナデだが、他内外面は丁寧な横ナデ調整。胎土精良で焼成良好。内外面ともに肌色をなす。深鉢E2類で晩期後葉のもの。18はP92出土品で口唇部は面取り状をなす。内外面ともに横位ヘラ磨きで、胎土に微細砂を多く含む。焼成良好で内面は黒色、外面は灰白褐色をなす。深鉢E3類となるか。19はP393出土品で、口唇上面は面をなす。外面上半には横位擦過痕が残るが、他内外面は丁寧なナデ調整。細砂粒をかなり含み、焼成不良で内面は灰褐色、外面は淡褐色をなす。深鉢E2類か。20はP94出土品で、内面は横ヘラ磨き、外面は横位擦過調整。細砂粒をかなり含み、焼成良好で外面下半は白色、他内外面は黒色をなす。晩期後葉、深鉢E3類となるか。21はP49出土品で、内面は横位ナデ、外面は横位条痕。細砂粒をかなり含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面は黄褐色をなす。22はP374出土品で、内外面ともに丁寧な横ナデ調整。胎土に粗砂を僅かに含むのみで、焼成やや良好。内面は黒～灰褐色、外面は暗灰褐色をなす。精製小型品で深鉢E2類。23は表採No.194で、内外面ともに丁寧な横ヘラ磨きだが、やや凹凸がある。細砂粒を多く含み、焼成不良で内外面ともに黒色をなす。深鉢E2類となろう。24は表採No.125付近出土品で、内外面ともに横ヘラ磨きでやや凹凸がある。粗・細砂幾らか含み、焼成良好で内外面ともに暗茶色をなす。25はP406出土品で、内外面ともに丁寧にナデており、胎土に粗砂僅か、細砂多く含む。焼成良好で内面は黒～暗褐色、外面は灰茶褐色をなす。以上の深鉢口縁片は大旨、クリナラ深鉢E2～E3類のもので、晩期後葉を中心としたものである。

(6) 縄文晩期粗製・定型深鉢（第43～45図）

ここでは、深鉢形土器のうち、半精製の肩の張る定型深鉢類（クリナラ分類の深鉢E類、粗製深鉢C類）や、粗製土器のうち口縁が外反するものや内湾するもの等の各種を報告しておきたい。後述する刻目土器群との重要な関連も考えられるので、細分類しておく。分類名はクリナラ遺跡での呼称のままに従う。

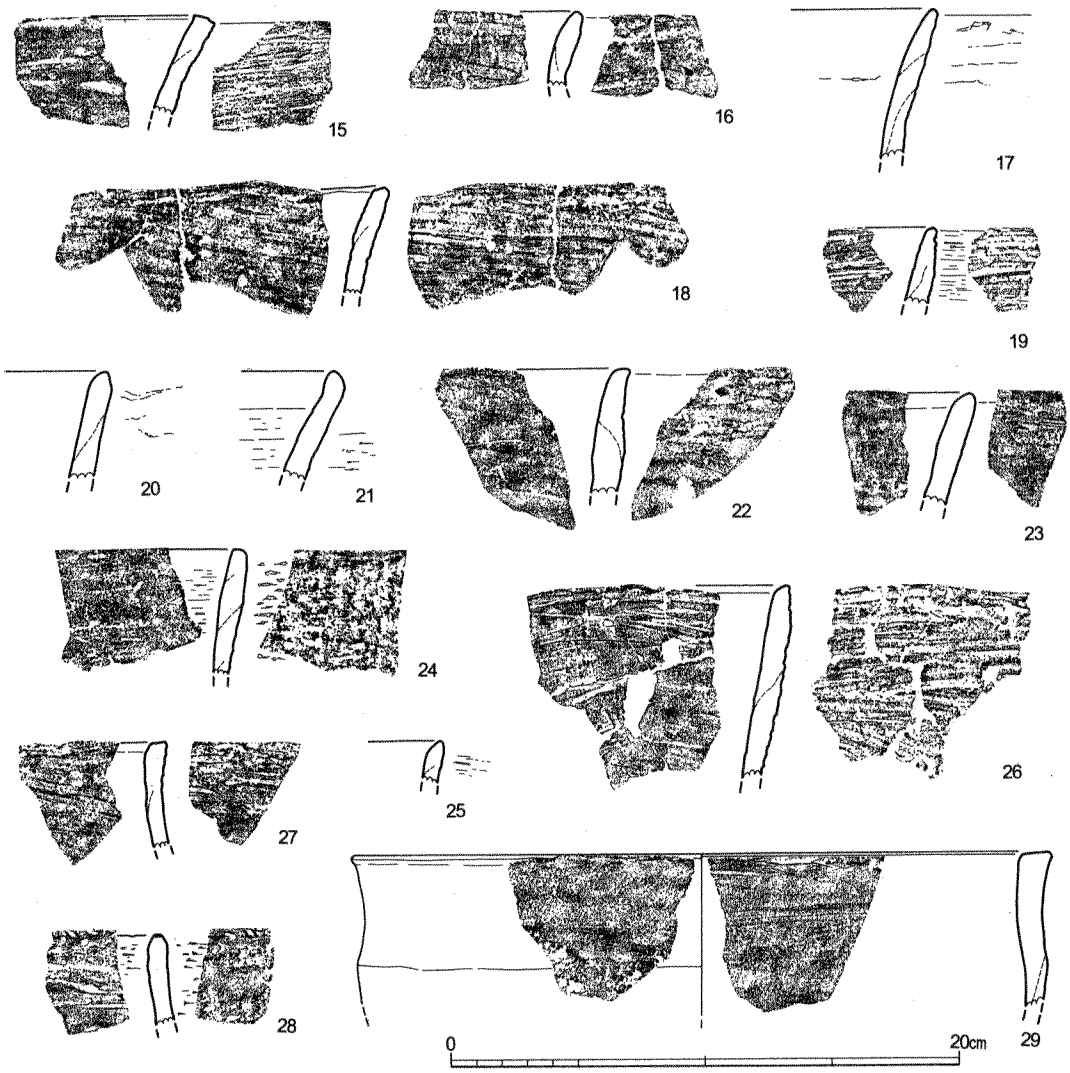
後期粗製深鉢（1～4） 器形的には粗製深鉢B類に入れられるが、細部で異るため、別に



第43図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期粗製・定型深鉢実測図（その１）(1/3)

分類した。ゆるやかに張る胴部から僅かに外傾気味に開く口縁をもつもので、口縁部が細くなり丁寧なアナダラ条痕を施したり、口唇端に小さな刻目を持つ等、かなり(半)精製的な類である。胴部の稜は持たないと思われ、縄文後期後半段階に属すると考えられる。1は表採No.274で、口径28cmに復原され、条痕工具端による連点状圧痕が意識的に施されている。内面は丁寧なナデの上を横位ヘラナデ調整されており平滑である。外面は横位の雑な条痕の上をヘラナデ。胎土に粗砂少量、細砂多く含む。焼成やや良好で内面は暗灰褐～灰黒色、外面は煤がこびりつき黒褐色をなす。半精製品。2はP61出土品で、口唇部に貝殻腹縁による小さく浅い刻目を施す。外面は丁寧な横位アナダラ条痕、内面は丁寧な横位ナデ。細砂幾らか含み、焼成不良で内面は白褐色、外面は淡灰黄色をなす。精製品。3は表採No.147付近出土品で、内面は横位条痕、外面は未調整風の雑な横位擦過調整のまま。粗・細砂かなり含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面は淡褐～淡茶色をなす。4はP79出土品で、外面は横位条痕、内面は丁寧な横位ナデだが下半には横位条痕がかなり残る。細砂かなり含み、焼成不良で内外面ともに白褐色をなす。かなり精製品的。

深鉢E類（5～14・29）　御領式深鉢の系統を残す形態のもので、胴部中位で稜をつくり反転して口頸部が長く外反して立ち上がる類。晩期後葉中段階のものが多いが、後葉新段階の肩部径の方が口径よりも大きくなる粗製深鉢C1類と区別がつかないものもみられる。以下個別に検討を加えたい。5は表採No.257で、口径25.4cmに復原される。内面は雑な横位ヘラナデ、外面は横位条痕の上を雑な横位ナデ。粗・細砂多く含み、焼成良好で内面は黒色、外面は煤がこびりついて暗茶褐色をなす。粗製品で深鉢E3類、晩期後葉中～新段階となろう。6はF-え-2包含層出土品で、口径22.8cmに復原できる。内面は横位ヘラナデで凹凸多く、外面は横位条痕を施す。胎土に粗・細砂を多く含み、焼成良好で内面は淡茶褐色、外面は灰茶褐色をなす。頸部の反り具合からみて深鉢E3類の晩期後葉中段階のものとみられるが、粗製深鉢C1類の肩の張る類にも近づいている。7はP127出土品で、外面は横位条痕の上をナデ消し、内面上半は横位ナデ、下半は横位擦過。胎土に細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は暗褐色、外面は淡灰褐色をなす。深鉢E2類で晩期後葉古段階のもの。8はP142出土品で、大口径で頸部が長く伸びる類となろう。内面は雑な横位ナデで凹凸が多い。外面は上端と下端が横位ナデ、中位は横位擦過のままである。粗・細砂を多く含み、焼成良好で内面は黒色、外面は淡茶褐色をなす。後期末～晩期初葉の御領式系大型深鉢であろう。9はP304出土品で、内外面ともに横位擦過の上をナデている。細砂粒をかなり含み、焼成良好で内外面ともに淡黄褐色をなす。小ぶりの精製品で、晩期後葉代のものであろう。10は表採No.231で、外面は横位アナダラ条痕、内面は条痕の上を雑にナデている。粗・細砂粒を多く含み、焼成不良で内外面ともに黒色をなす。半粗製品。11は表採No.185で、内面は横位条痕の上を雑なナデで凹凸を多く残す。外面上半は横位条痕、下半は条痕の上を横位ナデ。粗・細砂粒を多く含み、焼成良好で内

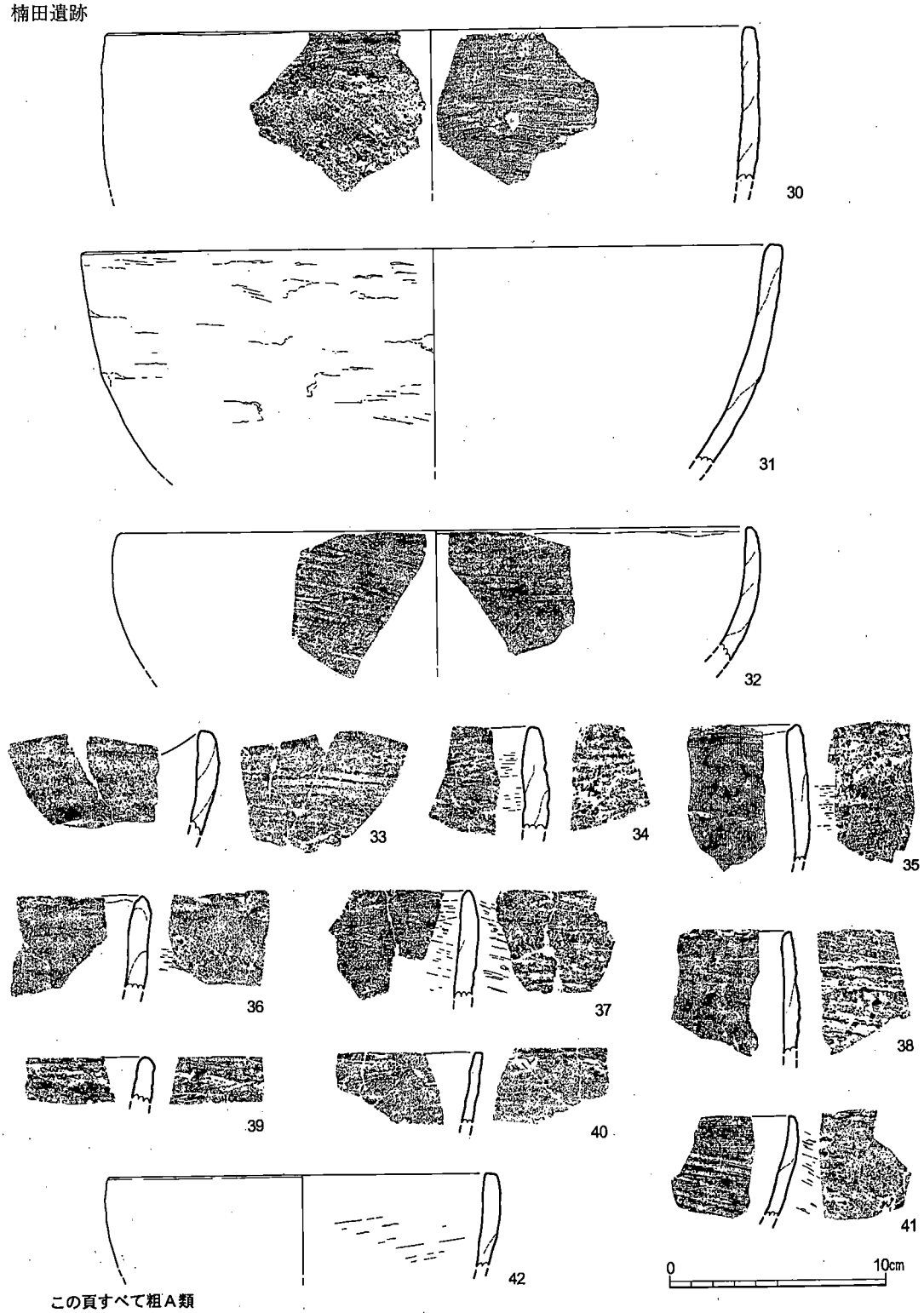


第44図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期粗製・定型深鉢実測図（その２）(1/3)

面は暗灰褐色、外面は黒色をなす。かなり粗製だが、器形は深鉢Ｅ３類で、晩期後葉新段階のものであろう。12は表採No.127で、胴部径21cm程となる小ぶり品。内面は雑な横位ヘラナデ、外面は凹凸が多い雑なヘラナデ。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成良好で内面は黒褐～茶色、外面は暗茶褐色をなす。半精製品で、晩期中葉以前となる可能性が強い。14はＰ98出土品で、口径38cmに復原できる。内面は横位条痕の上を上半では横位ナデ、外面は雑な横位ナデを施す。粗・細砂粒を多く含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は暗黄茶色をなす。深鉢Ｅ２類で後葉中段階のもの。29は表採No.95で、口径27.6cmに復原できる。胴部外面の稜から、殆ど反り

の無い頸部となる。内面は横位条痕の上を丁寧な横位ナデ、外面の稜から上は横位ナデでやや凹凸がある。下半は雑な横位擦過。胎土に粗・細砂多く含む。焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗褐色をなす。口唇部が厚く平坦面をなし、深鉢Ｅ３類ではあるが、その最終形態を示しており、晩期末葉に置ける。

粗製深鉢Ｂ２類（15～26）　口縁が外反して開く粗製深鉢をＢ類としたが、Ｂ１類は頸部で強く屈曲反転して開く類で本遺跡からの出土は無い。この項で報告するものの中には、小片のため深鉢Ｅ類と区別つかないものも見られる。15は表採No.61で、内面は丁寧な横位ナデ、外面は横位条痕を施す。胎土に粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成不良で内面は黒色、外面は白褐色をなす。深鉢Ｅ２類の晩期後葉古段階のものとなる可能性も強い。16は表採No.63で、内面は雑な横位ヘラナデ、外面は横位ナデを施す。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面は暗褐色をなす。半粗製品で、深鉢Ｄ３類の系統となるかもしれない。17はＦ-い-４包含層出土品で、内面は丁寧なナデ、外面上半は横位ヘラナデ、下半はナデ。外面は凹凸が多い。胎土に粗・細砂多く含み、焼成不良で内面は茶～淡褐色、外面は淡灰茶色をなす。半精製品で、深鉢Ｅ類の可能性もある。18は表採No.130で、内外面ともに横位条痕を施す。粗・細砂粒を多く含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面の上半は黒色、下半は茶褐色をなす。やや薄手だが粗製深鉢Ｂ２類となる。19はＰ361出土品で、内面は横位条痕の上を横ナデ、外面は粗い横位擦過を施す。粗・細砂をかなり含み、焼成良好で内外面ともに茶褐色をなす。粗製品。20はＰ139出土品で、内外面ともナデているが外面は凹凸が多い。胎土に粗砂少量、細砂多く含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は灰茶褐色をなす。粗製品。21は表採No.195付近出土品で、突起部に近い破片かもしれない。口縁内外面横ナデで以下内外面ともに横位擦過。粗・細砂をかなり含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は黒～灰茶褐色をなす。(半)粗製品で深鉢Ｅ２類の可能性もある。22はＦ-え-２包含層出土品で内面はやや雑な横位ナデで幾らか凹凸がある。外面は極めて雑な横位指ナデ調整。粗・細砂かなり含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は暗茶～黒褐色をなす。粗製品。23は表採No.147付近出土品で、内面上半は横位ナデ、下半は横位擦過の上をナデ。外面は横位擦過の上を横位ナデ或いはヘラナデ。粗・細砂を幾らか含み、焼成やや不良で、口縁内外部は黒褐色、他内外面は淡茶色をなす。半粗製品で、定型の深鉢Ｄ・Ｅとなるかもしれない。24は表採No.35で、内面は横位擦過、外面は極めて粗い未調整風横位擦過のままとなる。粗砂多く含み、焼成やや不良で内面から口唇部外面は黒色、他外面は淡褐色をなす。外面には部分的に煤がこびりつく。典型的粗製深鉢Ｂ２類。25はＰ133出土品で、内面は雑な横位ナデ、外面は雑な横位擦過。細砂をかなり含み、焼成不良で内面は白褐色、外面は黒褐色をなす。26は表採No.187と188が接合したもので、内面は横位ヘラナデ、外面は雑な横位条痕で、下半は同じ調整具だが横位擦過状となっている。胎土に粗砂幾らか含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は茶褐～暗褐色となる。大口径の粗製品である。



第45図　楠田遺跡包含層出土縄文晩期粗製・定型深鉢実測図(その３)(1/3)

粗製深鉢Ｃ１類（27・28）　口頸部が内傾し、肩が張る器形のもので、刻目凸帯土器へと継がる重要な類である。27は表採№192で、内外面とも横位条痕を施すが、外面下半は横ナデで消している。粗・細砂粒を多く含み、焼成不良で内面は暗灰褐色、外面は黒色をなす。28はＥ-え-４包含層出土品で、外面と内面上半は横位擦過、内面下半は雑なヘラナデを施す。口唇部には小さく浅い斜位の押圧刻目が間隔をおいて施されているが、もちろん後項で報告する刻目土器群とは様相が全く異る。胎土に粗砂少量、細砂を多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面は灰黄褐～黒色をなす。

粗製深鉢Ａ類（30～42）　内湾する口頸部を持つものをＡ類としたが、体部の湾曲が強く浅い器形となる鉢状のものや、小ぶりでマリに近いもの等もあり、将来区分せねばなるまい。現状では器形が単純なだけに、細かい編年は困難であるが、大旨晩期中葉新～後葉代のものが大半であろうと推定できる。30は表採品で、口径30.2cmに復原できる。口縁が直立気味に伸びる類で、内面は横位条痕、外面は未調整風の雑な横～斜位の擦過のまま。口唇内外面は横ナデ。胎土に粗・細砂をかなり含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面はほぼ全面に煤がこびりつき黒褐色をなす。典型的粗製品である。31は３号溝内の№３と№４が接合したもので、口径32.6cmの大ぶりのボール状鉢形土器となる。口唇上面は平坦面をなし、内面は丁寧なナデで平滑。外面は未調整風の雑な横位擦過状となる。胎土に粗・細砂をかなり含み、焼成やや良好で内面は茶褐～暗褐色、外面上半は煤がこびりついて黒褐色、下半は灰褐色をなす。半粗製の明らかな煮沸容器。32は表採№69で、口径29cmの内湾する浅めのボール状器形となる。内外面ともに横位条痕を施し、口唇内外面のみ横ナデ仕上げ。胎土に粗石英・細砂粒を幾らか含み、焼成良好で内外面ともに黒～暗褐色をなす。外面下半には煤がこびりつく。33はＦ-い-２包含層出土品で、低い突起部を持つ類。内面は横位ナデ、外面はアナダラ条痕を施す。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成不良で内外面ともに黒褐色をなす。(半)粗製品。34は表採№129で、内面は横位擦過、外面は横位条痕の上を雑な横位擦過。粗砂かなり、細砂多く含み、焼成やや良好で内面は暗褐色、外面は茶褐色をなす。典型的粗製品。35は表採№283で、内面は横ヘラ磨き、外面上半は極めて雑な横位の未調整風ナデ、下半は横位擦過を施す。粗・細砂粒を幾らか含み、焼成良好で内面は黒色、外面は暗褐～黒褐色をなす。半精製品でボール状器形となるか。36は表採№129で、内面はやや雑な横位ナデ、外面は上半が横位ナデ、下半は横位擦過。胎土に粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成やや不良で内外面ともに暗茶褐色をなす。粗製品。37は表採№256で、内外面ともに横位擦過調整だが、外面は雑で凹凸が多い。粗・細砂多く含み、焼成やや良好で内面は淡茶色、外面は暗茶褐色をなす。典型的粗製品。38は表採№74で、内面は横位ナデ、外面は雑な未調整風横位擦過。粗砂僅か含み、焼成やや不良で内面から外面上端は黒色、以下外面は淡褐色をなす。やや薄手の粗製品。39はＰ133出土品で、内外面ともに雑な横位ヘラナデ調整の半精製品。粗砂幾らか、細砂かなり含む。焼成やや不良で内外面ともに黒褐色を

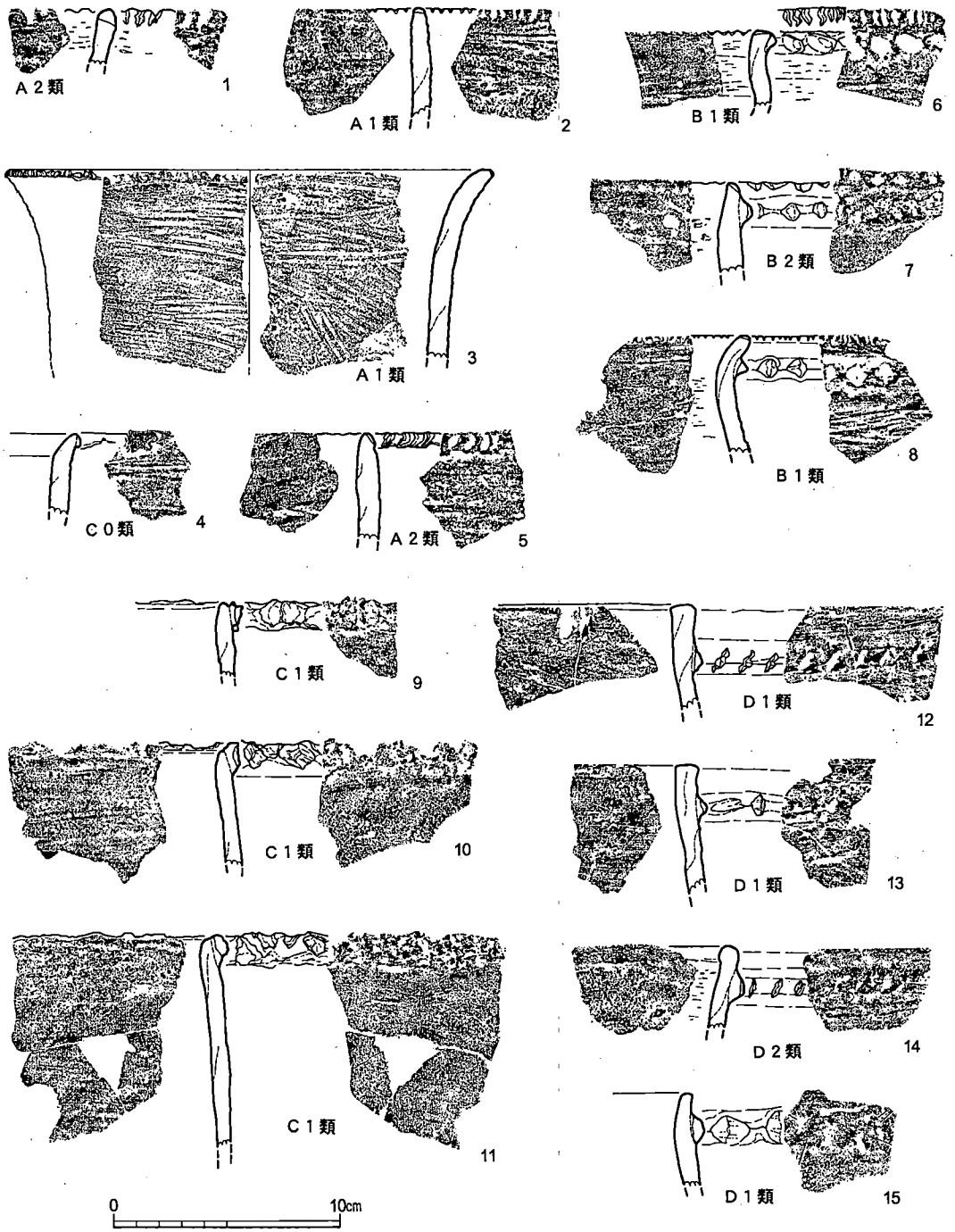
なす。40はP57出土品で、内外面ともに横位擦過の上を横ナデ調整。細砂を幾らか含み、焼成良好で内面は橙褐色、外面は煤がこびりつき黒色。作りは粗雑だが薄手の異類で、小ぶりの鉢状品となるか。41はP236出土品で、内面は横位条痕の上を横ナデ、外面は雑な横位擦過調整のまま。粗・細砂を幾らか含み、焼成やや良好で茶褐色をなす。薄手の鉢状類で作りは雑。42は表採№178で、口径18cmの小ぶり精製鉢状品。内面は横位擦過の上をナデ、外面はやや雑な横ヘラ磨き。細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は淡褐色、外面は黒～暗褐色をなす。

(7) 刻目・刻目凸帯土器（第46～48図）

ここでは、弥生早期に盛行する刻目凸帯文土器とそれに先行する祖型群をとり上げる。よって、時期幅は縄文後期、晩期後葉～末葉、弥生早期に及ぶ。かつて柿原Ⅰ縄文遺跡報告（福岡県教育委員会「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告37」1995）の中で、刻目凸帯文土器を1～4類に細分して検討したが、今回のこの楠田遺跡出土例とは分類がうまく合致しないので、ここでは新たに独自の分類を行うこととした。以下大きくA～F類に大別した。

A類（1～3・5） 口唇部刻目深鉢形土器で、時期的には後期のものを含んでおり、直接的に刻目凸帯土器発生に関わるものではない3のような個体も入れている。刻目の施し方の相違により2種に細分した。**A1類**（2・3）は口唇端に小さく、浅く密に押圧した刻目のもので、縄文後期の細々とした伝統の中に残っていた類である。2はF-え-3包含層出土品で、口唇面に貝殻腹縁による密な刻目を施す。内外面ともに横位アナダラ条痕を施し、胎土に粗・細砂を多く含む。焼成不良で内面は黒色、外面は茶褐～暗褐色をなす。やや内湾気味に立ち上がる粗製深鉢A類に刻目を施した形態となる。3は表採№285で、復原口径21.6cm。張らない胴部からゆるやかに開く口縁を持ち、口唇端に貝殻腹縁押圧の小さく浅い刻目様施文を密に巡らしている。内外面ともにアナダラ条痕で、胎土に細砂をかなり含む。焼成やや良好で内面は暗灰茶色、外面は煤がこびりつき暗茶褐色をなす。刻目施文法は柿原粗製深鉢3b類と酷似するが、器形自体が全く異り、縄文後期後半のものと考える。**A2類**（1・5）は口唇部に深くしっかりと、他のB～E類と同種の大きめの刻目を施したもの。1はF-え-2包含層出土品で、貝殻腹縁による深く雑な刻目を施す。内外面ともに雑な横位擦過で、胎土に粗砂幾らか含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。粗製品である。5は表採№255で、口唇部の外角に貝殻腹縁による斜めに突っ込んだ刻目を施す。内面は横位ナデ、外面は横位条痕の上をナデており、凹凸が多く未調整風。胎土に粗・細砂を多く含み、焼成良好で内面は淡茶色、外面は煤が付着して、黒茶褐色をなす。粗製深鉢A類の器形をなし、刻目施文部位等から後述のC類へと継がる類である。

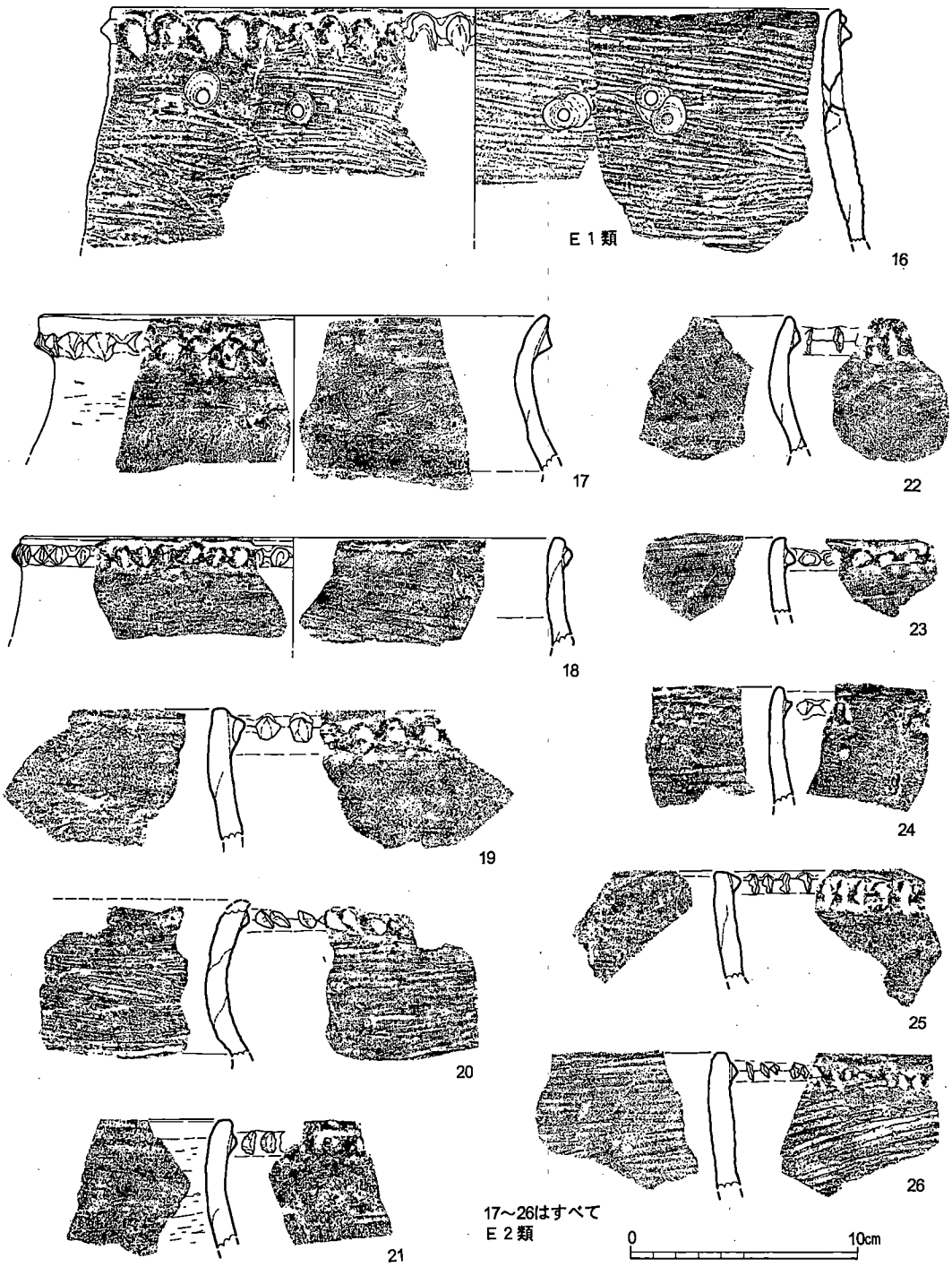
B2類（6～8）は口唇上面と凸帯の双方に刻目が施された類で、柿原Ⅰ縄文遺跡では出土例が無く、北部九州域では基本的に系譜の認められない類で、西瀬戸内地方の影響のものと考



第46図　楠田遺跡包含層出土刻目・刻目凸帯土器実測図（その１）(1/3)

えられる。**B１類**（６・８）は、口唇上面に細く密な刻目が施される類で、上述のＡ１類や、柿原粗製深鉢３ｂ類と共通する刻目施文法のものである。６は表採№65で、口唇部の平坦面に貝殻腹縁による密な刻目を施し、口唇外端に接して貼り付けられた凸帯に深く太い凹点状の異類刻目を施している。この工具は不明。内面は丁寧な横位擦過、外面は凹凸があり、やや雑な横位擦過調整。胎土に粗・細砂を幾らか含み、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は灰褐色をなす。器形が他の刻目凸帯土器のように肩が張るものではなく、胴部がやや丸くふくらみを持つ程度のものとなりそうで、古相を持つ異類である。８はＰ128出土品で、口唇上面に細く密な刻目があり、上からみると僅かに湾曲がみられ、凸帯上の刻目とともに貝殻腹縁によるものと思われる。内面上端から外面凸帯下までは横ナデ、内面下半は横位擦過、外面下半は横位条痕。胎土に粗・細砂を多く含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。**B２類**（７）は、口唇部刻目が外角に通有の刻目凸帯土器と同じように施される類で、施文部位はＡ２類に、施文法はＥ・Ｆ類に共通するものである。７は表採№165付近出土品で、口唇外端の刻目はヘラによるシャープなものである。凸帯上の刻目は雑な浅めのグチャグチャなもので工具不明。内面は雑な横位擦過の上をナデ、外面は横位ナデ。粗・細砂多く含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。

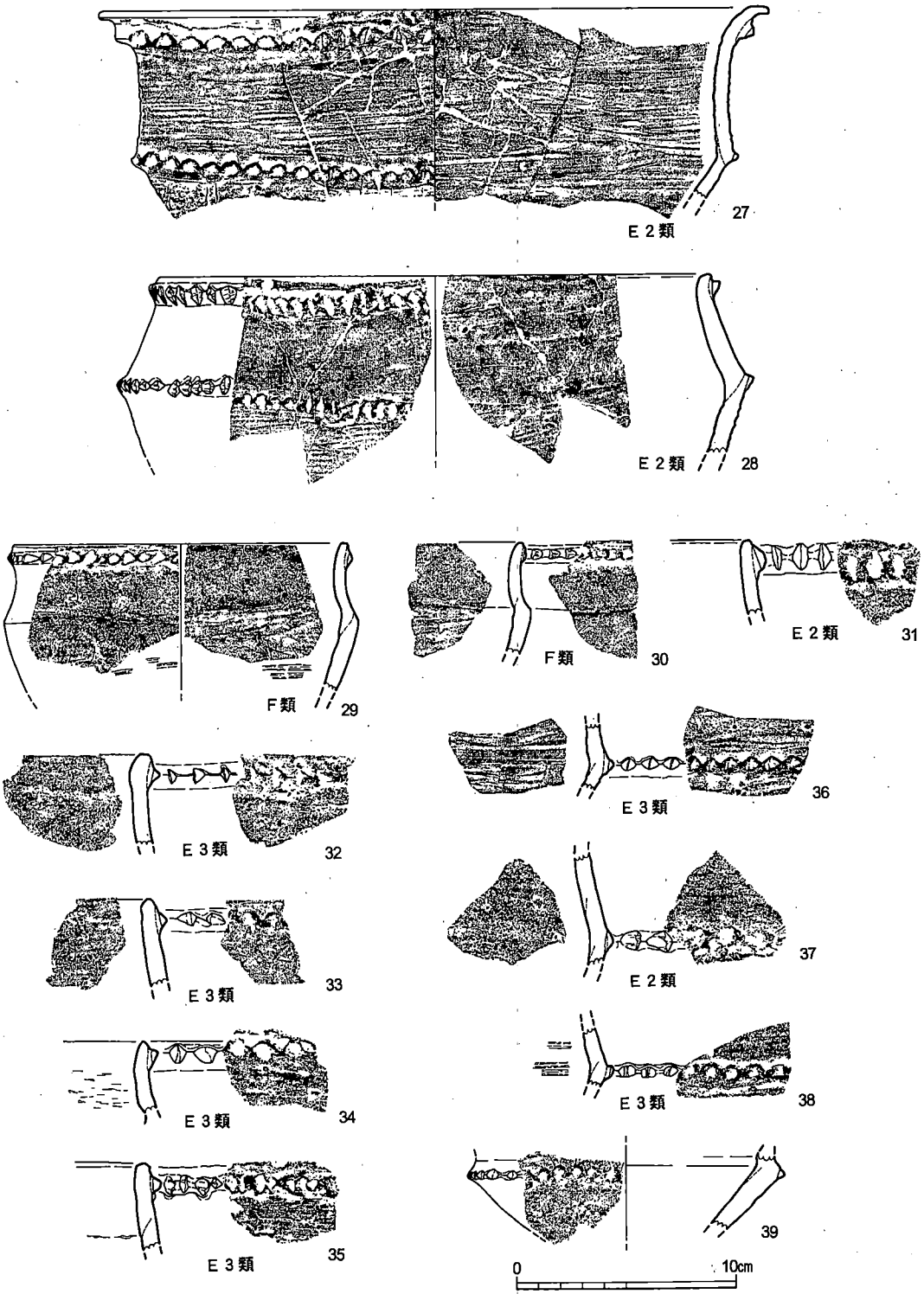
C類（４・９～11）　あまり張らない胴部で、更に他の刻目凸帯土器のような肩の張る器形にはならない類で、口唇部に接してグチャグチャの凸帯を付ける類。凸帯は口唇部よりも上方まで上がっている部分が多い。柿原刻目凸帯文土器３類と共通する器形、凸帯の位置、粗大な刻目等が特色で、全体に古相を示しており、刻目凸帯土器の初現的タイプと考えてよかろう。**C０類**（４）は刻目を持たないが、口唇部に接する凸帯の発生の可能性を示すものとして参考になる類。柿原Ⅰ縄文遺跡でも同種が出土しており、柿原粗製深鉢３ａ類としたものがそれである。４はＰ406出土品で、口縁外面に粘土を巻き込んでいる。内面に稜をつくり、調整は内面が横位条痕の上を横位ナデ、外面が横位条痕。粗・細砂を多く含み、焼成良好で内面は淡褐～灰黒色、外面は暗茶褐色をなす。**C１類**（９～11）はＣ類そのもので、特徴については上記した。９は表採品で、内外面ともに雑な横位ナデ。グチャグチャの凸帯で、どれが刻目か判からない程である。粗・細砂を多く含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は黒～淡褐色をなす。10は表採№147付近出土品で、極めて雑な、刻目凸帯とは思えない程の異質凸帯を付ける。草類の茎先による刺突のようなきたない刻目である。かなり大口径となり、内面は横位条痕の上を横位ナデ、外面は横位ナデ。粗・細砂をかなり含み、焼成良好で内面は黒色、外面は灰黒～橙褐色をなす。11はＰ104出土品で、10と同様のグチャグチャの凸帯を付ける。内面は横位条痕の上を横位ナデ、外面は横位擦過の上をナデている。粗・細砂をかなり含み、焼成良好で内面は黒色、外面は淡茶褐色をなす。かなりの大口径品となりそうである。９～11は各々出土地点は異なるが、同一個体となるかもしれない。



第47図　楠田遺跡包含層出土刻目・刻目凸帯土器実測図（その２）(1/3)

D類（12～15）　外面の刻目凸帯が、上端から1cm以上下がった位置に付けられ、且つ幅広い凸帯で粗大な刻目を施す類。器形により2種に分けた。**D1類**（12・13・15）は、口頸部が内傾して肩の張る器形になると思われるもので、粗大な刻目が特徴的である。12は表採№59で、口唇部はシャープに角張り、幅広い凸帯上には貝殻腹縁による深い刻目が施されている。内面は横位擦過の上を横位ナデ、外面は横位条痕の上を横位ナデ。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。13はP62出土品で、平坦面をなす口縁となり、凸帯上には貝殻腹縁によるかと思われるが、どれが刻目か判からない程雑な刻目を施している。内面は横位擦過の上をナデ、外面は雑なナデで凹凸が多い。粗・細砂幾らか含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は白褐色をなす。15はP208出土品で、上下幅1.3cmもある粗大な貝殻腹縁による刻目を持つ。内外面とも調整はナデかと思われる。細砂粒をかなり含み、焼成やや不良で内面は黒褐色、外面は淡灰茶色をなす。**D2類**（14）は、口縁から下がった位置に刻目凸帯を付ける類のうち、口頸部が外傾して粗製の鉢状となる器形のものである。14はP127出土品で、幅広い凸帯上に細く浅い貝殻腹縁による雑な刻目を施す。内面は雑な横位擦過の上をナデ、外面は雑な横位ナデで凹凸が多い。粗・細砂多量含み、焼成やや不良で内面は橙茶褐色、外面は橙茶～黒色をなす。以上のD類は従来特に区別して論じられる事は無かったが、粗大な凸帯と刻目は古い様相を示し、口頸部が内傾して肩の張る刻目凸帯土器の初現形状を示している事が予想される。12・13のように口唇部が角張っている類は、クリナラ深鉢E3類の最終形態（例えば本楠田遺跡出土の第44図29）とされる晩期末葉類と共通するものであり、刻目凸帯初現時期において、刻目凸帯がこの器種にも付けられた事があった事情を示している。

E類（16～28・31～39）　口頸部が内傾し、肩が張る甕形の器形のもので、口縁から僅かに下がった位置に凸帯を付け、粗大な刻目を施す類である。器形・刻目の大小等によって4類に細分した。**E1類**（16）は粗大な異類の刻目を持ち、肩の張りがあまり強くなくて、ひょっとしたら肩にしっかりした稜をつくらず胴張り程度になるかもしれない器形のものである。16は表採№166、表採№167、P312出土品等が接合したもので、表採№165も接合はしないが同一個体である。幅1.3cm程の太い指頭或いは棒先による押圧刻目を密に施しており、その粗大さは異様である。内外面ともに横位アナダラ条痕を施し、胎土に粗砂幾らか、細砂かなり含む。焼成やや不良で内面は黒色、外面は灰茶～暗茶褐色をなす。縦方向の割れ線を挟んで一対の焼成後穿孔がみられる。その片方の穴の脇には裏面からの未貫通穿孔もある。孔径が大きく、黒曜石製等の縄文的石錐によるのではなく、弥生早期にある砂岩系の磨製穿孔具によるものとみられる。**E2類**（17～28・31・37）口頸部が内傾して肩の張る刻目凸帯土器のうち、刻目がかなり大きいものや刺突状の施文法が異質なもの等である。器面調整もまだ雑で、全体に古相を残しており、時期的には縄文晩期末葉～弥生早期前葉とされよう。17は表採№195で、口径22.5cmに復原される。粗大で深い刻目を持つが、ヘラで左から削り込んだものかと思われる。内面



第48図　楠田遺跡包含層出土刻目・刻目凸帯土器実測図(その３)(1/3)

は横位条痕の上を横位ナデで消しており、外面は横位擦過。粗・細砂多く含み、焼成やや良好で内面は黒～暗褐色、外面は暗灰茶褐色をなす。18は表採№147付近出土品で、先端が長円形の棒先の刺突による大きい刻目が施されている。内面は雑な横位ナデだが、下半には横位条痕が残る。外面は横位ナデ。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は淡褐色をなす。19は表採№176で、太めの棒先による刺突状の大きな刻目を施す。内面は横位擦過の上をかなり雑な横位ナデ、外面は横位ナデ。胎土に粗砂かなり含み、焼成やや良好で内面は灰黒色、外面は灰茶褐色をなす。20はＥ-え-１包含層出土品で、貝殻腹縁による斜位の刻目を持つ。内面は横位条痕、外面は条痕の上を横ナデ調整。粗・細砂を多く含み、焼成不良で内外面ともに黒色をなす。21は表採№169で、貝殻腹縁によると思われる大きめの刻目を施す。
内面は横位擦過で、外面は横位条痕の上をナデ。粗・細砂をかなり含み、焼成良好で内面は灰黒色、外面は淡茶褐色をなす。22はＰ126出土品で、貝殻腹縁を突っ込んだ深く大きな刻目を施す。内面は横位ナデでやや凹凸がある。外面は丁寧な横位ナデ仕上げ。粗・細砂を多く含み、焼成やや良好で内面は灰黒～暗褐色、外面は暗褐色をなす。23は表採№114付近出土品で、やや斜位の棒先による刺突の刻目が施される。内外面ともに丁寧な横ナデ調整。胎土はかなり精良で、焼成やや不良。外面は暗茶褐色、内面は暗灰褐色をなす。24は表採№150で、刻目は殆ど剝落しており明確でないが、太い棒先の押圧かと思われる。内面は横位条痕の上をナデ、外面は雑な横位ナデ。粗・細砂かなり含み、焼成やや良好で内面は暗灰褐色、外面は煤が付着して暗褐～灰黒色をなす。25は４号溝出土品で、貝殻腹縁による深いシャープな刻目を施し、内面は横位ナデで凹凸が多い。外面は横位ナデ。胎土に粗砂多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面は灰黒～白褐色をなす。26はＰ61出土品で、貝殻腹縁による雑な刻目を施す。内外面ともに横位アナダラ条痕を施し、胎土に粗・細砂をかなり含む。焼成やや良好で内面は黒色、外面は煤が付着してこげ茶色をなす。27は３号溝①とＦ-え-１包含層出土品が接合したもので、丸く外反して開く口縁を持つ。口縁下の凸帯と肩部に爪痕を残す指先による刻目を施している。内面と頸部外面は横位条痕、外面の肩部以下は雑な横位擦過を施す。胎土に微細砂を多く含むが、粗砂粒は含まない。焼成良好で内外面ともにこげ茶色をなす。28は表採№147付近出土品で、貝殻腹縁による刻目を上下二段に施している。内面は横位ヘラナデだが下端には横位条痕が残っている。外面上半は横位ナデ、下半は横位条痕。粗砂少量、細砂幾らか含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面の稜以上は淡褐色、以下は煤が付着して暗茶褐色をなす。31はＦ-い-１包含層出土品で、大きく深いヘラによる刻目を施す。内外面ともに横位ナデで、胎土に細砂粒を多く含む。焼成良好で内面は黒～淡褐色、外面は黄茶褐色をなす。37は表採№268で、肩部に貝殻腹縁による大きな雑な刻目を施している。内面は横位条痕をナデ消し、外面は横位条痕をヘラナデで消している。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は淡茶色をなす。**Ｅ３類**（32～36・38）はＥ２類と大差無いが、刻目がひとまわり小さくなり、中

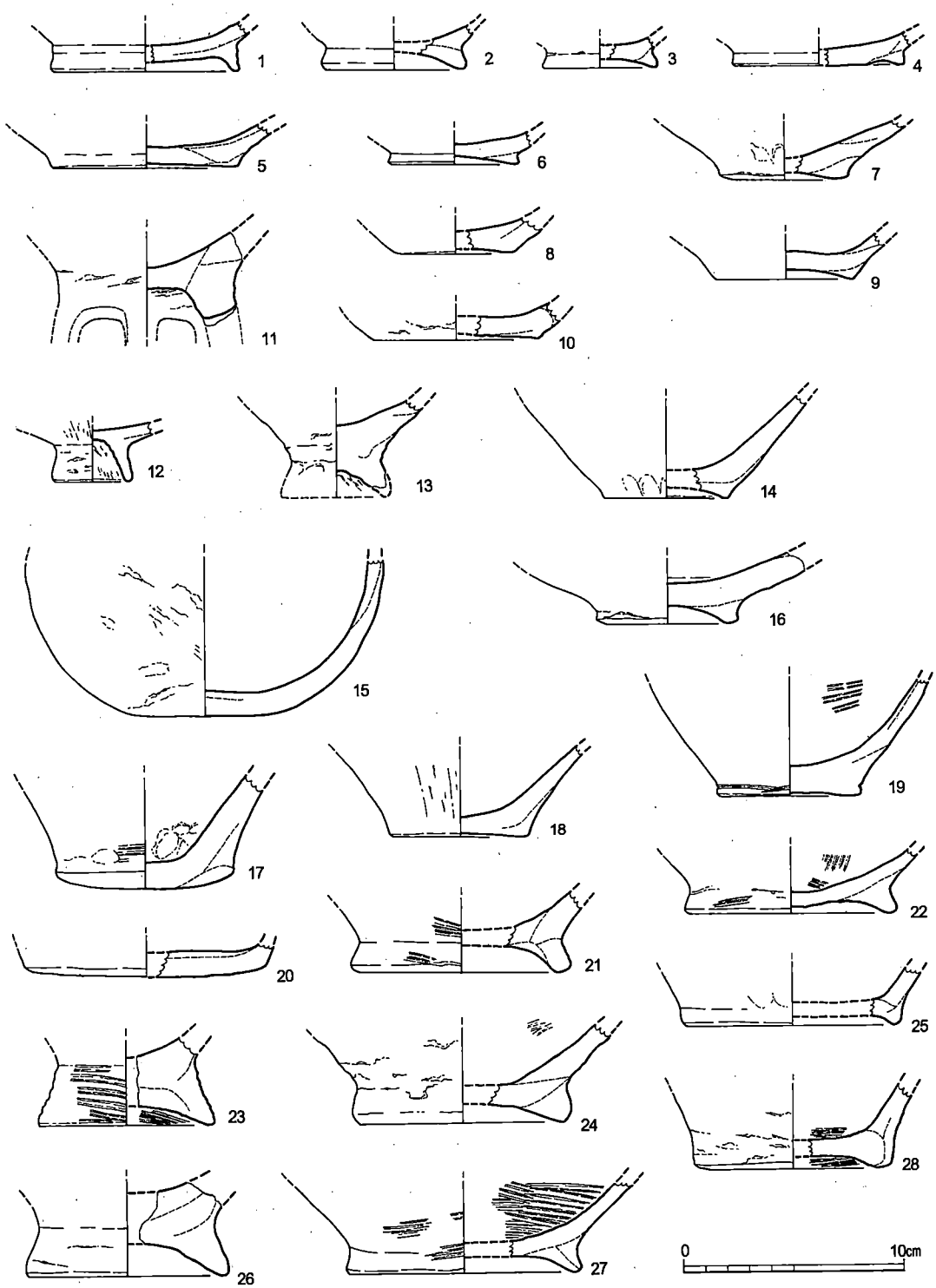
程度の大きさのものである。時期的には、弥生早期前葉と考えられる。32は表採№176で、ヘラで斜めに深く抉り込んだ刻目を施す。内面は雑な横位ナデで凹凸がある。外面は横位ナデ。粗・細砂幾らか含み、焼成不良で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。33はP316出土品で、棒押圧の刻目を施す。内面は横位擦過の上をナデ、外面はナデか。粗・細砂多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面は上半が黒色、下半は黄褐色をなす。34は表採№41で、太い棒先による大きな押圧刻目を施す。内面は雑な横位擦過、外面は雑な横位ナデ。粗・細砂を多く含み、焼成やや良好で内面は黒色、外面上半は黒色、下半は明茶褐色をなす。頸部が短く、浅い器形となろう。35は表採№125付近出土品で、貝殻腹縁によるかなり雑な突っ込み状刻目を施す。内外面ともに雑な横位ナデ。粗・細砂をかなり含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は上半が黒色、下半は白褐色をなす。36は表採№413 で、肩部の凸帯に爪による刻目を施す。内面は横位条痕で外面上半は未調整風、下半は条痕具による横位擦過。細砂幾らか含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は煤が付着して茶～黒褐色をなす。38はF-え-2包含層出土品で、肩部にわりと整った刻目を施す。施文具は不明だが爪かもしれない。内面は横位条痕の上を横ナデ、外面上半は横位ナデ、下半は横位擦過。微細砂を含むがかなり胎土精良で焼成良好。内面は暗茶褐色、外面は茶褐色をなす。**E4類**（39）は肩部に刻目は持つが、小型品で口が開き浅鉢状になりそうな特殊な器形のものである。F-う-3包含層出土品で、貝殻腹縁によるかと思われる密な刻目を施す。内面は丁寧なナデ、外面はやや凹凸がありナデかとも思われる。粗・細砂かなり含み、焼成良好で内面は黄茶褐色、外面は刻目以下に煤がこびりつきこげ茶色となる。

F類（29・30）　口頸部がゆるやかに外湾しながら立ち上がり、口縁下の凸帯には小さな刻目を施し、肩部には刻目を持たない類である。かなり精製で、時期的には弥生早期中葉頃とされよう。29は表採№123と№124が接合したもので、口縁下の低い凸帯にはヘラによる刻目を施す。内外面ともに丁寧な横位ナデだが、内面下端にはかすかに横位条痕が残る。細砂幾らか含むがかなり胎土精良で、焼成やや不良。内面と外面の稜以上は黒色、以下は茶褐色をなす。口径15.2cmの精製品。30は表採№120付近出土品で、浅い貝殻腹縁による刻目を施す。内外面ともに丁寧な横位ナデだが、内面下半に横位擦過痕が残る。細砂幾らか含むのみでかなり胎土精良で焼成やや不良。内面と外面上半は黒色、下半は赤茶色をなす。

(8)　縄文土器底部（第49・50図）

ここでは、縄文後期後葉～末葉の特殊な脚台部分や精製深鉢底部、晩期後葉の浅鉢・深鉢の底部、弥生早期甕の底部等、バラエティーに富む各種を報告しておきたい。

精製浅鉢底部（1～6）　1はP377出土品で、内面は縦位ヘラ磨き、高台状部内外面は横ナデ、底外面中央部は一方向へのヘラ磨き。胎土精良で焼成良好、内面は淡褐～黒色、外面は茶褐色をなす。2はE-え-1包含層出土品で、内外面ともにナデかと思われる。細砂多く含み、



第49図　楠田遺跡包含層出土縄文土器底部実測図(その１)(1/3)

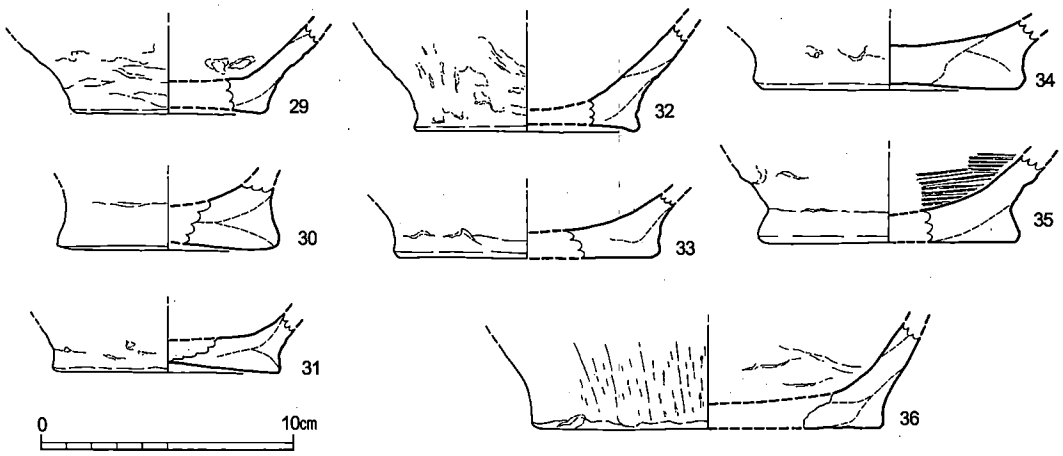
焼成良好で内面は白褐色、外面は淡褐～暗褐色をなす。3はP181出土品で、内面はナデ、底部側面は雑な横ナデ、底外面は雑なヘラ磨き。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成不良で内面は暗褐色、外面は褐色をなす。4はF-い-2包含層出土品で、内面は丁寧なヘラ磨き、底外面はナデ。細砂かなり含み、焼成良好で内面は黒色、外面は茶褐色をなす。5は表採№114付近出土品で、底径8.4cmの大型品。内面中央は一方向への、体部側は横方向へラ磨き。体部外面は雑な横へラ磨きで凹凸がある。底外面は擦過の上を一方向への雑なへラ磨き。粗・細砂を幾らか含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は茶褐色をなす。6は表採№114付近出土品で、内面はへラ磨き、底外面は一方向へのナデ。細砂多く含み、焼成不良で内面は黒色、外面は暗褐色。

縄文後期精製深鉢底部（7～10・14～17・20）　7はP378出土品で、内面は擦過の上を丁寧なナデ、体部外面は縦位の雑なへラナデ状磨きでやや凹凸がある。底外面は雑なナデ。粗砂僅か、細砂多く含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は淡茶褐色をなす。8は2号溝出土品で、内面はナデか。外面はかなり磨滅。細砂多く含み、焼成やや不良で内面は暗灰褐色、外面は茶褐色をなす。9は表採№134で、内面はナデ、体部外面は縦位へラ磨き、底外面は擦過状の雑なナデ調整。粗・細砂をかなり含み、焼成やや良好で内面は暗褐色、外面は白褐～黒色。10はP193出土品で、内面は横位ナデ、体部外面は雑なナデ、底外面は雑な擦過。細砂多く含み、焼成不良で内面は黒褐色、外面は淡褐色をなす。14は表採№133で、内面は丁寧なナデ、体部外面は縦～斜めのへラ磨き、底外面はナデ。粗・細砂を多く含み、焼成やや不良で内面は淡灰褐色、外面は暗褐～淡茶褐色をなす。15はP114とP113が接合したもので、安定はしているが丸底となる異類。鉢状品になる可能性もある。内面は丁寧なナデ、外面は雑な擦過の上を雑なナデで凹凸が多い。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成やや良好で内面下半は黒色、上半は淡茶褐色、外面は灰茶～暗褐色をなす。16は表採№120で、内面は雑な横へラ磨き、体部外面は雑な縦へラ磨き、底外面は雑な指ナデ。割れ面は明瞭な擬口縁風。粗・細砂を多く含み、焼成不良で内面は黒～淡褐色、外面は橙褐～淡茶色をなす。17は表採№323と№315が接合したもので、凸レンズ状にふくらむ底部となる異類。体部内外面はナデで、外面にかすかに横位条痕が残る。底外面は雑な擦過の上をナデている。粗砂僅か、細砂幾らか含み、焼成良好で内面は淡褐色、外面は暗褐～淡赤褐色をなす。20はF-う-2包含層出土品で、底部外面がやや丸くふくらみ、体部があまり開かずに立ち上がる異類となりそうである。体部内面は横位ナデ、内面中央部はナデツケ状、外面は雑なナデ。粗・細砂かなり含み、焼成良好で内面は茶褐色、外面は暗褐色をなす。

縄文後期脚台部（11～13）　11はP32出土品で、脚台部に4ヶ所と思われる透し部を持つもの。内面は擦過の上を雑なへラナデ、脚台部外面は雑な横位ナデの上を雑な横位へラ磨き。脚台部内面には強い指頭ナデが施される。透しの形状は丸く円形になるかもしれず、2ヶ所分残存している。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成良好で内面は暗茶褐色、内面は淡褐～黒色をな

す。12は表採№87で、直径3.6cmの小さな高台状の脚部が付く。内面は丁寧なヘラ磨き、体部外面は縦位擦過、脚部外面は横位擦過で凹凸がある。脚部内面は指頭ナデで凹凸がある。粗砂粒を僅か、細砂粒を幾らか含み、焼成やや良好で内外面ともに暗灰茶色をなす。凹線文系三万田式～御領式に属する特殊類。13は表採№59で内面は擦過の上をヘラナデ、体部外面は縦位擦過の上をヘラナデ。脚台部内外面は指頭ナデだが、内面は雑なひっかき状。細砂粒を多く含み、焼成やや良好で、内面は黒色、外面は淡灰茶色をなす。小型深鉢となろう。

縄文後・晩期深鉢底部（18・19・21～36）　18は表採品で、内面はナデ、体部外面は、縦位擦過の上をナデ、底外面も擦過の上をナデている。僅かな上げ底で、胎土に細砂かなり含み、焼成良好で淡黄褐色をなす。弥生早期の精製品。19は表採№210で、外面下端に細く深い沈線を一周させる例。体部内外面は横位条痕の上をヘラナデ、底内面は一方向へのナデツケ状。外面の沈線周辺は横ナデ、底外面の周縁接地部は未調整風ナデ、内側は一方向への擦過。細砂幾らか含むがかなり胎土精良で、焼成やや不良。内面は灰褐～灰黒色、外面は灰茶～黒褐色をなす。縄文後期末前後の精製小型深鉢であろう。21はＰ385出土品で、内面は削り上げ的擦過、体部外面は横位条痕の上を雑なナデ。底外面は雑なナデ調整。粗・細砂多く含み、焼成良好で内面は暗灰褐色、外面は淡褐色をなす。22は表採№35で、内面は条痕の上をナデ、体部外面も条痕を横ナデで消している。底外面は雑なナデで凹凸が多い。23は表採№276で、内面はナデ、外面はアナダラ条痕。細砂かなり含み、焼成やや良好で内面は黒褐色、外面は淡褐色をなす。24は表採№231で、内面は条痕の上をナデか。体部外面は未調整風な雑な横位ナデで凹凸多い。底外面はナデ。粗・細砂多く含み、焼成やや良好で内面は暗褐～褐色、外面は茶褐～淡褐色。25は杭１西側表採品で、内面は雑な横位ナデ、外面も雑なナデ、底外面は横位ナデ。粗・細砂を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は暗茶色。26は表採№147付近出土品で、内面はナデか。脚台部外面はやや雑な横位ナデ、底外面は雑なナデ。粗・細砂幾らか含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は明橙茶色をなす。27は表採№213と№214が接合したもので、内面は横位条痕、体部外面は横位条痕の上を雑な横位ナデ、底外面は雑な横位ナデ。細砂かなり含み、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は淡茶～暗茶褐色をなす。28はＰ87出土品で、内面は横位ナデで中央部にかなり条痕が残る。体部外面は雑な横位擦過的ナデ、底外面は回転方向の条痕。粗・細砂多く含み、焼成やや不良で内面は暗褐色、外面は淡茶褐色をなす。29は表採№25で、内面は雑なナデで指押さえ痕を残す。外面は未調整風の雑な横位ナデ。粗砂幾らか、細砂多く含み、焼成良好で内外面ともに淡茶褐色をなす。粗製深鉢。30はＰ220出土品で、内面はナデ、外側面は横位ナデ、底外面は一方向への擦過。粗砂かなり含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。31はＦ-い-４包含層出土品で、体部内外面ともに雑なナデで、外面は凹凸が多い。底外面は回転方向の擦過状調整で、粗・細砂多く含む。焼成やや不良で内面は暗灰褐色、外面は淡茶褐色をなす。32は表採№69で、内面は雑な斜位ヘラナデ、体部外面は極めて雑な未調整風。底外面

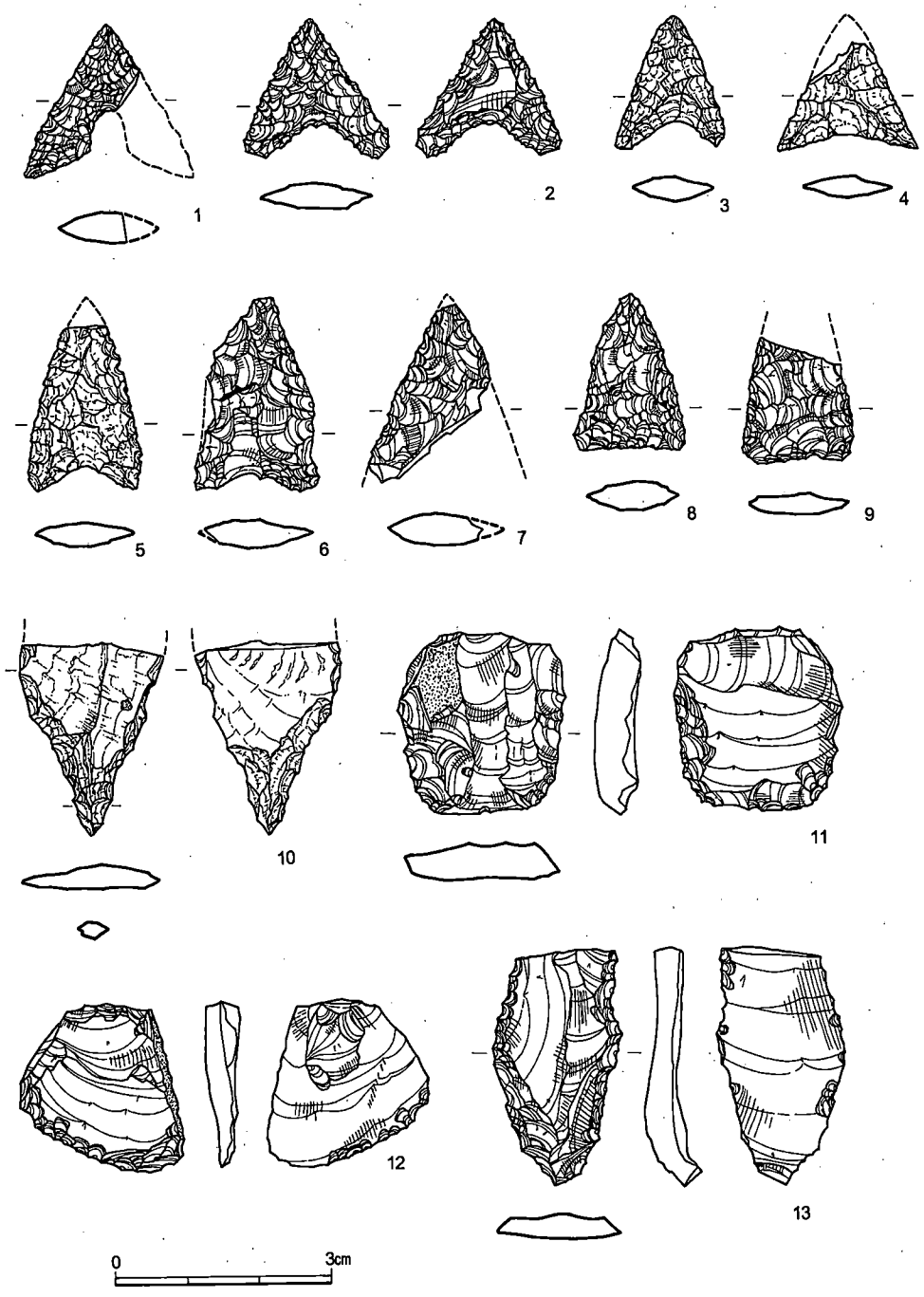


第50図　楠田遺跡包含層出土縄文土器底部実測図(その２)(1/3)

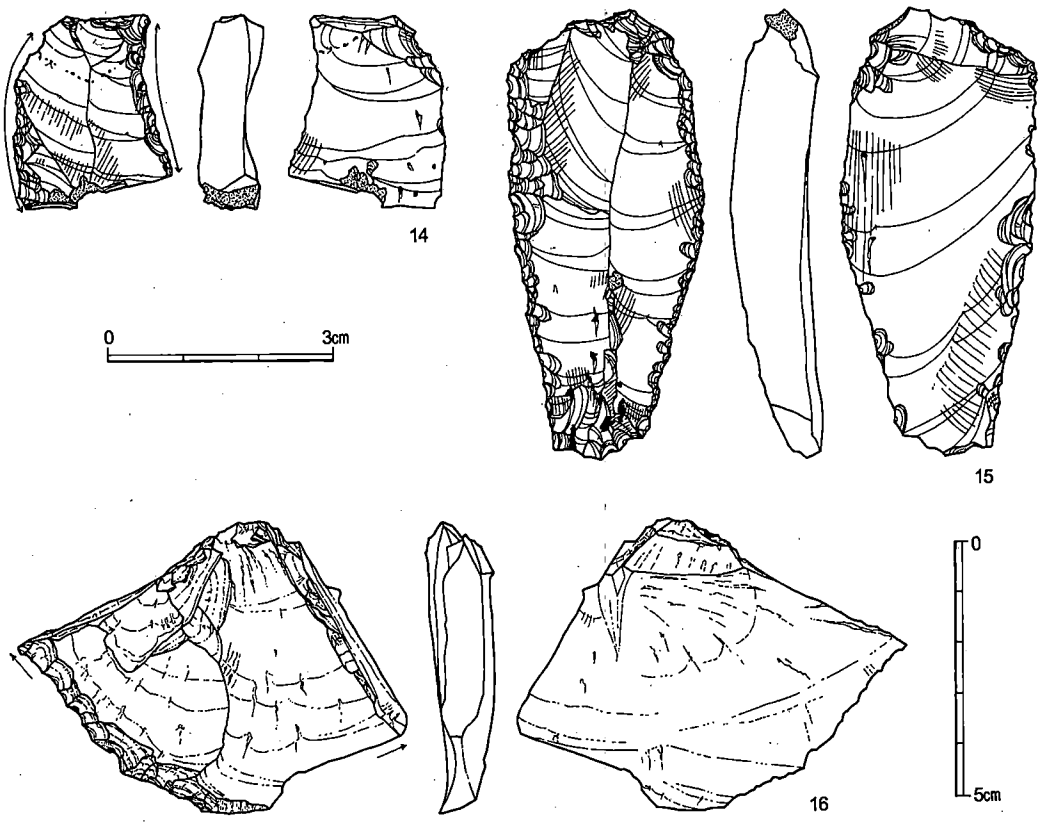
は雑なナデ。粗・細砂かなり含み、焼成やや不良で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。33は表採№210で、内面は擦過の上をナデ、体部外面は雑なナデで凹凸が多い。底外面は削り状の粗い擦過。粗・細砂を多く含み、焼成良好で内面は暗褐色、外面は橙褐色をなす。34はＰ16出土品で、内面と外側面はナデ、底外面は擦過状。粗・細砂を多く含み、焼成やや良好で内面は淡橙色、外面は暗茶色をなす。35は表採№120付近出土品で、内面は横位条痕、外面は横ナデ、底外面は丁寧な回転方向のナデで平滑。粗・細砂をかなり含み、焼成良好で内面は黒色、外面は淡褐色をなす。36はＦ-い-４包含層出土品で、内面は強い横位指ナデ、体部外面は削り状の縦位擦過、底外面は強い指頭ナデで凹凸多し。底径14cmとなる大型品。

(9)　縄文時代石器

打製石鏃（第51図１～９）　１は117号土壙出土品で既にその項で報告済。２は42号土壙出土品で既にその項で報告済。３は表採№207で、安山岩製。表裏ともわりと丁寧に作られ、左右非対称。長さ19㎜、幅15㎜、厚さ3.5㎜、重さ0.7ｇ。４は表採№63で、安山岩製凹基鏃。表裏ともに作りは雑で、現存長15㎜、幅20㎜、厚さ３㎜、重さ0.6ｇ。５は表採№90で、安山岩製の縦長の凹基鏃。縁がやや鋸歯状に作られている。現存長23㎜、幅16㎜、厚さ３㎜、重さ1.1ｇ。６は表採№90で、やや半透明良質の黒曜石製。表面に素材剥離面を残し、全体に極めて雑なつくり。長さ27㎜、幅17.5㎜、厚さ４㎜、重さ1.6ｇ。７は３号溝内東側出土品で、やや半透明で良質の黒曜石製。裏面は作りがやや雑。現存長24㎜、現存幅18㎜、厚さ4.5㎜、重さ1.3ｇ。８は表採№319で、幾らか不純物を含む黒曜石製平基鏃。作りはやや雑だが整形はうまい。長さ22㎜、幅16㎜、厚さ４㎜、重さ1.1ｇ。９はＦ-え-２包含層出土品で、やや半透明良質の黒曜石製平基鏃。表裏とも雑な調整で、現存長17㎜、幅15㎜、厚さ３㎜、重さ0.8ｇ



第51図　楠田遺跡出土打製石器実測図（その１）（実大）



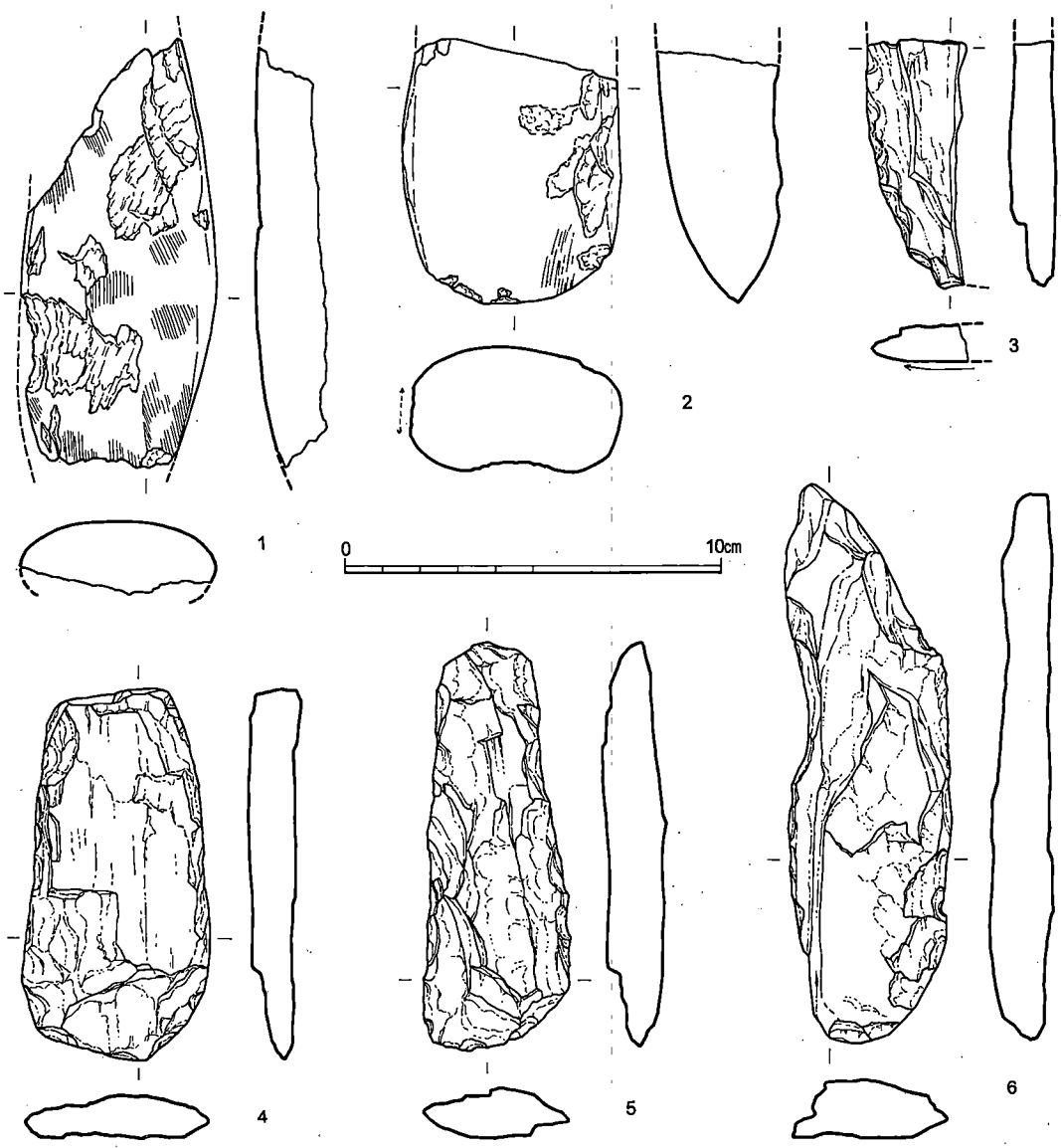
第52図　楠田遺跡出土打製石器実測図（その２）（実大・2/3）

石錐（第51図10）　10はＰ90出土品で、横長小剥片の片側端側に縁片調整加工を施しただけのもの。明らかな使用擦れはみられない。安山岩製で長さ27㎜、幅20㎜、厚さ3.5㎜、重さ1.8ｇとなる。

スクレイパー・使用剥片（第51～52図11～16）　11は表採№59で、漆黒色良質の黒曜石製楔形石器状製品。幅広の不定形剥片のバルブと尾端を90°転換打撃により除去し、左右両側縁に調整剥離を施したもの。小さい使用刃こぼれが左右～下辺にみられる。長さ25㎜、幅23㎜、厚さ５㎜、重さ3.8ｇ。12は117号土壙出土品で、既にその項で報告済。13は押型文グリッドNo８で、既にその項で報告済。14はＦ-う-４包含層出土品で、両側辺片面だけの調整加工の漆黒色の黒曜石製。裏面頭部側には折り取りのためのノッチ状加工がみられる。長さ25㎜、幅20㎜、厚さ８㎜、重さ４ｇ。15は109号土壙Ｐ３出土品で、既にその項で報告済。16は遺跡中段での表採品で、横長剥片の下辺に片面からだけの縁辺調整を施したもの。安山岩製で、長さ57㎜、幅79㎜、厚さ13㎜、重さ43ｇとなる。

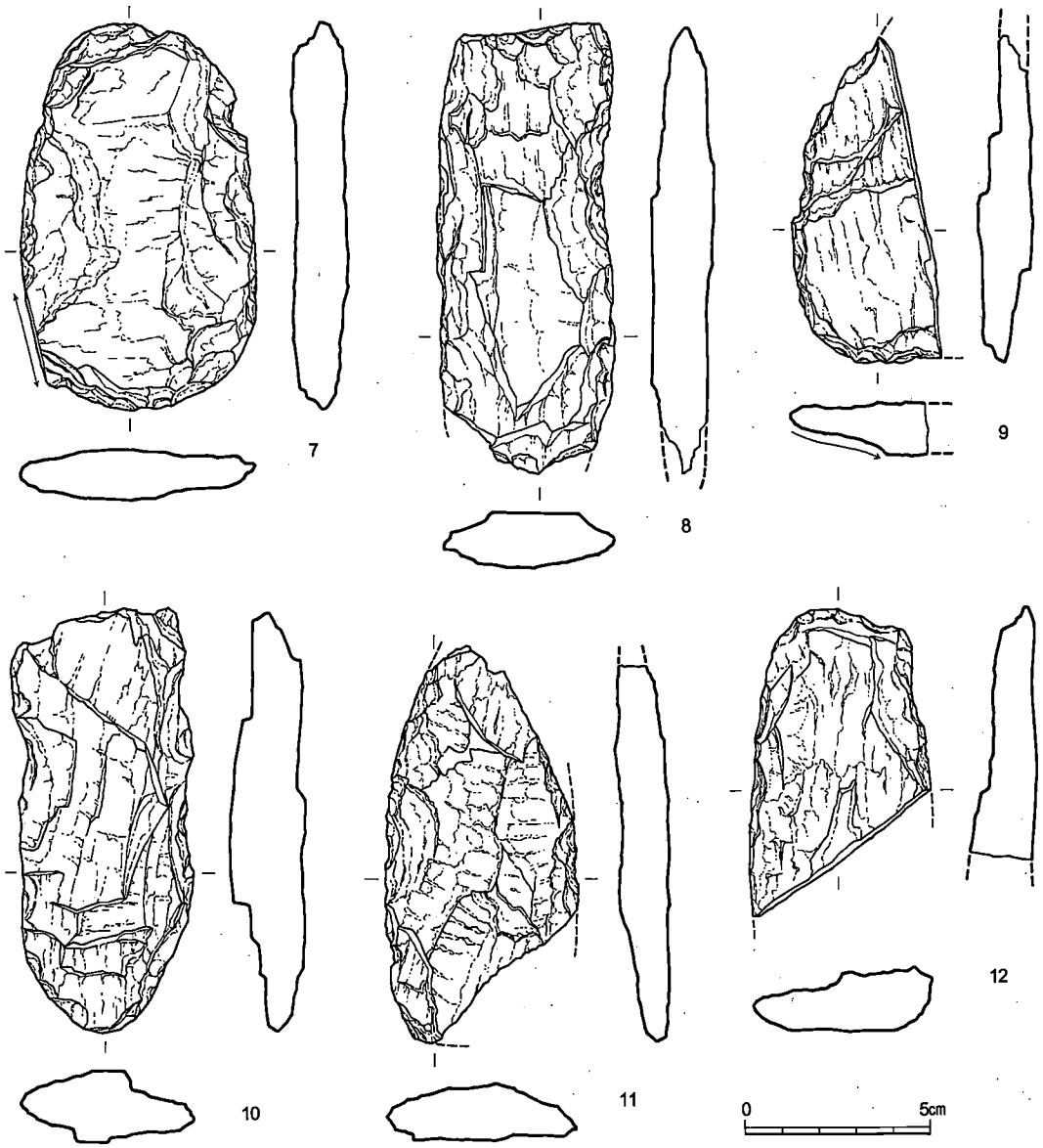
磨製石斧（第53図１・２）　１はＰ87出土品で、灰銀黒色の片岩系石材製。やや細身類で丁寧な研磨を施している。現存長112㎜、幅52㎜、現存厚さ20㎜、重量156ｇ。２は遺跡中段の包含層出土品で、灰黒色の凝灰質花崗岩製。全体に丁寧に研磨しているが、左側面には擦れたままの未研磨部分がずっとある。裏面中央には当初からの窪み部分が残る。現存長70㎜、幅58㎜、厚さ32㎜、重さ194ｇとなる。刃部側の一部に使用によると思われる擦痕が残る。

偏平打製石斧（第53～57図３～26）　３は30号土壙出土品で、既にその項で報告済。４は表採№56で、暗灰緑色の緑色片岩製。表面には原材の自然礫面が残り、裏面は素材剥離面のまま。全体に風化磨耗がかなり進んでいる。長さ99㎜、幅50㎜、厚さ13㎜、重さ106ｇ。５は117号土壙出土品で、既にその項で報告済。６はＦ-え-２包含層出土品で、濃灰緑色の緑色片岩製。細身類で、表面下半には自然磨耗面をそのまま残し、裏面は縦剥ぎを主とした素材剥離面のままである。裏面刃部付近にやや使用磨耗が認められる。長さ148㎜、幅44㎜、厚さ17㎜、重さ146ｇ。７はＦ-え-２包含層出土品で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面も大きく横剥ぎの素材剥離面を残したままである。左側面刃部側は辟開面の平坦面を残したままで、裏面刃部付近は幾らか使用磨耗がみられる。長さ104㎜、幅63㎜、厚さ15㎜、重さ158ｇとなる小判形小型類。８は14号土壙出土品で、既にその項で報告済。９はＦ-え-２包含層出土品で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面には左側辺からの粗整形時の大きな打割状剥離がみられる。現存長88㎜、厚さ15㎜、重さ54ｇ。10は表採品で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面は左右からの大きな整形剥離が施されている。長さ114㎜、幅46㎜、厚さ20㎜、重さ140ｇ。11はＦ-え-２包含層出土品で、暗灰緑色の緑色片岩製。裏面も横剥ぎの素材剥離面を大きく残す。現存長109㎜、幅52㎜、厚さ15㎜、重さ110ｇ。12はＰ114出土品で、濃灰緑色の緑色片岩製。右側面下半に敲打調整的部位がみられる。裏面は横剥ぎの大きな素材剥離面を残す。現存長84㎜、幅48㎜、厚さ17㎜、重さ73ｇ。13は表採品で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面は自然磨面で全体にやや風化している。長さ96㎜、幅60㎜、厚さ17㎜、重さ154ｇ。14はＥ-え-１包含層出土品で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面は横剥ぎの素材剥離面そのままで、縁辺細調整を施すのみ。長さ98㎜、幅71㎜、厚さ９㎜、重さ102ｇとなる小型品。15は表採品で灰青色の緑色片岩製。表面に原材の自然面を残し、裏面は横剥ぎの素材剥離面のまま。刃部付近は角がとれて使用磨耗が認められる。現存長97㎜、幅65㎜、厚さ10㎜、重さ100ｇとなる。16はＰ120出土品で、灰緑色の緑色片岩製。裏面は横剥ぎを主とする素材剥離面のまま。表面には白～黄茶色の辟開面が左半分にみられる。全体に風化磨耗がかなりみられる。現存長103 ㎜、幅75㎜、厚さ22㎜、重さ174ｇ。17は表採№293で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面は縁辺部のみの調整で、素材剥離面のまま。刃部付近の特に裏面側は幾らか磨耗している。現存長100㎜、幅61㎜、厚さ14㎜、重さ136ｇ。18は表採№89で、濃灰色の緑色片岩製。全体に風化しており、裏面も素材剥離面を残したままで、裏面の刃部付近はやや磨耗している。現存長74㎜、幅63㎜、厚さ12㎜、重さ86ｇ。19はＰ103出土品で、暗灰緑色の緑



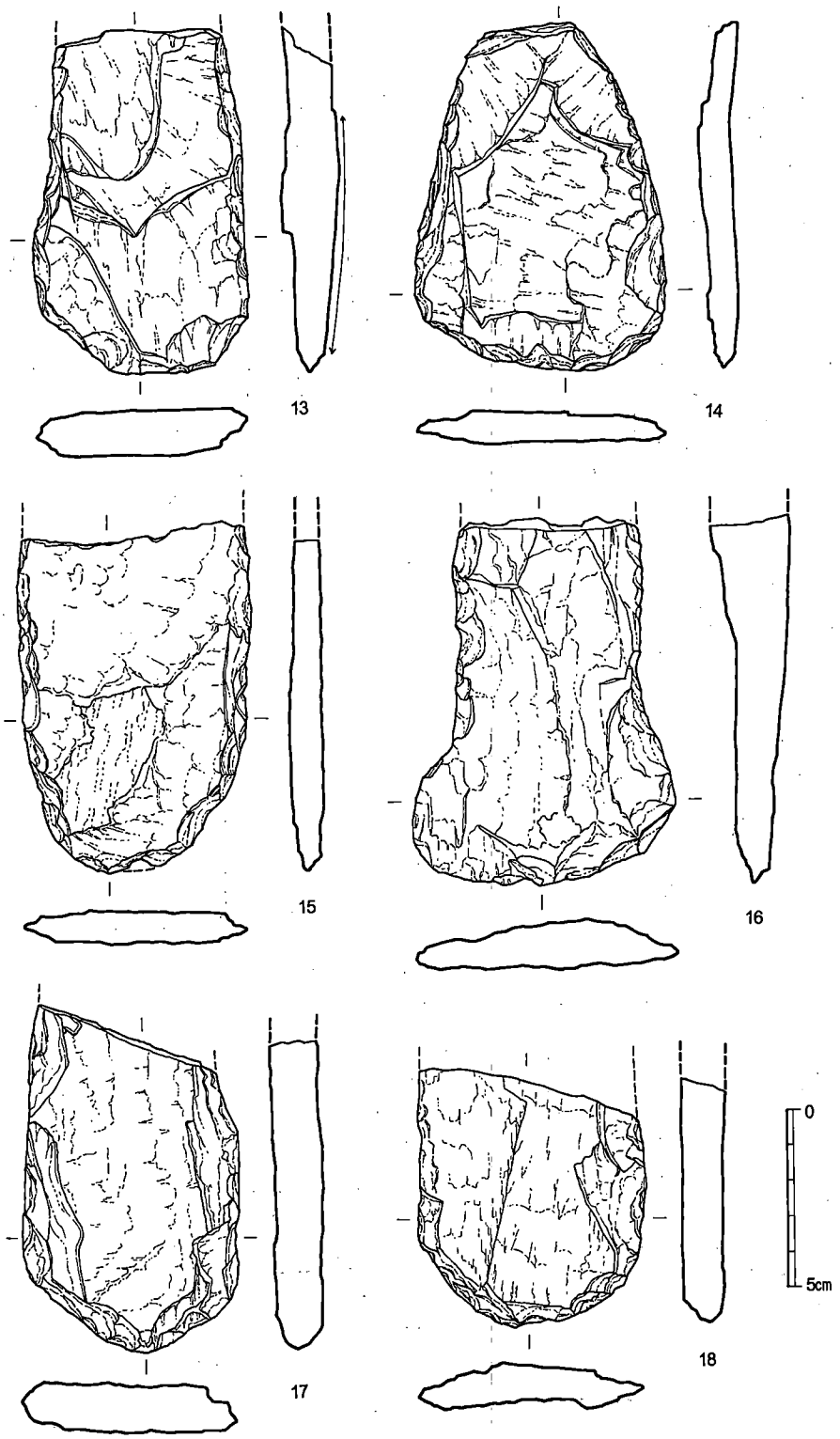
第53図　楠田遺跡出土石斧実測図(その1)(1/2)

色片岩製。裏面は中央に幾らか原材自然面を残すが、左右両側からかなり整形剥離が施されている。現存長121㎜、幅54㎜、厚さ21㎜、重さ186ｇ。20は表採品で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面の殆どは横剥ぎの素材剥離面のままで、全体に風化している。両側面の中央付近は敲打調整が認められる。長さ131㎜、幅52㎜、厚さ15㎜、重さ184ｇ。21は表採№192で、濃灰緑色の緑色片岩製。全体に風化がみられるが、刃部際は磨耗している。裏面も基本的に横剥ぎ的打割

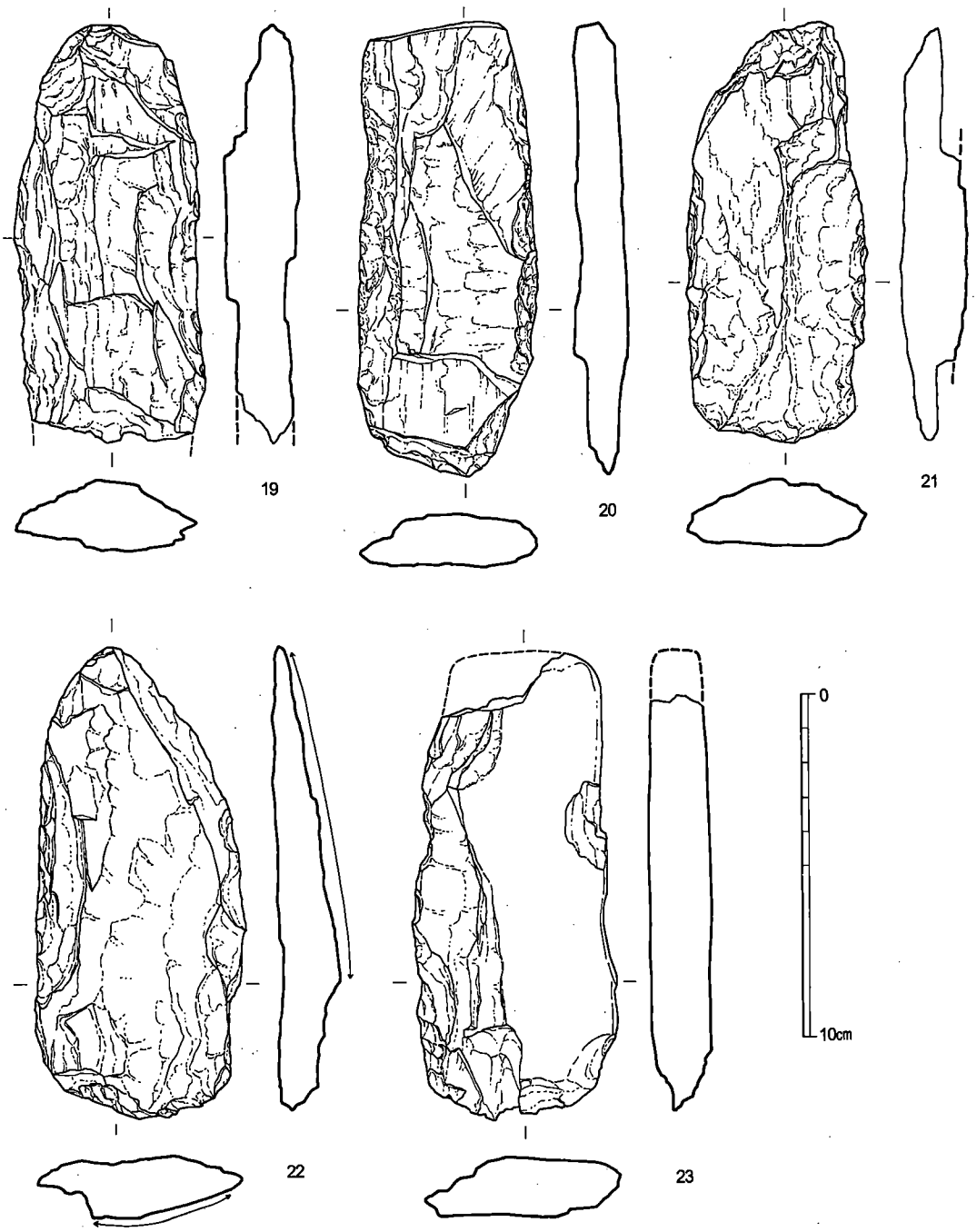


第54図　楠田遺跡出土石斧実測図(その２)(1/2)

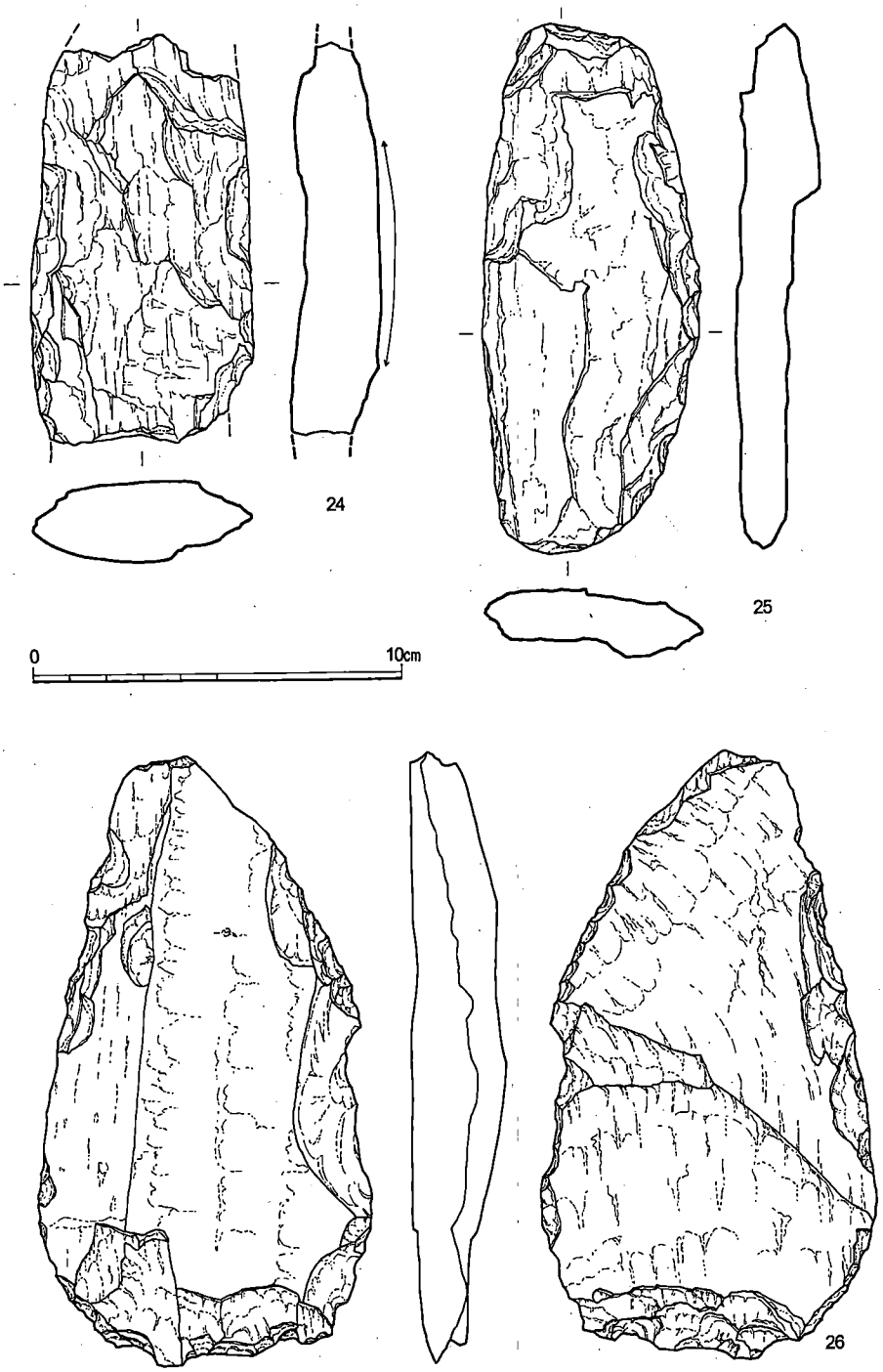
であるが、更に雑な大きめの横からの整形剥離が施される。長さ121㎜、幅52㎜、厚さ19㎜、重さ150ｇ。22はＦ-え-４包含層出土品で、濃灰青色の緑色片岩製。裏面には大きく、白灰緑色の石英質の間層の自然面がみられ、丁度良い曲面をなしている。長さ138㎜、幅60㎜、厚さ17㎜、重さ220ｇ。23は４号竪穴出土品で、既にその項で報告済。24はＦ-え-２包含層出土品で、濃灰緑色の緑色片岩製。裏面中央から右半部にかけて原材自然面を残している。全体に風化し



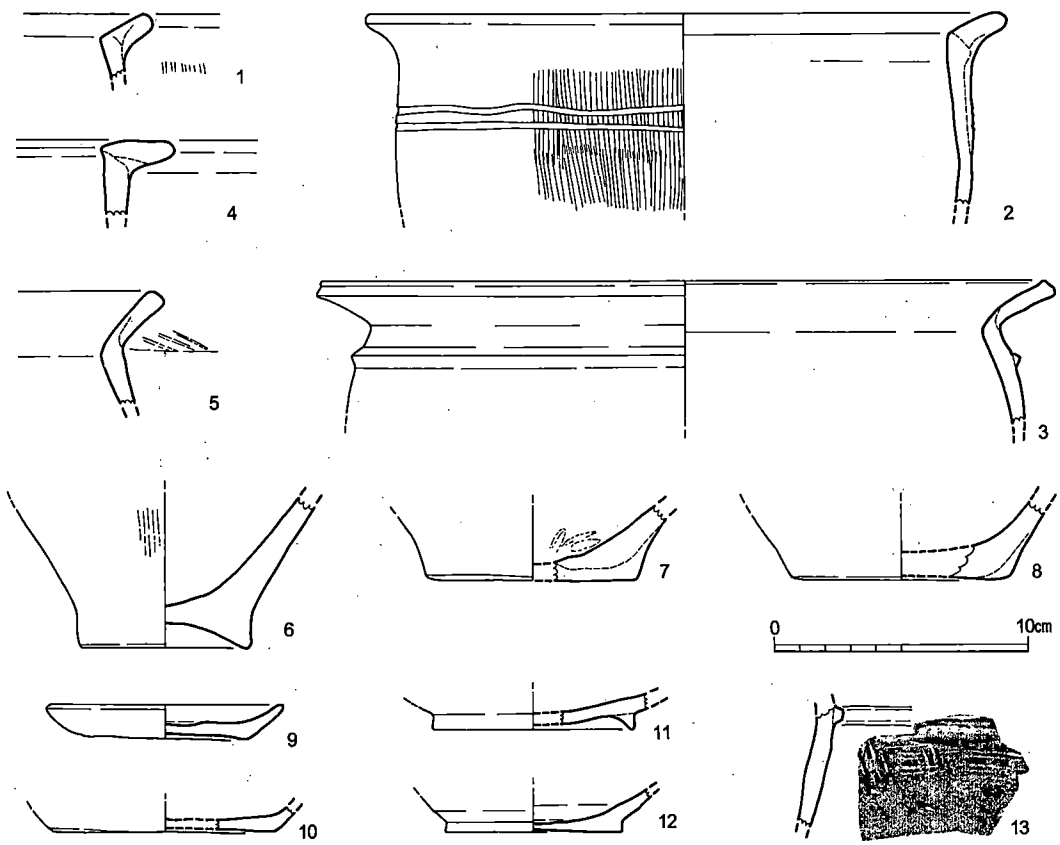
第55図　楠田遺跡出土石斧実測図(その3)(1/2)



第56図　楠田遺跡出土石斧実測図(その４)(1/2)



第57図　楠田遺跡出土石斧実測図（その５）(1/2)

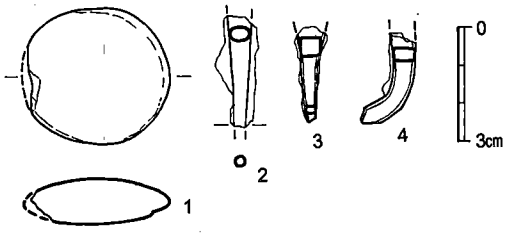


第58図　楠田遺跡包含層出土弥生～歴史時代土器実測図(1/3)

ており、現存長110㎜、幅60㎜、厚さ21㎜、重さ238ｇとなる。25は表採№91で、濃灰緑色の緑色片岩製。全体に風化著しく、表面左下半には原材の自然面を残す。裏面は素材剥離面に、左右から幾らか整形剥離を施している。長さ142㎜、幅59㎜、厚さ20㎜、重さ224ｇとなる。26は表採№81で、淡灰色の凝灰岩製。表面の縦方向の稜線の両側は平坦面で、原材の礫面と思われる。かなり風化しているが、使用磨耗痕等は見られない。長さ164㎜、幅91㎜、厚さ25㎜、重さ370ｇとなる大型粗製品。

以上の偏平打製石斧は、当遺跡の縄文後～晩期の土器の出土量からみて、予想外に多い数である。包含層等出土品が大半であることから、細かい時期決定はできないが、遺跡全体の出土土器からみて、後期末葉・晩期後葉のものが主体を占めると思われる。遺跡の立地が、段丘上にあり、偏平打製石斧を多用しやすい条件が整っていたものと考えられる。

⑽　弥生～歴史時代遺物



第59図　楠田遺跡出土土製品・鉄器実測図(1/2)

弥生土器（第58図１～８）　１は杭７付近表採品で、胴部内面は丁寧なナデだがやや凹凸がある。外面はわりと粗い縦ハケ。細砂幾らか含み、焼成良好で内外面ともに淡い肌色をなす。中期初葉。２はＰ１とＰ２が接合したもので、口径25.3cmとなる。胴部内面は丁寧なナデ、外面は１cmに６本で単位幅３cm強の丁寧な縦ハケを施している。細砂幾らか含むが、甕としてはかなり精良。焼成良好で内外面ともに淡黄褐色をなす。中期初葉。３は表採№303で、跳ね上げ口縁となる類。復原口径28cm、胴部内外面ともにかなり磨滅しているが、ナデ調整か。粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成良好で外面は淡茶褐色、内面は淡褐色をなす。後期初葉。４はＰ６付近表採品で、内外面ともに横ナデ。胎土に粗砂幾らか、細砂かなり含み、焼成良好で口縁内外面は淡灰褐色、胴部内外面は淡褐色をなす。中期前葉。５は表採№304で、内外面ともに磨滅するが、外面に斜位の敲きが残る。粗砂僅か、細砂幾らか含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。後期後葉。６は杭７付近採集品で、内面は丁寧なナデ、外面はかすかに縦ハケが残るが、下半は縦ナデ。底部外面付近は横ナデ。粗・細砂多く含み、焼成良好で内面は淡赤褐色、外面は淡褐色をなす。作りは丁寧で、中期前葉。７は表採№303で、内外面ともにナデ調整。粗砂僅か、細砂かなり含み、焼成良好で淡黄褐色をなす。中期末～後期初葉。８はＦ-え-１包含層出土品で、内外面ともにナデ調整。粗砂幾らか含み、焼成良好で内外面ともに明黄褐色をなす。弥生中期末～後期初葉。

土師器（第58図９・10）　９は表採品で、口径9.3cm、器高1.3cm、底径6.4cmの底部ヘラ切類。内底面はナデツケで、胎土精良。焼成良好で淡褐色をなす。法量から11Ｃ後半代が考えられる。11は杭７付近表採品で、底径8.6cmの糸切類。内外面ともに磨滅しており、胎土精良で焼成良好、淡茶褐色をなす。法量から推定して13Ｃ後半～14Ｃ代のものと考えられる。

瓦器（第58図11・13）　11はＰ81出土品で、内外面ともに磨滅している。胎土精良で内外面ともに灰色をなす。高台径８cmとなる。13は表採品で、断面台形状の凸帯を付ける。凸帯の下部に櫛目状工具による縦横の文様状のものが残る。胎土精良で焼成瓦質、内面は灰色、外面は淡茶色をなす。内面はかなり凹凸があり、横位ナデかと思われる。火舎の類か。これらはいずれも12～13Ｃ代となろう。

陶器（第58図12）　Ｐ84出土品で、焼成土師質というより素焼き的で近世陶器と思われる。底径７cmで、体部内外面はロクロナデ、底外面はヘラ切後丁寧なナデか。白褐色をなす。

土製品（第59図１）　表採№225で、両手で押さえただけの餅状品である。径3.9×3.5cm、厚さ1.2cm、重さ14ｇ。細砂幾らか含み、焼成良好で灰褐～黒灰色をなす。両面とも指紋が残

る。時期は全く不明であるが、包含層の状況からみて、縄文後・晩期の可能性は高い。

鉄器（第59図２～３）　２はE-え-２包含層出土品で、断面が丸っこく、新しい鉄釘か。３は表採№93で、鉄鏃又は短かめの角釘となるか。４は３と同じ表採№93で、端部が曲がっており、角釘で使用されたものと考えられる。古墳時代の遺物が出土していないので、これら鉄釘類は平安後半以降のものと考えられる。

8　おわりに

(1)　縄文早～後期の生活痕跡（第60図参照）

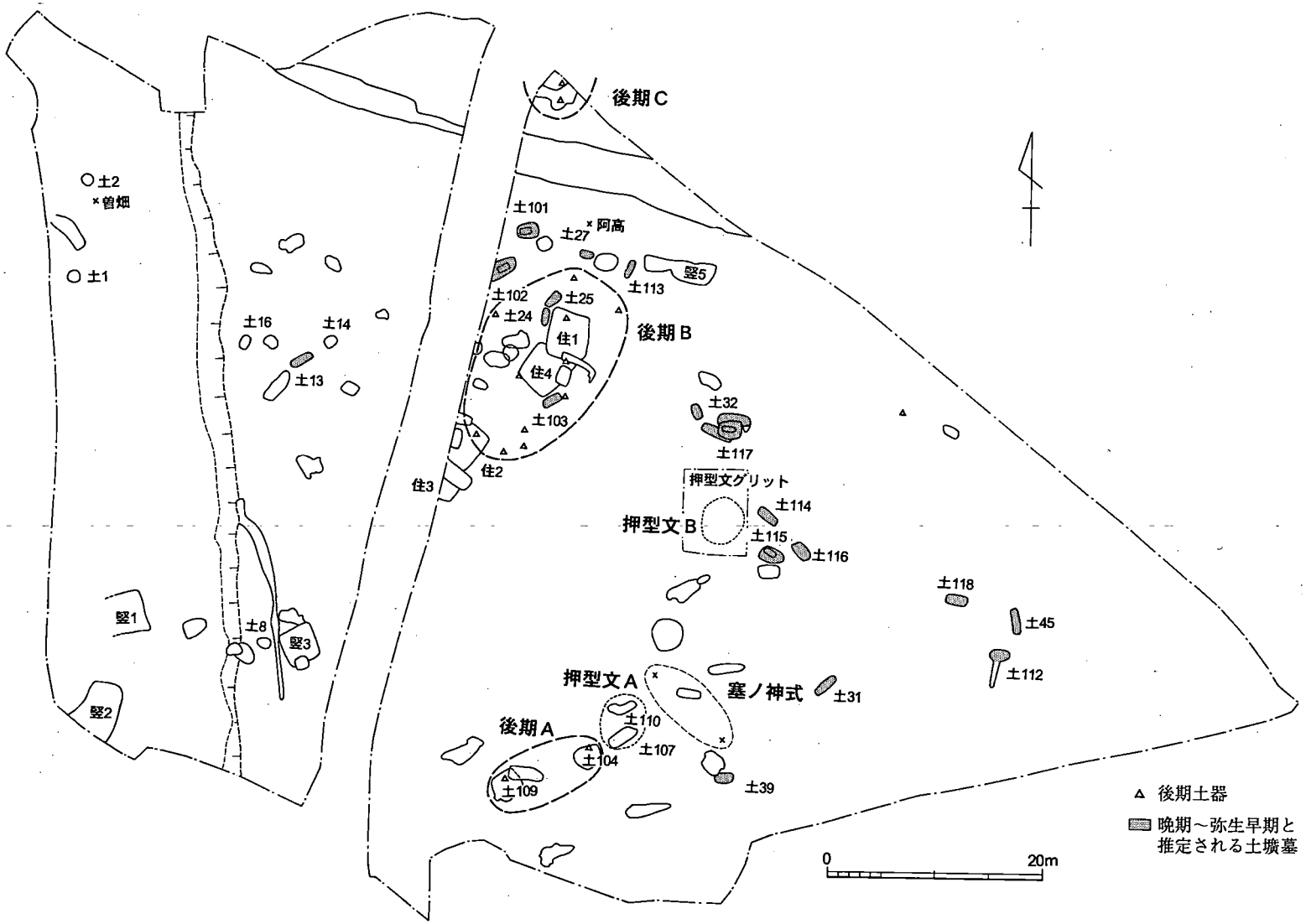
ここでは、本遺跡の主体が縄文晩期後葉～弥生早期前葉であり、確実な遺構もその時期のものばかりである為、それ以前の遺物の出土のみの時期の状況については復原が難しい。かと言って、単に土器少量出土とだけの記述で終ってしまうのは、本遺跡の実態の評価としては正当では無かろう。

「生活痕跡」　そこで、遺跡内における遺物出土状況を正確に記録し、その分布状況にまとまりが見られれば、更に生活跡的な様相が検討の上で認められれば、それを一つの生活痕跡と認定して、遺跡全体の動態の復原材料とすることができる。例えば、この生活痕跡が一定の狭い範囲に、しかも単純な一時期に凝縮されるならば、その生活痕跡は竪穴住居等の遺構を確認できなくても同等の性格を与え得るであろう。また、生活痕跡内の遺物分布が散漫で、同時性が疑問視される場合には、同一区域を意識した複数回の季節的キャンプ地等との解釈が可能となろう。その他、生活痕跡の様々な様態に対して、各々の検討・解釈が展開され得ると確信する。従来、大規模遺跡に対してだけしか与えられていなかった、縄文社会の動態復原の特権は、この生活痕跡の概念の導入によって、小規模遺跡や少量出土遺物のみの時期等に対しても、有効に活用でき得る可能性が開けたと言えよう。以下、この生活痕跡の検討によって、本遺跡の縄文晩期以前の様相を探ってみることにしよう。

縄文早期の生活痕跡　本遺跡の早期の生活痕跡は３ヶ所に見られる。即ち、押型文土器ＡとＢ、塞ノ神式土器の３グループで、遺跡の東半中央から南半に存在する。時期的に各々異っており、早期の３グループとして一括することはできない。

まず、押型文Ａの生活痕跡は南半の107・110号土壙を中心とするもので、土壙自体の性格は判からないが、土器の量や個体観察によって、単一時期の、しかも一回限りの生活痕跡である可能性が強い。典型的キャンプ地として利用されたものと思われる。

次に、押型文Ｂの生活痕跡は、遺跡東南中央部の押型文グリッド内のものを指す。縦位楕円形押型文土器で構成され、明らかに押型文Ａグループの土器よりも後出する。この生活痕跡で



第60図　楠田遺跡主要遺構と生活痕跡(1/600)

は、土器が複数個体みられ、出土レベルも上下に若干差があり、同時期間に複数回の生活が在ったと考えられる。位置的に、河岸段丘の最もへりから少し上がった、中心の高位置にあたり、微地形的にみて最良の選地であったと考えられる。東側背後にせまった山塊と段丘へりとの中間位置にあたり、狩猟・採集時のキャンプ地として良好であったろう。

次の塞ノ神式系土器の生活痕跡は、遺跡東半の南半に在るが、これは同一個体の散在であり、偶意的な事由による可能性も払拭できない。ただ、各破片が9m程の範囲に在り、偶々移動中の当時の人が捨てたにしては離れており、やはり単一時期の一回だけの生活痕跡と把えた方がよかろう。

そうすると、以上述べてきた、縄文早期の3ヶ所の生活痕跡は、いずれも遺跡の東半の中央～南側に集まっており、やはり、この河岸段丘上でもより中心の高めの部位を意識的に選んでいた可能性が強い。なお、このあたりは丁度、風倒木痕の多い部位であり、ひょっとしたら、大きな木は倒れてしまっていて自然林の中の空間地帯となっていた事も想像される。

縄文前～中期の生活痕跡　結論から先に言えば、これらの時期の生活痕跡は確定できない。即ち、前期の曽畑式・轟B式土器の破片の出土は少量みられたが、ローリングを受けた混入品であり、少くとも発掘範囲内で生活をした状況とは考えられない。中期の阿高式系土器片についても同様で、偶意性を否定しきる部類ではなく、生活痕跡があるとは確定し難い。

縄文後期後葉の生活痕跡　後期後葉の西平式・太郎迫式・三万田式等の、磨消縄文系・凹線文系の土器等は、本遺跡では全体の出土量からみると少量に属するが、横断道遺跡内では最もまとまった量の出土であり、資料としても利用価値は高い。ただ、遺構の確認ができておらず、集落としての検討が難しい所である。そこで、遺物の分布状況により生活痕跡の復原を試みることにする。本遺跡内では、後期の生活痕跡とみられる部分が3ヶ所認められた。いずれも遺跡の中央部で、南北に縦に各々離れて位置する。

まず、後期Aとした南端のグループは、104・109号土壙の範囲のもので、完形土器を含むが全体としては少量の遺物群である。ただ、本文中でも詳述した如く、109号土壙は小規模ながら竪穴住居跡の可能性も残している。このような事から、この後期A生活痕跡は、複数回程度の小規模な居住がなされたと考えることができる。

次の後期B生活痕跡としたものは、遺跡中央部の、晩期後葉～弥生早期の遺構が最も密集する部分と重複している。範囲が南北に20m程と広く、単純な生活痕跡とは言えない。これは、複数の生活痕跡が重複している為か、或は、季節的キャンプ地が定められていて、毎年少しずつずれた位置となってしまった為か、または、晩期後葉～弥生早期の竪穴住居や土壙墓の掘削等の活動によって、後期の土器片が散乱したことも考えられる。いずれにしろ、個体数もあり、時期幅も若干認められることから、この後期Bの生活痕跡は、数世代にわたる複数回の生活痕跡と考えることができる。この一定の範囲の中が意識的に季節的居住地として定められていた

と想定することもできよう。

次の後期Cとした生活痕跡は、遺跡の最も北端に位置し、後期B生活痕跡とは15m程離れている。土器の出土量は少ないが、周辺の地形からみて、まだ北側の発掘範囲外に拡がる可能性がある。このグループの全体像は判からないが、他グループとは全く別の生活痕跡である事は間違いなかろう。

以上のように、縄文後期後葉の生活痕跡は3ヶ所に認められ、各々実態が異ることがわかったが、厳密に各生活痕跡間での時期差を認めるのは困難で、むしろ各生活痕跡内での時期幅の存在は明らかである。このことは、可能性としては、これら3生活痕跡が或る時には同時使用されたことも考え得る。そうすると、ここに複数の居住施設を持つ、集落形態状の遺跡内構造を見ることはできないだろうか。集落形態を持つとすれば、その原因は何であろうか。山塊を背後にひかえ、眼下に大沖積平野を見降す河岸段丘上は、狩猟・採集活動の拠点としても、極めて好位置であることは間違いない。

ここで、石器の出土状況を振り返ってみよう。打製石鏃は全体で9点、石錐1点、スクレイパー・使用剥片6点、磨製石斧2点、偏平打製石斧24点となる。打製石鏃は縄文早～前期や、晩期後半～弥生早期のものも含まれるだろうから、この縄文後期後葉段階のものはこの半分以下の5本未満と考えることができる。これに対して、偏平打製石斧は周辺遺跡出土状況から、晩期後葉古段階がまとまって出土する下限であることから、当楠田遺跡の各時期の土器の出土率からみて、この後期後葉段階の偏平打製石斧は総数24点のうち少なくとも2/3以上を占めるものと考えられる。以上のように、当該時期の石器の主体は明らかに偏平打製石斧であり、狩猟具である打製石鏃の比率はあまりにも低い。これは、やはり後期後葉代におけるこの河岸段丘上の居住の主因が、畑作農耕にあったと考えざるを得ないだろう。ただし、この居住は大規模な集落構成ではなく、数軒程度の小規模なものであったろう。しかし、そこには共同作業を目的とする最小単位の共同体発生の萌芽が推定され、重大な社会変革を感じ取ることができる。

(2) 縄文晩期～弥生早期の集落

本遺跡の主体となるこの時期の遺構・遺物は、遺跡内全面に及ぶが、中でも、遺跡中央部北半に集中している。竪穴住居跡4軒もここで検出された。また、出土土器からみると、晩期後葉新段階(黒川式新期)・晩期末葉・弥生早期前葉の時期に集中しており、竪穴住居跡や土壙墓群・土壙群のかなりのものがこの時期のものと考えられる。

竪穴住居跡　竪穴状遺構の1～3号が遺跡の南西隅付近にみられるが、これらが縄文晩期～弥生早期のものであれば、遺跡中央の1～4号竪穴住居跡のグループとは別のグループが存在していたことになる。この遺跡内での複数住居グループの存在は、後世の弥生時代の集落構造へと継がるものであろう。

中央の１～４号竪穴住居群では、３・４号住居が各々他の１・２号住居に切られており、同時併存した住居数は２～数軒程度であったことがわかる。遺跡全体に遺物が拡がっていることからみると、他にも削平されてしまった竪穴住居がかなり在ったと考えられる。ただ、そうだとしても、この発掘範囲を含む段丘上では、最大見積っても10数軒を越えない程度の同時併存状況であったと推定される。集落規模については、当時としても、中・小集落のひとつであったと位置付けられる。

竪穴住居跡の構造は、一辺が３～４ｍの方形プランの掘り込み内に、小ピットは多くみられるが、主柱穴配置をとる上屋構造ではなく、屋内炉の位置もはっきりしないものである。同じ杷木町所在の縄文晩期中葉新～後葉中段階の集落とされるクリナラ遺跡では、一辺３～５ｍの方形竪穴住居跡群が調査されている。そこでは幾つかの住居で、壁沿いの小さなピット群が並んで、壁体構造を想定させてくれる。また、多くの住居跡内で、焼土塊が中央ではなく、壁寄りに片寄った位置に見つかっており、炉との推定が考えられている。当楠田遺跡においても１号住居跡の北寄りの位置に焼土部分がみられ、共通する状況を示している。ただ、楠田遺跡住居跡においては壁沿いの小ピット列は見られない。一方、弥生早期の代表的遺跡である二丈町曲り田遺跡では、一辺が５ｍ前後の平均的規模となりやや大きくなってきており、さらに、４主柱と思われる住居が２軒みられる。炉はうち１軒に中央より片寄った位置に焼土部分がみられ、前時代からの連続が認められる。以上のことから、クリナラで代表される晩期中葉新～後葉では、方形で壁沿い小柱穴群の壁体構造で、炉は掘り込みを持たずに壁寄りに片寄った位置にある住居形態をなし、晩期末葉～弥生早期前葉になると、楠田・曲り田遺跡にみられる如く、柱穴配置が不明なものが大半で、４主柱穴となるものが少し現われ、住居面積も幾らか大きくなる。炉も前時代の位置を踏襲するものが残る。これらの変容は、方形住居という伝統の中での漸移的な変化として把えることができよう。

更に、弥生早期中～後葉に至ると、粕屋町江辻遺跡に代表される、半島の円形住居の影響を受けた松菊里型住居が成立し、以後の日本の弥生時代円形住居全盛時代へと展開してゆく。以上の大きな視点からは、当楠田遺跡の方形竪穴住居群は、方形住居で構成される集落として最後の段階のものであり、第二次外来文化流入を控えて、伝統的形態を保持しながらも新たな集落形態を整えつつあった、まさに夜明け直前の姿なのであった。

土壙墓群　本遺跡では、平面形がきれいな長方形をなし、底面が平坦であったり、明らかに２段掘り状をなしたりしているものについて、本文中の検討の如く、土壙墓・木棺墓と判断した。その数は20基に及ぶ。ただ、いずれも副葬土器等はみられず、時期を確定できるものが無いのが弱点である。埋土内に混入した土器片や埋土の状況等から、所謂状況証拠としては、縄文晩期後葉～弥生早期のものと推定できる。中でも北半に集中する土壙墓群は、竪穴住居群と同じ刻目凸帯土器期の晩期末葉～弥生早期前葉のものと考えられる。

第60図に示したこれらの土壙墓の分布状況をみると、大きく3群に分れるようだ。まず、中央北半に集中する一群（13・24・25・27・101・102・103・113号土壙）は、長軸が北東から南西となるものが多く、方向の規制が認められる。また、これらのうちの101・102号土壙では、本文中で詳しく検討した如く、幅50cm、長さ1m内外の寸詰まり長方形の木棺の使用が認められるものがあり、他群の土壙の中にこのような寸法のものもみられ、墓と推定できる根拠にもなってくる。因みに、志摩町新町遺跡の支石墓の下部構造には、幅50cm前後で長さ100～130cm前後の木棺墓痕跡が認められ、弥生早期～前期のものの木棺構造がわかる。当楠田遺跡での木棺もこれらの系譜上にあるものと考えられる。

次の一群は、遺跡東半の中央に位置するもの（32・114～117号土壙）で、長軸方向が北北西から南南東になるものが多く、方位の規制が認められる。この中にも、115号や117号甲主体のように二段掘り形態をなすものがあり、寸詰まり木棺の使用が考えられる。この一群も時期の確定ができないものが多い。

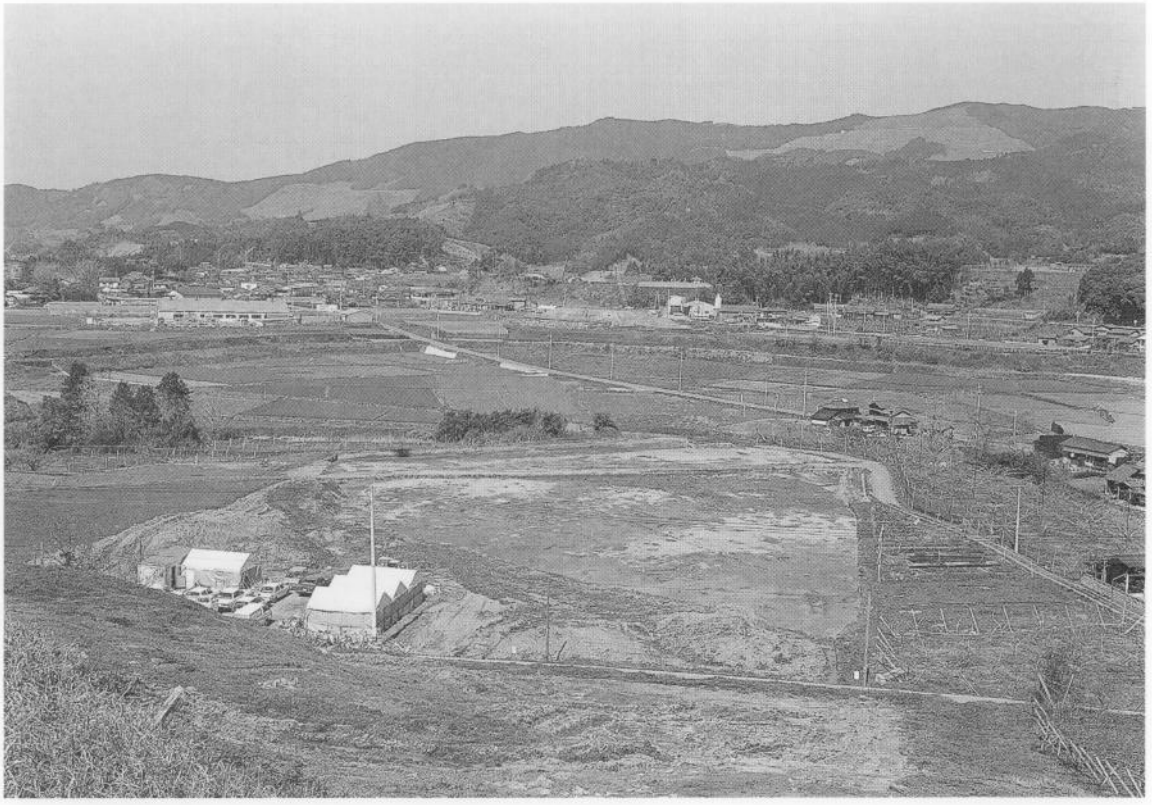
更に、遺跡の東南辺に点在するようにして東西に連なる一群（31・39・45・112・118号土壙）がある。長軸方向はあまり揃わないが、東西方向のものが多いようである。この一群も時期を確定できないものが多い。

以上の3群の土壙墓群は、各群どうしでの墓自体の構造にはそれ程違いは見られないが、主軸方位が各群ともに異る点は極めて注目される。その理由としては、各グループが時期が異ることも考えられるが、墓地を形成する際の各グループ毎の規制によると考える方が妥当であろう。そうすると、3群の墓をそれぞれに営む3グループが存在したという事になり、背後に社会規制をともにする共同体の分立が見えてくる。ここにも、小グループが幾つか集って村落共同体を形成するという、農業集落構造の萌芽が確実に見えるようである。

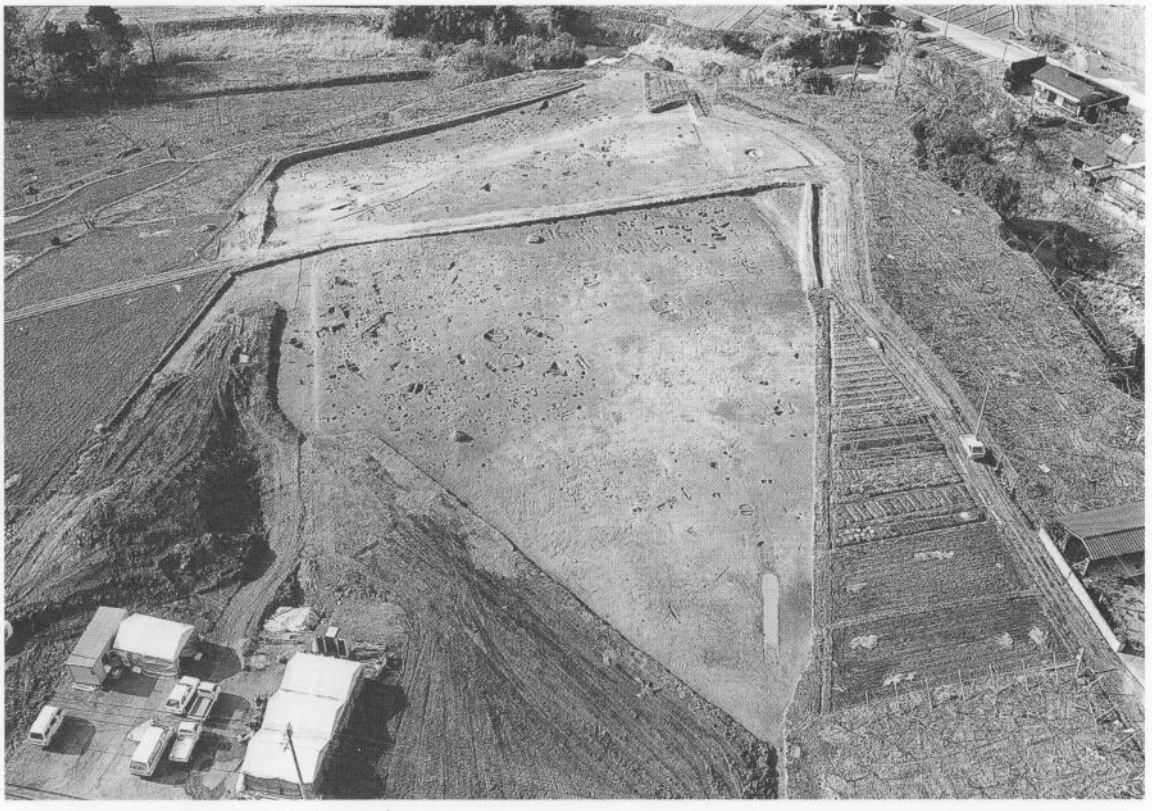
墓自体の構造としては、この近辺に大石があったという話も聞かないので、支石墓でもなかったろうが、本遺跡の北西側の赤谷川を挟んだ位置にある畑田遺跡の支石墓の報告書刊行を待って比較検討できるのではないかと期待している。

以上、縄文晩期後半～弥生早期の楠田遺跡の集落を中心として述べてきたが、住居や土壙墓等に確実に伴う土器が少くて、細かい分析ができずに、粗雑な共同体萌芽論に了ってしまった。出土土器のうち、晩期後葉代までのものは、筆者が継続して編年してきたクリナラ遺跡までの成果を出るものではないので再論は避ける。また、刻目土器・刻目凸帯土器については、柿原Ⅰ縄文遺跡と極めて良く似た状況であり、従来からの論を更に展開する予定であったが、楠田遺跡内での共伴状況や層位的分離が明確にできなかったため、次回に譲ることとしたい。少くとも晩期後半の凸帯付土器からの刻目凸帯土器の発生はあり得ないものと考える。はじめに刻目ありき、だろうと考えている。（中間研志）

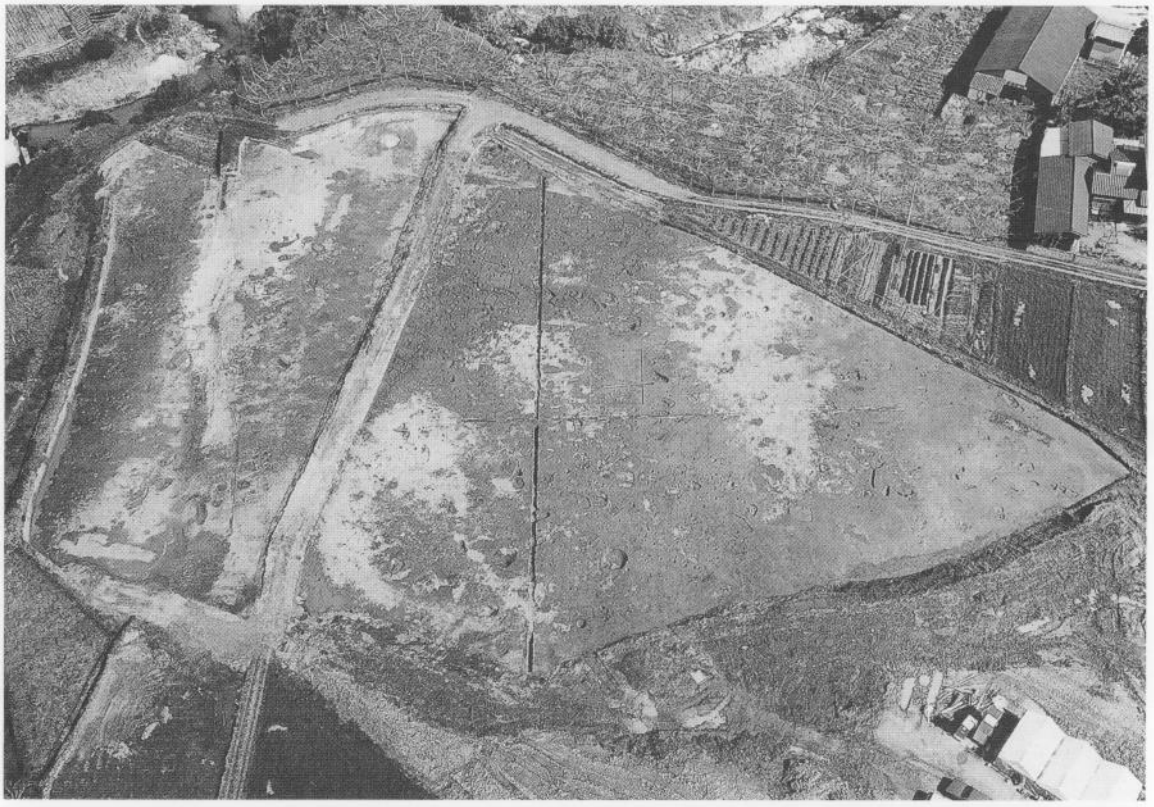
図　　版



1　楠田遺跡遠景（南東から）

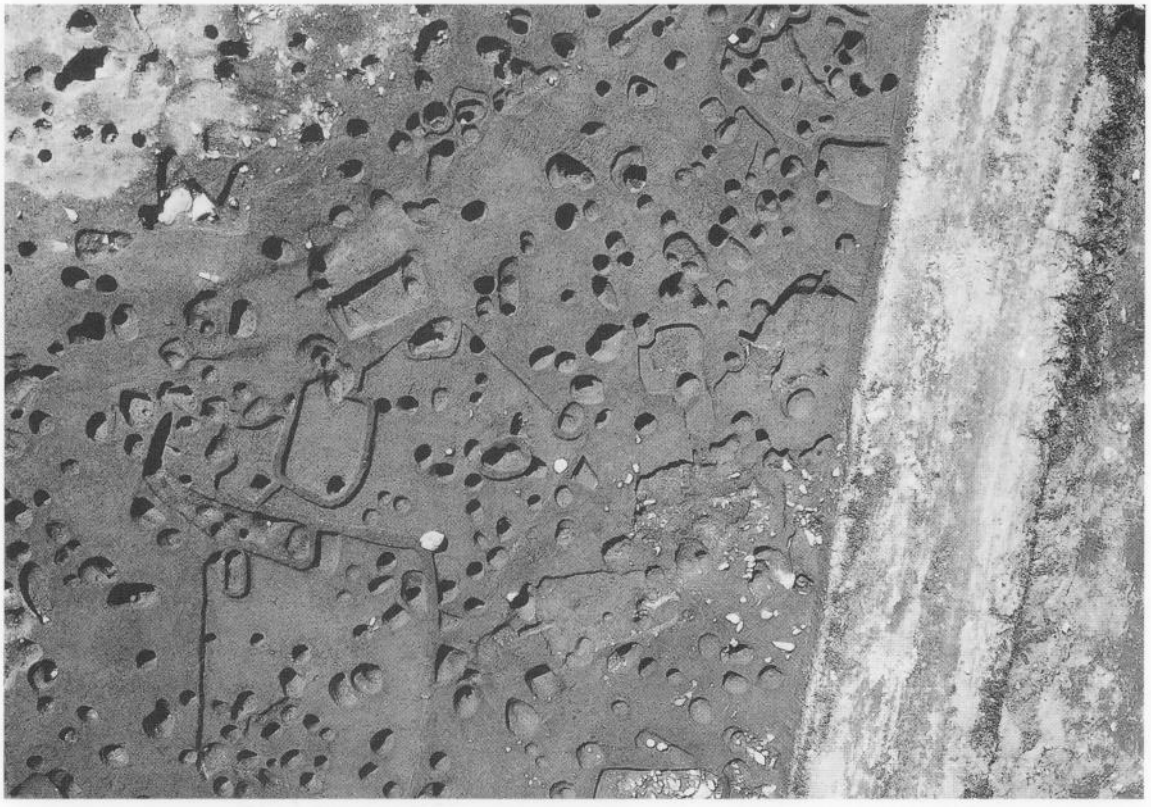


2　楠田遺跡全景（上層）（東から）

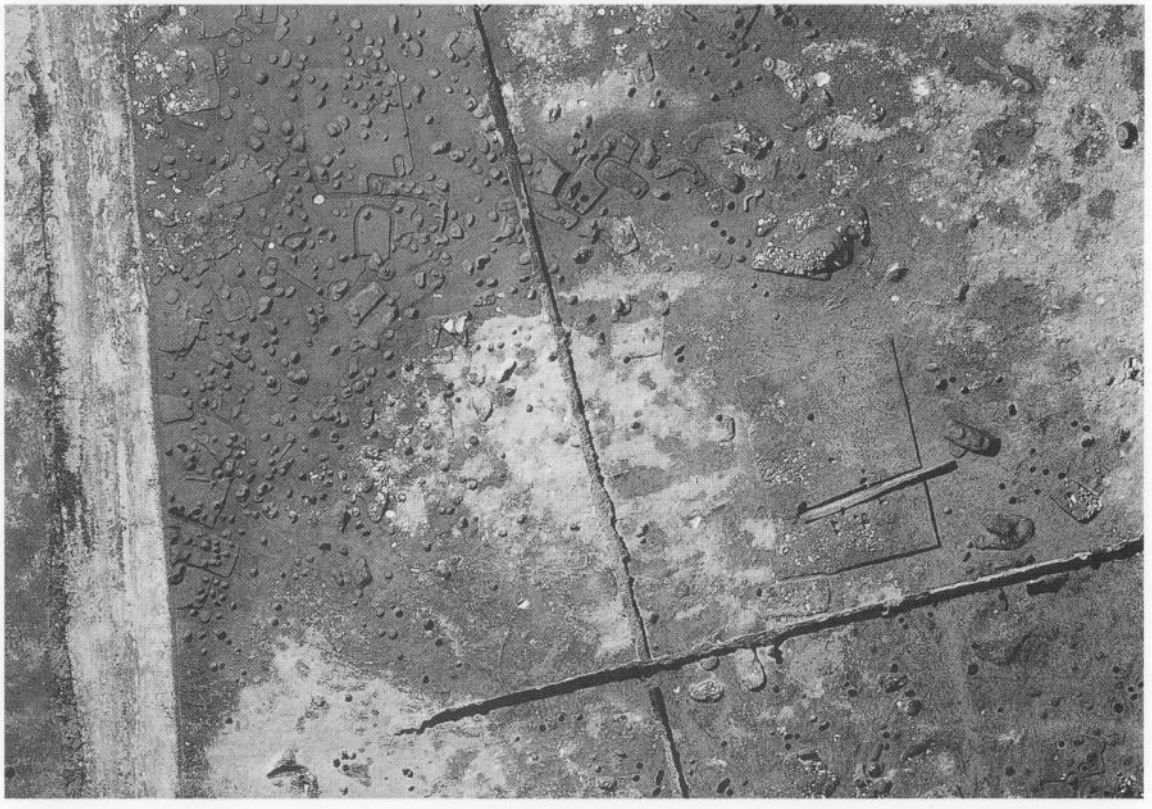


1　楠田遺跡全景（下層）（南から）

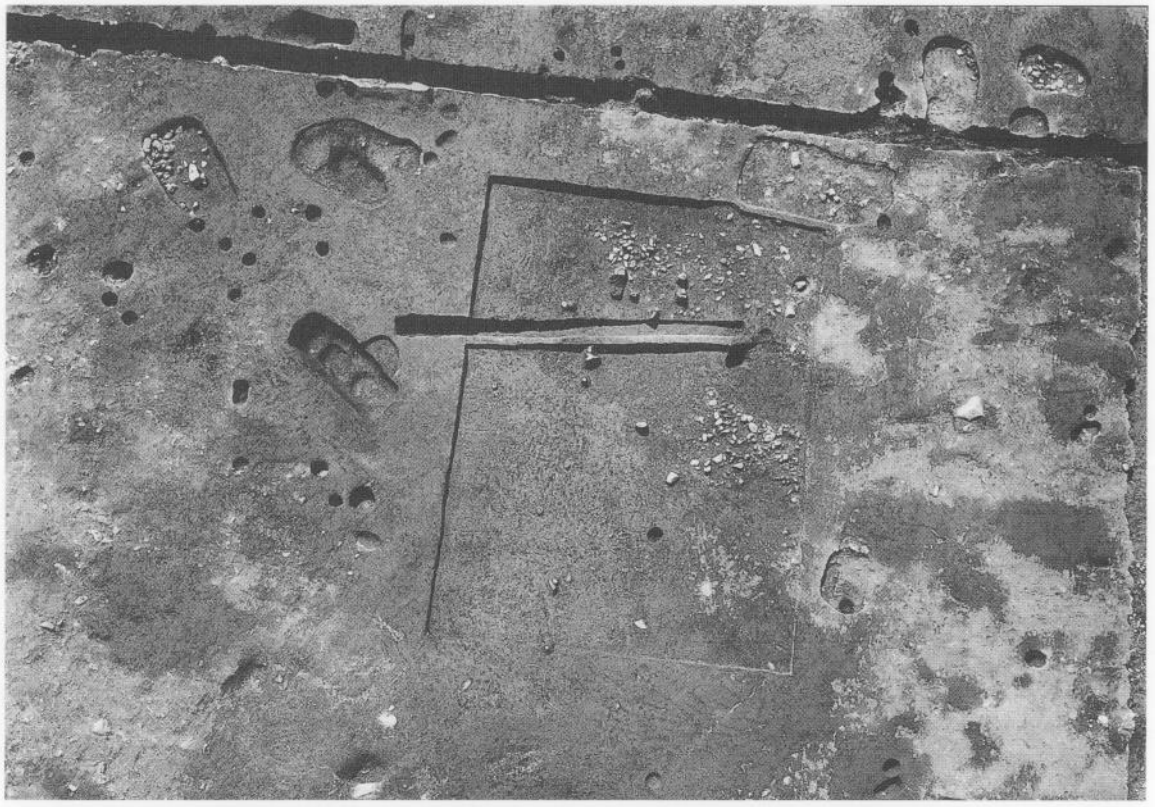
2　下層北端中央付近遺構集中部分（南から）



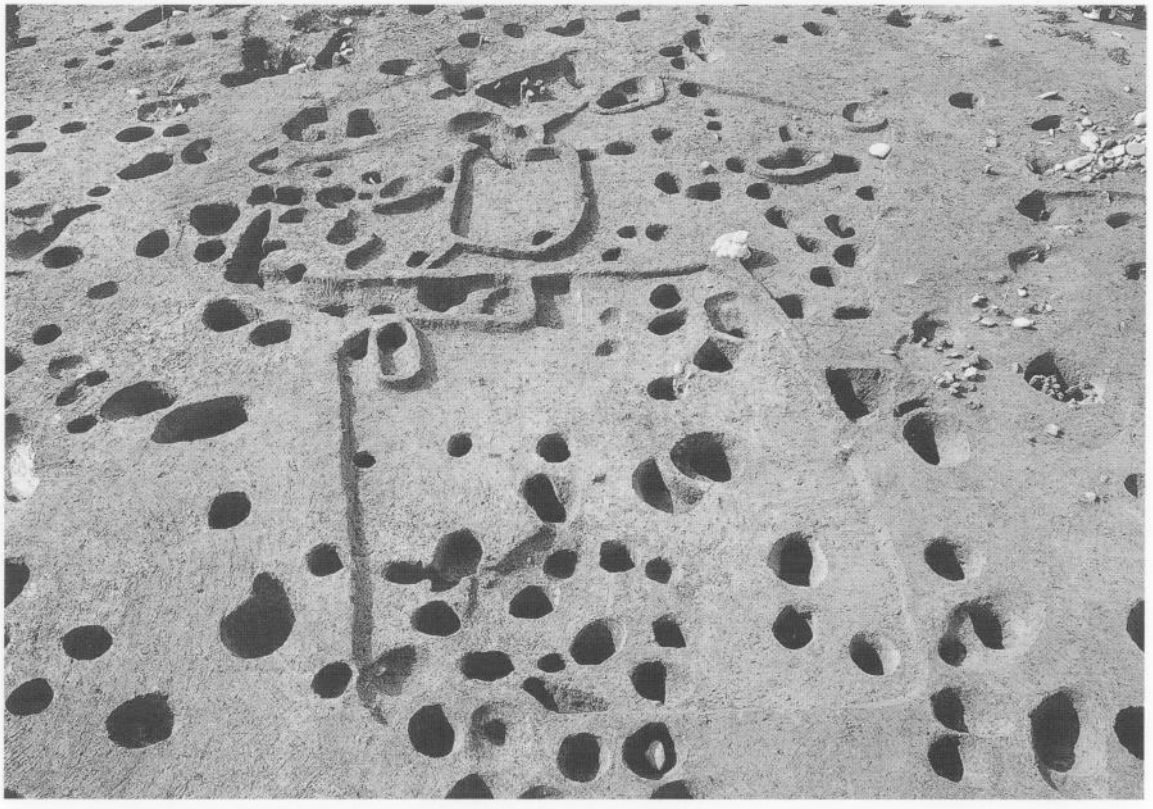
1　1・4号竪穴住居跡付近遺構集中部分（北上空から）



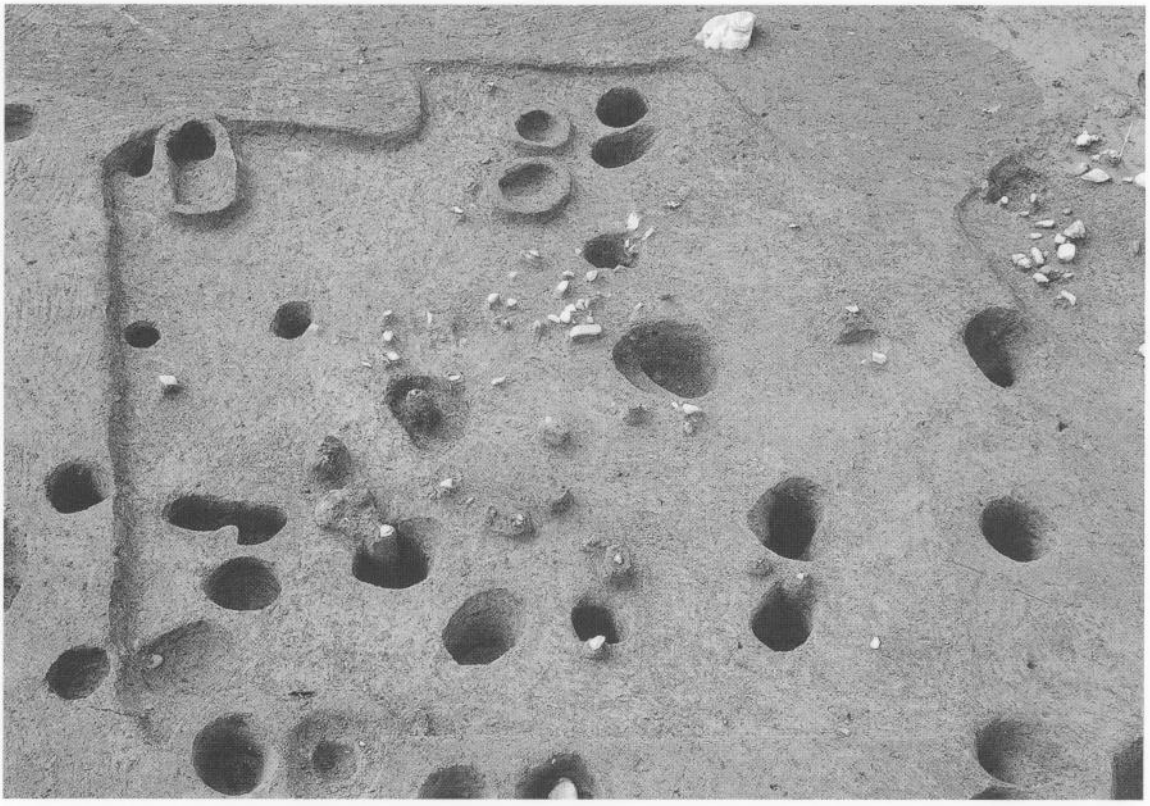
2　遺跡中央部十字トレンチ付近（南上空から）



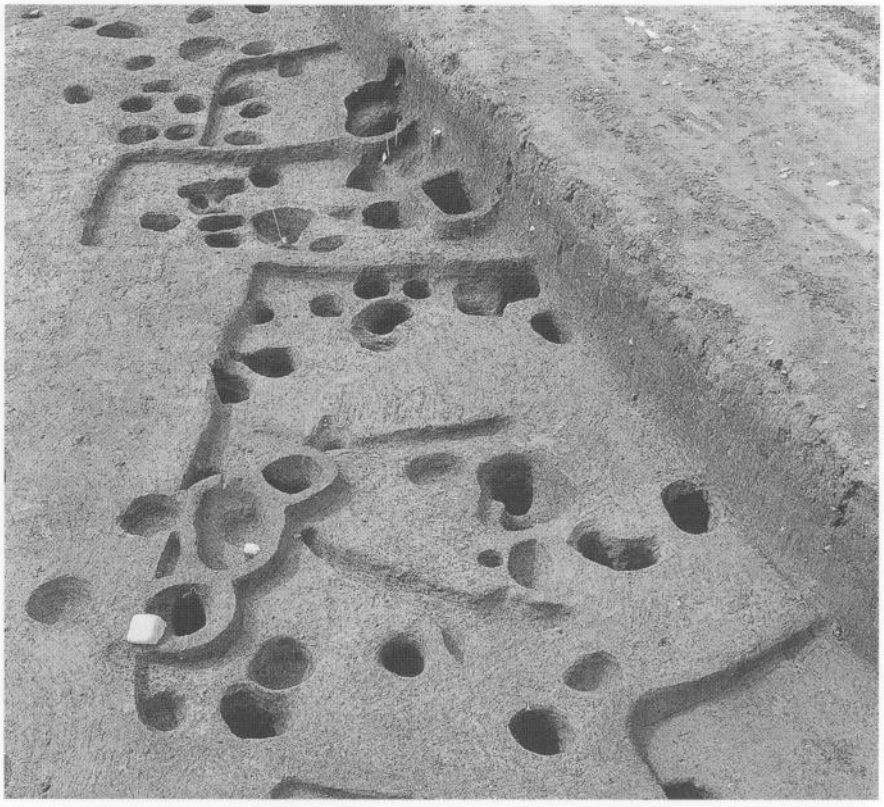
1　押型文グリッド付近（北上空から）



2　1・4号竪穴住居跡（北から）

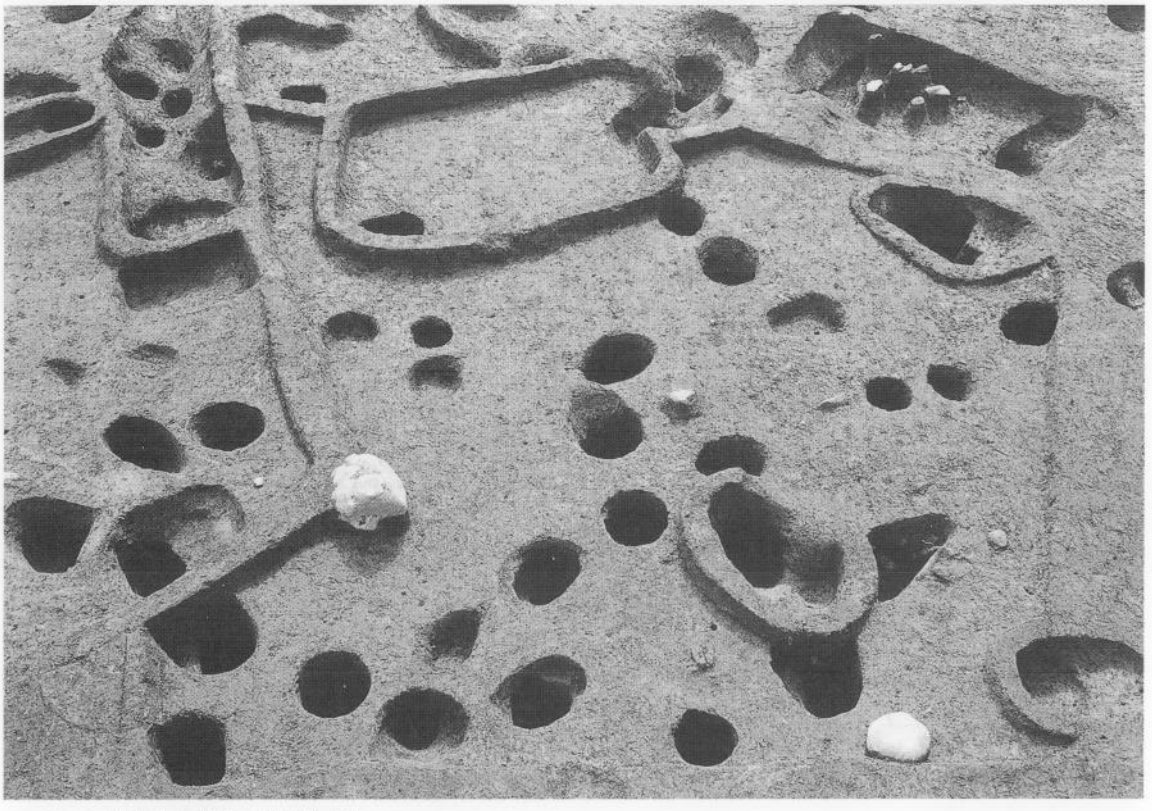


1　1号竪穴住居跡（北から）



2　2・3号竪穴住居跡（北から）

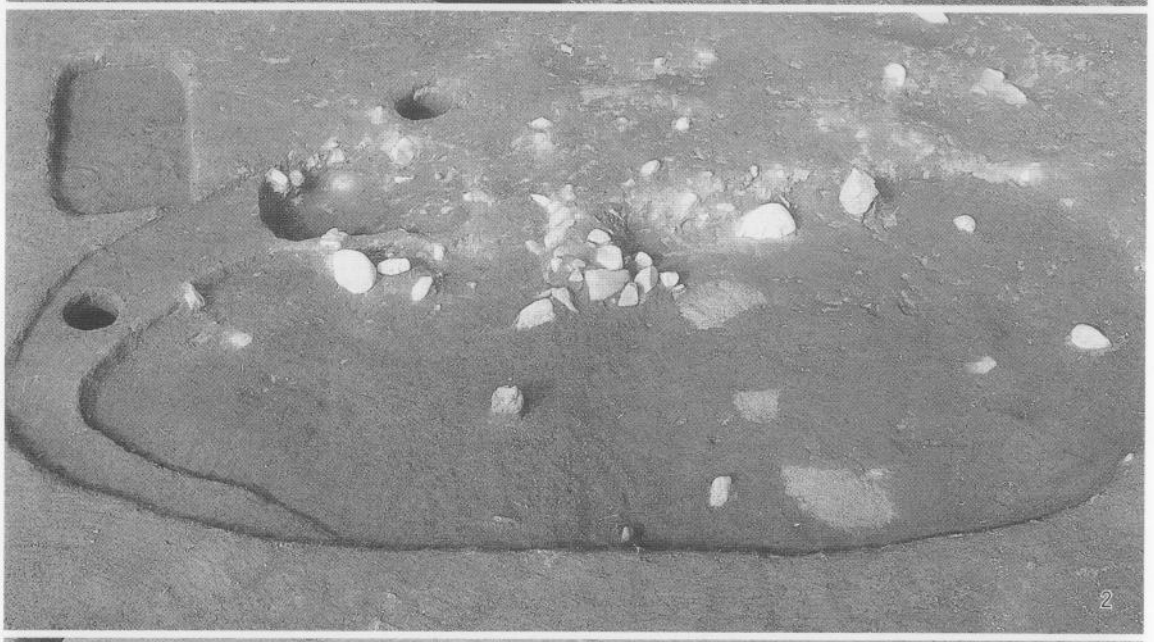
1　2号竪穴住居跡（南東から）

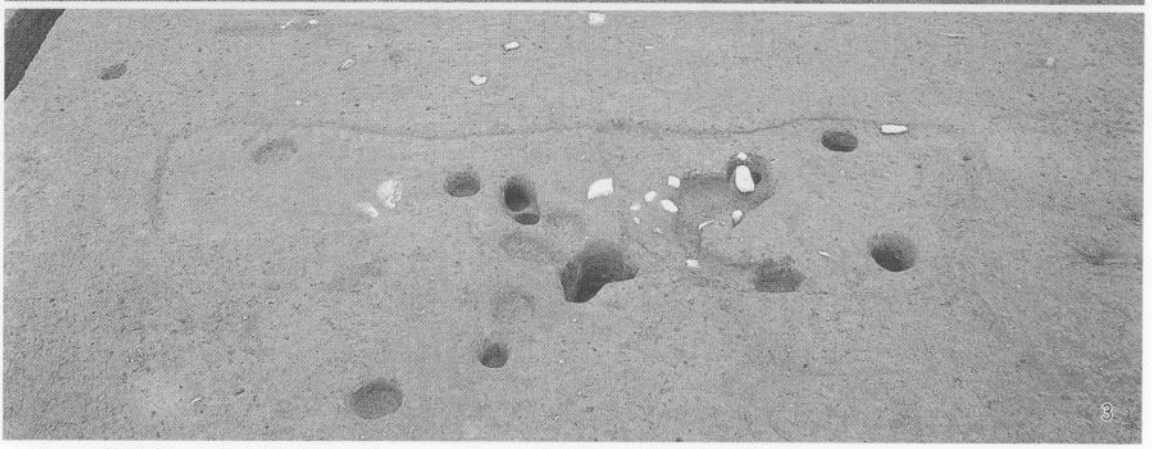


2　4号竪穴住居跡（北西から）

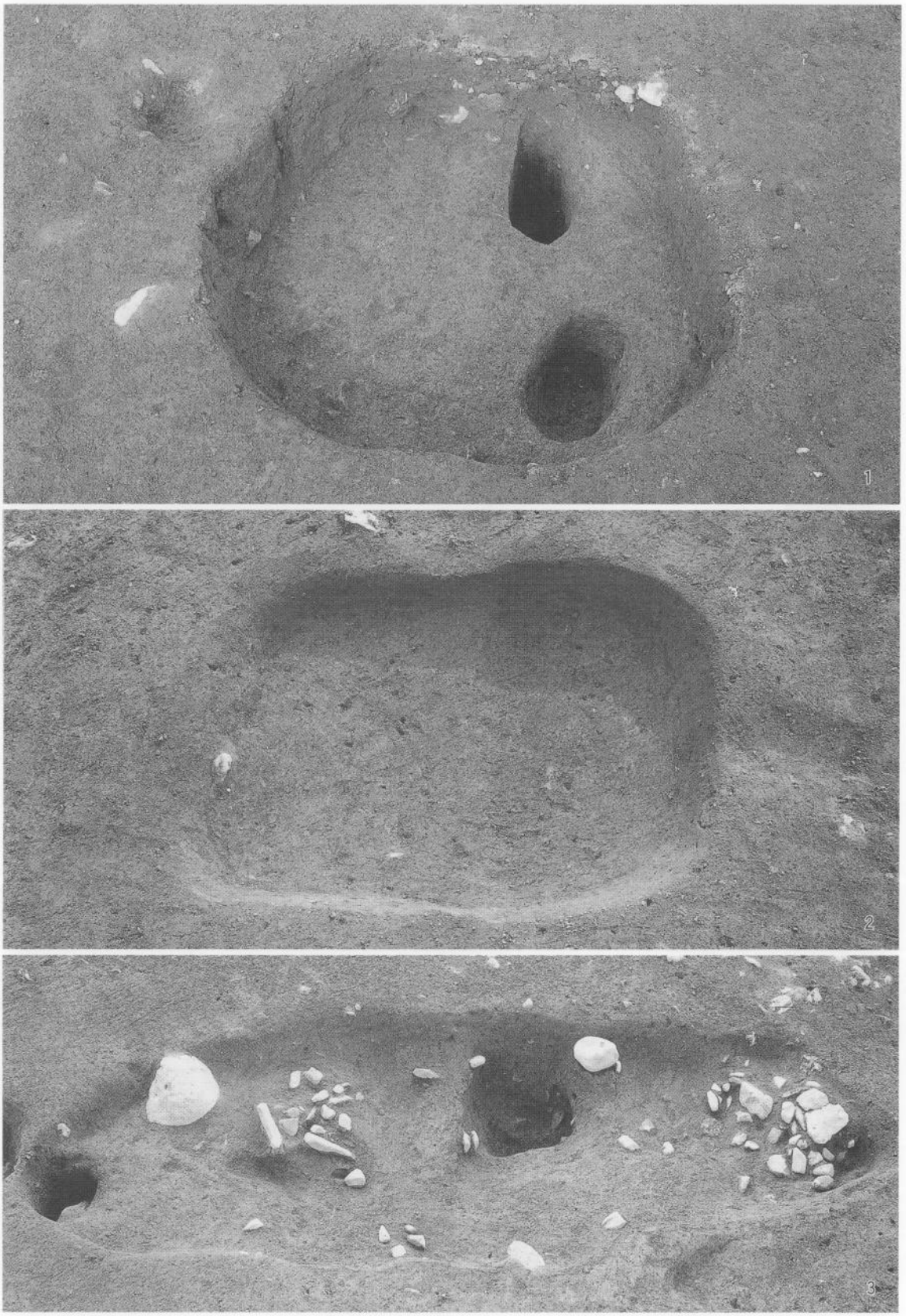
1　1号竪穴（西から）

2　2号竪穴（北から）

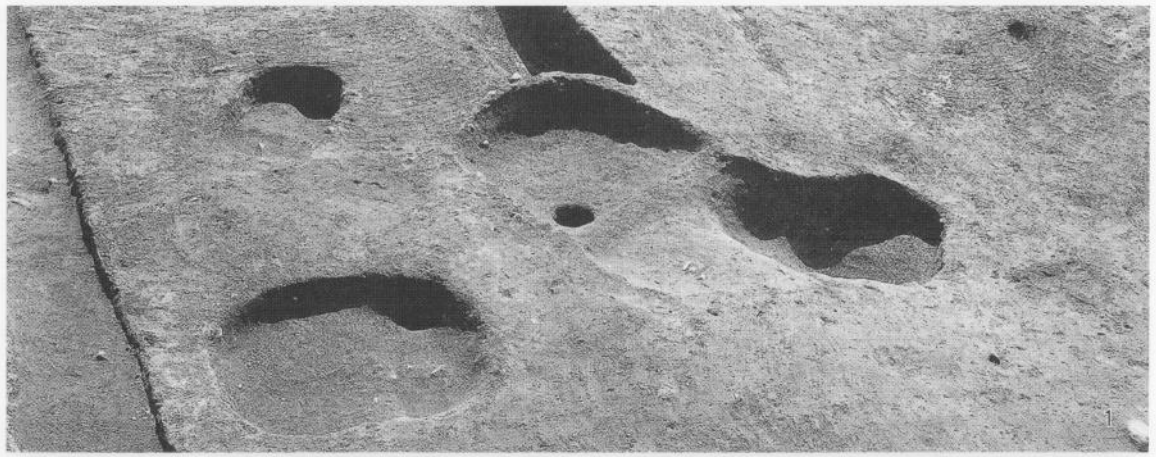




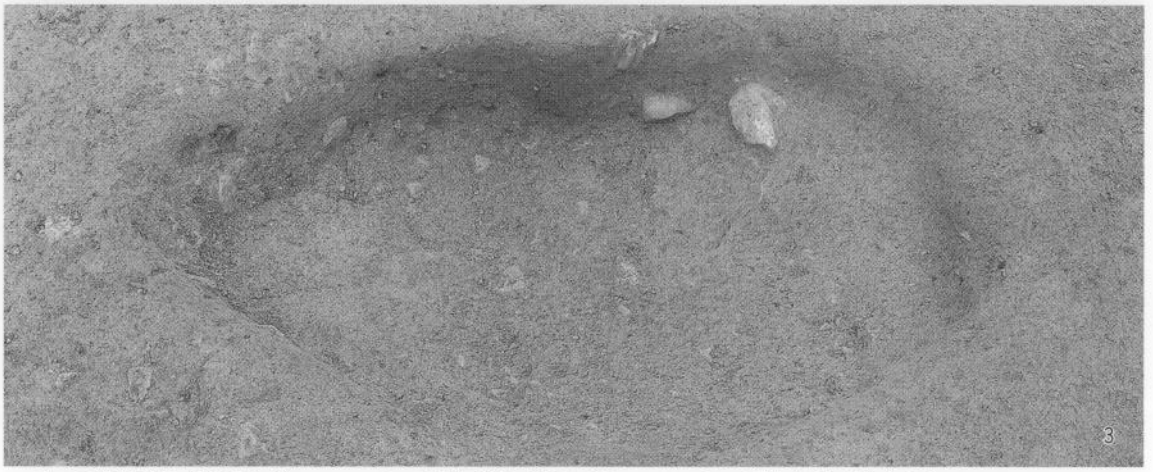
1　3号竪穴・4号土壙（北から）　　2　4号竪穴・32号土壙（南から）
3　5号竪穴（南から）



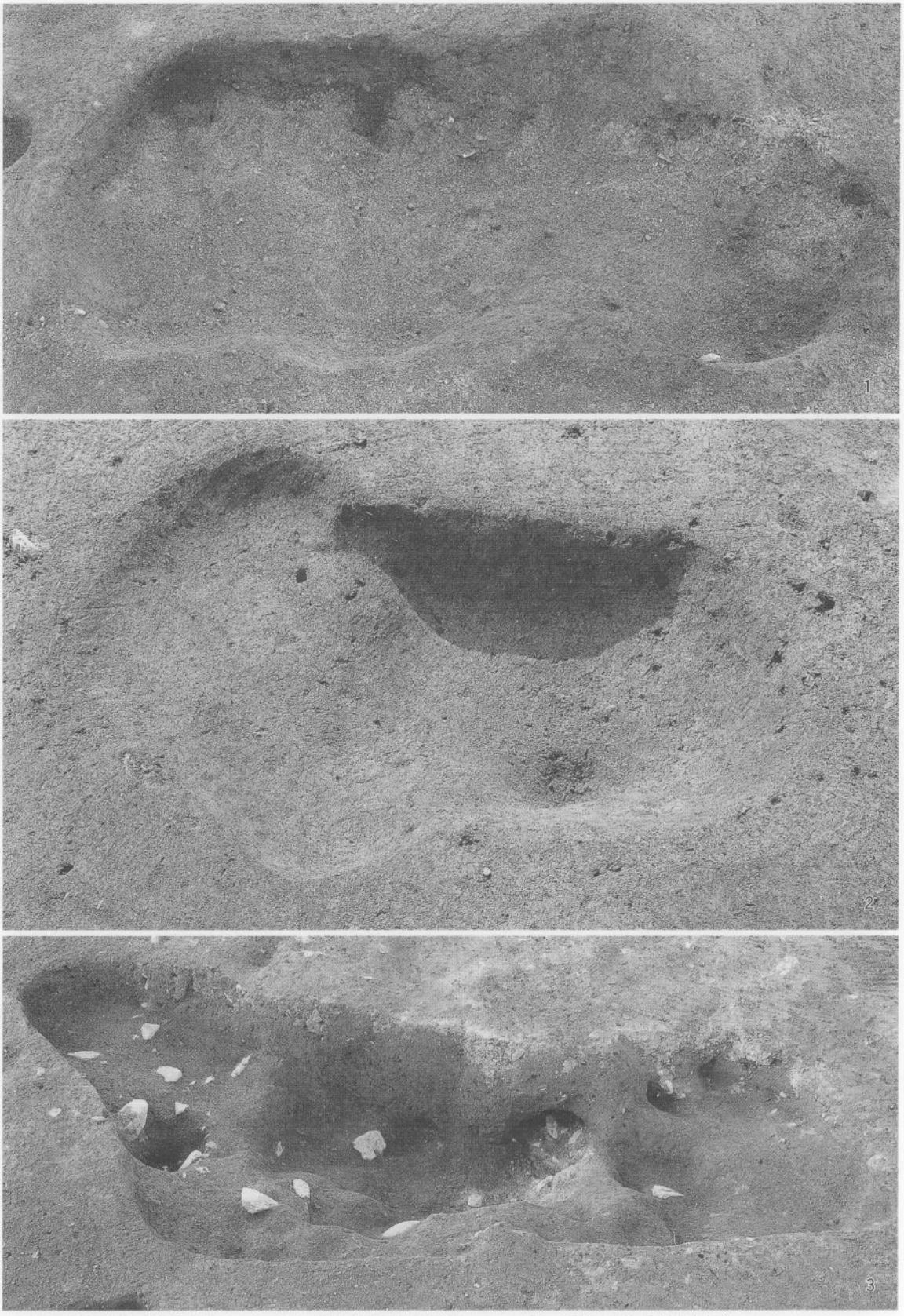
1　4号土壙（西から）　　2　11号土壙（東から）　　3　12号土壙（北西から）



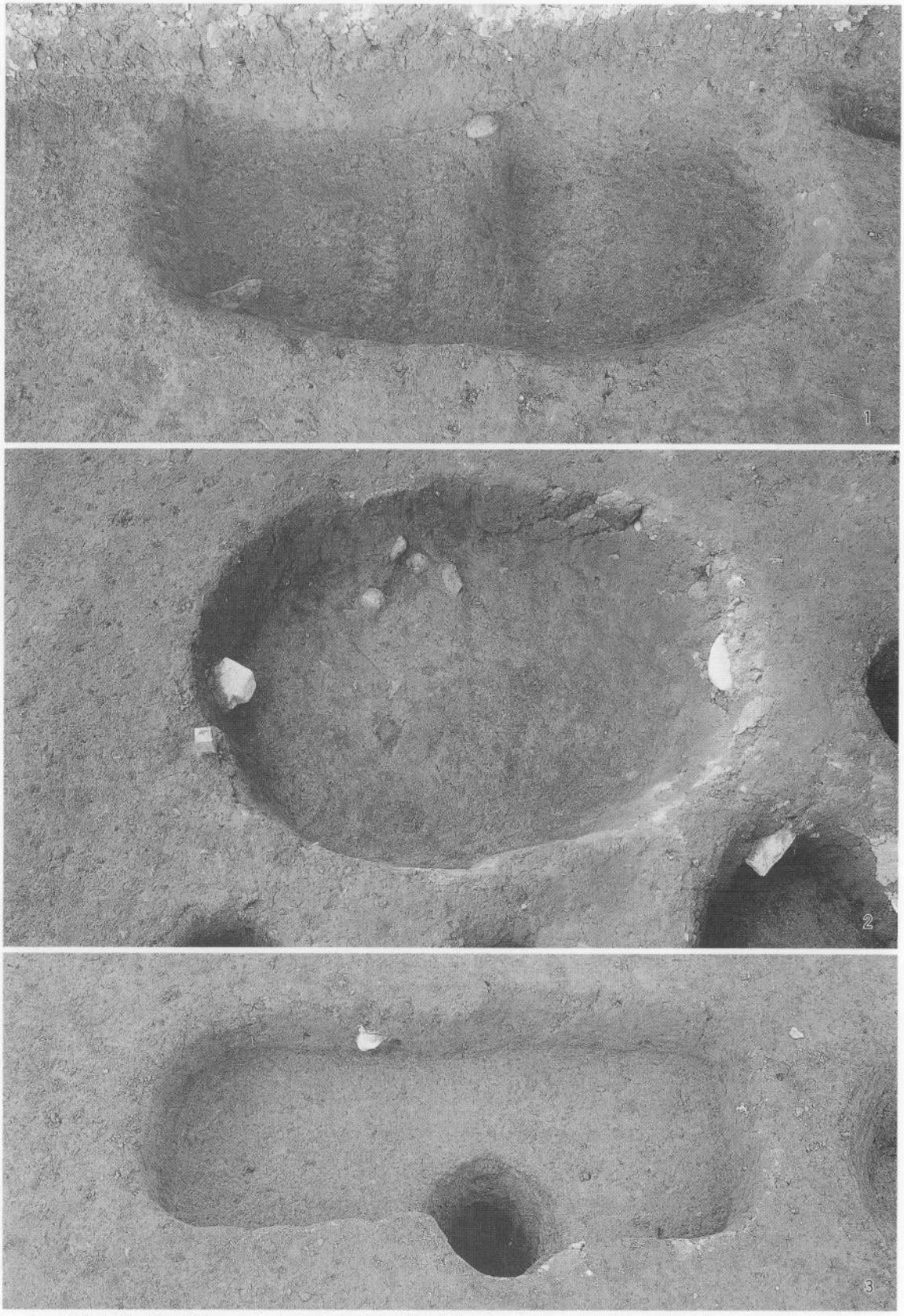
1　5・6・8号土壙（北から）　　2　10号土壙（北から）　　3　15号土壙（南西から）



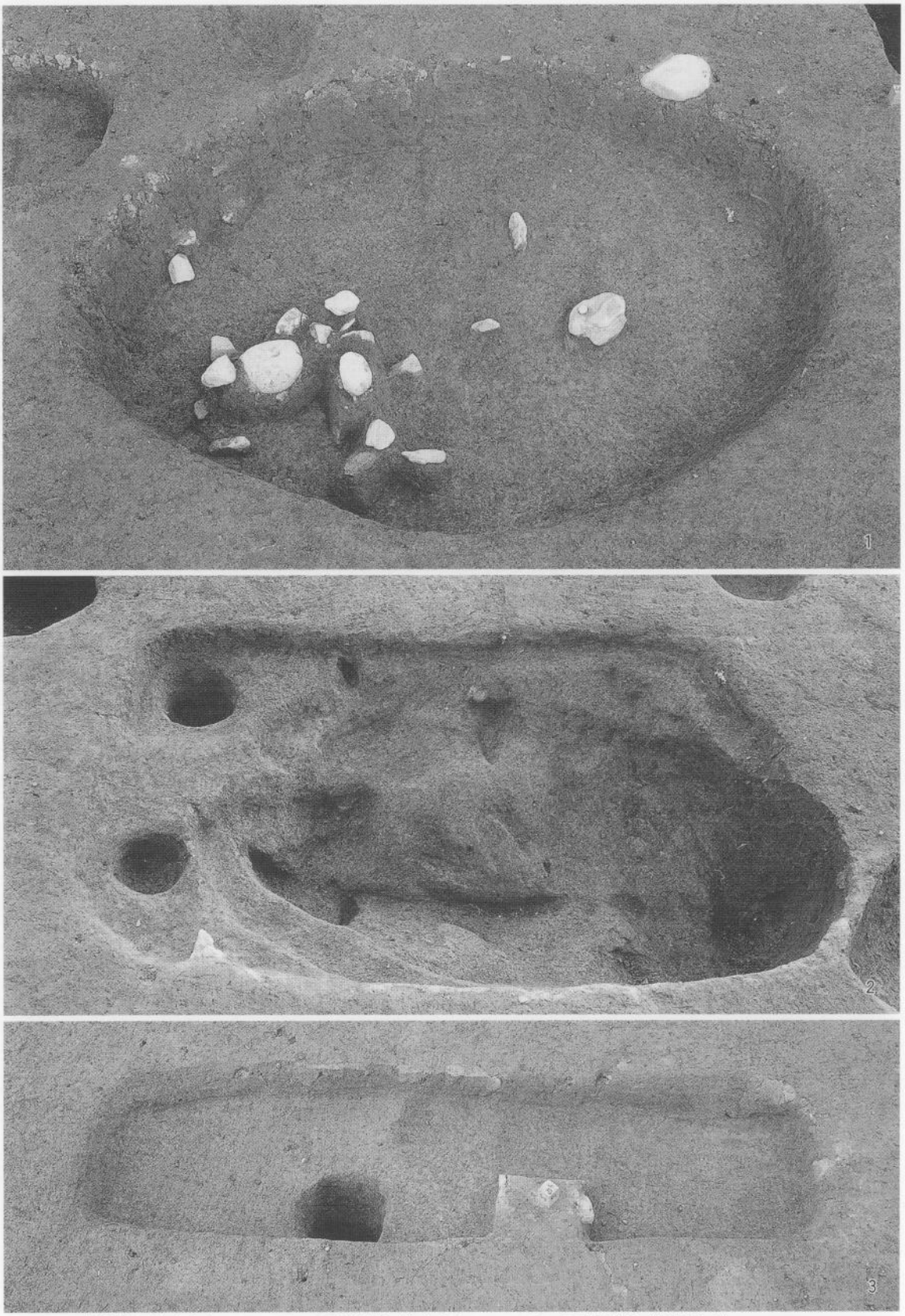
1　14号土壙（南東から）　　2　16号土壙（南から）　　3　17号土壙（北から）



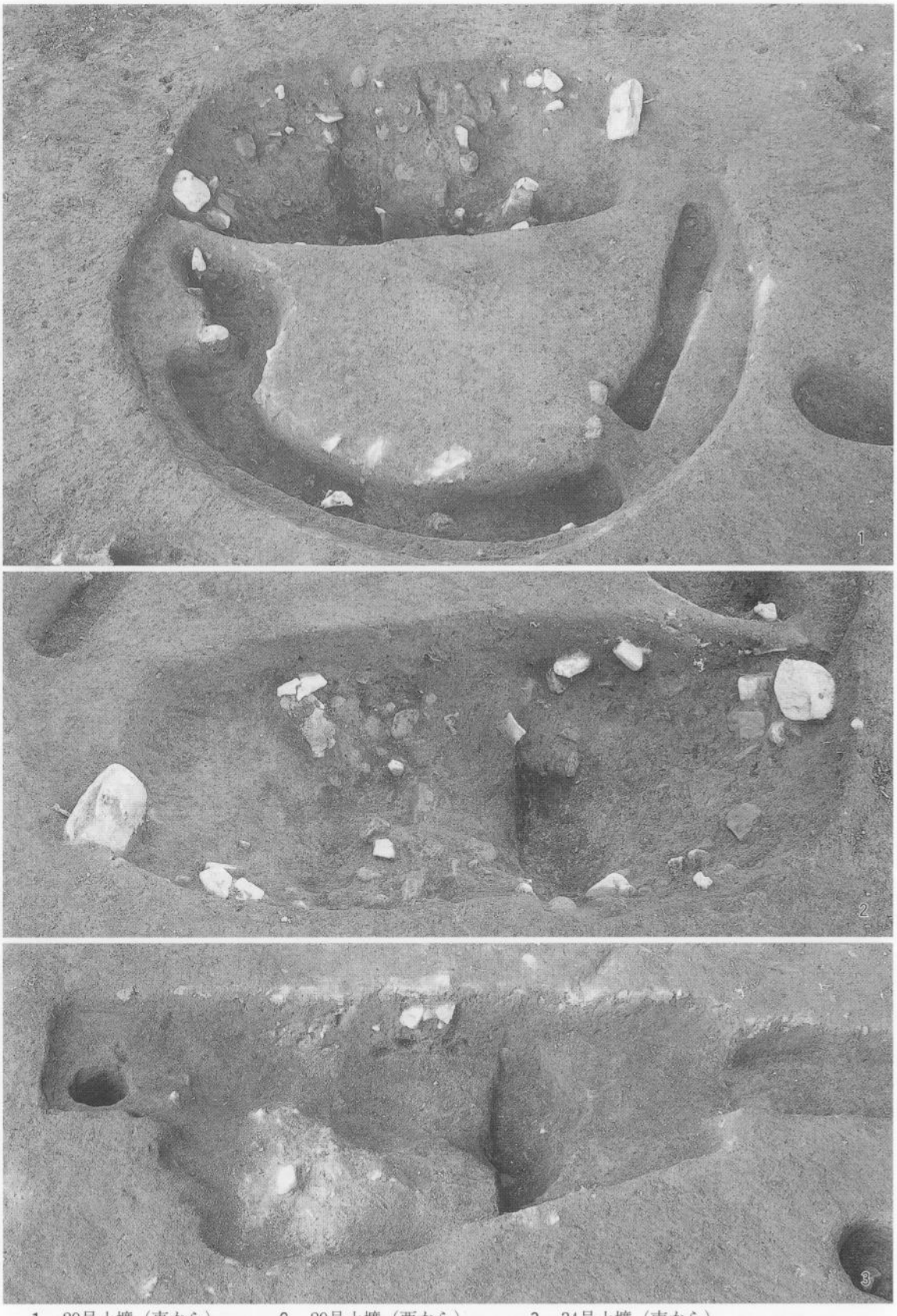
1　18号土壙（北から）　　2　20号土壙（北から）　　3　21号土壙（南東から）



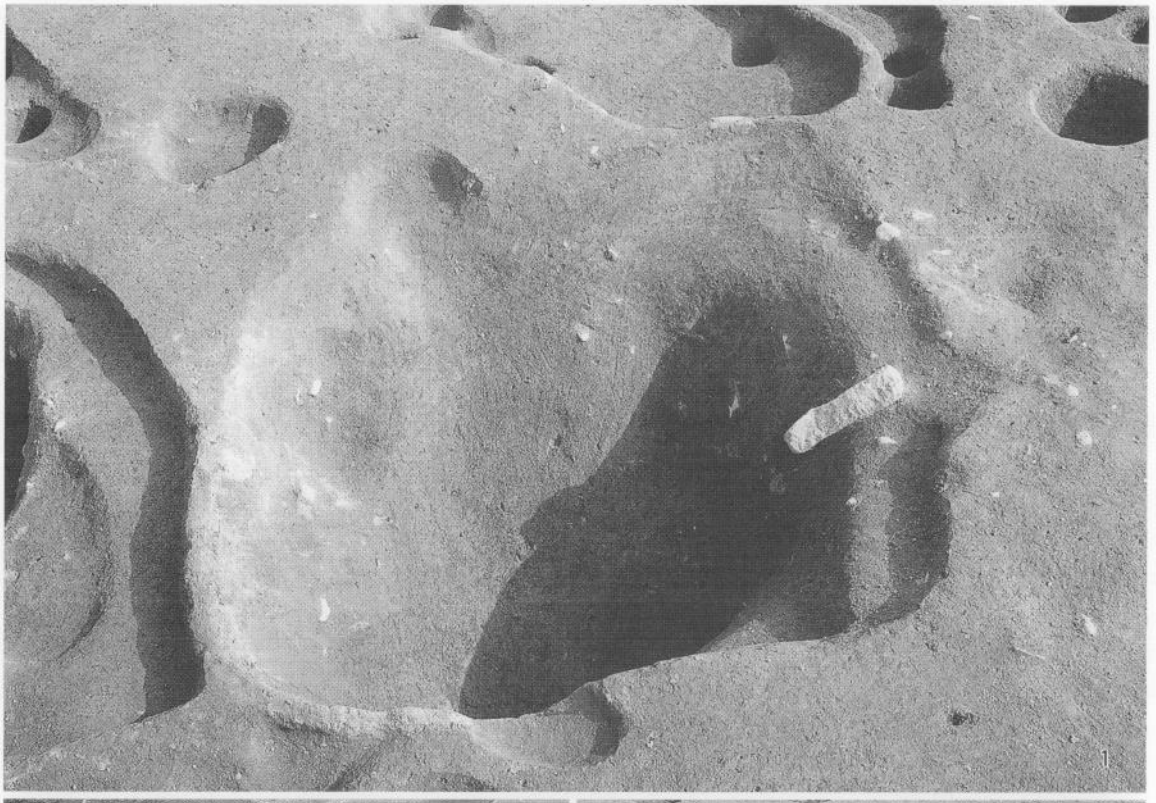
1　22号土壙（東から）　　2　23号土壙（東から）　　3　24号土壙（東から）



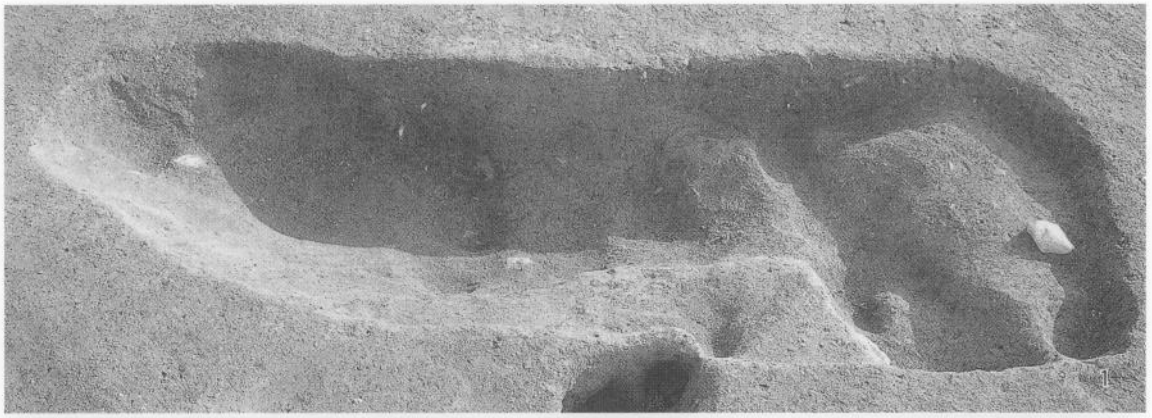
1　28号土壙（南から）　　2　30号土壙（北から）　　3　31号土壙（南東から）

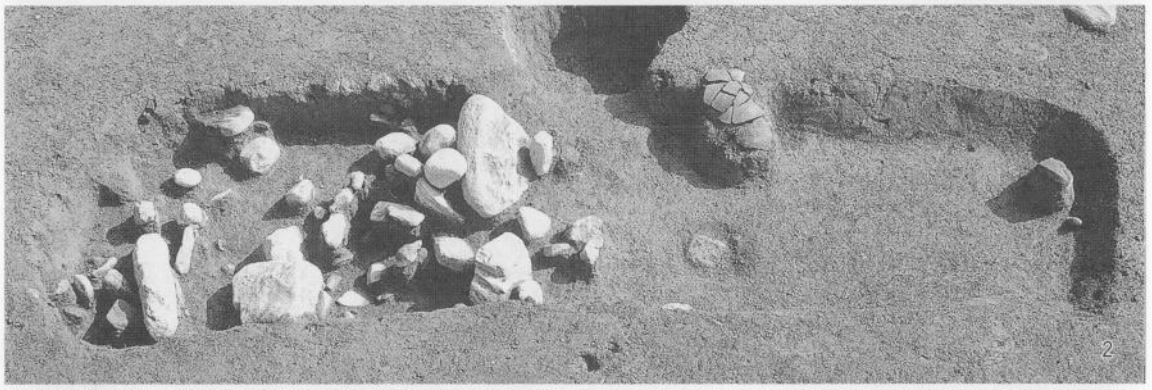


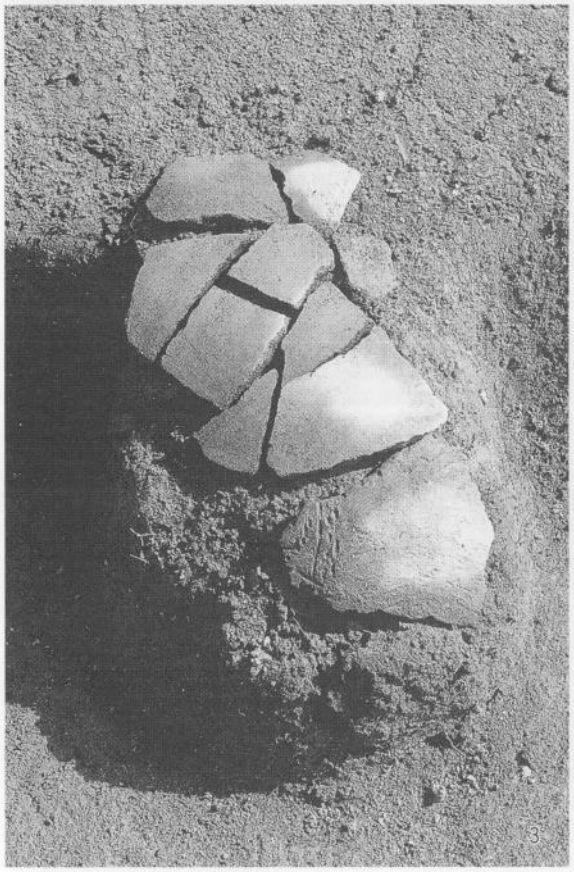
1　29号土壙（東から）　　2　29号土壙（西から）　　3　34号土壙（南から）

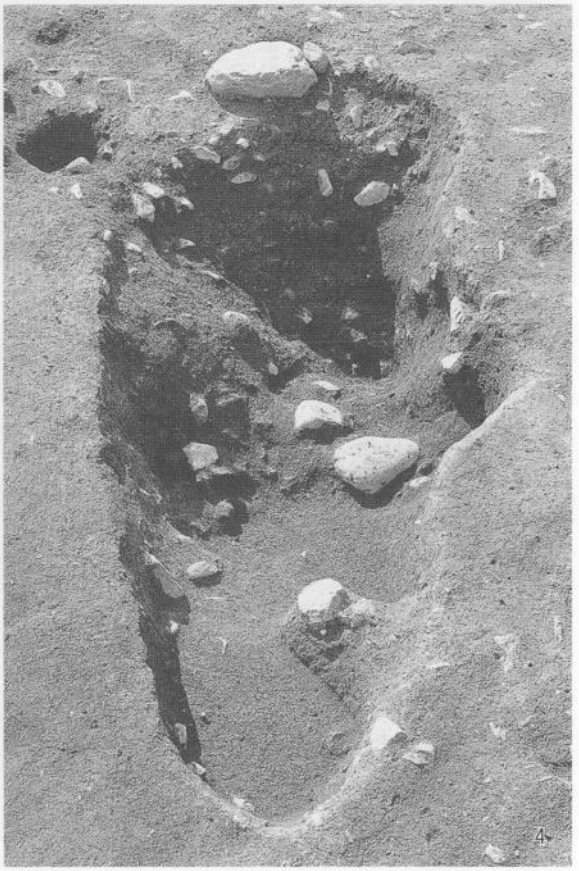


1　38号土壙（北西から）　　2　40号土壙（西から）　　3　41号土壙（東から）

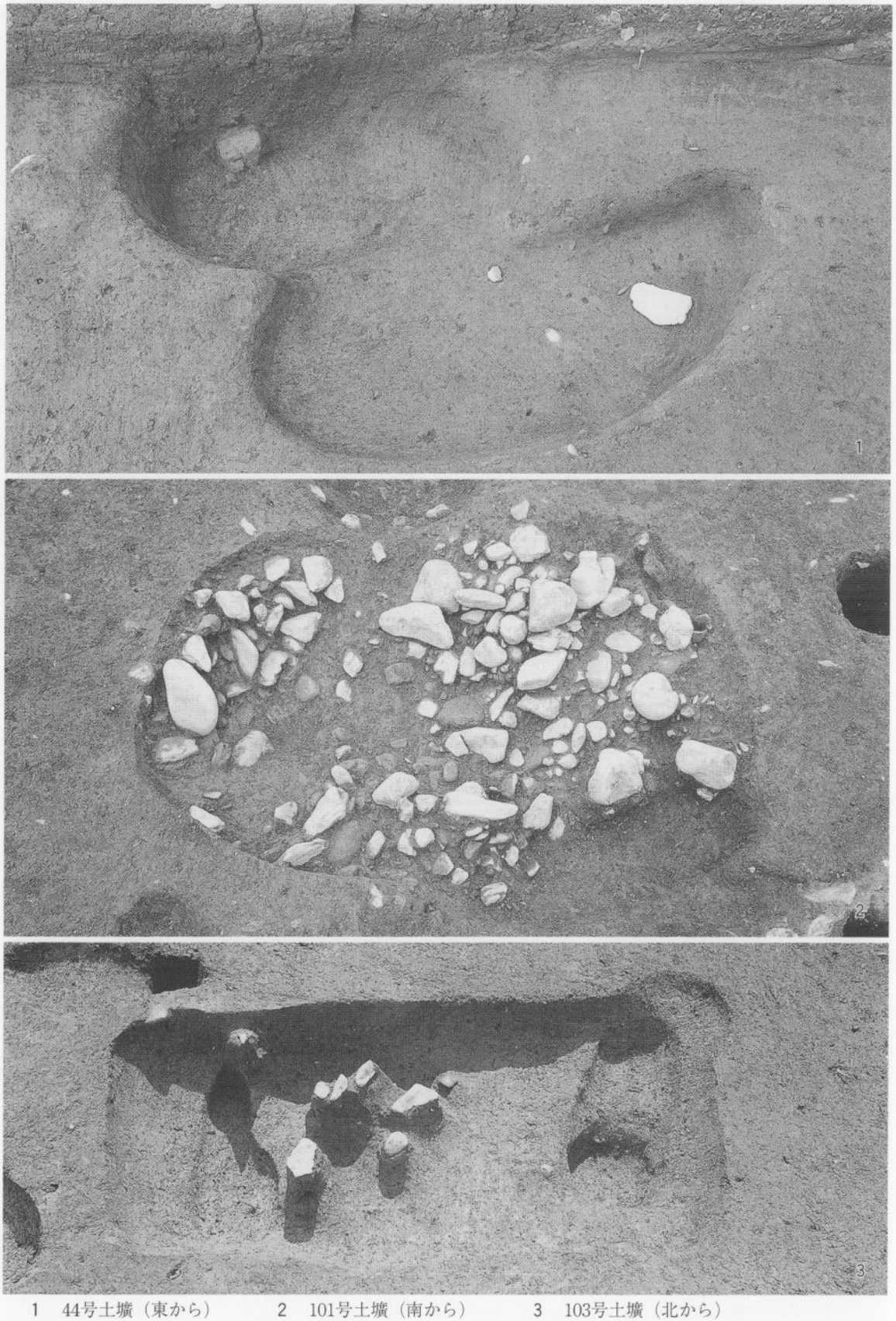




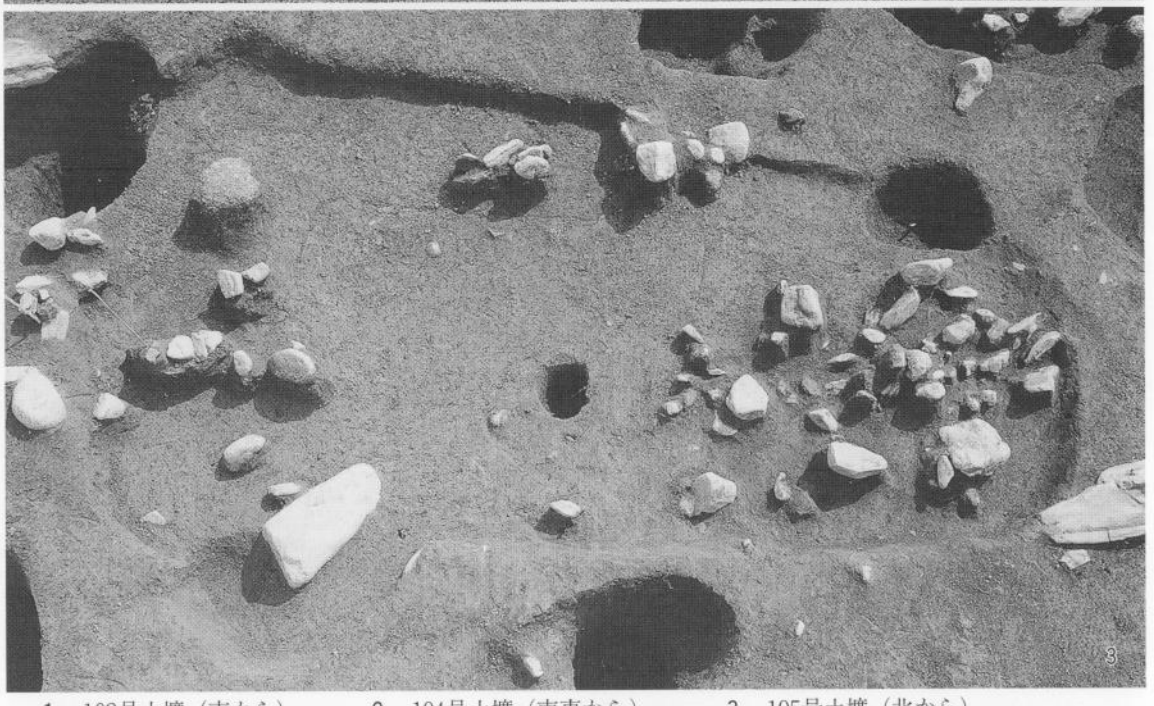




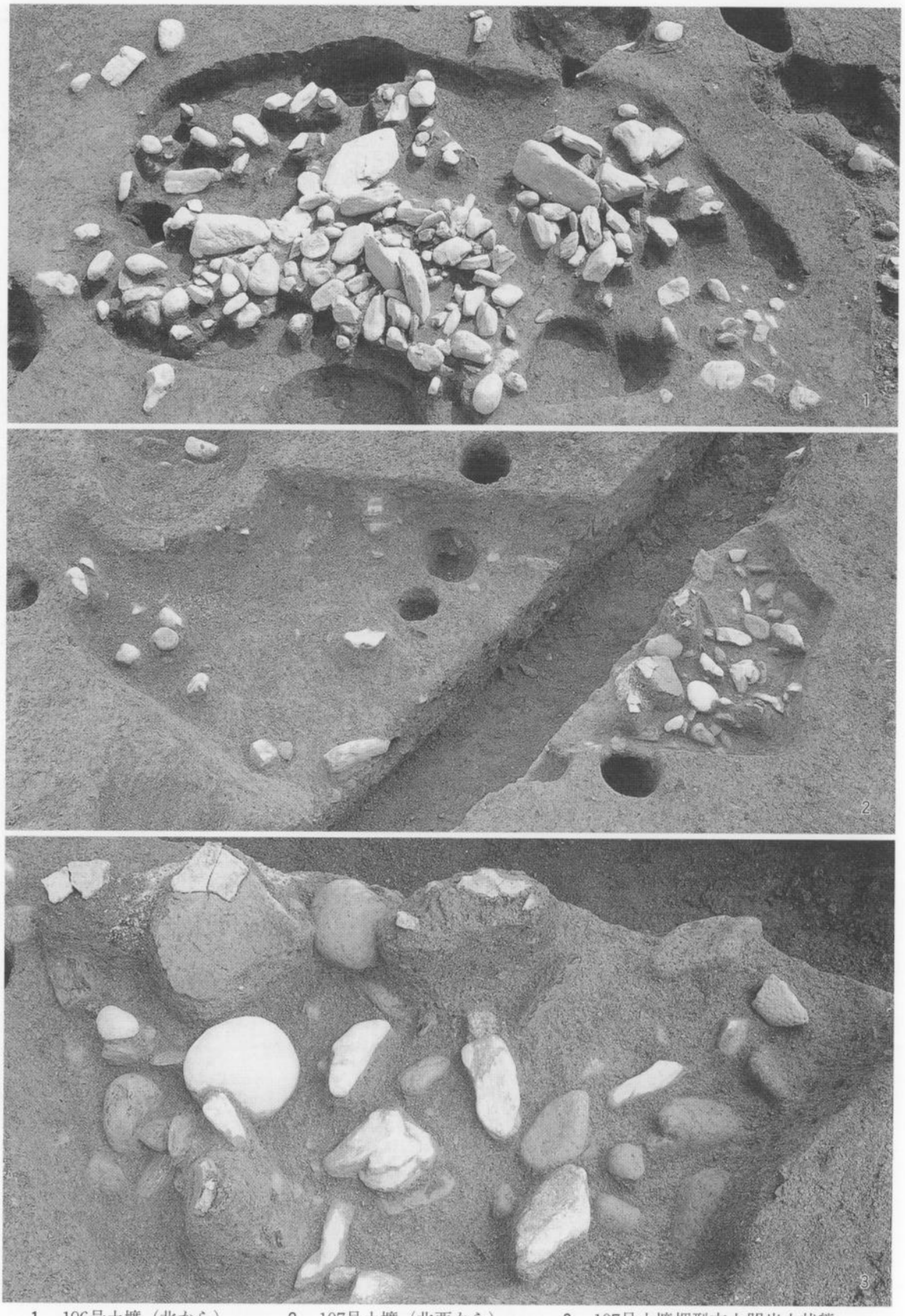
1　42号土壙（北から）　　2　45号土壙（西から）
3　45号土壙縄文土器出土状態　　4　43号土壙（東から）



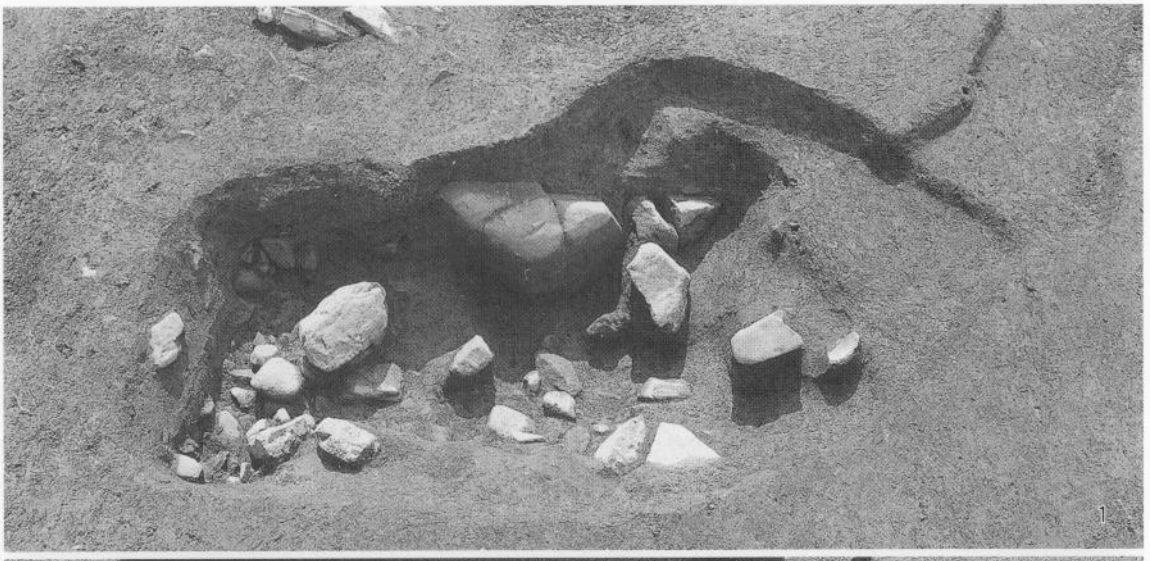
1　44号土壙（東から）　　2　101号土壙（南から）　　3　103号土壙（北から）



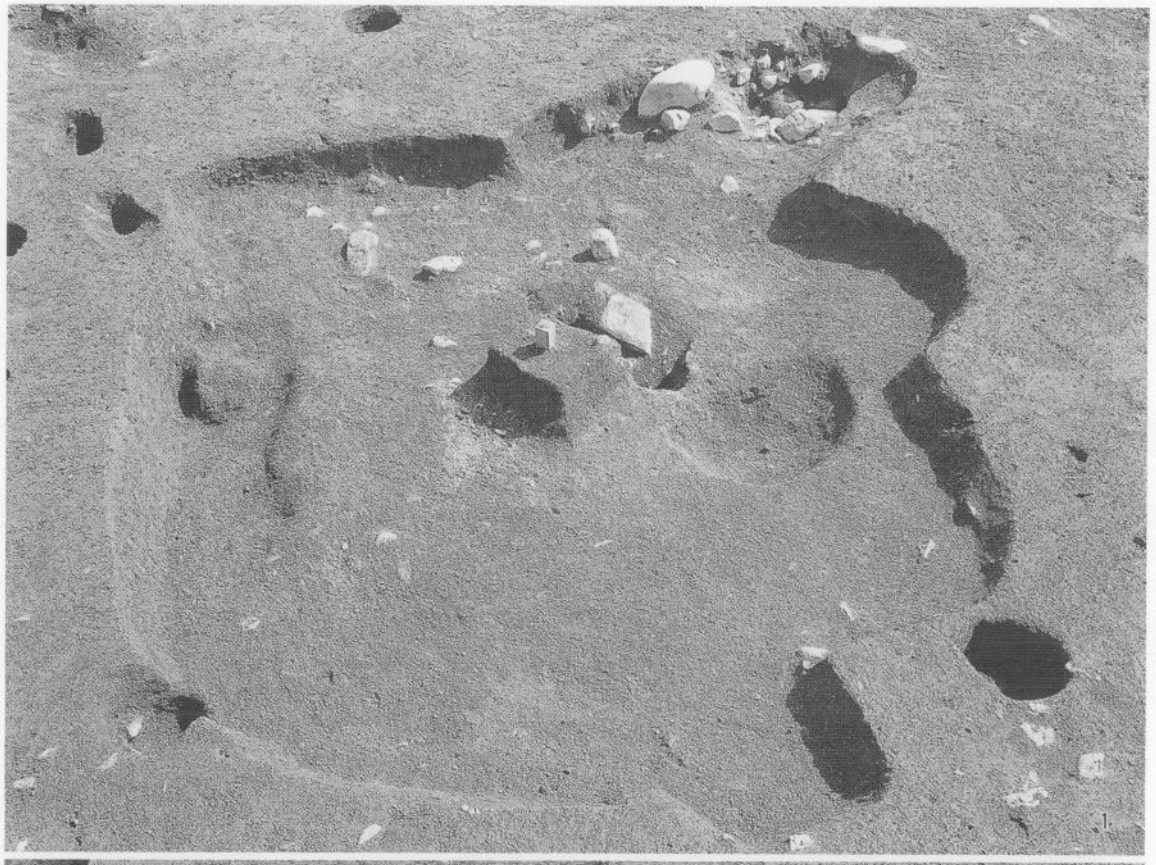
1　102号土壙（南から）　　2　104号土壙（南東から）　　3　105号土壙（北から）

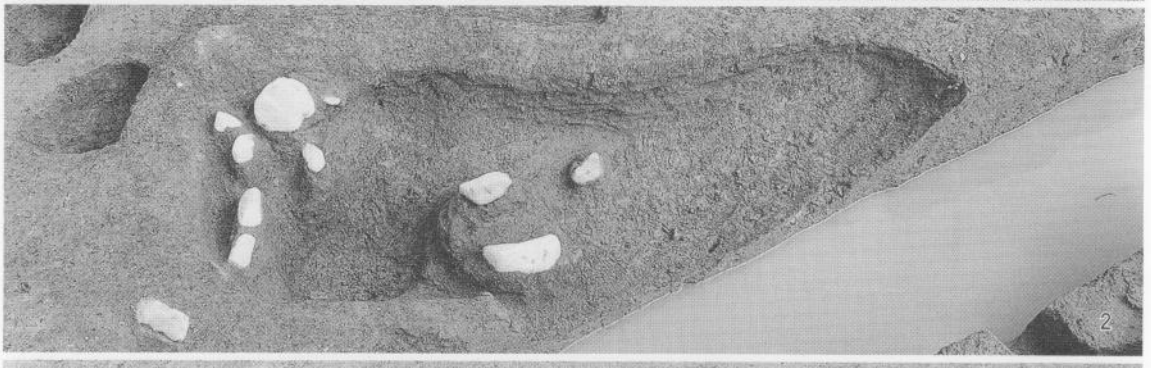


1　106号土壙（北から）　　2　107号土壙（北西から）　　3　107号土壙押型文土器出土状態



1　108号土壙（北東から）　　2　110号土壙（北から）　　3　115号土壙（北から）





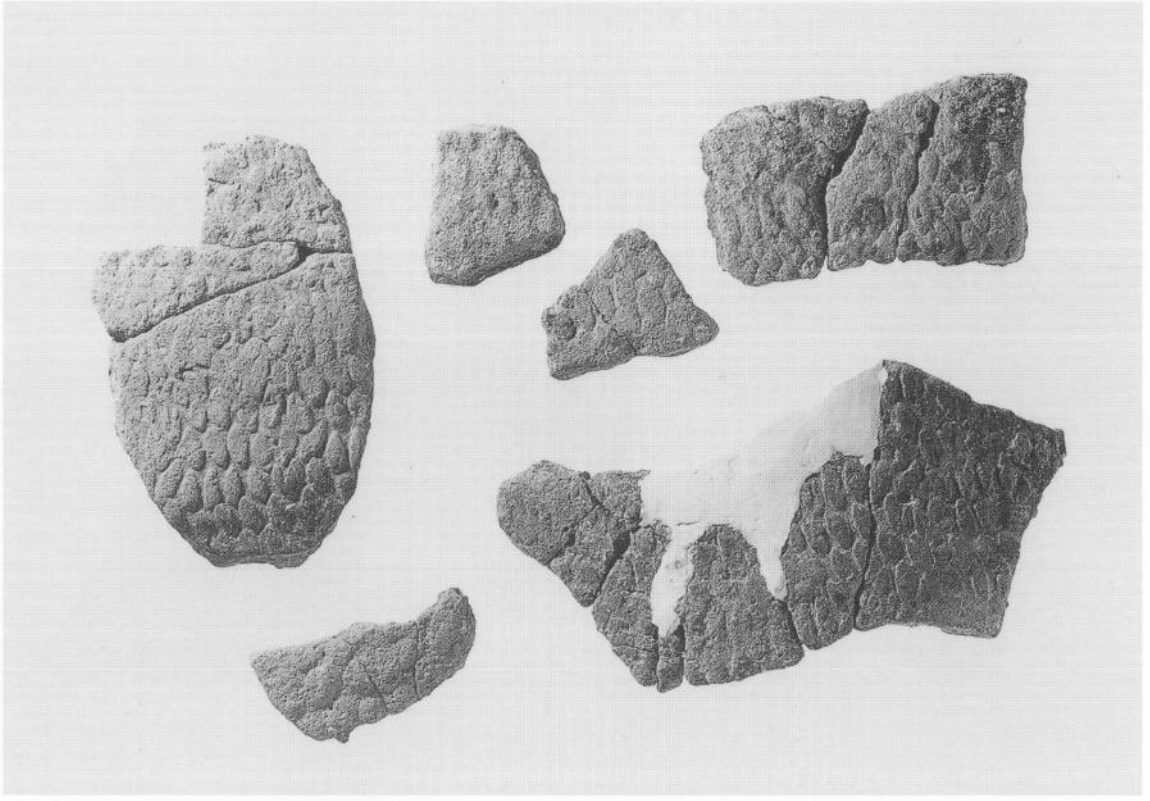
1　109号土壙（南西から）　　2　113号土壙（北西から）　　3　114号土壙（北東から）

1　112号土壙（北から）　　2　118号土壙（南から）　　3　P151（北西から）

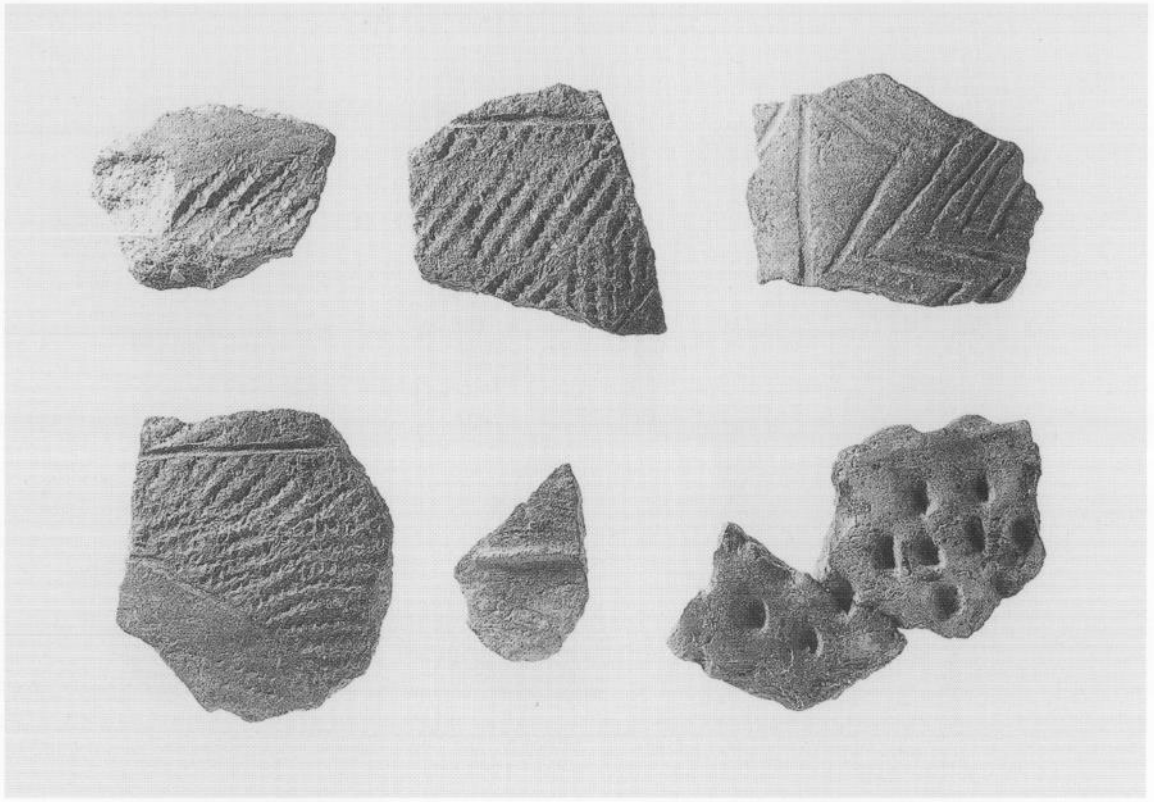
1　107号土壙出土押型文土器

2　107号土壙出土押型文土器

1　押型文グリッド出土押型文土器



2　押型文グリッド出土押型文土器

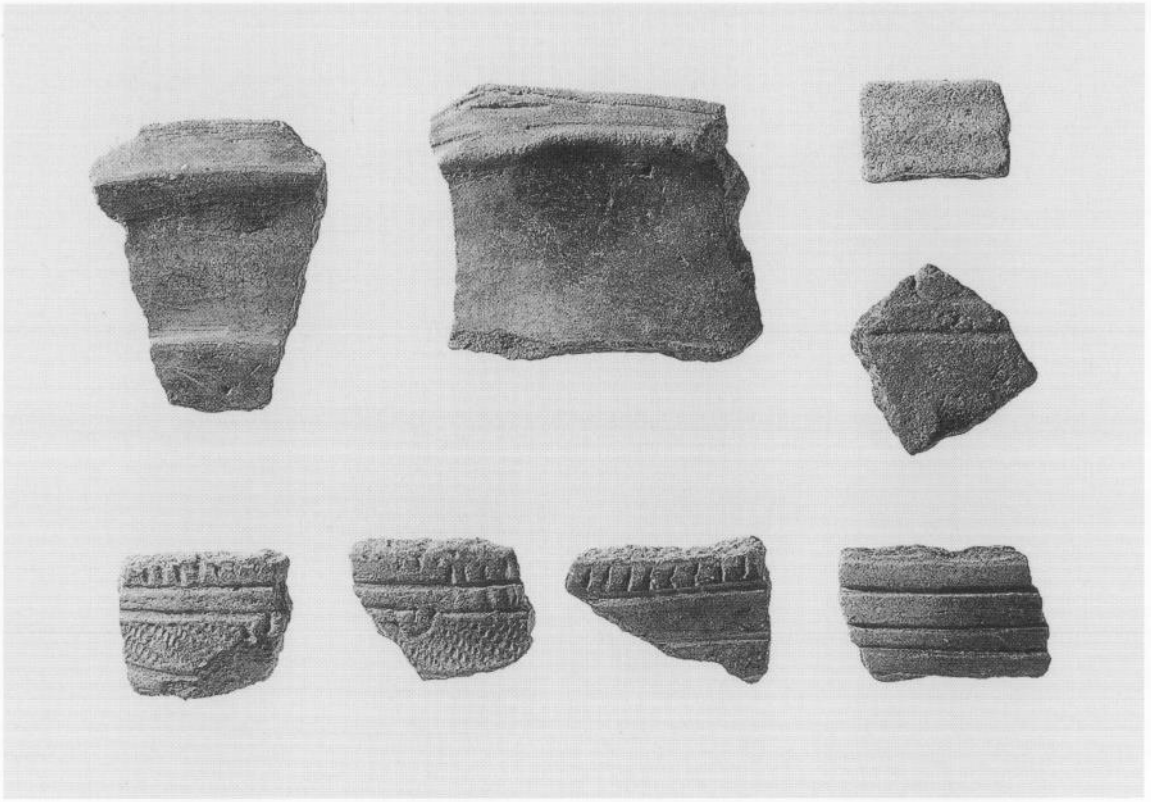


1　縄文早期・前期・中期土器

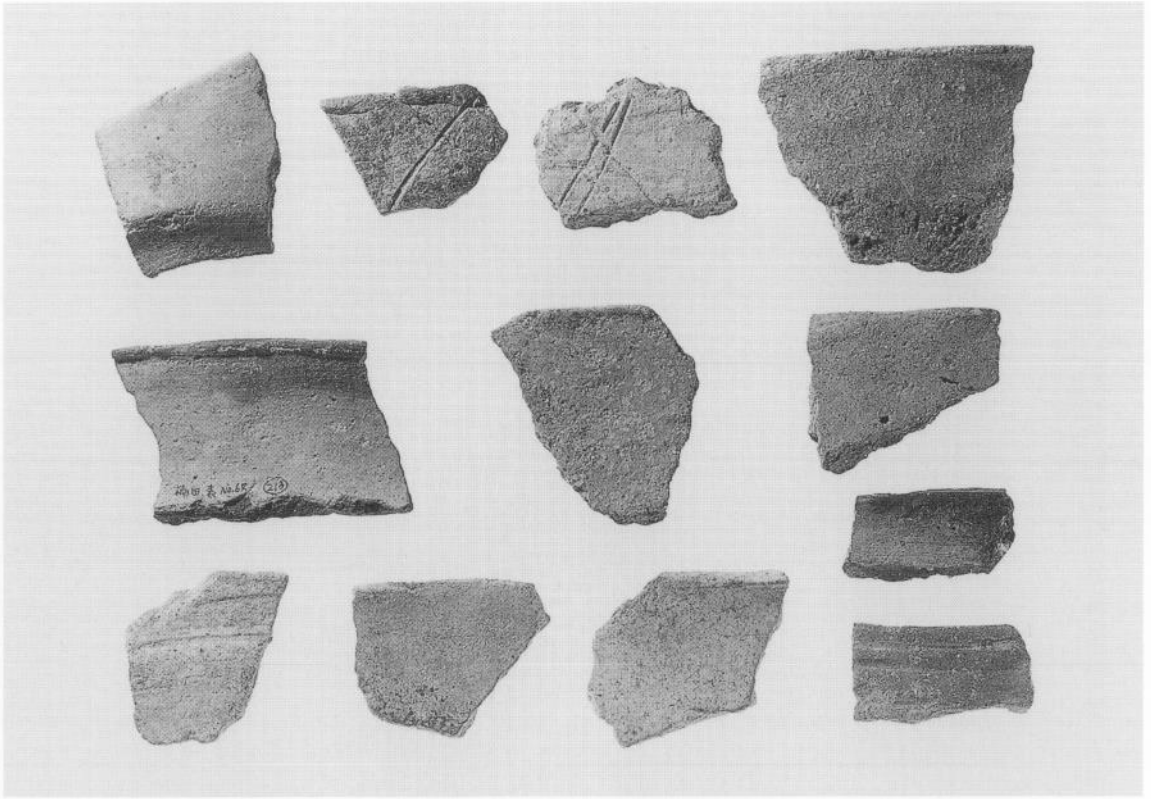
2　縄文後期土器

1　104号土壙出土縄文後期精製深鉢

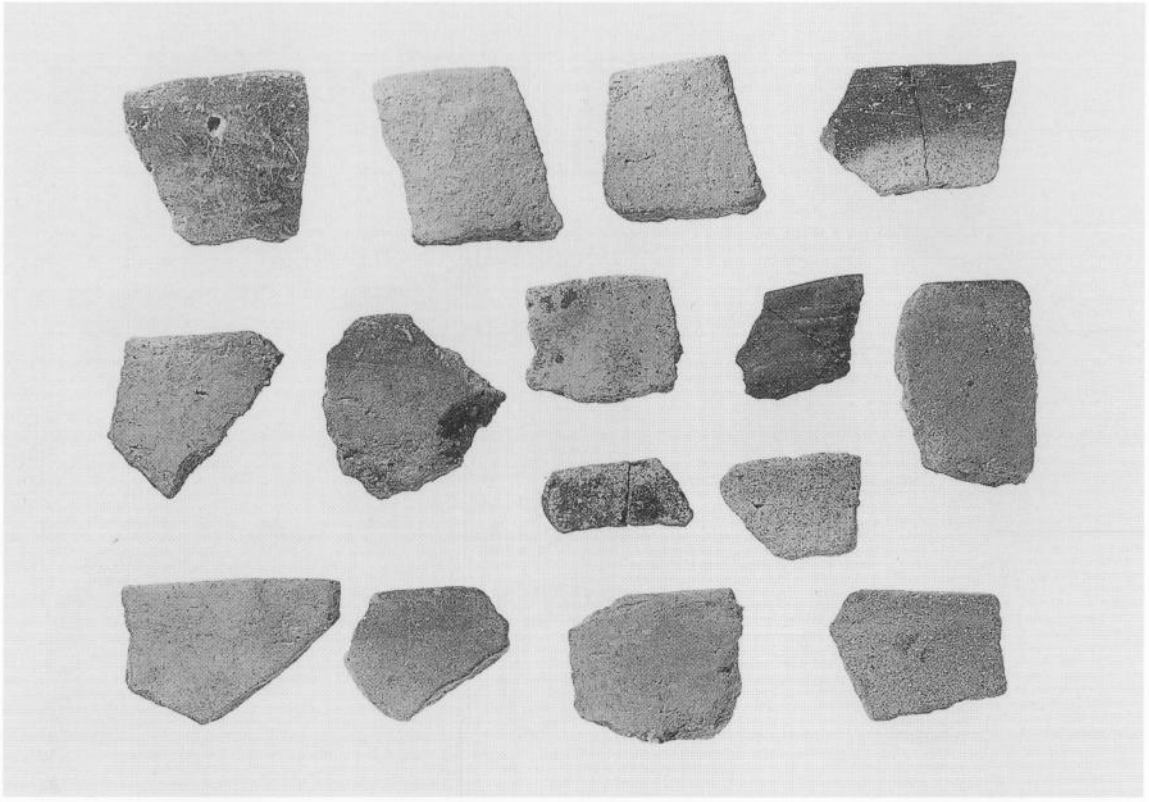
2　同上　細部



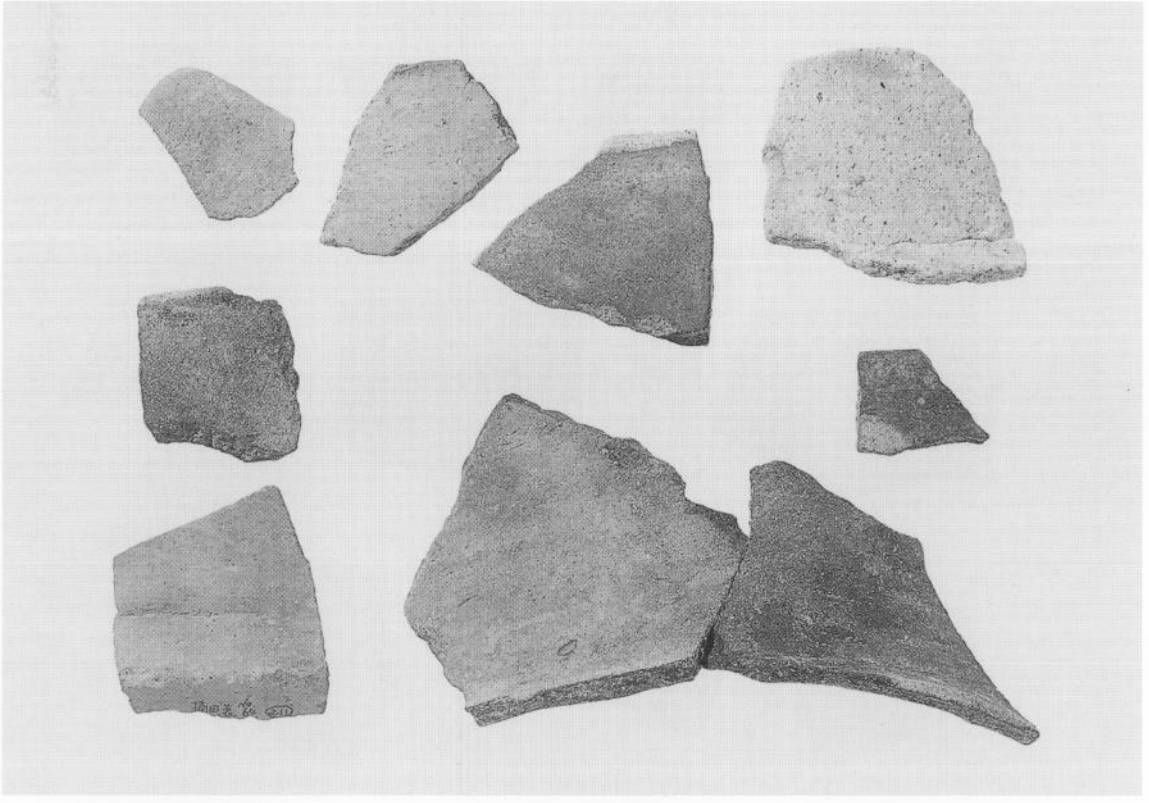
1　縄文後期精製深鉢



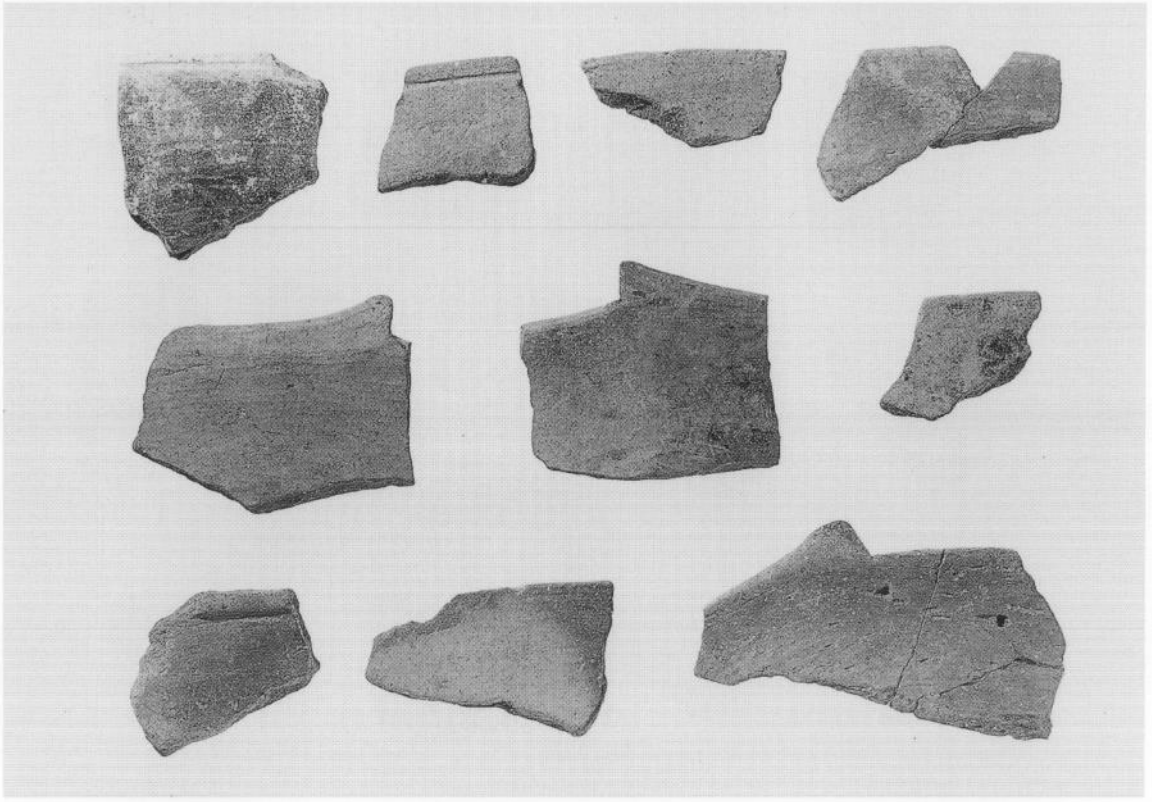
2　縄文後～晩期精製深鉢



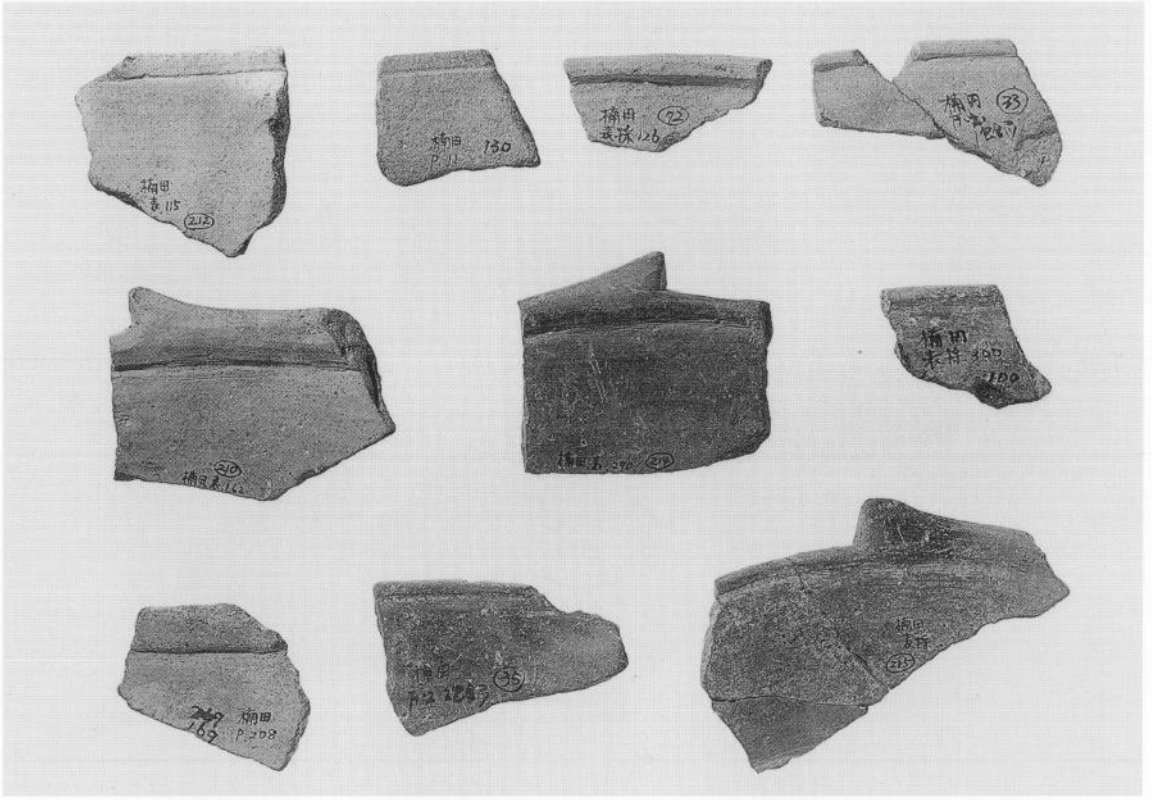
1　縄文晩期精製深鉢



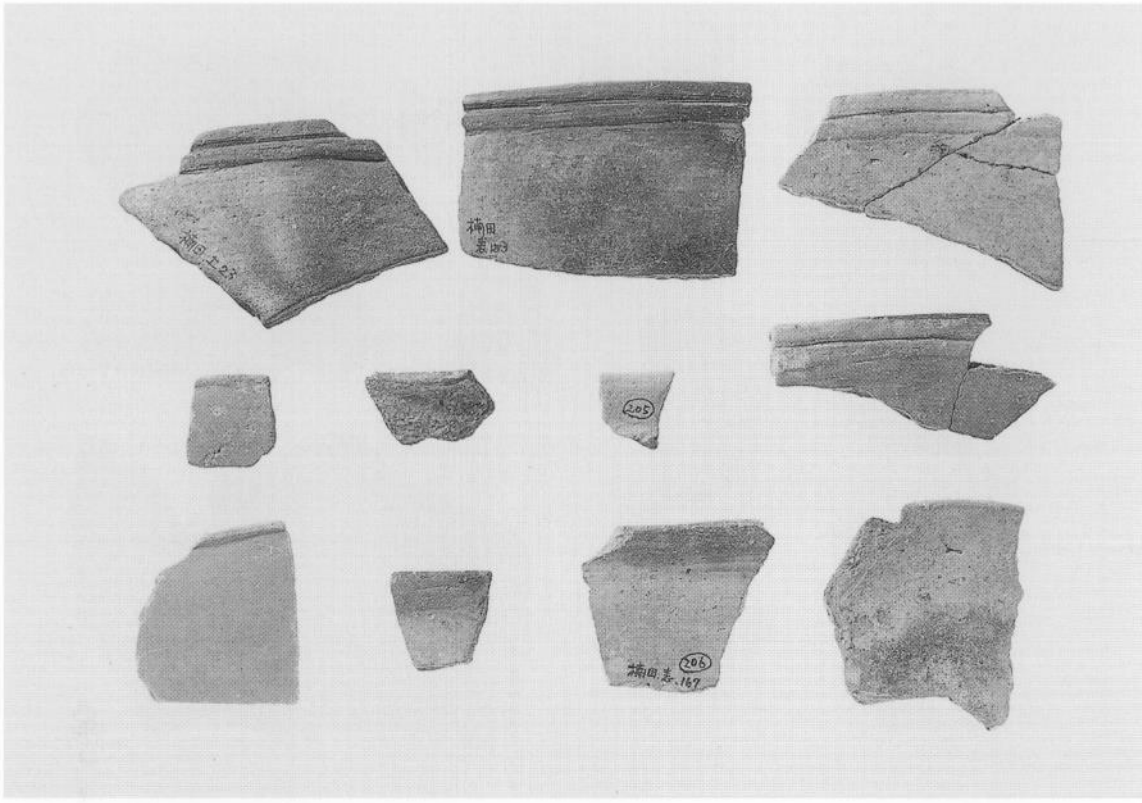
2　縄文晩期精製浅鉢



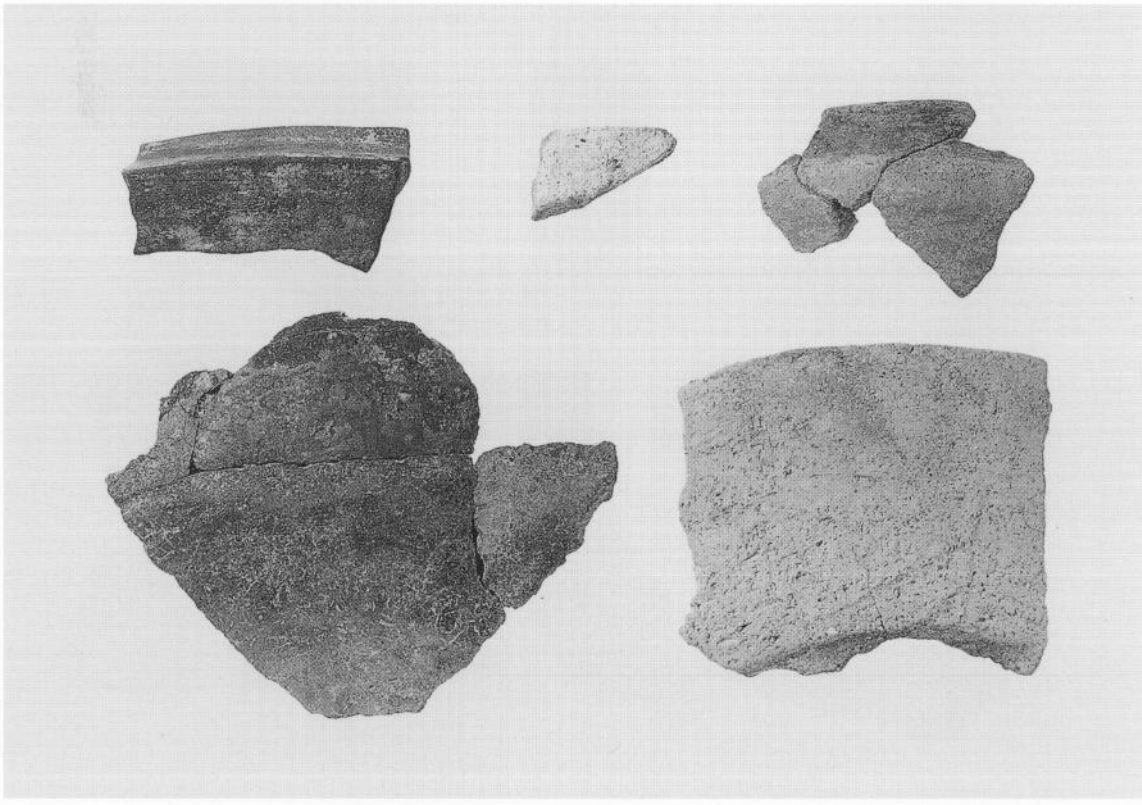
1　縄文晩期浅鉢



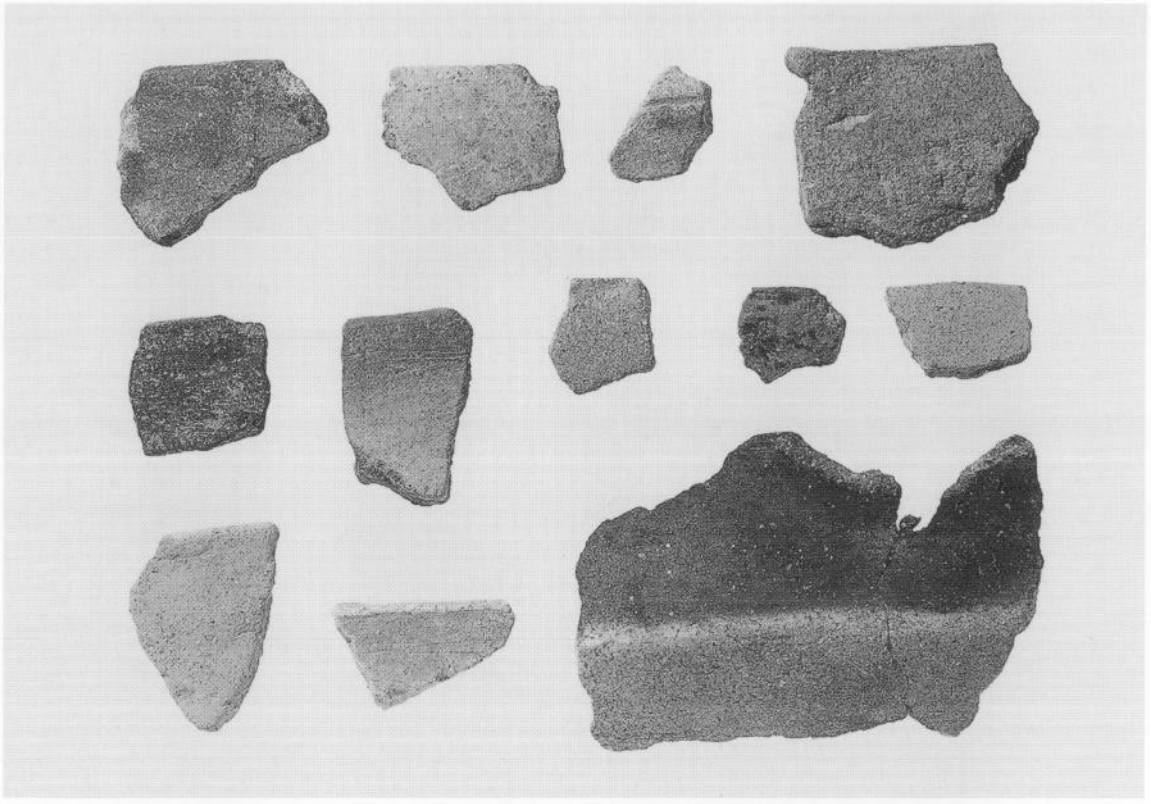
2　同上　裏面



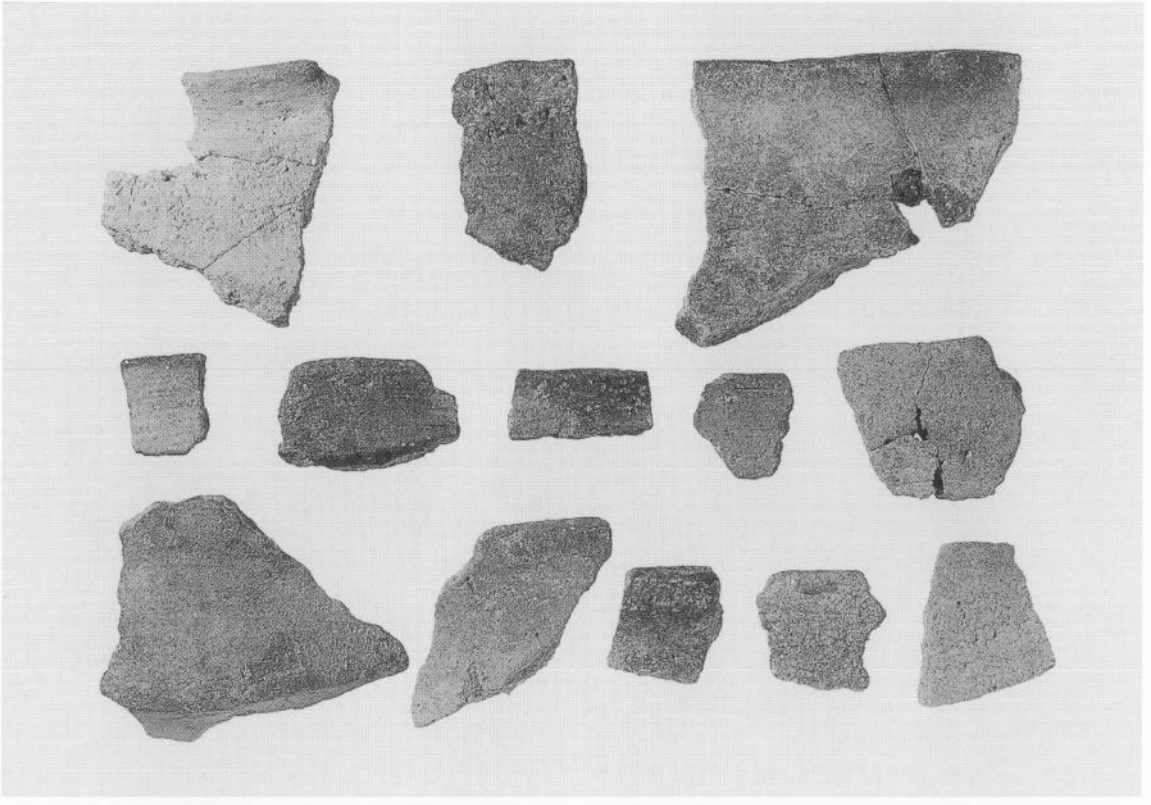
1　縄文晩期マリ・浅鉢



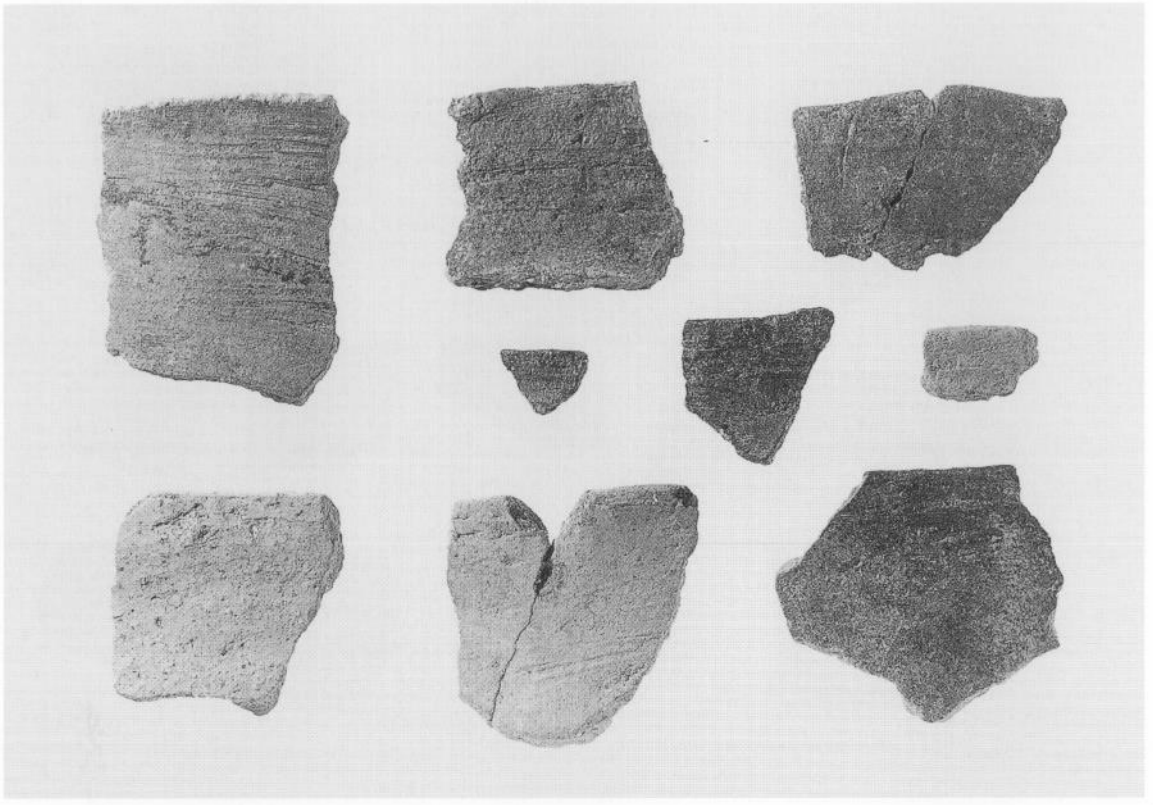
2　縄文晩期浅鉢



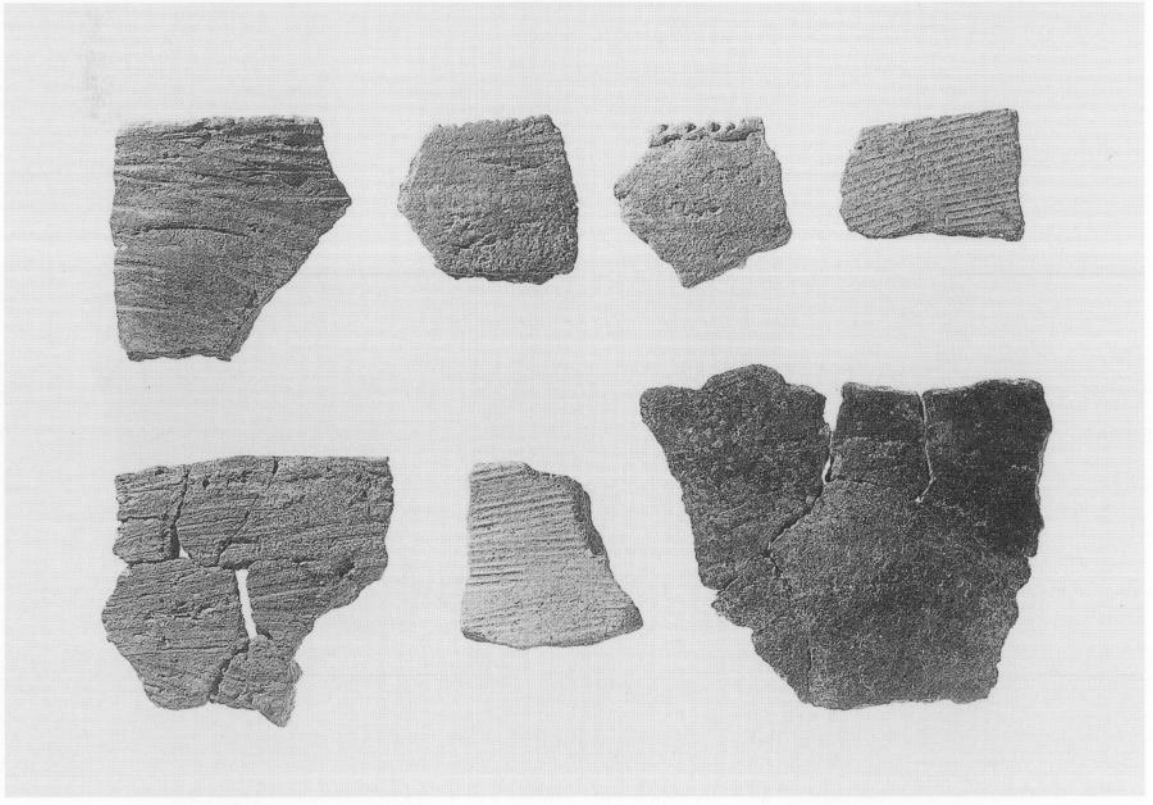
1　縄文晩期定型深鉢



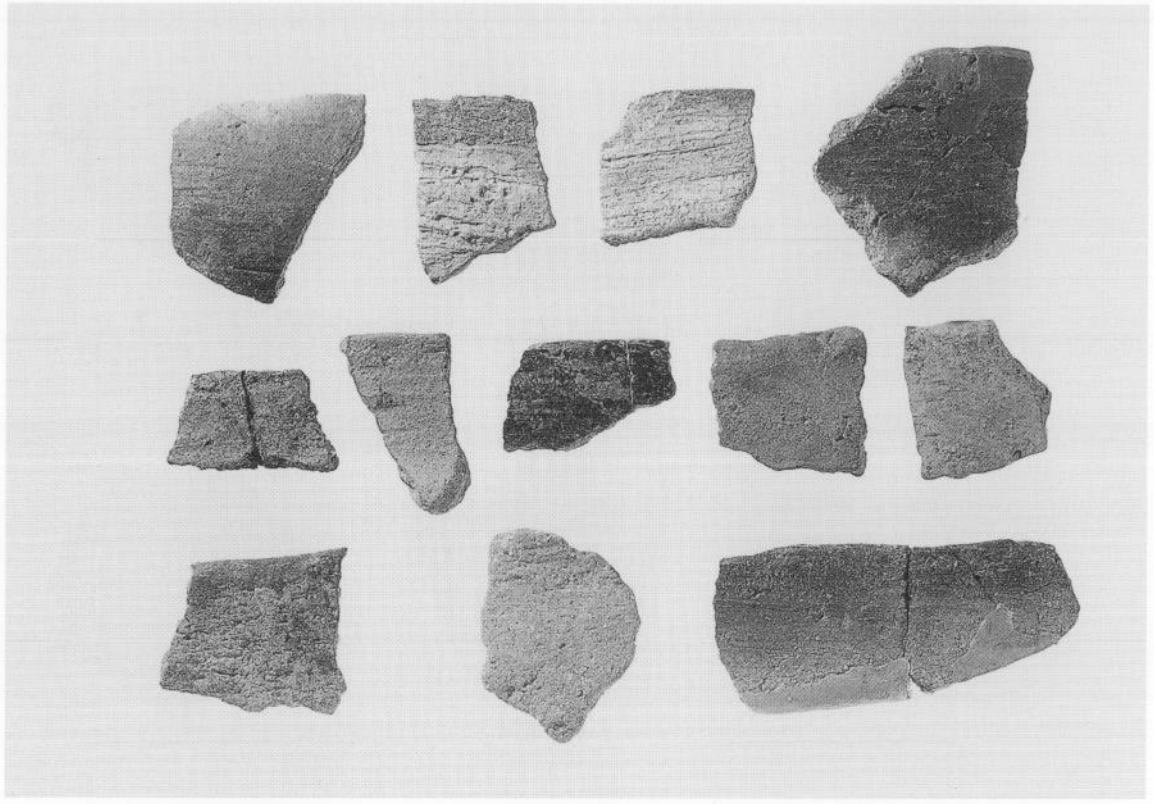
2　縄文晩期定型深鉢



1　縄文後～晩期刻目土器・粗製深鉢

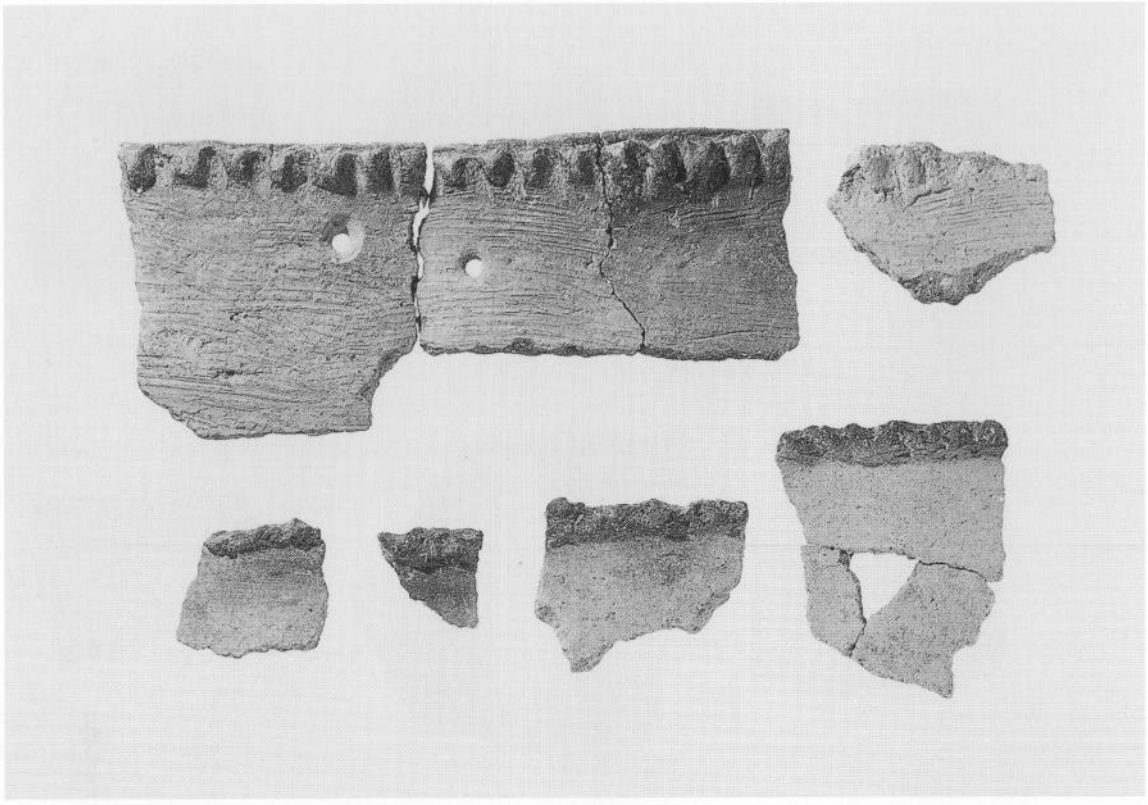


2　縄文後～晩期刻目土器・粗製深鉢

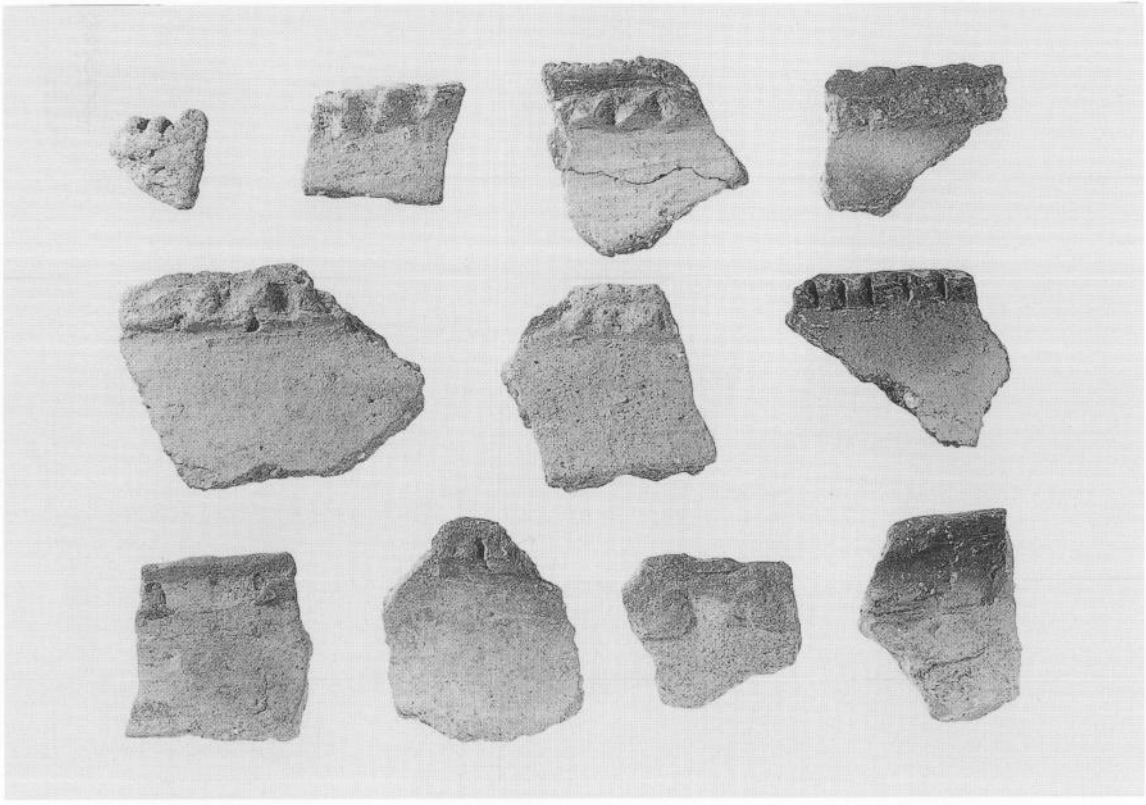


1　縄文晩期粗製深鉢

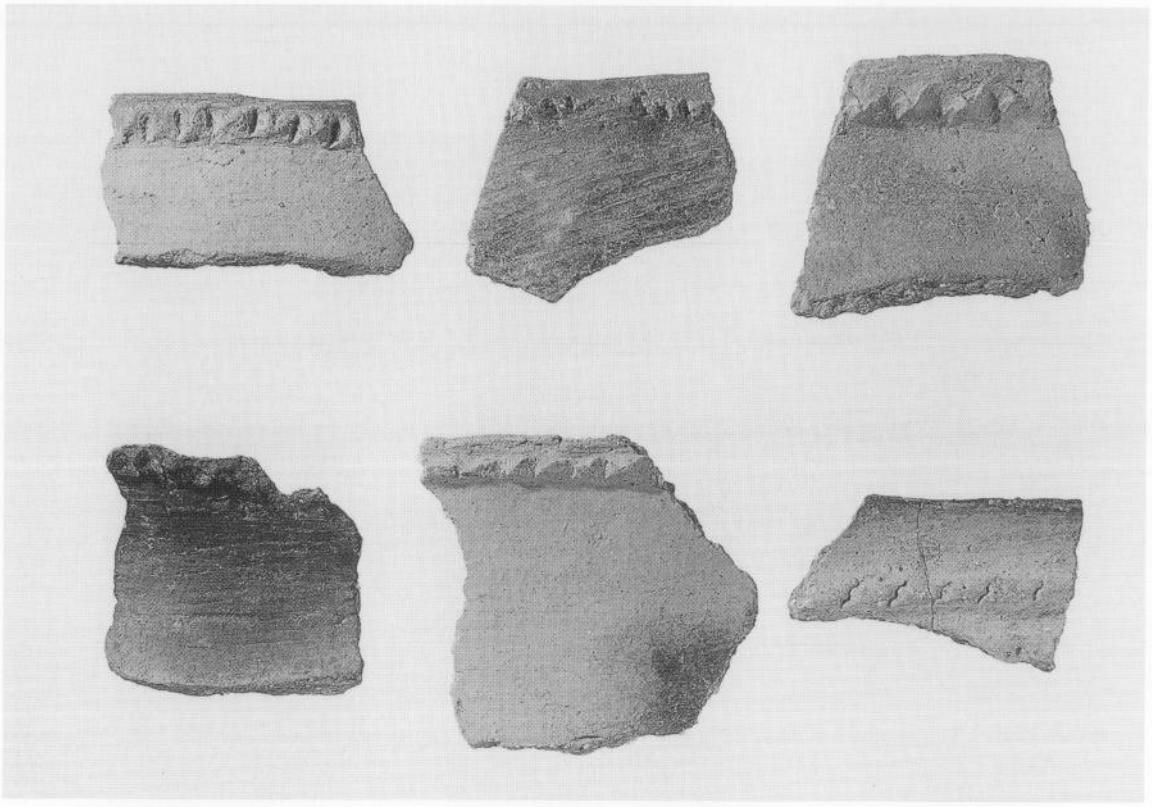
2　縄文晩期粗製鉢



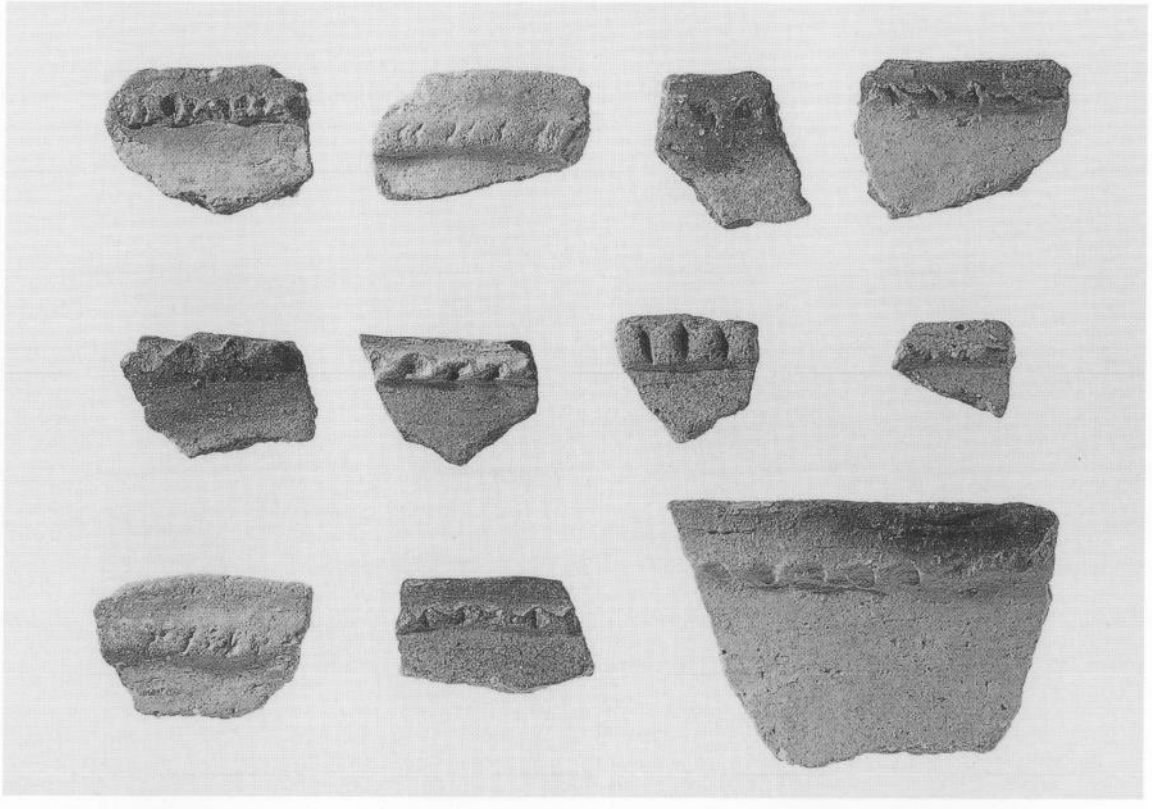
1　刻目凸帯土器



2　刻目凸帯土器

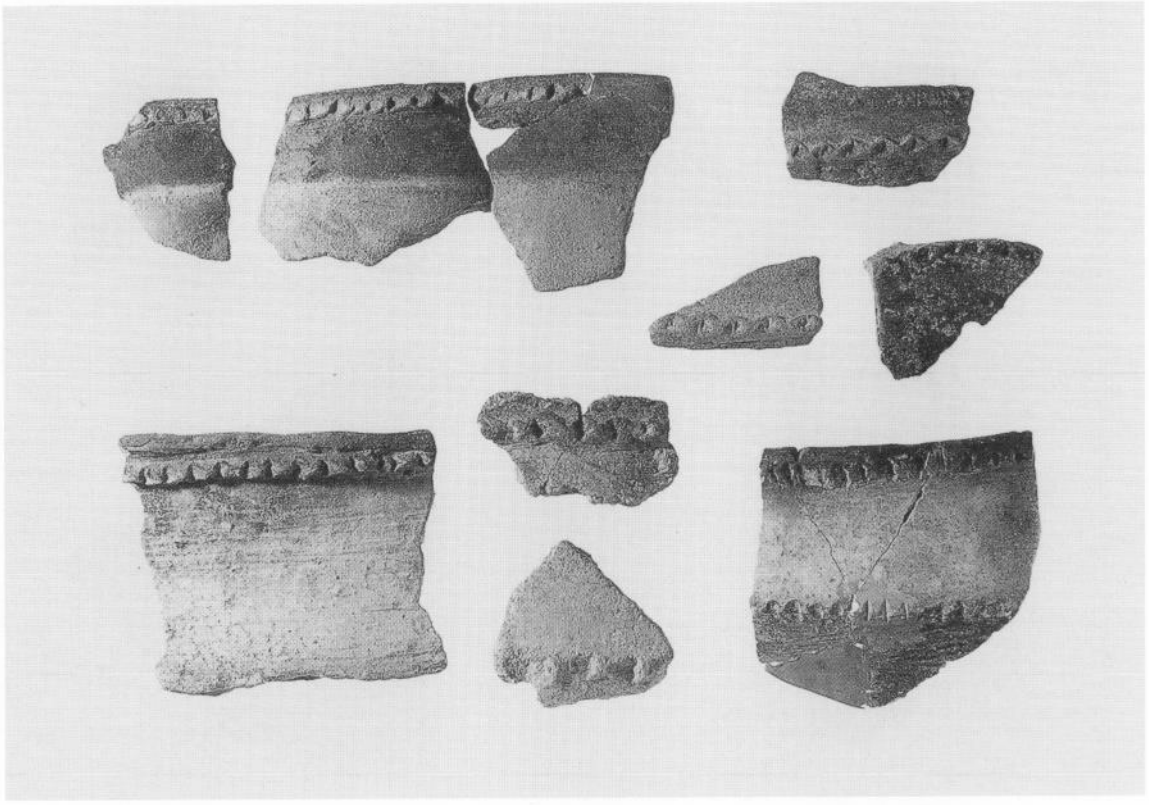


1　刻目凸帯土器

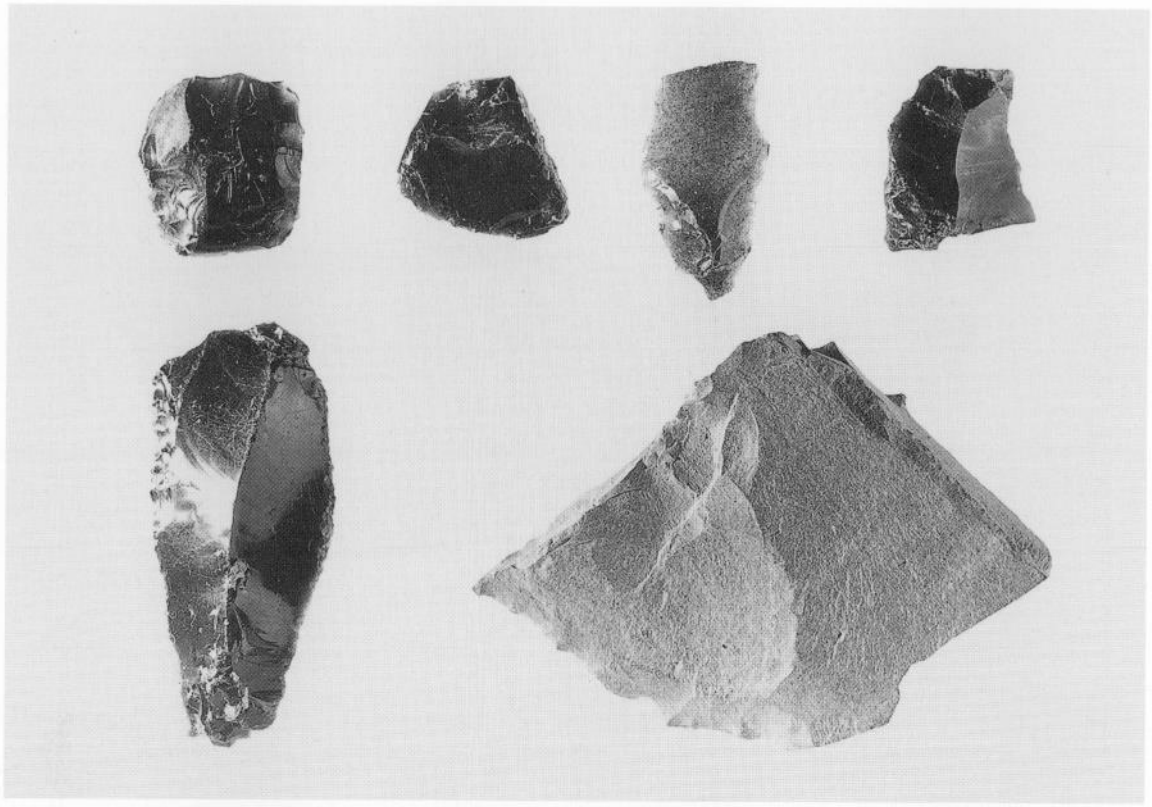


2　刻目凸帯土器

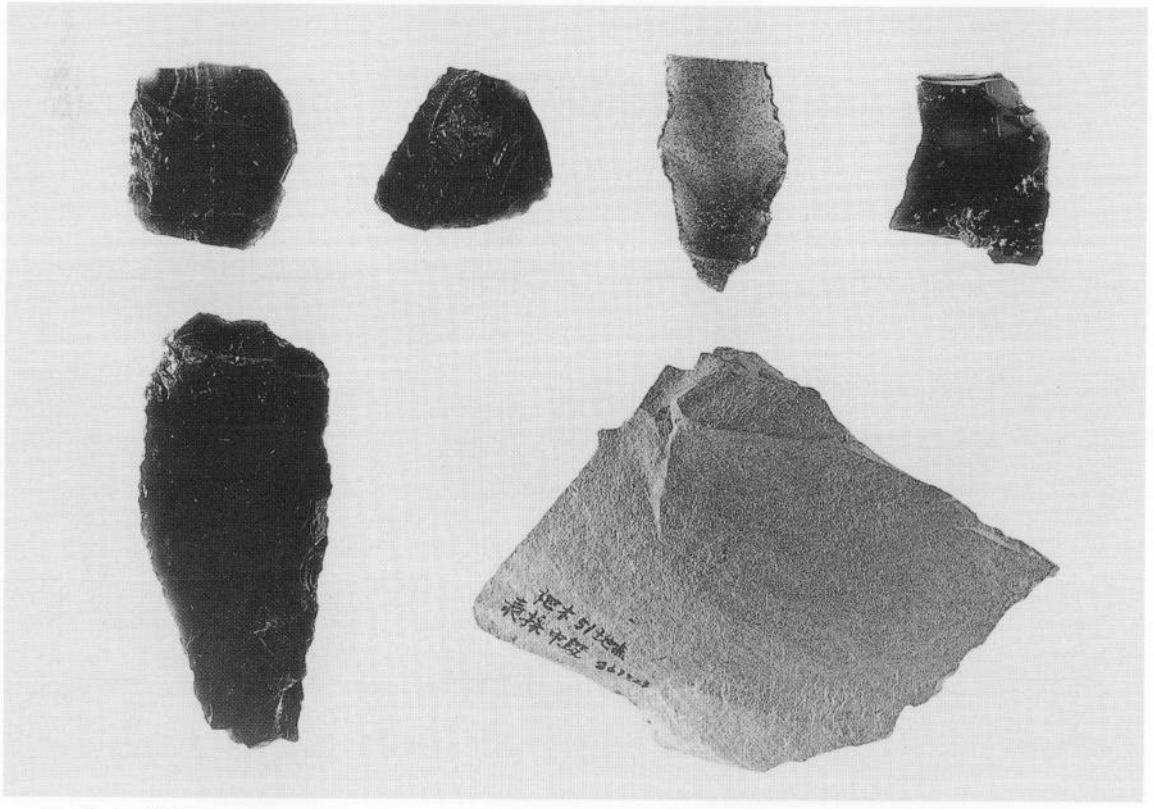
1　刻目凸帯土器



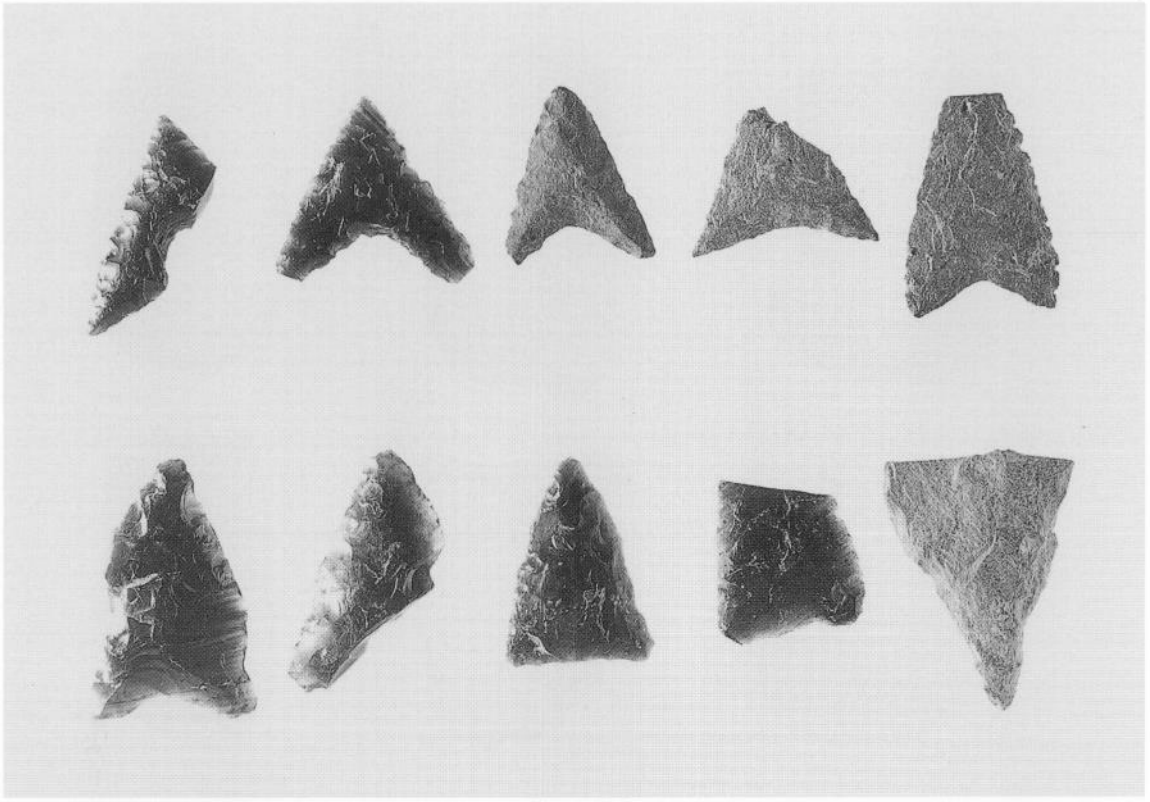
2　刻目凸帯土器



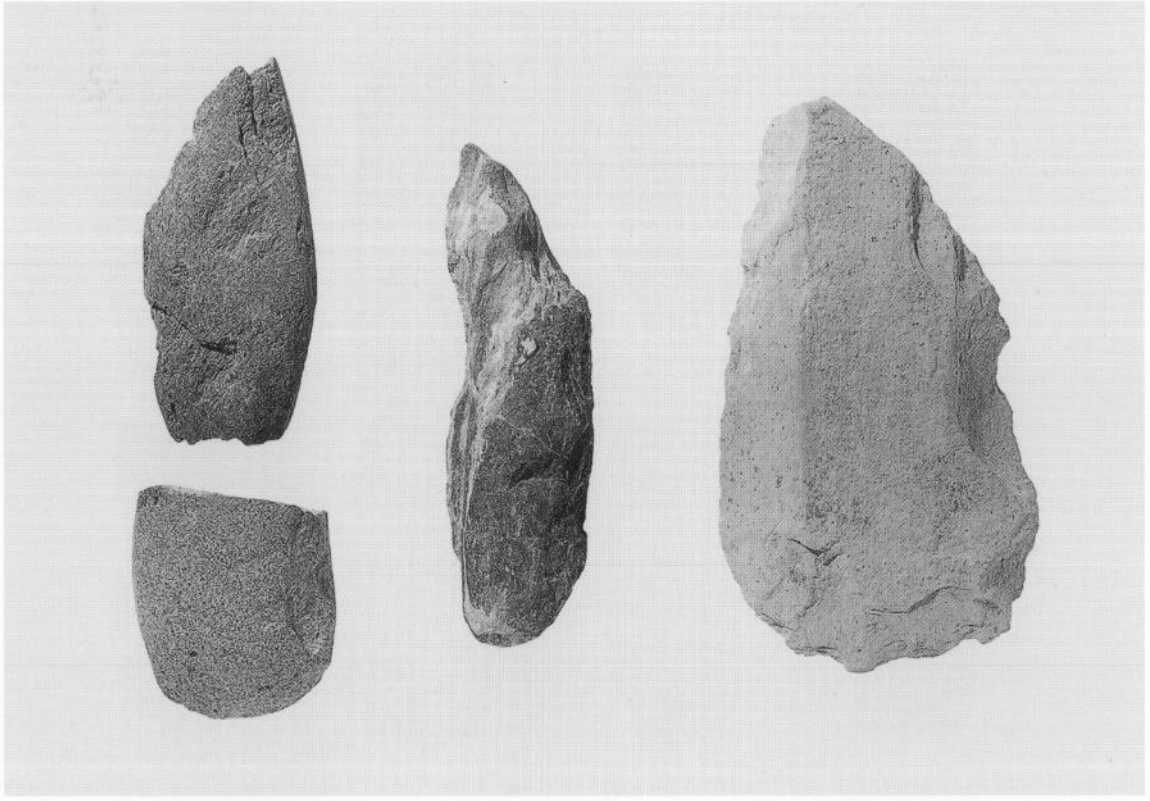
1　スクレイパー・使用剥片



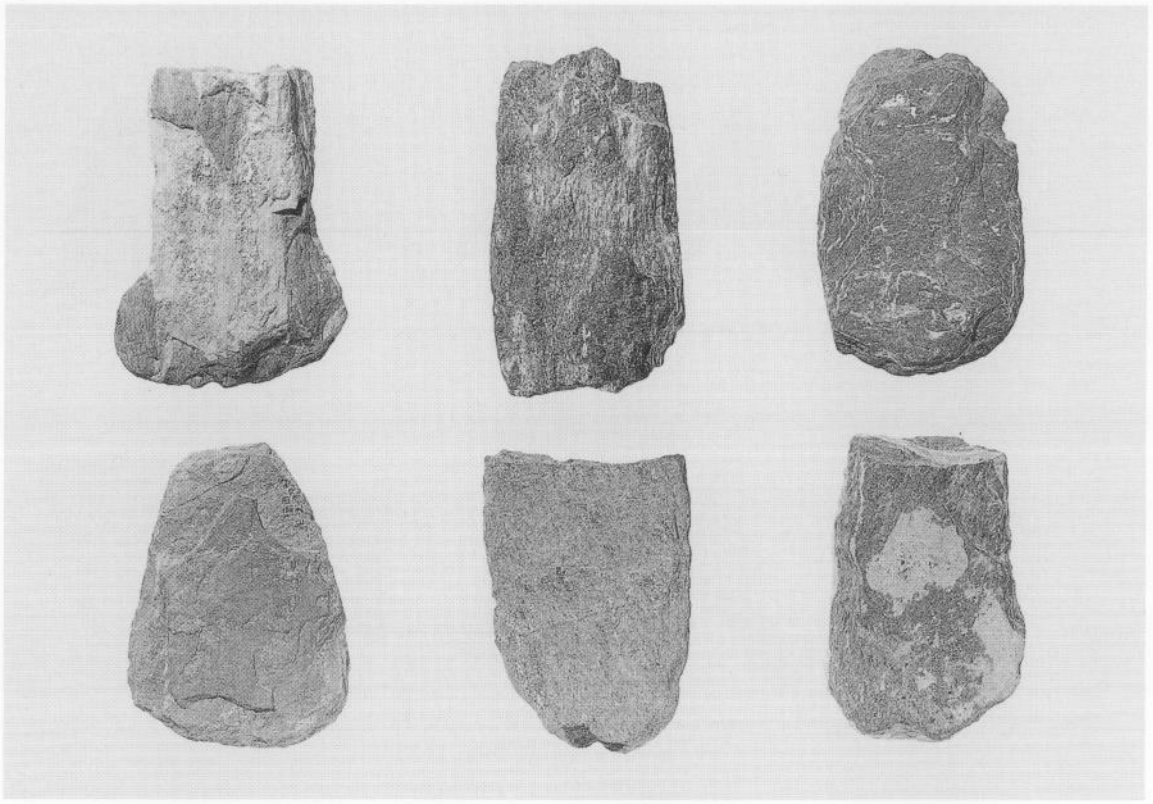
2　同上　裏面



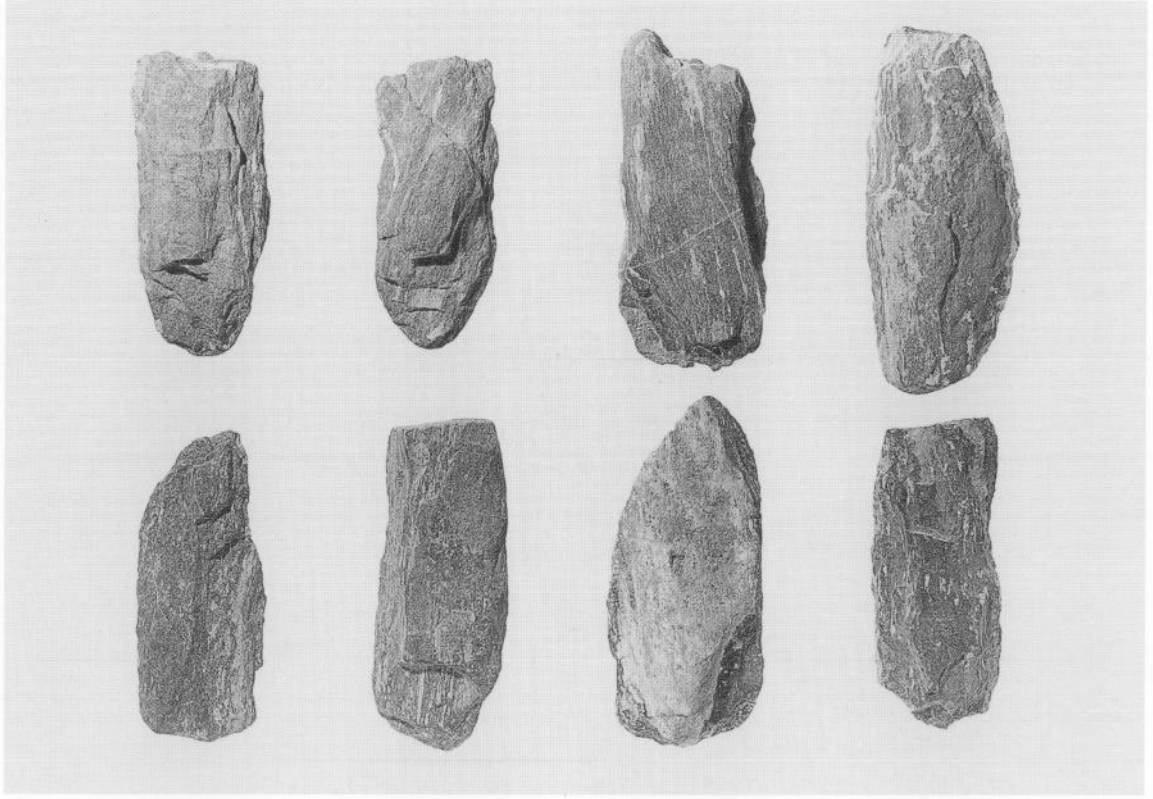
1　打製石鏃・石錐



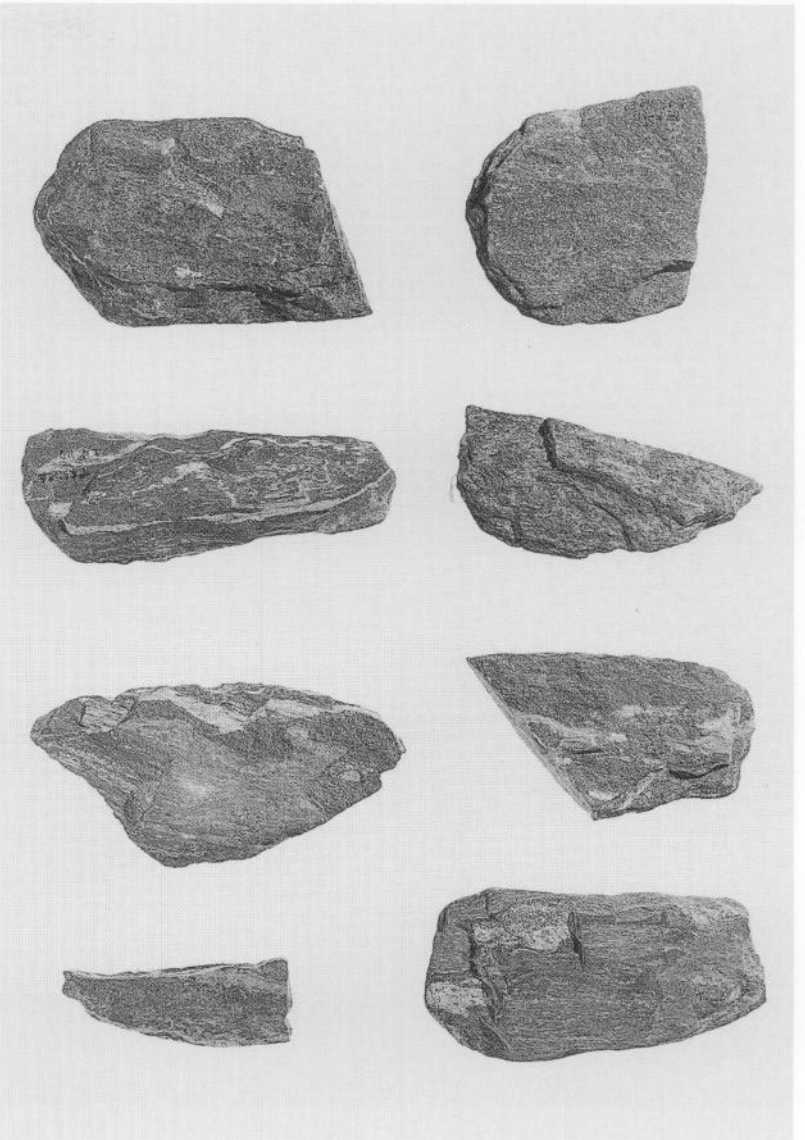
2　磨製石斧・偏平打製石斧



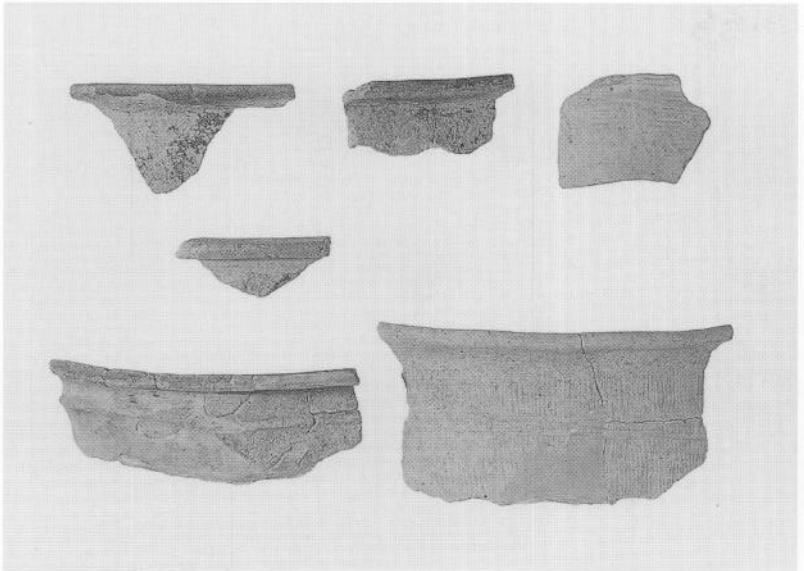
1　偏平打製石斧



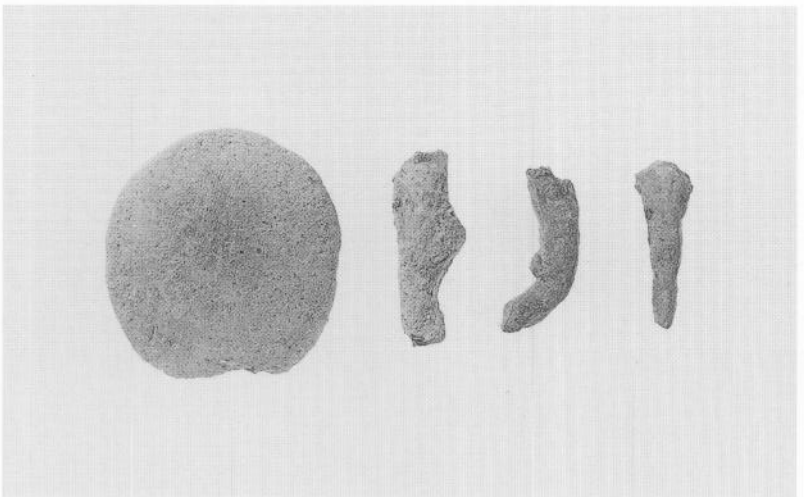
2　偏平打製石斧



1　偏平打製石斧



2　弥生・歴史時代土器



3　円形土製品・鉄器

楠田遺跡調査風景（縄文土器多量出土状況）

Ⅳ　小覚原遺跡

Ⅳ　小覚原遺跡

1　はじめに

小覚原遺跡は朝倉郡杷木町大字大山字小覚原に所在する。

ここは、大分県境の土師山・畦倉山山塊から筑後川に注ぐ赤谷川へ延びてきた丘陵の尾根上であって、九州横断自動車道の路線ではSTA. NO. 292＋60～293＋40の間にあたる。ここの標高は87.6～89.3mで、北西の楠田遺跡のある低地からは約30m、南西の二十谷遺跡のある谷からは約20mの比高差がある。(第３・４図参照)

発掘調査は、昭和62年(1987)4月22日～6月13日の間に行った。

当初の調査対象地は路線内の丘陵頂部全体であったが、実際は北側にブドウ畑として一段高く残っていた部分にのみ遺構が検出された。南側は二段に削平されていて、より低い方の北側を掘り下げたが何ら遺構は検出されなかった。前者をⅠ区、後者をⅡ区としたけれども、以下に報告するのは当然ながらⅠ区のことである。調査面積は約1330㎡であった。

Ⅰ区は当初の検出面自体が包含層と捉えられたので、上層に見られた遺構の発掘後に南半部にA・B・C・Dの４つのグリッドを設定して掘り下げた。B・C・Dグリッドは拡張したので結果的には連続したものとなった（第61図)。そののちさらに南半部一帯を重機にて掘り下げた。

検出された遺構は下記のとおりの竪穴住居跡・土坑・柱穴であり、遺物は少なかった。遺構番号および遺物の取り上げ番号は調査時のものをそのまま用い、その検出した位置については第61図に示す区分け記号を用いる。

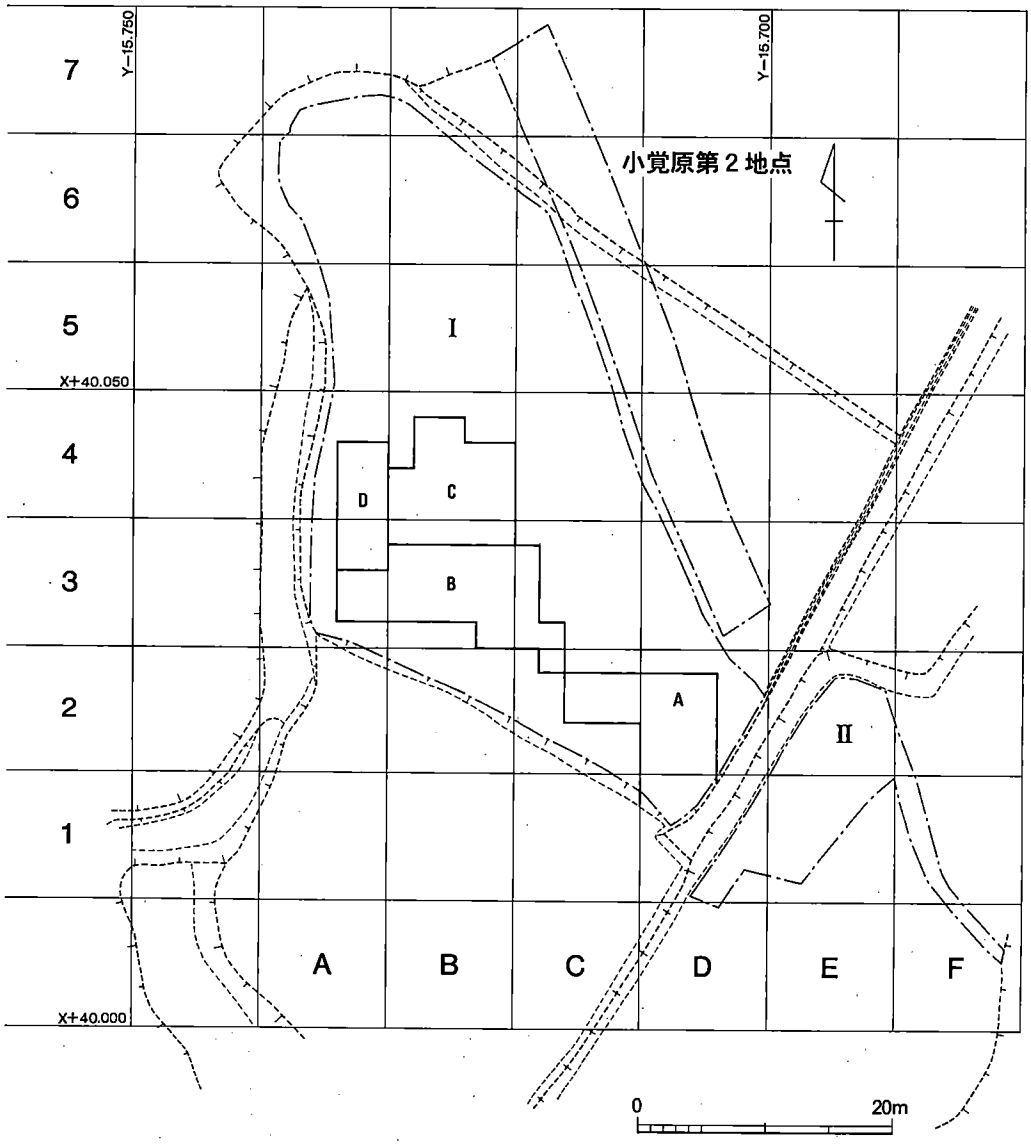
・竪穴住居跡　　12軒
・土坑　　40基
・柱穴群　　遺物の出土したもの52個

〈出土遺物‥‥ナイフ形石器・細石刃・打製石鏃・スクレイパー・打製石斧・すり石・台石・縄文土器・陶器・磁器〉

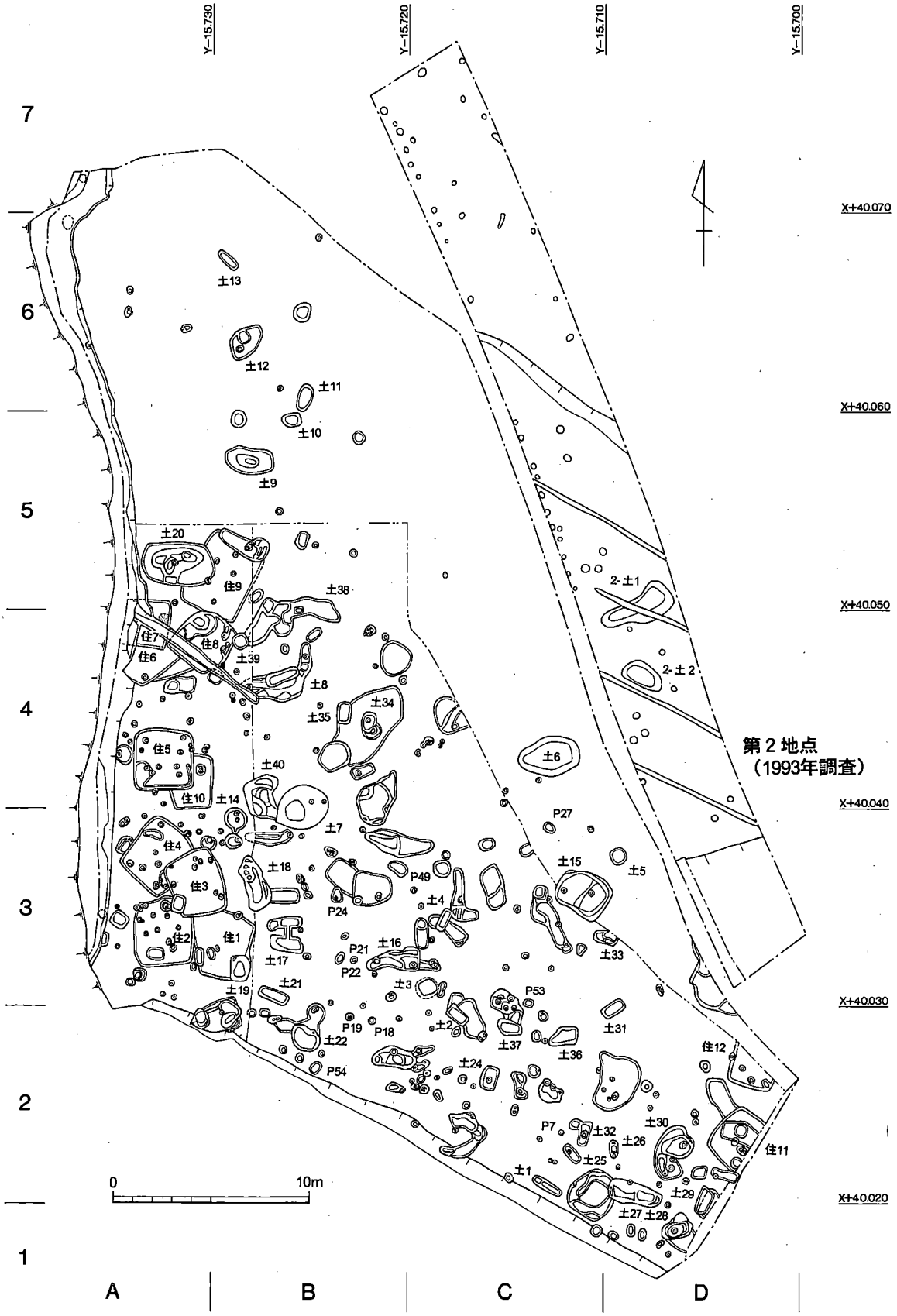
なお、この遺跡のⅠ区に東接する部分が、杷木町による林田工業団地造成に伴う進入路にあたって平成5年(1993)に調査され、小覚原遺跡第２地点とされている(註1)。土坑２基と柱穴群が検出されたのみであるが、土坑については１・２号の名称が本報告と重複することになるので、第２地点のものを２-土１・２-土２としておく（第62図)。

2　竪穴住居跡

Ⅰ区の南西部と東南端部に12軒を検出した。調査中も住居跡でよいのかどうか確信が持てないところもあったが、面的には確かにプランが捉えられたものである。いまは住居として報告する。全て縄文晩期に属する。



第61図　小覚原遺跡区割図(1/600)



第62図　小覚原遺跡遺構配置図(1/300)

小覚原遺跡

1号住居跡（図版44、第63図）

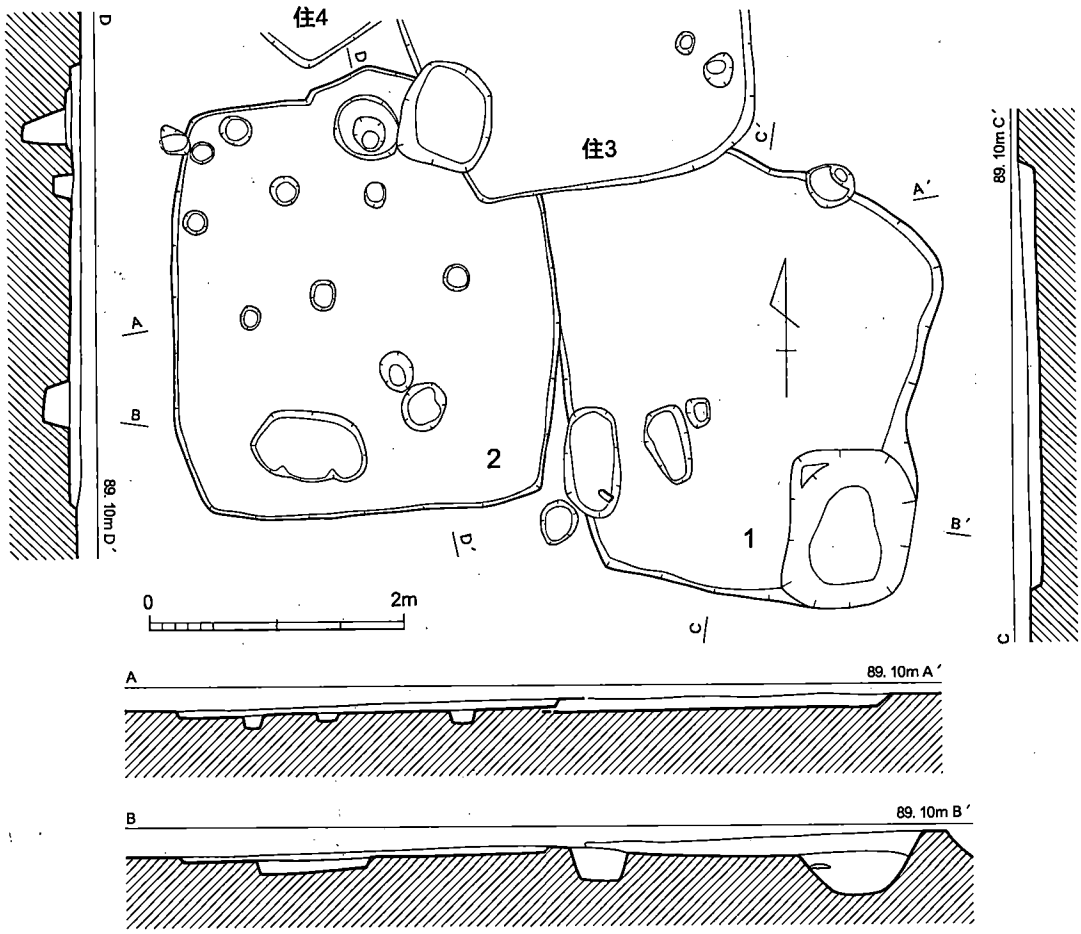
A・B-3区にあり、2・3号住居跡に切られている。南辺1.7m、北辺は復原で3.3m、南北3.4mの台形プランをなし、面積は復原で8.4㎡。主柱穴も炉跡も不明である。ぼろぼろの縄文晩期土器片2点とサヌカイトの剥片4点が出土しているが図示できない。

なお、後述のBグリッド71の土器片と102の石鏃はこの住居の上面で出土している。

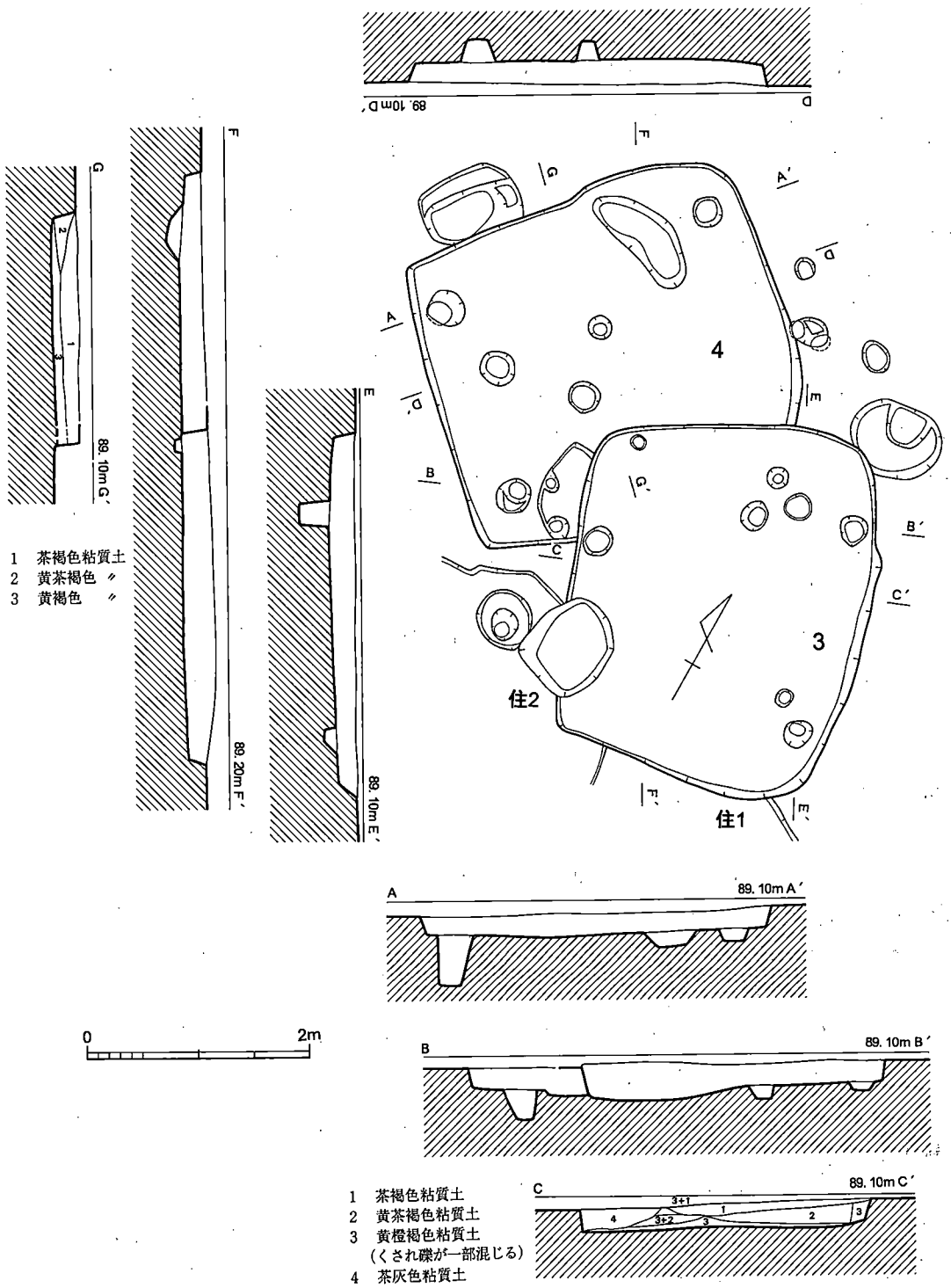
2号住居跡（図版44、第63図）

A-3区にあり、1号住居跡を切り、3号住居跡に切られている。南北3.3m、東西3mの長方形プランをなし、面積は復原で9.2㎡。遺存状態は悪く、きわめて浅い。主柱穴も炉跡も不明である。縄文晩期土器片1点とサヌカイト剥片2点が出土しているが図示できない。

なお、後述のBグリッド100の土器片はこの住居の上面で出土している。



第63図　小覚原1・2号住居跡実測図(1/60)



第64図 小覚原3・4号住居跡実測図(1/60)

3号住居跡（図版45、第64図）

A・B-3区にあり、1・2・4号住居跡を切っている。南北3.3m、東西2.7mの長方形プランの全容がわかる。面積は7.44㎡。埋土はやや不自然なところがある。主柱穴も炉跡も不明。縄文晩期土器片1点とサヌカイト剥片1点が出土したのみである。図示はできない。

4号住居跡（図版45、第64図）

A-3区にあり、3号住居跡に切られている。一辺3.2mの方形に近いプランで、面積は復原で8.7㎡。茶褐色粘質土を主な埋土としていた。主柱穴も炉跡も不明である。縄文晩期土器片7点と黒曜石剥片3点、サヌカイト剥片3点、すり石2点、片岩2点が出土している。

なお、後述のDグリッド41の石鏃はこの住居の上面で出土している。

出土遺物（図版62・63、第82図1・2、84図3・4）

石器(1～4)　1は片岩の磨製品で、石剣のような形状をなすが石斧の破片であろうか。器表には敲打痕が見られる。現存長81㎜、幅38㎜、厚さ11㎜、重さ60.5g。2も緑色をなす片岩で、石斧の破片かと思われる。器表は風化している。現存長84㎜、幅51㎜、厚さ22㎜、重さ123.4g。3は凝灰岩質の丸い石ですり石であろう。器表に擦ってできたと思われる面がいくつかある。長さ88㎜、幅73㎜、厚さ53㎜、重さ345.5g。2は安山岩質の小さな丸い石でこれもすり石であろう。新しい欠損部のほかに器表の数カ所に擦れた所がある。長さ48㎜、幅32㎜、厚さ29㎜で、重さは64.7g。

5号住居跡（図版46、第65図）

A-4区にあり、10号住居跡を切っている。一辺3mの方形プランで、面積は8㎡。主柱穴も炉跡も不明。縄文晩期土器片5点と黒曜石錐1・剥片1点、サヌカイト剥片1点が出土している。

出土遺物（図版60・62、第79図1、81図2）

縄文土器(1)　精製の鉢の口縁部片であるが、器表は磨滅しており調整は不明。おそらくミガキが施されているのであろう。

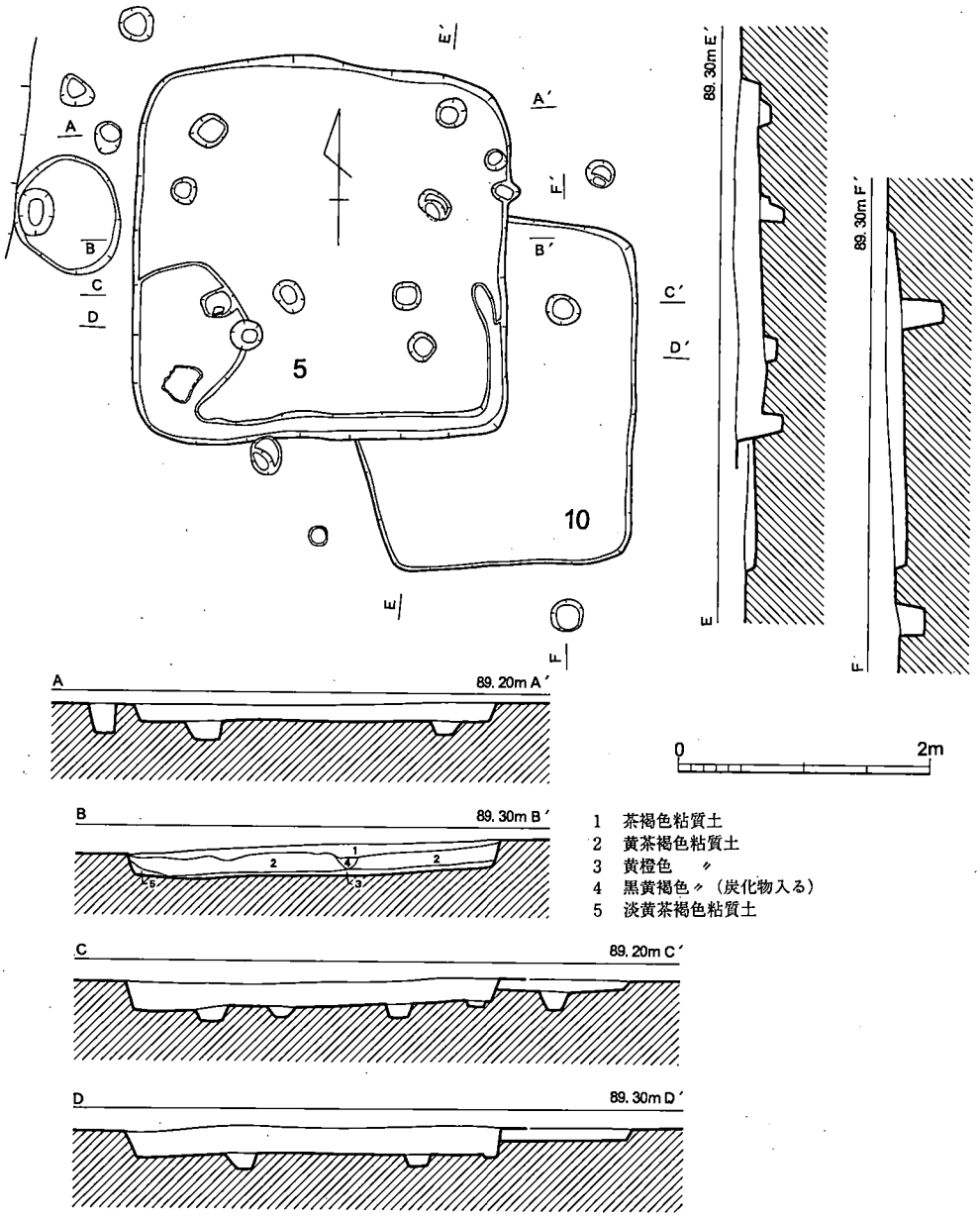
石器(2)　漆黒色をなす黒曜石製の横長剥片を利用した錐である。先端は鈍く磨耗している。長さ28㎜、幅17㎜、厚さ5㎜、重さ1.8g。

6号住居跡（図版46、第66図）

A-4区にあり、7・8号住居跡に切られ、西端部は崖で削られていて全容は不明であるが、方形プランであったものと思われる。東西方向は復原で3.5m。主柱穴も炉跡も不明である。縄文晩期土器片4点と黒曜石剥片1点、サヌカイト剥片2点が出土しているが図示できない。

7号住居跡（図版47、第66図）

A-4区にあり、6号住居跡を切り、上面を新しい溝で切られ、また西端部を崖で削られている。南北方向は2.3mを測り、東西は2.1m以上となる。方形プランであったろう。主柱穴は不明である。東辺の北寄りに焼土が存したが炉であるかどうかはわからない。縄文晩期土器片2



第65図　小覚原5・10号住居跡実測図(1/60)

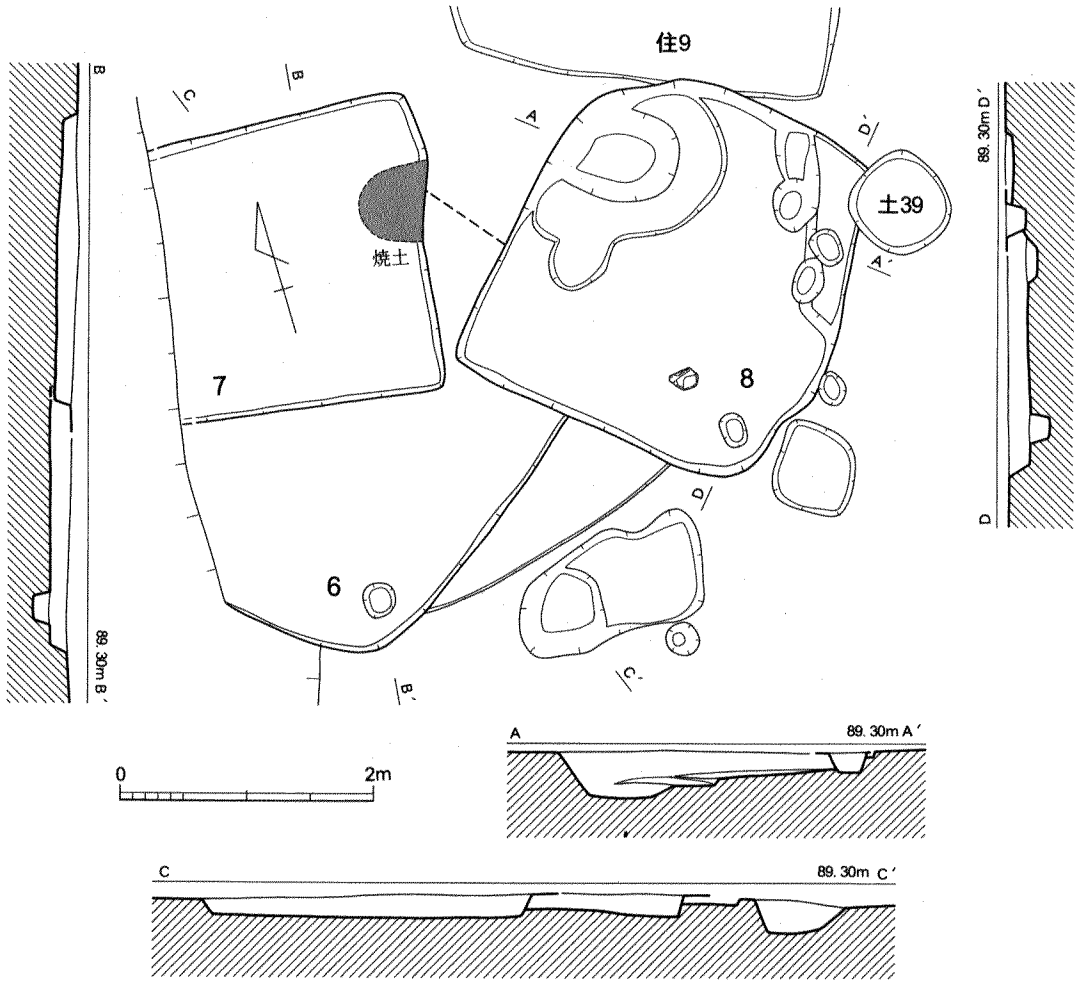
点と黒曜石・サヌカイト剥片各1点、石英質石材の剥片1点が出土しているが図示できない。

8号住居跡（図版47、第66図）

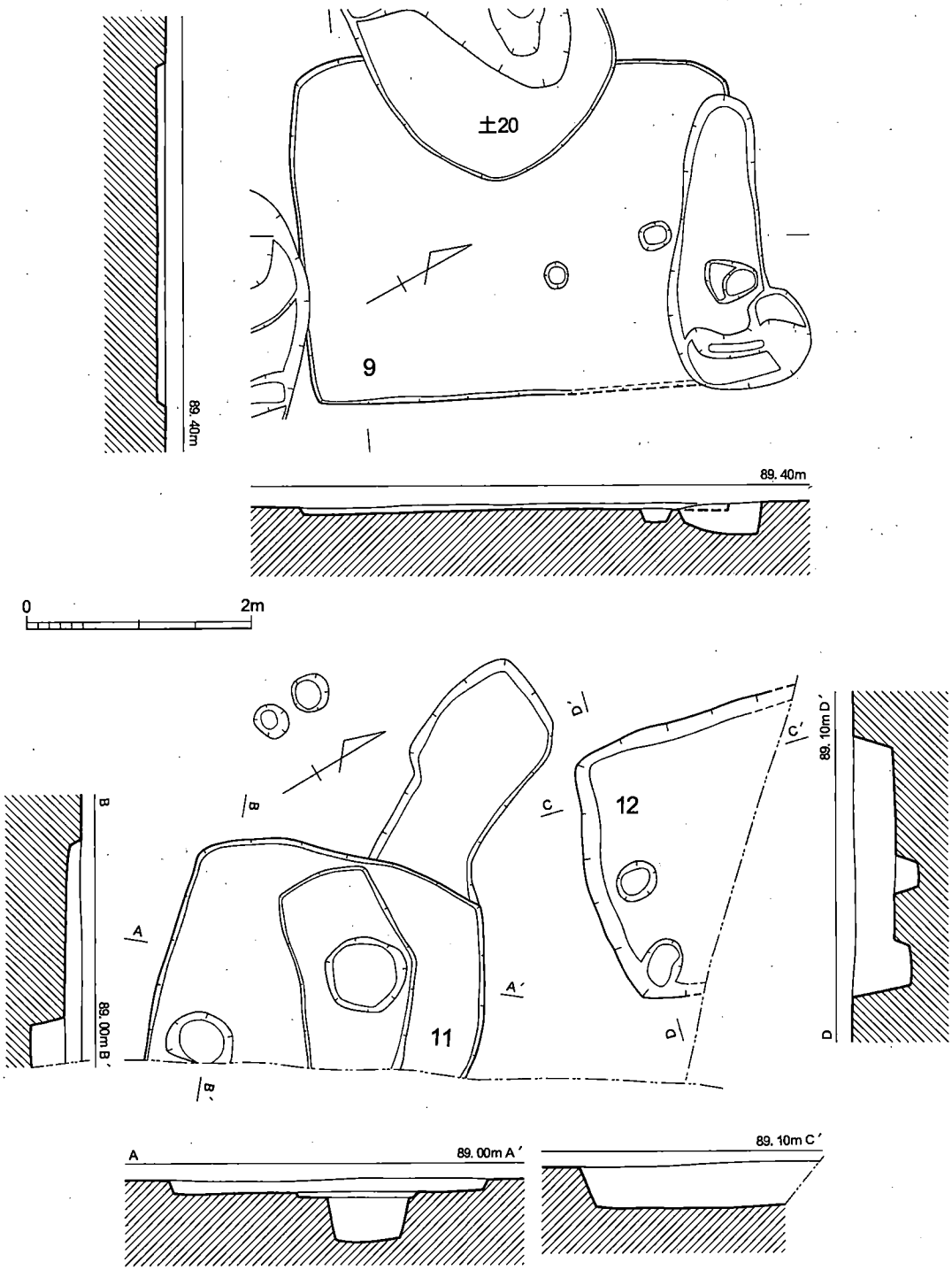
A・B-4区にあり、6・9号住居跡を切り、東隅を39号土坑に切られ、上面を新しい溝で切られている。一辺が2.7～2.9mの方形に近いプランである。面積は6.3㎡。主柱穴も炉も不明である。縄文晩期土器片1点とサヌカイトのコア3・剥片7点が出土しているが図示できない。

9号住居跡（図版48、第67図）

A・B-4・5区にあり、8号住居跡と20号土坑に切られている。東西3m、南北3.9mの長方



第66図　小覚原6～8号住居跡実測図(1/60)



第67図　小覚原 9 ・ 11 ・ 12号住居跡実測図(1/60)

形プランである。面積は復原で10.8㎡。主柱穴も炉も不明である。土器片はなく、黒曜石とサヌカイトの剥片各1点が出土したのみである。

10号住居跡（図版48、第65図）

A-4区にあり、5号住居跡に切られている。南辺1.9m、北辺は復原で2.5m、南北方向2.8mの台形プランをなす。面積は復原で5.8㎡。主柱穴も炉も不明である。遺物は出土していないが、後述するDグリッド3のすり石はこの住居の上面で出土している。

11号住居跡（図版49、第67図）

調査区東南端のD-2区にあり、東南部は農道で調査できなかった。南北方向に2.9mを測る方形プランであろう。主柱穴も炉も不明である。縄文晩期土器片2点と黒曜石・サヌカイトの剥片各1点が出土しているが図示できない。

12号住居跡（図版49、第67図）

D-2区にあり、北側は調査区外にかかる。東西方向は2.4mを測り、長方形プランになるものと思われる。主柱穴も炉も不明である。縄文晩期土器片2点とサヌカイトの剥片2点が出土しているが図示できない。

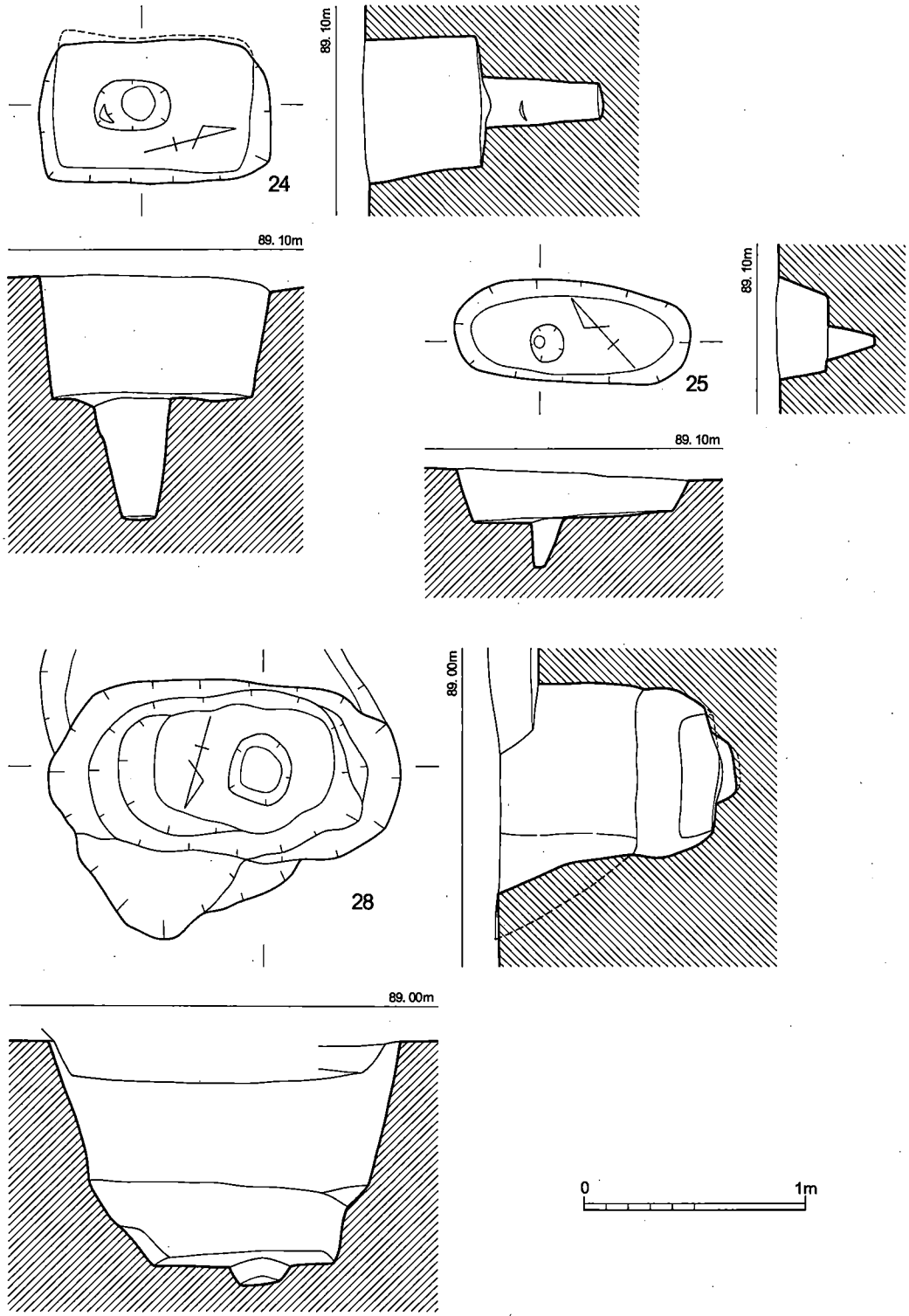
3　土　坑

おとし穴・貯蔵穴と思われる土坑と、その他の性格不明の土坑があった。断定できないものもあるが、種類別に記述していく。おとし穴としては床面にピットを有する24・25・28・32・34号土坑はまず間違いないと思われるが、それ以外に2・26・11・33・35・37号土坑もそうであろう。そして可能性のあるものとして4・13・21・31土坑がある。貯蔵穴としては3・5号土坑、それ以外に10・39・14・19号土坑が可能性があるのではないかと考えている。残りはその他の性格不明の土坑とする。これらは一部に土師器片らしき土器片の混入が見られるが、全て縄文晩期の所産と捉えている。

a　おとし穴

24号土坑（図版50、第68図）

C-2区にある。上面で長軸105cm、短軸64cmの長方形プランをなし、主軸方位はN-14°-E。検出面から床面まで55cmを測り、埋土は黒茶褐色土であった。床面の中央よりやや南寄りに上



第68図　小覚原24・25・28号土坑実測図(1/30)

面径22×33cmで深さ55cmのピットが掘られている。このピット内にはさらに小さな杭の痕跡は認められなかった。サヌカイトの剥片5点が出土したのみである。

25号土坑（図版50、第68図）

C-2区の南東部にある。上面で長軸107cm、短軸45cmの長楕円形プランをなし、主軸方位はN-47.5°-Wo。検出面から床面まで24cmと浅く、床面の中央よりやや西寄りに上面径15×17cmで深さ22cmのピットが掘られている。出土遺物はない。

28号土坑（図版50、第68図）

D-1区の北端にある。別の浅い遺構と重複していた。上面で長軸159cm、短軸80cmの隅円長方形プランをなし、主軸方位はN-74°-E。検出面から床面まで102cmを測り、床面は長軸81cm、短軸57cmとあまり広くない。壁面にはいくつかの屈折がある。床面の中央よりやや西寄りに上面径27×32cmで深さ10cmのピットが掘られている。縄文晩期土器片2点と黒曜石剥片7点、サヌカイト剥片1点、すり石1点が出土した。

出土遺物（図版61・63、第80図1、84図2）

縄文土器(1)　半精製の浅鉢の口縁部片で、端部を欠失する。器表は磨滅しており調整は不明。おそらくミガキが施されているのであろう。

石器(2)　扁平気味の安山岩質の丸い石で、側縁には擦ったときにできた小さな面がいくつかある。長さ65mm、幅60mm、厚さ37mm、重さ176.4g。

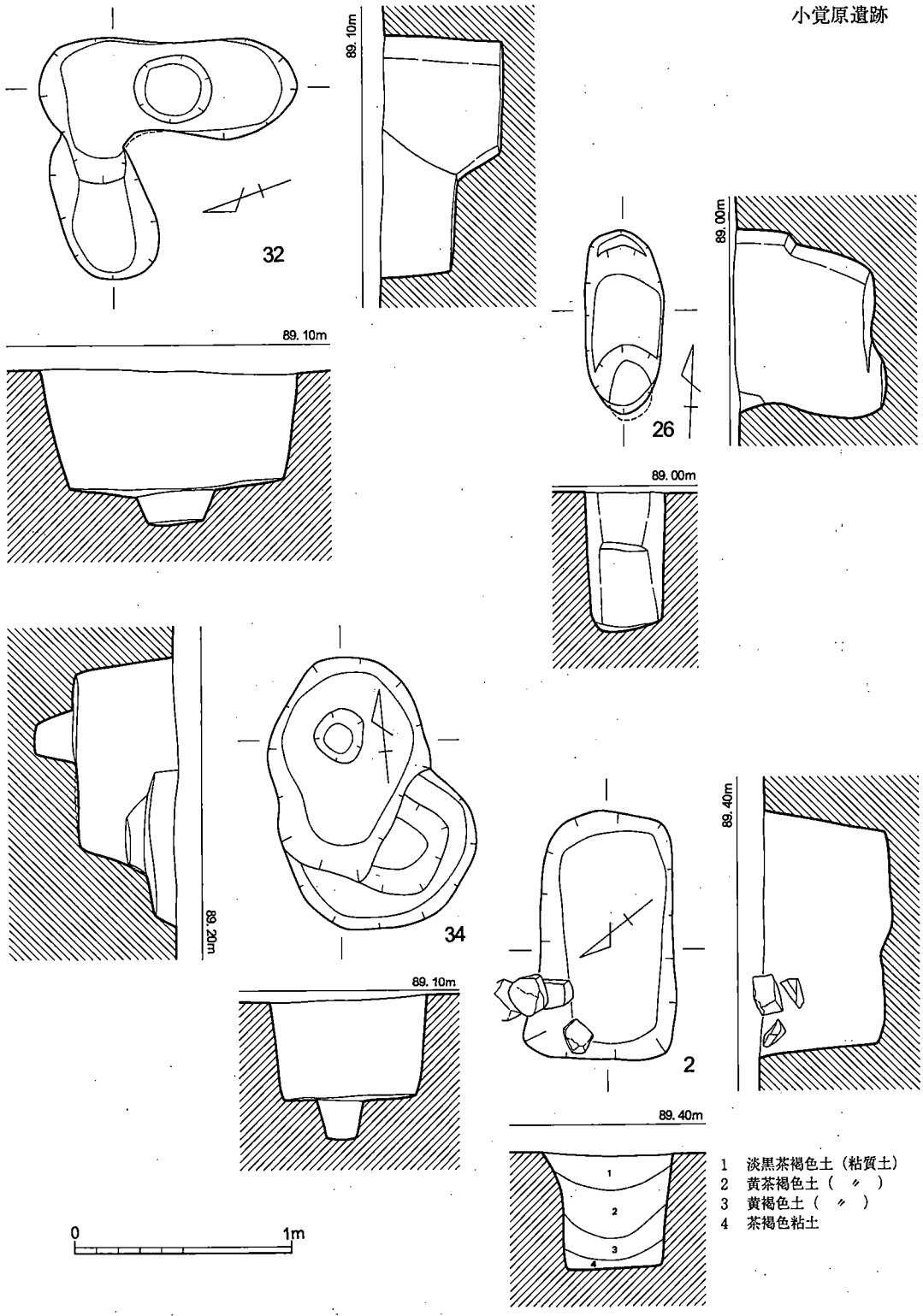
32号土坑（図版51、第69図）

C-2区の25号土坑の北東にある。上面で長軸119cm、短軸40cmの隅円長方形プランをなし、主軸方位はN-19.5°-E。北西端部は別のピットと重複していたが先後関係は不明であった。検出面から床面までは57cmを測り、床面のほぼ中央に上面径31×36cmで深さ16cmのピットが掘られている。出土遺物はなかった。

34号土坑（図版51、第69図）

B-4区にあり、南側で別の浅い遺構と重複していた。上面で長軸205cm、短軸150cmの楕円形プランをなし、主軸方位はN-5.5°-E。検出面から床面までは95cmを測り、床面のやや北寄りに上面径45×50cmで深さ35cmのピットが掘られている。サヌカイト剥片2点と石英質石材の剥片1点が出土している。

26号土坑（図版51、第69図）



第69図　小覚原２・26・32・34号土坑実測図(1/30)

D-2区にある。上面で長軸84cm、短軸36cmの長楕円形プランをなし、主軸方位はN-3°-Wo検出面から床面までは64cmを測り、床面の南端部はピット状に約7cm低くなっている。この南壁はオーバーハングする。また北壁には小さな段が付いている。サヌカイト剥片2点が出土した。

2号土坑（図版52、第69図）

C-2区の北西端にあり、別の浅い遺構と重複していた。上面で長軸115cm、短軸61cmの長方形プランをなし、主軸方位はN-52°-W。検出面から床面までは60cmを測り、埋土は自然堆積の様相であった。北西隅の上面と一部埋土中に礫石数個があったが、この土坑に伴うものかどうかわからない。縄文晩期土器片1点と黒曜石剥片1点が出土した。

11号土坑（図版53、第70図）

B-6区南端にある。上面で長軸133cm、短軸68cmの長楕円形状の隅円長方形プランをなし、主軸方位はN-20°-E。検出面から床面までは40cmを測り、埋土は上層が暗褐色土、下層が暗茶褐色区土であった。黒曜石剥片1点とサヌカイト剥片2点が出土した。

35号土坑（図版52、第70図）

B-4区の34号土坑の西にある。上面で長軸220cm、短軸147cmの幅広の隅円長方形プランをなし、主軸方位はN-6.5°-E。検出面から床面までは75cmを測る。壁面に地山の礫の見えているところもあった。サヌカイト剥片1点が出土したのみである。

37号土坑（図版52、第70図）

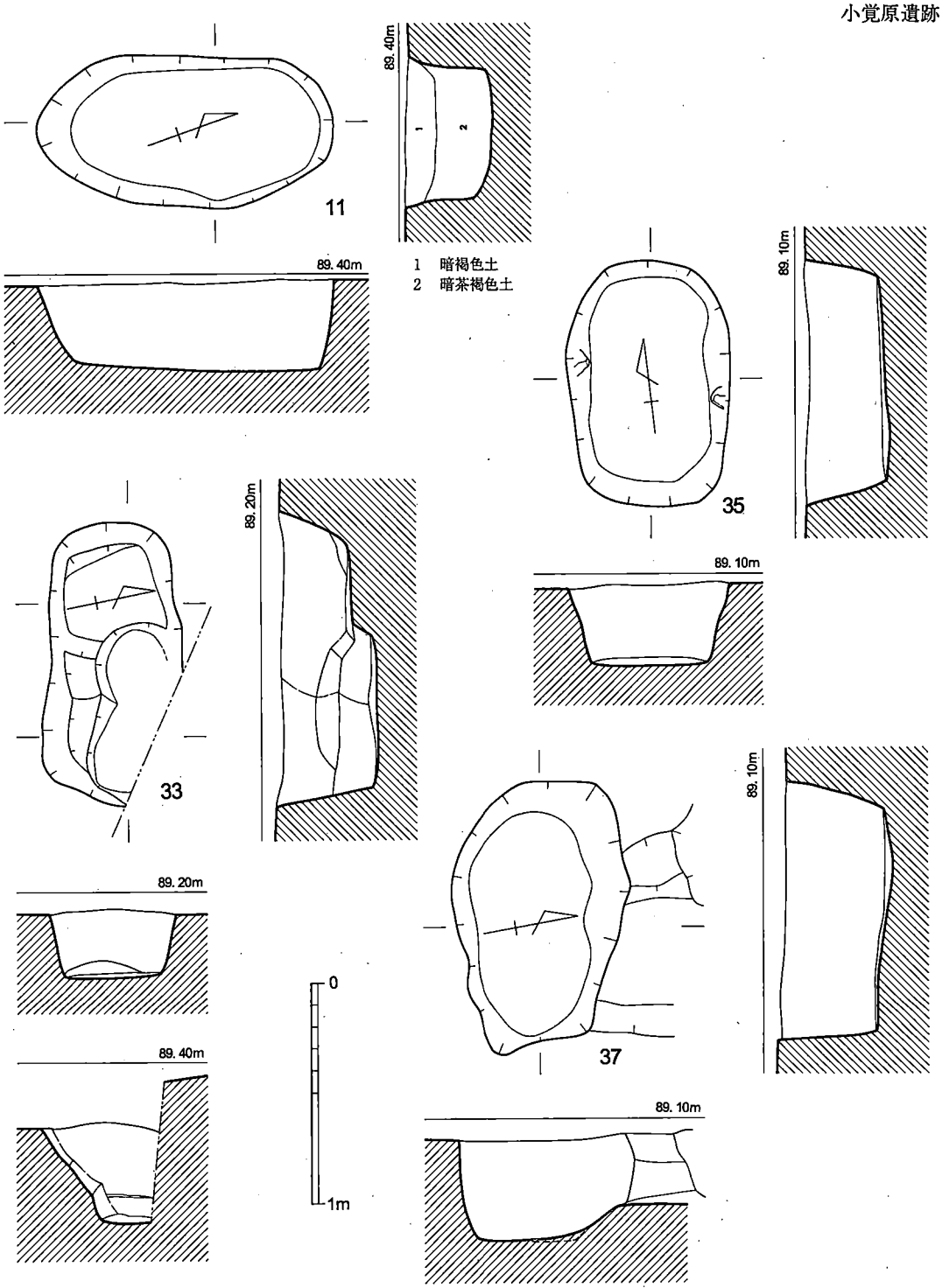
C-2区北端にあり、別の遺構と重複していた。上面で長軸235cm、短軸160cmのやや不整な長楕円形プランをなし、主軸方位はN-80°-Wとなる。検出面から床面までは100cmを測る。黒曜石剥片1点が出土したのみである。

4号土坑（図版53、第71図）

C-3区の西端近くにあり、別の遺構を切っていた。上面で長軸119cm、短軸50cmの長方形プランをなし、主軸方位はN-29.5°-E。検出面から床面までは22cmを測り、埋土は上層が黒茶褐色、下層が茶褐色の粘質土であった。一見すると土壙墓のようであるが、一応おとし穴の可能性があるものとしておく。縄文晩期土器片1点が出土したが図示しえない。

13号土坑（図版53、第71図）

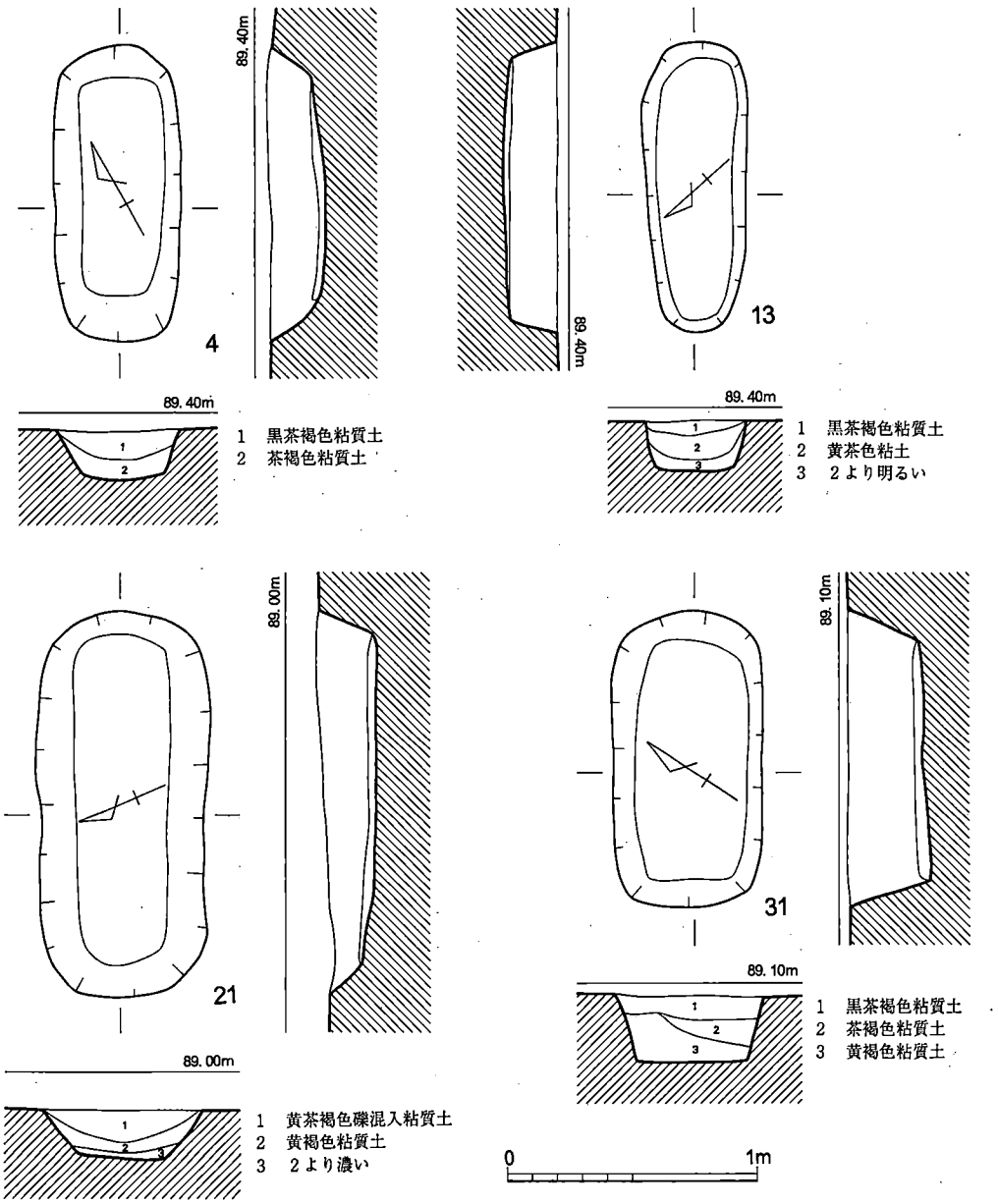
B-6区の北西端近くにあり、調査区内の土坑では北端にある。上面で長軸は116cm、短軸は



第70図　小覚原11・33・35・37号土坑実測図(1/30)

東側が広くて最大42cmの隅円長方形プランをなす。主軸方位はN-48.5°-W。検出面から床面までは21cmを測り、埋土は自然堆積の様相であった。これも一見すると土壙墓のようであるが、おとし穴の可能性があるものとしておく。縄文晩期土器片1点と黒曜石剥片1点が出土した。

出土遺物（図版60、第79図1）



第71図　小覚原4・13・21・31号土坑実測図(1/30)

縄文土器(1) 粗製の鉢の肩部片で、器表は磨滅していて調整は不明であるが、外面はもと条痕らしい。

21号土坑（図版54、第71図）

B-3区の南端にある。上面で長軸は155cm、短軸は68cmの隅円長方形プランをなし、主軸方位はN-67°-Wo。検出面から床面までは深さ最大24cmを測り、埋土は黄色系の粘質土が自然堆積していた。これも一見して土壙墓のようであるが、おとし穴の可能性があるものとしておく。出土遺物はなかった。

31号土坑（図版54、第71図）

D-2区の北端にある。上面で長軸は120cm、短軸は60cmの隅円長方形プランをなし、主軸方位はN-57°-E。検出面から床面までは32cmを測る。これも一見して土壙墓のようであるが、おとし穴の可能性があるものとしておく。サヌカイト剥片6点が出土した。

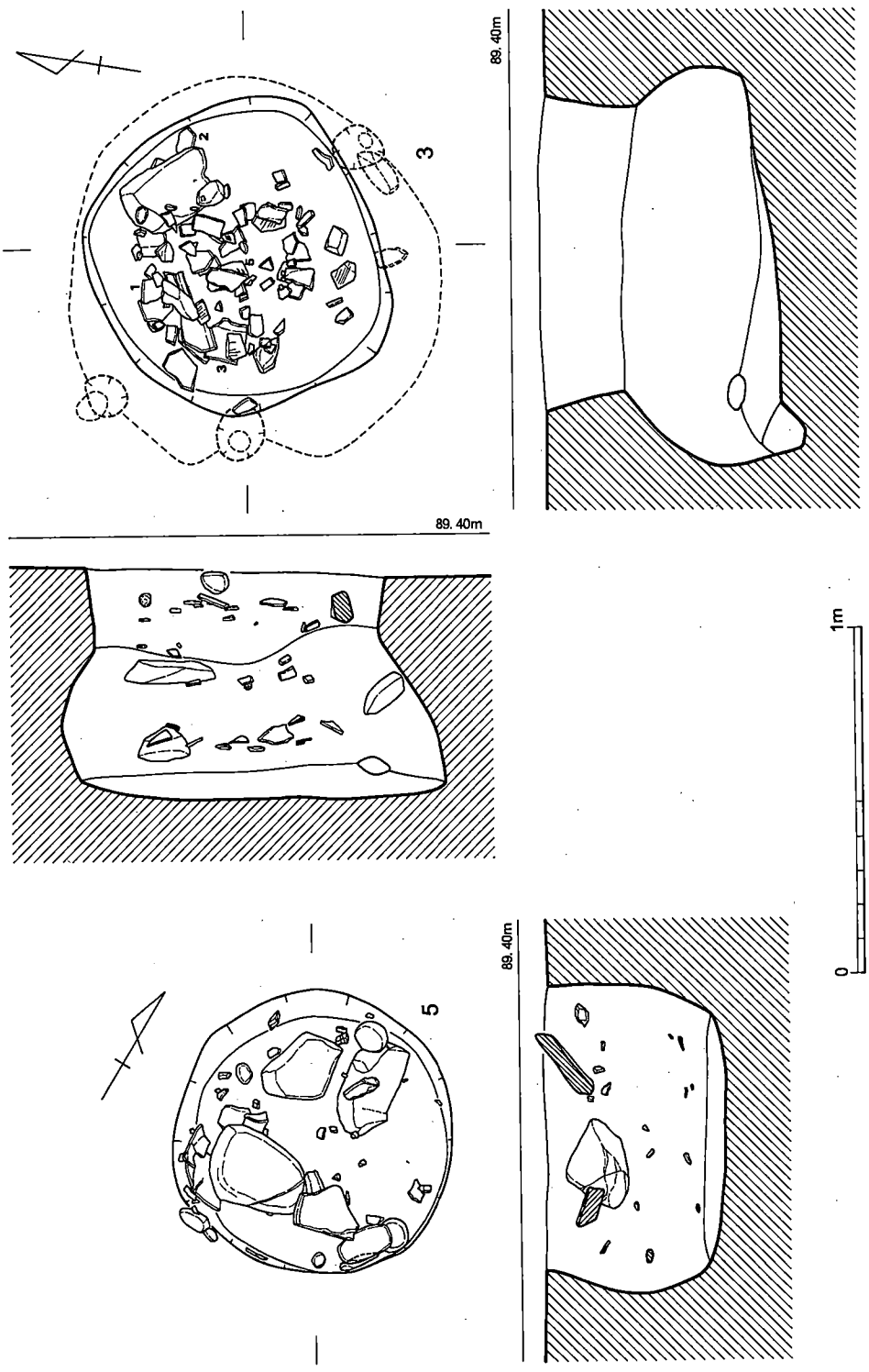
33号土坑（図版54、第70図）

C・D-3区にあり、北東部は掘り下げずにいたため不明のままであるがおおよそ全容はわかる。上面で長軸127cm、短軸59cmの隅円長方形プランをなし、主軸方位はN-79°-W。坑内東半部の北側が最も深くて検出面から床面まで45cmを測り、西半部は少し浅くて深さ32cmである。おとし穴とするにはやや不自然かもしれない。縄文晩期土器片3点と黒曜石剥片1点、サヌカイト剥片2点が出土したが図示しえない。

b 貯蔵穴

3号土坑（図版55、第72図）

C-3区南西端にある。上面の平面プランは81×87cmの隅円方形であるが、床面は径110cmの円形プランをなす。断面形は、検出面から25cmほどまでは窄まりつつ直立するが、それより下方は大きく抉れて袋状をなしている。検出面から床面までは70cmを測り、埋土は茶褐色粘質土で最下層になると黄色がかっていた。埋土中には上層から下層まで土器片や礫石、焼土、炭化物が多量に入っていたが、床面に密着して検出されたものはなかった。床面の周縁に3個ともう1個のピットが見られたが、これは当初から意識的に掘られたものとは思われない。土器片は52まで番号を付けて取り上げたが接合もしくは同一個体とみなされるものが多々あり、5～9個体分の破片かと思われる。全て風化が著しい。石器は安山岩・片岩等が21、黒曜石・サヌカイトが各々4まで番号を付したが、別に片岩等が3個、黒曜石剥片が21個、サヌカイト剥片が6個あった。中には大きな台石もある。これらの遺物は土坑の廃棄後に投棄されたものであろう。



第72図　小覚原３・５号土坑実測図(1/20)

出土遺物（図版60・62～65、第79図1～5、81図6～9、82図10～13、84図14、85図15、87図16）

縄文土器（1～5） 1の鉢は胴部がくの字形に屈折する器形となろう。器表は風化して調整不明であるが、胎土は黒色であり本来は黒色磨研であろう。砂粒が多くて精製とはいいがたく半精製とすべきである。復原口径23.2cm。2は口縁に突起を持つ鉢で、小破片のため全形は不明。3は口縁部片が10片あるものから復原して図示した粗製の深鉢である。突起は図のようになるとは限らない。肩部がくの字形に屈折するものとなり、おそらく4の底部が接続するものと思われる。砂粒を多く含み器表はぼろぼろである。内外とも条痕ののちナデを施しているらしい。復原口径39.2cm。4は3の底部かと思われる。胴部へ立ち上がる括れは左右が同じ形状ではないらしい。復原底径10.7cm。5も粗製深鉢の底部片で、底部は高台状に図示したものの確実ではない。外面は条痕のちナデを施している。

石器（第81図6～9、82図10～13、84図14、85図15、87図16） 81図6～8は石鏃である。6は黒曜石製で、先端は鋭い。左右対称とはならない。長さ23.5mm、幅13mm、厚さ4.8mm、重さ1.2g。7はサヌカイトの横長剥片利用の鏃で、基部には背面から急角度の調整が施されている。長さ32.5mm、幅20.5mm、厚さ6mm、重さ3.7g。下層出土。8もサヌカイト製で中央より上半分部を欠く。鋸歯状となる。現存長13.5mm、幅18mm、厚さ4.5mm、重さ1.1g。9は黒曜石の使用剥片で、基部には原面を残し、縁辺には刃こぼれがある。長さ34.5mm、幅30mm、厚さ8mm、重さ7.8g。

82図10～12は片岩の扁平な製品で、打製石斧としておくが土掘り具であろう。10は両側面に浅い抉りが入っている。刃こぼれらしき部分があるものの明確な刃部はない。長さ123mm、幅72mm、厚さ11mm、重さ110.5g。11も先端は尖った形状をなすが明確な刃部はない。表面は磨いているから半磨製とすべきか。現存長95mm、幅55mm、厚さ12mm、重さ91.4g。12は薄い板状品で刃部らしき所もなく石器として疑問もある。現存長59mm、幅57mm、厚さ9mm、重さ37.7g。

82図13は砂質片岩の扁平な板状製品で台形状をなし、一側縁に抉りがあるのみで刃部等は見られない。何かの未製品かもしれない。材質は脆い。長さ112mm、幅72mm、厚さ9mm、重さ76.6g。

84図14は安山岩質のすり石で、底面は平滑である。側縁の一部に敲打痕がある。長さ74mm、幅67mm、厚さ52mm、重さ288.8g。

85図15も安山岩質のすり石で、表裏面ともに擦って滑らかである。また表裏面ともに二次熱を受けている。長さ145mm、現存幅85mm、厚さ48mm、重さ650.9g。

87図16もやはり安山岩質石材であるが、台石とすべきか。表裏面ともに擦って滑らかである。長さ182mm、現存幅140mm、厚さ92mm、重さ2632.3g。

5号土坑（図版56、第72図）

D-3区の西端にある。上面が径80cm、床面が径72cmの円形プランをなし、断面形は緩やかな袋状をなしている。検出面から床面までは53cmを測り、埋土は黄茶色粘質土であった。埋土中

のとくに上層には大きな礫石を含めて土器片等が出土した。土器片は14まで番号を付けて取り上げたが実測しうるものはごく少なかった。なかに土師器かと思われる破片があったが、土師器であるとしても混入である。石器は安山岩・片岩・黒曜石・サヌカイト等を34まで番号を付したが、別に黒曜石剥片が14個、サヌカイト剥片が16個あった。これらの遺物は土坑の廃棄後に投棄されたものであろう。なお、下層から炭化した種子も出土している。

出土遺物（図版60・62・64・66、第79図1・2、81図3・4、82図5・6、85図7～10、87図11～13）

縄文土器（1・2）　1は粗製の鉢の底部片である。復原底径4.6cm。2は粗製深鉢の口縁～肩部片で、砂粒を多く含み器表はぼろぼろである。暗茶褐色をなす。外面は条痕ののちナデ、内面はナデを施しているらしい。

石器（第81図3・4、82図5・6、85図7～10、87図11～13）　3は黒曜石製の縦長剥片を利用した鏃の破片で、現存長13㎜、幅13㎜、厚さ3㎜、重さ0.45g。4は縦長剥片の両側に刃部をつくりだしたスクレイパーで黒曜石製。長さ32.5㎜、幅28㎜、厚さ6.5㎜、重さ4.6g。

82図5・6はともに片岩製品で、いずれも土掘り具とした石斧かと思われる。5は表面の一部を磨いているらしい。現存長106㎜、幅50㎜、厚さ17㎜、重さ106.2g。6は頁岩質の大きな球形石材を打ち割った破片を利用したもので、表面は平坦であるが裏面は曲面をそのまま残している。頭部近くの両側に抉りがあり、そこには紐掛けした痕跡がある。長さ125㎜、幅48㎜、厚さ11㎜、重さ78.2g。

85図7は安山岩質のすり石で、表裏ともに平滑である。一側縁頂部には敲打痕があり、僅かに欠損している。二次熱を受けた痕跡がある。長さ102㎜、幅94㎜、厚さ48㎜、重さ695.5g。

85図8も安山岩質のすり石もしくは叩石で、表裏面ともに擦れてとても滑らかである。また側縁全周に敲打痕が著しく、よく使い込んだ様子がうかがえる。長さ106㎜、幅96㎜、厚さ43㎜、重さ689.9g。

82図9もやはり安山岩質のすり石で、表裏面ともに擦って滑らかであるが、側縁には敲打痕があり、また剥離した部分がある。二次熱を受けているらしい。残存部の長さ107㎜、幅48㎜、厚さ51㎜、重さ301.6g。

85図10はカンラン石を含む凝灰岩質石材の扁平石斧状の石器である。中央よりやや上の側縁に小さな抉りがあり、その片方には紐ずれの痕跡があって、また二つの抉りを結ぶ線上は少しすり減っているから、ここを紐で緊縛して使用したことは間違いない。明確な刃部がないことから土掘り具のような用途に供したものであろうか。頭部と側縁の一部が黒ずんでおり、二次熱を受けているらしい。全長159㎜、幅88㎜、厚さ39㎜、重さ608.3g。

87図11は安山岩らしき石材で台石であろう。表面の一部に擦痕がある。長さ265㎜、幅175㎜、厚さ59㎜で、重さは3000gを越している。

87図12は片岩で台石として使用したものらしい。表面の一部に擦痕がある。長さ187㎜、幅142

㎜、厚さ43㎜で、重さ1518.7g。
87図13は石英斑岩と思われる石材で、やはり台石として使用したものらしい。表裏面ともに滑らかである。現存の長さ164㎜、幅105㎜、厚さ74㎜で、重さ1288.9g。

14号土坑（図版57、第73図）

B-3区の北西端にある。上面が径98～107cm、床面が径80～84cmの円形プランをなし、検出面から床面までは深さ44cmを測る。埋土の中上層には炭化物が混入していた。壁際には地山に近い黄褐色粘質土が縦に見られるので、本来は断面が袋状になっていたものと思われる。床面には小ピット２個があるが、これは意識して穿たれたものとは思われない。縄文晩期土器片4点と黒曜石のスクレイパー2点・剥片5点、サヌカイト剥片2点、石英質石材の剥片1点、すり石2点、片岩1点が出土した。

出土遺物（図版60・62・63・66、第79図1～4、81図5・6、82図7、85図8・9）

縄文土器(1～4)　いずれも鉢の破片で3は浅鉢になろう。1・3は半精製で、2・4は粗製としてよい。器表は風化しているので調整は明瞭でないが、2の外面はナデかミガキ、3は外面が条痕のちミガキ、内面はミガキ、4の外面は条痕らしい。

石器(第81図5・6、82図7、85図8・9)　81図5は白色をなす黒曜石製のスクレイパーで、横長剥片を利用しており、長さ28㎜、幅18㎜、厚さ3㎜、重さ1.5g。6は黒曜石製の台形状をなす使用剥片で一側縁に刃こぼれがある。長さ40㎜、幅29.5㎜、厚さ3.2㎜、重さ2.7g。
82図7は扁平で小さな片岩製品で、石斧としておく。使用痕らしきキズが見られる。現存長46㎜、幅34㎜、厚さ6㎜、重さ13.9g。
85図8は安山岩質のすり石で、表面には敲打による浅い窪みがあり、また表裏面ともに平滑である。側縁には擦ってできた面を持つ。二次熱を受けた痕跡がある。長さ107㎜、現存幅62㎜、厚さ49㎜、重さ402.1g。
85図9も安山岩質のすり石もしくは叩石で、明瞭に擦れた所は見えないが、表面には使用痕らしき条線がある。裏面は二次熱を受けるとともに欠損部分がある。現存の長さ103㎜、幅118㎜、厚さ64㎜、重さ1004g。

19号土坑（図版57、第75図）

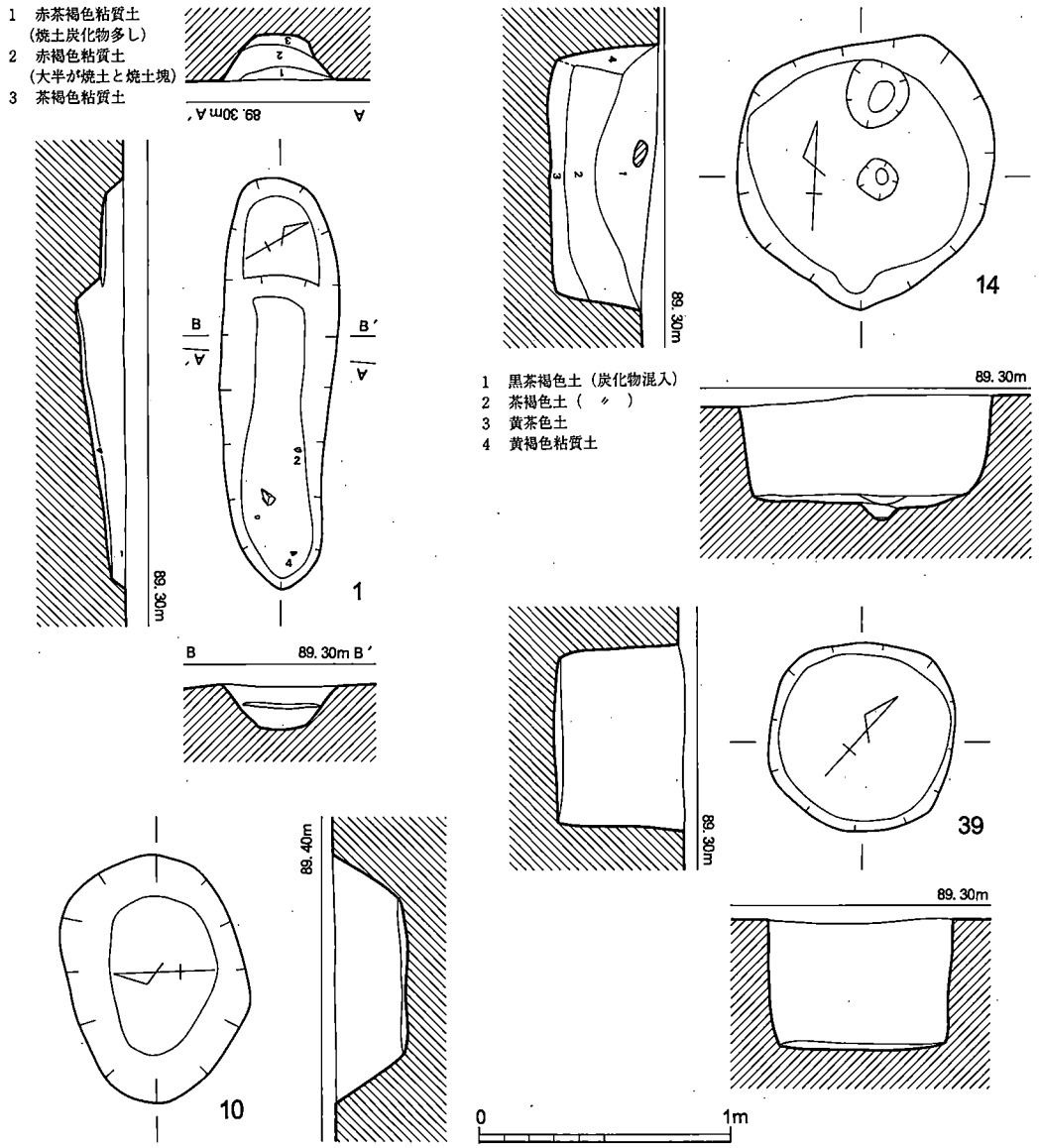
A・B-2区の段落ち部にある。幅165cm、長さ180cm以上の長方形プランの浅い掘り込みを切って２基の土坑があるので、東側を19A、西側を19Bとする。19Aは復原で85×125cmで深さ35cm（北側）と70×110cmで深さ43cm（南側）の二つの楕円形プランの土坑が重複している。19Bは80×95cmの偏円形プランで深さ50cmを測る。出土遺物は両方のものをまとめて取り上げており、縄文晩期土器片5点と黒曜石の鏃1点・剥片13点、サヌカイトの鏃4点・剥片26点、石英質

石材のコア1点、それに混入の陶器片1点があった。

出土遺物（図版61・62、第80図1・2、81図3～8）

縄文土器(1・2)　ともに半精製の鉢の破片で、2は1の胴部かもしれない。内外ともに本来はミガキが施されていたと思われる。

石器(第81図3～8)　3～6・8はサヌカイト製、7は黒曜石製の鏃である。3は大型品で、横長剥片を利用している。長さ36㎜、幅28㎜、厚さ6.5㎜、重さ8.0g。4はきわめて小型である。長さ



第73図　小覚原１・10・14・39号土坑実測図(1/30)

12.5㎜、幅11㎜、厚さ2.4㎜、重さ0.2g。5は全体に浅い調整が施されている。長さ13㎜、幅13㎜、厚さ2㎜、重さ0.25g。6も小さい。長さ13㎜、幅12.5㎜、厚さ2㎜、重さ0.4g。7は押圧剥離で丁寧な仕上げである。長さ14.5㎜、幅13.3㎜、厚さ2.2㎜、重さ0.35g。8は片翼のみの残存で、現存の長さ19.5㎜、幅12㎜、厚さ2.8㎜、重さ0.4g。

10号土坑（図版57、第73図）

B-5区の北端、11号土坑のすぐ南にある。上面で長軸98cm、短軸70cmの偏楕円形プランをなし、検出面から床面までの深さは28cm。貯蔵穴であるとの確証はないが、可能性があるものとしておく。縄文晩期土器片1点とサヌカイト剥片1点、片岩1点が出土したが図示できない。

出土遺物（図版63、第82図1）

石器　きわめて脆い片岩の扁平製品で、平面長方形の隣り合った2辺に浅い抉りがある。錘であろうか。長さ43㎜、幅30㎜、厚さ9㎜、重さ12.1g。

39号土坑（図版58、第73図）

B-4区の北西端近くにあり、8号住居跡を切っている。おそらく38号土坑をも切っていたと思われる。上面で径72～76cm、床面で径66cmの円形プランをなし、検出面から床面までは深さ52cmを測る。これも貯蔵穴であるとの確証はないが、可能性があるものとしておく。縄文晩期土器片6点と黒曜石剥片4点、サヌカイト剥片2点が出土したが図示できない。

c　その他

1号土坑（図版58、第73図）

C-2区の南端にある。上面で長さ162cm、幅45cmの溝状といってよいプランをなし、床面は西側に段が付く。一見すると土壙墓らしき形状である。検出面から床面の最深部までは深さ18cmを測る。最下層を除いて埋土には焼土・焼土塊・炭化物が入っていたが、それは中央付近に特に多かった。焼土塊には炉壁のような固いものもあった。縄文晩期土器片6点と鏃を含む黒曜石剥片6点、サヌカイト剥片4点が出土した。

出土遺物（図版60・62、第79図1、81図2～4）

縄文土器(1)　鉢の破片であろう。外面はタタキ風の条痕である。

石器（第81図2～4）　3点ともサヌカイト製の鏃である。2は完形であるが左右対称にはならない。長さ24㎜、幅19.5㎜、厚さ6㎜、重さ2.2g。3は先端は尖らず平面形が台形状をなす。長さ13.5㎜、幅19㎜、厚さ3.2㎜、重さ0.9g。4は土坑の東端部から出土したもので、やや厚みがある。長さ19.5㎜、幅15㎜、厚さ2.8㎜、重さ1g。

6号土坑（図版43、第74図）

C-4区にある。上面で長さ313cm、幅202cmのやや不整な楕円形プランをなす。検出面から床面までは深さ20cmと浅く、東側は立ち上がりが緩い。縄文晩期浅鉢片1点と黒曜石剥片1点、サヌカイト剥片2点、丸い石が出土したが図示できない。

7号土坑（図版43、第74図）

B-3・4区にまたがって存する。上面で長さ285cm、幅218cmの楕円形プランをなし、断面は摺り鉢状に窪んだ形状となる。検出面から床面の最深部までは深さ38cmを測る。土器片は出土せず、黒曜石剥片4点、サヌカイト剥片1点が出土したのみである。

8号土坑（図版43、第74図）

B-4区にある。上面の幅150cmで、長さ270cm以上、深さ52cmの本体たる不整長方形プランの土坑の東端部北側に、幅65cmで長さ160cmほどの溝状の張り出しのある形状を呈する。本体の土坑の西端部は掘り下げなかったため不明であるが、もうそれほど延びるものではないだろう。黒曜石の細石刃1点とサヌカイト剥片3点が出土した。

出土遺物（図版62、第21図1）

石器　黒曜石製の細石刃の中ほどの破片である。現存の長さ12.5mm、幅8mm、厚さ1.5mm、重さ0.15g。

9号土坑（図版43、第74図）

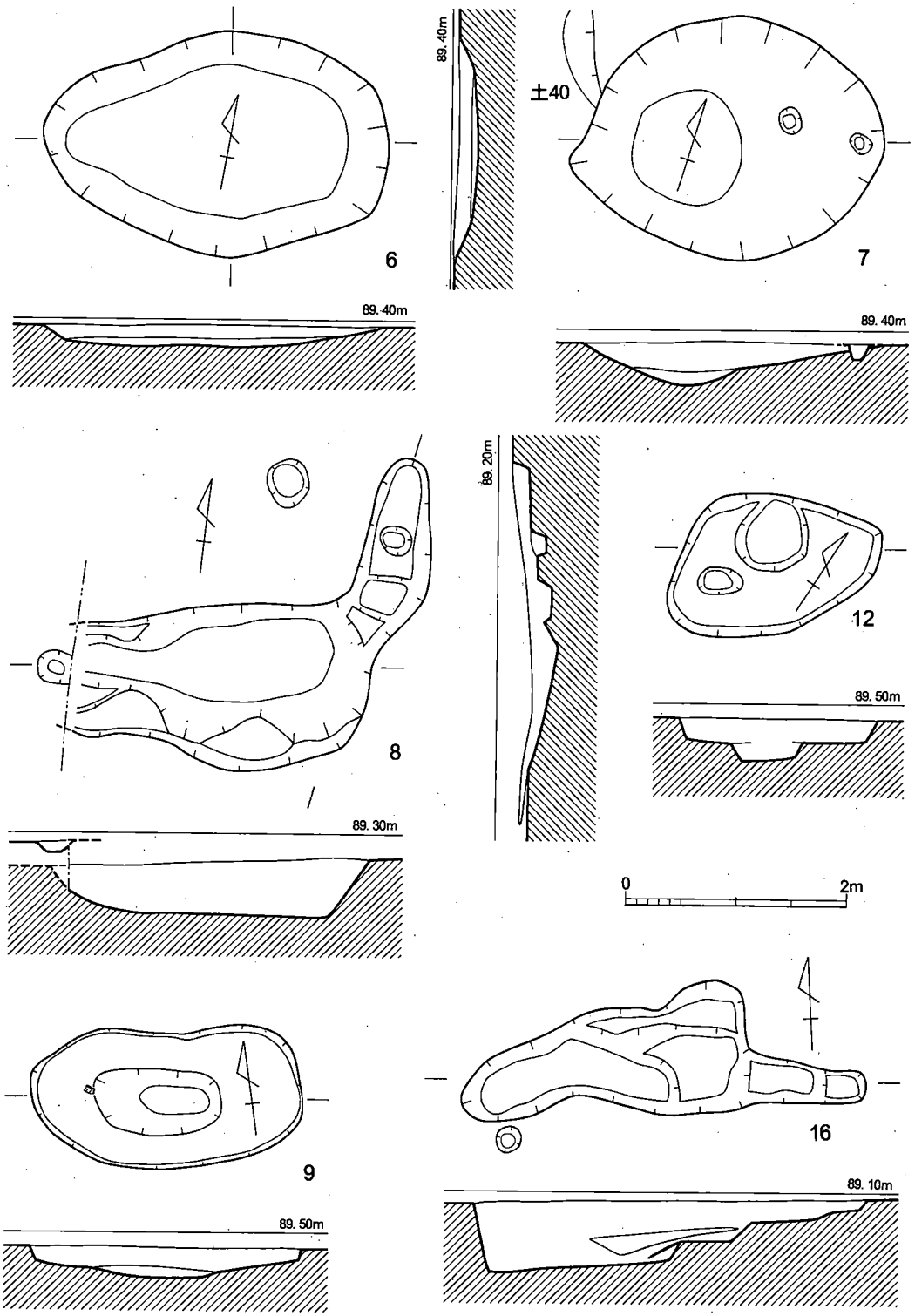
B-5区に存する。上面で長さ245cm、幅123cmの長楕円形プランをなし、検出面から床面までは深さ21cmで、床面中央は長さ115cm、幅60cmが深さ10cmだけ深くなっている。土器片は出土せず、黒曜石剥片2点が出土したのみである。

12号土坑（図版43、第74図）

B-6区にある。上面で長さ204cm、幅130cmの三角形状のプランをなす。検出面から床面までは深さ22cm。床面には大小2個のピットがあり、北側の大きい方は深さ16cm、小さい方は深さ20cmである。縄文晩期土器片4点と黒曜石剥片2点、サヌカイト剥片1点が出土したが図示できない。

16号土坑（図版43、第74図）

B・C-3区に存する東西に長い溝状の土坑である。上面で長さ365cm、幅は最大118cm、深さは最深部で53cmを測る。東から西へ段々に低くなっている。黒曜石のスクレイパーとサヌカイ

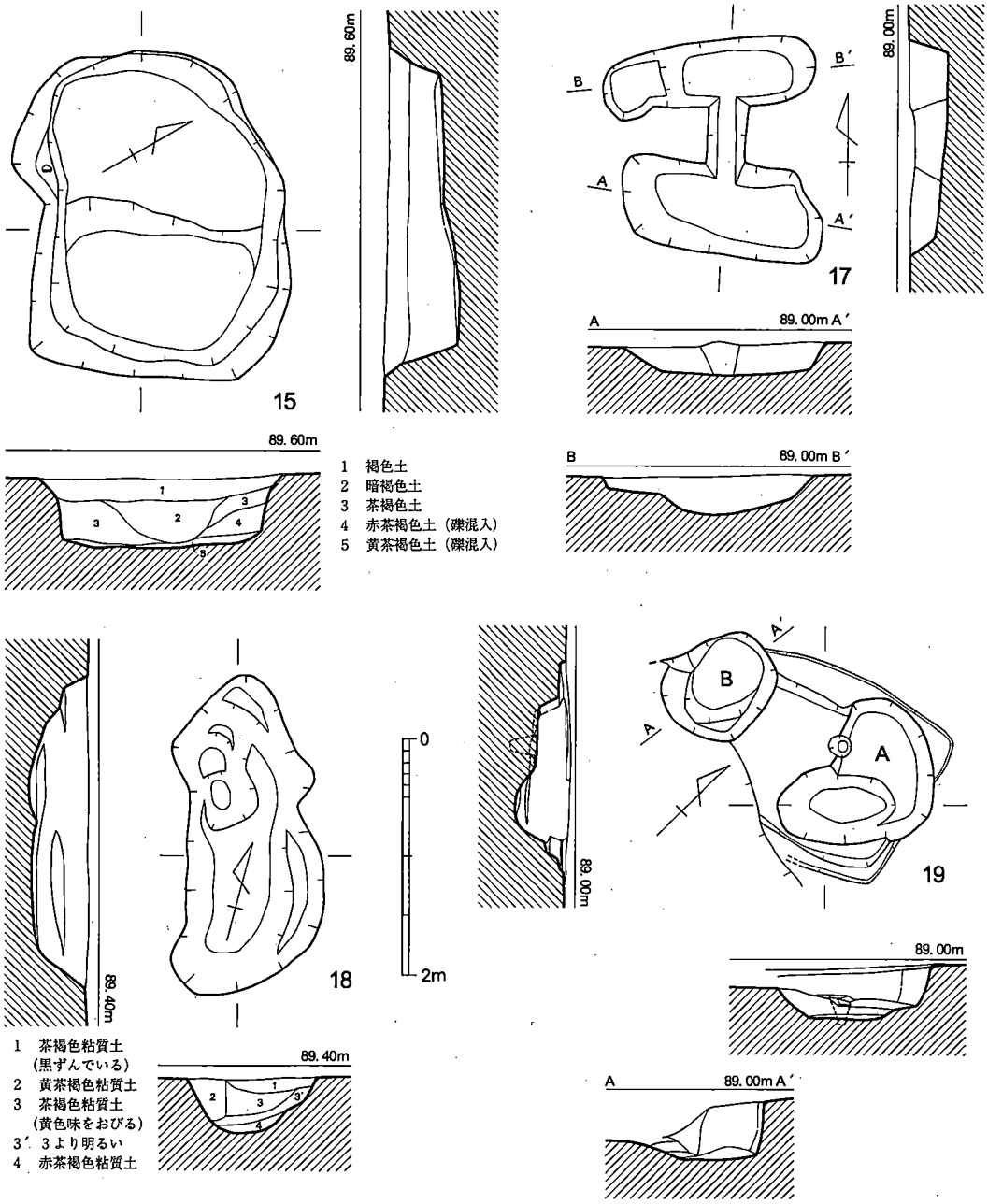


第74図　小覚原6～9・12・16号土坑実測図(1/60)

小覚原遺跡

ト剥片9点が出土した。

出土遺物（図版62、第81図1）



第75図　小覚原15・17～19号土坑実測図(1/60)

石器　漆黒色をなす黒曜石製のスクレイパーであり横長剥片を利用している。長さ28㎜、幅22㎜、厚さ4.5㎜、重さ2.9g。

15号土坑（図版43、第75図）

C-3区にある。上面で長さ275cm、幅215cmの不整長方形プランをなし、検出面から床面までは最大で60cmの深さがある。床面は西側の方が高い。検出面から10～20cmの壁面には屈折する部分があり、横断面の土層で見ると、この屈折部より下位と上位とでは埋土の様相が異なるので、あるいは掘り直しがなされているのかもしれない。縄文晩期土器片2点と黒曜石剥片4点、サヌカイト剥片10点、すり石1点が出土した。

出土遺物（図版60・63、第79図1、84図2）

縄文土器(1)　深鉢の口縁部片であろう。粗製で器表の剥落が著しい。

石器(第84図2)　安山岩質石材で、明瞭ではないが表面は擦っているらしいのですり石と思われる。器表には新しい欠損もある。長さ65㎜、幅30㎜、厚さ26㎜、重さ53.6g。

17号土坑（図版43、第75図）

B-3区の1号住居跡の東にある。上面で長さ172cm、幅78cmで、深さ24cmの南側にある土坑と、長さ180cm、幅57cmで、深さ32cmの北側の土坑とが幅32cmの溝で連結した形状をなす。何故にこのような形状であるのかわからない。サヌカイト剥片4点が出土した。

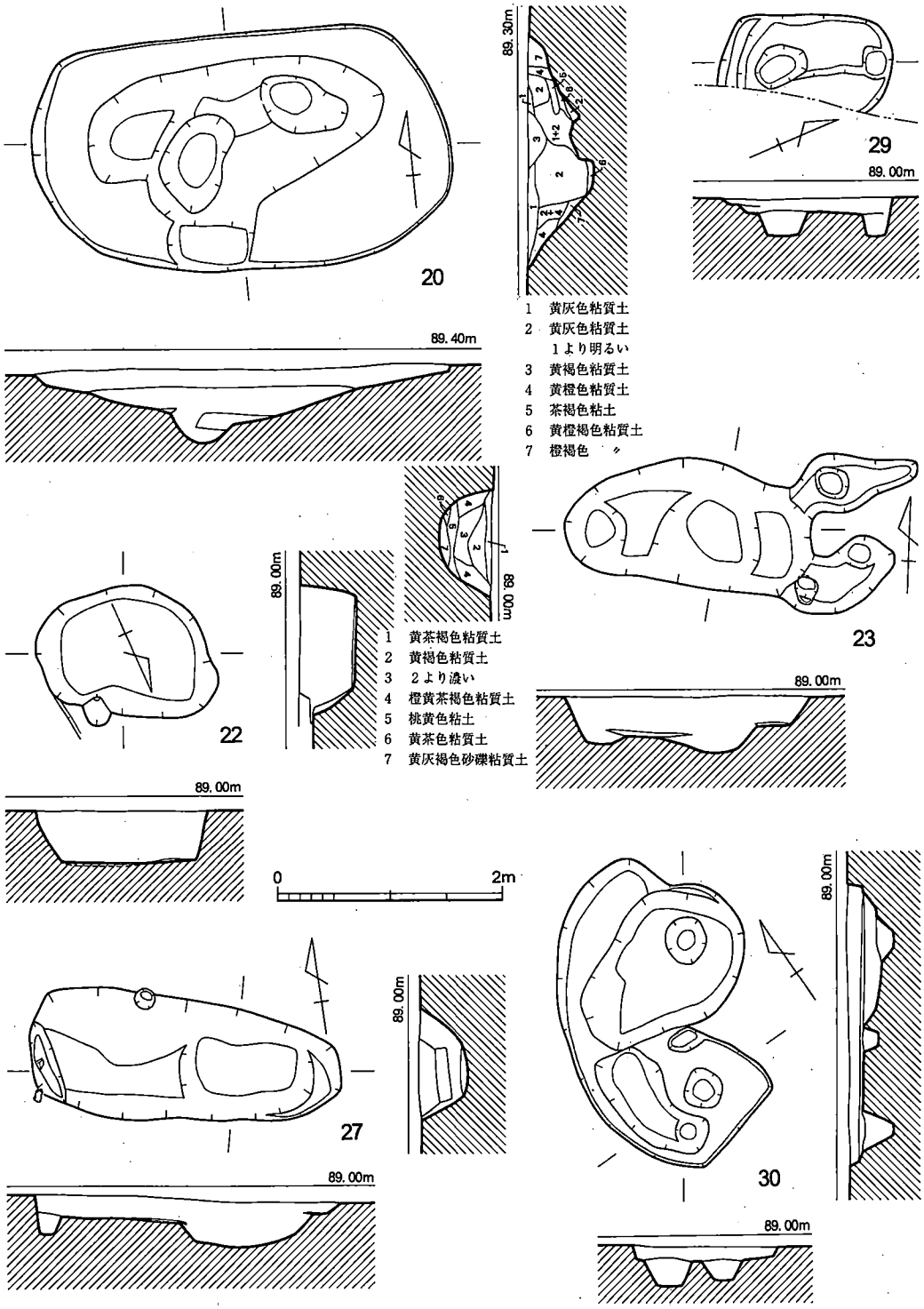
18号土坑（図版43、第75図）

B-3区にある。上面で長さ272cm、幅115cmの茄子のような平面プランをなし、坑内にはいくつもの段が付いて、検出面から坑底最深部までは50cmの深さがある。横断面土層では西端部がピットで切られているように見えるが、面的には確認できなかった。縄文晩期土器片4点と黒曜石剥片7点、鏃を含むサヌカイト剥片10点、片岩2点、木炭が出土した。

出土遺物（図版61・62・63、第80図1、81図2・3、82図4・5）

縄文土器(1)　半精製の鉢の口縁部片である。器表は磨滅しているが、外面はもとは条痕らしい。

石器(第81図2・3、82図4・5)　2・3はともにサヌカイト製の鏃である。2は先端と脚端のごく一部を欠損している。現存長10.5㎜、幅12㎜、厚さ2.2㎜、重さ0.2g。3は横長剥片を利用したもので、腹面には浅く荒い調整が施されている。長さ14.8㎜、幅12㎜、厚さ3.0㎜、重さ0.7g。4・5は片岩の打製石斧と思われるもので、いずれも約半分を欠失している。両側に浅い抉りがあるので、刃部は欠失した方にあったのかもしれない。4は現存長81㎜、幅60㎜、厚さ17㎜、重さ122.3g。5は現存長69㎜、幅47㎜、厚さ21㎜、重さ97.7g。



第76図　小覚原20・22・23・27・29・30号土坑実測図(1/60)

20号土坑（図版43、第76図）

A-5区にあり、9号住居跡を切っている。上面で長さ370cm、幅208cmの隅円長方形プランをなし、坑内は摺り鉢状に窪みながら最深部がピット状となっている。検出面から坑底最深部までは65cmの深さがある。埋土は横断面土層で見ると自然堆積とは思われず、複雑な様相を示している。サヌカイト剥片1点とすり石4点が出土した。

出土遺物（図版63・64・65、第84図1、85図2・3）

石器(1～3)　1～3とも安山岩質の石材である。1は丸い石で、器表には擦った時の小さな面がいくつかあるようだが、風化もあって明確でない。すり石であろうが、石製投弾とも言いうる形状である。長さ49㎜、幅43㎜、厚さ37㎜、重さ116.9g。2は表裏面がかなり平滑で、側縁は敲打によって欠損している。すり石というより叩石とすべきか。長さ118㎜、幅93㎜、厚さ51㎜、重さ817g。3は平面形は丸く、表裏面ともに滑らかである。すり石であろう。明確には敲打痕は見えない。長さ92㎜、幅88㎜、厚さ44㎜、重さ437.9g。

22号土坑（図版59、第76図）

B-2区にある。上面で長さ165cm、幅115cmの楕円形プランをなし、検出面から坑底までは50cmを測る。黒曜石剥片1点とサヌカイト剥片3点が出土したのみである。

23号土坑（図版43、第76図）

B・C-2区にまたがって存する。上面で長さ217cm、幅111cmの長楕円形プラン本体の東端部に、長さ110cm（南側）と115cm（北側）の張り出しが付属した形状をなす。本体の坑底最深部は検出面から50cmの深さである。縄文晩期土器片1点とサヌカイト剥片6点、石英のコア2点が出土したが図示できない。

27号土坑（図版43、第76図）

D-2区南端にある。上面で長さ280cm、幅112cmの溝状のプランで、坑底は西端部と東側が深くなり、検出面から最深部までは深さ40cmを測る。縄文晩期土器片3点と黒曜石剥片7点、サヌカイト剥片8点、すり石1点が出土した。

出土遺物（図版63、第84図1）

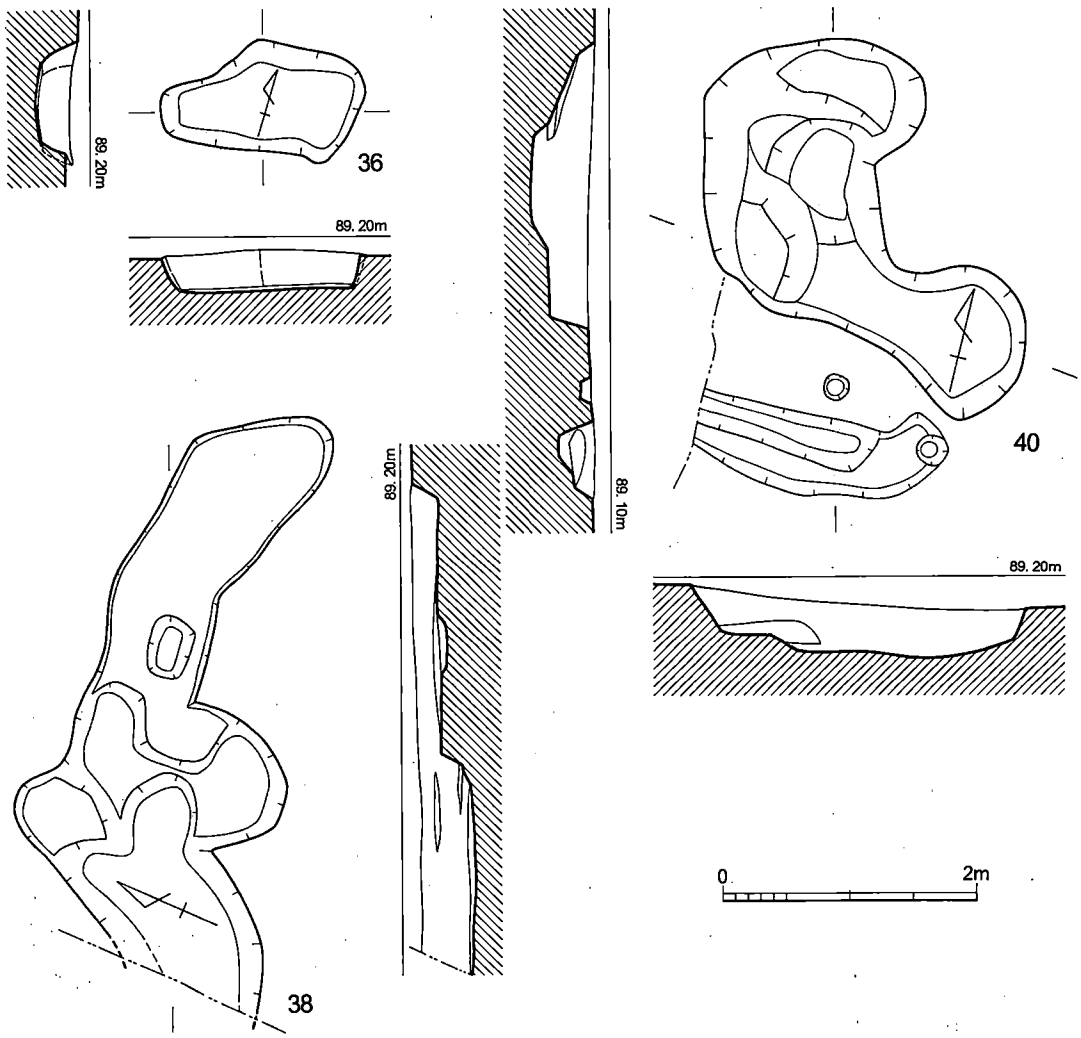
石器　安山岩質石材である。頭部には小さな窪みがあって、その周辺の側縁には敲打痕があり、他端部は欠損したのち大きく窪んですり減っている。裏面は全体に滑らかである。すり石もしくは叩石であったものが破損したのち錘として使用したものかと思われる。長さ63㎜、幅75㎜、厚さ49㎜、重さ292.9g。

29号土坑（図版43、第76図）

D-1・2区にまたがって存し、東端は調査区外にかかる。上面で長さ150cm、幅は復原で90cmほどの隅円長方形プランであろう。坑底までは13cmほどで浅く、南端部には段が付く。坑内に２個のピットがある。縄文晩期土器片と黒曜石・サヌカイト剥片各3点が出土したが図示できない。

30号土坑（図版43、第76図）

D-2区に存する。上面の長さ280cm、幅120cmで深さ12cmの浅い扇状の土坑を切って、やはり



第77図　小覚原36・38・40号土坑実測図(1/60)

上面で長さ165cm、幅113cmで深さ18cmの楕円形状プランの土坑が重なっている形状をなす。両者ともに坑底にピットがある。縄文晩期土器片3点と黒曜石剥片2点、サヌカイト剥片6点、石英剥片1点、すり石2点が出土した。

出土遺物（図版61・63、第80図1、84図2・3）

縄文土器(1)　粗製の鉢の口縁部片である。外面は状痕ののちナデを施す。

石器（第84図2・3）　2は径38～40mmの扁平円盤状をなす。安山岩質で、周縁には新しい欠損がある。上面は擦れているように見えるのですり石であろう。厚さ15mm、重さ28.3g。3もすり石であろう。裏面は平滑で、側縁も擦っているように見える。現存長59mm、幅52mm、厚さ30mm、重さ108.3g。

36号土坑（図版59、第77図）

C-2区の北東端近くにある。上面の長さ160cm、幅86cmの五角形状のプランをなし、検出面からの深さは32cm。サヌカイト剥片5点、石英剥片1点が出土した。

38号土坑（図版43、第77図）

B-4・5区にまたがってあり、西南端部は掘り下げなかったが39号土坑に切られているらしい。上面で長さ470cm以上、幅は最大で215cmの溝状となる。検出面からの深さは最深部で43cm。サヌカイト剥片2点が出土したのみである。

40号土坑（図版43、第77図）

B-3・4区にまたがっており、東側を７号土坑に切られている。上面で最大長333cm、最大幅175cmの不整形プランをなし、検出面からの深さは最大50cmを測る。縄文晩期土器片1点とサヌカイト剥片4点、熱を受けた粘土塊が出土している。

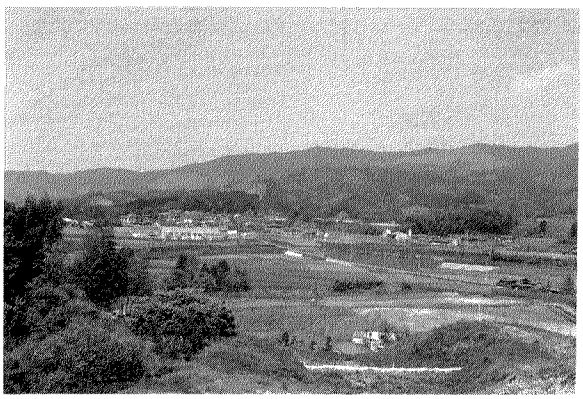
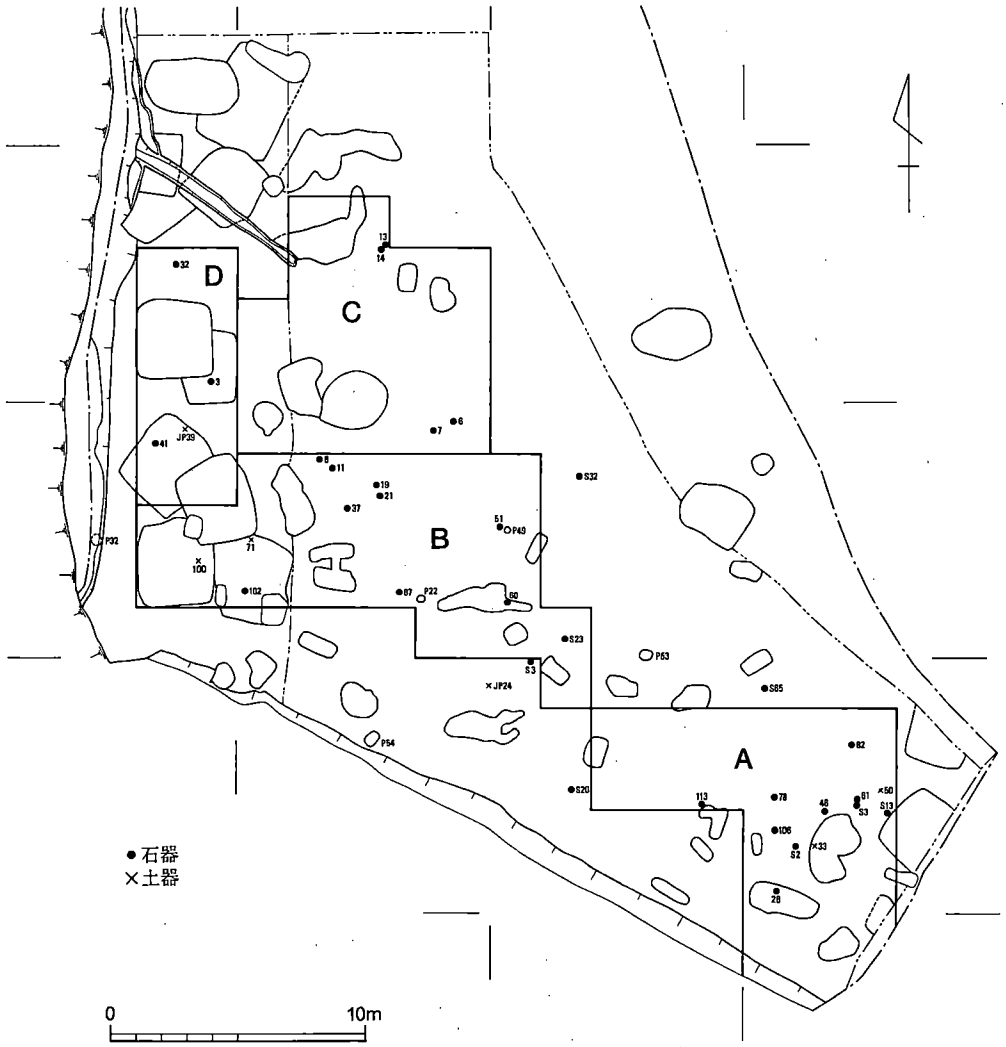


写真　1
小覚原遺跡より楠田遺跡をのぞむ

4　その他

上述の遺構のほかにも不整形の掘り込みは多々存したが、遺物の全く出土しないものは土坑から除外した。また小ピットもあったものの建物としてまとまるものはなかった。

以下には、グリッド出土遺物、ピット出土遺物、遺構検出面出土遺物について述べる。この時、A33はAグリッド33の遺物であり、P32はピット32の遺物、JP24・S20は遺構検出面の24の土器と20の石器、O-1は採集の遺物を表示しており、O以外は第78図の番号と対応する。



第78図　小覚原グリッド遺物出土位置(1/300)

a．グリッド出土遺物（図版61～66、第80・81・83・84・86・87図）

縄文土器（第80図）

A33は粗製深鉢の口縁部片である。器壁が厚い。晩期。A50も晩期粗製鉢の口縁部片である。

B71は僅かに上げ底になった底部で粗製である。底径5.2cm。晩期。B100は精製浅鉢の口縁部片でくの字形に外反する。器表は磨滅しているがミガキであろう。晩期。

石器（第81・83・84・86・87図）

・**石鏃**（第81図）　B37は黒曜石製の未製品で、打点がそのまま残っている。長さ26mm、幅19mm、厚さ7mm、重さ2.3g。B102はきわめて小さな黒曜石製品で、先端のごく一部を欠損する。両側縁は分厚く急傾斜の剥離が施されている。長さ11.3mm、幅10mm、厚さ3.0mm、重さ0.3g。D41はサヌカイト製で、側縁の一部を欠失する。残存する側縁には屈折した肩部がある。長さ175mm、幅は復原で13mm、厚さ4mm、重さ0.7g。B21はサヌカイト製の完形品で、先端は鋭い。長さ19mm、幅16mm、厚さ4mm、重さ0.8g。A61はサヌカイトの横長剥片を利用したもので、先端は尖っていない。復原で長さ24mm、幅13mm、厚さ5.0mm、重さは1.2g。C6は黒曜石製の大型品で先端と片方の脚を欠失する。側縁と抉り部には丁寧な調整が施され、表面には原面が残る。復原で長さ38mm、幅28mm、厚さ3.2mm、重さは2.0g。

・**スクレイパー**（第81図）　A28は黒曜石製で、一側縁に刃部を形成する。長さ22.5mm、幅19mm、厚さ3.5mm、重さ1.2g。B51は漆黒色の黒曜石製品で、頭部と一側縁に自然面が残る。他の側縁には微細な刃こぼれが見られる。長さ30.5mm、幅24mm、厚さ4.0mm、重さ2.1g。

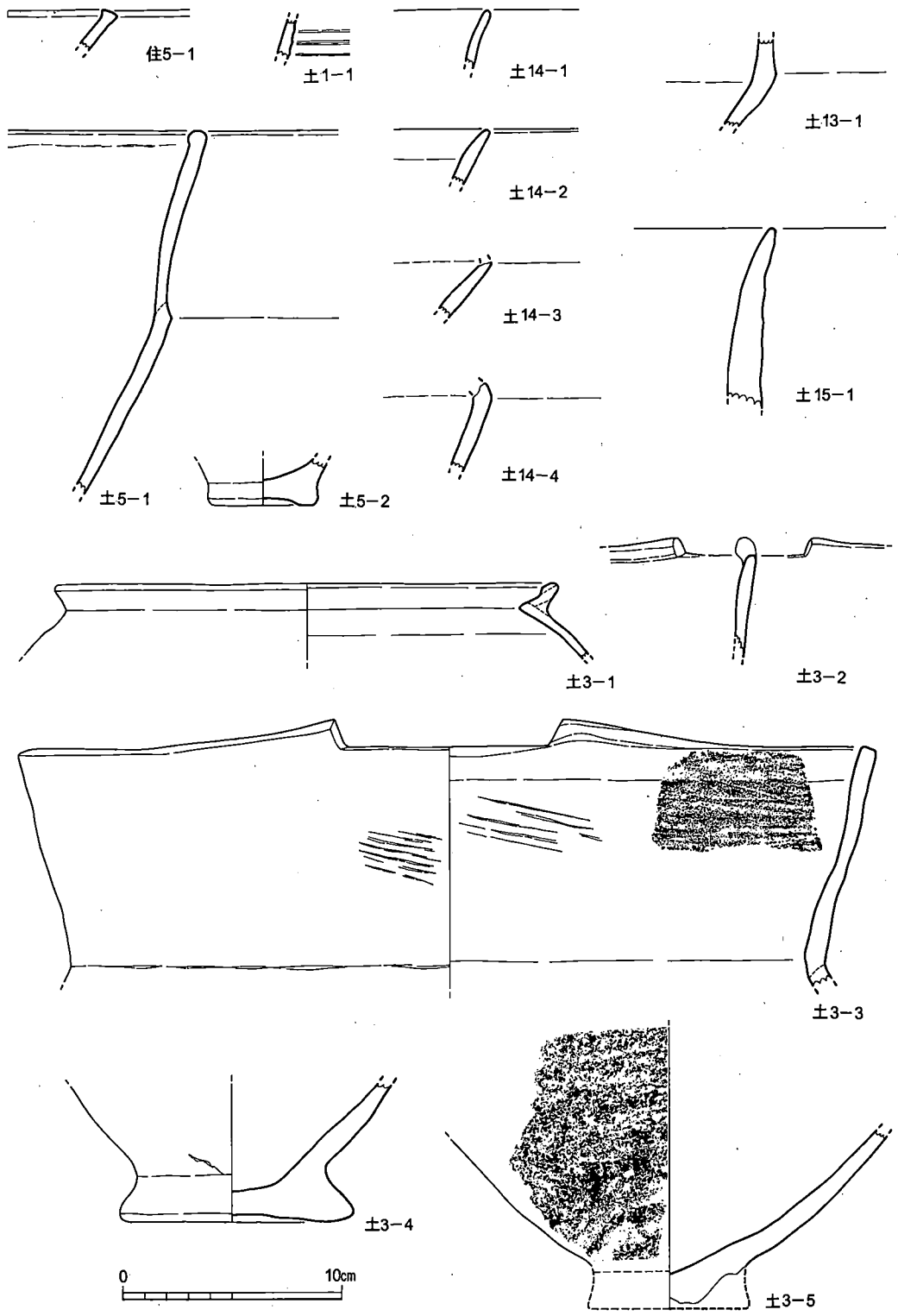
・**ナイフ形石器**（第81図）　D32は黒曜石製の縦長剥片利用のもので、上下端部を欠失する。現存長25mm、幅16mm、厚さ5mm、重さ2.6g。

・**石刃**（第81図）　C13は漆黒色黒曜石の縦長剥片の両側に刃こぼれがある。長さ37mm、幅15mm、厚さ3.5mm、重さ1.9g。A78は瑪瑙質石材の大きな剥片である。一部に原面が残る。長さ54.5mm、幅42mm、厚さ8.0mm、重さ21.5g。

・**石斧？**（第83図）　A12は片岩で器表がかなり風化している。刃部は分厚いが一面は擦ったらしいところがある。長さ140mm、幅51mm、厚さ24mm、重さ254.4g。D24も片岩製品で、表面は擦れているらしい。両側には抉りがある。現存長89mm、幅67mm、厚さ16mm、重さ110g。

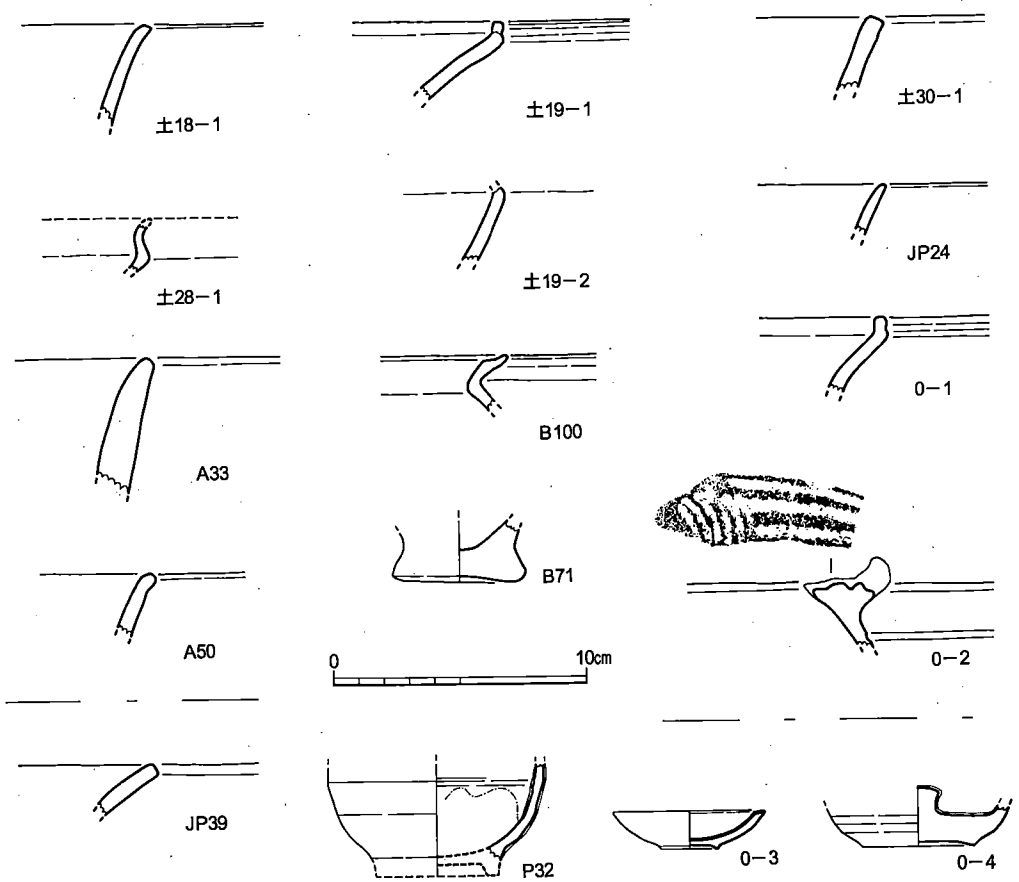
・**不明石器**（第83図）　B62は片岩の扁平な台形状の製品で、長さ48mm、幅45mm、厚さ11mm、重さ28.2g。D22も片岩であるが、きわめて脆い。形状からすると台石のごとき用途であろうか。長さ100mm、幅80mm、厚さ24mm、重さ277.4g。

・**すり石**（第84・86図）　A46は安山岩質の紡錘形に近い卵形をなすもので、器表の一部に擦痕がある。石製投弾と称してもよい形状である。長さ50mm、幅30mm、厚さ25mm、重さ47.6g。B19はまさしく卵形で、器表には擦ってできた多数の小さな面と擦痕がある。これも石製投弾としてよい形状ではある。長さ43mm、幅33mm、厚さ29mm、重さ50g。B11も安山岩質で、裏面

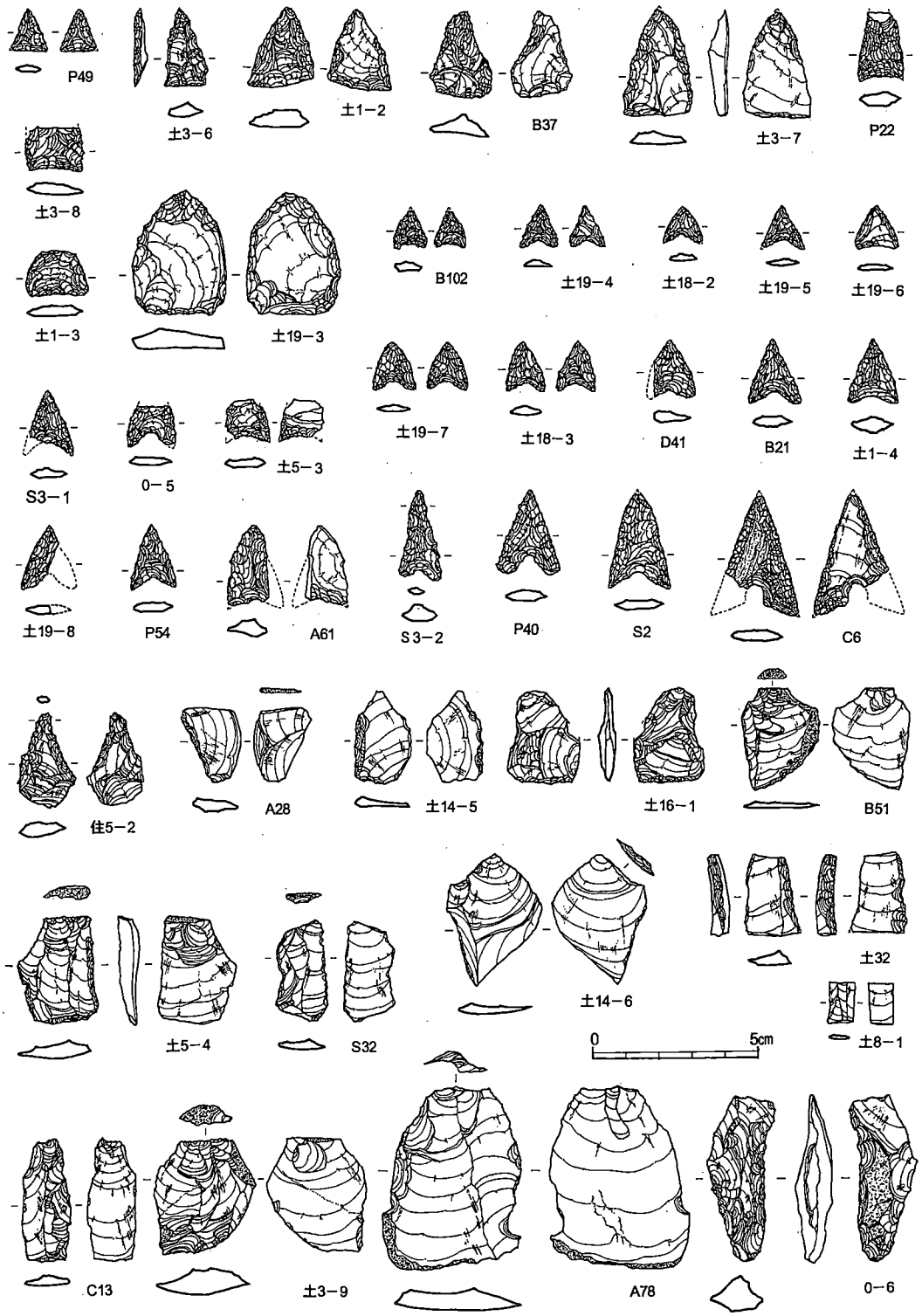


第79図　小覚原遺跡出土土器等実測図（その１）(1/3)

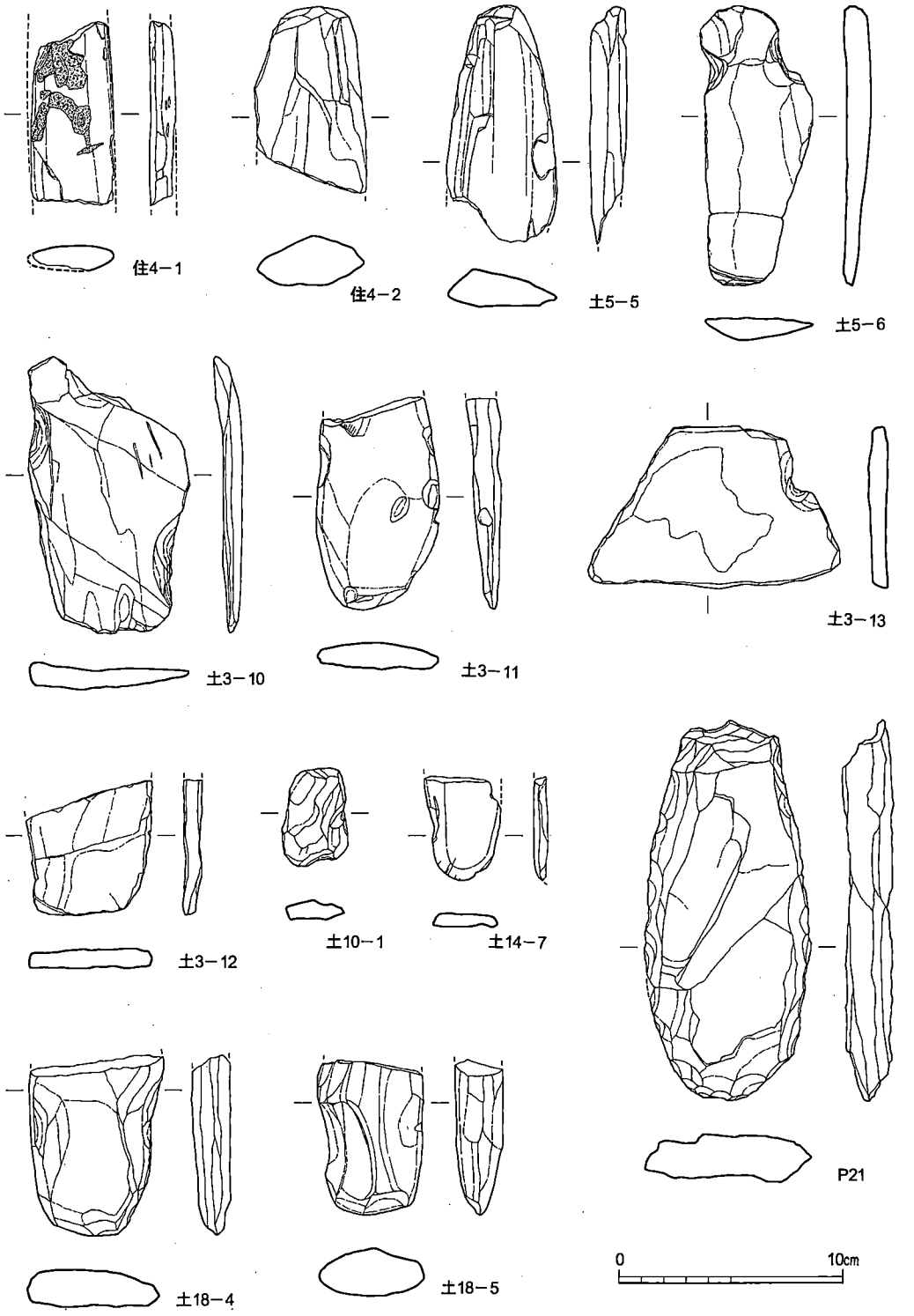
は平滑。側縁には敲打痕と擦ってできた面がある。長さ72㎜、幅69㎜、厚さ39㎜、重さ240.7g。B67も平面円形の安山岩質石材である。側縁は擦れており、また紐掛けしたらしい小さな溝状の抉りがある。錘の可能性もある。長さ55㎜、幅54㎜、厚さ25㎜、重さ93g。C14は安山岩質で、表裏面ともにきわめて滑らかである。長さ52㎜、幅43㎜、厚さ23㎜、重さ64.2g。D3はカンラン石を含む凝灰岩質石材で、平面形は五角形に近い。表面は平滑である。長さ60㎜、幅39㎜、厚さ25㎜、重さ74.3g。A82はかなり風化した安山岩質石材で、表裏面は平滑、側縁は全周に敲打痕がある。叩石とすべきか。長さ106㎜、幅96㎜、厚さ51㎜、重さ759g。A106も安山岩質で、表裏面は平滑とはいえないが、側縁は3分の2ほどが擦れたように見える。長さ140㎜、幅105㎜、厚さ57㎜、重さ1104.5g。A113も安山岩質である。表裏面は滑らかで、側縁の3分の2ほどはよく擦ったあとがある。表面中央に明確ではないが、敲打痕らしき部分がある。長さ144㎜、幅113㎜、厚さ52㎜、重さ1171.5g。B60も安山岩質石材で、これには明確な擦ったあとも敲打痕もない。長さ124㎜、幅106㎜、厚さ52㎜、重さ1171.5g。



第80図　小覚原遺跡出土土器等実測図(その2)(1/3)



第81図　小覚原遺跡出土石器実測図（その１）(1/2)



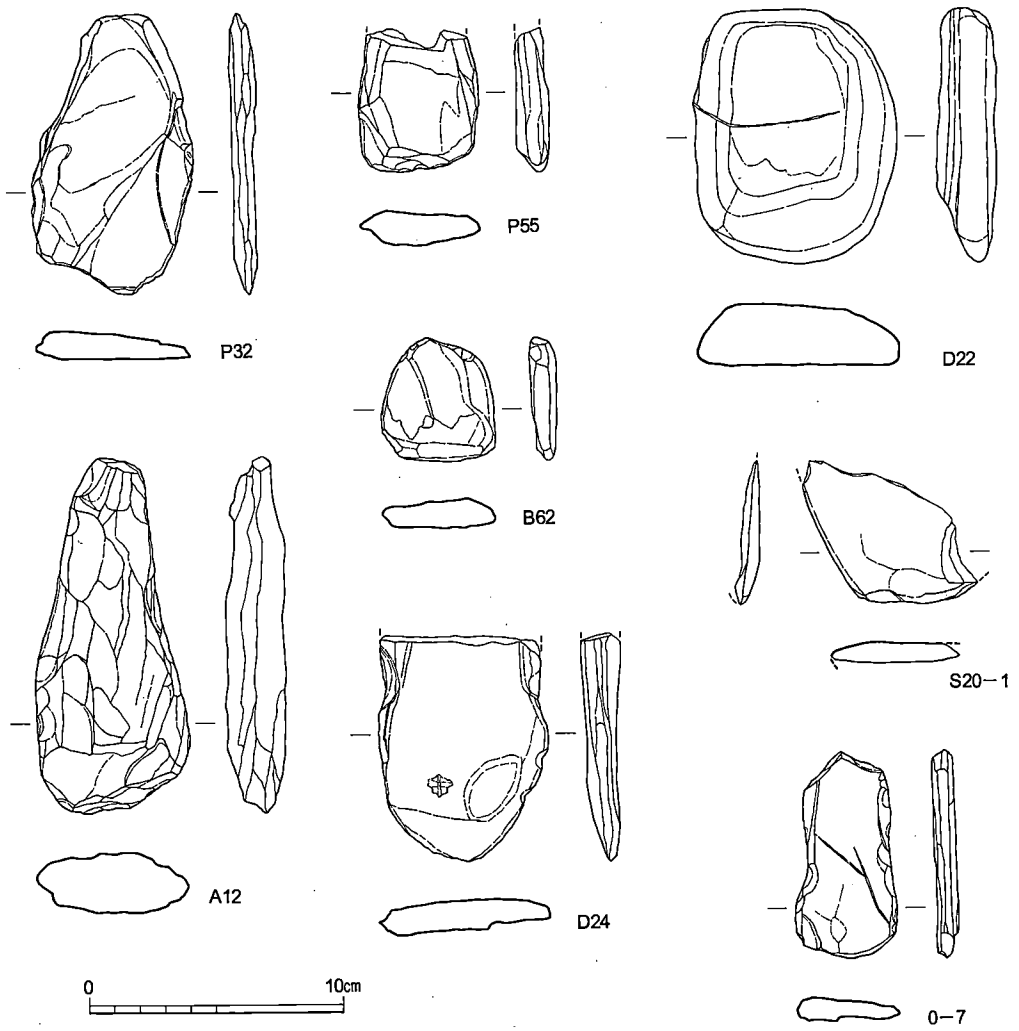
第82図　小覚原遺跡出土石器実測図（その２）(1/3)

・**台石**（第87図）　C7は泥質凝灰岩らしき石材で黄褐色をなす。表面は平滑である。現存長127㎜、幅115㎜、厚さ26㎜、重さ647.5g。B8は凝灰岩質石材で黄茶褐色を呈する。表面は滑らかである。長さ195㎜、幅148㎜、厚さ55㎜、重さ1885.1g。

b．ピット出土遺物（図版61・62・64、第80・81・82・83・84図）

石器（第81・82・83・84図）

・**石鏃**（第81図）　P49はサヌカイト製で二等辺三角形をなす。一翼の端部をごく僅かに欠失する。長さ12.5㎜、幅は復原で12㎜、厚さ2.3㎜、重さ0.3g。P22は黒曜石製品で先端を欠失する。現存長21㎜、幅14㎜、厚さ4.8㎜、重さ1.5g。P54はサヌカイト製で完形である。先端



第83図　小覚原遺跡出土石器実測図（その３）(1/3)

は鋭く、側縁は鋸歯状となっている。長さ19㎜、幅14㎜、厚さ3㎜、重さ0.5g。P40もサヌカイト製で両脚の端部を欠失している。復原で長さ25㎜、幅19㎜、厚さ3.5㎜、重さ1.1g。

・**石斧？**(第82・83図)　P21は赤茶色をなす片岩で金雲母片が目立っている。全体に脆い感じがする。長さ170㎜、幅75㎜、厚さ22㎜、重さ354.4g。P32も片岩製品で、長さ109㎜、幅63㎜、厚さ11㎜、重さ91.5g。P55も片岩製品の半欠品である。一部に磨いたような所がある。現存長56㎜、幅48㎜、厚さ14㎜、重さ50.9g。

・**すり石**(第84図)　P53は安山岩質の楕円球形で一端部には敲打痕がある。表面は少し滑らかである。石製投弾と称してもよい形状である。長さ42㎜、幅34㎜、厚さ30㎜、重さ48.3g。

磁器(第80図)　P32は青磁の碗である。灰緑黄色の釉が掛かり、内底付近は無釉である。底部は高台が付くものと思われ、径5cmほどに復原できよう。

c.遺構検出面出土遺物(図版61・62・63・65、第80・81・83・84・85・87図)

縄文土器(第80図)

ＪＰ24は晩期の精製浅鉢の口縁部片。

土師器(第80図)

ＪＰ39は甕の口縁部片であろう。二次熱を受けている。

石器(第81・83・84・85・87図)

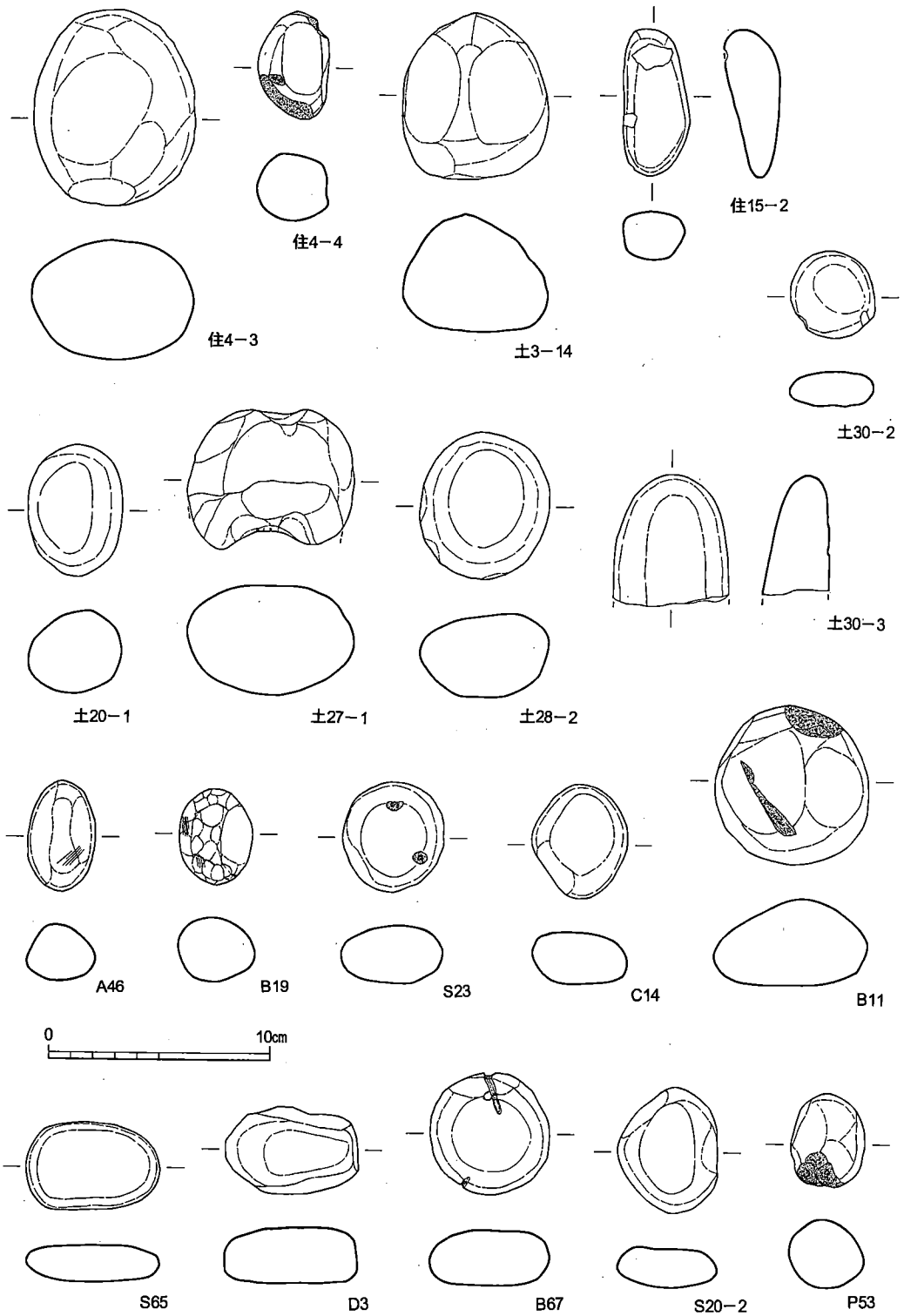
・**石鏃**(第81図)　S3-1は黒曜石製で両脚に欠損がある。現存長18㎜、幅14㎜、厚さ3㎜、重さ0.5g。S3-2はサヌカイト製で完形。長さ27.5㎜、幅13.5㎜、厚さ5㎜、重さ1.1g。S2もサヌカイト製で大型品である。先端部をごく僅かに欠失する。復原長28.5㎜、幅19㎜、厚さ3㎜、重さ1.4g。

・**スクレイパー**(第81図)　S32は黒曜石製で、縦長剥片の両側に調整を加えて刃部としている。長さ30.5㎜、幅15.5㎜、厚さ4.5㎜、重さ2.2g。

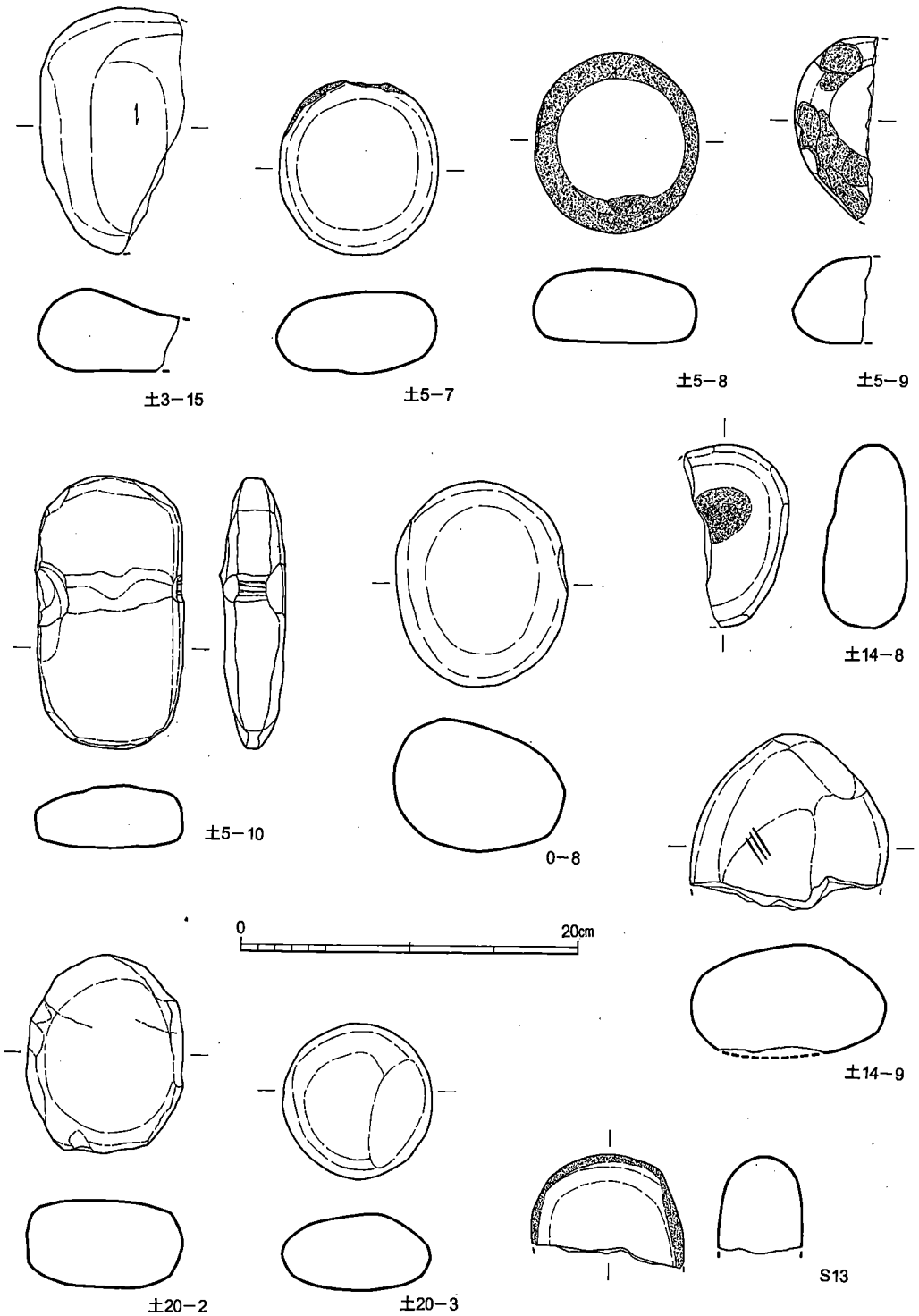
・**石斧？**(第83図)　S20-1は片岩の破片で、器表が滑らかであるのは擦っているように見える。現存長57㎜、幅69㎜、厚さ8㎜、重さ31.1g。

・**すり石**(第84・85図)　S23は安山岩質の扁平なもので、表裏面ともに少し滑らかであり、側縁には擦った痕跡がある。長さ50㎜、幅46㎜、厚さ26㎜、重さ69.3g。S65は扁平楕円形の安山岩質石材で、表裏面ともに滑らかである。長さ59㎜、幅39㎜、厚さ16㎜、重さ56.3g。S20-2は少し桃色がかった安山岩質石材で、表面と側縁の一部が滑らかである。長さ57㎜、幅45㎜、厚さ18㎜、重さ54.9g。S13は安山岩質の半欠品で、表裏面は平滑、側縁には敲打痕がある。現存長65㎜、幅91㎜、厚さ50㎜、重さ412.7g。

・**台石**(第87図)　S55は石英安山岩らしき石材で、周縁は全て破損している。表裏面は滑らかである。現存長122㎜、幅128㎜、厚さ77㎜、重さ1379.8g。



第84図　小覚原遺跡出土石器実測図（その４）(1/3)



第85図　小覚原遺跡出土石器実測図（その５）(1/4)

d.採集遺物（図版61～66、第80・81・83・85図）

縄文土器（第80図）

O-1は鉢で半精製である。内外ともミガキらしい。晩期。O-2はこの遺跡で唯一の晩期以外の縄文土器である。口縁端部に突起のある鉢で、口縁上面には刺突のある条線がある。後期であろう。

磁器（第80図）

O-3は白磁の小皿で外面は無釉である。紅皿か。復原で口径6cm、底径2.2cm、器高1.4cm。

陶器（第80図）

O-4は落とし蓋であろう。摘みを含む上面には黒釉が掛かっている。底面には糸切り痕がある。復原で底径4.4cm、摘み径1.8cm、器高2.3cm。

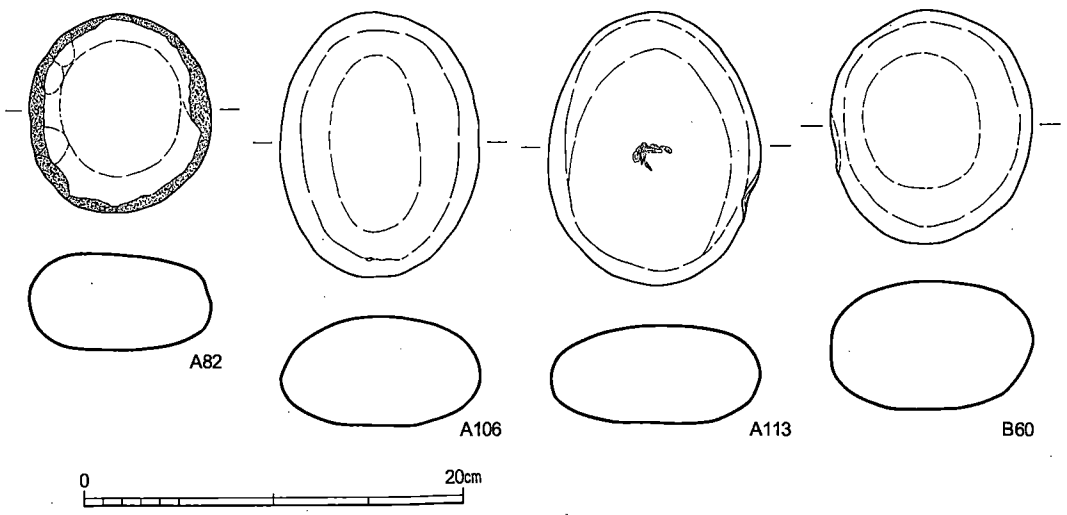
石器（第81・83・85図）

・**石鏃**（第81図）　O-5はサヌカイト製で先端部を欠損する。5号住居跡と6号住居跡の間のグリッドD内から出土した。現存長12.5㎜、幅15㎜、厚さ2㎜、重さ0.4g。

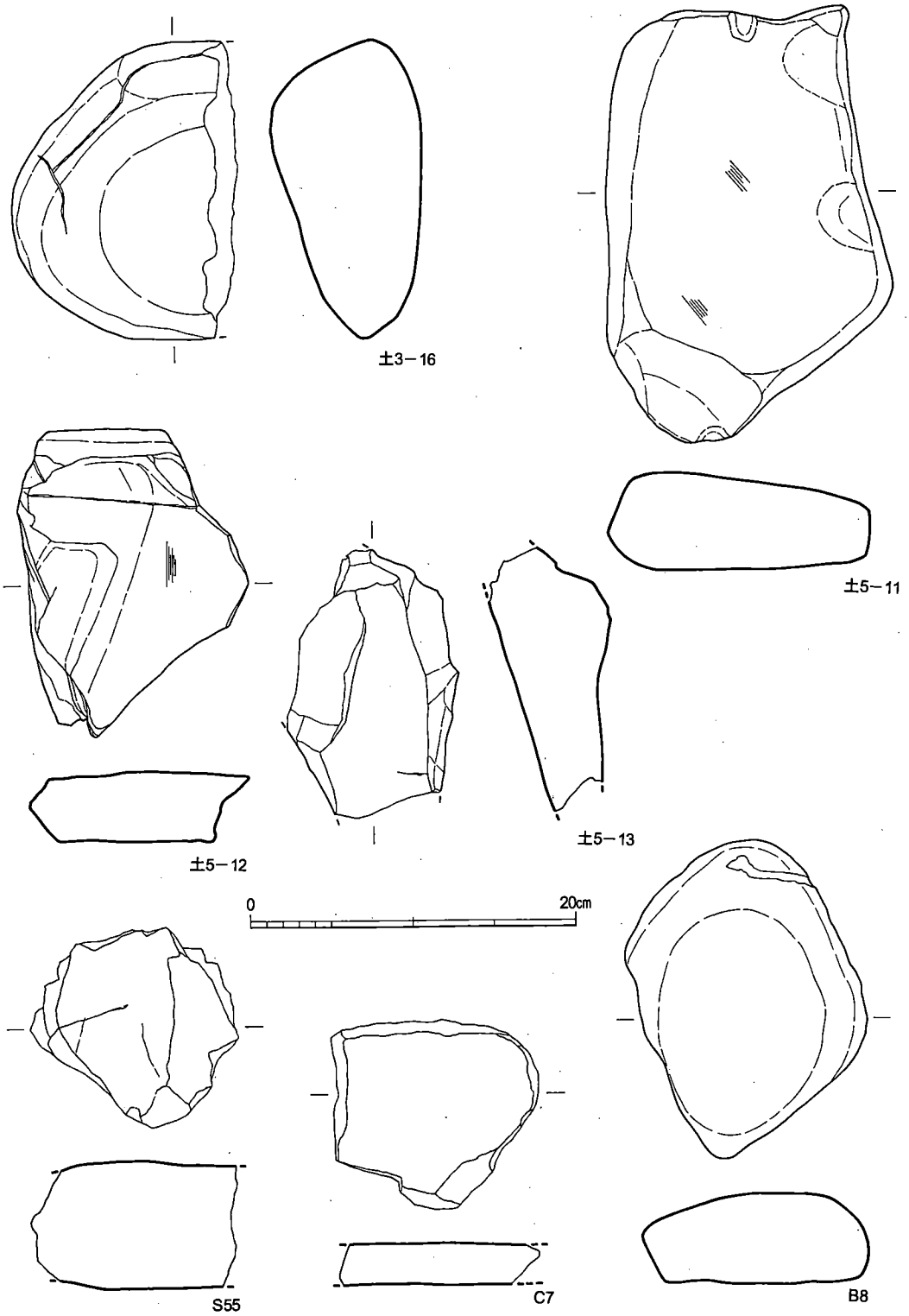
・**台形様石器**（第81図）　O-6は一部に原材面を残す黒曜石製品である。長さ50㎜、幅17.5㎜、厚さ11㎜、重さ7.2g。

・**石斧？**（第83図）　O-7は扁平な片岩で、中央がややくびれている。長さ81㎜、幅40㎜、厚さ9㎜、重さ42g。

・**すり石**（第85図）　O-8は安山岩質石材で、表裏面は擦れている。側縁は風化のため明確ではないが、5分の4ほどは敲打痕があり、残りは擦れているようだ。9号土坑の西側で採集された。長さ120㎜、幅102㎜、厚さ78㎜、重さ1294.1g。



第86図　小覚原遺跡出土石器実測図（その6）（1/4）



第87図　小覚原遺跡出土石器実測図（その７）(1/4)

5　^{14}C年代測定

平成元年(1989)に社団法人日本アイソトープ協会に3号土坑上層出土の木炭について^{14}C年代測定を依頼した。その結果は次のとおりである。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
N-5382	KOF 10　No. 19	2850±95yB. P.　(2770±95yB. P.)

年代は^{14}Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数(yearsB. P.)として示されています。(以下略)

6　ま と め

小覚原遺跡では竪穴住居跡12軒、土坑40基のほかに不整形の土坑状落ち込みやピットが検出されたが、これらの遺構・遺物はそのほとんどが縄文時代晩期に属するものと考えられる。採集品として縄文後期の土器片1点があったが、調査区内にはその時期の遺構はなかった。

古くは旧石器時代の遺物としてDグリッドのナイフ形石器、8号土坑の細石刃とがある。これのみでは具体的な様相は不明であるが、旧石器時代の遺物は近辺では朝倉町原の東遺跡で多量に出土し(註2)、また朝倉町鎌塚(註3)・山ノ神(註3)・上ノ宿(註4)、杷木町笹隈(註5)・クリナラ(註6)の各遺跡でナイフ形石器や三稜尖頭器、細石刃などが検出され、ここでもまた一例を加えたことになる。

また、新しいところで土師器や陶磁器片が僅かにあるが、これらは混入的な意味あいがある。以下には、主として縄文晩期の遺構・遺物について若干のまとめを行いたい。

1　遺構について

まず、12軒の竪穴住居跡については全て方形もしくは長方形プランであった。主柱穴・炉などが不明であり、また遺物がきわめて少なかったことから住居跡として捉えるのにやや疑念もあったが、単なる竪穴とせずに住居跡としたのは、ひとつには後述する貯蔵穴が近在するから

である。生活遺構として住居跡と貯蔵穴はセットで存在しうるものだろう。縄文時代晩期後半にこの地に人が住み着いていたことは疑いない。数軒を単位とした集団がいくつか存したのだろう。

落し穴は2・11・24・25・26・28・32・34・35・37号の10基についてはほぼ間違いないものと捉えている。あと4・13・21・31・33の5基もその可能性があろう。これら15基はこの遺跡が立地する尾根の主軸に直交する方向に営まれたものが多い。当然ながらケモノ道との関わりがあろう。南側の谷部にある二十谷遺跡でも整然と並ぶ落し穴群が検出されており（本報告Ⅴ参照)、この立地の違う両遺跡で同じように落し穴が見られるのは対象となる獣類が違っていたのであろうか。埋土中から晩期土器片の出土したものがあるが、住居跡よりは古い時期に機能していたものと考えておきたい。

3・5号土坑は断面が袋状となることや、5号から炭化した種子が出土していることからも貯蔵穴と考えて間違いなかろう。土器片や石器類は廃棄後に投棄されたものと思われる。あと10・14・19・39号土坑も貯蔵穴の可能性がある。3・5号土坑は1～10号住居跡群と11・12号住居跡群との間の空閑地に位置しており、この周辺は広場的な空間であったのかもしれない。縄文晩期後半である。

その他の土坑群のうち、1号土坑は土壙墓のような形状であるが、3点の打製石鏃とともに焼土・固い焼土塊が検出されている。焼土の意味がわからない。それ以外は遺物の出土したものもあるが量は僅かであり、廃棄土坑的なあり方ではなく性格は不明とせざるを得ない。

平成5年度(1993)に調査された小覚原遺跡第2地点(註1)では主たる遺構は土坑2基のみであるから、削平を受けているけれどもこの遺跡は丘陵の先端側つまり西側へと拡がりを持つものであったと思われる。

2　遺物について

縄文晩期の住居跡・土坑・包含層からは土器のほかに打製石鏃・錐・スクレイパー・打製石斧・すり石（叩石）・台石などの石器が出土した。これらの遺物に農耕を窺わせるようなものはない。

打製石鏃は小型から大型まで、また平基も凹基もあり、形態上はヴァラエティーに富んでいる。材質としては圧倒的にサヌカイト製が多い。しかしながら他のスクレイパーなどを含めると、図示した製品では黒曜石製のものと同数となる。また図示しえない剥片などを含めて数えた総数も黒曜石が僅かに多いという結果なので、この遺跡に供給された黒曜石とサヌカイトとは同じ程度の量であったと考えてよいだろう。その中でサヌカイト製の鏃が多いというのは、サヌカイトの方が使いやすかったということであろうか。黒曜石には漆黒色をなす良質のものと不純物を含むものとがあり、全てが同一産地であるかどうかわからない。明確に姫島産と思

われるものはなかった。サヌカイトの産地はやはり佐賀県の多久であろうか。

打製石斧としたものは片岩を素材としており、木材等を伐採するのには適さない。むしろ土掘り具として機能したものではないか。磨製の石斧は明確にそれと言いうるものはなく、この点は不思議なことである。

すり石または叩石としたものは台石等とセットになって、さまざまなモノを叩いたり、すり潰したりするのに用いたと考えられる。その対象は5号土坑から出土した種子であったり、ほかに根菜や獣肉等もあったかもしれない。また、投弾として使えそうな小さなすり石については、器表が擦れていることから皮をなめすこと等に使われていたのかもしれない。この時期にはどの遺跡でもすり石・叩石・台石等が多量に出土する。

十字形石器のような遺物は見られなかった。

また出土した石器の中に明確に錘といえるものはなかった。北西側に赤谷川が南流し、また筑後川へもそれほど遠くはないが、漁労に関する遺物がほとんどないということは奇異でもある。出土遺物のみから類推するならば、この小覚原遺跡の住人たちは主として狩猟と採集の生活を送っていたものと考えられる。

註

1　杷木町教育委員会　1995　『二十谷遺跡第2地点　小覚原遺跡第2地点』
杷木町文化財調査報告書　第3集

2　九州横断自動車道29-A地点。昭和62～63年(1987～1988)に調査された。平成10年度に報告予定。

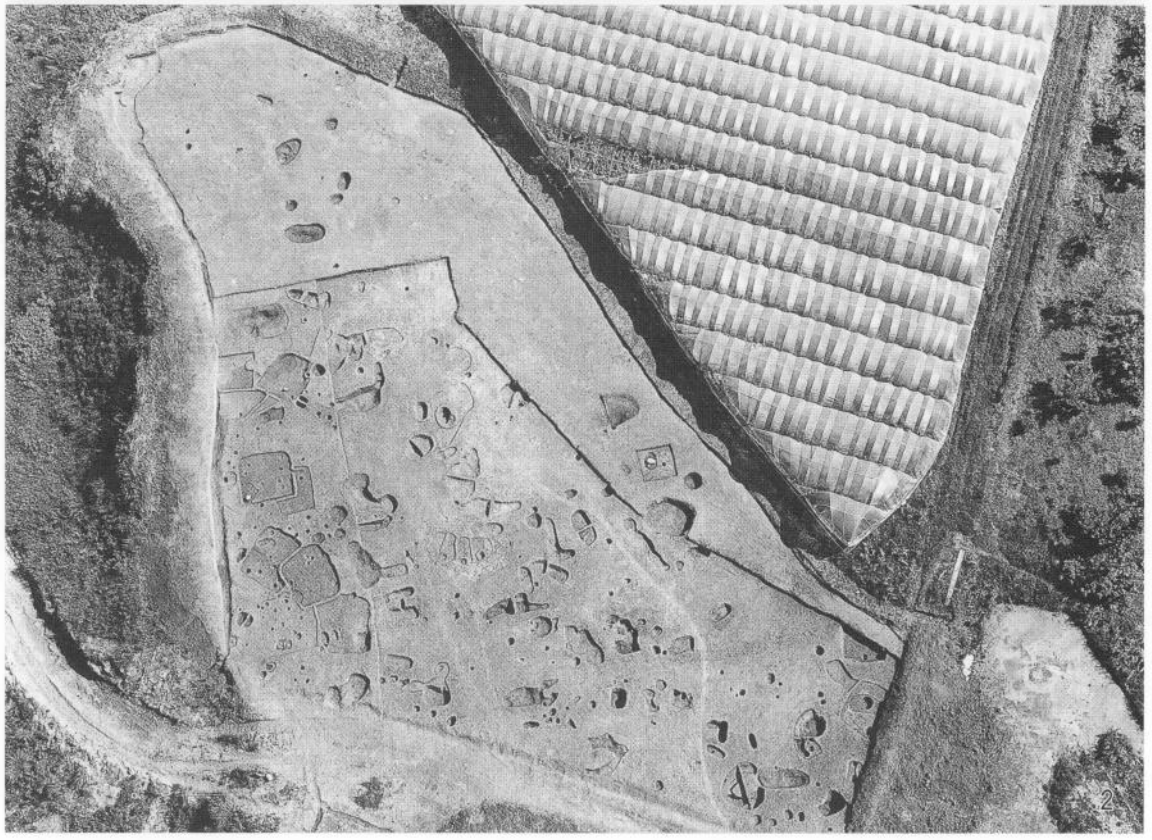
3　福岡県教育委員会　1992　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—22—』

4　福岡県教育委員会　1991　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—20—』

5　福岡県教育委員会　1997　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—44—』

6　福岡県教育委員会　1997　『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—43—』

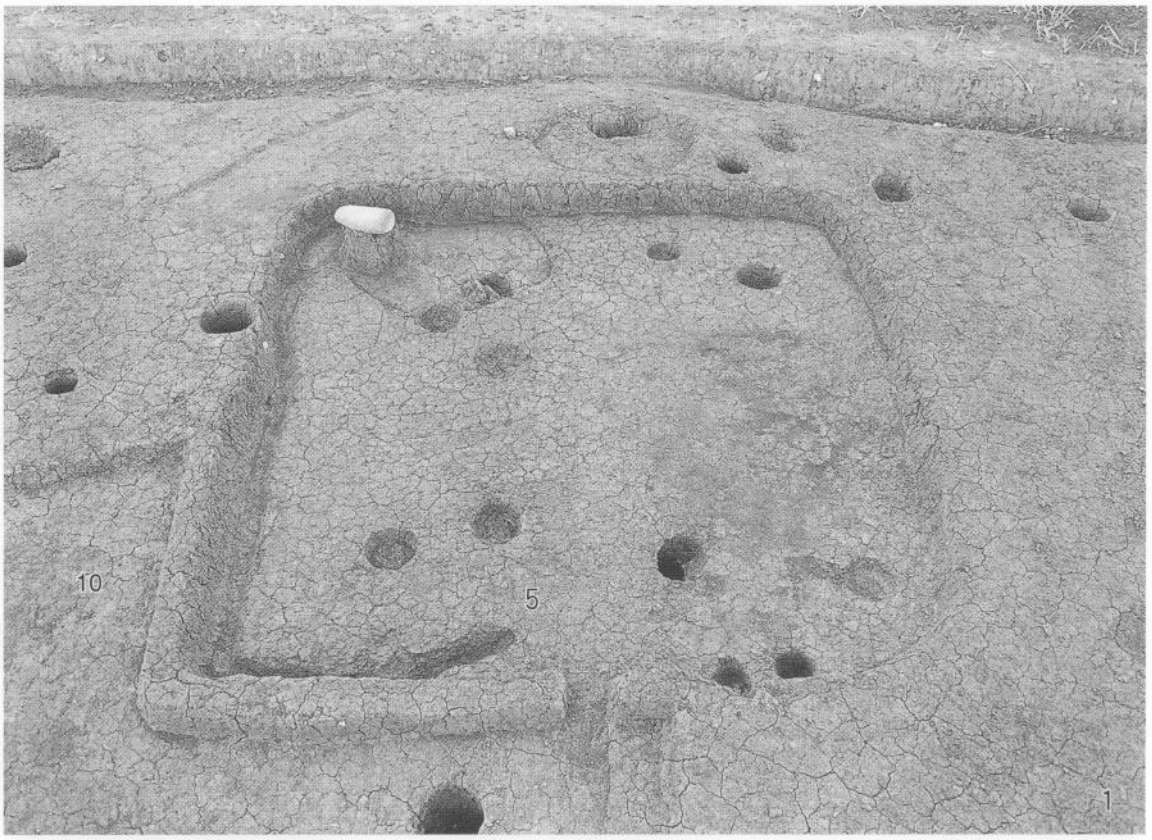
図　　版

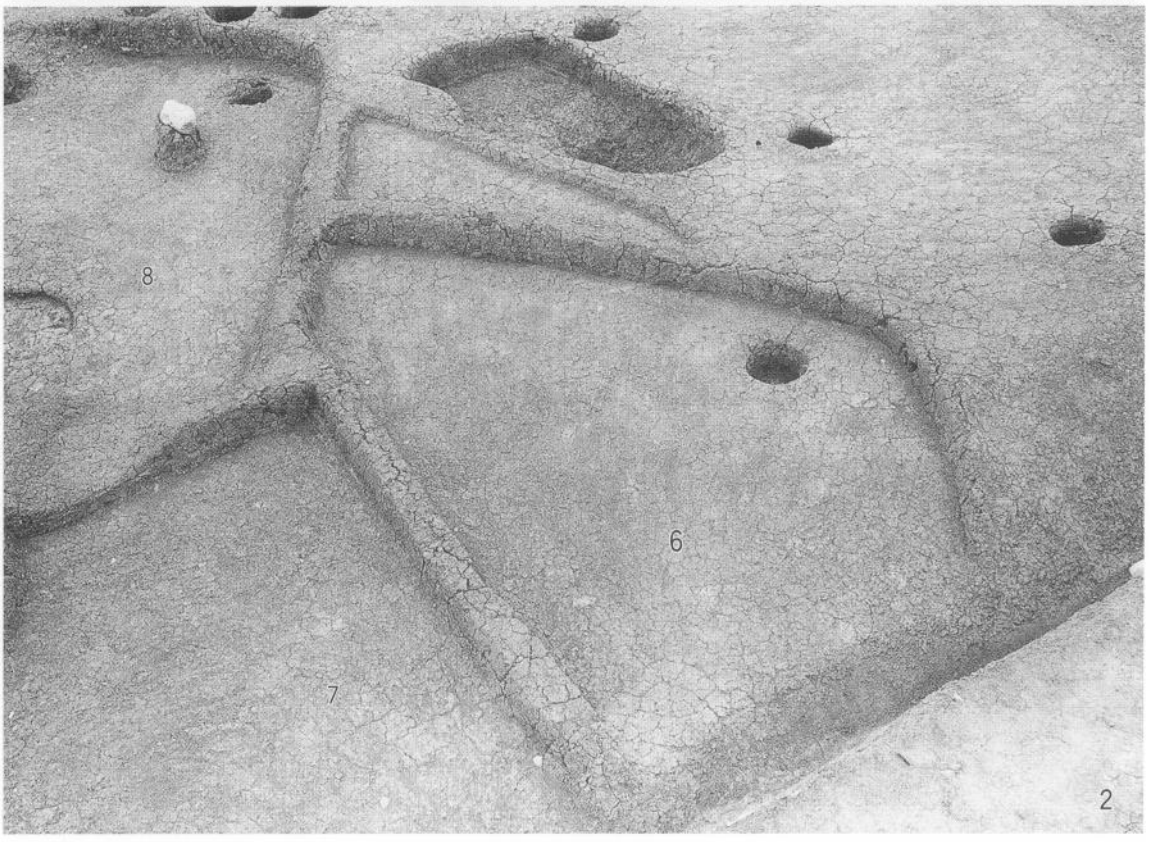


1　小覚原遺跡遠景（南から）　　2　小覚原遺跡全景（気球写真）

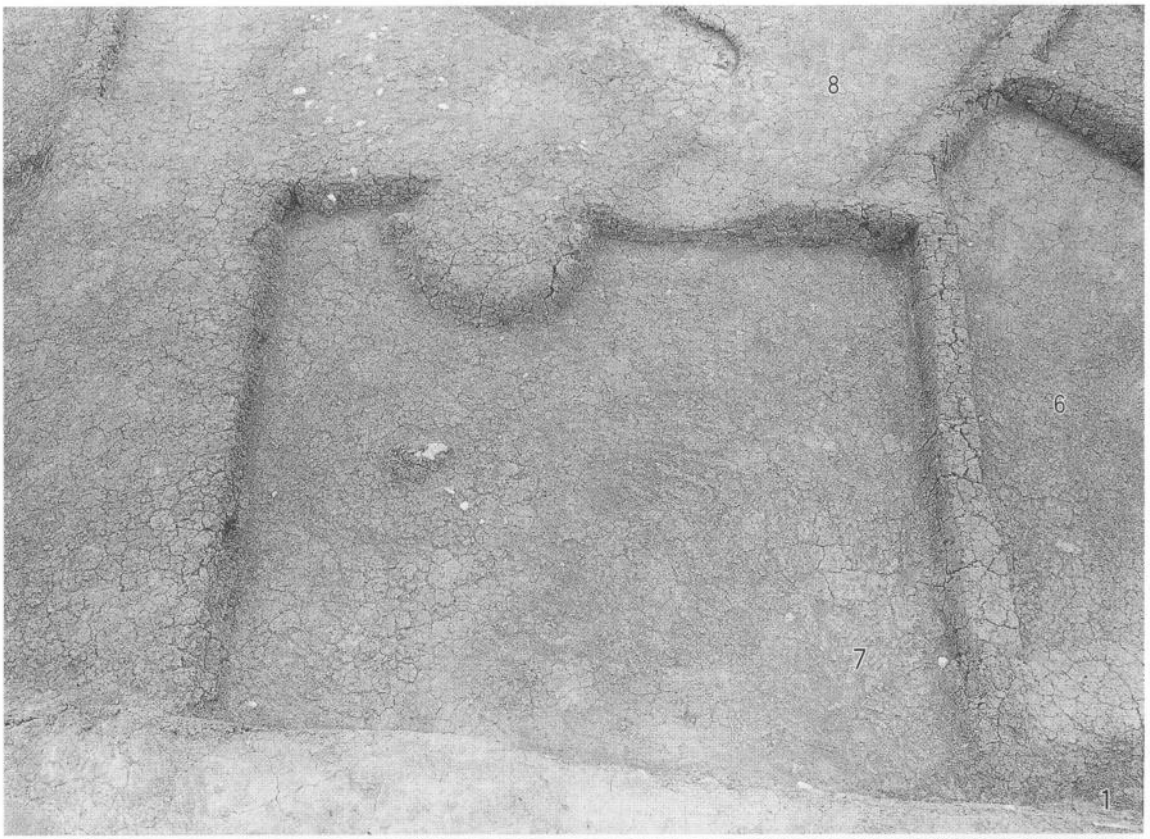
1　1号住居跡（東から）　　2　2号住居跡（南から）

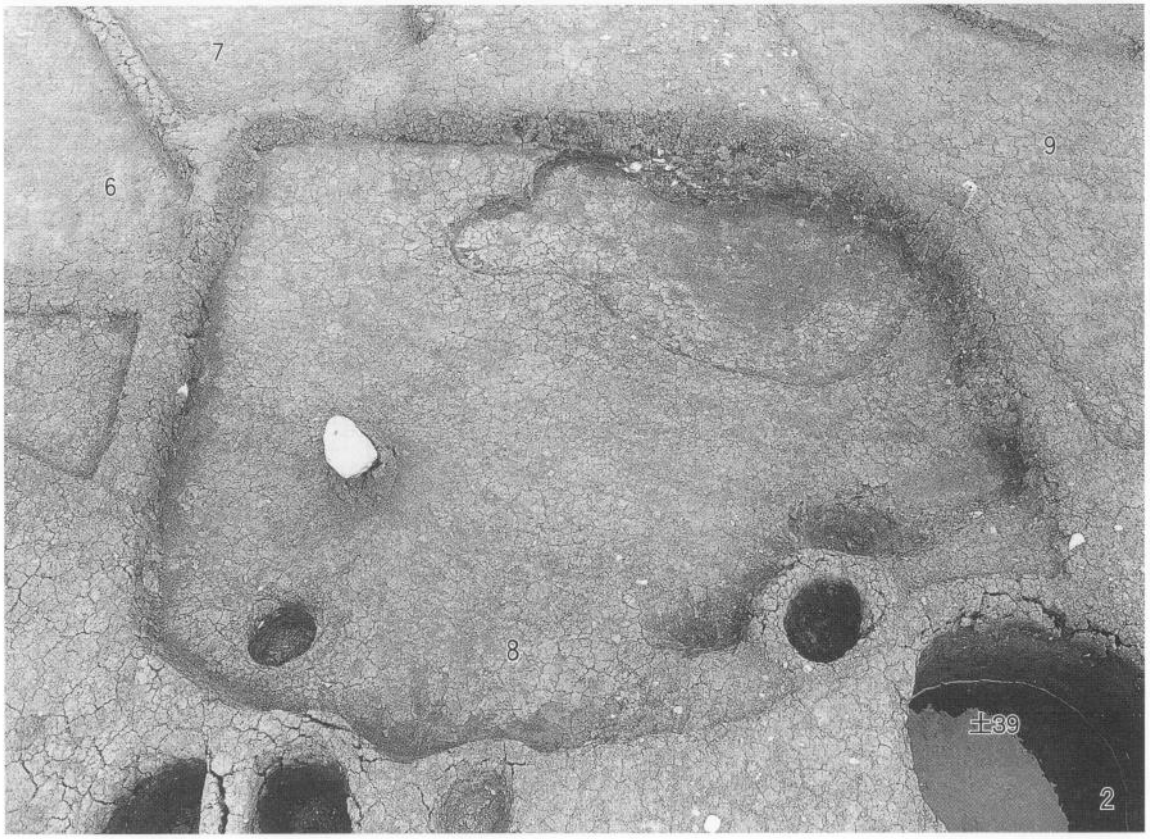
1　3号住居跡（西から）　　2　4号住居跡（東南から）



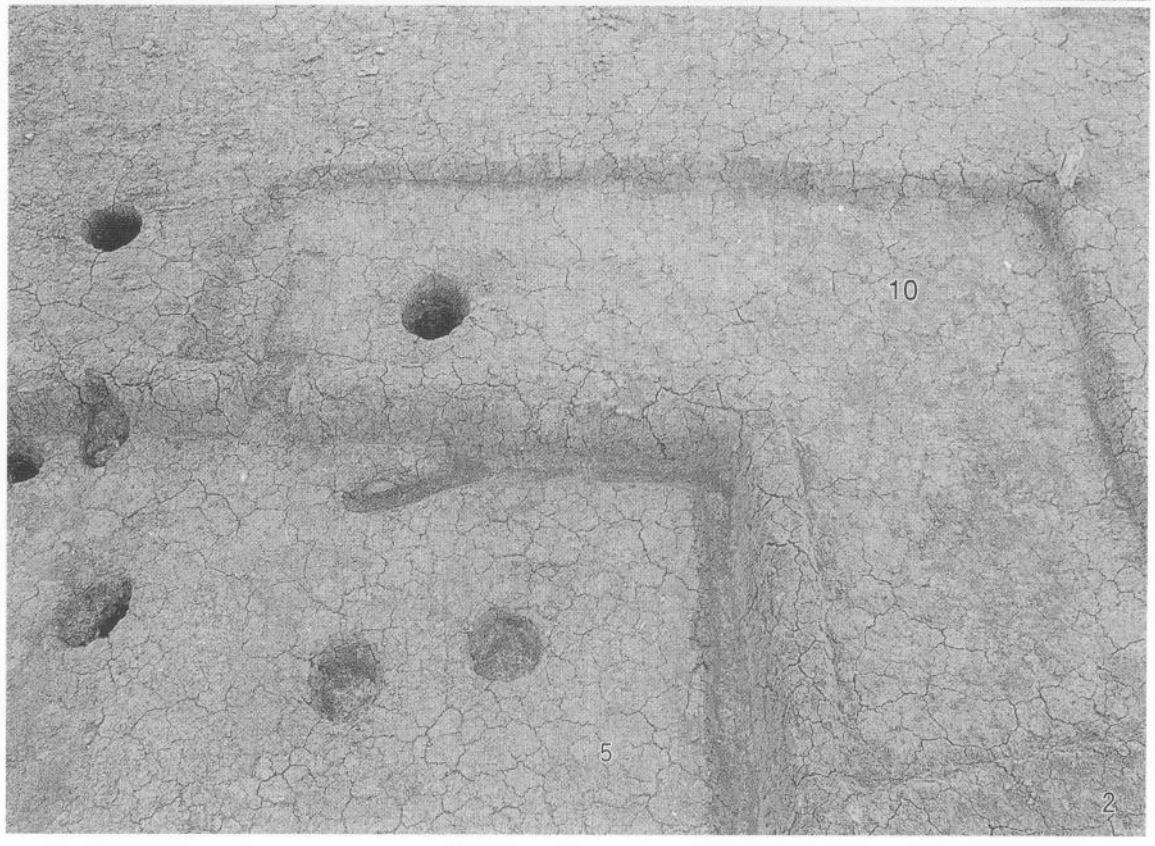


1　5号住居跡（東から）　　2　6号住居跡（西から）





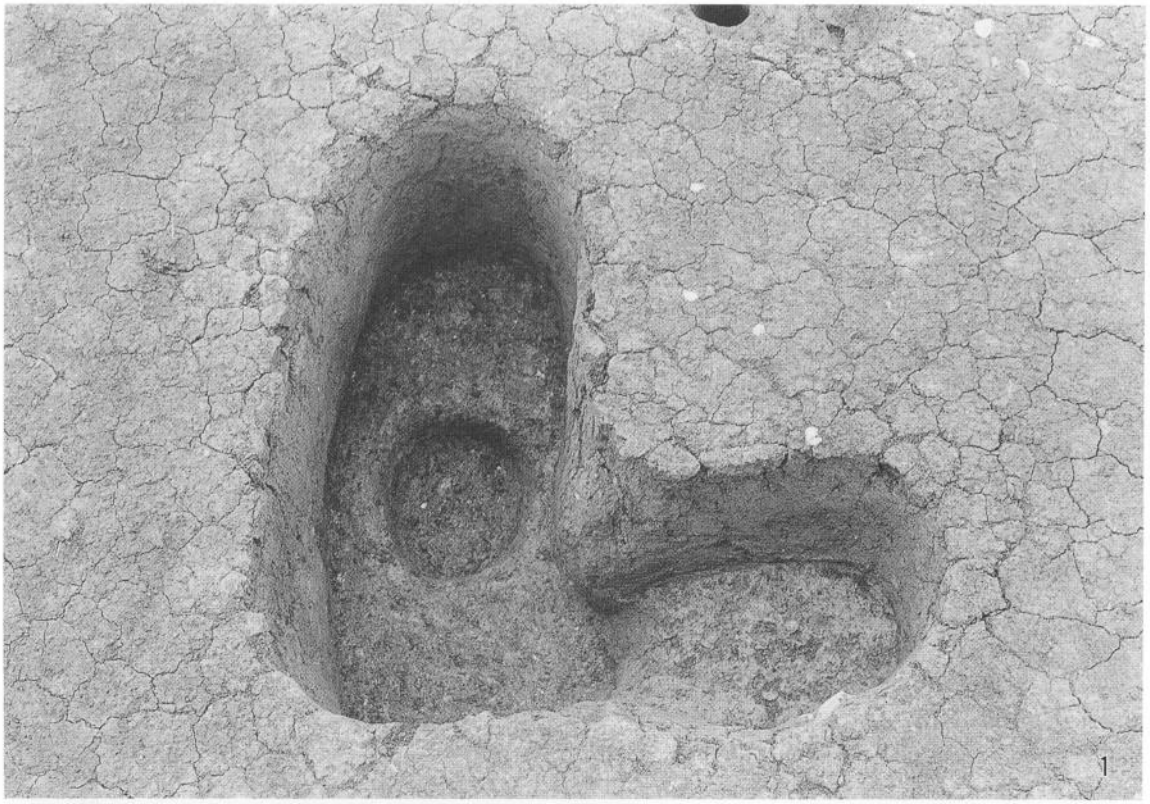
1　7号住居跡（西から）　　2　8号住居跡（東南から）

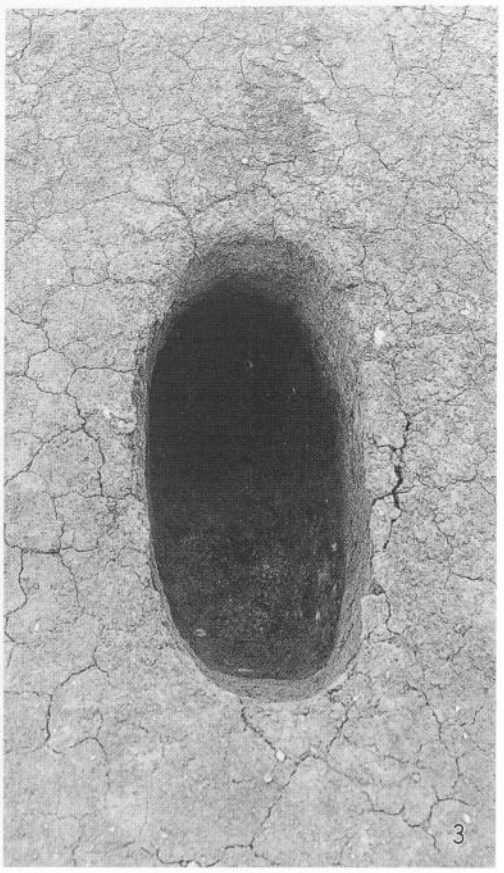


1　9号住居跡（西から）　　2　10号住居跡（北から）

1　11号住居跡（北西から）　　2　12号住居跡（西から）

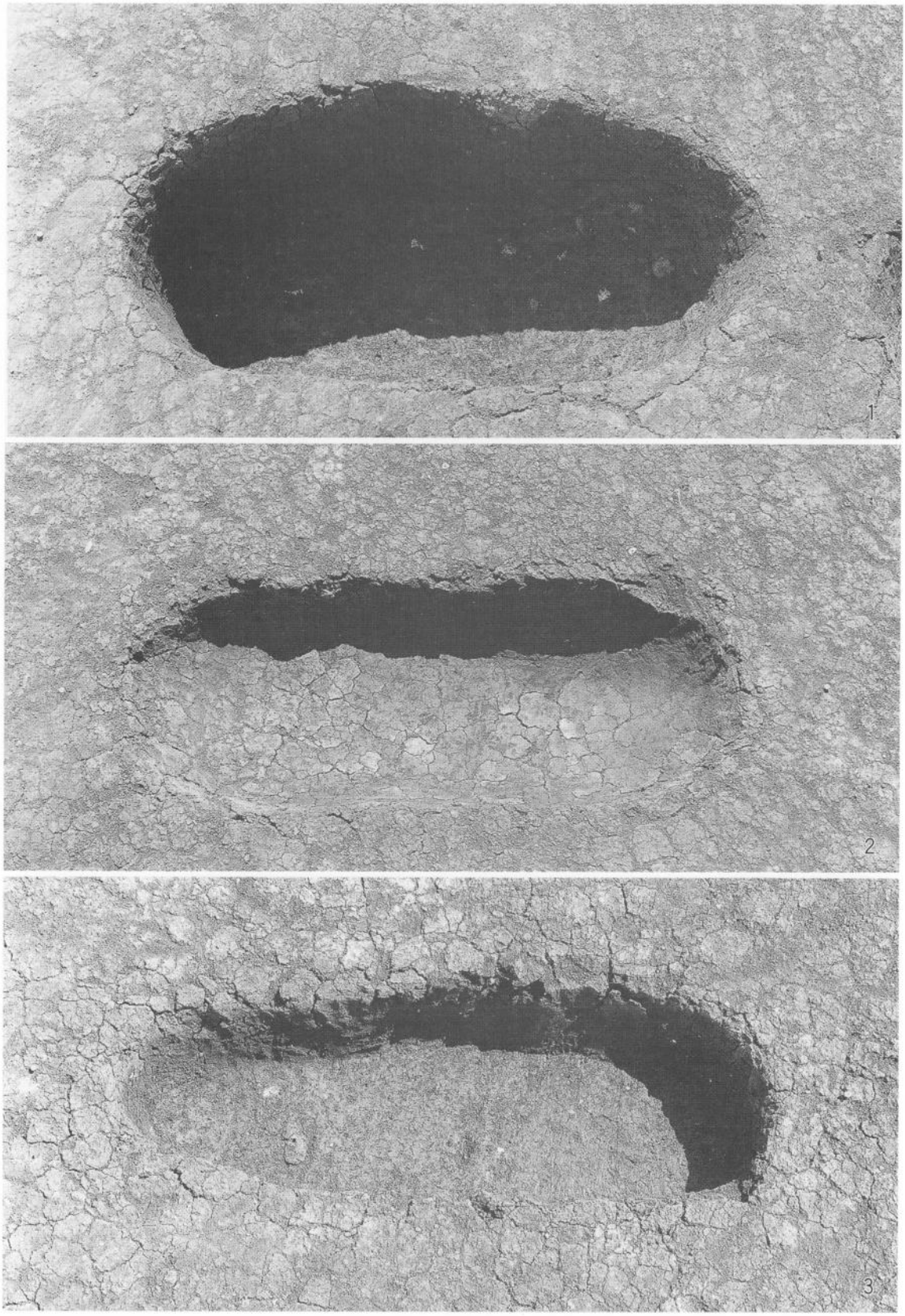
1　24号土坑（西から）　　2　25号土坑（北西から）　　3　28号土坑（西から）



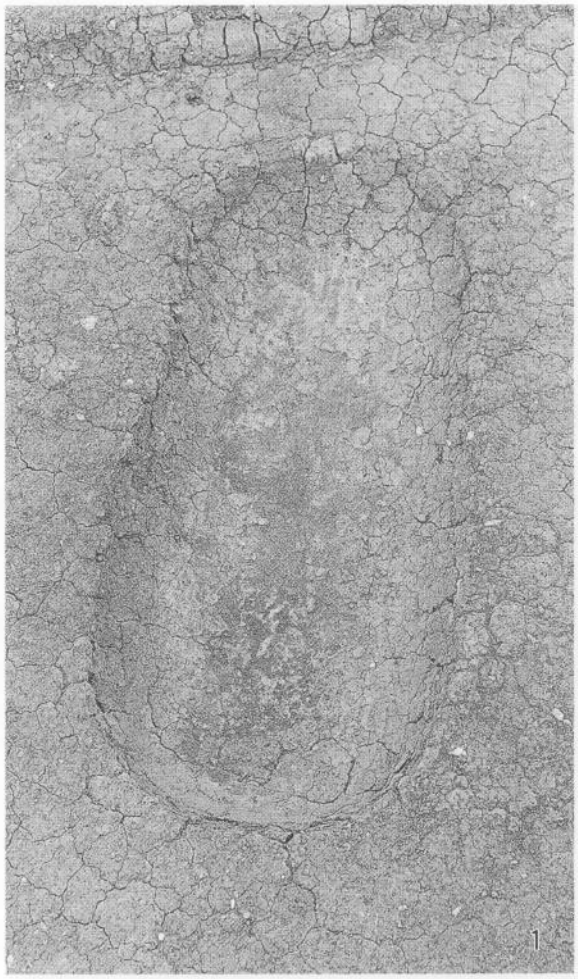


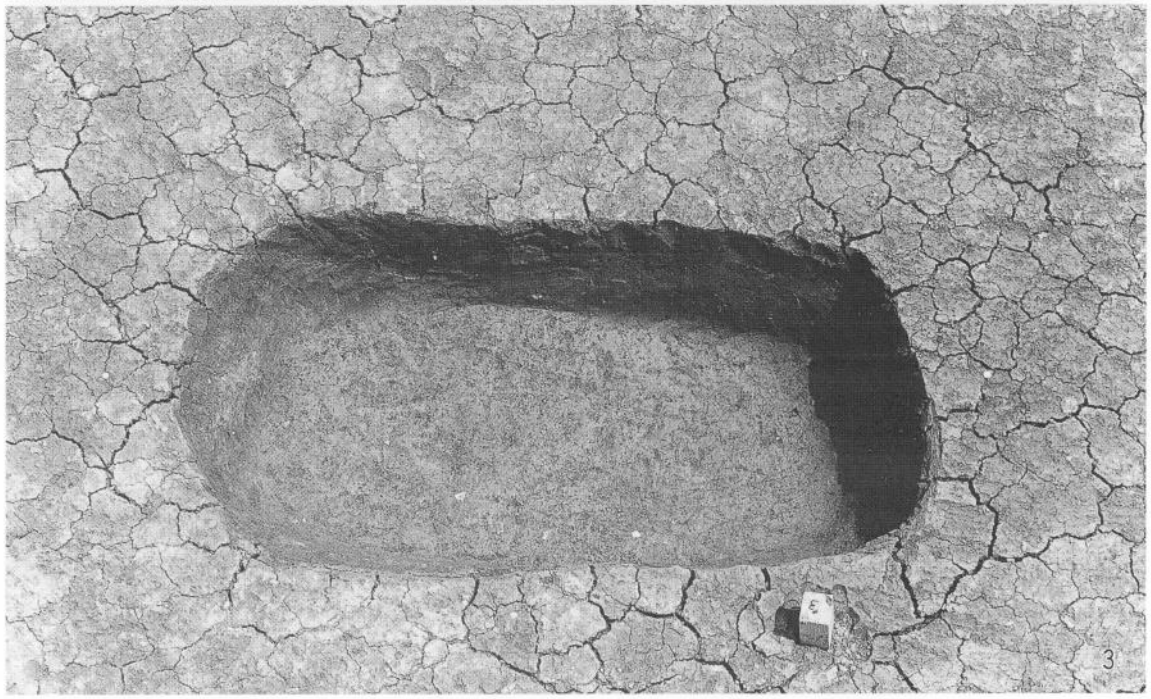
1　32号土坑（北から）　　2　34号土坑（北から）　　3　26号土坑（北から）

1　2号土坑（北東から）　　2　35号土坑（北から）　　3　37号土坑（東から）

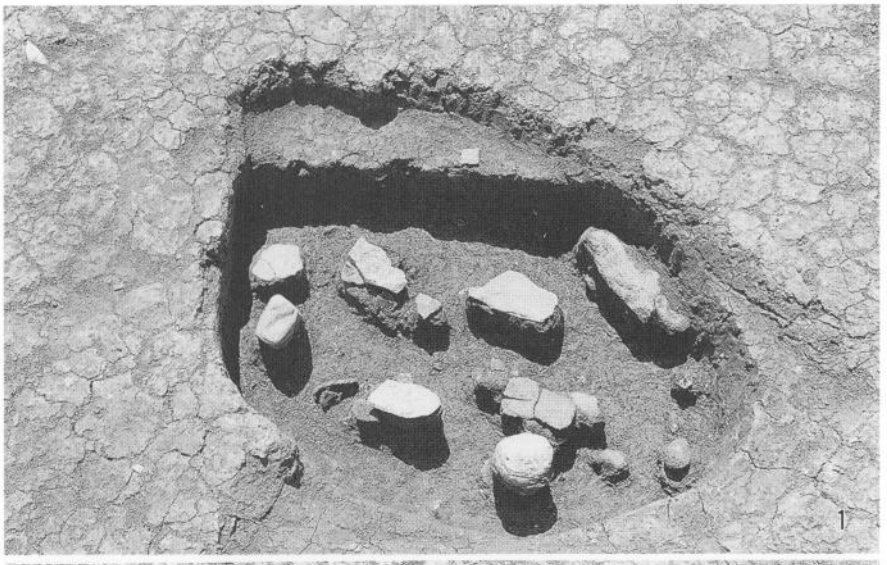


1　11号土坑（西から）　　2　4号土坑（西から）　　3　13号土坑（西から）



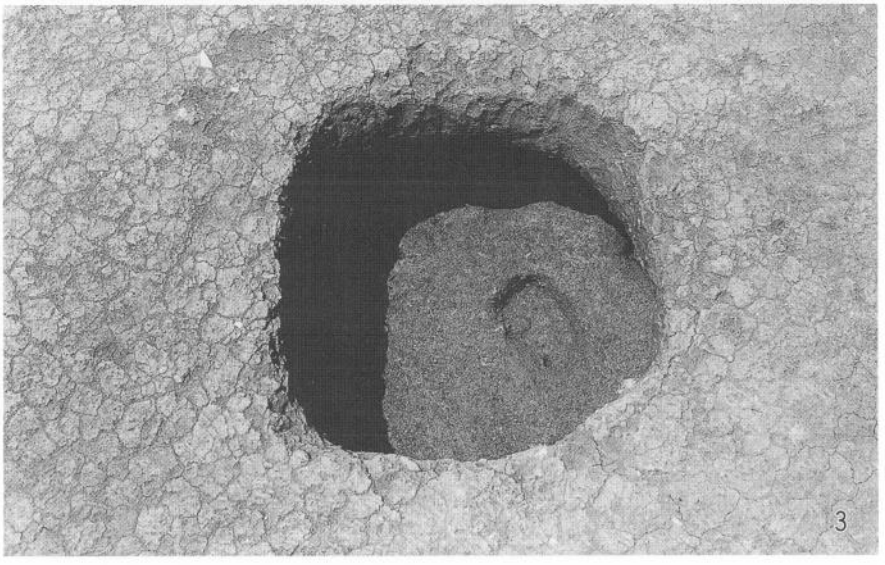


1　21号土坑（東から）　　2　33号土坑（東から）　　3　31号土坑（北から）

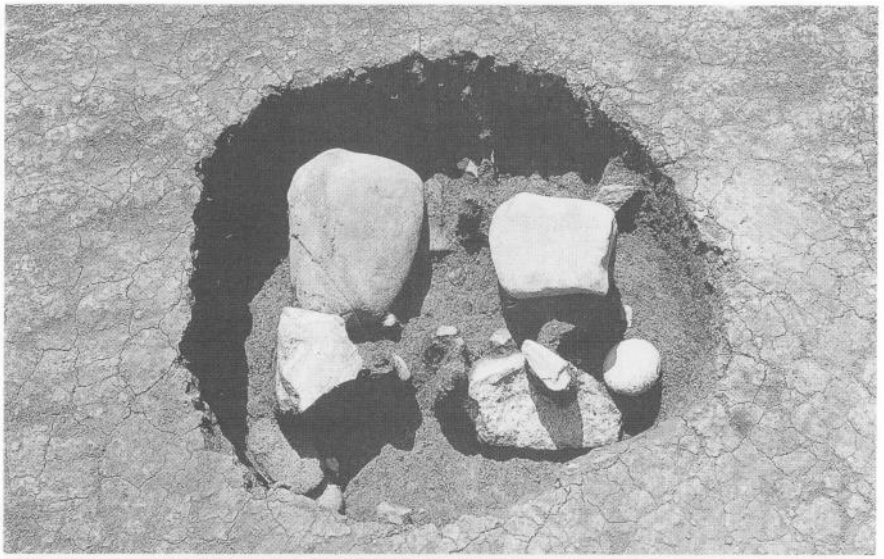


1　3号土坑
（東から）

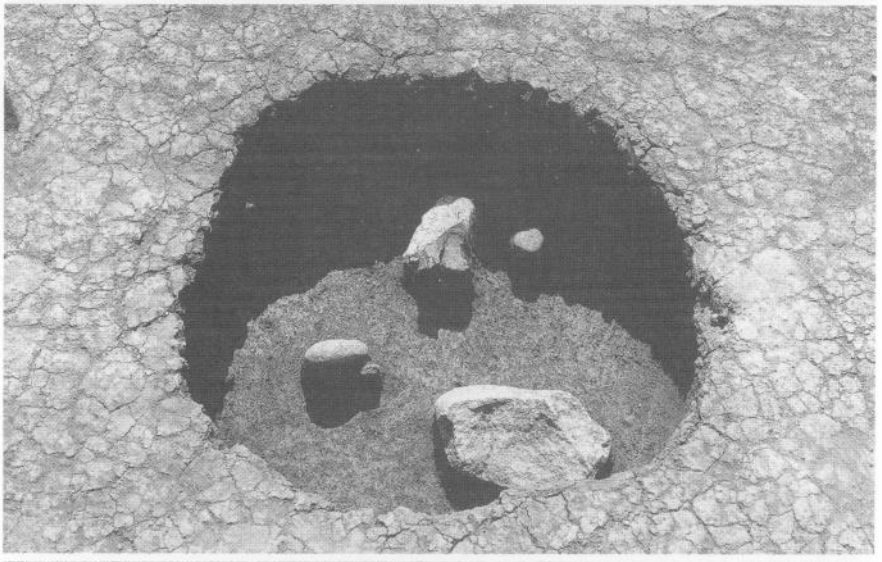
2　同上
（東から）



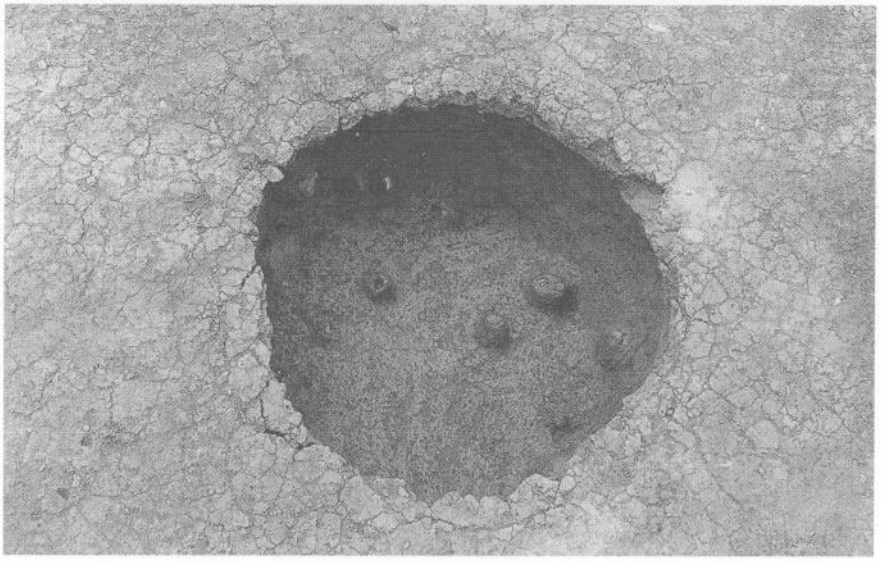
3　同上
（東から）



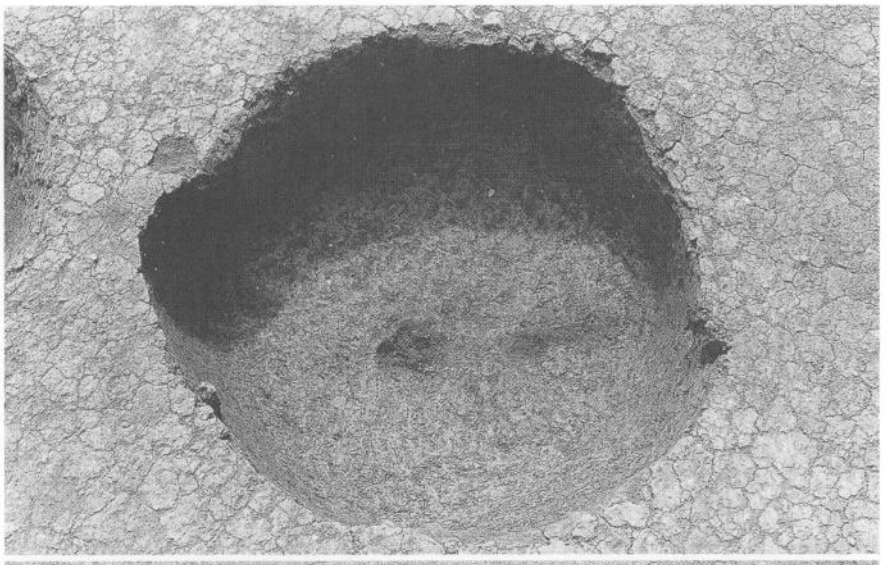
1　5号土坑
（東から）



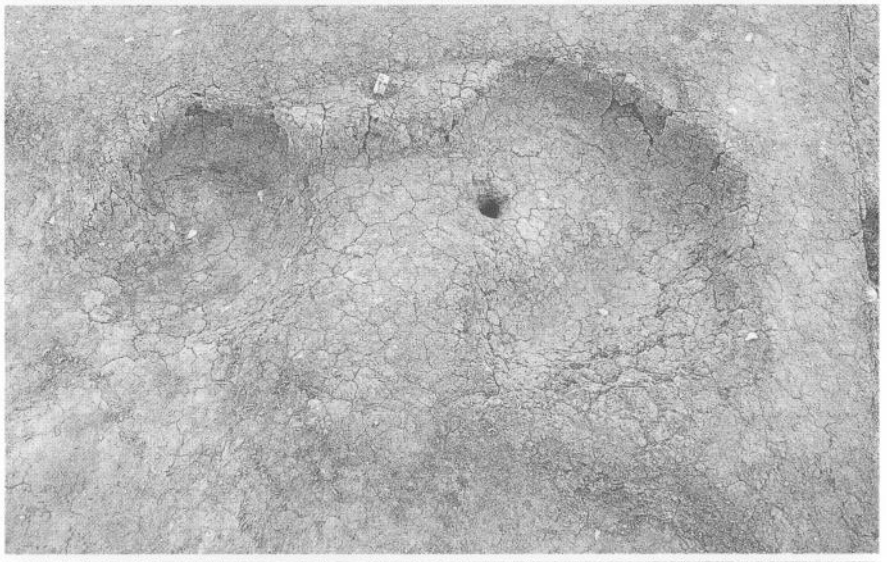
2　同上
（東から）



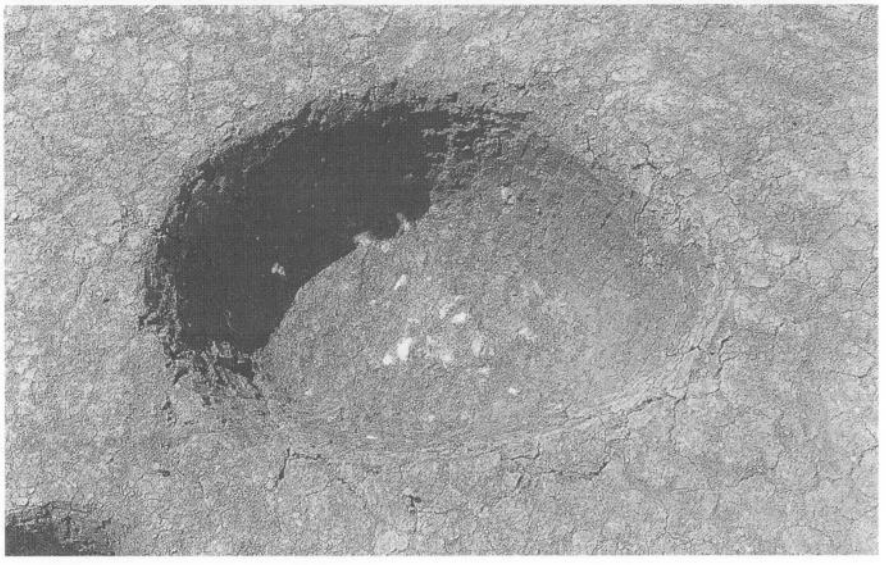
3　同上
（東から）



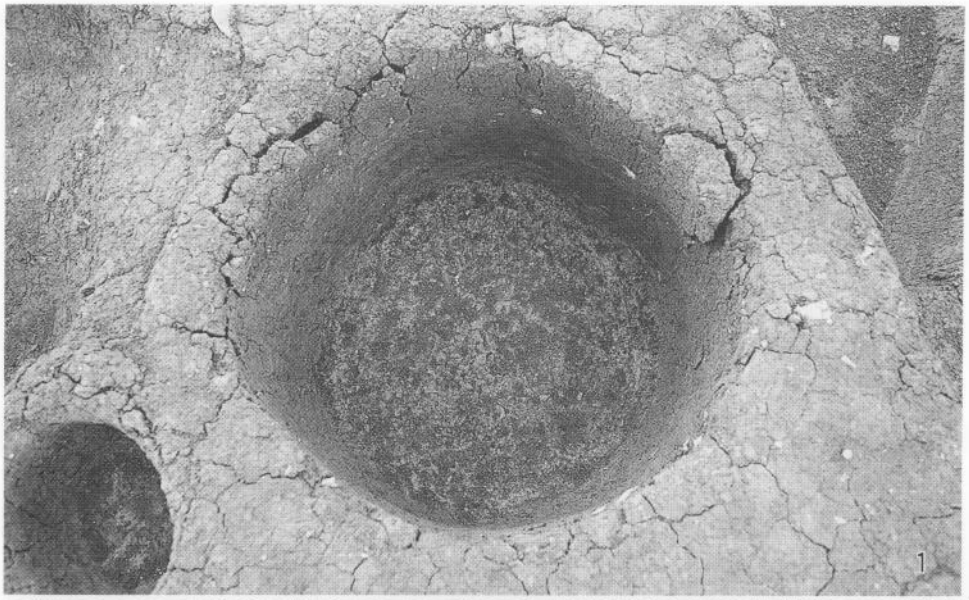
1　14号土坑
（東から）

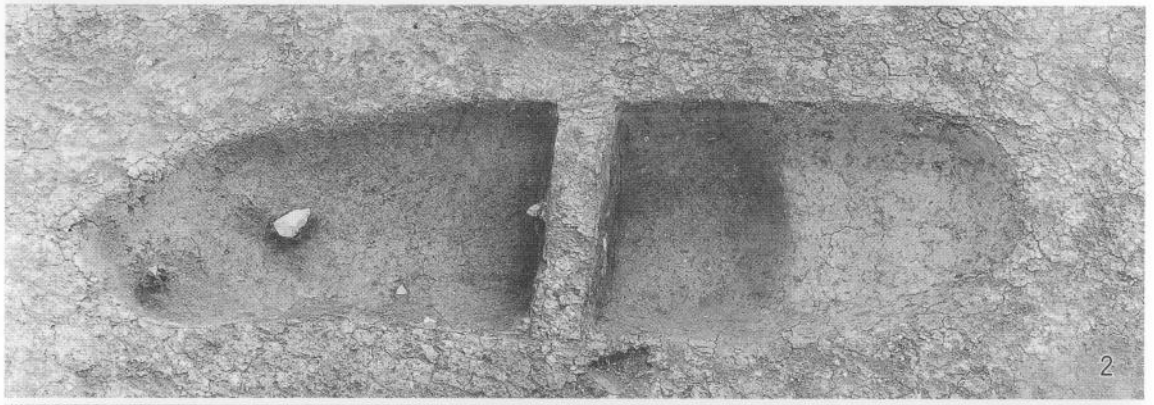


2　19号土坑
（南から）



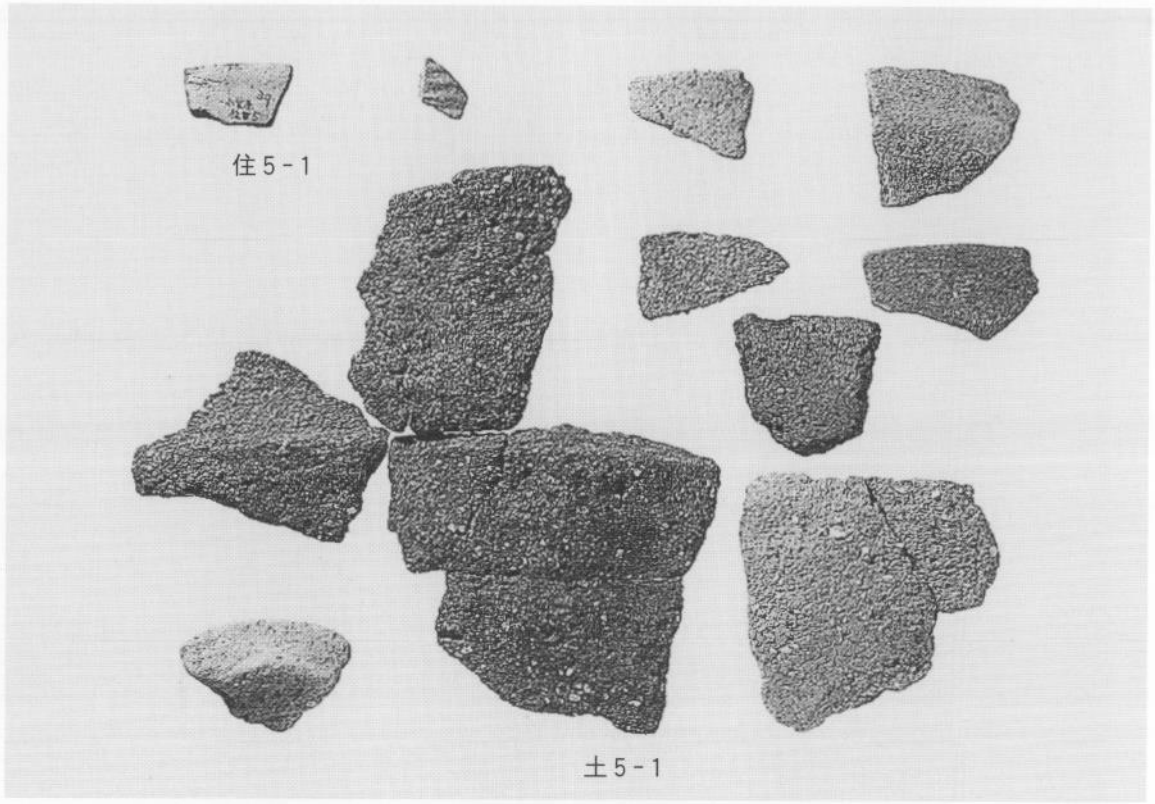
3　10号土坑
（北から）

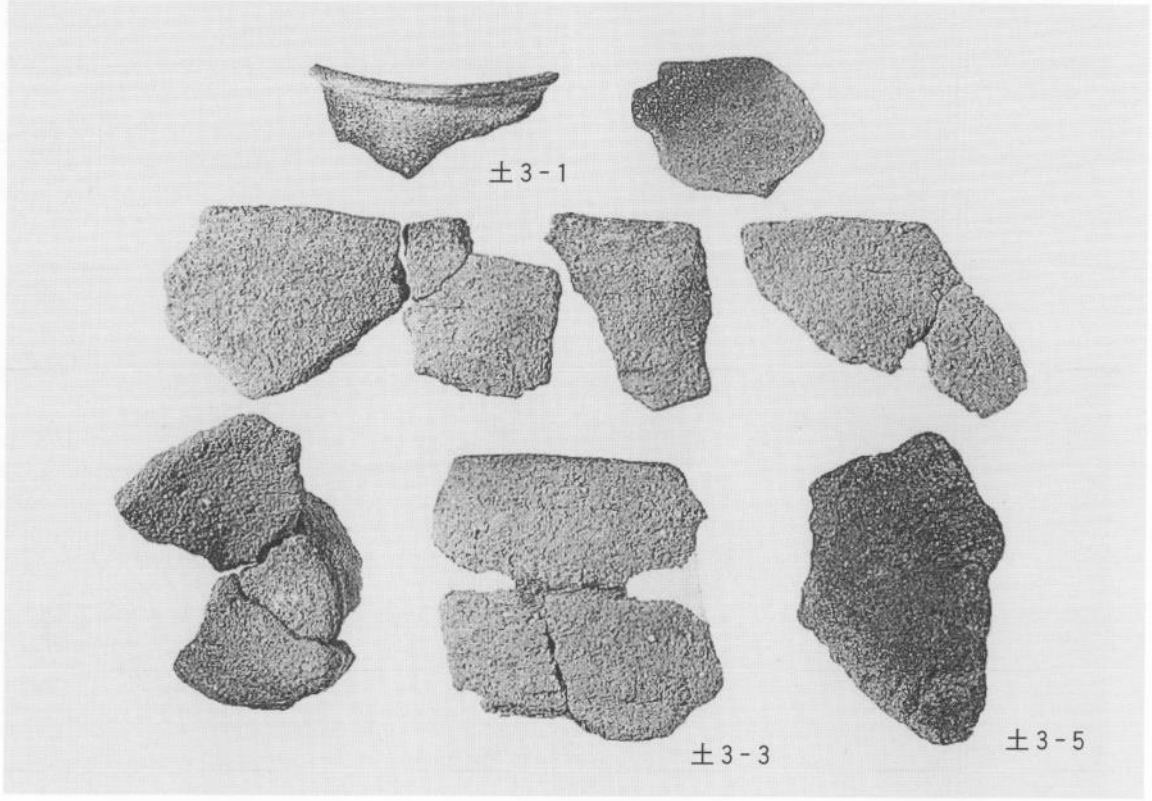




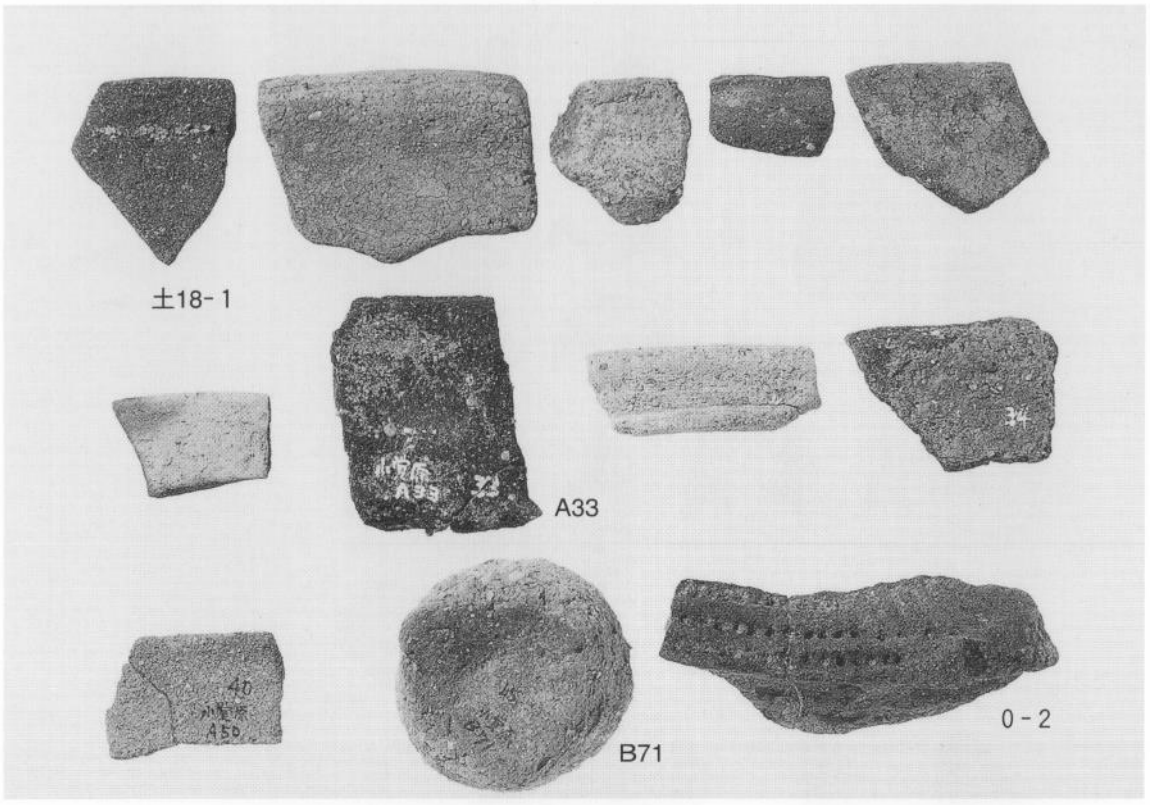
1　39号土坑（南から）　　2　1号土坑（北東から）　　3　同上（北東から）

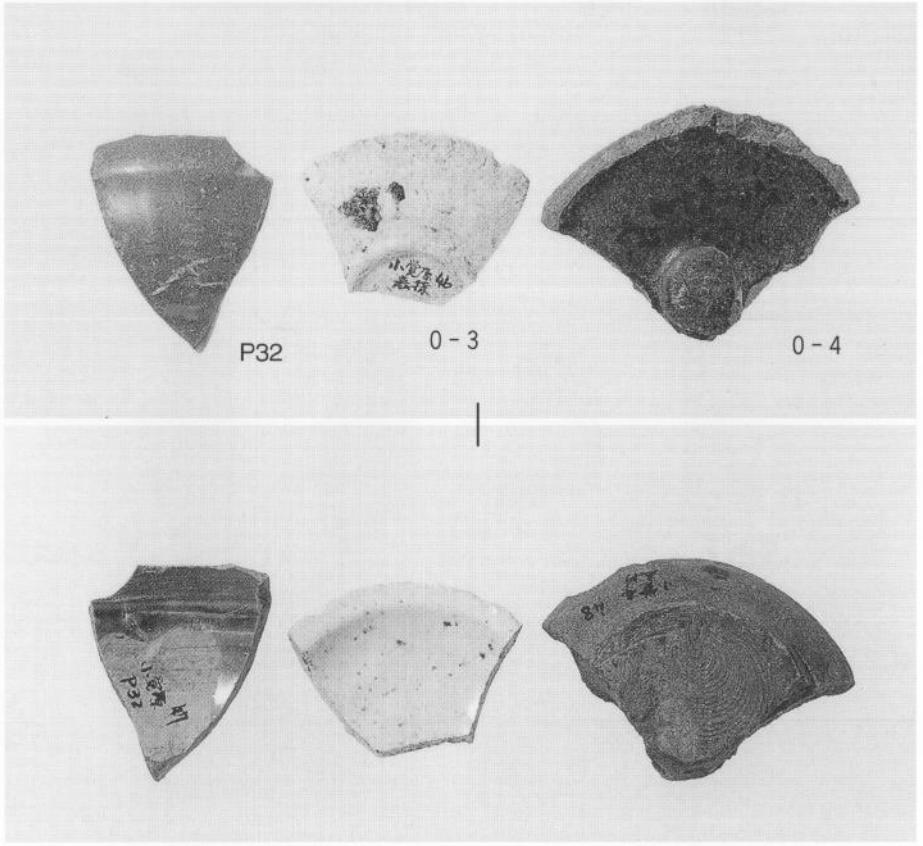
1　22号土坑（東から）　　2　36号土坑（東から）　　3　作業風景



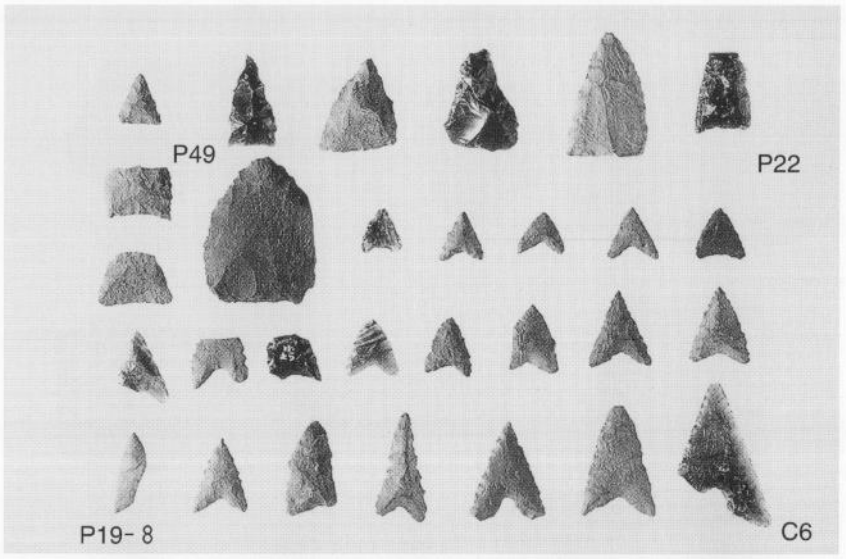


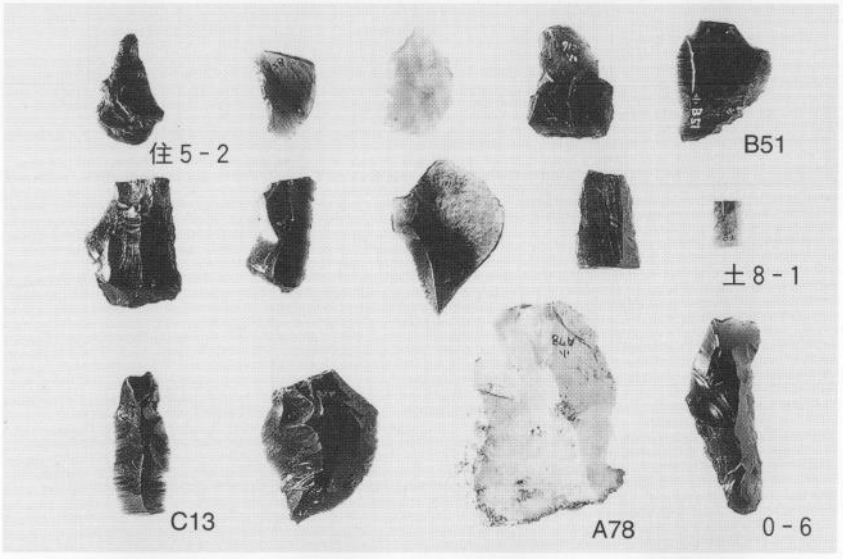
小覚原遺跡出土土器

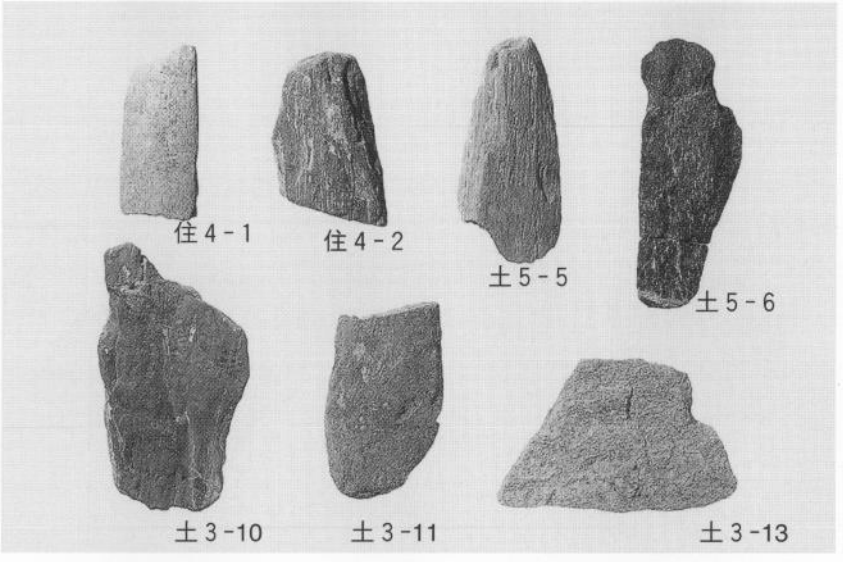




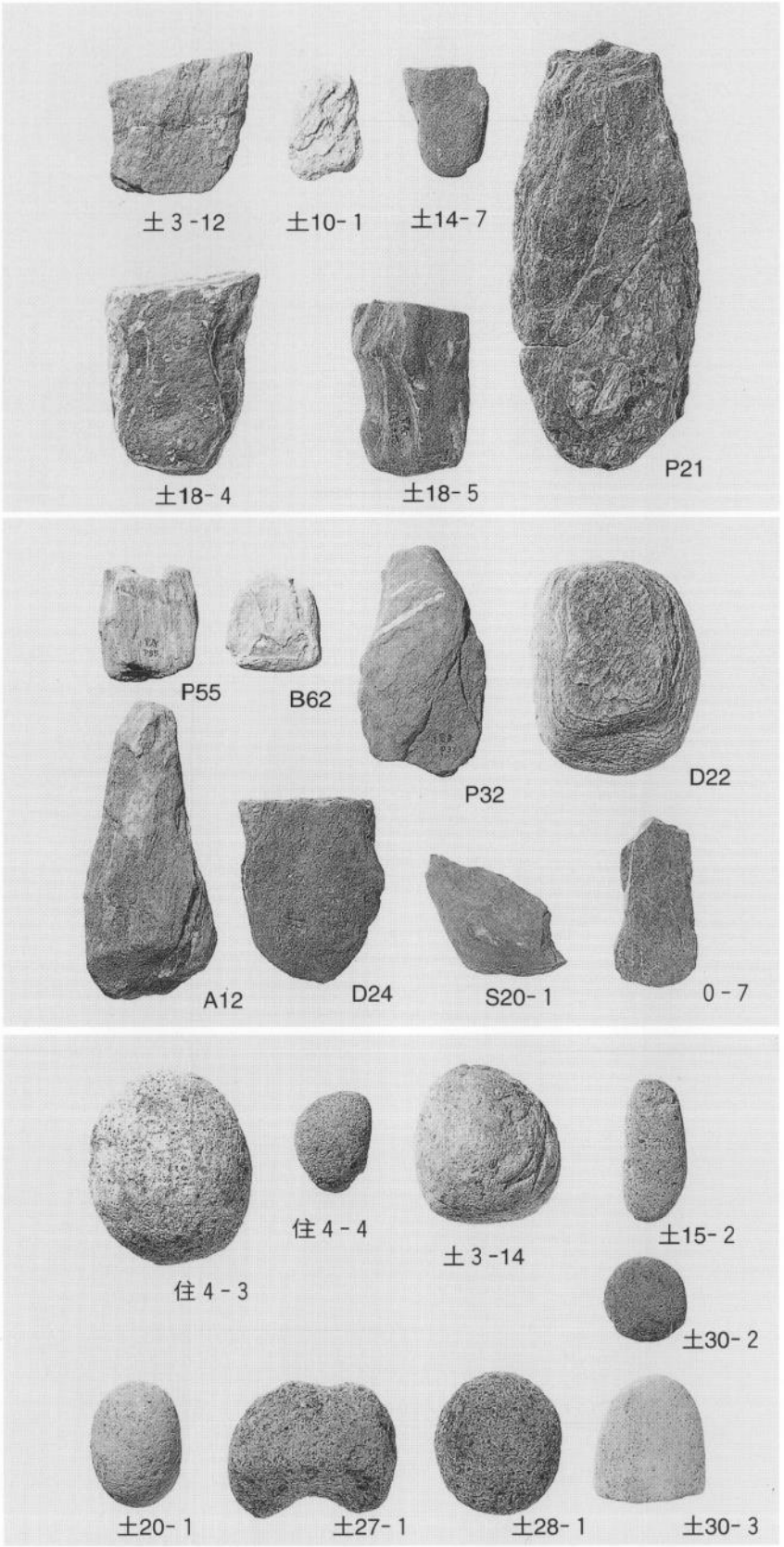
小覚原遺跡出土土器　陶磁器


P49
P22
P19-8
C6

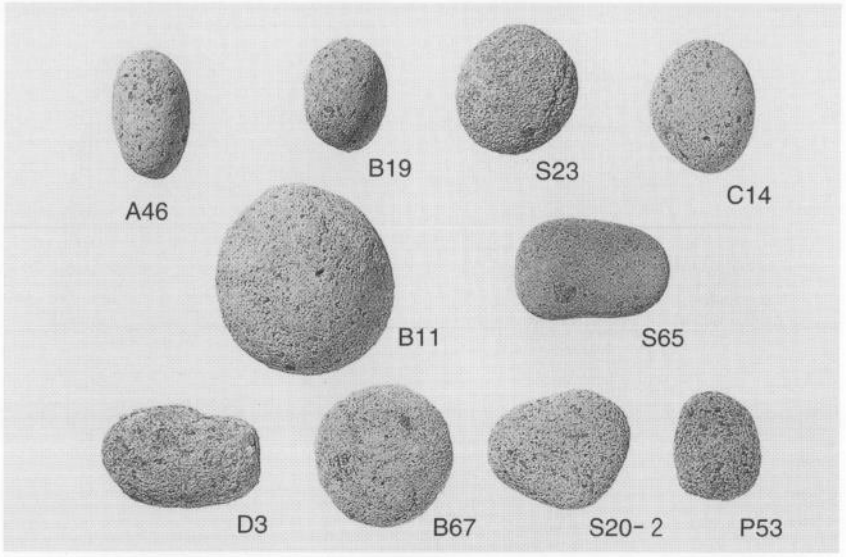

住5-2
B51
土8-1
C13
A78
0-6

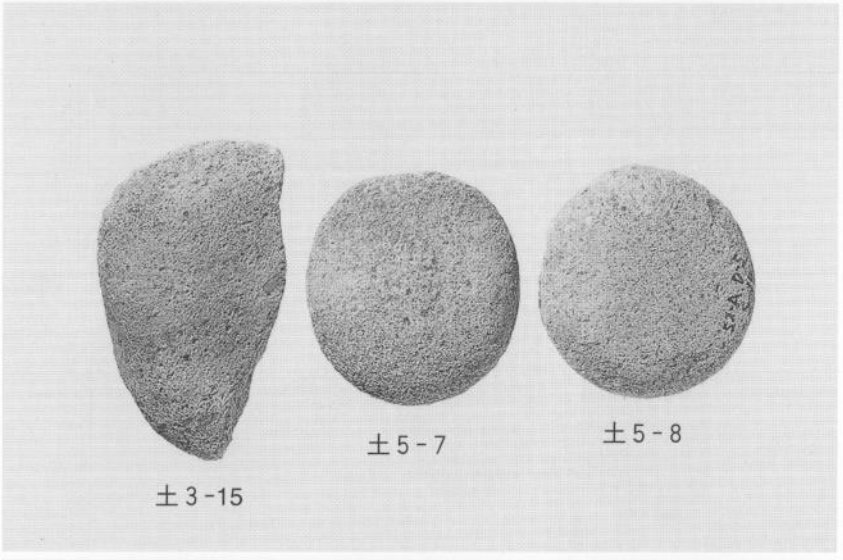

住4-1
住4-2
土5-5
土5-6
土3-10
土3-11
土3-13

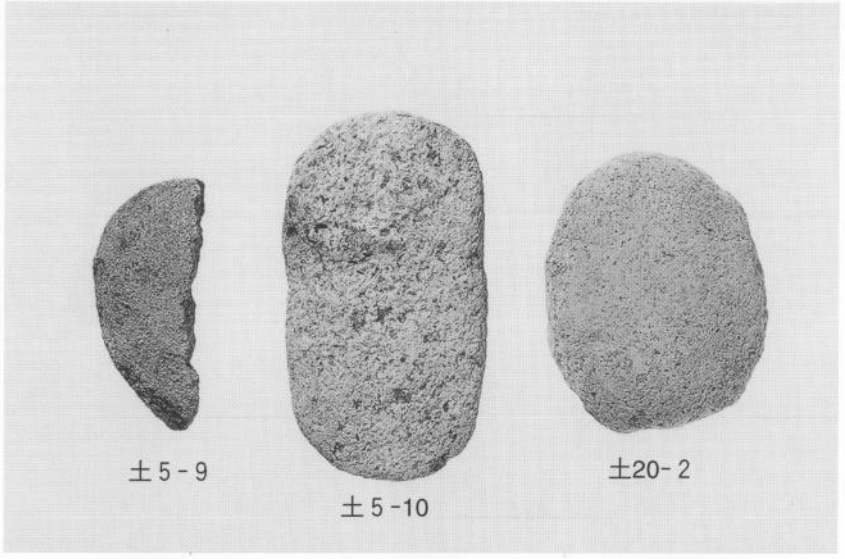
小覚原遺跡出土石器①


土3-12
土10-1
土14-7
P21
土18-4
土18-5
P55
B62
P32
D22
A12
D24
S20-1
0-7
住4-4
住4-3
土3-14
土15-2
土30-2
土20-1
土27-1
土28-1
土30-3

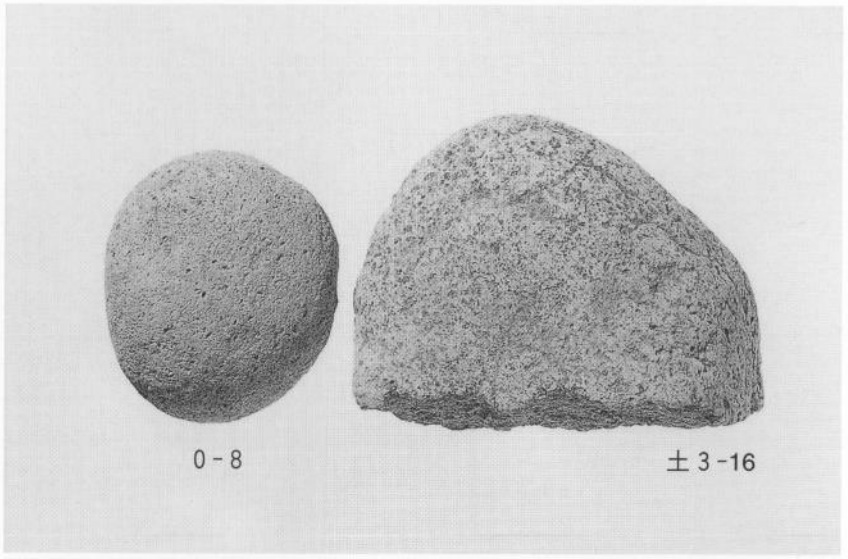
小覚原遺跡出土石器②

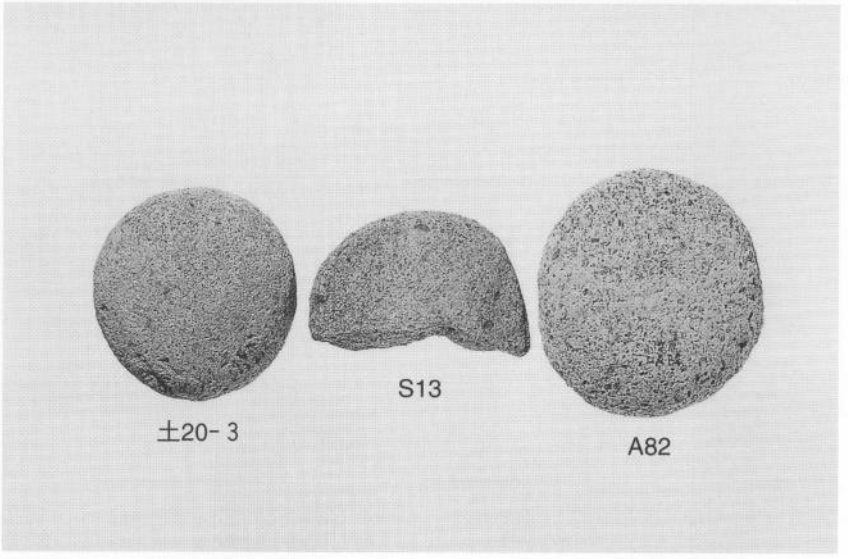

A46
B19
S23
C14
B11
S65
D3
B67
S20-2
P53

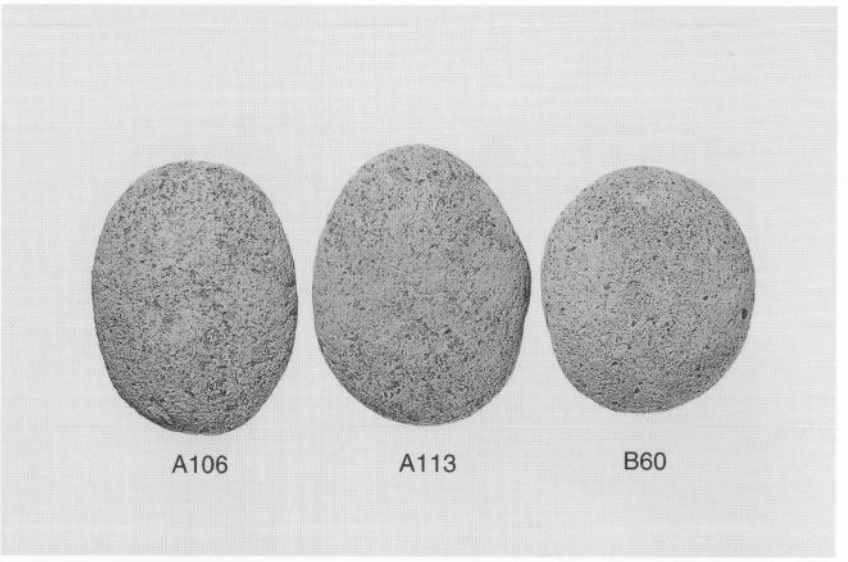

土3-15
土5-7
土5-8


土5-9
土5-10
土20-2

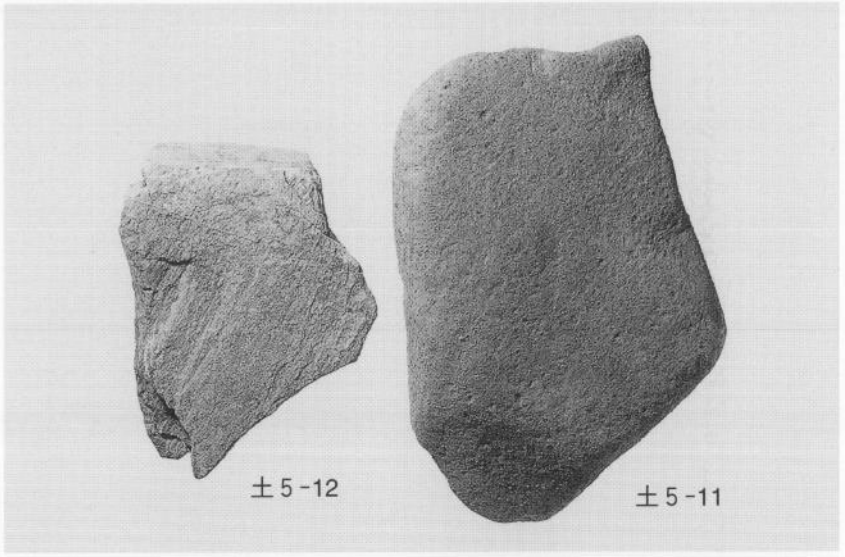
小覚原遺跡出土石器③

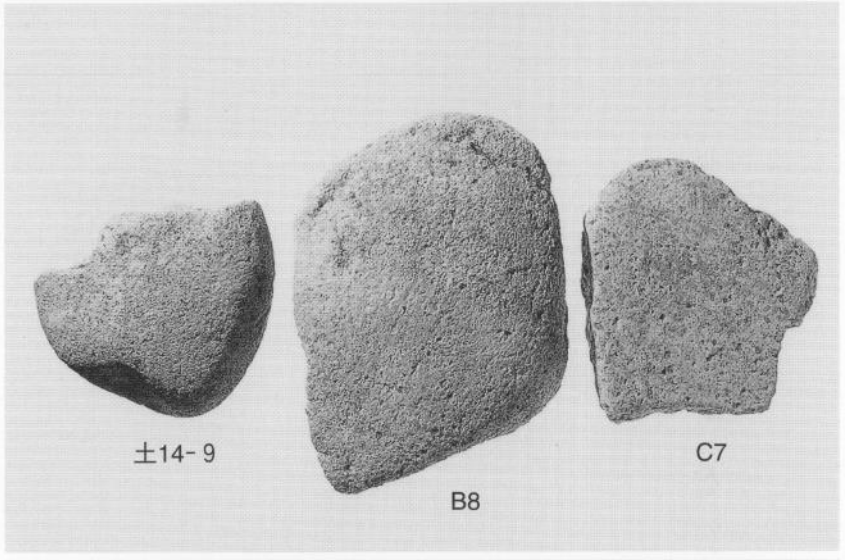


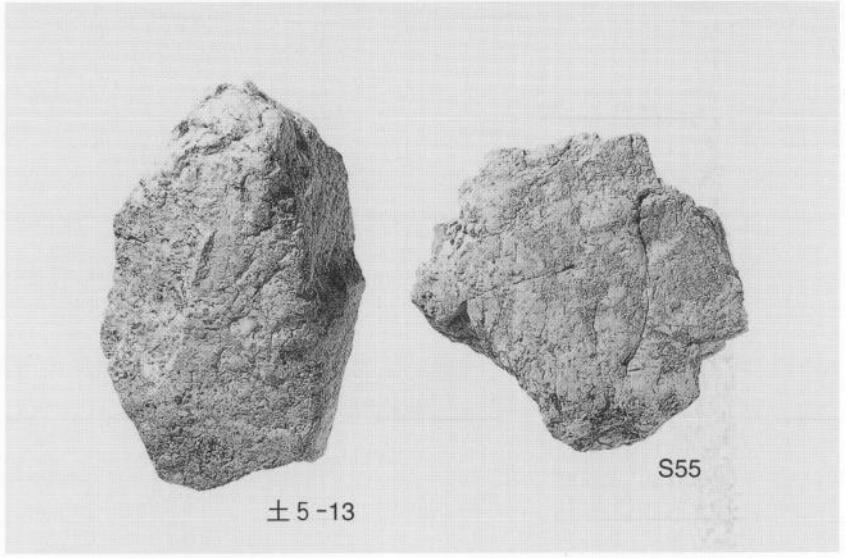




小覚原遺跡出土石器④







小覚原遺跡出土石器⑤

V　二十谷遺跡

V 二十谷遺跡

1 はじめに

二十谷遺跡(第52－B地点)は、福岡県朝倉郡杷木町大字林田字二十谷に所在し、筑後川の右岸にある阿蘇山から派生する北西山麓、国指定史跡である杷木神籠石の北側600mに位置する。

調査区は、標高75m前後の尾根線上を雛壇状の畑地として使われており、調査以前の予想では畑耕作で遺跡のほとんどが削平されていると思われたが、予想に反して、便宜上Ⅳ区に別けて調査した範囲内でのⅡ区に遺構が集中して検出された。

遺構内容は、縄文時代と中世の遺構が主で、縄文時代の落し穴を含めた土壙52基、縄文晩期の竪穴住居跡33軒、中世の掘立柱建物4棟、溝4条などである。

竪穴住居は、大半がⅡ区に遺存していたが、Ⅲ区にも若干存在することから、本来は調査区全域に設営されていたと推測される。また、住居の遺構確認が不明瞭で、しかも著しく錯綜した箇所があったことから、検出できた分の調査を先行させ、その後、再度重機を投入し浅く掘り下げて調査を実施した。その結果、数軒の竪穴住居が他の住居と重複する形で検出された。このため、調査面積が1,500㎡と狭いにも拘らず、昭和62年4月22日から調査を開始したが、約1カ月半の月日を要することとなり、6月9日ですべての作業を終了した。

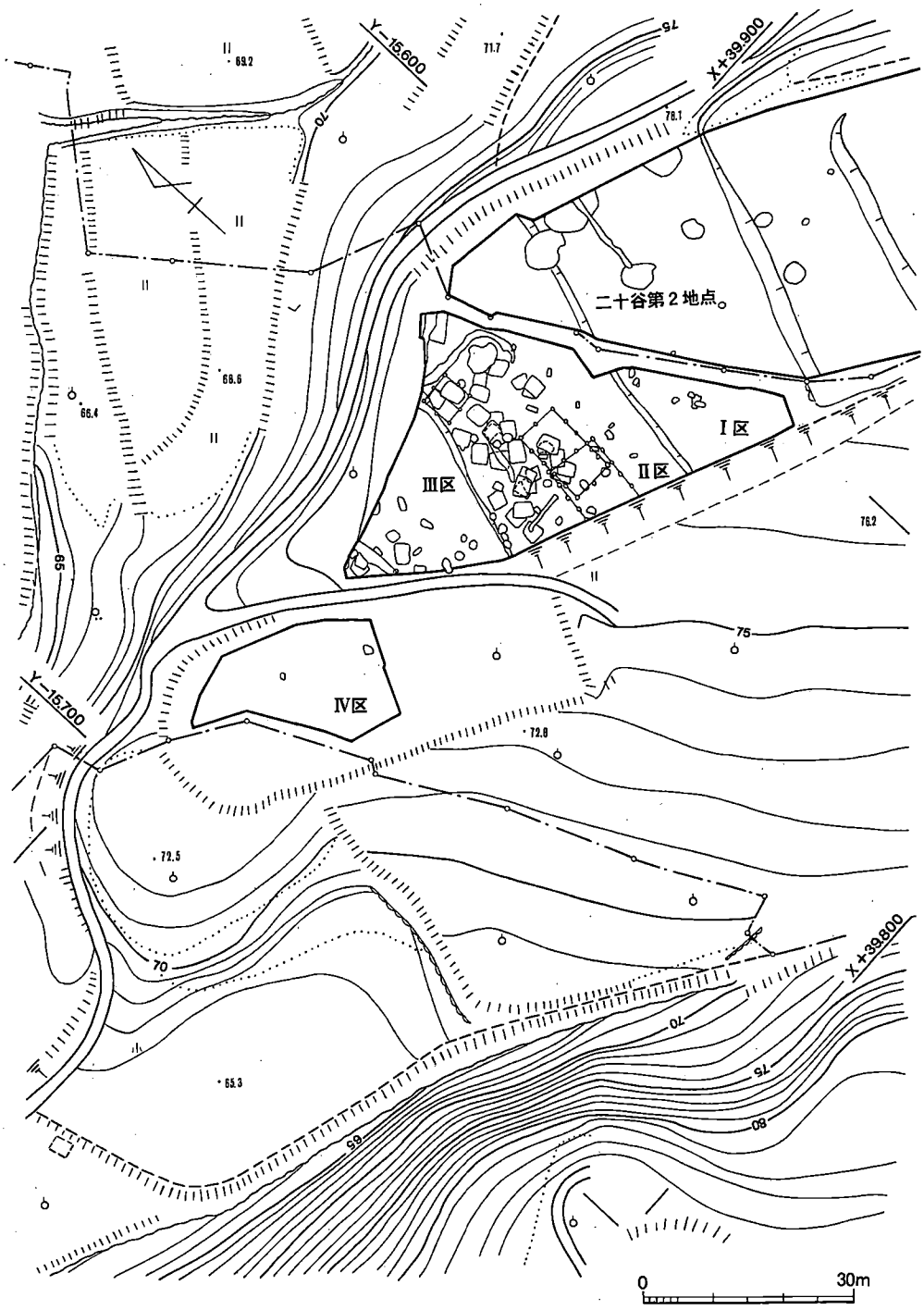
2 遺跡の概要

調査区内の地山面は茶褐色の粘質土からなり、縄文晩期と思われる竪穴住居群の覆土が暗茶褐色土で埋まっていたため遺構検出に手間取ったが、竪穴住居はほとんどの形状が方形乃至長方形で、総じて規模が小さいものである。住居の重複から看て短期間での二時期乃至三時期のものが存在すると考えられるが、出土遺物が頗る少ないことで時期決定が困難なものがある。

数ある土壙の中には、竪穴住居群に伴うと考えられる貯蔵穴様の土壙があることも注目される。平成5年に工業団地造成工事のため東側に隣接する第2地点で調査された内容でも、平面形状が円形の貯蔵穴様の土壙が確認されていることからも、この調査区内にも住居群が存在していたと考えられる。

土壙の中には、所謂落し穴といわれる遺構も数基存在する。配置状況では第2地点からの連続性が看られ、幾つかのタイプが存在する。第2地点を含めた形でこの一帯が縄文時代の早い時期には恰好の狩猟場であったと想定される。

中世の遺構では、掘立柱建物4棟と焼痕の著しい土壙、半円形に溝の巡った土壙などがあり、これらの遺構からは、鉄滓・鉄塊・鋳鉄・鞴羽口・壁体・石臼などが出土しており、この場所に小鍛冶関係の生業が営まれていたことが考えられる。



第88図　二十谷遺跡周辺地形図(1/1,000)

3　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

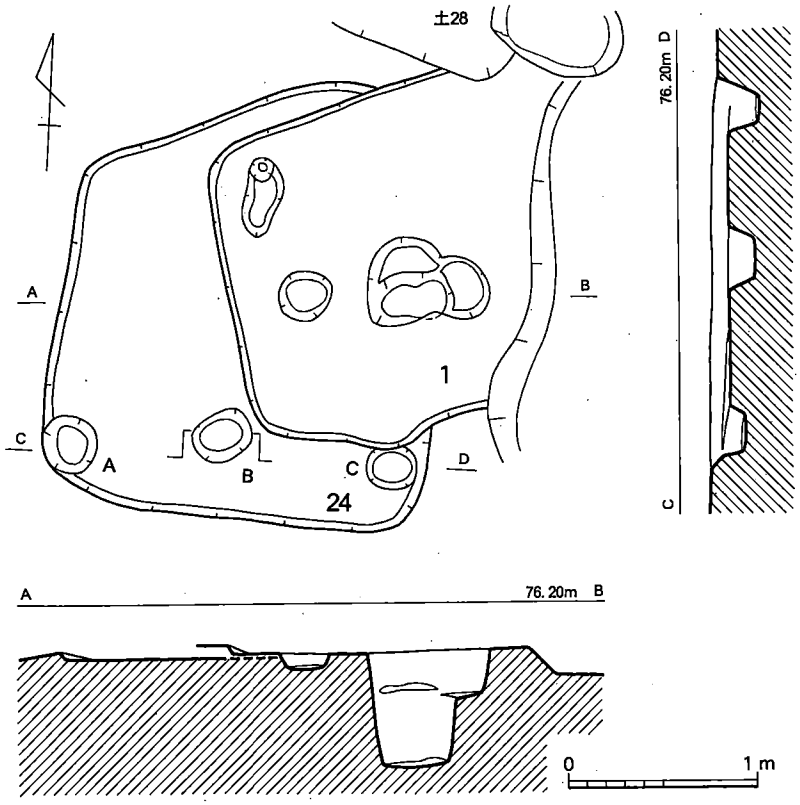
1号竪穴住居跡（図版69－(1)、第89図）

Ⅲ区の西端の南北に延びる溝2と重複した竪穴住居跡で、他の遺構との重なりは28号土壙、24号竪穴住居跡があり、その新旧関係は溝2・28号土壙→1号住居→24号住居の順で、溝2と28号土壙との新旧は分からない。

住居の東壁は溝で壊されているが、平面プランは長方形に近い形状であろう。

規模は不明であるが、西壁片は1.5m、深さは5.0cmを測る小形の住居である。床面の中央には深く大きめのピットがあるが、住居に伴うものではない。その他支柱穴などは不明である。

出土遺物はない。



第89図　二十谷1・24号竪穴住居跡実測図(1/40)

2号竪穴住居跡（図版69－(2)、第90図）

Ⅲ区の2号溝の東隣に位置する竪穴住居跡で、他の遺構との重複はない。平面形状がいびつな方形に近く、長辺が2.50m・2.90m、短辺が1.90m・2.30m、深さは5.0cmから10cmと浅い。支柱穴ははっきりしないが、A～Eが考えられる。しかし、深さが一定でないところに疑問が残る。床面の南壁隅には円形状の1.0m×0.8m、床面からの深さ37cmの土壙様の掘り込みがあ

り、中から晩期の土器の小片（不図示）が出土した。

床面には2か所に地山の石塊が嵌まり込んでおり、住居との関係がいまいち不明瞭である。

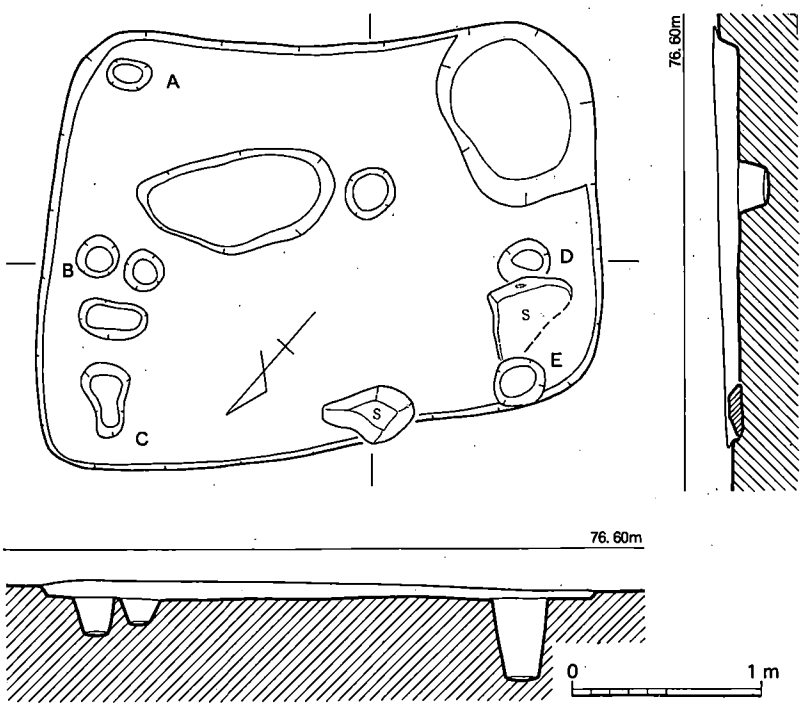
出土遺物は鉢の小片がある。

3号竪穴住居跡（図版70－(1)、第91図）

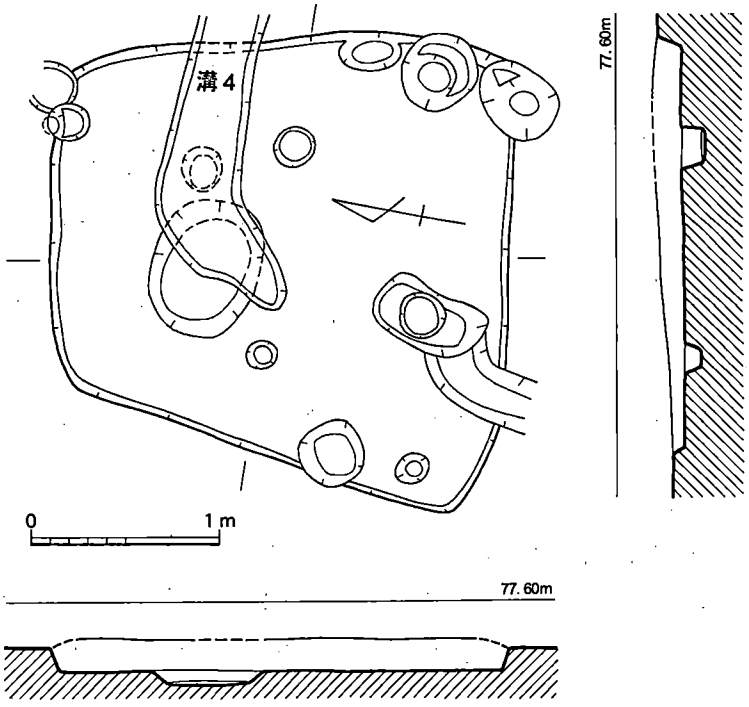
Ⅱ区南西隅の比較的住居の遺存状態の良好な所に位置する竪穴住居跡で、4号溝との重複があり、溝の方が新しい。

住居の平面形態は歪な方形で、プラン検出が不明瞭であり若干の誤認があったのかも知れない。現状での規模は、南・北壁辺が2.40m・1.70m、深さは15cm前後を測る。規則的な柱穴はなく、支柱穴ははっきりしない。

出土遺物は皆無である。



第90図　二十谷2号竪穴住居跡実測図(1/40)



第91図　二十谷3号竪穴住居跡実測図(1/40)

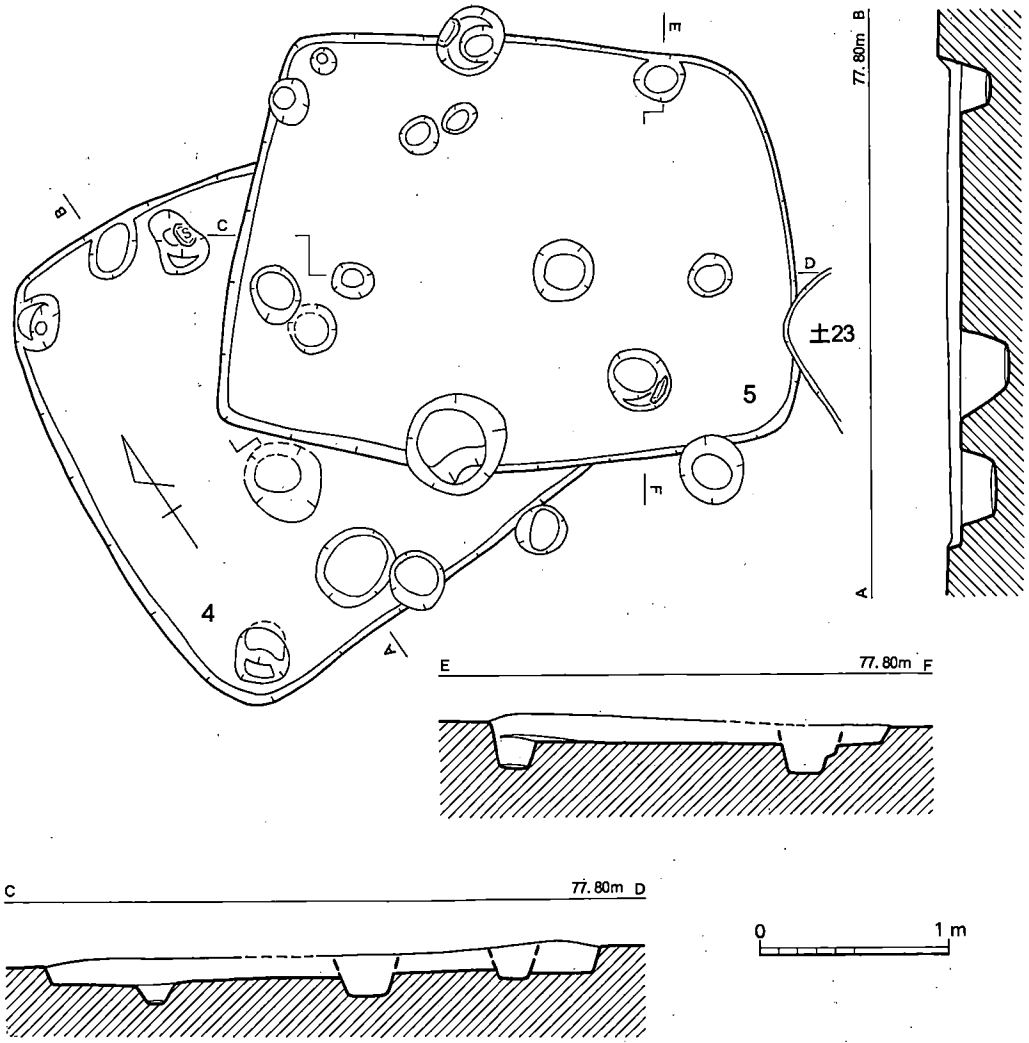
4号竪穴住居跡（図版70－(1)・(2)、第92図）

Ⅱ区の南西隅の3号住居の北隣で検出した竪穴住居跡で、住居の1/2近くが5号住居と重複しており当該住居の方が古い。現状で判断すると平面プランは歪な方形と思われる。住居の規模は西壁で2.60m、深さは10cm前後と浅い。床面には数個のピットがあるが支柱穴になるか否かは不明で、その他詳細は分からない。

出土遺物は皆無である。

5号竪穴住居跡（図版70－(1)・(2)、第92図）

4号住居より新しい竪穴住居跡で、平面形状は長方形に近い。23号土壙と東壁の一部で重な



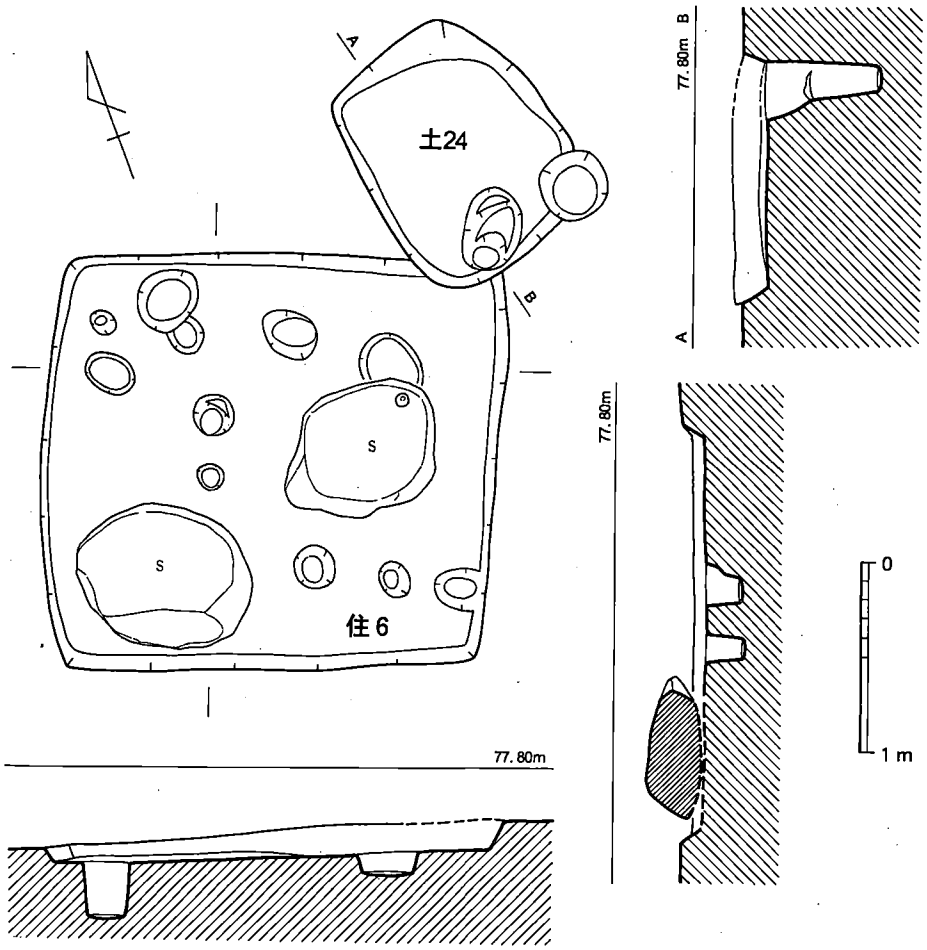
第92図　二十谷4・5号竪穴住居跡実測図(1/40)

り土壙が新しい。住居の規模は、長辺が2.45m・3.05m、短辺は2.05m・1.90m、深さは10cm～15cmを測る。床面上のピットには規則的な配置はみられず支柱穴が不明瞭である。

出土遺物はない。

6号竪穴住居跡（図版70－(2)、第93図）

4号住居の北隣で検出した方形プランの竪穴住居で、住居より新しい24号土壙が北東隅の壁の一部を破壊している。住居の規模は、東・西壁が2.15m、南・北壁が2.20m・2.30m、壁高は10cm～15cmを測る。床面には大きな地山石が2個床面に若干嵌入した状態で検出された。おそらく住居が廃棄された段階で投棄されたか斜面を転がり落ちたのであろう。床面には数個のピットがあるが、規則的に配置された柱穴はなく不明瞭である。出土遺物はない。

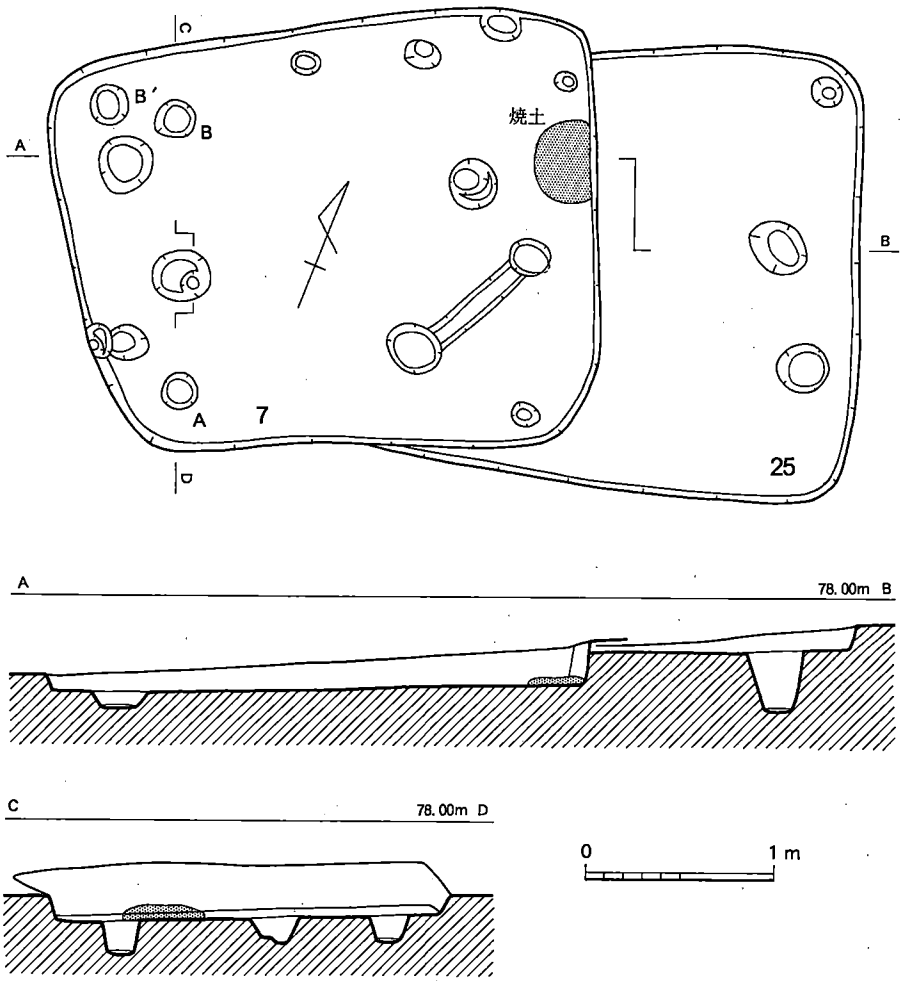


第93図　二十谷6号竪穴住居跡、24号土壙実測図(1/40)

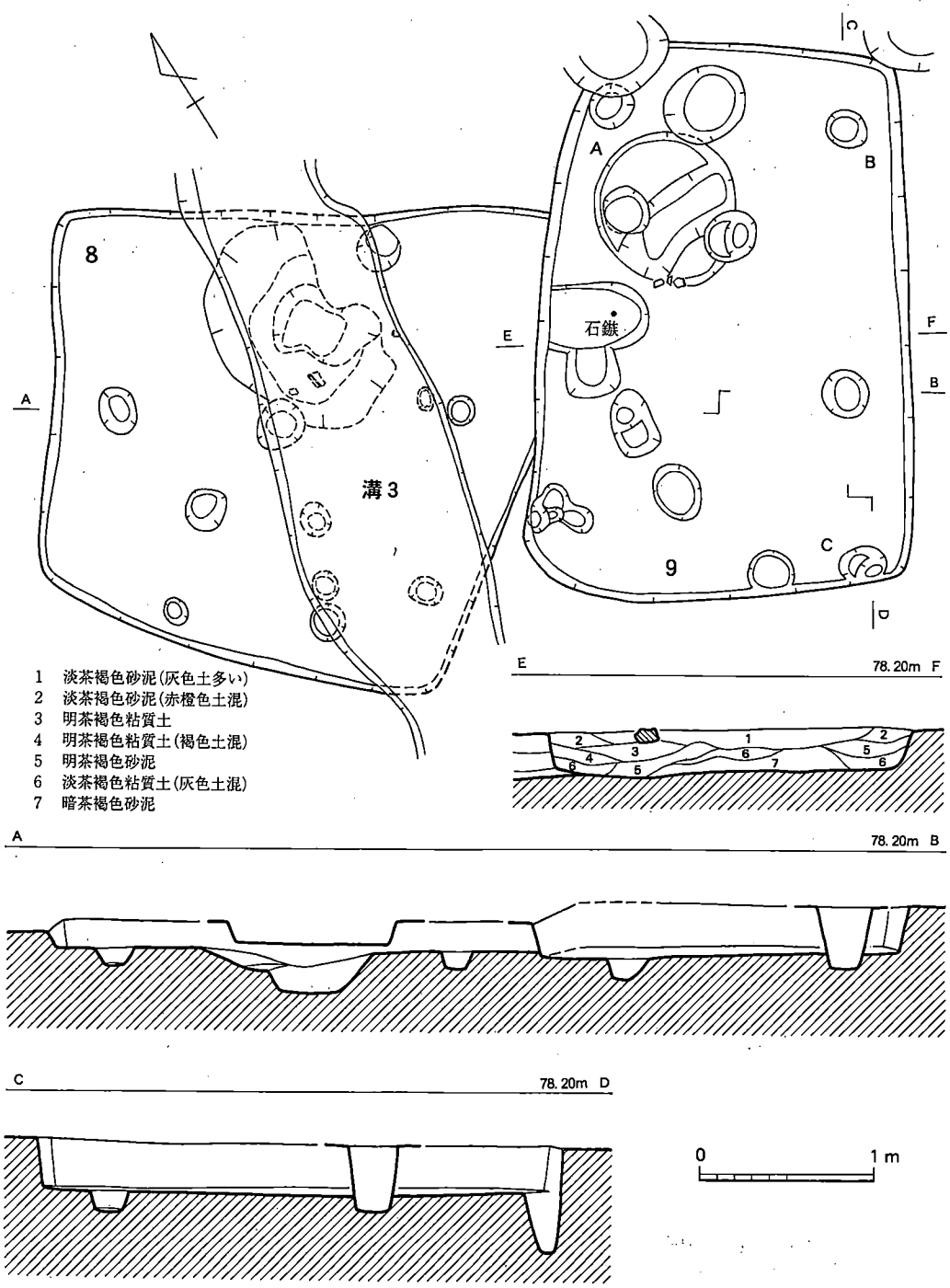
７号竪穴住居跡（図版70－(2)、第94図）

５号住居の北東隣に位置する竪穴住居跡で、付図で示したように25号・31号・32号住居と重複しており、31号・32号は当初確認できず２回目の掘り下げで検出した住居である。新旧関係は７号→25号→32号→31号の順で当該住居が最も新しい。

住居の平面形態は長方形で、この住居より古い25号も長方形である。規模は小さく、長辺が2.35m・2.80m、短辺は2.00m・2.20m、深さは15cm前後を測る。支柱穴ははっきりしないが、西壁沿いのＡ－Ｂ（Ｂ′）の２本が相当し、おそらく４本柱で支えていたと思われるが、対峙する２本が検出できていない。Ａ－Ｂの柱間は1.45m、Ａ－Ｂ′は1.55mである。また、東壁に接する形で焼土が薄く床面に堆積しており、検出状況からこの場で火を使っていたのは確実



第94図　二十谷７・25号竪穴住居跡実測図(1/40)



第95図　二十谷８・９号竪穴住居跡実測図(1/40)

であるが、周囲の焼痕が著しくないことから短期間の使用であったと考えられ、位置的なことから炉としての使用ではなかろう。

出土遺物は土器の小片（不図示）がある。

8号竪穴住居跡（図版71－(1)、(2)、第95図）

Ⅱ区7号住居の北隣に位置する竪穴住居跡で、重複関係にある遺構は9号住居・3号溝である。新旧関係は溝が中世頃の所産で最も新しく、当該住居が最も古い。住居の平面プランは歪な方形を呈し、東壁側がやや幅広になる。規模は西壁・南壁で2.10m・2.40m、壁高は15cm前後を測る。

床面上には数個の柱穴はあるものの、規則的なピットはなく、支柱穴がはっきりしない。北壁際には不整形の擂鉢状の掘り込みがあり、中から縄文晩期の土器片が若干出土している。その他出土遺物としては磨石がある。

9号竪穴住居跡（図版71－(1)・(2)、第95図）

8号住居の東壁の一部を破壊し、1号掘立柱建物の隅柱と若干重複する竪穴住居跡である。平面形状は小形の長方形で、長辺は3.00m、短辺は1.70m・2.20m、壁高は30cmを測り、住居群の中では遺存状態がよい。支柱穴は住居の隅に配置されたA－Cの柱穴が考えられるが、もう1本が不明である。各柱間は、A－Bが1.40m、B－Cが2.50mである。

住居内の覆土は殆どが茶褐色系の土で埋まり、最下層の7層（暗褐色砂泥）がやや盛り上がり不自然な堆積をしているが、その他は自然堆積を示している。

出土遺物は深鉢片の他、サヌカイト製の石鏃がある。

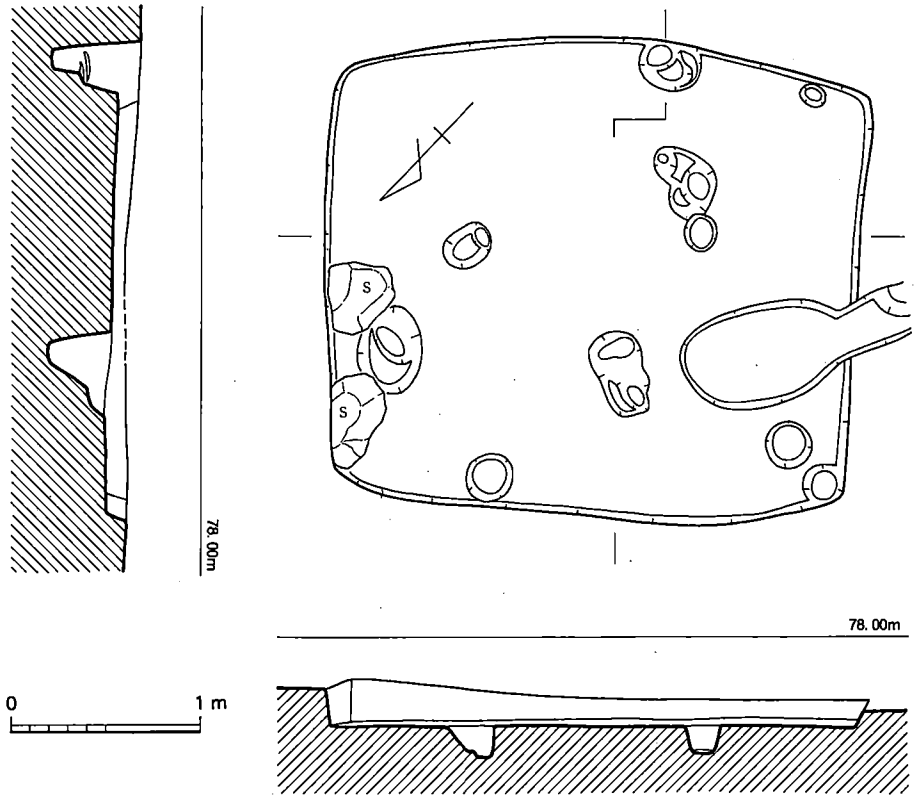
10号竪穴住居跡（図版71－(1)・(2)、第96図）

8号の北西隣に接する形で検出した竪穴住居で、他の主だった遺構との重複はない。住居の平面プランは方形に近い形状をなし、その規模はやや長い辺が2.70m・2.80m、もう一方の辺が2.20m・2.15m、壁高は東側が残りがよく20cmで整った形の住居である。床面にはピットはあるものの支柱穴になり得るような規則的に配置されたピットは見あたらない。また東側の壁際には2個の地山石が壁に嵌入している。

出土遺物はない。

11号竪穴住居跡（図版71－(2)・72－(1)、第97図）

当該住居の周辺もかなり遺構が錯綜しており、この住居をあわせて4軒の住居跡の重複があり、直接の重なりは3軒である。新旧関係は12号・15号→11号→14号の順である。また、8号



第96図　二十谷10号竪穴住居跡実測図(1/40)

住居と重なる新しい３号溝が続くはずであるが、溝の遺存状態が悪く当該住居付近では東壁の一部が削平されているが大半は消滅している。

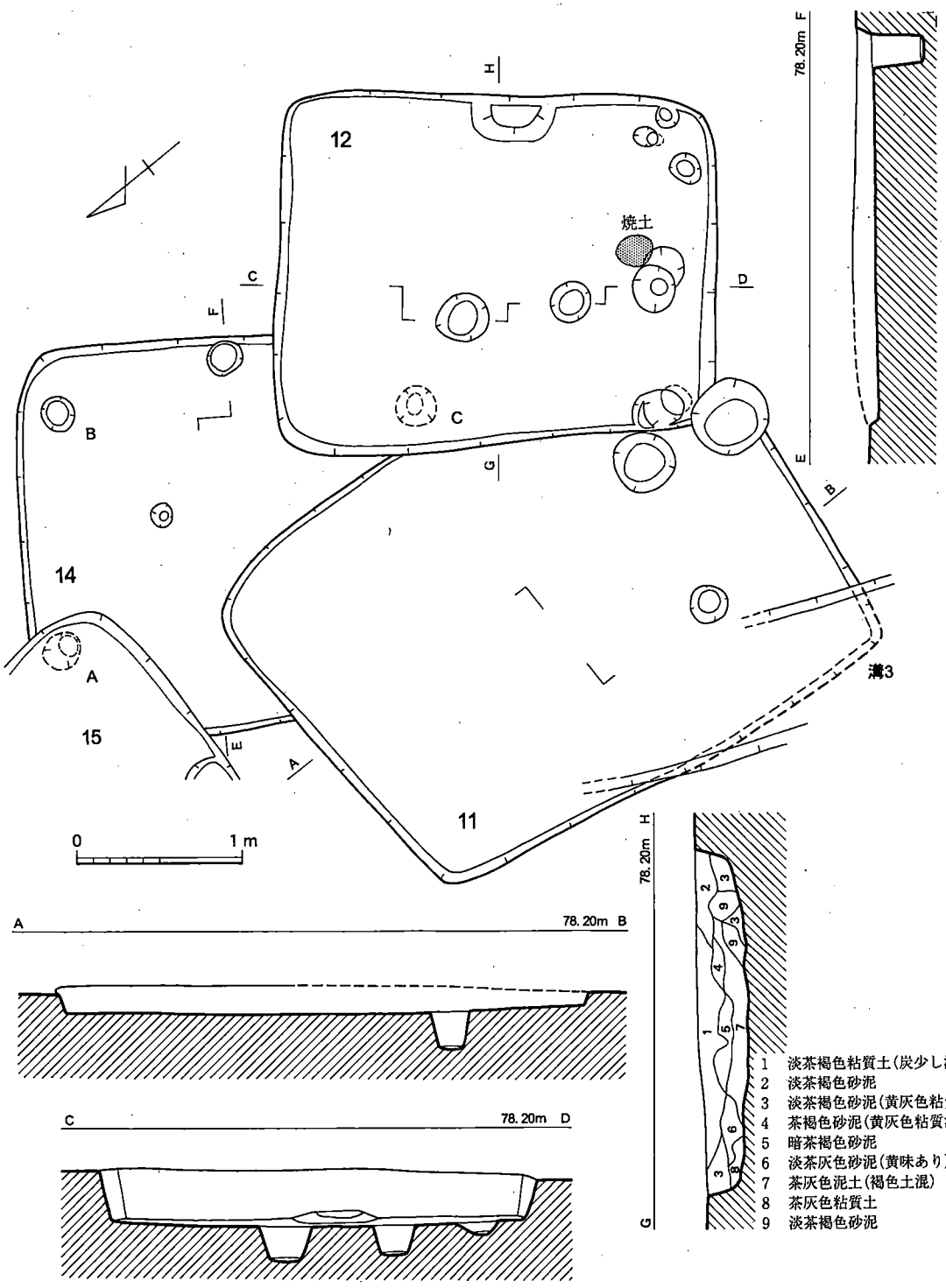
住居は長方形の平面形態をなし、北と東壁の辺長は2.20m・3.05m、壁高は10cmを測る。支柱穴は東側床面のピットがそのひとつであろう。その他詳細は不明である。

出土遺物は皆無である。

12号竪穴住居跡（図版71－(1)・(2)・72－(1)、第97図）

11号・14号住居よりは新しいが、直接重複関係にない15号住居との新旧は分からない。平面形状が整った長方形をなし、その規模は長辺が2.65m・2.55m、短辺が2.05m・1.90m、壁高は住居群では残りがよく30cmを測る。

支柱穴ははっきりしないが、西南壁沿いの１本のピットがその可能性がある。また、南側の短辺側の床面には、直径が20cm、厚さが2.3cmの焼土が薄く残っており、炉跡の可能性を残し



第97図　二十谷11・12・14号竪穴住居跡実測図(1/40)

ている。さらに、東側長辺壁の中央には、土層図でも分かるように黄灰色の砂泥の混ざった淡茶褐色粘質土で小さな高まりを付設しており、設置場所から出入り口の可能性がある。住居内の覆土は自然堆積を示し、茶褐色系の砂泥と粘質土が埋まっていた。

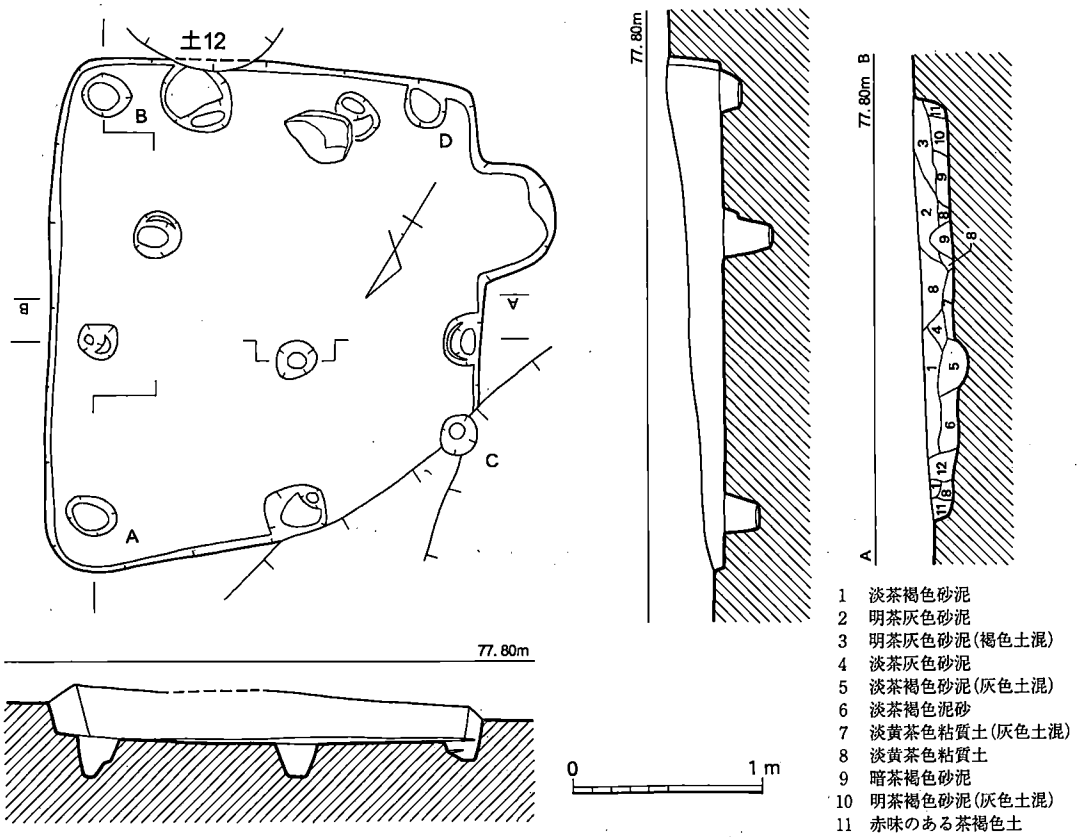
出土遺物は浅鉢片と焼土塊がある。

13号竪穴住居跡（図版72－(1)、第98図）

10号住居の北隣で検出した竪穴住居跡で、Ⅱ区からⅢ区にかけての段落ちで壁の一部が破壊されている。南壁の一部が12号土壙と重なり土壙の方が新しい。平面プランは方形で、住居の規模は東壁で2.70m・南壁で2.10m、深さは南側で30cm弱を測る。支柱穴は床面の四隅にやや規則的なA－Dのピットがあるが、深さがまちまちである。

住居内の覆土の堆積状態をみると小さなブロック状で茶褐色系の土が不自然な埋まり方を示している。故意に埋められた可能性を残している。

出土遺物は黒曜石の剥片がある。



第98図　二十谷13号竪穴住居跡実測図(1/40)

14号竪穴住居跡（図版72－(1)、第97図）

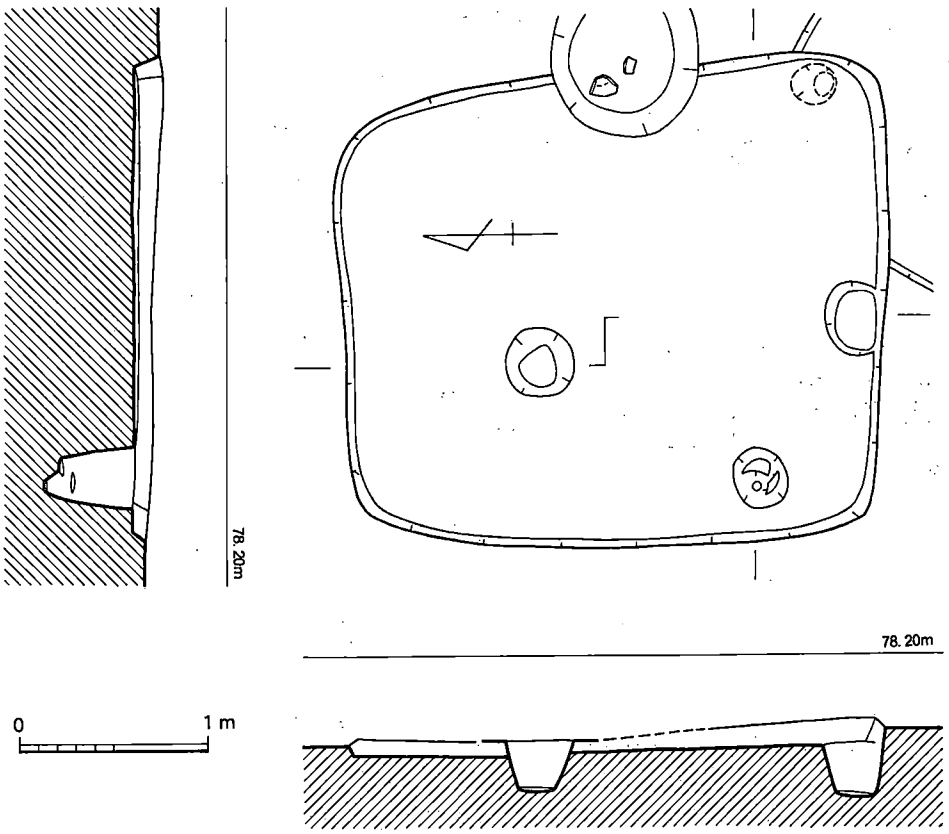
11号・12号・15号の３軒の住居と重複する竪穴住居跡で、すべての住居より古い。住居の形状は重なりが激しく不明である。支柱穴は12号・15号の床面上にあるピットと東隅の柱穴とが規則的な配置を示し、11号内での検出はないものの、本来は４本柱であった可能性が強い。各柱間はＡ－Ｂが1.40m、Ｂ－Ｃが2.20mを測る。

出土遺物は自然石を利用した石錘がある。

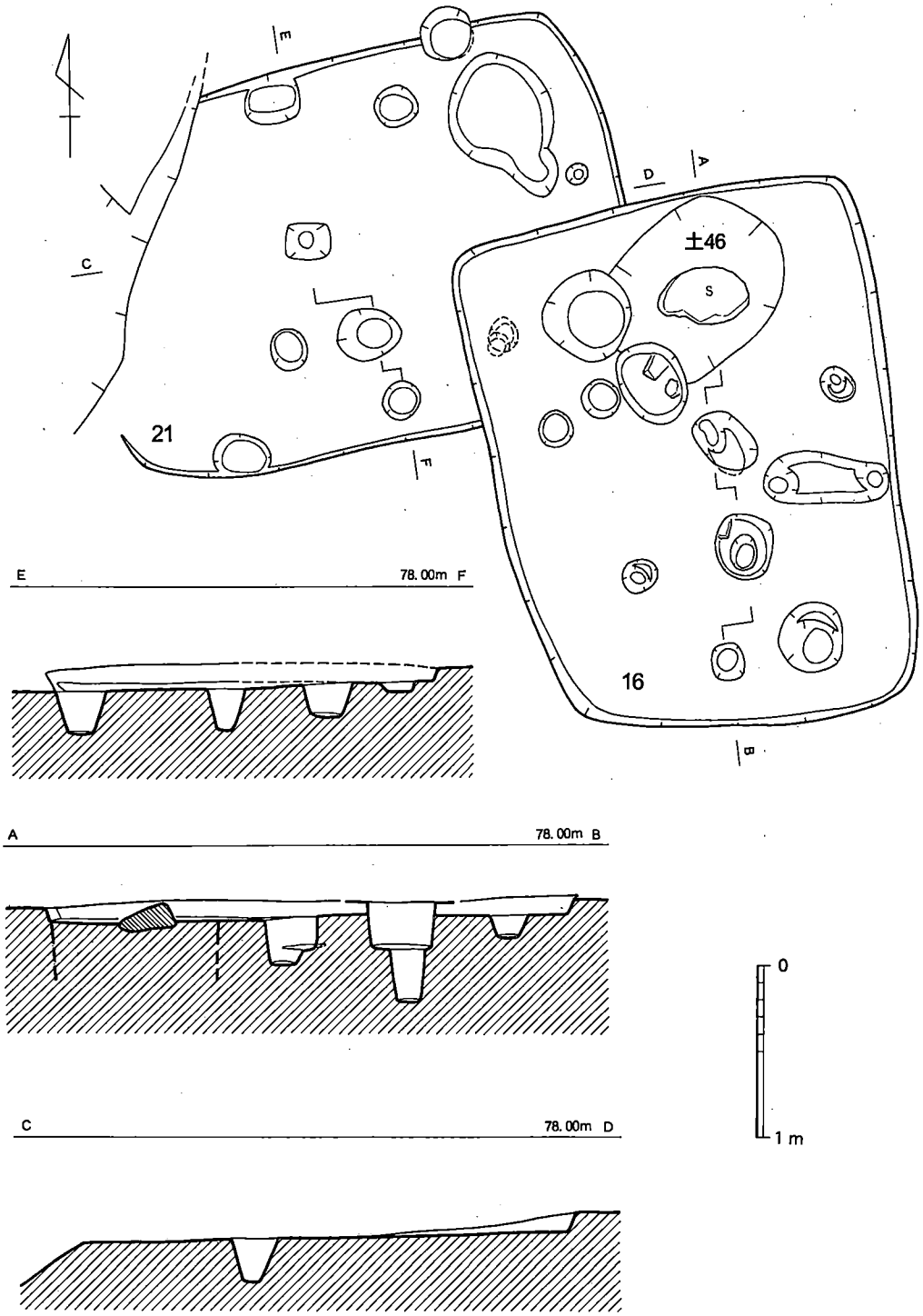
15号竪穴住居跡（図版71－(1)・72－(1)、第99図）

13号住居の東側に位置し、14号住居の北壁を破壊し、溝１に北壁を切られた状態で検出した竪穴住居跡である。東壁は一部円形の土壙様のピットに壊されている。平面プランは歪な方形を呈し、その規模は南・北壁が2.05m・2.40m、東・西壁が2.90m・2.70m、深さは10cm前後を測る。床面には規則的な柱穴はなく支柱が不明である。

出土遺物はない。



第99図　二十谷15号竪穴住居跡実測図(1/40)



第100図　二十谷16・21号竪穴住居跡実測図(1/40)

16号竪穴住居跡（図版72－(2)・73－(1)、第100図）

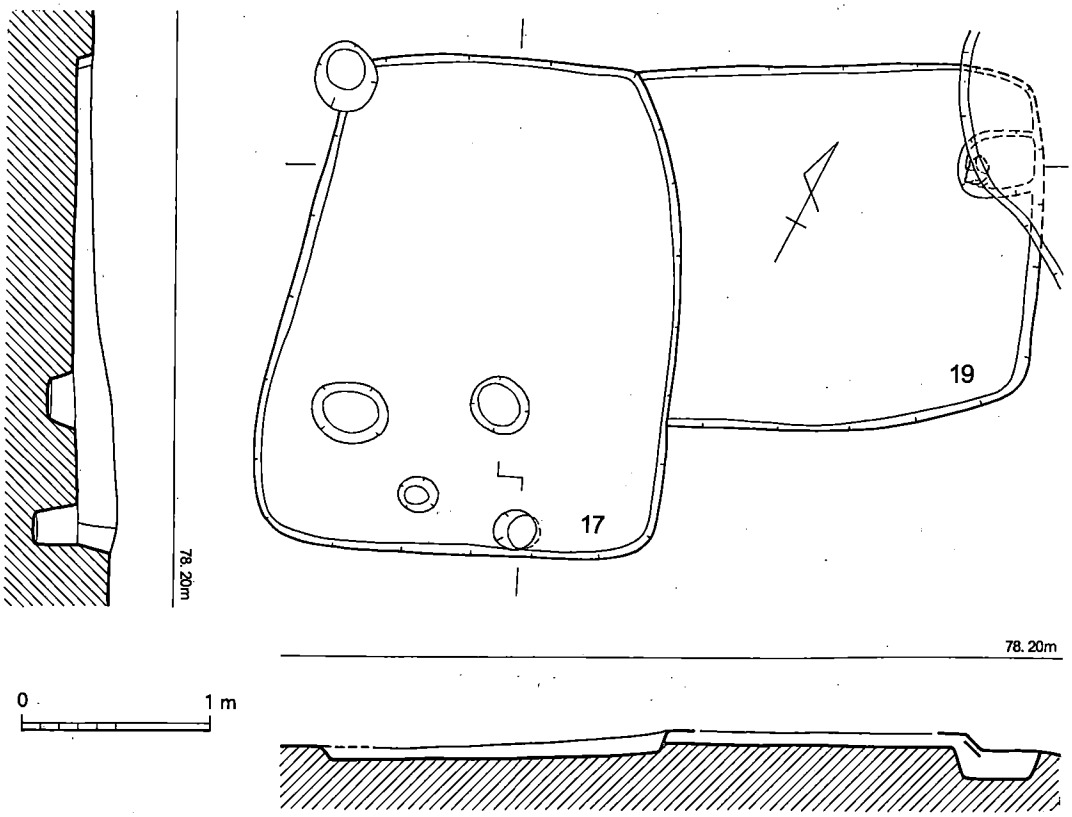
Ⅱ区の北西隅で検出した竪穴住居跡で、21号住居と３号掘立柱建物、46号土壙との重複があり、21号よりは新しく掘立柱建物よりは古いが、土壙との関係は捉えていない。平面形態は長方形で、住居の規模は東・西壁で3.00m・2.80m、南・北壁は1.90m・2.40m、壁高は10cmほどである。柱穴には規則的に並ぶものはない。床面の北側には地山石が床面に嵌入した状態で検出されたが、石塊下には深さ45cmの土壙（46号土壙）の掘り込みがある。

出土遺物は焼土塊がある。

17号竪穴住居跡（図版72－(2)、第101図）

19号・30号住居と３号掘立柱建物、溝１と重複した竪穴住居跡で切り合った住居跡では最も新しい。平面プランは歪な長方形を呈し、その規模は、南・北壁で2.10m・1.55m、東・西壁は2.55m・2.50m、壁高は残りのよい箇所で20cmを測る。床面上のピットは南側に片寄っているが支柱か否かははっきりしない。

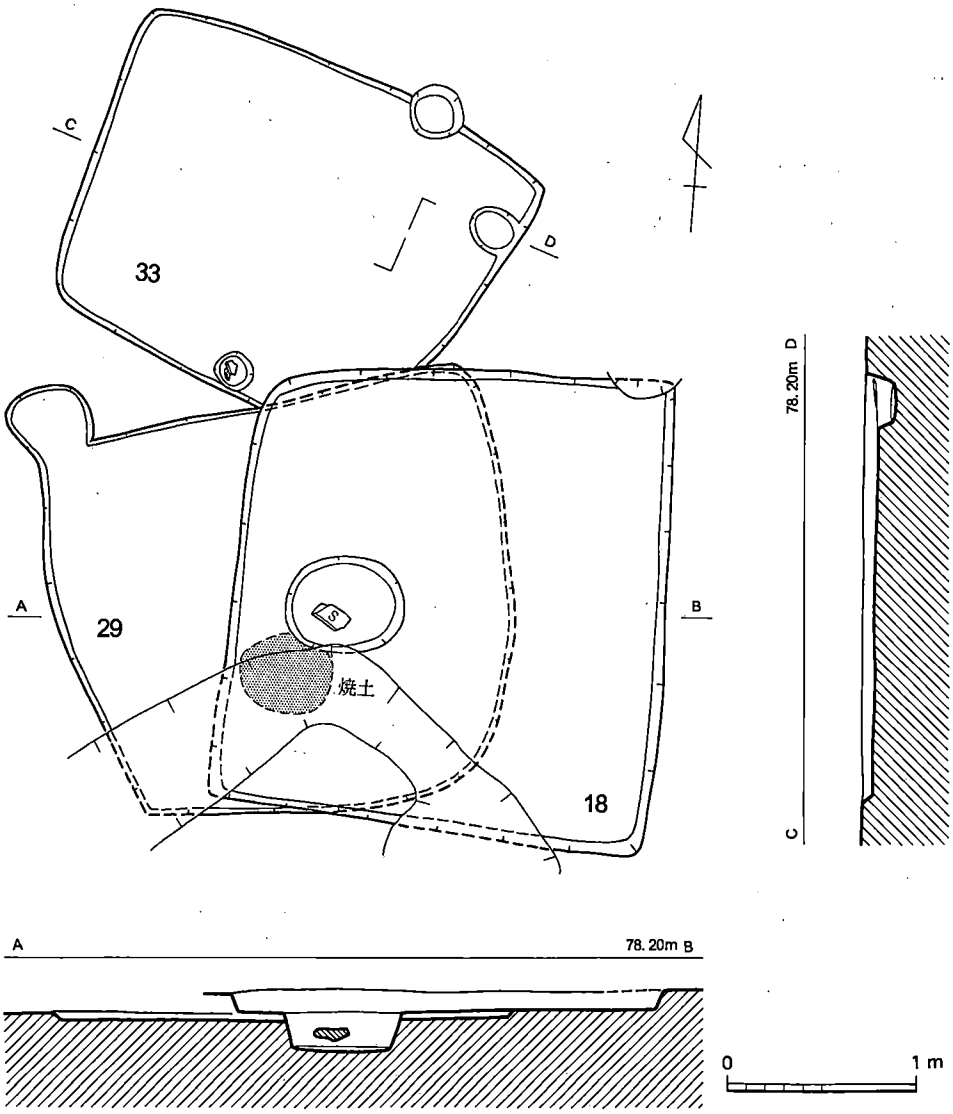
出土遺物はない。



第101図　二十谷17・19号竪穴住居跡実測図(1/40)

18号竪穴住居跡（図版73－(2)、第102図）

Ⅱ区の中央付近で検出した竪穴住居で、29号・33号住居と重複し両者の住居より新しい。住居の南側はドーナツ形の撹乱で一部破壊されている。住居の平面プランは方形で、規模は東・西壁で2.50m・2.20m、南・北壁では2.30m・2.15m、壁高は10cmを測る。床面上には柱穴は検出できず、西側には円形状のピットがあり中から石塊が出土したが、住居に伴うか否かははっきりしない。出土遺物は浅鉢片がある。



第102図　二十谷18・29・33号竪穴住居跡実測図(1/40)

19号竪穴住居跡（図版72－(2)、第101図）

Ⅱ区の北側で検出した竪穴住居跡で、当該住居を含めて17号・30号・18号土壙・溝１の５遺構の重複がある。新旧関係は18号土壙・溝１→17号住居→19号住居→30号住居の順で、30号住居は２回目の遺構検出で確認したものである。

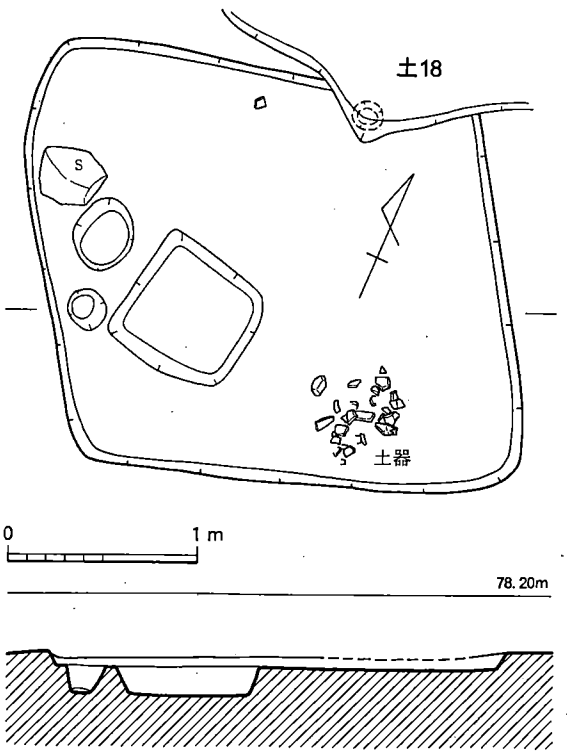
西側の壁が17号住居に完全に破壊されているが、現状での形状から看ると長方形のプランになると思われる。東壁辺は1.65m、壁高は5.0cmを測り残りは悪い。床面上にはピットらしきものはなく、東壁沿いに小さな土壙様の掘り込みがあり、中に落ち込んだように土器が確認された。土器は珍しい低い高台のついた鉢形土器である。

出土遺物はこの鉢の他、深鉢片がある。

20号竪穴住居跡（図版72－(2)・76－(1)、第103図）

19号住居の東隣で検出した竪穴住居跡で、18号土壙→20号住居→30号住居の順で重なりあっている。住居の平面形状はやや歪な方形を呈し、東・西壁が2.00m・2.20m、南・北壁は2.35m・2.25m、深さは5.0cm前後を測る。西側の床面には方形の土壙様の掘り込みがある。支柱穴は不明で、西壁沿いにあるピットがその内の１本かも知れない。

出土遺物は南側の床面上に散在しており、鉢類などがある。



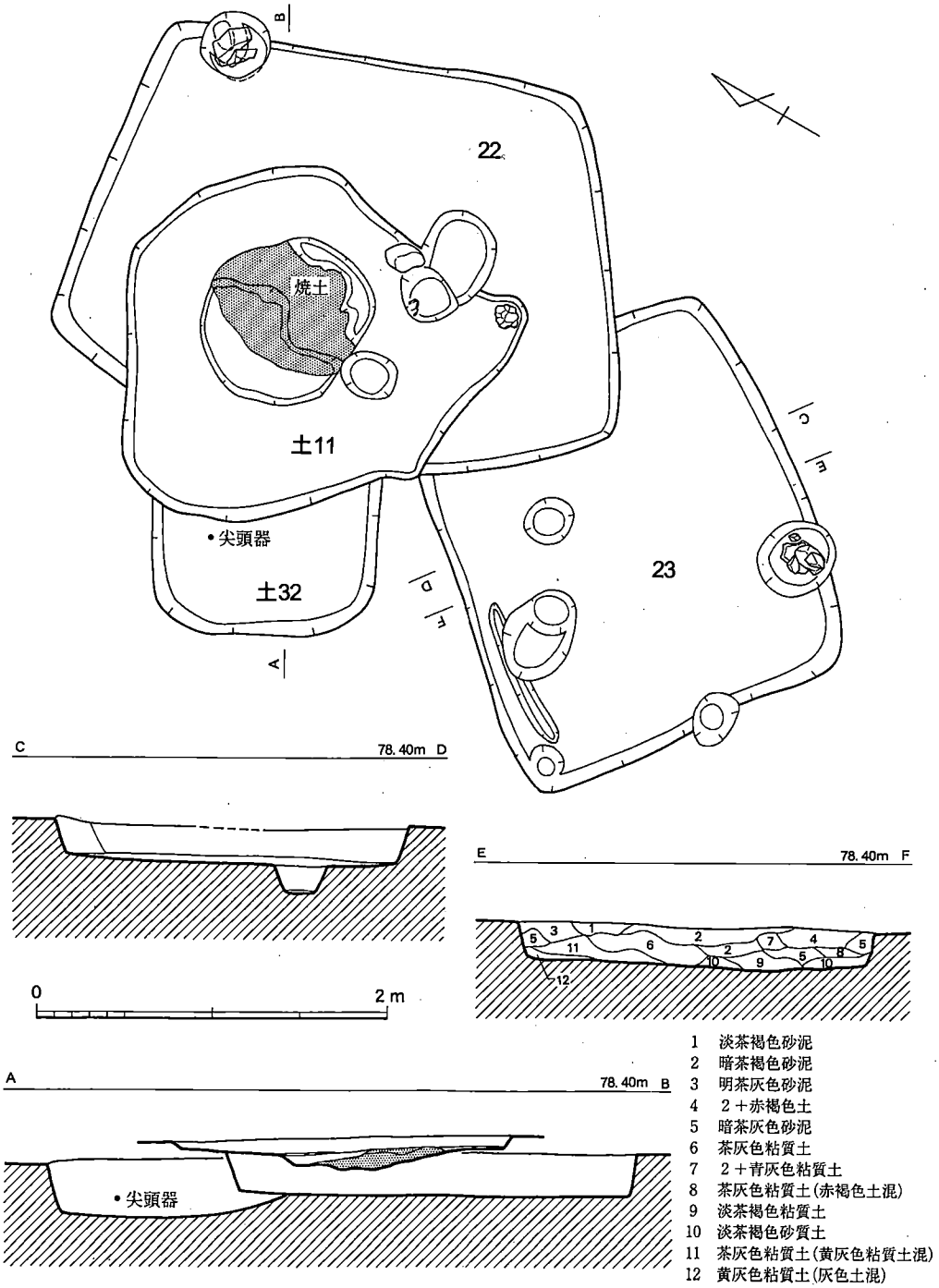
第103図　二十谷20号竪穴住居跡実測図(1/40)

21号竪穴住居跡（図版72－(1)、第100図）

16号住居・３号掘立柱建物と重なり、いずれよりも古い竪穴住居跡で、西壁の大半は耕作の段落ちで削平されている。

住居の平面プランは長方形で、規模は西側の削平と16号住居の重なりで計測できない。壁高は東側壁沿いで10cmを測るが、西側は殆ど遺存していない。床面上には数個のピットがあるが規則的なものはなく、支柱がはっきりしない。

出土遺物はない。



第104図　二十谷22・23号竪穴住居跡、11・32号土壙実測図(1/40)

22号竪穴住居跡（図版74－(1)・(2)、第104図）

Ⅱ区の中央付近で検出した竪穴住居跡である。4遺構が重複しその新旧関係は1号掘立柱建物・11号土壙→22号住居→23号住居→32号土壙の順で、11号土壙は著しい焼痕があり、1号掘立柱建物が鍛冶関連の遺構とすれば両者は関連がある可能性を残している。

現状での平面プランは歪な長方形を呈しているが、プランの確認時点で若干の誤認があったと思われる。このため規模については不正確であるが、現況では長辺が2.40m・3.30m、短辺では1.95m・1.90m、壁高は25cmを測る。支柱穴については規則的な配置はない。

出土遺物は深鉢底部片がある。

23号竪穴住居跡（図版74－(1)・(2)、第104図）

この住居の周辺は遺構が錯綜しており、当該住居を含めて7遺構が重なっている。その新旧関係は、1号・2号掘立柱建物→11号土壙→22号住居→23号住居→27号住居→28号住居の順である。

竪穴住居は北側の壁を22号住居に破壊されているが、平面形状は方形に近く、その大きさは東壁で2.20m、南壁は1.95m、壁高は20cmを測る。支柱穴は分からず、堆積した覆土は茶褐色系の粘質土と砂泥で埋まり自然堆積にしてはやや不自然さを残す。

出土遺物は浅鉢の底部がある。

24号竪穴住居跡（図版69－(1)、第89図）

検出した場所はⅢ区の西端で数基の遺構が錯綜している。周辺の状況から本来東側にも遺構が存在していたものが耕作で削平されたと考えられよう。住居は1号住居と重なり、東側の壁が破壊されている。

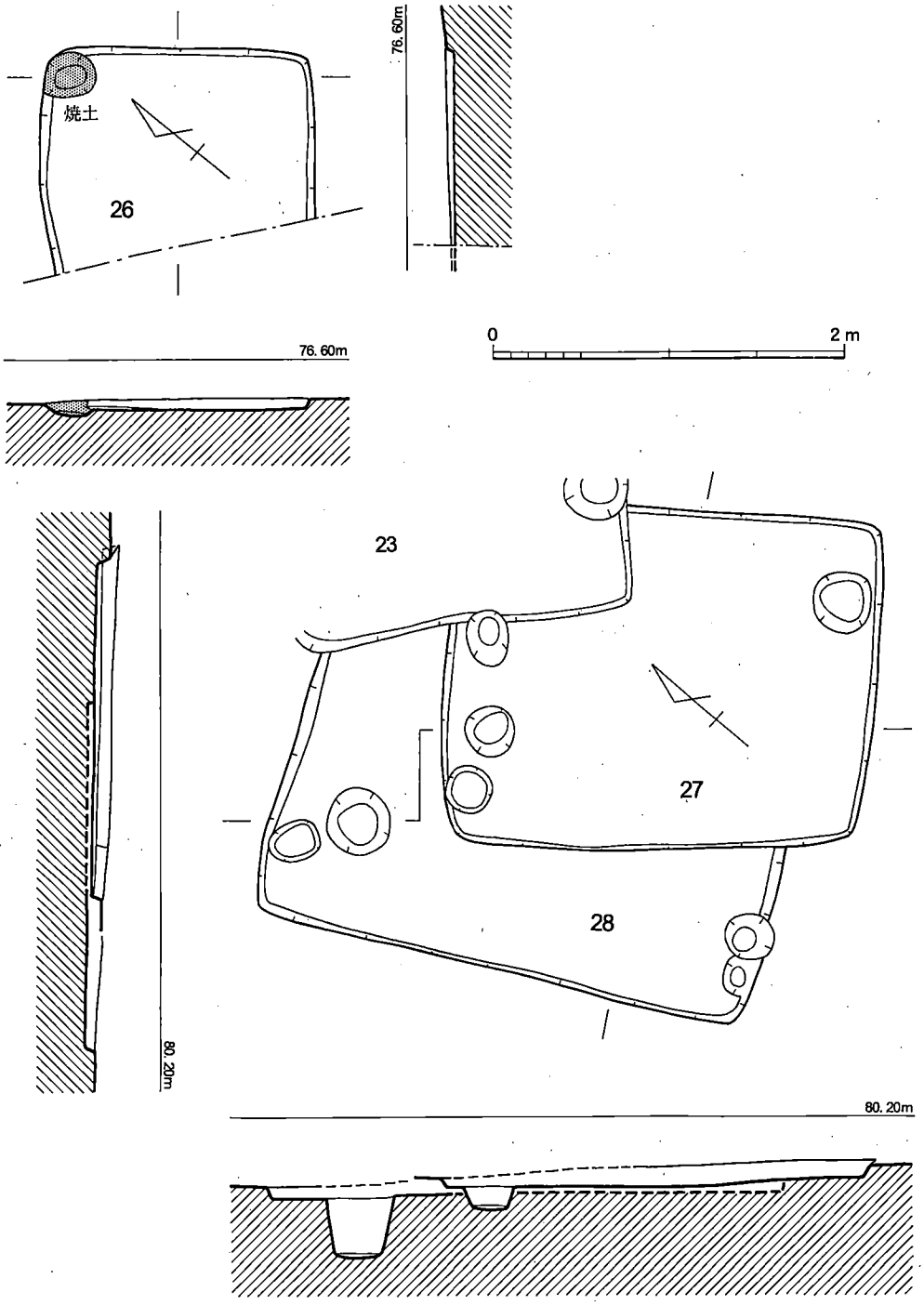
住居の平面形態はやや歪な方形を呈し、西壁辺は1.65m、南壁辺は2.00m、壁高は10cm前後を測る。南側の壁沿いには規則的に掘られたピットがあるが、支柱穴としてはやや浅く疑問が残る。因にその柱間はA－Bが0.8m、B－Cが0.95mである。

出土遺物はない。

25号竪穴住居跡（図版70－(2)・74－(1)、第94図）

7号住居→25号住居→32号住居→31号住居の順で重なりあう竪穴住居で、西壁を7号住居で完全に破壊されている。現状での観察は平面プランは長方形であろう。東壁辺は2.30m、深さは10cmを測る。支柱穴は不明瞭であるが、東壁沿いのピットがその内の1本に相当するかも知れない。

出土遺物は皆無である。



第105図　二十谷26～28号竪穴住居跡実測図(1/40)

26号竪穴住居跡（図版69－(2)、第105図）

Ⅲ区の西側にある２号住居の南隣に位置する竪穴住居跡で、約1/2を検出したが西半分は耕作の段落ちで削平されている。

平面形状は長方形と思われるやや小形の竪穴住居跡で、東壁辺は1.45m、壁高は5.0cm弱と遺存状態は悪い。床面の北隅には浅いピットが掘られ、内部には焼土が詰まっていた。

出土遺物はない。

27号竪穴住居跡（図版74－(2)、第105図）

１号・２号掘立柱建物→23号住居→27号住居→28号住居の順で重なり合う竪穴住居跡で、北東側は23号住居で破壊され、南東側の壁は耕作により一部撹乱を受けている。

住居の平面形態は長方形を呈し、南側の短辺は1.75m、西側は2.30m、壁高は10cmを測る。床面にはピットはあるものの支柱穴にはなりえない。

出土遺物はない。

28号竪穴住居跡（図版74－(2)、第105図）

重なりのある３軒の竪穴住居の内で最も古い住居である。重複により約1/2しか遺存していないが３軒の内では規模が大きい。

平面形状は方形と思われ、西壁辺は2.80m、壁高は５cmを測り遺存状態は悪い。また、支柱穴もはっきりしない。

出土遺物は皆無である。

29号竪穴住居跡（第102図）

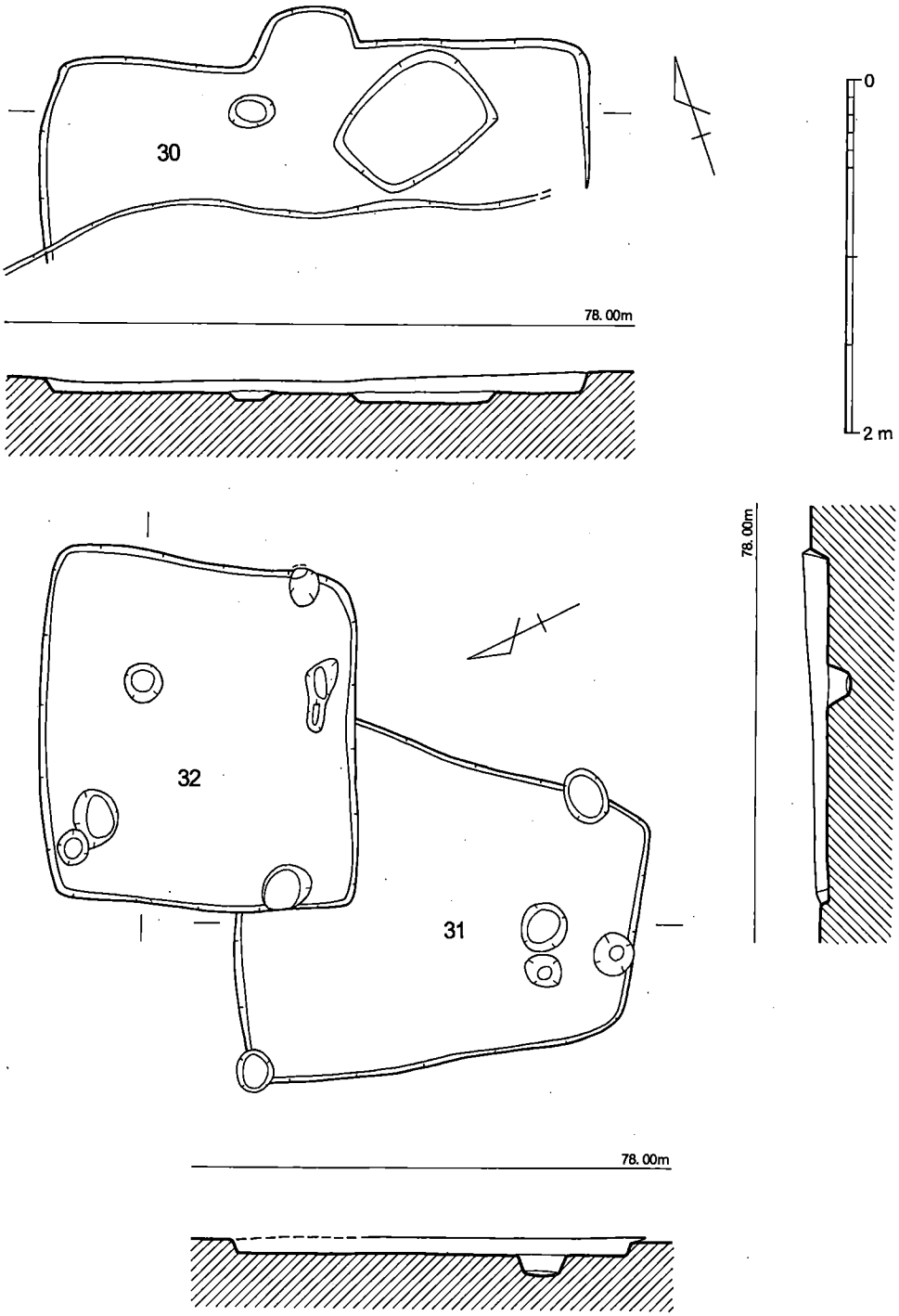
２回目の遺構検出で確認した竪穴住居跡で、３軒の住居が重なり合っている。その新旧は18号住居→29号住居→33号住居の順で、南側は後世の撹乱で破壊されており、住居の約1/2が18号で破壊されているが床面が若干深いため僅かに残っている。

住居の平面プランは方形で、壁高が5.0cmと浅い。出土遺物はない。

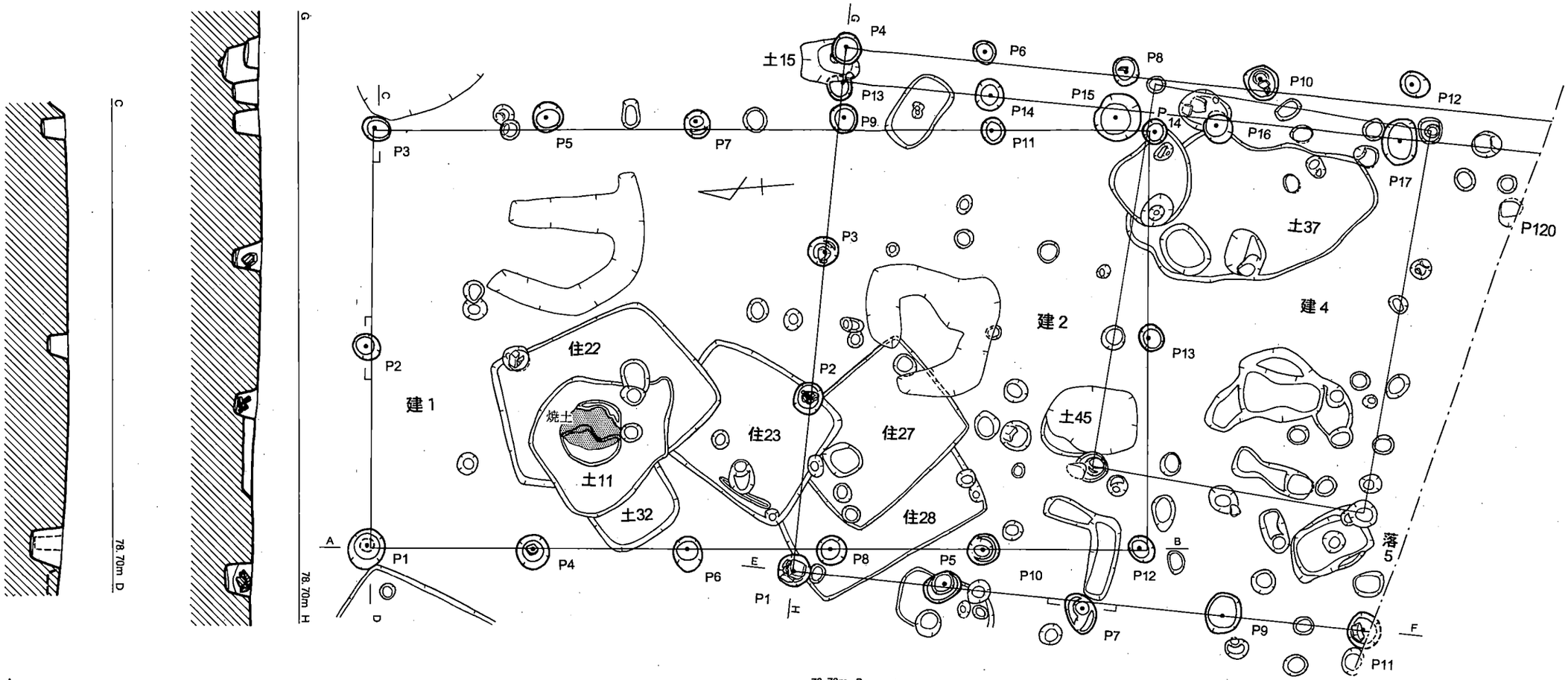
30号竪穴住居跡（第106図）

この住居も２回目の遺構検出で確認した住居である。17号・19号・20号住居に大半が破壊され、南側は18号土壙を取り巻く浅い１号溝に壊されている。しかも、18号土壙にも切られ僅かに遺存しているに過ぎない。

北壁辺は3.0m、壁高は10cm弱を測る。出土遺物はない。



第106図　二十谷30～32号竪穴住居跡実測図(1/40)



第1表　1号掘立柱建物計測表　(単位cm)

梁間柱間		梁間	桁行柱間					桁行間
P1-P2 300	P2-P3 330	P1-P3 630	P1-P4 250	P4-P6 230	P6-P8 210	P8-P10 230	P10-P12 230	P1-P12 1150
――	――	P4-P5 650	――	――	――	――	――	P2-P13 1160
――	――	P6-P7 640	P3-P5 250	P5-P7 220	P7-P9 220	P9-P11 220	P11-P14 240	P3-P14 1150
――	――	P8-P9 650						
――	――	P10-P11 630						
P12-P13 320	P13-P14 310	P12-P14 630						

第2表　2号掘立柱建物計測表　(単位cm)

梁間柱間		梁間	桁行柱間					桁行間
P1-P2 260	P2-P3 220	P3-P4 310	P1-P4 790	P1-P5 230	P5-P7 210	P7-P9 210	P9-P11 210	――
――	――	――	P5-P6 800	P4-P6 210	P6-P8 210	P8-P10 200	P10-P12 220	――
――	――	――	P7-P8 800					
――	――	――	P9-P10 810					
――	――	――	P11-P12 820					

第107図　二十谷1・2号掘立柱建物実測図(1/80、1/40)

31号竪穴住居跡（図版74－(2)、第106図）

7号・25号・32号住居との重なりの中で最も古い竪穴住居跡で、この住居も2度目の遺構検出で確認した。住居の壁が高いため大半が重複しているにも拘らず10cmの深さを測る。

平面形状は歪な長方形で北側が広くなる。西壁辺は2.15m、南壁は1.20mを測る。この住居も他と同様支柱穴が不明瞭である。

32号竪穴住居跡（図版74－(2)、第106図）

31号住居の北壁と重なった状態で検出した竪穴住居跡で、平面プランはやや歪な方形を呈する。その規模は、東・西壁が1.65m・1.70m、南・北壁1.85m・2.00m、壁高は10cm前後を測る床面上にはピットはあるものの、支柱穴になり得るものではない。

出土遺物は皆無である。

33号竪穴住居跡（第102図）

18号・29号住居と南壁の隅が重複し、両者よりも古い竪穴住居跡である。また、西壁の一部は「U」字状の撹乱で破壊されているが全容は分かる。

平面形状は長方形に近く、西壁は1.60m、北壁辺は2.30m、壁高は10cm弱と浅い。支柱穴は分からないが、南壁沿いのピット内から図示不可能な土器の小片が出土している。

2　掘立柱建物

1号掘立柱建物（図版75－(1)、第107図）

Ⅱ区の中央付近で検出した大形の掘立柱建物で、2号・4号掘立柱建物を除く検出した竪穴住居や土壙などのすべての遺構よりも新しい。しかし、掘立柱建物の内部に位置する11号土壙とは直接的な切り合いはないが、土壙の内部に著しい焼痕があることと2号掘立柱建物の柱穴内や周囲から鞴羽口が出土していることを考慮すれば、両者の遺構は同時併存の可能性があり、小鍛冶関連の施設と考えることができよう。1号掘立柱建物と2号・4号掘立柱建物との新旧関係は柱穴に直接の重複がないため明らかではない。

掘立柱建物の規模は梁間2間、桁行間5間で各柱間は計測表で示したように、梁間が630cm～650cm、桁行柱間が210cm～250cmの範囲内を測り、柱穴自体もそお大きくない。建物の主軸は真北に対して4°東に振れている。

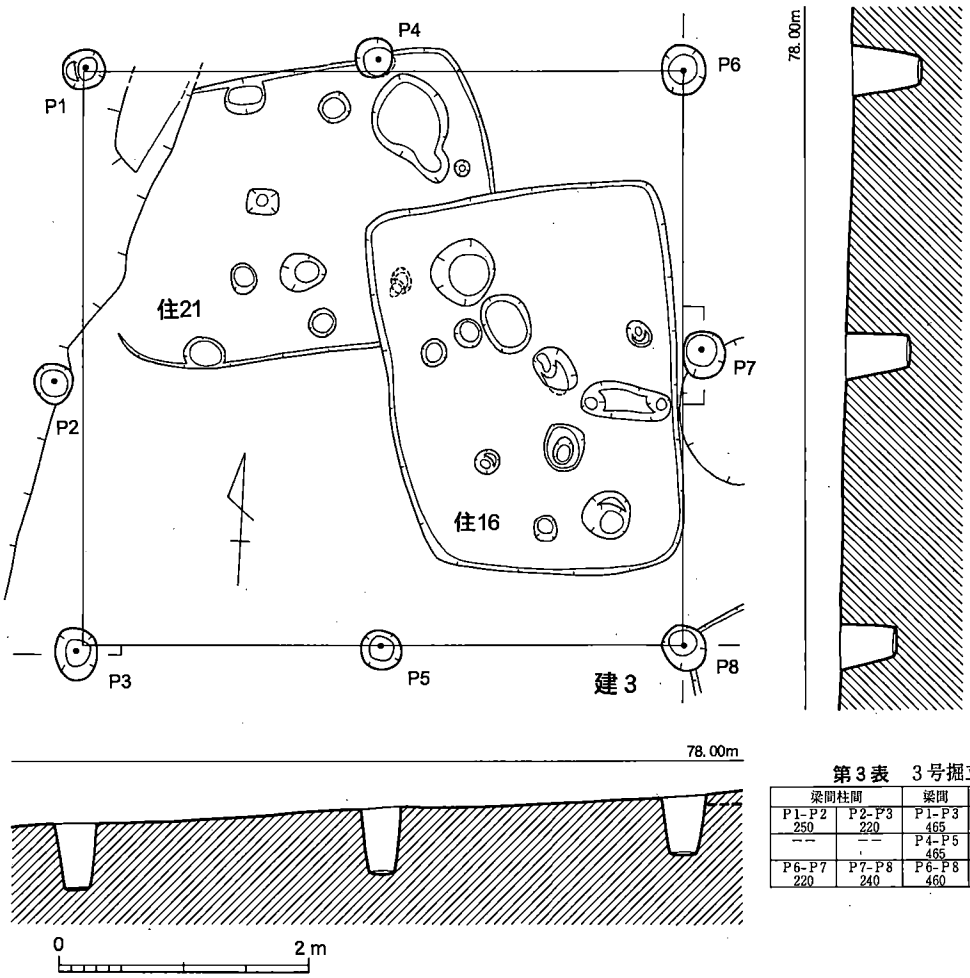
ピット内からは然したる出土遺物はないものの、P6の西傍のピットから糸切り底の土師器皿が出土していることから中世頃の所産と考えて大過なかろう。

２号掘立柱建物（図版75－(1)、第107図）

１号掘立柱建物と約1/2ほど、４号とは完全に重なった掘立柱建物で南側の梁間は耕作の段落ちで削平されているため桁行間は計測できない。北側の梁間は３間で、現状での桁行間は５間である。おそらくこの規模の建物と推測される。

東側の桁行間はＰ４－Ｐ12とＰ13－Ｐ17までが並列した形で柱穴が掘られており、各々の柱間が50cmと狭いことから庇とは考えにくい、建て直しが図られた可能性がある。Ｐ13－Ｐ17ラインとＰ４－Ｐ12ラインとは各柱間にばらつきがあり、Ｐ13－Ｐ14が220cm、Ｐ14－Ｐ15は190cm、Ｐ15－Ｐ16は150cm、Ｐ16－Ｐ17は270cmを測り規則性に乏しい。

またＰ１からＰ３とＰ14・Ｐ15・Ｐ17内からは上層や下層、あるいは柱穴いっぱいに石塊や



第３表　３号掘立柱建物計測表　(単位cm)

梁間柱間		梁間	桁行柱間		桁行間
P1-P2 250	P2-P3 220	P1-P3 465	P1-P4 230	P4-P6 250	P1-P6 480
――	――	P4-P5 465	――	――	P2-P7 520
P6-P7 220	P7-P8 240	P6-P8 460	P3-P5 245	P5-P8 245	P3-P8 490

第108図　二十谷３号掘立柱建物実測図(1/60)

石臼・鞴の羽口片が詰まっており、これらは礎盤としての用途は考えにくく、寧ろ柱を抜去した後に投げ込まれたと推測される。

この掘立柱建物も1号と同様小鍛冶に関連する建物と考えられるが、石臼が小鍛冶と関係する遺物か否かは分からない。

3号掘立柱建物（図版73－(1)、第108図）

Ⅱ区の北側で検出した掘立柱建物で、16号・21号住居と完全に重複し、25号土壙とも一部重なっておりいずれよりも新しい。規模は2間×2間でプランはほぼ方形であるが、柱間の数値は近似しているものの若干のばらつきがあり、柱軸が南北に対して東西が僅かながら長く棟を東西方向に向けていたと思われる。

この建物は、細い溝が囲繞している18号土壙の西側に隣接しており、土壙が鍛冶遺構に関連するものと考えれば、それに付随する施設の可能性がある。さらには、18号土壙と建物の南側に走り建物付近で削平され途絶える溝（この溝は2回目の遺構検出で確認したもの）と1号溝とに挟まれている。この溝はおそらく1号溝に繋がり、途中が削平されていると考えられることから、掘立柱建物・土壙・溝はひとつの関連遺構と捉えることができよう。南側の溝からも焼けた壁体の一部が出土している。

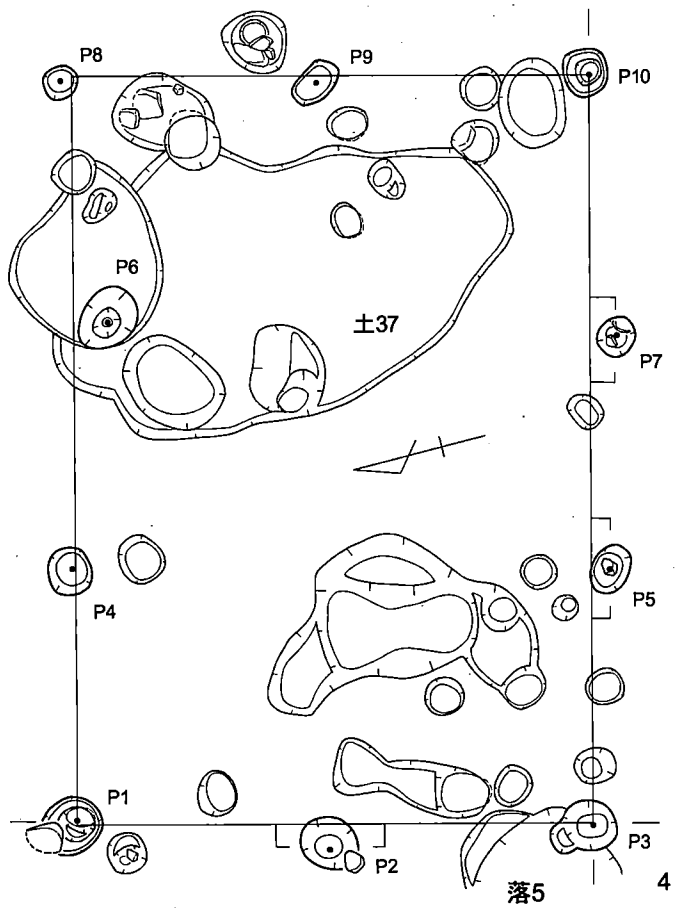
4号掘立柱建物（図版75－(1)、第109図）

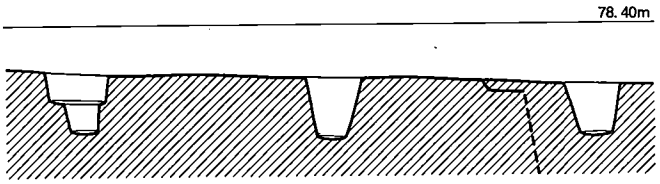
Ⅱ区の1号・2号掘立柱建物と重なりのあるやや小形の掘立柱建物で、発掘調査時点では確認しておらず整理時点で図上で確認した。掘立柱建物のピットの重複がないので新旧関係は分からない。この他、37号・45号土壙・5号落し穴と重なりこれらよりは新しい。

掘立柱建物の規模は、梁間2間、桁行間3間で各梁間・桁行間は数値にばらつきがあるが、個々の柱間は近似した数値を示している。建物の主軸は、1号・2号掘立柱建物とは棟を直交させ、その主軸方位はN76°Wを示す。重なる2軒の建物とは柱穴大きさや規模が異なり、これらとは時期が新しいのかも知れない。

3　土　壙

土壙については、1号～49号までの号数を付与したが、不定形な落ち込みや掘り込みまでが含まれており、不明瞭な部分があることから、図示したものは定形化した土壙か出土遺物のあるもので、ここでは図示したもののみ個別の説明をする。全体の配置は付図を参照されたい。





第4表 4号掘立柱建物計測表 (単位cm)

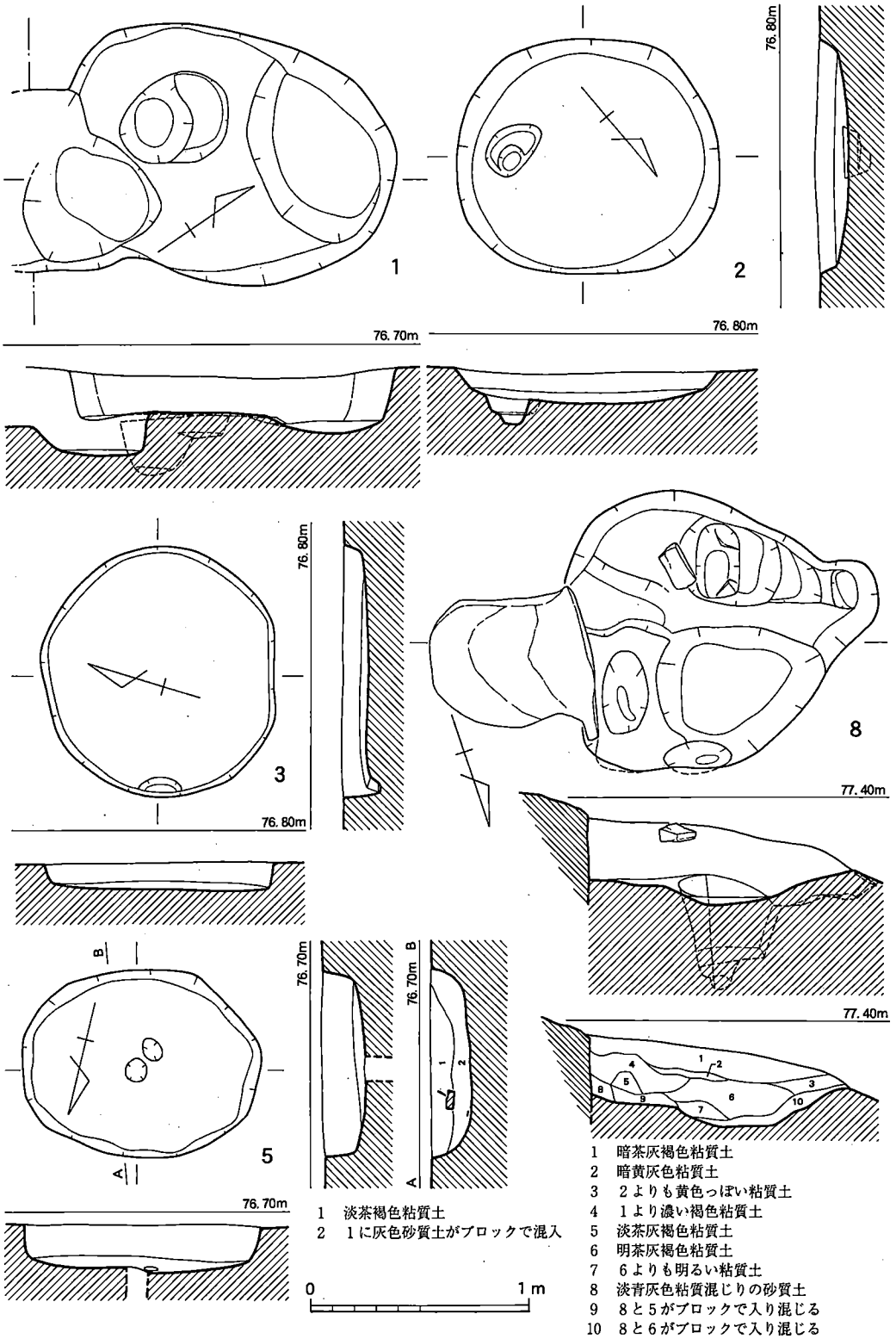
梁間柱間		梁間	桁行柱間			桁行間
P1-P2 200	P2-P3 210	P1-P3 405	P1-P4 195	P4-P6 195	P6-P8 195	P1-P8 580
――	――	P4-P5 425	――	――	――	P2-P9 600
――	――	P6-P7 400	P3-P5 200	P5-P7 185	P7-P10 205	P3-P10 590
P8-P9 200	P9-P10 215	P8-P10 415				

第109図 二十谷4号掘立柱建物実測図(1/60)

1号土壙（図版79－(1)、第110図）

Ⅲ区の南端で検出した土壙である。この周辺は土壙のみしか遺存しておらず、耕作で削平された結果、深く掘られた土壙のみが残ったのであろう。他の遺構との重複はないようであるが、調査区外に瓢箪形に延び2基の土壙が切りあっているかも知れない。

本体の平面プランは楕円形に近い形状で、長軸で1.60m、短軸で1.10m、深さは20cm前後である。床面のピットは伴うかどうかはっきりしない。出土遺物は浅鉢片と鉄滓がある。



第110図　二十谷1～3・5・8号土壙実測図(1/30)

2号土壙（図版79－(1)、第110図）

1号土壙の東側で検出した土壙で、平面プランが円形をなし、断面形は逆台形を呈する。土壙の規模は1.20m×1.05m、深さは15cm前後を測り、底は舟底状をなす。土壙の用途は分からない。

出土遺物は浅鉢の口縁小片がある。

3号土壙（図版79－(1)、第110図）

2号土壙の東側に位置する土壙で、1号～3号までがほぼ等間隔に並んでいる。平面形状は円形で、2号と同じような形状をなす。その大きさは1.03m×1.15m、深さは15cmを測る。底面はほぼ平らで、貯蔵穴が削平を受けたのかも知れない。出土遺物はない。

5号土壙（図版79－(1)、第110図）

3号土壙の北隣に位置する土壙で、平面形状が円形に近い。その大きさは1.08m×0.85m、現状での深さは20cmを測る。床面の中央には2個の小さなピットがあるが、落し穴の杭穴ではない様である。内部には茶褐色粘質土が自然堆積し、晩期の土器小片と黒曜石の剥片が出土している。土壙の用途は分からない。

8号土壙（図版79－(2)、第110図）

Ⅱ区とⅢ区との段落ち部分で検出した土壙で、落し穴を含め4基の土壙が並んで検出されたがお互いの重なりはない。土壙の平面形態は不整円形を呈し、東側は嵌入した地山石に接している。規模は南北軸が1.25m、東西軸が1.35m、深さは30cmを測る。床面上には深いピットが掘られ、南側のピットが一段と深い。内部の覆土は茶灰色系の土が自然堆積し、土壙の上層からは板石が出土しているが、用途がはっきりしない。

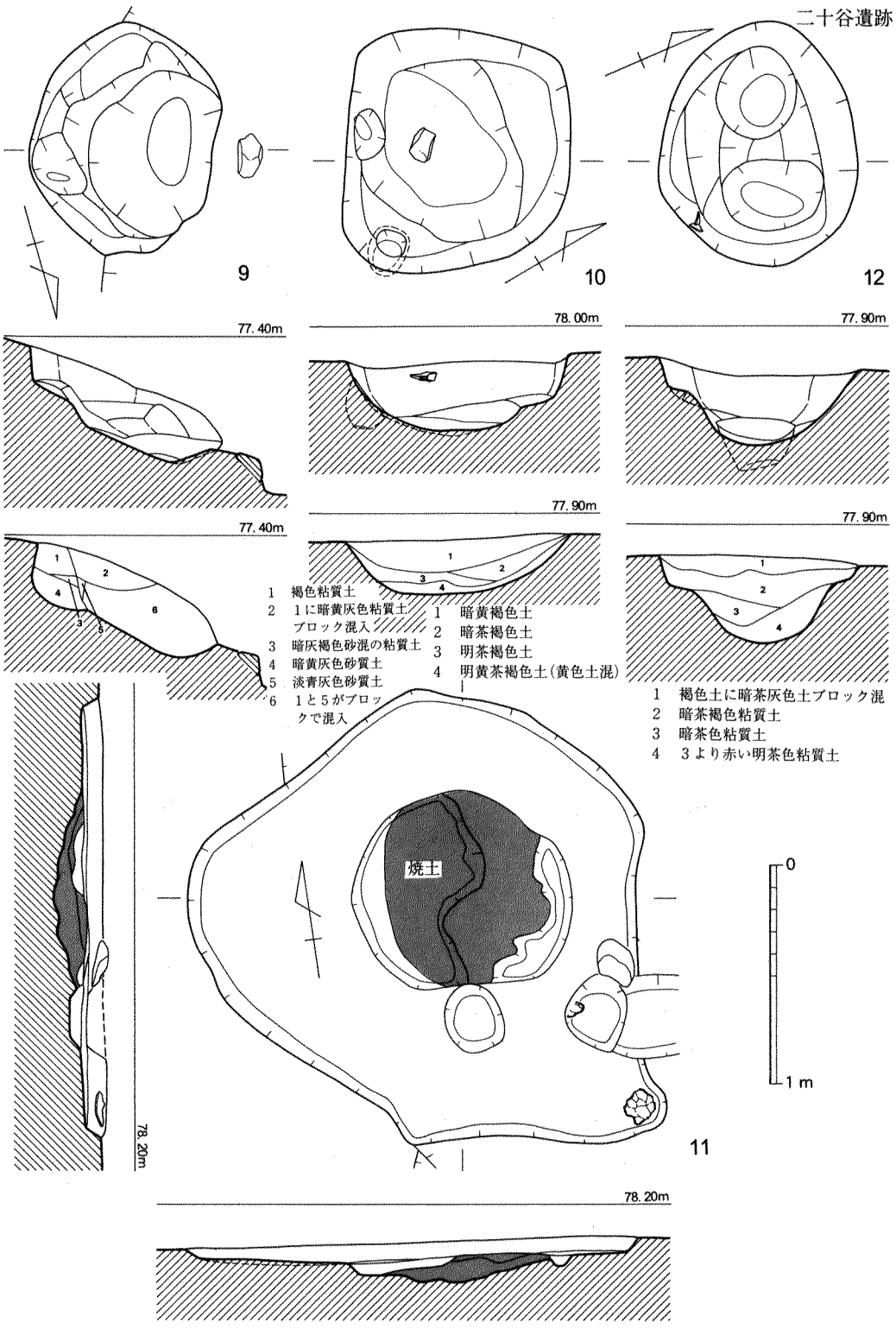
9号土壙（図版70－(1)、第111図）

8号土壙の北側で検出した土壙であるが、耕作の段落ちで一部削平されている。平面プランは不整円形で、底面は段状になる。南北軸は1.05m、東西軸は削られているが現状では0.8mである。内部は青灰色と褐色系の覆土が堆積し、覆土の色から縄文晩期の遺構ではないようだ。

出土遺物はない。

10号土壙（図版74－(1)、第111図）

Ⅱ区の住居の錯綜した狭間に位置する土壙で、他の遺構との重複はない、平面形態はやや歪な方形を呈し、底面は二段掘りとなる。その大きさは1.00m×0.9m、深さは30cmを測る。南



第111図　二十谷9～12号土壙実測図(1/30)

側の壁際には斜めに掘られた2個のピットがある。

覆土は茶褐色系で自然堆積状をなしていた。覆土の上層では1個の石塊が混入している他は然したる出土遺物はない。

11号土壙（図版71－(1)・74－(1)、第111図）

Ⅱ区の中央付近で検出した不整形の土壙であるが、重複する遺構としては、22号住居、32号土壙と1号掘立柱建物があり、住居・土壙より新しいが、1号建物とは直接の重なりがないためはっきりしないが、掘立柱建物の項で説明したように、土壙内に著しい焼痕があることと建物やその周辺から小鍛冶関係の遺物が出土していることなどを考え併せると同時併存の可能性が指摘できる。

土壙の遺存状態は悪いが、不整形の掘り込みの中央に円形の掘り込みがあり、この部分の大半に焼痕と焼土の堆積がみられる。外形の大きさは南北軸で2.10m、東西軸では2.05m、内形の規模は0.9m×1.0m、深さは20cm前後を測る。この土壙からは石塊はあるものの小鍛冶に関連する遺物は出土していない。この他サヌカイト製のスクレーパーと磨石がある。

12号土壙（図版71－(1)・72－(1)、第111図）

Ⅱ区の西側の段落ち部分にある13号住居と一部重複した土壙で住居より新しい。土壙はやや歪な円形を呈しており、規模は1.10m×0.9mを測り、床面には大きめのピットが2個掘られている。

内部の覆土は、住居と同じ茶褐色系の土が自然堆積していた。出土遺物は上層からの黒曜石製のグレイバーがある。

17号土壙（図版80－(1)、第112図）

Ⅱ区の東側に位置し、3号落し穴（旧14号土壙）の東隣で検出した土壙である。平面形状が隅丸長方形に近い形状をなし、主軸長が0.9mで短軸が0.4m、深さは20cm弱を測る。北壁には地山石が嵌入しておりそのままにしている。

18号土壙（鍛冶関連遺構）（図版75－(2)、第113図）

Ⅱ区の北側で検出した土壙であるが、重複するすべての遺構よりは新しい。重なりのある遺構は、19号・20号・30号竪穴住居と9号落し穴である。土壙の全体の形状は不整形を呈し、耕作に寄る削平が著しく総じて浅い。

土壙内部は三段掘りで、底面の南側には径が1.70m、深さが20cmの掘り込みがある。現状での土壙の周囲には「L」字状の浅い溝が巡り西側に延びているが、北側溝の先端は段落ちで削

平されている。この溝は南側まで延び土壙を囲繞するように掘られている。溝は土壙の中央部の掘り込みと細い溝で直結しているが、この溝は土壙から周囲を巡る溝方向に若干の傾斜をなしている。

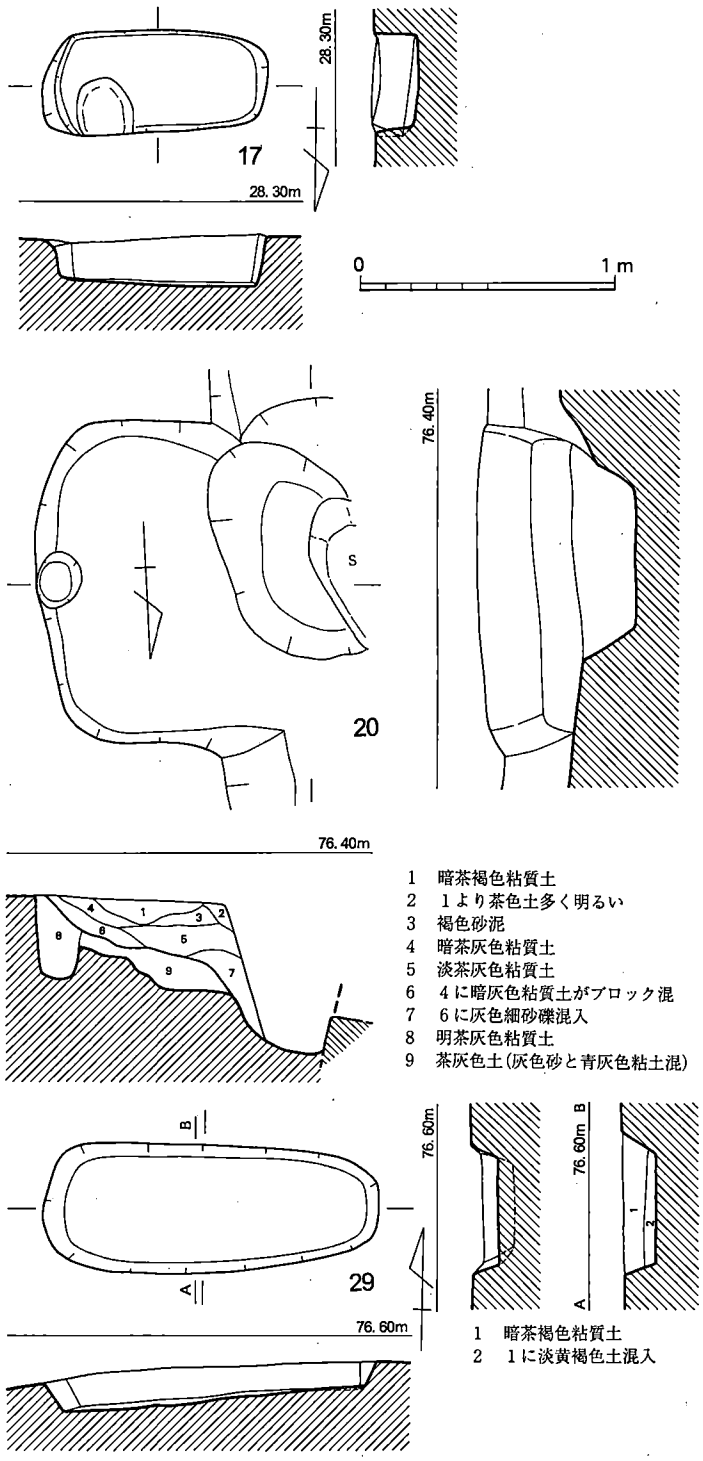
土壙内には鉄滓・鉄塊・溶解炉壁体、溝内からも鉄塊などが出土しており、溝と土壙は関連する遺構であることが分かるとともに、土壙の西側に位置する2間×2間の3号掘立柱建物や1号・2号建物とも関係する可能性が強く、鍛冶関連遺構を想定させる。

また、北側に位置する19号土壙からも若干の鉄滓が出土していることからこれも関連する遺構かも知れないがはっきりしない。

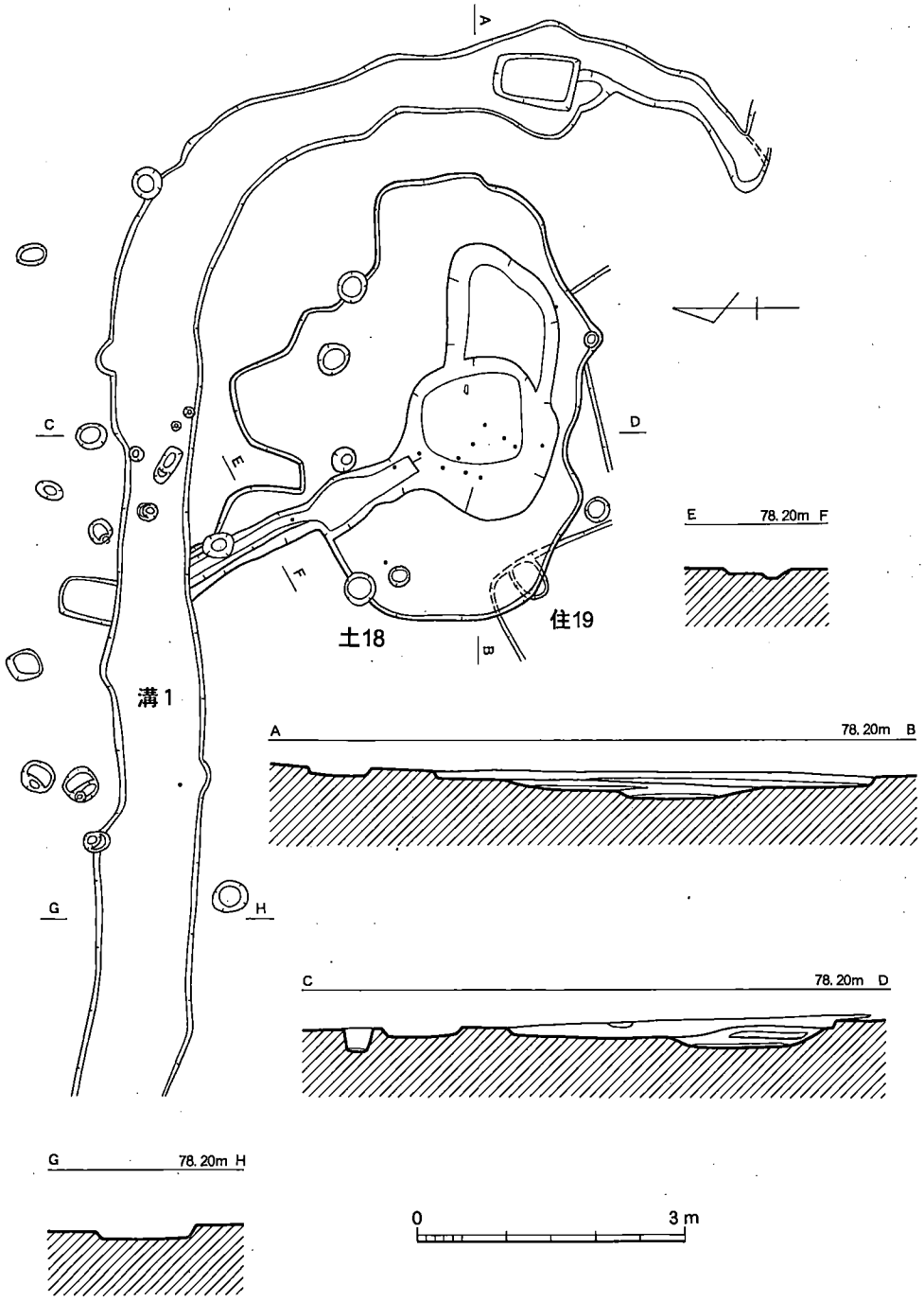
出土遺物は鉄関係のものの他石鏃が1点ある。

19号土壙（付図）

18号土壙を囲繞する1号溝の北側にある方形状の浅い掘り込みで、その中を溝状の遺構が走るが、調査区外に延びており不明瞭である。焼痕のある壁体片と小鉄塊が出土している。



第112図　二十谷17・20・29号土壙実測図(1/30)



第113図　二十谷18号土壙（鍛冶関連遺構）実測図(1/80)(ドットは鉄滓、鉄塊)

20号土壙（図版69－(2)、第112図）

Ⅲ区の西端で検出した土壙であるが、土壙の西側をほぼ南北に延びる２号溝により約1/2を破壊されている。平面プランは一見して方形状に見えるがはっきりしない。南北軸の大きさは1.25m、深さは20cmを測り、西側には不整形のピットが掘られている。内部の覆土は茶灰色系の土が自然堆積している。

出土遺物はない。

24号土壙（図版71－(1)、第93図）

６号住居と重なり住居より新しい土壙で、平面形態が方形を呈する。土壙の大きさは1.30m×1.05m、深さは20cm弱を測る。用途は不明で、然したる遺物はない。

25号土壙（図版72－(2)・73－(1)・80－(1)、第114図）

Ⅲ区の北側に位置する土壙で、16号住居とは接しているものの重なってはいない。３号掘立柱建物とは重複し建物よりは古い。

平面形状は円形に近い形状で、その規模は1.25m×1.00m、北側を除いて狭いテラス状をなし、最深部で40cm前後を測る。床面に接するように河原石が３個出土し、その内の２個は重ねられていた。上層からは縄文晩期の浅鉢の破片が出土している。

26号・27号土壙（付図）

両方の土壙はⅢ区の北側で検出したもので、26号は不定形のプランで然したる出土遺物はない。27号土壙は一部を検出したにすぎず、大半は調査区外にある。

28号土壙（図版69－(1)・81－(1)、第114図）

Ⅲ区の２号溝の西側に隣接して検出した土壙で、１号住居との重なりがあり住居より新しい。平面プランは隅丸長方形で、周囲にテラスを設けた二段掘りである。東側には重量感のある地山石が２個横たわり地山に嵌入した形になっている。長軸は1.10m、短軸は0.8m、深さは25cmを測る。床面近くには石塊が３個残っていた。内部の覆土は茶褐色の粘質土と砂泥が堆積し、中間層には炭化物の細粒がレンズ状に堆積している。

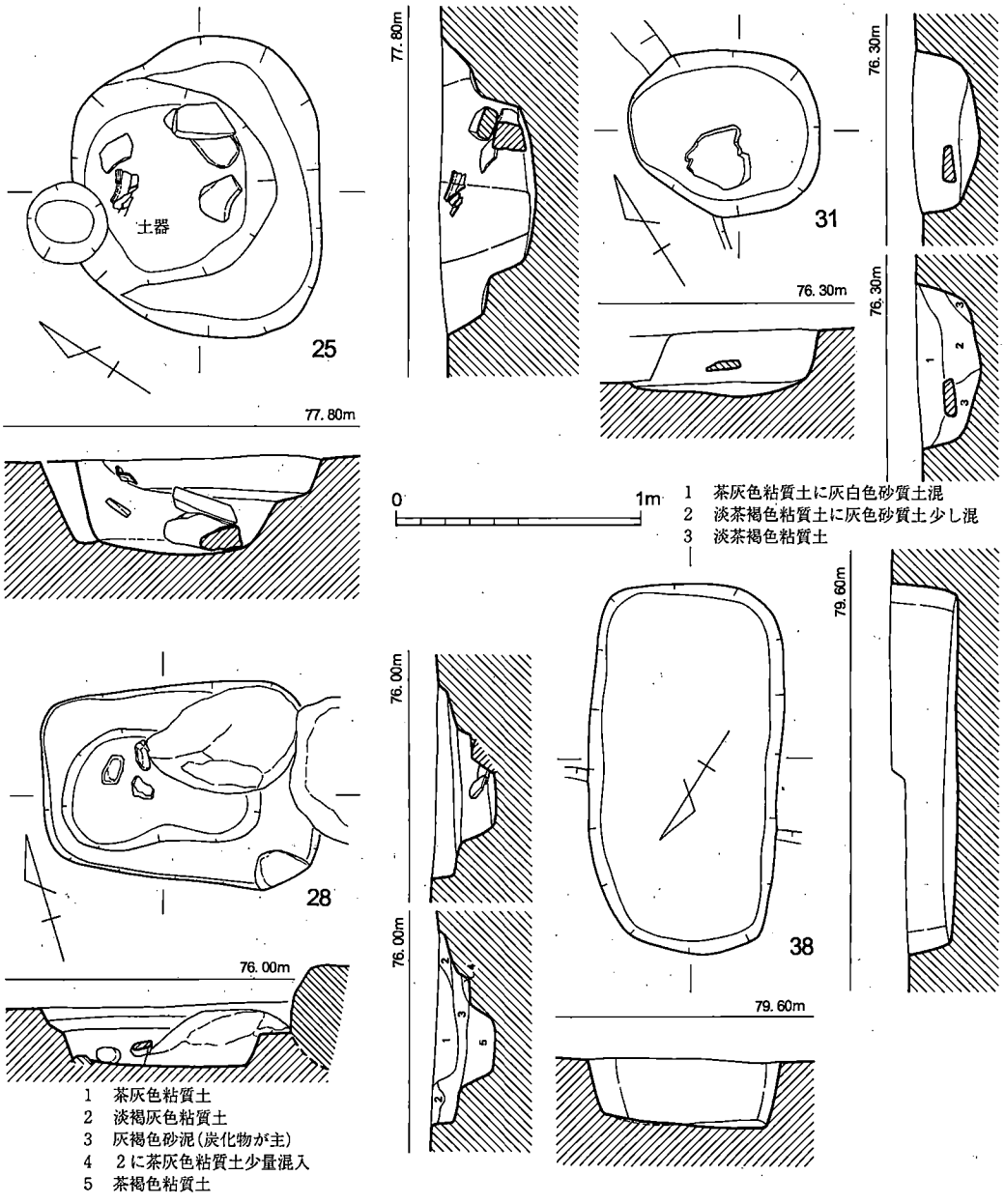
出土遺物はない。

29号土壙（図版69－(2)、第112図）

Ⅲ区の２号住居の東隣で検出した平面プランが楕円形の土壙で、主軸長が1.32m、短軸長は0.5m、深さは15cm前後で西側が深くなる。覆土は茶褐色系の土が水平に堆積していた。

31号土壙（第114図）

Ⅱ区の２号溝と重なった円形の土壙で、溝の方が新しい。大きさは0.8m×0.7m、深さは25cmを測る。内部の覆土は茶褐色系の土で埋まっていた。下層からは一枚の板石が据えられたような状態で出土した。

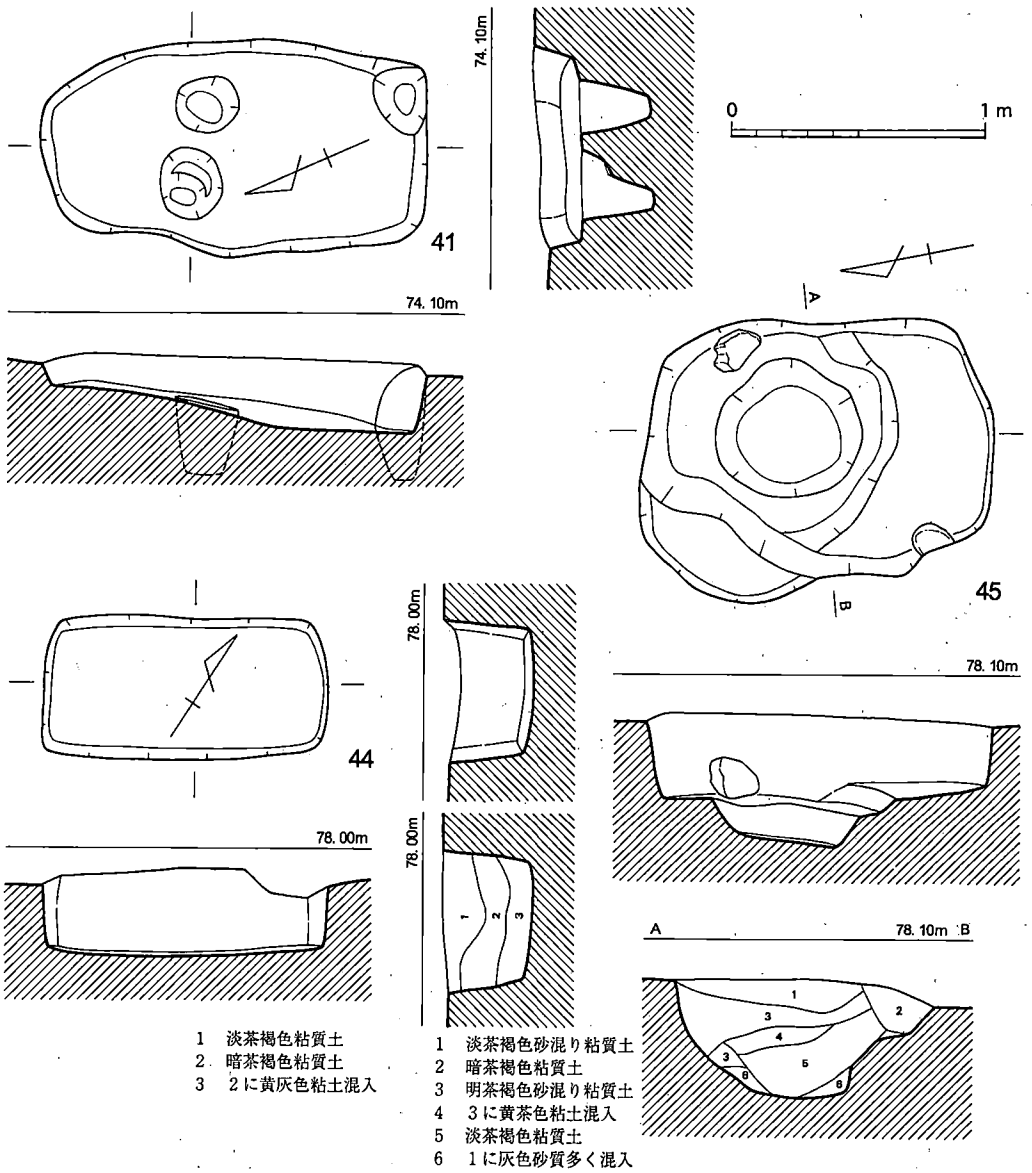


第114図　二十谷25・28・31・38号土壙実測図(1/30)

32号土壙（図版74－(1)・(2)・81－(2)、第104図）

22号竪穴住居跡と11号土壙（鍛冶関連遺構？）と重なりそれよりも古い土壙で、断面観察で判断すると平面形状が方形に近い。底面はやや膨らみ舟底状を呈する。残っている西側の一辺は1.20m、深さは30cmを測る。

出土遺物はサヌカイト製の槍先形尖頭器がある。



第115図　二十谷41・44・45号土壙実測図(1/30)

38号土壙（第114図）

かなりの削平を受けているⅠ区の中央付近に集中して検出した土壙のひとつで、49号土壙との重複がありこれより新しい。平面形態は隅丸長方形で、主軸長は1.50cm、短軸は0.8m、深さは30cm弱を測る。床面は平坦でピットなどは掘られていない。

出土遺物は皆無である。

41号土壙（第115図）

Ⅳ区の中央付近で検出した土壙で、平面プランが不整長方形を呈する。規模は長軸で1.50m、短軸で0.85m、深さは15cm～25cmで南側に緩斜面をなす。床面には3個のピットが掘られているが、2.5m西側にある8号落し穴（旧40号土壙）と比較して浅過ぎることから落し穴遺構ではないであろう。

44号土壙（図版73－(2)・16－(1)、第115図）

Ⅱ区の北東側で検出した土壙で、これも2度目の遺構検出で確認した。土壙の周辺は新たに耕作で不整形に撹乱されていた。平面プランは長方形を呈し、主軸長が1.13m、短軸が0.55m、深さは35cmを測る。内部の覆土は茶褐色系土がレンズ状堆積していた。床面にはピットは掘られていない。

出土遺物は鉢の小破片がある。

45号土壙（図版82－(2)、第115図）

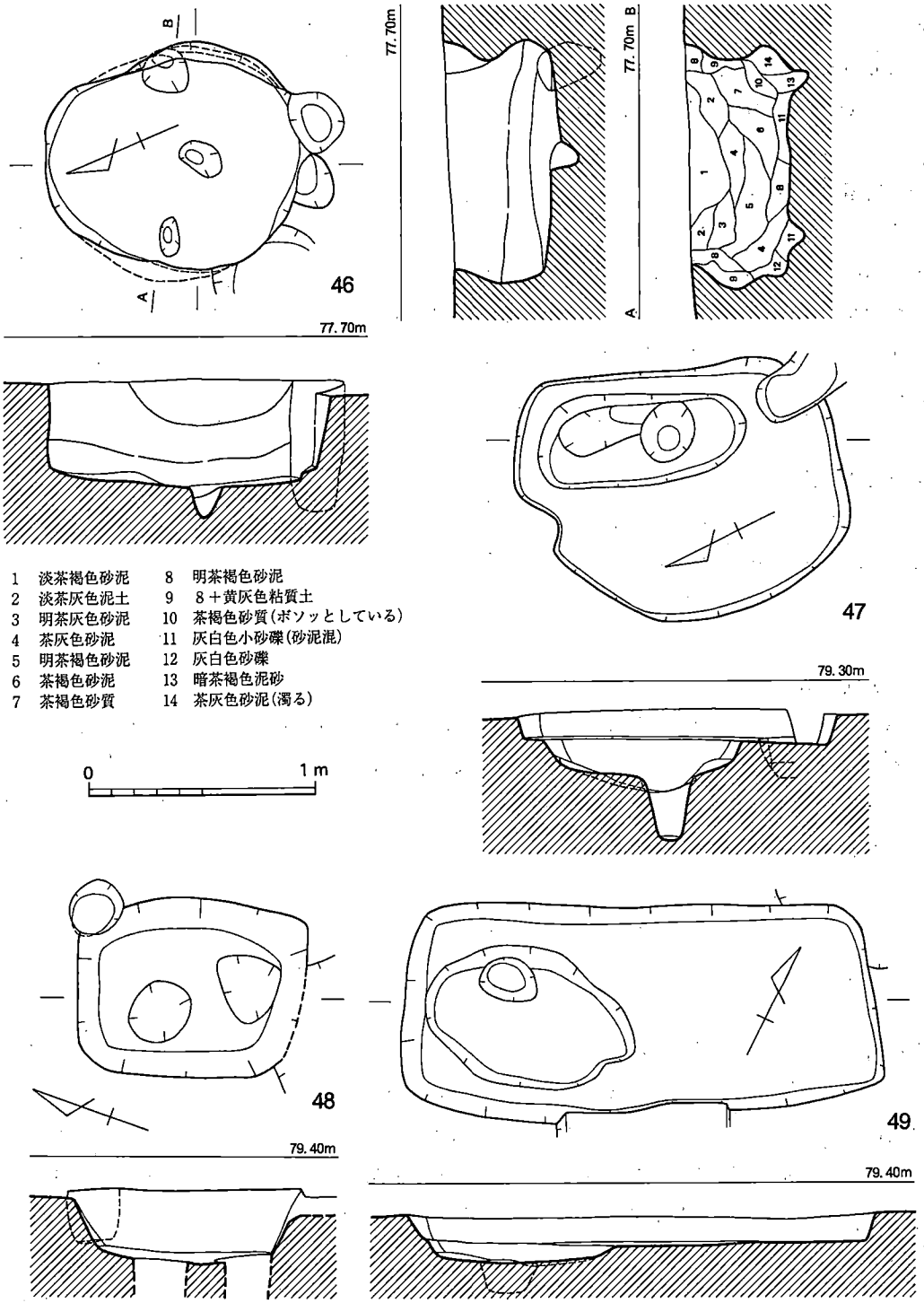
1号・2号・4号掘立柱建物の床面内にある土壙で、当然土壙の方が古い。平面形態は不整形を呈し、三段掘りで中央には大きめのピットが掘られている。土壙の規模は主軸長が1.35m、短軸は1.00m、最深部で50cmを測る。東側のテラスには人頭大の地山石が転がっていた。覆土には茶褐色系の粘質土と砂質土が自然堆積していた。

出土遺物はない。

46号土壙（図版83－(1)、第116図）

Ⅱ区の16号住居の床面下で検出した土壙であるが、16号竪穴住居の説明で述べたように、住居の床面に嵌入していた石塊の下に掘られていたもので、新旧関係ははっきりしない。平面形態は円形に近い形状で、壁は垂直かやや袋状になり、形状から貯蔵穴の可能性がある。周囲に貯蔵穴が存在しないことから住居に伴う遺構の可能性もある。

土壙の規模は1.15m×1.00m、深さは45cmを測る。底面の中央には深さ10cm、東側には25cmのピットが掘られている。覆土は急激に流れ込んだようなレンズ状堆積を示しており、故意に



第116図　二十谷46～49号土壙実測図(1/30)

埋められた形跡はないこと、最上層に砂泥が堆積していることなどから、住居と同時併存か住居より新しい可能性が強い。

出土遺物は鉢の口縁部片がある。

47号土壙（第116図）

Ⅰ区の38号・48号・49号の3基の土壙が集中した北西側で検出した土壙で、これも2回目の遺構検出で確認したものである。

平面プランは不整方形を呈し、床面の東側には楕円形の掘り込みがある。中には1個のピットが掘られている。土壙の規模は主軸で1.45cm、短軸は1.10cm、深さは10cm強で、内側の土壙のそれは0.9mと0.4m、深さは床面から15cmである。

48号土壙（第116図）

49号土壙に南側壁を切られた状態で検出した土壙である。平面形態は方形を呈し、その大きさは0.95m×0.8m、深さは30cmを測る。床面には2個のピットが掘られている。

出土遺物はない。

49号土壙（第116図）

38号土壙より古く、48号土壙より新しい長方形のプランを有する土壙で、主軸長が2.05m、短軸0.9m、深さは10cmと浅い。床面の西側には不整円形の掘り込みがあり、1個のピットが掘られている。

出土遺物はない。

4　溝

1号溝（図版75－(2)、第113図）

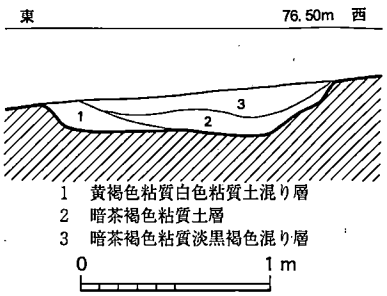
この溝は18号土壙（鍛冶関連遺構）を囲繞する形で検出したもので、当初は18号土壙の南側で完結していると考えていたが、2度目の遺構検出でその続きと考えられる浅い溝が西側に延びていることが判明した（付図参照）。西側の途中で消滅しているものの、おそらく鍛冶関連遺構とそれに併存すると思われる3号掘立柱建物を「U」字状に囲っていたと推測される。この溝は丘陵の尾根からの流水を排水することを目的に設置された可能性が強い。

出土遺物は陶器片の高取系と思われる肩衝茶入の口縁部片と鉄塊があり、茶入は鍛冶関連遺構からの出土で共存が疑問視され、時期的にも17世紀代の所産で流れ込みの可能性が強い。

2号溝（第117図、付図）

Ⅲ区の西端で検出した浅い溝でほぼ南北に延びているが、検出した長さは7.5mほどである。溝の幅は広い所で1.90m、狭い箇所で1.00m、深さは30cm前後である。

覆土は茶褐色と黄褐色土が自然堆積し、出土遺物は須恵器の小型椀の小片がある。



第117図 二十谷2号溝土層断面図(1/40)

3号溝（付図）

Ⅱ区の西側で竪穴住居跡が錯綜した箇所で検出した溝であるが、遺存状態が悪く一部を検出したに過ぎない。溝の方が最も新しく、周囲の遺構を切っている。出土遺物は鉄器の小片が1点ある。

4号溝（付図）

Ⅱ区の南側、2号掘立柱建物の西傍で検出したほぼ東西に延びる細い溝で、3号住居内で「L」字状に曲がり、さらに南方向に延びるようで、何らかの遺構を囲繞していた可能性があるが、削平されたことからはっきりしない。東西の全長は6.5mを測る。出土遺物はない。

5号溝（付図）

Ⅱ区の北端で検出した残りの悪い溝で、19号土壙と重なっているが新旧関係は捉えていない。一部耕作の段落ちで破壊されている。検出した全長は7.0mほどで、北東から南西方向に延びている。出土遺物は土師器の擂鉢片と焼土塊がある。

5 落し穴

落し穴は調査時点で、土壙番号を付与していたため、土壙番号が一部欠番になった。その番号は次の通である。

1号落し穴（旧6号土壙）・2号落し穴（旧13号土壙）・3号落し穴（旧14号土壙）・4号落し穴（旧16号土壙）・5号落し穴（旧21号土壙）・6号落し穴（旧35号土壙）・7号落し穴（旧36号土壙）・8号落し穴（旧40号土壙）・9号落し穴（旧42号土壙）・10号落し穴（旧43号土壙）となり、落し穴の総数は10基ほどである。しかし、工業団地に伴う第2地点の調査で5基の落し穴が検出され、落し穴はほぼ東西に並んでいる。これらに連続するかのように1号～7号落し穴は（あるいはⅣ区の8号）連続性がみられる。これに対して、4号・9号・10号

の南北方向の列も存在する。以下個別の説明を簡略にする。

1号落し穴（図版83－(2)、第118図）

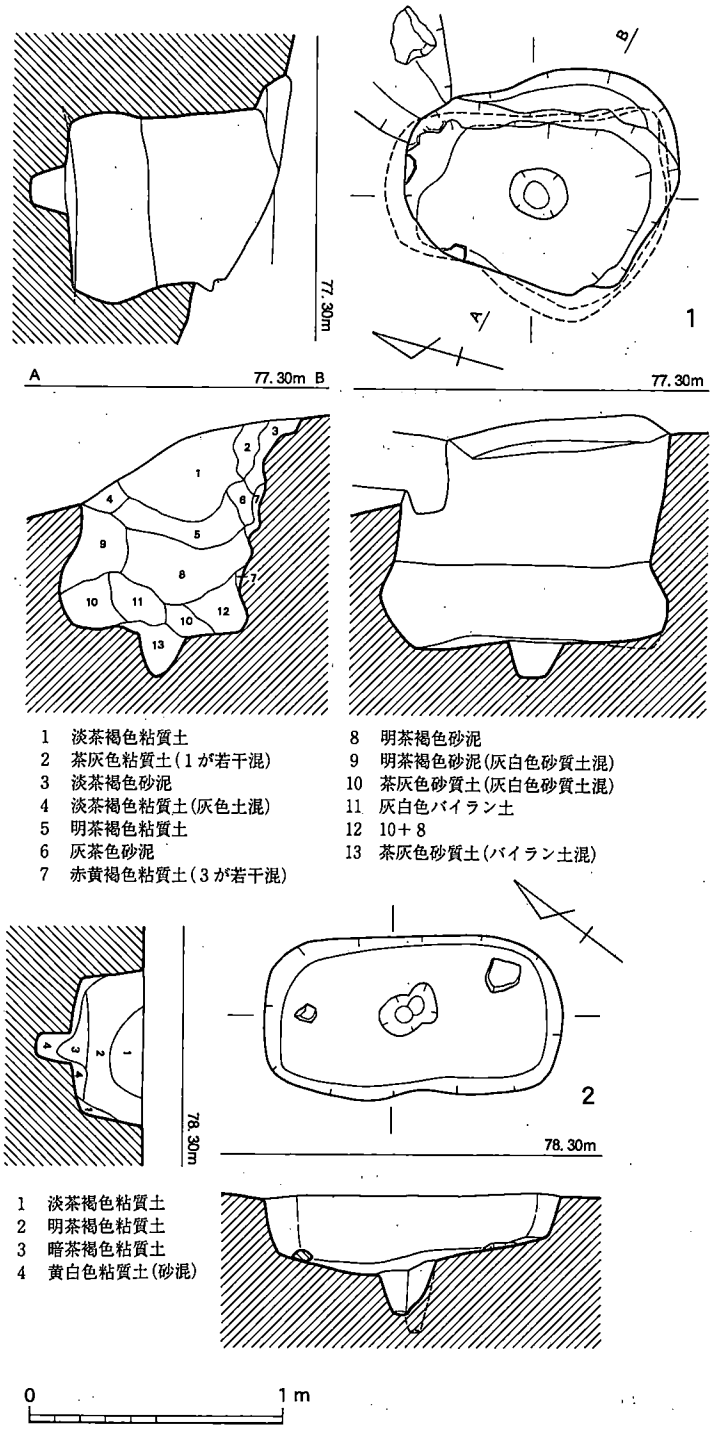
Ⅱ区の南西端の段落ち付近に並ぶ土壙のひとつで、当初6号土壙としていたものである。調査の結果、通常の土壙にしては断面形状や深さが異なることから落し穴遺構としたが、断面が袋状になることから貯蔵穴の可能性も否定できない。しかし、出土遺物が皆無であることからここでは落し穴として捉えておく。

平面形状は瓢箪形を呈し、その大きさは1.05m×0.7m、底面は1.00m×0.6m、深さは0.85mを測る。断面で見るように下層まで壁面が直で、最下層付近は袋状になる。床面の中央には深さ15cmのピットが掘られている。

覆土は茶褐色系と花崗岩の風化土がやや複雑な層をなすが基本的には自然堆積を示している。

2号落し穴（図版84－(1)、第118図）

1号・2号建物と重なった落し穴で、当然建物が新しい。



第118図　二十谷1・2号落し穴実測図(1/30)

この遺構は13号土壙として取り扱っていたもので形状から落し穴とした。平面プランは隅丸長方形で、主軸長が1.17m、短軸長0.65m、深さは30cmを測り、削平を考えるとこの倍近くの深さが想定される。床面は中央に向かって緩斜面をなし、中心には深さが15cmと25cmのピットが2個掘られており、逆杭を立てたピットであろう。内部には茶褐色系の土が埋まり、最下層ピット内には黄白色粘質土が薄く堆積していた。

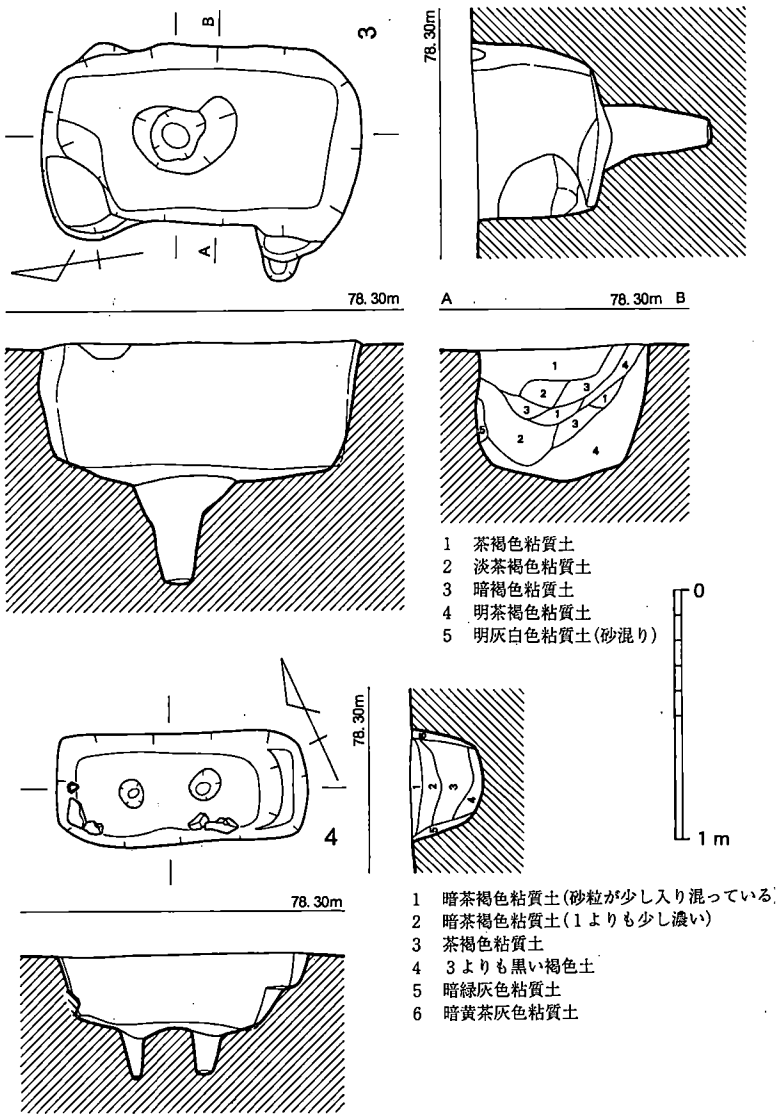
3号落し穴（図版84－(2)、第119図）

2号落し穴の東側2.5mの所に位置する落し穴で、第2地の落し穴に連続するものであろう。平面プランは隅丸長方形を呈し、その大きさは長軸で1.30m、横幅は0.7m、床面の深さは55cmを測る。

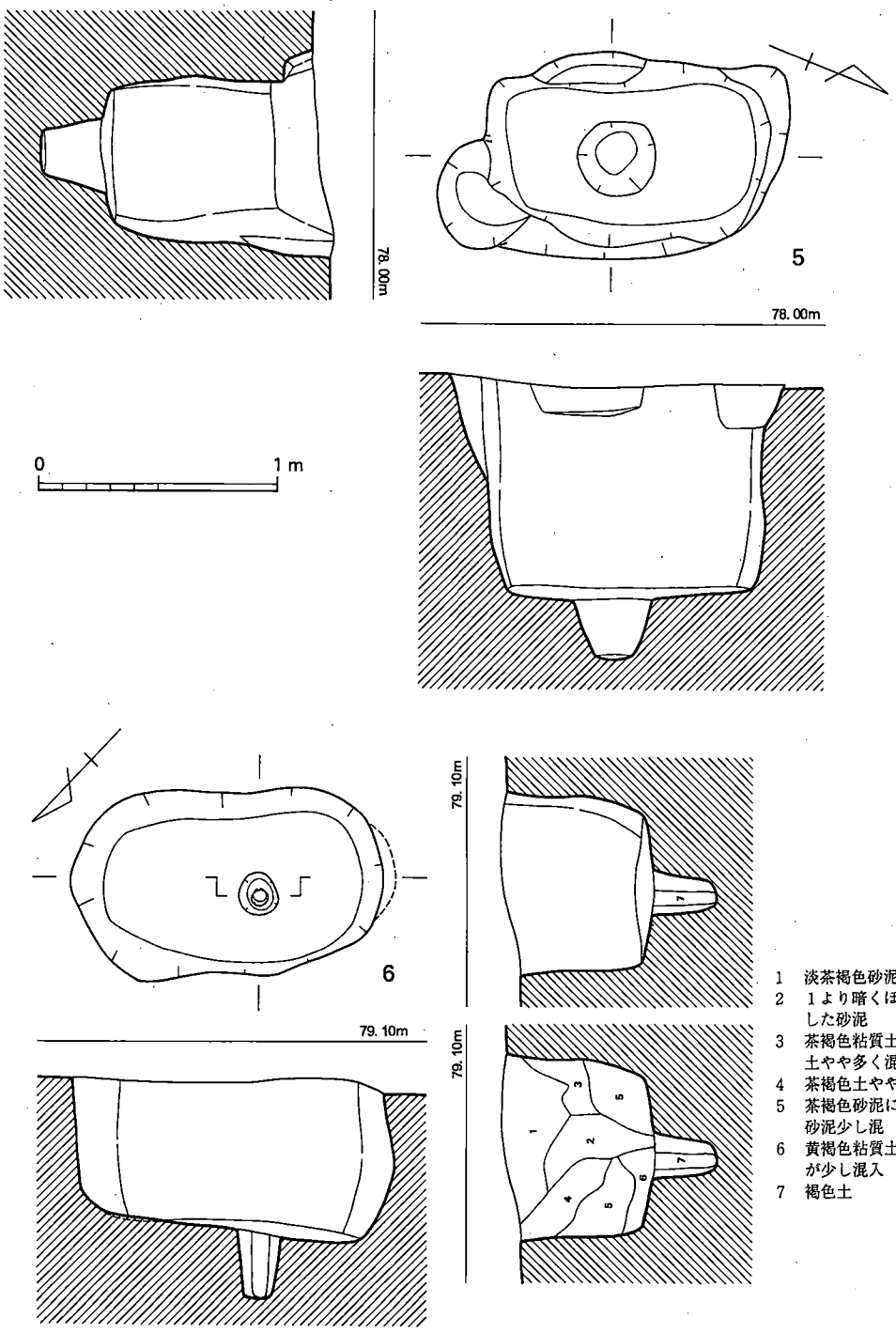
北側には地山石が露頭し、床面の中央には深さが45cmの断面がフラスコ状のピットを掘り込んでいるが、断面観察では木杭の痕跡はない。内部の覆土は茶褐色系の土で埋まり、その埋まり方は東側から流れ込んだようである。

4号落し穴（図版85－(1)、第119図）

3号落し穴の3.0m南側に位置する落し穴で3号とは主軸を異にし、形態が3号までのタイプと違い小形で離れた間隔で逆杭を埋め小ピットを設けるタイプで



第119図　二十谷3・4号落し穴実測図(1/30)



第120図　二十谷5・6号落し穴実測図(1/30)

ある。平面形態は隅丸長方形で、長さは1.0m、幅が0.45m、深さは30cmを測る。内部は茶褐色系の土で埋まり、両端には緑灰色と茶灰色の粘質土が薄く帯状に堆積していた。

5号落し穴（図版85－(2)、第120図）

Ⅱ区の南端で検出した落し穴で当初の土壙番号は21号土壙である。平面プランは不整形な隅丸長方形を呈している。四方の壁面は直に掘られているが、上部は若干漏斗状を呈する。上面の規模は長軸で1.25m、幅は0.85m、床面までの深さは0.9mで、耕作面の端部であることから削平の度合いが少なかったと思われる。底面は平坦で長さが1.0m、幅が0.55mを測り、中央に径が30cm前後、深さ25cmのピットが掘られている。

6号落し穴（図版86－(1)、第120図）

7号落し穴に隣接して掘られたもので旧番号は35号土壙である。7号落し穴との間は0.5mと狭く、両者のタイプは異なり掘られた時期が違うのではないかと思われる。当該遺構は二十谷遺跡第2地点の列をなす落し穴に連続するものと考えられる。

平面プランは楕円形で、西側の小口壁はやや膨らみを有す。上面の長さは1.30m、幅は0.75m、深さは0.6m、底面の長さは1.10m、幅が0.6mを測る。底面は西側方向に緩斜面をなし、やや西寄りには深さ0.3m弱の逆杭埋置のピットが掘られている。ピット内には径が6.0cmの逆杭の痕跡が褐色土の層で残っていた。

内部の堆積土は茶褐色を中心とした土層が不自然な堆積をなしている。つまり、中央に第2層を挟んで同系統の土が埋まり、2層は暗茶褐色のほそぼその砂泥が堆積していた。これは2層に何か腐食するものが残り、この上に第1層が堆積したため硬く締まらない層位を形成したと推測される。

7号落し穴（図版86－(2)、第121図）

6号落し穴の南傍で検出した小形の土壙で、形状的には落し穴とほぼ同じであることから同類の遺構と判断した。概観のプランは方形であるが、断面でも分かるように東側の壁面は斜面をなし、下段から直に掘り込んだ形となる。これは壁面が崩壊したのかもともとの状態なのかはっきりしない。規模は上面では1.02mと0.75m、方形の面では0.7m×0.75m、深さは50cmと浅い。底面の中央には深さ10cmのピットが掘られている。

8号落し穴（図版87－(1)・88－(1)、第121図）

Ⅳ区で検出した落し穴であるが、当該区では主だった遺構はこれと41号土壙のみで、周辺には落し穴が確認されていないことからⅠ区・Ⅱ区で検出した一連のものか否かは分からない。

平面プランは不整形の隅丸方形に呈し、東側は円形に近い。上面の大きさは0.95m×0.9m、

底面は0.8m×0.65m、深さは平面プランの割りには深く0.7mを測る。

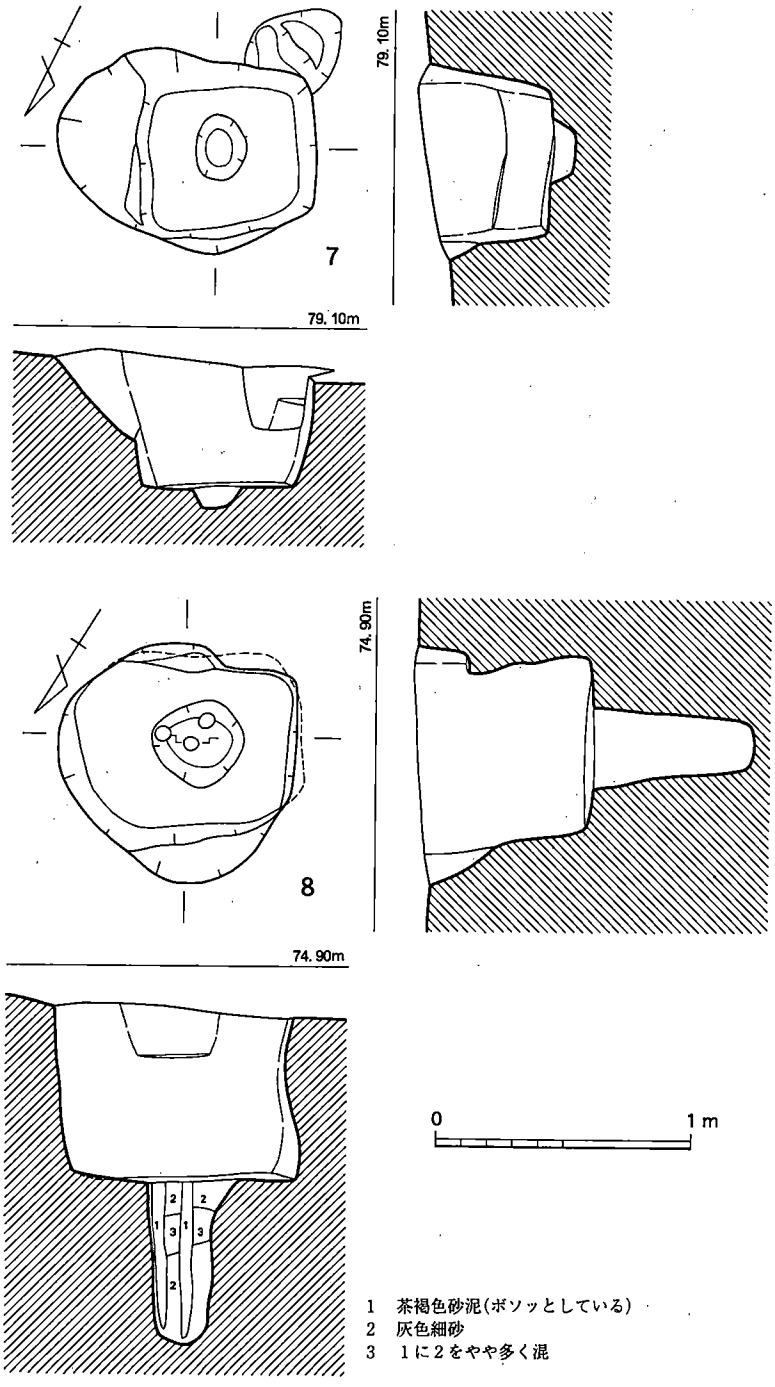
底面の中心には径が35cm前後、深さが63cmの深いピットが掘られており、内部には直径5.0cm～7.0cmの逆杭が埋め込まれた痕跡が残り、その周囲を灰色の砂質土で充填していた。出土遺物はない。

9号落し穴（図版87－(2)・88－(1)、第122図）

当該落し穴は当初42号土壙としていた遺構で、二十谷第2地点から連続する落し穴とは方向を異にするものである。この落し穴は、むしろ4号・10号落し穴との関連が強いといえる。

Ⅱ区の北側に位置しており、10号との距離は12m、10号と4号間は11mを測る。

平面形状は楕円形に近く、その規模は長軸で1.15m、短軸で0.75m、床面までの深さは



第121図 二十谷7・8号落し穴実測図(1/30)

40cm弱を測る。埋土は茶褐色粘質土が中央のピットに向かって堆積していた。中層には2個の地山石が流れ込んでいた。

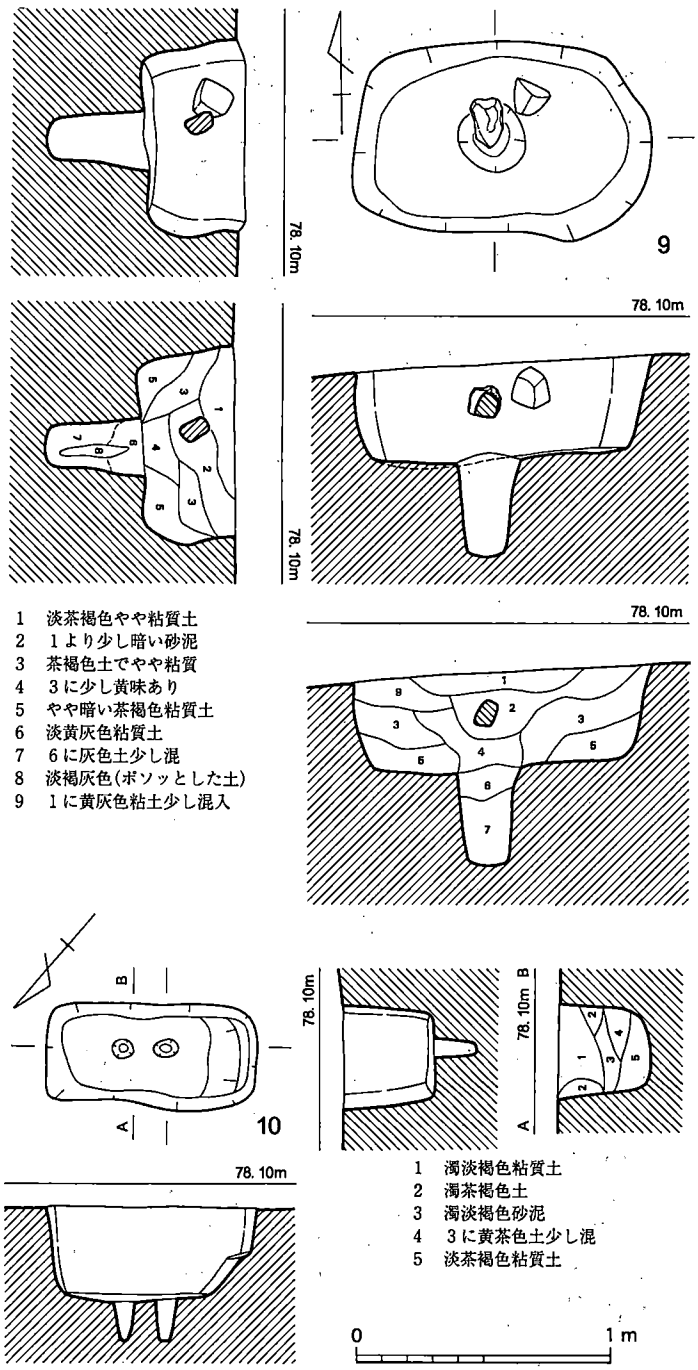
床面には直径が25cmのピットが掘られ、明瞭な逆杭の痕跡はないが、横断面の土層に細く杭の痕跡らしき層位が認められる。

10号落し穴（図版88－(2)、第122図）

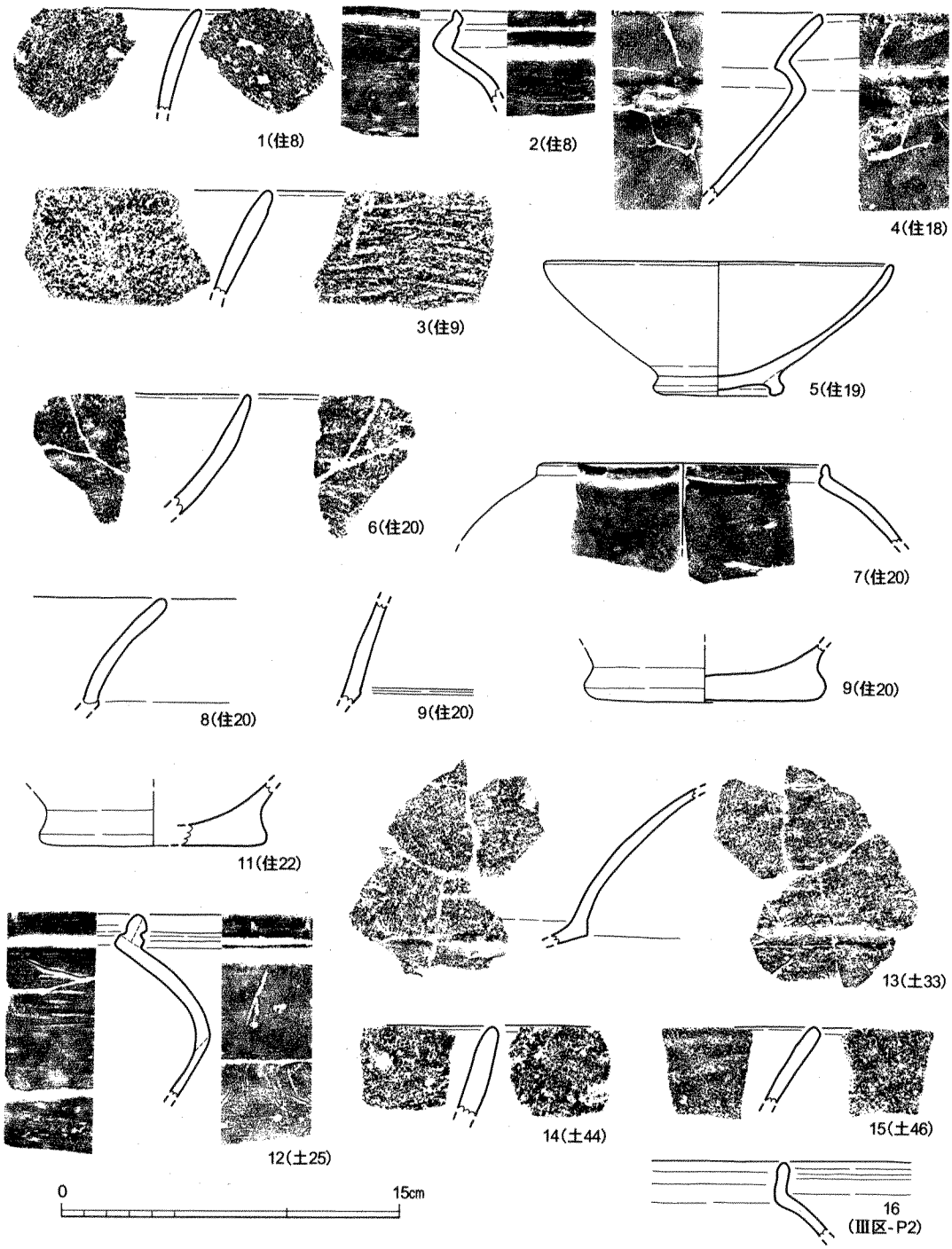
Ⅱ区の東側で検出した小形の落し穴で、9号落し穴のタイプとは違うものである。

平面プランは隅丸長方形を呈し、長さは0.84m、幅は0.4m、深さは37cmと浅いが、検出場所がかなりの削平を受けていると考えられることから本来はもっと深く掘られていたのであろう。

西側の小口には狭いテラスを設けており、床面には逆杭を直接刺し込んだと考えられる深さが15cmの小さなピットがある。覆土は茶褐色の粘質土と砂泥がやや不自然な堆積を示していた。



第122図　二十谷9・10号落し穴実測図(1/30)



第123図　二十谷遺跡出土縄文土器実測図(1/3)

6　出土遺物

①縄文土器（図版89、第123図）

出土した縄文土器は大半が小片で時期的には縄文晩期の所産である。器種は所謂鉢と称されるもので浅鉢と深鉢とがあるが、この中で19号住居から出土した低い高台が貼付された浅鉢の完形品が出土例が少なく注目される。

8号住居出土土器（1・2）1は粗製鉢の口縁部片で床面から10cm上層の覆土内から出土した。胎土には角閃石の混ざる砂粒が多い。器面調整は磨耗しているがナデか。2は精製の浅鉢で床面から10cm上層の覆土から出土した。頸部がくびれ口縁部外面に1条の沈線が巡る。淡褐色で胎土に雲母が混ざる。

9号住居出土土器（3）粗製の深鉢の口縁部片で肩部が外部に屈折するタイプであろう。外面は粗い条痕がみられ内面はナデる。住居の上層の覆土内から出土した。

18号住居出土土器（4）精製の浅鉢で胴部下半は欠損する。波状口縁をなすと思われ、内外面ともナデ調整で、内面は燻したように黒い。

19号住居出土土器（5）約1/2が欠損する珍しいタイプの浅鉢である。口縁部を僅かに内湾させ、底部には高さ1.0cm弱の高台を貼付する。器壁は薄く3.0mm～5.0mm、復原口径は15.4cm、高台径は4.8cm、器高は5.9cmで、外面は弱い二次火熱を受けたような褐色を呈し、内面は淡い焦げ茶色である。住居の北東側壁沿いのピット内から出土した。

20号住居出土土器（6～10）図示したすべてが住居の東側の床面の若干上層から集中して出土した土器で、浅鉢と深鉢がある。6は浅鉢の破片で、器表面はナデ仕上げである。7は精製の浅鉢で、口縁部を摘み上げ内面に1条の細い沈線が巡る。復原口径が12.7cmを測り、ナデ仕上げである。8・9は同タイプの鉢の口縁部片で口縁下が屈折する。屈折部には浅い沈線が巡る。10は粗製の深鉢の底部で底径が10.7cmを測り、内外面とに弱い二次火熱を受け淡く変色する。

22号住居出土土器（11）住居の北東隅から出土した粗製の深鉢底部片である。復原底径が10.0cmを測り、外面に弱い二次火熱を受け赤茶色に変色している。

25号土壙出土土器（12）土壙の上層から出土した精製の浅鉢である。この他、土壙内からは4個の石塊が出土しているが製品ではない。口縁内外に沈線を巡らし、上半の器壁は厚い。調整はナデ仕上げである。

33号土壙出土土器（13）粗製の浅鉢の口縁部片で口唇部と体部下半を欠く。口唇部は肥厚するタイプであろう。体部を屈折させ上半は長く延びる。調整は摩滅して分からない。

44・46号土壙出土土器（14・15）両者とも粗製の鉢の口縁部片である。調整は摩耗しており、前者は覆土中からの出土である。

Ⅲ区P－2出土土器（16）口縁部が直上するタイプで、口縁部には沈線などは見られない。

②その他の土器（図版90、第124図）

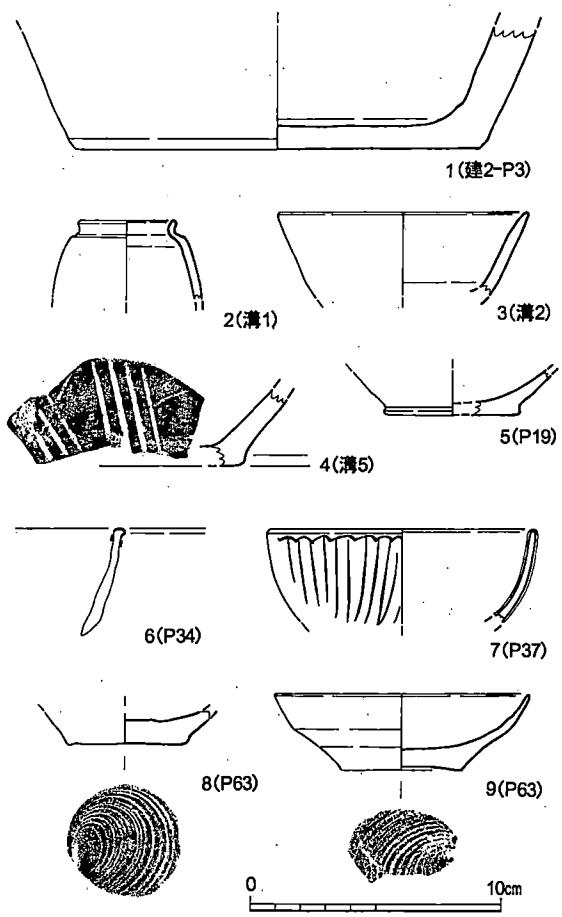
出土した土器は、土師器・須恵器・陶磁器類などの破片があるが総数としては少ない。時期としては15世紀、16世紀、17世紀と幅がある。

２号建物出土土器（１）須恵質の大甕の底部片でほ他にも数片出土しているが接合しない。火の回りが悪く焼成は須恵質であるが、古備前の大甕である。復原底径は16.1cmである。

１号溝出土土器（２）鍛冶関連遺構である溝から出土したもので、高取系の肩衝茶入の破片である。胎土は精製され、砂粒をほとんど含まず淡い灰色を呈する。茶褐色の釉は発色が悪くくすんでいる。

２号溝出土土器（３）須恵器の小型の高台付椀の破片で、復原口径が9.9cmを測る。

５号溝出土土器（４）土師器の擂鉢の破片で４本単位の筋目を彫り込んでいる。内面が二次火熱で赤変する。



第124図　二十谷遺跡出土土器実測図(1/3)

ピット出土土器（５～９）５はＰ19から出土した土師器の皿の破片で糸切り底である。復原底径は5.2cmである。

６はＰ34から出土した土師器の椀の口縁部片で口唇部を肥厚させる。前面に二次火熱を受け器表面が剥離している。

７はＰ37から出土したヘラによる線描き連弁をなす青磁の碗の口縁部片である。釉調は淡い黄緑色を呈する。器面には貫入が見られ、復原口径は10.5cmである。

８・９はＰ63から出土した土師器の皿の破片で、両者とも糸切り底である。８は底径が4.5cmを測る。９は外面底部付近をヘラ削りし、体部が僅かに屈折する。底部は若干上げ底で、復原口径は10.2cm、底部径は4.8cm、器高は3.0cmを測る。

以上の土器類は２は肩衝茶入が17世紀代と思われる他は15～16世紀代であり、掘立柱建物や18号土壙などの鍛冶関連遺構に伴う土器と考えられる。

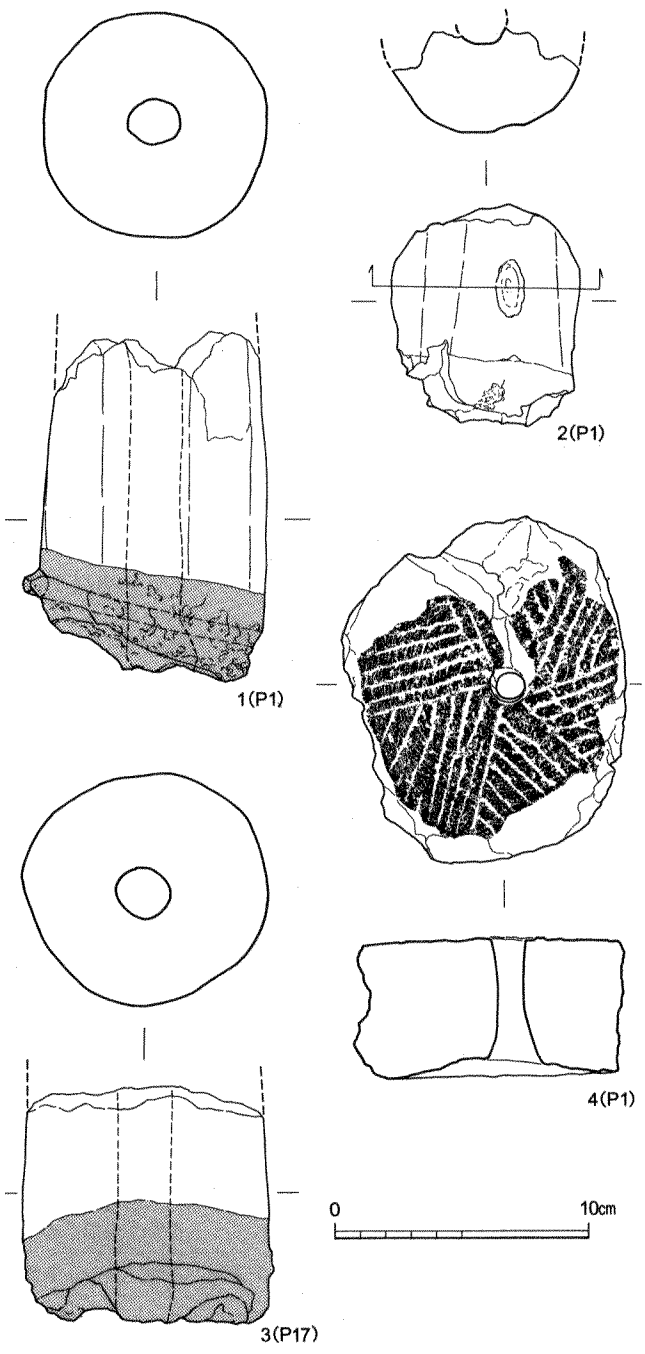
③土製品（図版90･91、第125図）

2号建物出土土製品（1～3）

1・2は2号掘立柱建物の北西隅の柱穴から出土した鞴の羽口で、1は約1/2が欠損し、2は小片である。これらは、二次火熱を受けた石臼とともに出土した。図示した下端は3.0cm幅で著しい焼痕が見られ、壁体との挿入角度は15°を測る。焼けた箇所には一部壁体が付着し、先端がガラス質に変質している。中央には径2.0cm×1.7cmの孔が穿たれ、全体の径は8.8cmで基部に向かって若干細く作られている。2は別個体の鞴の羽口で、壁体に挿入する部分の破片が出土している。

3は2号掘立柱建物の東桁行のP12の傍で検出したピット内(P17)から出土した鞴の羽口で、壁体に挿入した部位が遺存している。挿入部は激しく焼けており、端部はガラス質に変質し若干の鉄分が付着している。最大径は9.8cmで基部方向に若干細くなる。中心には径が2.0cmの孔を穿っている。

以上のように3個の鞴羽口はいずれも建物のピット内から出土したものであるが、出土状況は石塊とともにピット内全体に充填したような形で検出されており、明らかに柱を抜去した後に投棄したものである。



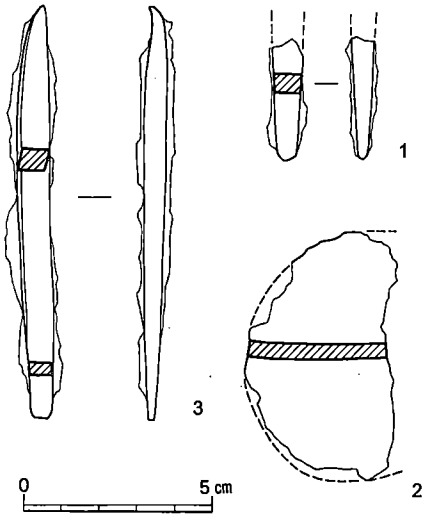
第125図　二十谷遺跡出土土製品･石器実測図(矢印は分析個所)(1/3)

④鉄　器（図版91、第126図）

鉄器は出土数が３点と少なく、しかも明確な遺構から出たものは１のみである。

１はⅡ区を南北に走る浅い３号溝から出土した鉄器で製品の基部と思われるが何であるかは分からない。断面形が長方形を呈し、３と同じ製品かも知れない。

２はⅡ区とⅢ区の段落ち付近の地山に貼り付いた状態で出土した鉄器で鋳造の鉄製品である。現状では半円形の形状を呈しているが、本来の形を残しているとは考えられない。断面でも分かるように若干湾曲しており鉄鍋の破片かも知れない。



第126図　二十谷遺跡出土鉄器実測図(1/2)

３は鑿状鉄器の完形品でＰ112から出土した。先端部は鋭利に研がれ僅かに曲がっている。中央部は断面方形で、基部は長方形を呈し端部が平らに作られている。木質などは残っていない。全長が10.9cm、幅は0.8を測る。

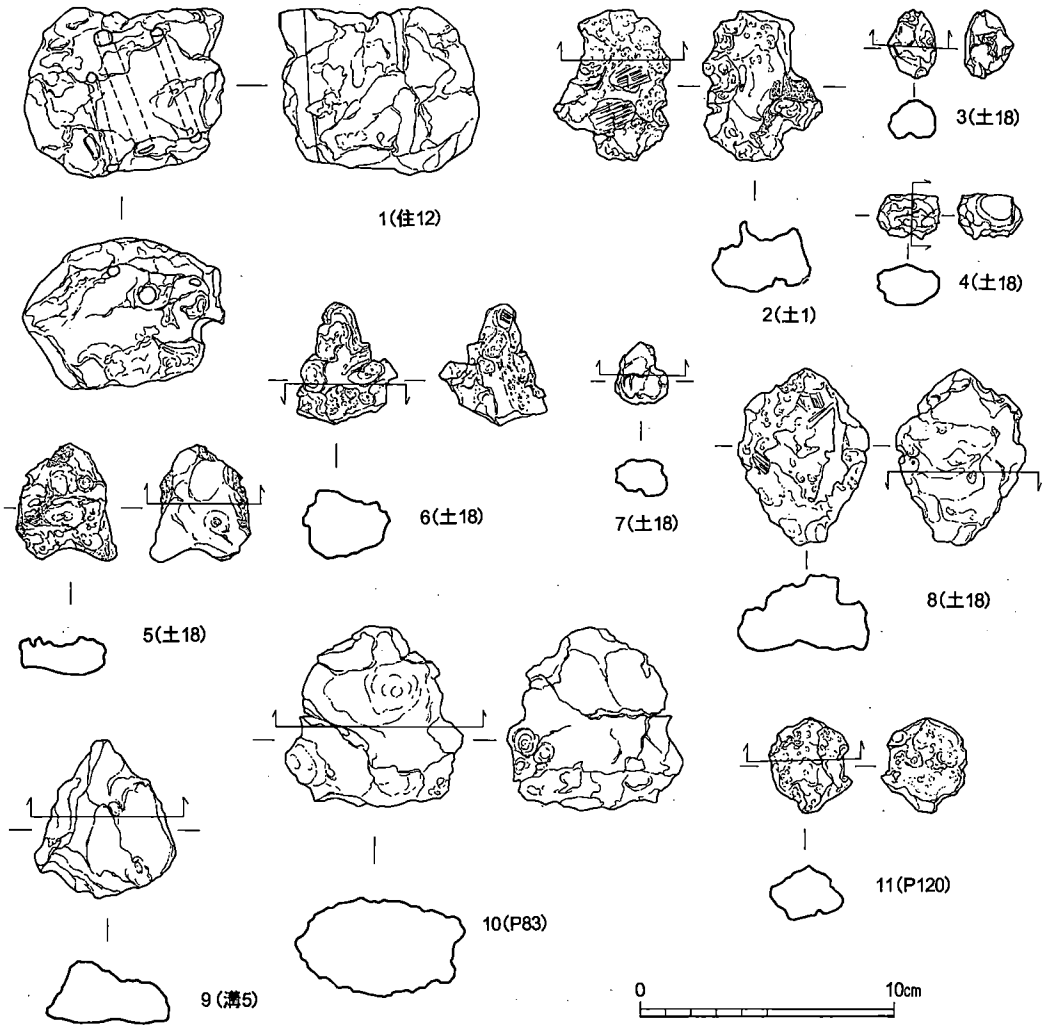
⑤鍛冶関連遺物（図版91、第127図）

第５表　鉄滓・鉄塊・炉壁観察表

※分析資料NO

資料NO	出土遺構	遺物名称	形　状	色　調	肉　眼　観　察
1	住12炉内	炉壁？	隅丸方形	赤黄色	小孔４ケ所、スサの混入なし
2　※NGT-2	１号土壙	椀形鍛冶滓	不整楕円形	茶褐色	木炭痕、片面ガラス質滓、重50ｇ
3　※NGT-7B	18号土壙	鉄塊系遺物	楕円形	茶黄色	酸化土付着、NGT-7Aと同系、重3.0ｇ
4　※NGT-7A	18号土壙	鉄塊系遺物	楕円球形	茶黄色	酸化土付着、片面丸みあり、重4.0ｇ
5　※NGT-5	18号土壙	ガラス質滓	三角形	茶黒色	表は流動状肌、裏は木炭痕と気泡、
6　※NGT-3	18号土壙	鉄滓	不整三角形	茶褐色	木炭痕と凹凸、炉底粘土と反応痕
7　※NGT-7C	18号土壙	鉄塊系遺物	不整三角形	茶褐色	亀裂、酸化土、銑鉄の可能性、重5.0ｇ
8　※NGT-1	18号土壙	椀形鍛冶滓	不整形楕円	赤褐色	小気泡、木炭痕、コークス状、多孔質
9　※NGT-9	５号溝	炉壁片	不整三角形	赤茶色	片面淡く赤変、スサはなし
10　※NGK-6	Ｐ－83	鉄塊系遺物	不整三角形	茶褐色	亀裂、酸化土付着、重200ｇ
11　※NGK-4	Ｐ－120	椀形鍛冶滓	楕円形	赤褐色	小気泡、酸化土付着、木炭痕、、重15ｇ
12　※NGK-8	２号建物	鞴羽口		赤灰色	先端外側は溶融ガラス化、スサ混入

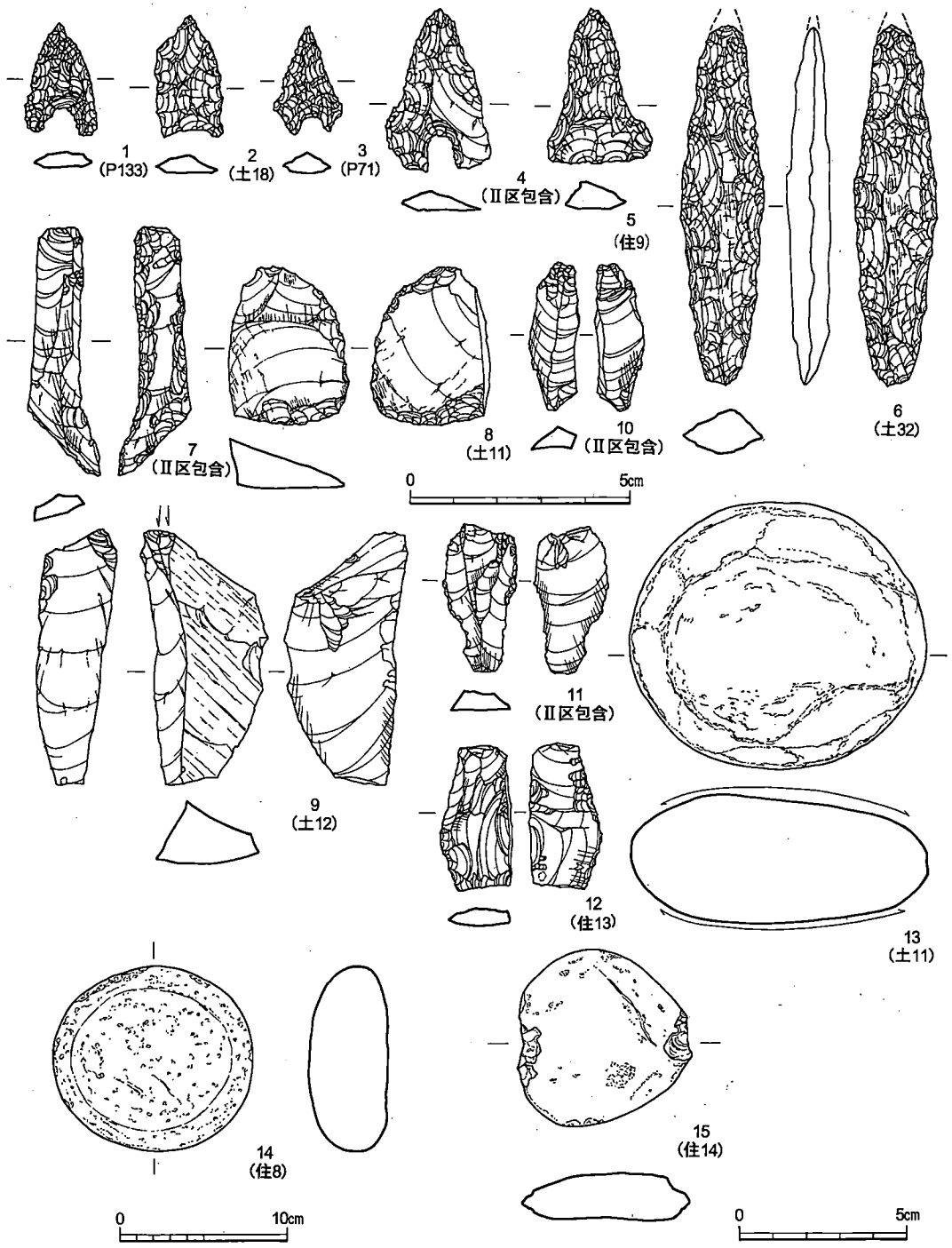
★ＦＫ試料は平成元年分析調査のため一部を除いて図示していない。



第127図　二十谷遺跡出土壁体・鉄滓・鉄塊実測図(矢印は分析個所)(1/3)

⑥石　器（図版91･92、第125・128図）

石　鏃（１～５）１は丁寧な押圧剥離によって調整が行われ、基部は大きくU字状に抉れている。最大長2.55cm、幅1.60cm、厚0.40cm、重1.10ｇである。黒曜石製でＰ133より出土。２は両基端付近側縁部に角を持つ。最大長2.40cm、幅1.50cm、厚0.50cm、重1.10ｇである。黒曜石製でＰ71より出土。３は薄く仕上げられた五角形鏃である。最大長2.75cm、幅2.00cm、厚0.45cm、重1.60ｇである。サヌカイト製で18号土壙より出土。４は背面に大きく素材面を残し加工は粗い。最大長4.60cm、幅2.30cm、厚0.55cm、重3.20ｇである。不純物を含む青灰色の黒曜



第128図　二十谷遺跡出土石器実測図(2/3・1/2・1/4)

石製でⅡ区包含層より出土。５は先端から側縁にかけての調整は入念だが、基部の作出は不明瞭である。最大長3.40cm、幅2.35cm、厚0.70cm、重3.70ｇである。Ⅱ区９号住より出土。

槍先形尖頭器（６）断面は比較的厚いが、シンメトリーに整形されている。背面と腹面のそれぞれの中央付近を通る稜は磨かれている。おそらく縄文早期の所産であろう。先端部欠損。残存長7.90cm、幅1.80cm、厚1.05cm、重13.80ｇである。サヌカイト製で32号土壙より出土。

スクレイパー（７・８）７は長幅比が５：１を越える黒曜石製の縦長剥片の両側縁に刃部加工を行っている。最大長5.50cm、幅1.65cm、厚0.50cm、重4.10ｇである。Ⅱ区包含層より出土。８は幅広不定形剥片の側縁から端部付近に刃部加工を行っている。下端刃部より上端にかけて使用にかかわると考えられる摩滅痕が認められる。最大長3.50cm、幅2.65cm、厚1.10cm、重9.10ｇである。サヌカイト製で11号土壙より出土。

グレイバー（９）無調整打面が加撃し剥離された厚い剥片を素材にしている。背面の中央を通る稜付近に２条の樋状剥離が入る。最大長5.65cm、幅2.80cm、厚1.60cm、重19.60ｇである。黒曜石製でパティナは進んでいる。12号土壙より出土。

楔形石器（10）厚い縦長剥片を使用した楔形石器である。図背面の右側剥離面は「両極技法」により剥片剥離が行われている。最大長3.25cm、幅1.10cm、厚0.60cm、重2.10ｇの黒曜石製で包含層より出土。

微細剥離を有する剥片（11･12）11はやや寸詰まりの縦長剥片の右側縁部に微細剥片が連続している。最大長3.25cm、幅2.70cm、厚0.45cm、重2.30ｇの黒曜石製で包含層より出土。12は不定形剥片の側縁部に微細剥離が連続している。現存長3.30cm、幅1.55cm、厚0.55cm、重3.40ｇである。黒曜石製で13号住居より出土。

磨　石（13･14）13は両面中央部は著しく磨かれている。器面はかなり風化しており、もろくなっている。最大長8.90cm、短径7.90cm、厚3.90cm、重362.80ｇである。凝灰岩質で11号土壙より出土。14は側面全周を磨いて正円形の形を呈している。花崗岩質で８号住居から出土。

石　錘（15）自然石を利用した石錘で緊縛するために両側を僅かに打欠いている。縦5.30cm、横5.0cm、厚1.40cmを測る。14号住居からの出土である。

石　臼（４）２号掘立柱建物のＰ１から出土した石臼の下部の破片で、周囲は欠損している。全体に弱い二次火熱を受け黒づんでいる。二つに割れて出土した。鍛冶関連遺構とどのような関連があるのかが不明である。

4．鍛冶関連遺物の金属学的調査

大　澤　正　己

概　要

中世に属する二十谷遺跡出土の鍛冶関連遺物(鉄滓、鉄塊系遺物、羽口、炉壁)の調査を行なって、次の点が明らかになった。

〈1〉　出土鉄滓は、鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形鍛冶滓などを含む。在地で産出された荒鉄(製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土など不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物)の成分調整で排出された精錬鍛冶滓や、鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温作業で派生した鍛錬鍛冶滓が存在する。

〈2〉　鍛冶原料となった荒鉄の始発原料は、低チタン(Ti)含有砂鉄が想定される。出土鉄滓の鍛冶滓の鉱物組成は、ヴュスタイト(Wüstite: FeO)と一部マグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)を晶出し、化学組成は鉄分多く、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)は0.1～0.4％と少ない成分系であった。年代は遡るが奈良時代の製鉄遺跡である長田遺跡で出土した砂鉄や製錬滓の成分系に連なる荒鉄の充当が推定されて[1]、朝倉郡内での製鉄・鍛冶の地域的特徴を提示する事ができた。

〈3〉　残存した鉄塊系遺物は、共析鋼(C：0.3％前後)から共晶組成の白鋳鉄(C：4.23％)までがある。この鉄塊系遺物には、鍛冶過程の赤熱鉄材の表面から飛散剥落した鍛造剥片を付着するので、当地で鍛打作業を伴う鍛錬鍛冶のあった事が証明される。

〈4〉　羽口や炉壁粘土は、鉄分(Fe_2O_3)を５％台を含み、軟化点を若干劣化させるが、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が22％台と高めで、耐火度は幾分向上させる成分系となる。また、塩基性成分(CaO＋MaO)は、2.78～3.12％と適度に含む。耐火度は1,405～1,450℃を呈し、古代製鉄の耐火材としては問題のない性状であった。

1．いきさつ

中世に比定される二十谷遺跡の第52－Ｂ地点は、福岡県朝倉郡杷木町大字林田字二十谷に所在する。九州横断自動車道関連調査で検出された遺構は、竪穴状土壙や掘立柱建物でこれらの共伴遺物として鍛冶関連遺物が出土した。これらの遺物を通して、当時の鉄生産鉄器製作の実態を把握する事を目的として、出土遺物の金属学的調査を行った。

2．調査方法

2－1．供試材

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目					備考
				大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	CMA調査	化学組成	耐火度	
NGT－1	鉄滓	土－18	中世	69×50×30	73	○	○		○		平成9年度分析
2	〃	Ⅲ区土－1	〃	59×46×25	50	○	○		○		〃
3	〃	土－18	〃	47×42×27	36	○	○				〃
4	〃	P－120	〃	37×30×21	15	○	－				〃
5	鉄滓(ガラス質)	土－18	〃	46×35×15	18	○	－				〃
6	鉄塊系遺物	P－83	〃	70×70×39	200	○	○	○	○		〃
7A	〃	土－18	〃	25×17×16	4	○	－				〃
7B	〃	〃	〃	26×19×14	3	○	○				〃
7C	〃	〃	〃	24×20×15	5	○	－				〃
8	羽口	2号掘立柱P－1	〃	80×85×37	216	○	－		○	○	〃
9	炉壁	溝5	〃	52×50×25	40	○	－		○	○	〃
FK－9	鉄塊系遺物	土壙19	〃	20×15×10	10	○					平成元年度分析
10	鉄滓	P－120	〃	50×30×15	25	○		○			〃
11	〃	Ⅲ区土壙－1	〃	65×45×20	75	○					〃
12	〃	2号掘立柱P－17	〃	105×90×30	455	○					〃
13	〃	2号掘立柱P－3	〃	130×100×50	740	○					〃
14	羽口	2号掘立柱P－17	〃	80×70×33	225	○		○		○	〃

Table. 2 供試材の化学組織

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナシウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	耐火度 (℃)
NGT－1	二十谷	土壙－18	鍛錬鍛冶滓	中世	47.98	0.46	40.21	23.26	18.71	5.59	3.70	1.11	1.08	0.45	0.09	0.29	0.02	0.04	0.24	0.15	0.00	0.005	30.64	0.639	0.006	
2	〃	Ⅲ区土－1	〃	〃	35.86	0.42	33.02	13.97	29.26	8.87	4.35	2.15	2.39	0.82	0.18	0.41	0.03	0.04	0.41	0.16	0.01	0.005	47.22	1.317	0.011	
6	〃	P－83	鉄塊系遺物	〃	43.77	0.26	31.40	27.31	21.29	6.32	3.12	1.27	1.70	0.55	0.11	0.29	0.02	0.05	0.33	0.19	0.02	0.005	34.25	0.782	0.007	
8	〃	2号掘立柱P－1	羽口	〃	4.49	0.01	0.95	5.35	53.26	22.73	1.60	1.52	2.36	1.92	0.07	0.87	0.03	0.01	0.16	Igloss 9.06	0.01	0.005	83.39	18.572	0.194	1405
9	〃	溝5	炉壁	〃	4.28	0.07	1.83	3.99	58.26	17.61	0.42	1.11	1.86	0.31	0.06	0.76	0.06	0.04	0.06	Igloss 13.36	0.01	0.001	79.57	18.591	0.178	1450
FK10	二十谷	P－120	鍛錬鍛冶滓	中世	48.4	0.21	41.5	22.8	17.4	5.92	2.65	0.85	1.39	0.30	0.13	0.29	0.027	0.053	0.37	0.06	0.008	0.002	28.51	0.589	0.006	
11	〃	Ⅲ区土壙1	〃	〃	52.6	0.28	27.3	44.4	12.8	4.44	0.83	0.51	0.65	0.18	0.07	0.19	0.024	0.030	0.27	0.77	0.008	0.002	19.41	0.369	0.004	
12	〃	2号掘立柱P－17	精錬鍛冶滓	〃	63.5	0.45	66.7	16.1	8.78	1.94	1.88	0.58	0.69	0.096	0.16	0.09	0.012	0.028	0.15	0.14	0.004	0.002	13.966	0.220	0.001	
13	〃	〃 P－3	〃	〃	52.2	0.32	39.4	30.4	13.4	4.31	3.60	1.02	1.13	0.26	0.075	0.19	0.014	0.062	0.24	0.46	0.008	0.002	23.72	0.454	0.004	
14	〃	〃 P－17	羽口先端溶融物	〃	7.41	0.03	2.08	8.24	55.4	21.3	2.59	1.82	3.46	2.03	0.10	0.84	0.039	0.010	0.24	0.13	0.016	0.004	86.60	11.687	0.113	
14C	〃	〃	羽口胎土	〃	4.56	0.02	0.56	5.87	53.2	21.5	1.30	1.47	2.69	1.98	0.07	0.87	0.031	0.032	0.17	Igloss 9.64	0.018	0.004	82.14	18.013	0.191	1410
FK1	長田	溝	砂鉄製錬滓	奈良時代	43.4	0.24	49.1	7.23	24.6	6.41	3.03	1.30	1.36	0.54	0.33	1.74	0.061	0.037	0.48	0.15	0.25	0.002	37.24	0.8581	0.040	
2		〃	〃	〃	45.1	0.43	50.3	7.96	22.6	6.58	2.41	1.34	0.66	0.32	0.31	1.78	0.11	0.030	0.40	0.13	0.22	0.002	33.91	0.752	0.039	
3		〃	〃	〃	19.2	0.25	14.6	10.8	49.6	14.0	1.02	1.52	2.28	0.98	0.19	1.02	0.084	0.026	0.19	0.15	0.09	0.002	69.40	3.615	0.053	
4		貯蔵穴	砂鉄	〃	66.2	0.00	26.1	66.7	3.45	0.69	0.57	0.22	0.068	0.032	0.15	0.91	0.14	0.004	0.16	0.06	0.26	0.001	5.03	0.076	0.014	

調査試料をTable. 1に示す。鉄滓9点、鉄塊系遺物5点、羽口2点、炉壁1点の合計18点の供試材となる。なお、供試材は、平成9年と平成元年の2回にわたって調査した結果を、一括して報告する。

2－2．調査項目

（1） 肉眼観察

（2） 顕微鏡組織

供試材は水道水で充分に洗浄・乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研摩紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研摩し、最後に被研面をダイヤモンドの3μmと1μmで仕上げ、光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物はピクラル(ピクリン酸飽和アルコール液)で、また、フェライト(Ferrite)は5％硝酸アルコール液で腐食(Etching)観察している。

（3） ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研摩した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

（4） CMA(Computer Aided X-ray Micro Analyzer)調査

EPMA(Electron Probe Micro Analyzer)にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名、X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面(顕微鏡試料併用)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に、標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組成の微小域の組織同定が可能である。

（5） 化学組成

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第1鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタ

ン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)五酸化燐(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)：ＩＣＰ(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

（6） 耐火度

耐火度の火熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態度の温度で表示することに定め、これを耐火度とよんでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

3．調査結果

3－1．土壙－18出土品

（1） ＮＧＴ－1鉄滓

① 肉眼観察：鍛冶炉の炉底に堆積形成された小型の2段重ねの椀形鍛冶滓である。平面は不整楕円形。表面は中窪みで木炭痕と気泡を散発させる。色調は赤褐色で肌荒れはない。裏面は歪な瘤状突起に幅10㎜前後の木炭痕を5点程深く刻む。破面は黒色コークス状多孔質。

② 顕微鏡組織：Photo. 1の①～③に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴュタイト((Wüstite: FeO)と淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト(Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温鍛接で派生した鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 1の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、489Hvであった。ヴュタイトの文献硬度値が450～500Hvの範囲であって[2]、この中に収まり、当結晶はヴュタイトに同定される。

④ 化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)が47.98%に対して金属鉄(Matallic Fe)が0.46%、酸化第1鉄(FeO)40.21%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)23.26%の割合である。ガラス質成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)は30.64%で、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)を4.81%と高めに含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)は0.29%、バナジウム(V)0.00%と少なくかつ、酸化マンガン(MnO)も0.09%と低値である。更に銅(Cu)も0.005%であって脈石成分はあまり含有されていない。この成分系は鍛冶も最終工程に近い鍛錬鍛冶滓に分類される。

（2）ＮＧＴ－3：鉄滓

① 肉眼観察：椀形状になりきっていない成長過程の滓で、流出状先端を留めた滓である。表面は茶褐色を呈し、木炭痕や凹凸をもつが肌荒れは少ない。裏面も茶褐色で弯曲面をもち、炉底粘土との反応痕と木炭痕を残す。平面は不整三角形に近い滓である。

② 顕微鏡組織：Photo. 2の①～⑤に示す。鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトと灰色盤状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。この晶癖は鍛錬鍛冶滓に分類される。なお、④⑤のファイヤライト主体で、これに微細なヴスタイトを晶出する組織は、椀形滓底面側で炉底粘土と接触した個所で形成された組織である。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 2の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は490HVであり、ヴスタイトに同定される。

（3）NGT－5：鉄滓（ガラス質滓）

① 肉眼観察：軽質ガラス質滓である。表面は黒色光沢質で流動状肌をもつ。裏面は黒色地に赤褐色鉄錆を発し、木炭痕と気泡を発し、反応痕による荒れ肌を有す。羽口先端の溶融や、赤熱鉄材の表面酸化防止に塗布された粘土汁の溶融物である。

② 顕微鏡組織：Photo. 3の①に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグ中に微細な金属鉄粒子が散在する。

（4）NGT－7A：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：表層全体が酸化土砂に覆われた楕円球状で4 gの小鉄塊である。

② 顕微鏡組織：Photo. 4の①～③に示す。表層にファイヤライト主体で微小白色粒状結晶のヴスタイトを晶出する表皮スラグを付着した小鉄塊で、金属鉄は錆化されて残留せずにゲーサイト（Goethite：α-FeO・OH）となっていた。炭化物の痕跡も定かでないが、小鉄塊の楕円状の形態から、炭素量の多い銑鉄が想定される。

（5）NGT－7B：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：該品も酸化土砂に覆われた楕円状の小鉄塊で3 gを測る。前述のNGT-7Aと同系である。

②顕微鏡組織：Photo. 5の①～⑨に示す。小鉄塊の金属鉄は残留していなかったが、僥倖にも共晶組成の白鋳鉄（C：4.23%）の痕跡が確認できた。白鋳鉄（White cast iron）は別名白銑ともいい、破面が銀白色を呈することからこのように呼ばれる。

組織は①～③でみられる様に板状結晶のセメンタイト（Cementite：Fe_3C、白色の白い結晶。該品は錆化されて白色ではなくて反転して黒くなる）と、地のオーステナイト（常温ではパーライト）とセメンタイトの共晶のレデブライト（Ledebulite）で構成される。製鉄炉で生成された鉄塊で、鍛冶原料として工房へ搬入されたものであろう。

次に注目したいのは④～⑨に示した小鉄塊表面付着の鍛造剥片である。鍛造剥片は、鉄素材を大気中で加熱、鍛打すると表面酸化膜が剥離・飛散する。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼

ばれる。鍛冶工程の進行により、初期段階では凹凸面をもち、厚手で小豆色を呈するが、鉄素材が平坦度を増すと、これに合せて剥片も平面となり黒褐色から青味を帯びた銀色で光沢をもち、鉄素材が成型されて仕上げ段階になると、赤熱温度も下げられて剥片も極薄手となり、黒色で半光沢状に変化してゆく。この様に鍛造剥片は、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物である[3]。

鍛造剥片は極めて微細な遺物で大きな剥片で5㎜前後、仕上げ段階の小さなものは1㎜以下で、その厚みは1～0.1㎜程度の派生物である。発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶跡の床面の土砂を水洗することにより検出可能となる。鍛冶工房の調査に当っては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を採り上げ、水洗・磁選・秤量により分布状況を把握すれば、工房内の作業空間配置の手掛りとなる重要な遺物になりうる。福岡県の調査例では中間研志氏の奈良尾遺跡の報告が参考になろう[4]。併せて拙稿の粒状滓と鍛造剥片の調査報告を参照頂ければ幸いである[5]。

Photo. 5の④～⑨の鍛造剥片は仕上げ段階の派生物であり、酸化被膜の相は次の通りである。鉄素材は鍛冶炉内で加熱すれば速やかに酸化して表面に硬い黒皮を生ずる。このものは⑤⑦に文字を打込んでいる様に、微厚の外層ヘマタイト(Hematite：Fe_2O_3)中間層のマグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)、および内層のヴュタイト(Wüstite: FeO)となる。なお、該品の内層側表面も剥離後に再酸化を受けてヘマタイト層が発生している。

鍛冶剥片は基本的には3層から構成されて、このうち、ヘマタイト相は1,450℃を越えると存在しなく、ヴュタイト層は570℃以上で生成されるのは、Fe-O系平衡状態図で説明がつく[6]。

鍛造剥片は酸化膜の一種であるが、地下に埋蔵されて歳月が経つと風化現象が起る。⑤は鍛造剥片の研摩直後の腐食液につける前の組織であって、淡く3層構成がみられる。これに対して⑦は王水(塩酸Hcl、3：硝酸HNO_3、1)で腐食(Etching)すると、3層分離がかなり明瞭となり、ヘマタイトは侵されず、マグネタイトは黄変し、ヴュタイトは黒変する。しかし、当鍛造剥片は本来の組織ではなくて、若干の風化を受けている。

以上の如く、当鉄塊系遺物には、鍛打作業に伴う派生物を表皮層に付着しているのは、土壙D－18内での鍛冶工房の可能性を窺わせるものである。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 5の⑧は鍛造剥片の中間層のマグネタイト層の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は486Hvで、マグネタイト文献値の500～600Hvの下限を割る結果となった。風化による誤差である。また、⑨には、再度中間層マグネタイトの硬度測定を行ったが、ここでも474Hvであった。また内層ヴュタイトの硬度値も併せて測定したが、こちらは471Hvであった。ヴュタイト文献硬度値の450～500Hvの範囲に収まった。

（6）ＮＧＴ－７Ｃ：鉄塊系遺物

①　肉眼観察：茶褐色の酸化土砂に覆われた５ｇの小塊で、亀裂を走らせて金属鉄を残留した事を呈している。平面は不整三角形に近いが、こちらも球状化傾向にあり銑鉄の可能性をもつ。

②顕微鏡組織：Photo. 6の①～⑨に示す。金属鉄は残留せずに、共晶組成の白鋳鉄と表層側は白鋳鉄が脱炭されて亜共析鋼となったパーライト(Pearlite)の組織が認められた。白鋳鉄組織が①～③、亜共析鋼のパーライト組織が④⑤である。

ここでパーライトについて簡単に述べたおく。パーライトは、フェライトとセメンタイとが交互に重なり合って構成された層状組織である。このパーライトの占める面積は炭素含有量の増加にともなって増し、焼きならし状態では0.4％前後で約半分、0.77％で全部がパーライトとなる。④⑤の組織個所の炭素含有量は、0.3％前後が想定される。

このパーライトが少ないと軟質で、多くなるにしたがい、硬さ、引張強さは増加し、逆に伸び、衝撃値などは減少する。当小鉄塊は鍛冶炉の中で「下げ」による白鋳鉄の脱炭処理が施されかけたが、何らかの原因で残された可能性をもつ。これを裏付けるのが⑥に示したヴュタイトの凝集した組織をもち、加熱処理の痕跡を残す。

一方、当小鉄塊の表層部にも鍛造剥片の付着が確認されて、⑦～⑧に提示した。18号土壙内には鍛造剥片が存在した可能性をここでも見出すことができた。

小　結

18号土壙から出土した調査品は６点で、鍛冶関連遺物であった。そのうちの２点が鍛冶炉の炉底に堆積形成された椀形状の鍛錬鍛冶滓、１点は粘土分の溶融したガラス質滓である。残る３点は、鍛冶原料にもなりうる小塊の鉄塊系遺物であった。この小鉄塊の表層には、赤熱鉄材から発生する酸化被膜の鍛造剥片を付着して、当土壙内で鍛打作業の可能性が想定される遺物と推定された。

ここで問題となるのが、18号土壙の性格ずけである。当遺構は北東２面にＬ字形の溝を巡らし、もし18号土壙鍛冶工房であったなら、防湿設備ともとれる。鍛冶炉そのものは、浅い火窪であり、削平されていても鍛冶工房の可能性が考えられそうである。当遺構の床面土砂でもあれば、更なる検討もできるであろうが、それもかなわない。今後の研究課題として類例を待つしかあるまい。

３－２．土壙－19出土品

（１）　ＦＫ－９：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：赤黒色の錆汁を滲ませた10ｇの小鉄塊で亀裂を走らせる。平面が不整三角形で丸味を帯びて銑鉄に分類される外観をもつ。

② 顕微鏡組織：Photo. 9の①～③に示す。金属鉄の残留はないが、過共晶組成（C：4.23％以上）の白鋳鉄の痕跡をもつ小鉄塊である。通常、研摩直後の断面に白色部が現われると金属鉄であるが、該品はナイタル腐食（Etching）で変化がなく、酸化組織となっている。

小　結

19号土壙は、前述した18号土壙のＬ字溝を挟んで北側に位置する。出土小鉄塊は、同じく18号土壙で出土した材質に近似するもので、19号土壙は鍛冶原料の小割り、選別場などがあったのか、単なる紛れ込みなのか興味を呼ぶ遺構である。

３－３．Ⅲ区土壙－１土壙出土品

（１）　ＮＧＴ－２：鉄滓

① 肉眼観察：不整楕円形で長軸方向片側に出張りをもつ小型（50ｇ）の椀形鍛冶滓のほぼ完形品である。表裏共に茶褐色で木炭痕を深く残す。側面に黒色ガラス質滓を付着する。なお、破面は黒色コークス状の多孔質であった。

② 顕微鏡組織：Photo. 1の⑤～⑧に示す。鉄滓の鉱物組成の主体は④にみられる白色粒状結晶のヴｽタイトであり、この中にはマグネタイトも一部晶出し、これらの粒間に淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、基地の黒色色ガラス質スラグからなる。また、裏面の表層側には⑤に示した淡灰色長柱状結晶のファイヤライトや茶褐色球状結晶（カルシウム系の鉱物相か）が認められた。いずれにしろこの晶癖は鍛錬鍛冶滓に分類される。なお、この椀形滓中には金属鉄の滴下があったが、それについては硬度測定の項で触れる。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 1の⑥は滴下した金属鉄のフェライト（Ferrite：α鉄もしくは純鉄の金相学上の呼称）の硬度を測定したところの圧痕で、硬度値は116Hvであった。フェライトの値としては若干高め傾向であるが、ヴｽタイトやマグネタイト、ファイヤライトに比べると軟かい。⑦は白色粒状結晶の硬度値は、513Hvでマグネタイトの文献硬度値の範ちゅうに収まる。また⑧の淡灰色長柱状結晶は599Hvの硬度値であって、ファイヤライトに同定される。

④ 化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分が低めでガラス質の多い成分系となっている。すなわち、全鉄分（Total Fe）は35.86％に対して、金属鉄（Metallic Fe）が0.42％、酸化第１鉄（FeO）33.02％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）13.97％の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O_2＋Na_2O）は47.22％であり、このうちの塩基性成分（CaO＋MgO）は多くて6.50％を占める。脈石成分はあまり高めではなくて、二酸化チタン（TiO_2）が0.41％、バナ

ジウム(V)0.01%、酸化マンガン(MnO)0.18%、銅(Cu)0.005%に留まる。この成分系も鍛錬鍛冶滓に分類される。

(2) FK−11：鉄滓

① 肉眼観察：平面が楕円形の椀形鍛冶滓である。表面が赤褐色で粗鬆肌で木炭痕を残す。裏面は、炉底粘土との反応痕をもち、木炭の噛み込みがある。一部欠損するが中型椀形滓で75gを測る。

② 顕微鏡組織：Photo. 10の①～③に示す。該品は錆化鉄をもち、組織は針状フェライトとパーライトの混在した過熱組織(Over heated Structure)をもち、炉内で高温に加熱された熱履歴を留める。鉄滓の鉱物組成は白色粒状結晶のヴスタイトと、淡灰色木ずれ結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓に分類できる。

③ 化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分が多くてガラス質成分や脈石成分の少ない成分系である。全鉄分(Total Fe)は52.6%に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.28%、酸化第1鉄(FeO)27.3%、錆化鉄が多くて酸化第2鉄(Fe_2O_3)44.4%の割合となる。ガラス質成分(SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O_2+Na_2O)は19.41%、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)は1.34%を占む。二酸化チタン(TiO_2)が0.19%、バナジウム(V)0.008%、酸化マンガン(MnO)0.07%などは少なく、この成分系は鍛錬鍛冶滓に分類される。

小 結

Ⅲ区1号土壙は、調査区域の南西に位置する小型土壙である。2点の調査は椀形鍛冶滓で鍛錬鍛冶滓に分類された。周辺に鍛冶炉があるのだろうか。それとも18号土壙との関連遺物であろうか。後者であっても鉄滓組成は近似したものであって矛盾はない。

3−4．P−120出土品

(1) NGK−4：鉄滓

① 肉眼観察：平面が楕円形状の超ミニサイズの椀形鍛冶滓で15gを測る。表面は赤褐色を呈し、黄褐色錆と共に小気泡を発し、肌は若干荒れるが表裏は酸化土砂被膜で薄く覆われる。裏面は椀形状突起を有し、木炭痕と炉底粘土との反応痕を残す。

② 顕微鏡組織：Photo. 2の⑥～⑧に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイトが樹状晶に晶出し、その粒間を不定形状の淡灰色結晶のファイヤライトと、基地の暗黒色ガラス質スラグが埋める。また、椀形鍛冶滓の底部に相当する個所は、ヴスタイトの晶出は少なく、淡灰色盤状結晶のファイヤライトと、茶褐色多角形結晶の鉱物相(Ca系か)が占める。鍛錬鍛冶滓に分類される。

（2） ＦＫ－10：鉄滓

① 肉眼観察：該品も25ｇのミニ椀形鍛冶滓である。表面は黄褐色の粗鬆肌に木炭痕を残す。裏面も黄褐色であるが肌は滑らかで、これに木炭痕が認められた。平面は不整梯形状を呈する。

② 顕微鏡組織：Photo. 9の④⑤に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイトと、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓に分類される。

③ 化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は48.4％に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.21％、酸化第１鉄(FeO)41.5％、酸化第２鉄(Fe_2O_3)22.8％の割合であった。ガラス質成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O_2＋Na_2O)は28.51％で、このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)は3.50％含む。二酸化チタン(TiO_2)が0.29％、バナジウム(Ｖ)0.008％、酸化マンガン(MnO)0.13％、銅(Cu)0.002％など含有して鍛錬鍛冶滓に分類される。

小 結

Ｐ120出土鉄滓は15ｇと20ｇの小型の椀形鍛冶滓で、鉱物組成はヴスタイトを晶出し、脈石成分は少なくて鍛錬鍛冶滓に分類された。柱穴出土の鉄滓は祭祀的な意味合いがあるのであろうか。それとも根石的な実用性からの投入か興味を呼ぶところである。

３－５．Ｐ－83出土品

（1） ＮＧＫ－６：鉄塊系遺物

① 肉眼観察：平面が不整三角形を呈し、酸化土砂に覆われた茶褐色の鉄塊系遺物である。亀裂を走らせ、赤黒色の錆汁を滲ませ、一部に鉄滓表皮の気泡が認められるので含鉄鉄滓とするのが適切かも知れぬ。200ｇの重量をもつ。

② 顕微鏡組織：Photo. 3の②～⑧に示す。②は左側に表皮スラグのヴスタイトとファイヤライトを晶出する組織をもち、右側の白色部が金属鉄の研摩のままで、腐食(Etching)なしの状態である。また、③④は表皮スラグのヴスタイトとファイヤライトを提示した。⑤⑥は金属鉄の表層側をナイタル腐食(Etching)で現われた過熱組織(Over heated Structure)である。パーライトは黒く、フェライトは白く針状のウイッドマンステッテン組織(Widmännstatten Structure)を呈している。当鉄塊は1,200℃前後の高温に加熱されたのち空冷された熱履歴が想定される。炭素含有量は0.6％前後の亜共析鋼に分類される。

なお、当鉄塊の一部でも⑦にみられる暗黒色ガラス質スラグ中に白い金属鉄の錆化したゲーサイトと共に茶褐色不整形結晶のカルシウム系酸化物が認められた。

③ ビッカース断面硬度：Photo. 3の⑧に全面パーライト析出部の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、149Hvであった。組織に対して、やや軟質傾向の値であった。

④ ＣＭＡ調査：２視野の調査を行なった。まずPhoto. 7のSE(２次電子像)に示した５相

の鉱物相であり、その高速定性分析結果はFig. 1の通りである。A－Rankで検出された元素は鉄(Fe)を中心にガラス質成分(Si＋Al＋Ca＋Mg＋K＋Na)で、これらは酸化物なので酸素(O)が加わり、他に燐(P)と塩素(Cl)が検出された。また、B－Rankに砂鉄特有元素のチタン(Ti)が認められた。

この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析値がPhoto. 7である。SE(2次電子像)の3と7の番号をつけた大小の白色粒状結晶は、鉄(Fe)と酸素(O)にのみ白色輝点が集中し、定量分析値は3が96.5%FeO、7で97.1%FeOとヴュタイト(Wüstite：FeO)が同定される。

4の番号個所の茶褐色不整形結晶は、鉄(Fe)、硅素(Si)、カルシウム(Ca)に白色輝点が集中し、定量分析値は9.7%Ca－85.2%FeO－19.5%SiO_2組成となり、灰かんらん石のオリピン(Olivine)系鉱物相が同定される

次にSE(2次電子像)の5の番号の非晶質暗黒色個所は、カリウム(K)とアルミニウム(Al)、硅素(Si)に白色輝点が集中し、定量分析値は12.2%K_2O－25.4%Al_2O_3－57.3%SiO_2の組成となりミクロクリン(Microcline：$KAlSi_3O_8$の鉱物相が想定される。最後に6の番号個所は硅素(Si)、アルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)に白色輝点が集中し、12.6%CaO－24.2%FeO－22.5%Al_2O_3－34.7%SiO_2の組成となり鉄ゲーレナイト(Iron gehlenite：2CaO・$(Fe、Al)_2O_3$・SiO_2が同定される。

残るもう1つの視野はPhoto. 8のSE(2次電子像)に示す白色粒状結晶と、淡灰色木ずれ状結晶のあり、これの高速定性分析結果がFig. 2である。A－Rankの検出元素は、鉄(Fe)とガラス質成分(Si＋Al＋Ca＋Mg＋K＋Na)に酸素(O)、燐(P)が加わる。また、B－Rankのチタン(Ti)の検出は、前述のFig. 1と大差ない結果となった。

この高速定性分析結果の特性X線像と定量分析結果がPhoto. 8であり、SE(2次電子像)の1の番号の個所は白色粒状結晶であり、93.5%FeO－1.1%Al_2O_3－1.3%TiO_2の定量値はヴュタイトに同定されて、微量のアルミニウム(Al)とチタン(Ti)を固溶する。また、淡灰色微小結晶と暗黒色がラス質スラグを含む10μmエリアの定量値は8.8%CaO－30.2%FeO－14.3%Al_2O_3－38.0%SiO_2組成で鉄－ゲーレナイト(Iron gehlenite：2CaO・$(Fe、Al)_2O_3$・SiO_2系が同定される。

当鉄塊系遺物の表皮スラグには、ヴュタイト中に少量の砂鉄特有元素のチタン(Ti)を固溶しており、低チタン含有砂鉄の酸性砂鉄が製鉄原料であった可能性が考えられた。

⑤ 化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は43.77%に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.26%、酸化第1鉄(FeO)31.40%、錆化鉄を若干含んで酸化第2鉄(Fe_2O_3)27.31%の割合であった。ガラス質成分(SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O_2＋Na_2O)は34.25%で、このうちに塩基性成分(CaO＋MgO)は4.39%と高めに含有する。CMAで同定されたオリピンや

鉄－ゲーレナイトのカルシウムとの関連がここに現われている。二酸化チタン(TiO_2)は0.29%、バナジウム(V)0.02%、酸化マンガン(MnO)0.11%などは鍛錬鍛冶滓の成分系である。

小　結

P－83出土鉄塊系遺物は、金属鉄は0.6%前後の炭素量を含む亜共析鋼で、表皮スラグはヴスタイトを晶出し、鉄滓の化学組成は鍛錬鍛冶滓に分類される成分系であった。前述してきた一連の鉄滓と同系の履歴に想定される。

3－6．2号掘立柱建物出土品

(1)　FK－12：鉄滓

①　肉眼観察：平面が帆立貝状で455gを測る大型椀形鍛冶滓である。表面は黄褐色で平坦面をもち、粗鬆肌に木炭痕を残す。裏面は赤褐色で反応痕と木炭の噛み込みのある荒れ肌を有する。

②　顕微鏡組織：Photo. 9の⑥に示す。鉱物組成は、大きく成長した白色粒状のヴスタイトで、その粒間を淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトと極く微量のガラス質スラグが埋める。鍛錬鍛冶滓的に分類しておく。

③　化学組成分析：鉄分が多くて脈石成分の少ない成分系である。全鉄分(Total Fe)は63.5%に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.45%、酸化第1鉄(FeO)66.7%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)16.1%の割合である。ガラス質成分は低めで13.97%で、このうちの塩基性成分(CaO+MgO)は2.46%を占める。二酸化チタン(TiO_2)は0.09%、バナジウム(V)0.004%、酸化マンガン(MnO)0.16%、銅(Cu)0.002%、随伴微量元素は少ない。成分的には鍛錬鍛冶滓的、もしくは、廃鉄器の再生鍛冶を考えたがよさそうな値である。

(2)　FK－13：鉄滓

①　肉眼観察：平面が楕円形で740gを測る大型椀滓である。表面は黄褐色で粗鬆肌で木炭痕を多量に残し、裏面は茶褐色で鍛冶炉の炉底をきれいに反転させて、これに深く木炭痕を刻む。

②　顕微鏡組織：Photo. 10の④に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイトと暗黒色ガラス質スラグで構成されて、ファイヤライトの晶出が少ない。これも前述のFK－12椀形滓に近似した組成であって大型椀形鍛冶滓の大量排出滓から精錬鍛冶滓に分類される。

③　化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)は52.2%に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.32%、酸化第1鉄(FeO)39.4%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)30.4%の割合である。ガラス質成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$)は23.72%で、このうちに塩基性成分(CaO+MgO)は4.62%と高めに含む。二酸化チタン(TiO_2)は0.19%、バナジウム(V)0.008%、酸化マンガン(MnO)0.075%など脈石成分は非常に少ない。前述のFK－12椀形滓に近似した成分系である。

（3） ＮＧＴ－８：羽口

① 肉眼観察：寸銅型の羽口である。外径が約80㎜の大口径であり、内径孔は約20㎜が推定される先端部破片である。中世の鍛冶羽口は、古代のものに比べて肉厚の大きい羽口の採用となる。先端外側は溶融して灰黒色ガラス化する。胎土はよく精整された粘土で、淡赤灰色を呈し、スサの混入があって石英を含む。先端溶融ガラス質の検鏡と、胎土分析を行った。

② 顕微鏡組織：Photo. 4 の④～⑥に示す。④は暗黒色がガラス質スラグ中に微細なファイヤライトやマグネタイトを晶出する。また⑤⑥は胎土中に混入した砂鉄が半還元状態で検出されてウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）の結晶が成長過程で捉えられた。

③ 化学組成分析：Table. 2 に胎土分析結果を示す。粘土の強熱減量のIg Lossは9.06％で熱影響で結晶構造水の飛散のほとんどない試料での分析となる。軟化点を劣化させる鉄分（Fe_2O_3）は5.35％と僅かに高めであるが、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が22.73 ％と多くて耐火度は向上させる成分系となる。砂鉄の混入があって二酸化チタン（TiO_2）は0.87％、バナジウム（V）0.01％を含む、鉄に対して有害元素となる硫黄（S）0.01％、五酸化燐（P_2O_5）0.16％と少なくて良好である。塩基性成分（CaO＋MgO）は3.12％とやや高めで、製鉄炉の炉壁であれば鉄と滓の分離を促す媒溶剤となるが、羽口の場合は孔ずまりなどに働いて芳しない成分である。

④ 耐火度：羽口胎土をゼーゲルコーンという三角堆の試験片を造り、１時間当り40～70℃の速度で温度上昇させると、荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度は1,405℃であった。通常古代製鉄の羽口では一般に使用に耐える性状である[7]。

（4） ＦＫ－14：羽口

① 肉眼観察：該品も前述したNGT-8羽口に近似した寸胴型の羽口先端部破片が供試材となる。外径90㎜で内径孔は20㎜を測る。先端部は粘土が溶融ガラス化し、これにも木炭痕を残す。

② 顕微鏡組織：Photo. 10の⑤～⑦に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグに白色多角形結晶のマグネタイトを晶出し、局部的には胎土混入の砂鉄が半還元状態で認められる。

③ ＣＭＡ調査：Photo. 12に羽口先端溶融スラグの特性Ｘ線像を示す。SE（２次電子像）の暗黒色ガラス質スラグ中にみられる白色多角形結晶には、白色輝点が集中する元素は鉄（Fe）のみであり、当結晶はマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が同定される。また、暗黒色ガラス質スラグ側には、ガラス質成分（Si＋Al＋Ca＋Mg＋Ｋ＋Na）に白色輝点が集中している。

④ 化学組成分析：Table. 2 に溶融ガラス質スラグと胎土分析結果を示す。両者の差異は、前者に鉄分と塩基性成分が若干増加する程度である。胎土分析結果は、Ig Lossは9.64％で熱影響のほとんどない試料での分析となっている。鉄分（Fe_2O_3）は5.87％、酸化アルミニウム（Al_2O_3）が21.5％、塩基性成分（CaO＋MgO）は2.77％、二酸化チタン（TiO_2）は0.87％などは前述したNGT－８羽口と大差ない成分系であった。

⑤ 耐火度：荷重なしで軟化現象を起す温度は1,410℃であった。これもNGT－8羽口胎土に準じた値である。

小 結

2号掘立柱建物のP－1の羽口、P－17の精錬鍛冶滓と羽口、P－3の精錬鍛冶滓などが検出された。ここから出土した羽口は、中世特有羽口で寸胴型の肉厚羽口で、在地賦存粘土が使用された可能性をもつ。また、鉄滓の椀形滓は18号土壙で出土品に比較して大型サイズで成分的には鍛冶原料は廃鉄器の可能性があって脈石成分が低減化したものであった。

3－7．溝5出土品

（1） NGT－9：炉壁

① 肉眼観察：平面が不整三角形を呈した粘土塊である。表は淡く赤変し、裏面は茶褐色である。スサの混入はなく、カマドあたりの炉壁であろうか。溶融ガラス化した部分はなくて、製鉄炉や溶解炉の炉壁とは趣を異する。

② 顕微鏡組織：Photo. 4の⑦に示す。鉱物組成は粘土鉱物のセリサイト(Cerisite)で、加熱温度は低く鉱物相の溶融・非晶質化などの現象は認められず、孔隙と石英破片が少量存在するのみである。

③ 化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分(Fe_2O_3)は3.99％と少なく、酸化アルミニウム(Al_2O_3)は17.11％と減少し、更に塩基性成分(CaO＋MgO)も1.53％と低下する。また、混入砂鉄も0.76％と少なくなり、前述した羽口胎土とも成分系を異にする。なお、該品の強熱減量のIg Lossも13.36％と結晶構造水が多いもので熱履歴の低いものであった。

小 結

溝5出土の炉壁は、羽口胎土と成分系を異にして、鍛冶作業の関係のないカマドあたりの炉壁が想定される。

4．まとめ

朝倉郡に所在する二十谷遺跡第52-B地点は中世に属するものである。当遺跡内から出土した鉄滓や鉄塊系遺物、羽口などから鍛冶工房の操業が想定された。その中で、18号土壙は、低チタン含有砂鉄を始発原料とした鉄素材を用いた鍛錬鍛冶が行なわれ、搬入された鉄塊系遺物表層付着の鍛造剥片から鍛打作業尾が推定されて、かつ当遺構が鍛冶工房跡の可能性が指摘できる。

なお、18号土壙出土の椀形鍛冶滓は、70ｇ以下の小型品に対して、2号掘立柱遺物柱穴出土の椀形滓は、455～740ｇの大型品で、こちらは脈石少なく、廃鉄器再生鍛冶に際して排出され

た精錬鍛冶滓に分類された。また、当柱穴からは鉄滓と共に羽口破片が共伴されてこれらが単なる紛れ込みか、根石としての使用なのか、はたまた、祭祀的な意味あいがあるのか注目される。

一方、朝倉郡内には、今回、中世の鍛冶関連遺物が出土したが、他に奈良時代の製鉄炉が検出された長田遺跡が報告されており、また、甘木市内では、7世紀代以降の古墳供献鉄滓⑥が知られていて、低チタン砂鉄原料の鉄生産地域でもある。朝倉・甘木方面はこの様に古代製鉄の動向に対しても看過できぬ地域といえる。

注

① 大澤正己「長田遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査」『九州横断自動車道関係文化財調査報告30』～朝倉郡朝倉町所在長田遺跡の調査～福岡県教育委員会　1994

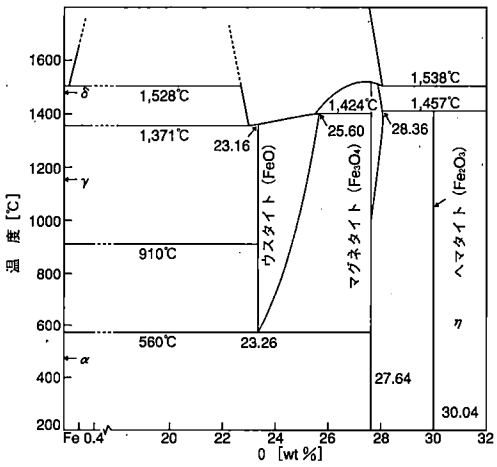
② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968。当刊行物には、ヴュタイトの硬度値は450～500Hv、マグネタイトで500～600Hv、ファイヤライトが600～700Hvとある。

③ 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘年報15』～シンポジウム　古代製鉄研究の現状〈記録集〉～1992

④ 福岡県教育委員会『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書第13集)1991

⑤ 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」④と同じ。

⑥ 森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11、朝倉書店　1972



Fe-O系平衡状態図

⑦ 大澤正己「徳永川ノ上遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『徳永川ノ上遺跡Ⅲ』(一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第9集)福岡県教育委員会1997

中世に属する徳永川ノ上遺構出土の外径10cm、内径孔1.4cmの羽口胎土の耐火度は1,370℃である。

⑧ 小池史哲他『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告12』(甘木市所在柿原遺跡群の調査Ⅲ、E・F地区)福岡県教育委員会　1987

小池史哲他『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告19』(甘木市所在柿原遺跡群の調査Ⅳ、D地区)福岡県教育委員会　1990

大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』(たたら研究会創立25周年記念論文集)たたら研究会編1983

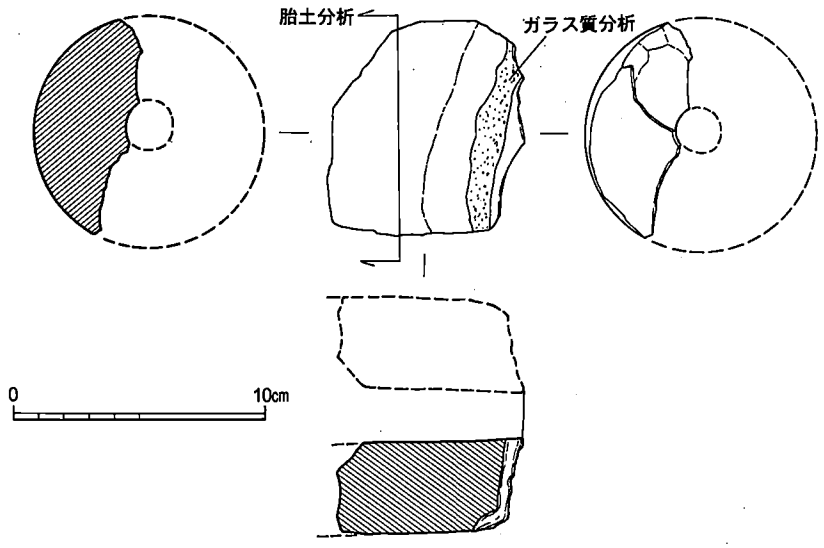
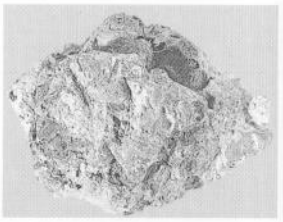


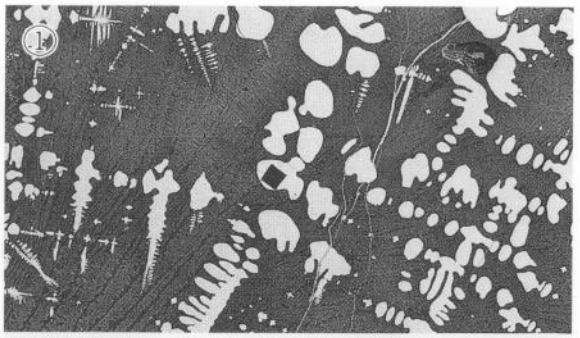
Fig. 4　二十谷2号掘立柱建物(P17)出土鞴羽口実測図(1/3)
(分析資料番号　FK14)

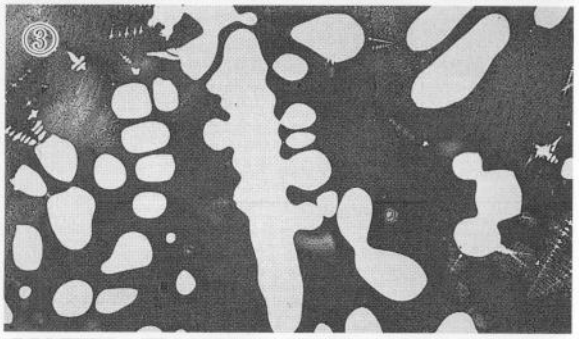
(1)　NGT-1
土壙 -18 出土

鍛練鍛冶滓

①×200、硬度圧痕
ヴスタイト：489Hv、荷重100g
②×100、③×400
ヴスタイト＋ファイヤライト



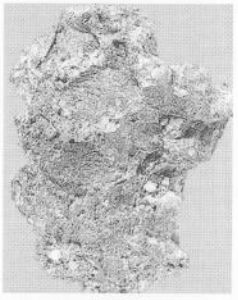


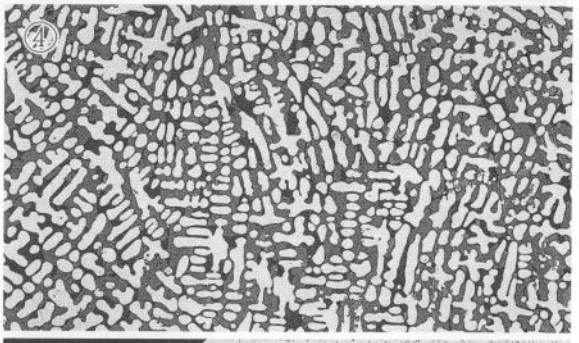


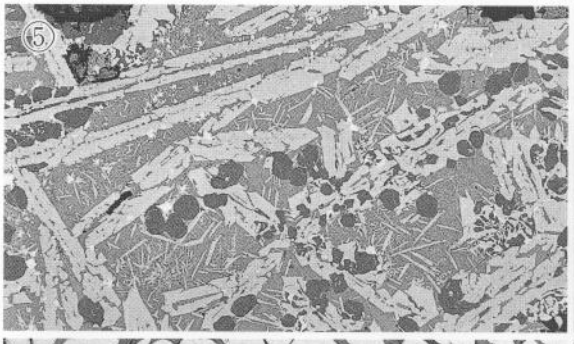
(2)　NGT-2
Ⅲ区 土壙 -1出土

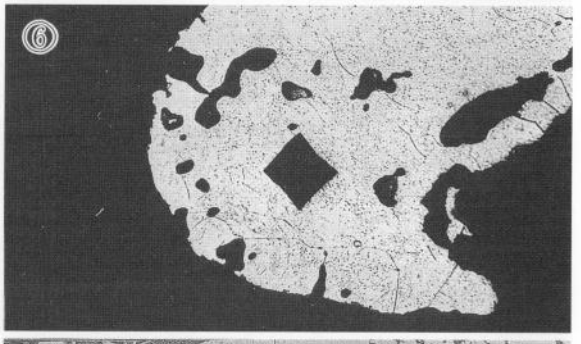
鍛練鍛冶滓

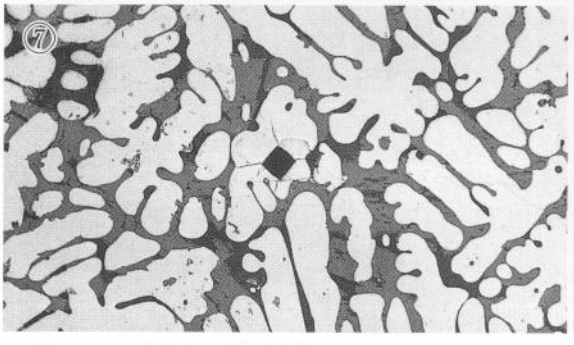
④×100 平均組織
⑤×100 底部ファイヤライト
⑥⑦⑧×200、硬度圧痕
⑥：フェライト：116Hv
⑦：マグネタイト：513Hv
⑧：ファイヤライト：599Hv











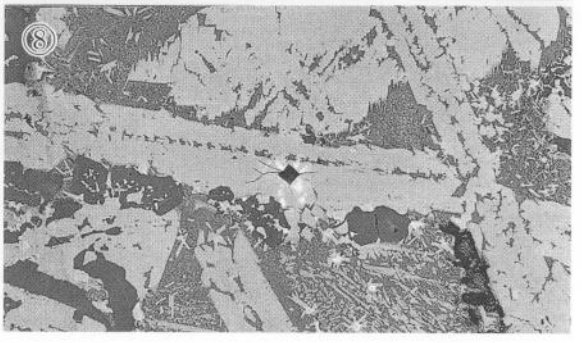
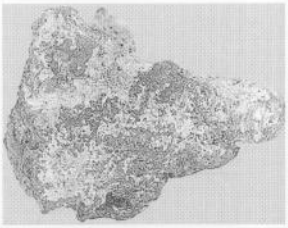


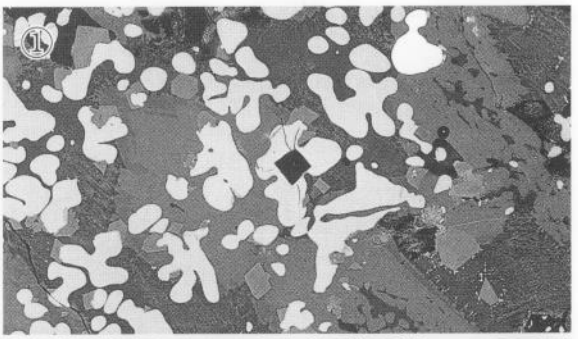
Photo.1　鉄滓の顕微鏡組織

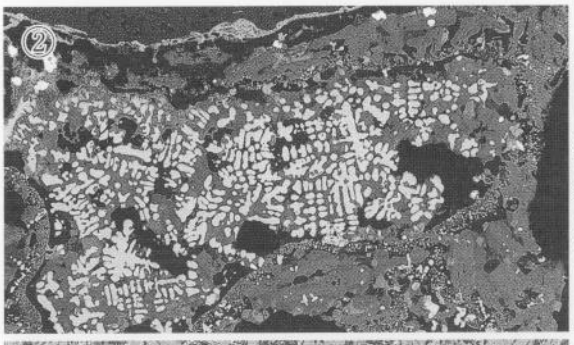
(3)　NGT-3
土壙 -18 出土

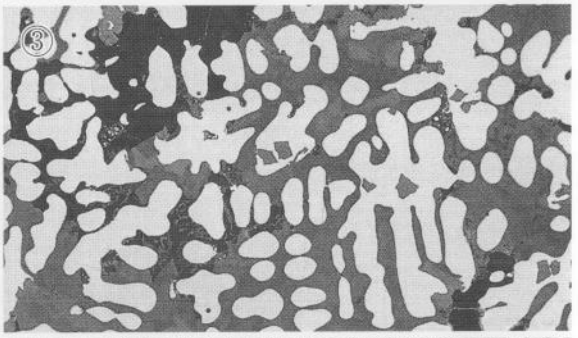
鍛練鍛冶滓

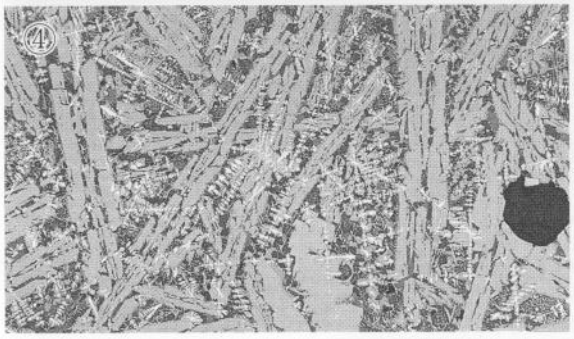
①×200、硬度圧痕
ヴスタイト：490Hv、荷重200g
②×100、③×400 ヴスタイト
④×100、⑤×400
底部側：ファイヤライト底部
側：ファイヤライト

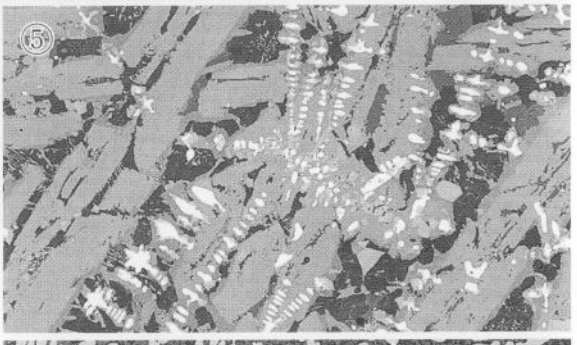








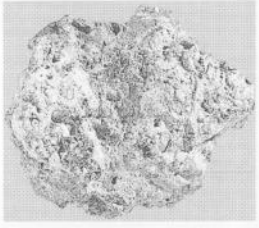


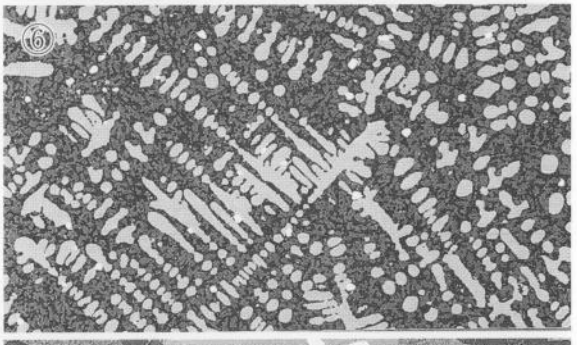


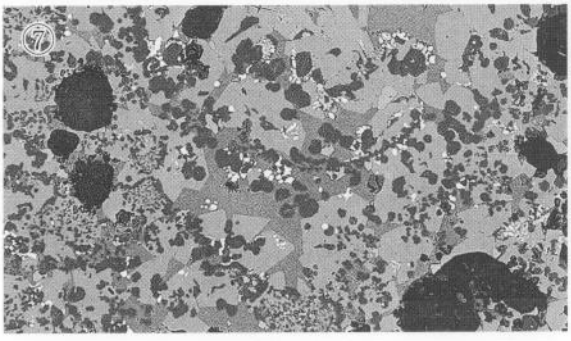
(4)　NGT-4
柱穴 P-120 出土

鍛練鍛冶滓

⑥×100 平均組織
ヴスタイト＋ファイヤライト
⑦×100、⑧×400
底部側、ファイヤライト







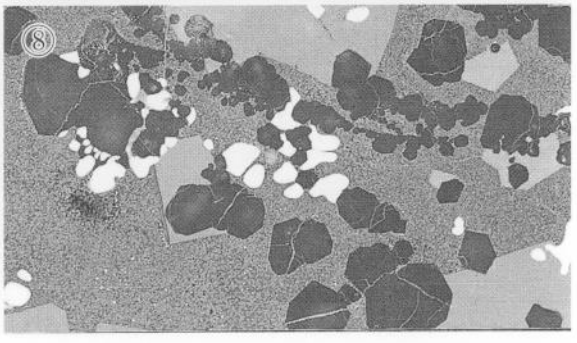
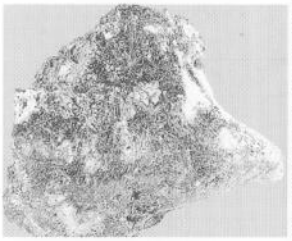


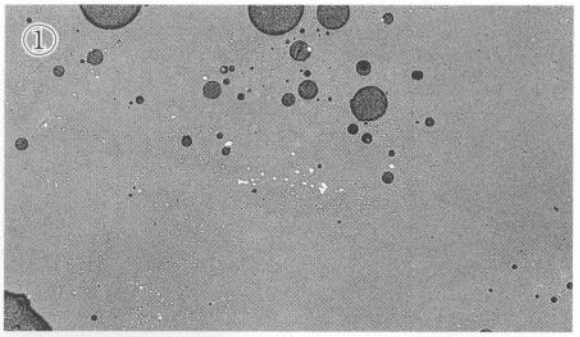
Photo.2　鉄滓の顕微鏡組織

(5)　NGT-5
土壙 -18 出土

ガラス質滓

①×100
暗黒色ガラス質スラク・中の微小金属鉄粒

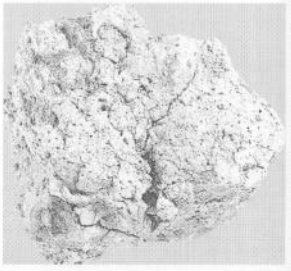


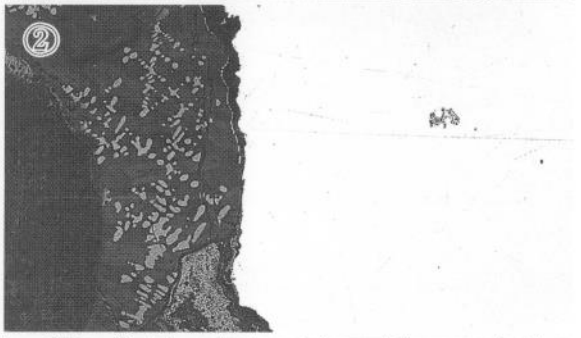


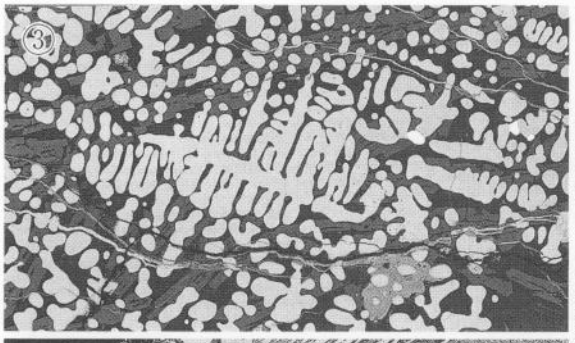
(6)　NGT-6
柱穴 P-83出土

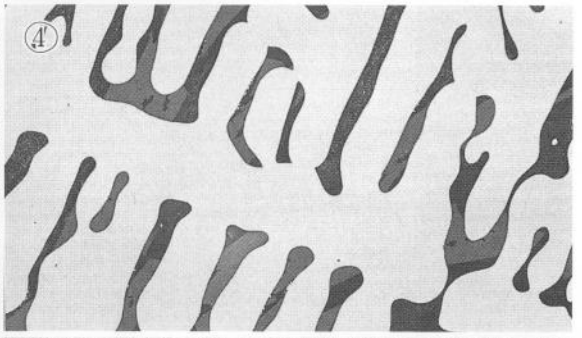
鉄塊系遺物

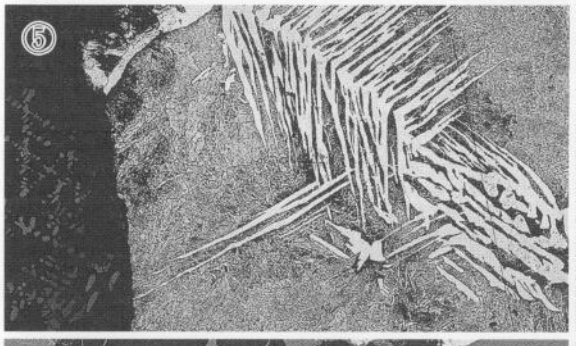
②×100 左：表皮スラグ
右側：金属鉄（no etch）
③×100、④×400、表皮スラグ
ヴュタイト＋ファイヤライト
⑤×100、⑥×400、ナイタル etch
⑦×100、表皮スラグ（ガラス）
⑧×200、パーライト：149Hv

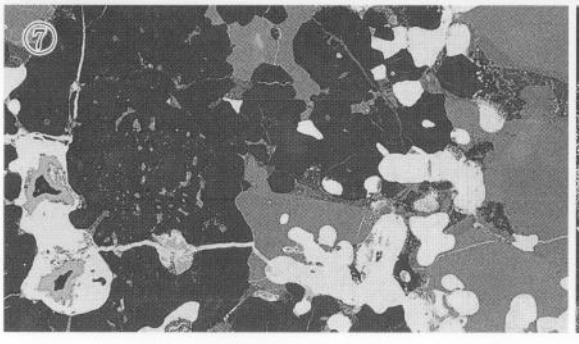












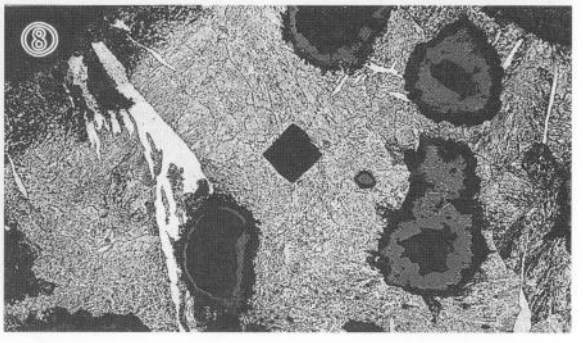
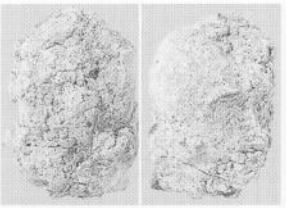


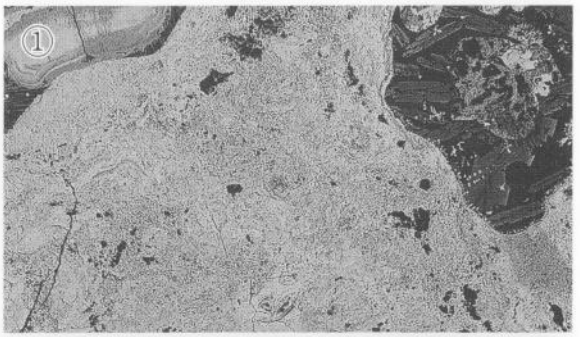
Photo.3　ガラス質鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織

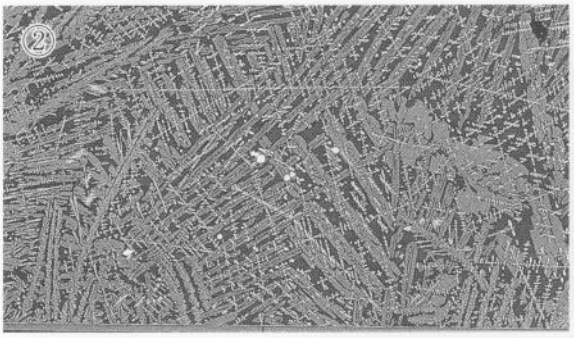
(7)　NGT-7A
土壙 -18 出土

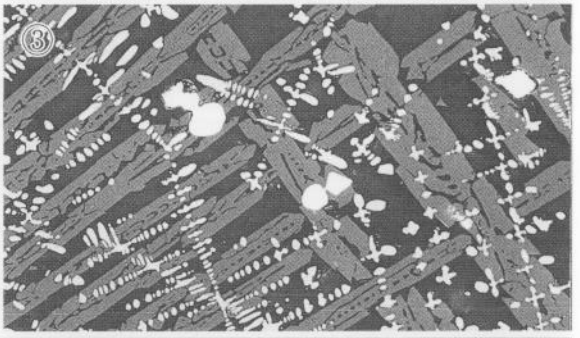
鉄塊系遺物

①×100 左：表皮スラグと錆化鉄
（ファイヤライト＋ヴスタイト）
②×100、③×400
ファイヤライト＋ヴスタイト





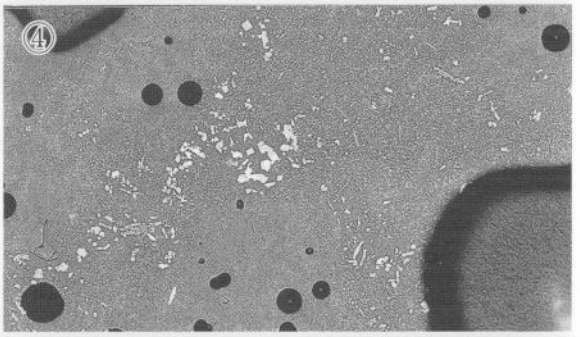


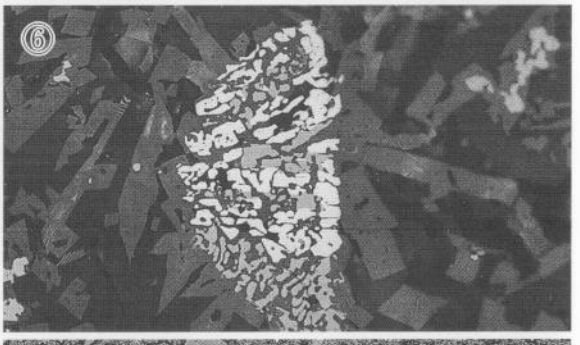


(8)　NGT-8
2 号掘立柱遺物　P-1 出土

羽口先端溶融ガラス

④×100 溶融ガラス
マグネタイトとファイヤライト晶出
⑤×100、⑥×400
混入砂鉄：半還元状態

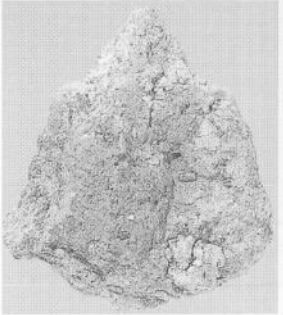




(9)　NGT-9
溝 5 出土

炉壁

⑦×100
粘土鉱物
砂鉄粒子と石英



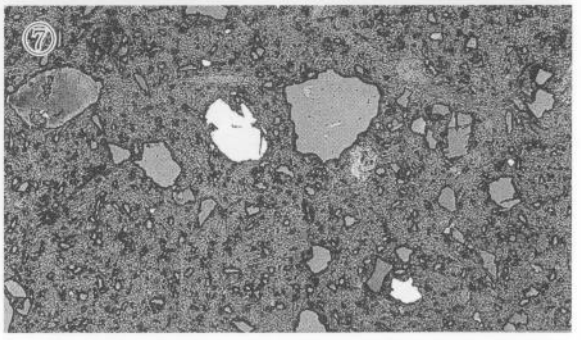
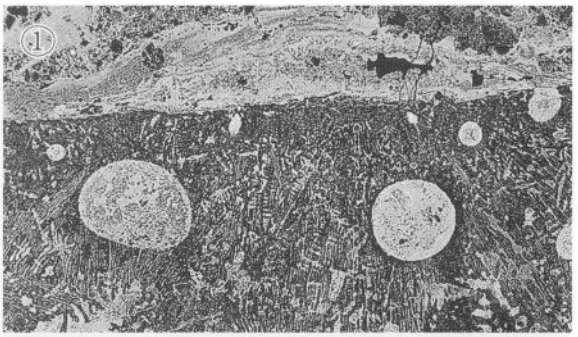
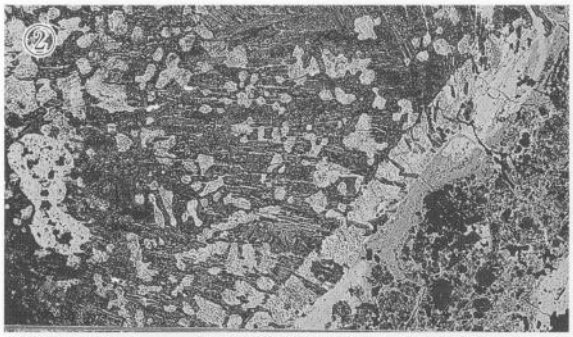
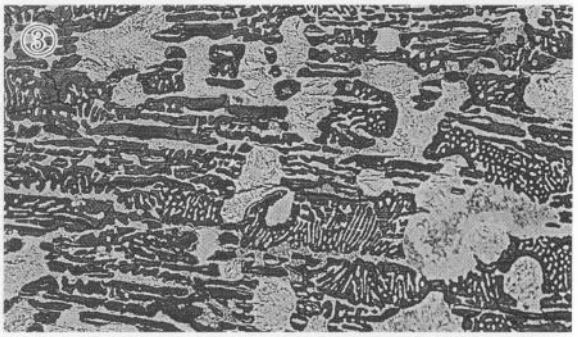


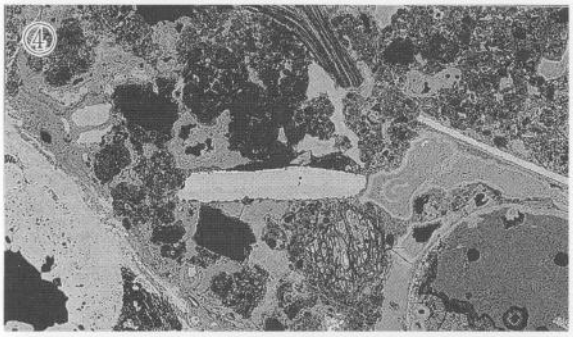
Photo.4　鉄塊系遺物、羽口、炉壁の顕微鏡組織

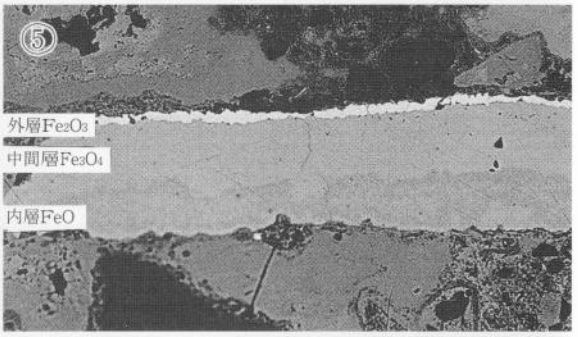
(1)　NGT-7B
土壙 -18 出土
鉄塊系遺物
①②×100 ③×400
白銹鉄（自然腐食）
④×100 ⑤×400 noetch
⑥×100 ⑦×400 王水etch
⑧⑨×200、硬度圧痕
⑧マグネタイト：486Hv
⑨マグネタイト474Hv、ヴスタイト：471Hv

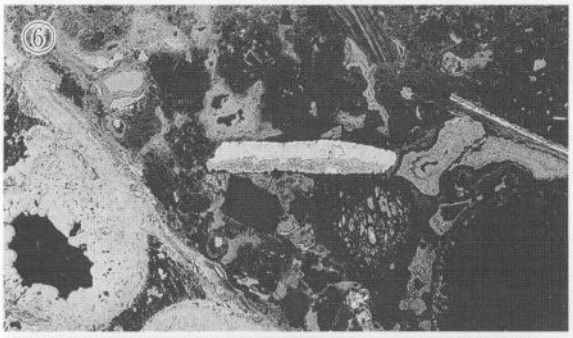


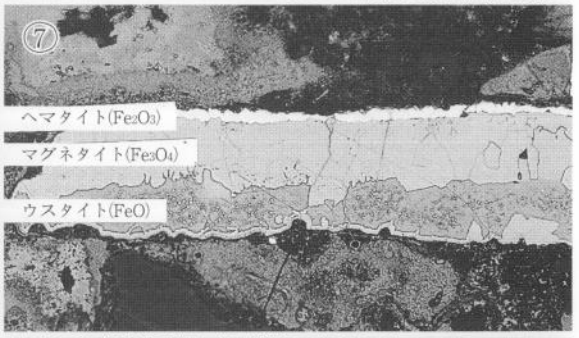


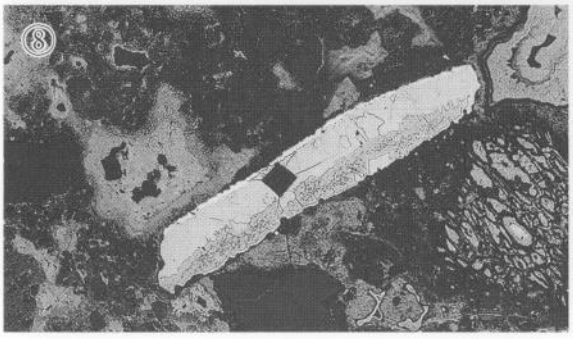












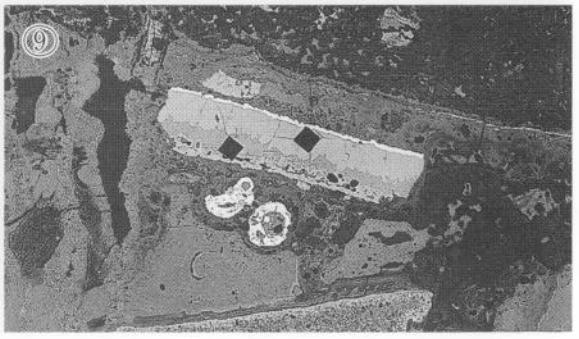
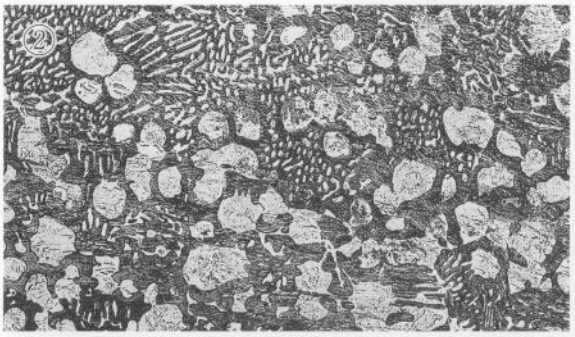


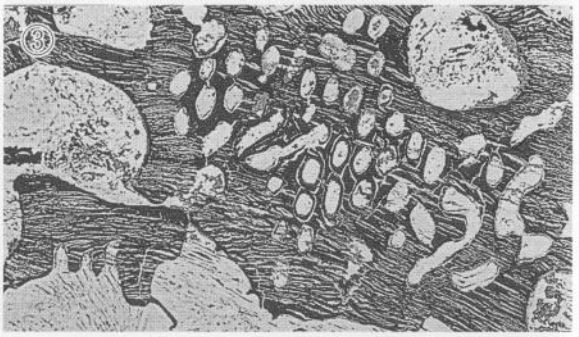
Photo.5　鉄塊系遺物と付着鍛造剥片の顕微鏡組織

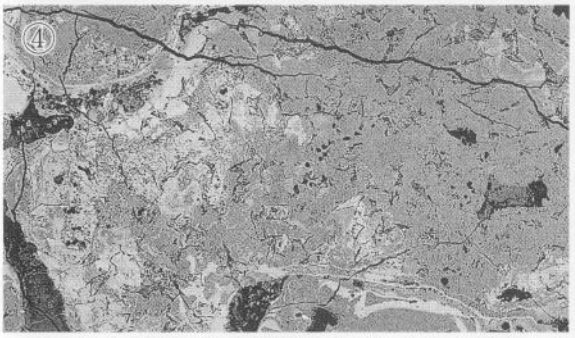
(11)　NGT-7C
土壙 -18 出土

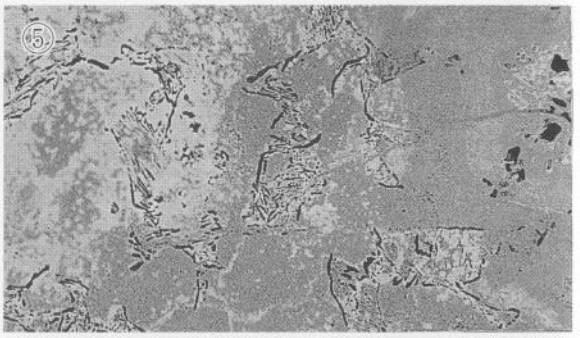
鉄塊系遺物

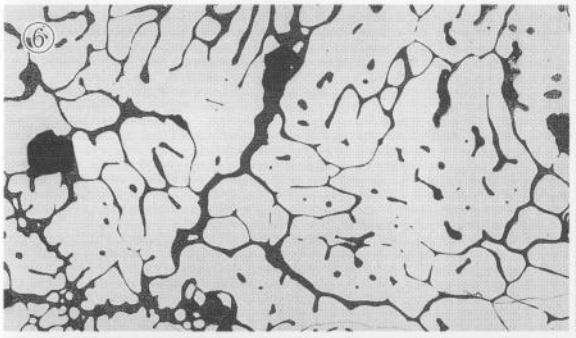
①②×100 ③×400
白鋳鉄：自然腐食
④×100 ⑤×400
銹化鉄中のパーライト痕跡
⑥×100 ヴスタイト
⑦×100、⑧⑨×400
鍛造剥片

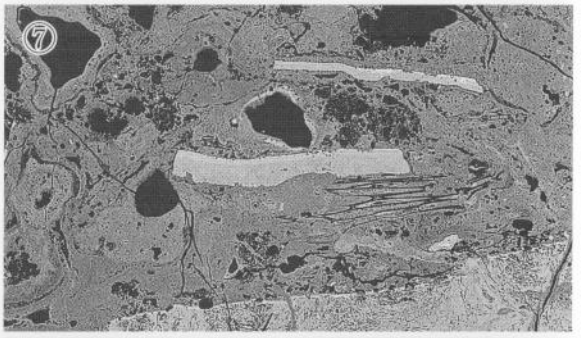


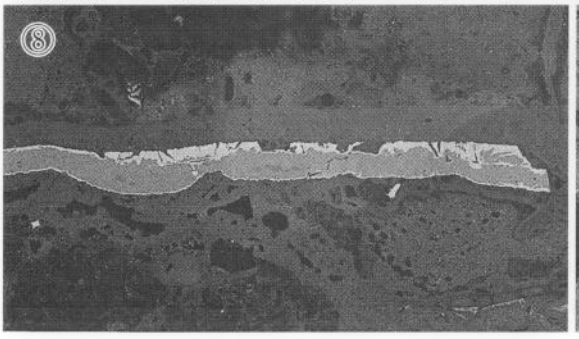












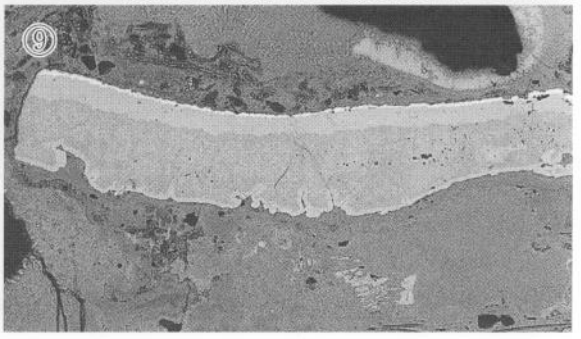
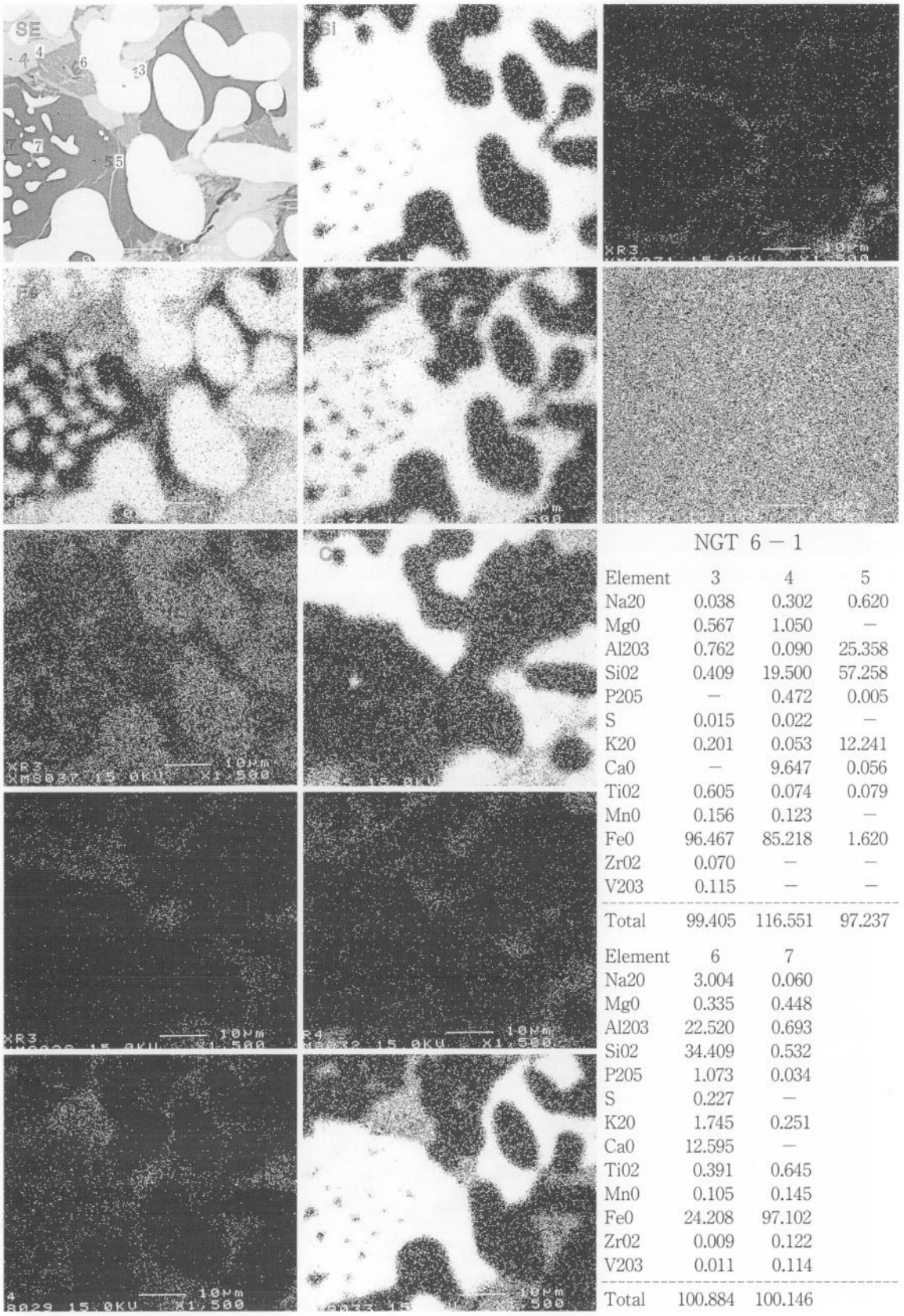


Photo.6　鉄塊系遺物と付着鍛造剥片の顕微鏡組織

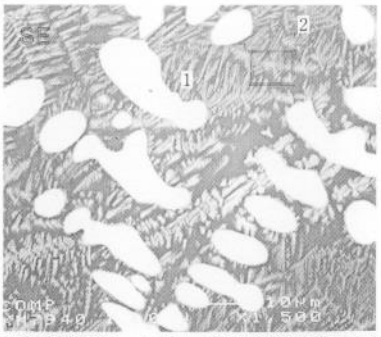


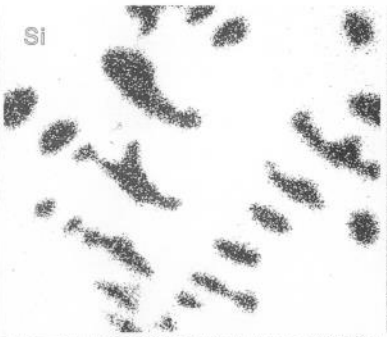
NGT 6－1

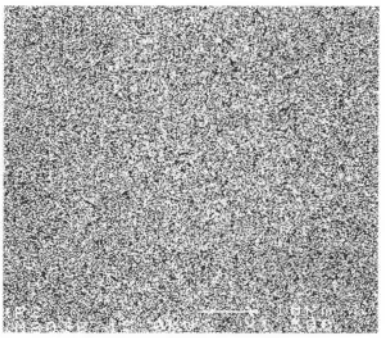
Element	3	4	5
Na20	0.038	0.302	0.620
Mg0	0.567	1.050	－
Al203	0.762	0.090	25.358
Si02	0.409	19.500	57.258
P205	－	0.472	0.005
S	0.015	0.022	－
K20	0.201	0.053	12.241
Ca0	－	9.647	0.056
Ti02	0.605	0.074	0.079
Mn0	0.156	0.123	－
Fe0	96.467	85.218	1.620
Zr02	0.070	－	－
V203	0.115	－	－
Total	99.405	116.551	97.237

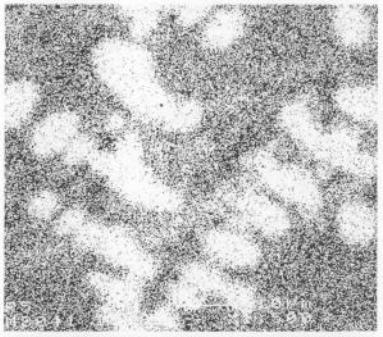
Element	6	7
Na20	3.004	0.060
Mg0	0.335	0.448
Al203	22.520	0.693
Si02	34.409	0.532
P205	1.073	0.034
S	0.227	－
K20	1.745	0.251
Ca0	12.595	－
Ti02	0.391	0.645
Mn0	0.105	0.145
Fe0	24.208	97.102
Zr02	0.009	0.122
V203	0.011	0.114
Total	100.884	100.146

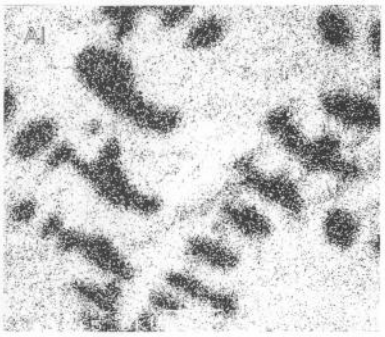
Photo.7　鉄塊系遺物（NGT－6）表皮スラグの特性X線像と定量分析値（×1500、縮小0.53）





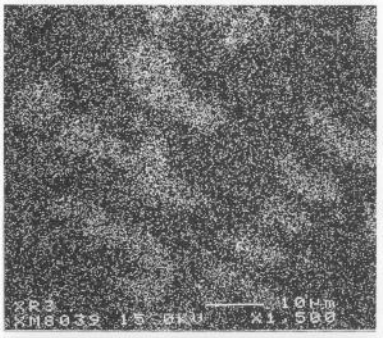


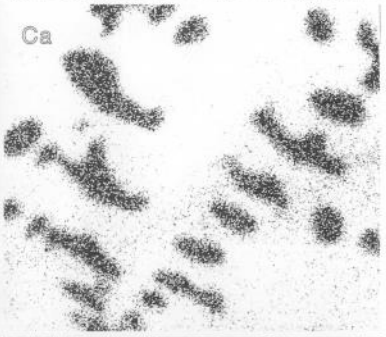


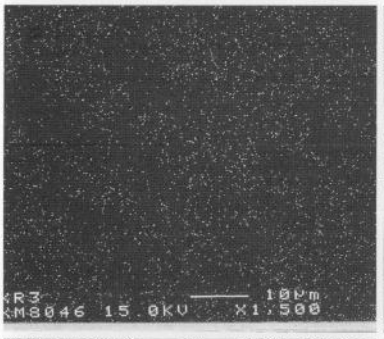


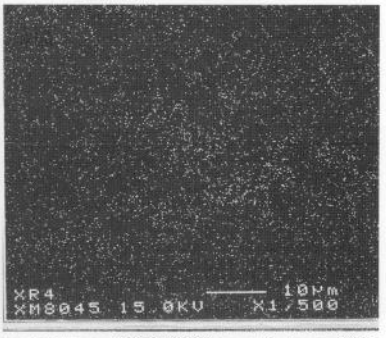
NGT 6 − 2

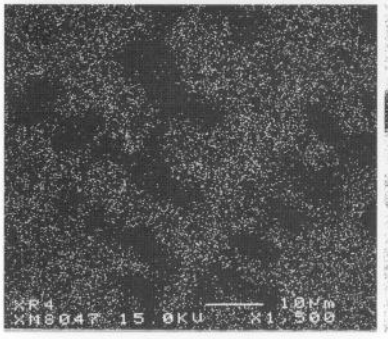
Element	1	2
Na20	0.003	2.144
Mg0	0.172	0.408
Al203	1.050	14.285
Si02	0.423	38.005
P205	0.018	0.471
S	−	0.067
K20	0.081	5.549
Ca0	0.138	8.799
Ti02	1.309	0.391
Mn0	0.026	0.113
Fe0	93.500	30.201
Zr02	0.052	0.009
V203	0.102	0.022
Total	96.874	100.464











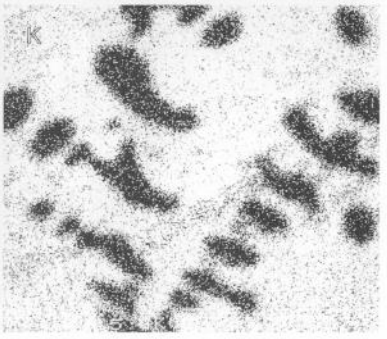


Photo.8　鉄塊系遺物（NGT−6その2）表皮スラグの特性X線像と定量分析値（×1500、縮小0.53）

Fig.1　鉄塊系遺物（NGT−6 その1）表皮スラグのコンピュータープログラムによる高速定性分析結果（Photo.7と対応）

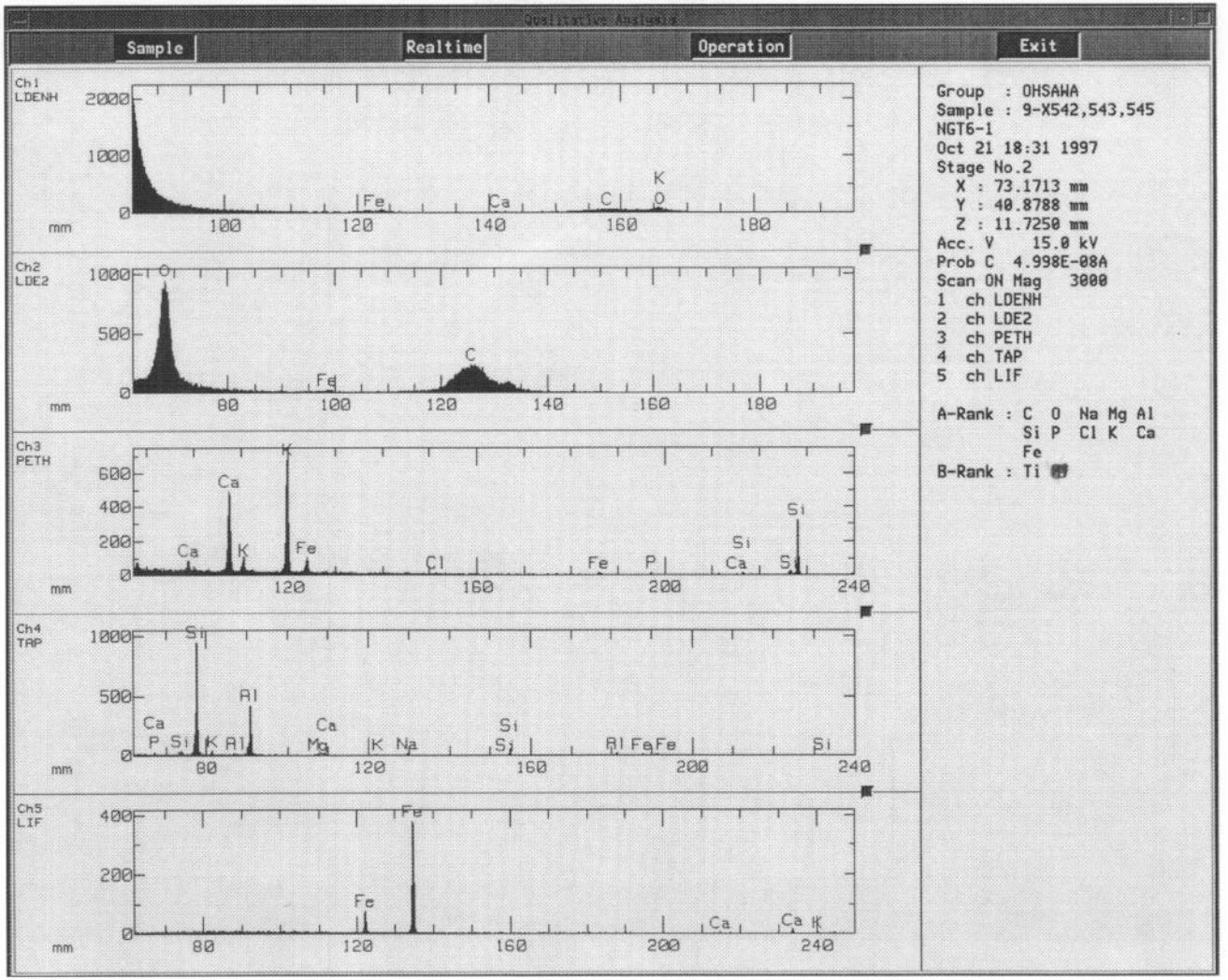
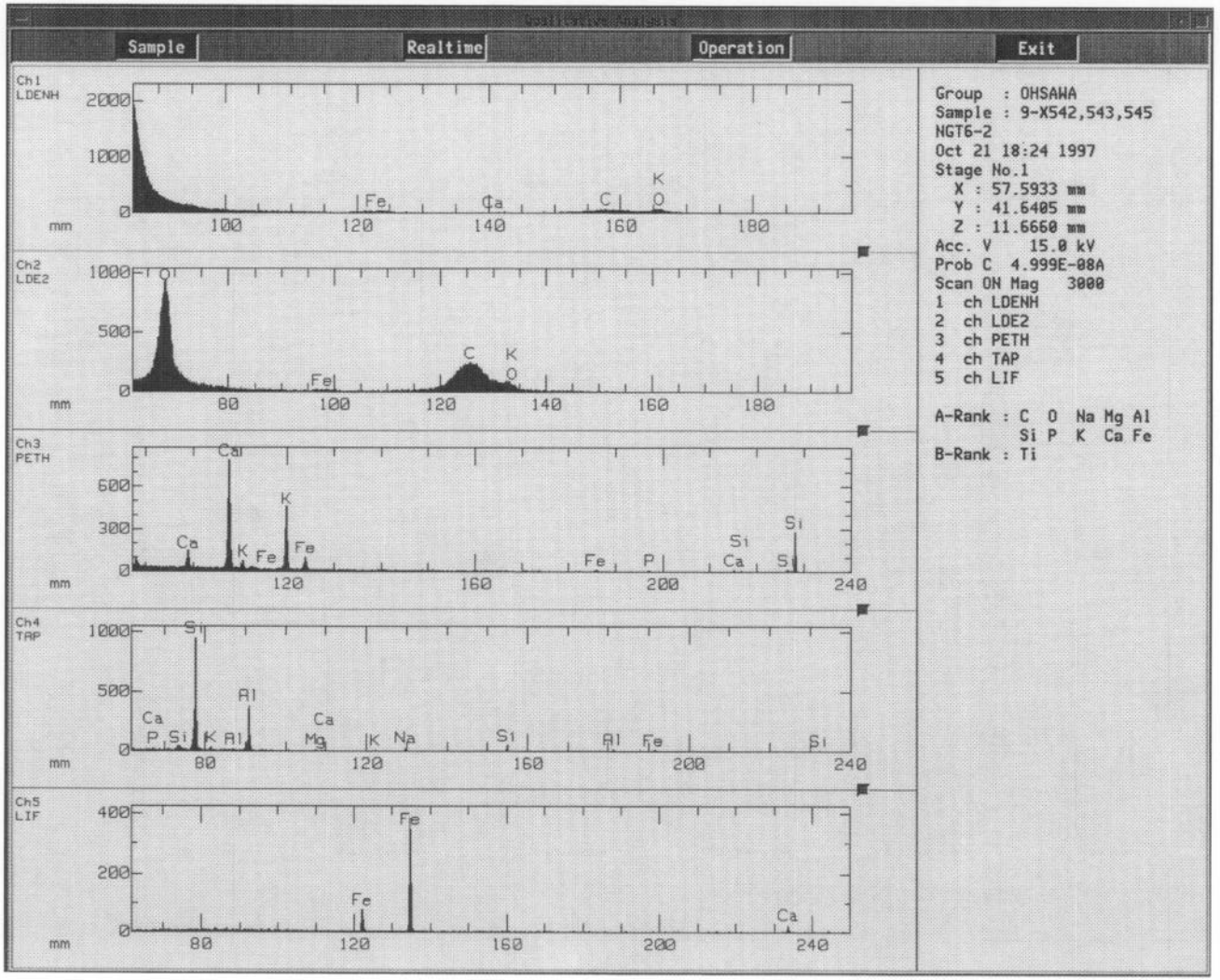


Fig.2　鉄塊系遺物（NGT−6 その2）表皮スラグのコンピュータープログラムによる高速定性分析結果（Photo.8と対応）



(1) FK9

二十谷遺跡

（19号土壙出土）

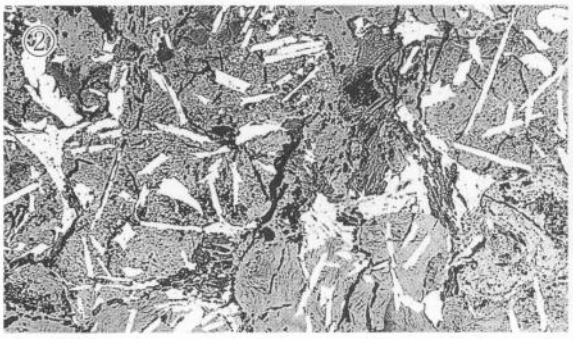
小　鉄　塊

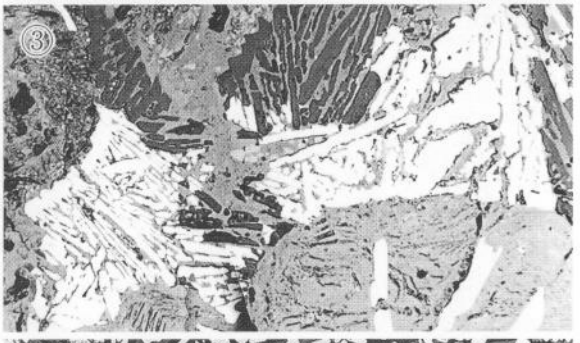
表側

裏側

	①×100 酸化鉄
②×100 酸化鉄	③×400 酸化鉄

外観写真1／2.0



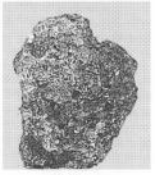


(2) FK10

二十谷遺跡

（P－120 出土）

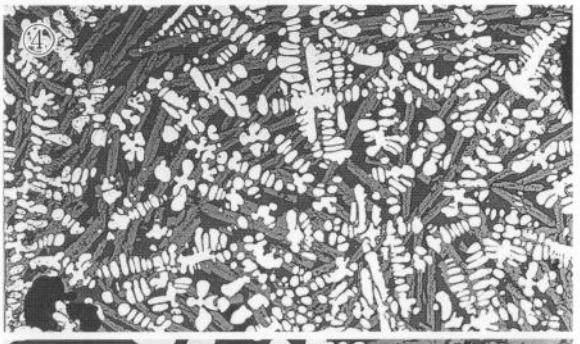
鍛練鍛冶滓



表側

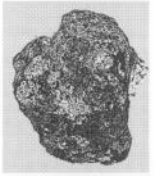
×100

外観写真 1/2.0

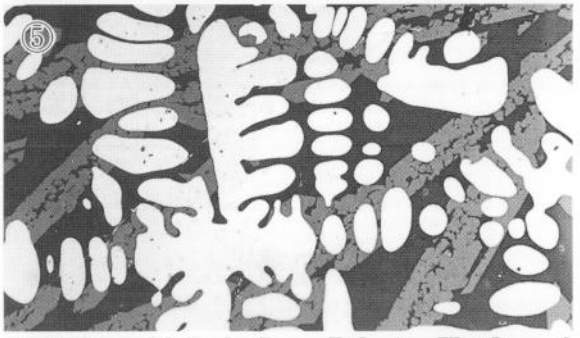


同　上

×400



裏側

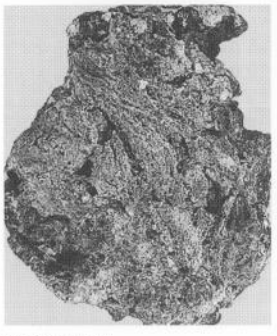


(3) FK12

二十谷遺跡

（2 号掘立柱P－17出土）

精錬鍛冶滓



×100

外観写真 1/2.0

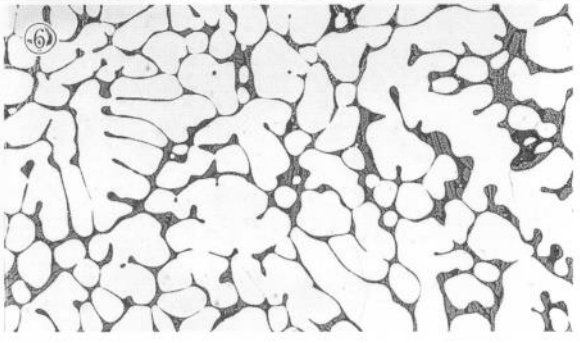
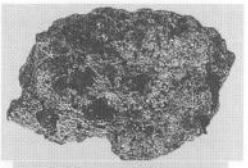
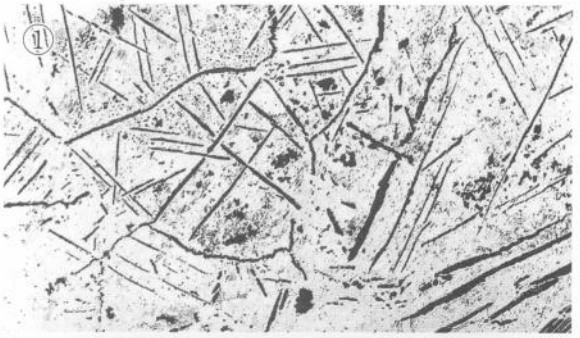


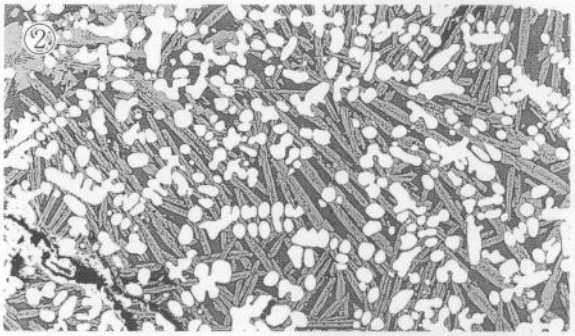
Photo.9　小鉄塊・鉄滓の顕微鏡組織

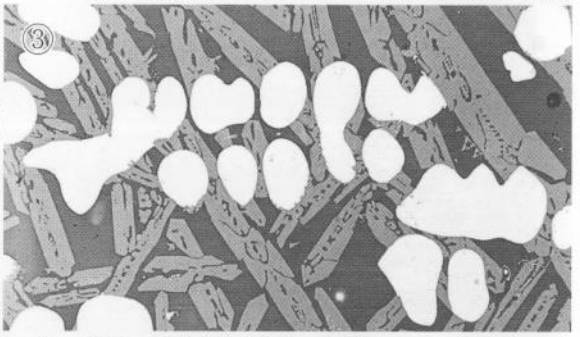
(4) FK11
二十谷遺跡
（Ⅲ区土壙１出土）
鍛練鍛冶滓



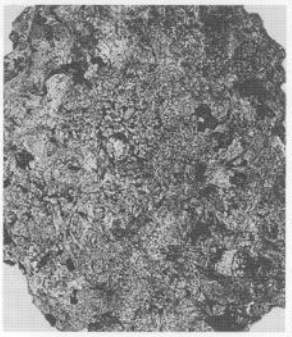
	①×100 酸化鉄
②×100 Wüstite	③×400 Wüstite



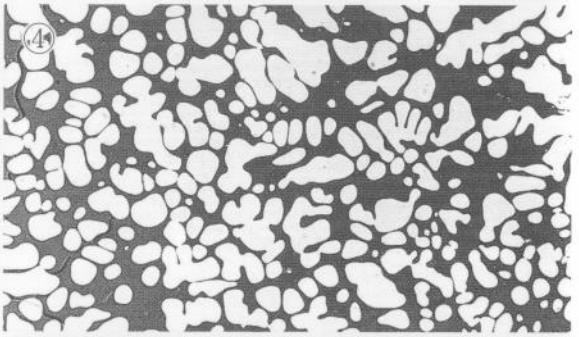




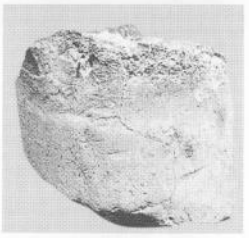
(5) FK13
二十谷遺跡
（２号掘立P-17出土）
精錬鍛冶滓



×100
外観写真 1/2.0

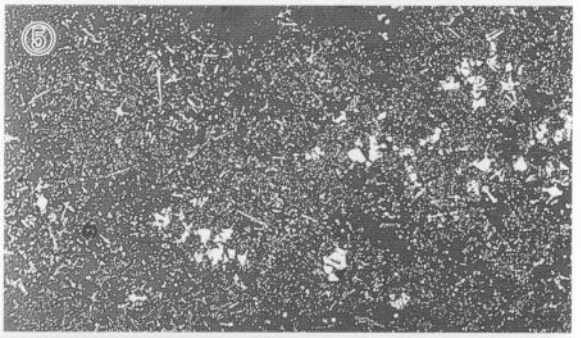


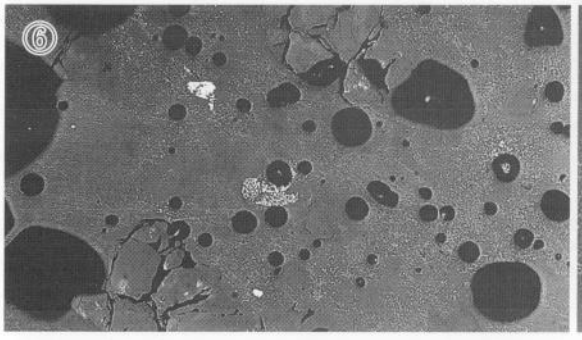
(6) FK14
二十谷遺跡
（２号掘立P－17出土）
羽口先端溶解スラグ



外側
外観写真 1／3.0

	①×100 Magnetite
②×100 ガラス質スラグ	③×400 半還元砂鉄





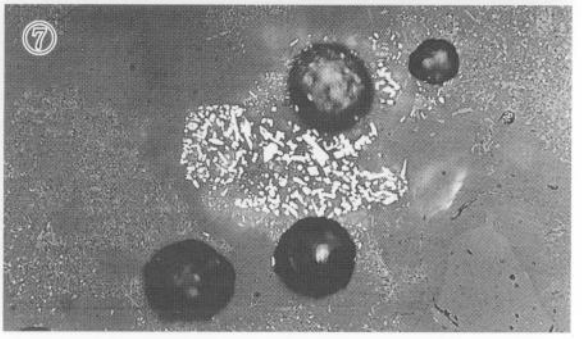


Photo.10　鉄滓と羽口先端溶融スラグの顕微鏡組織

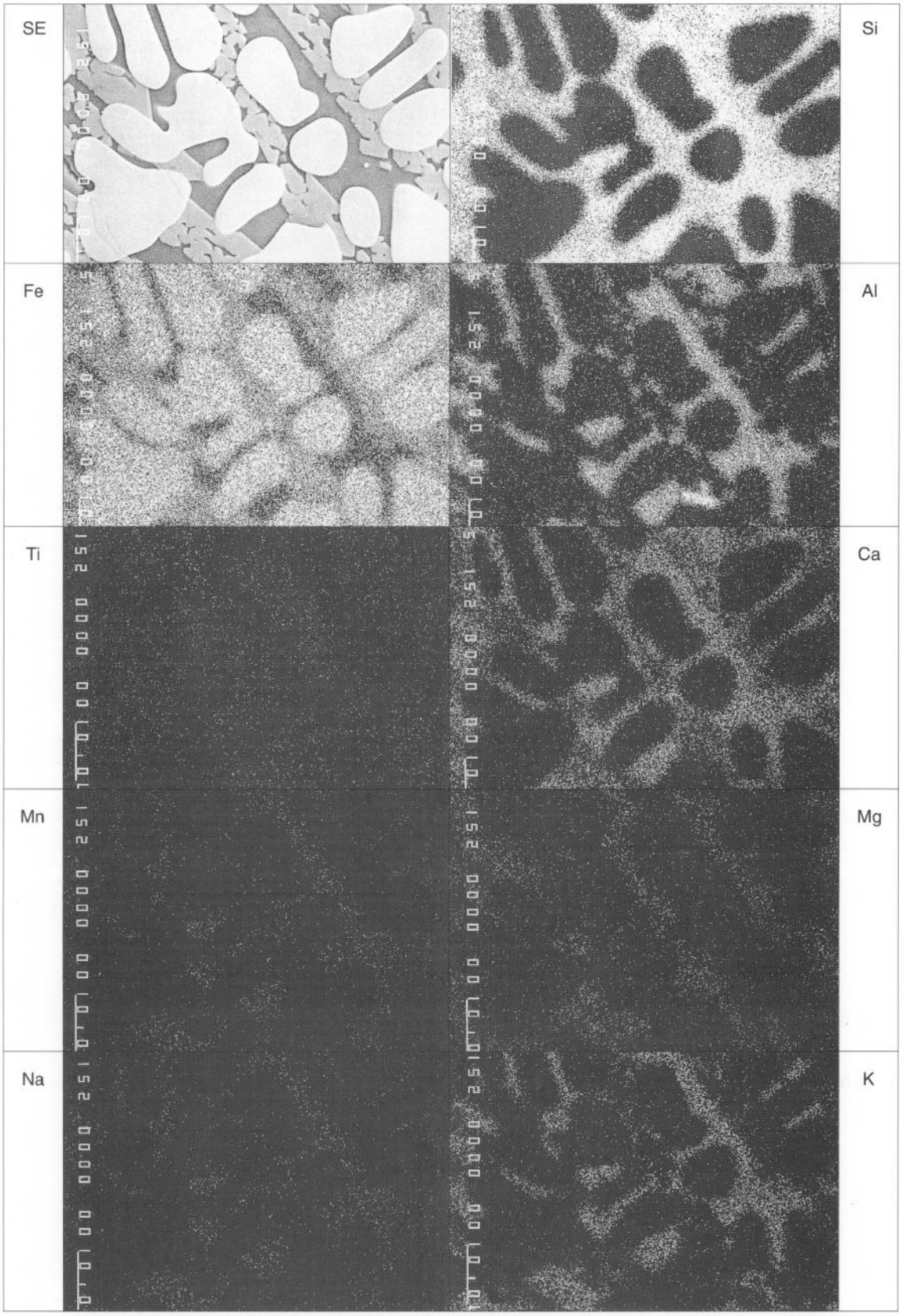


Photo.11　二十谷遺跡出土鍛練鍛冶滓（FK10）の特性X線像

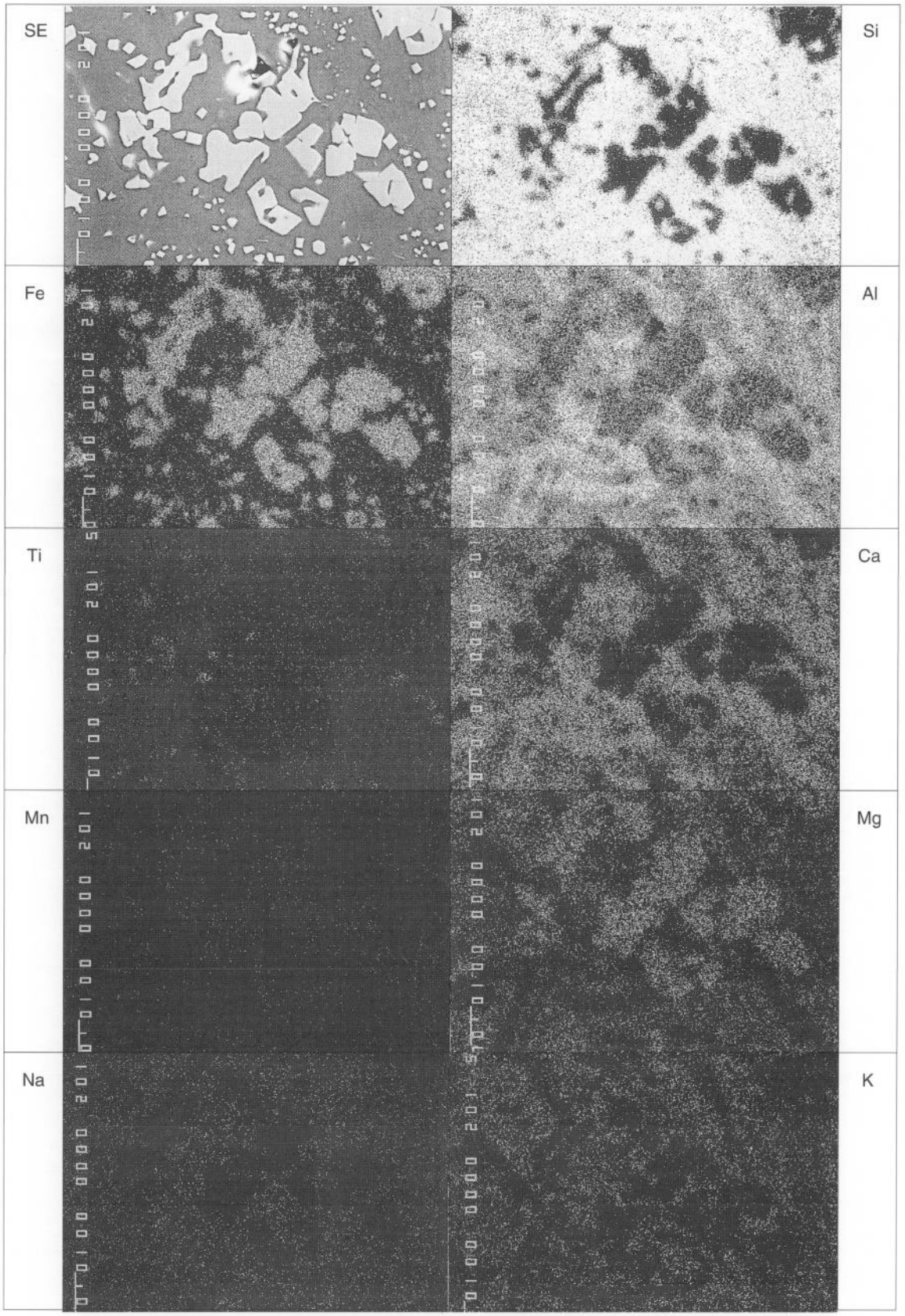


Photo.12　二十谷遺跡出土羽口先端溶融スラグ（FK14）の特性X線像

5　おわりに

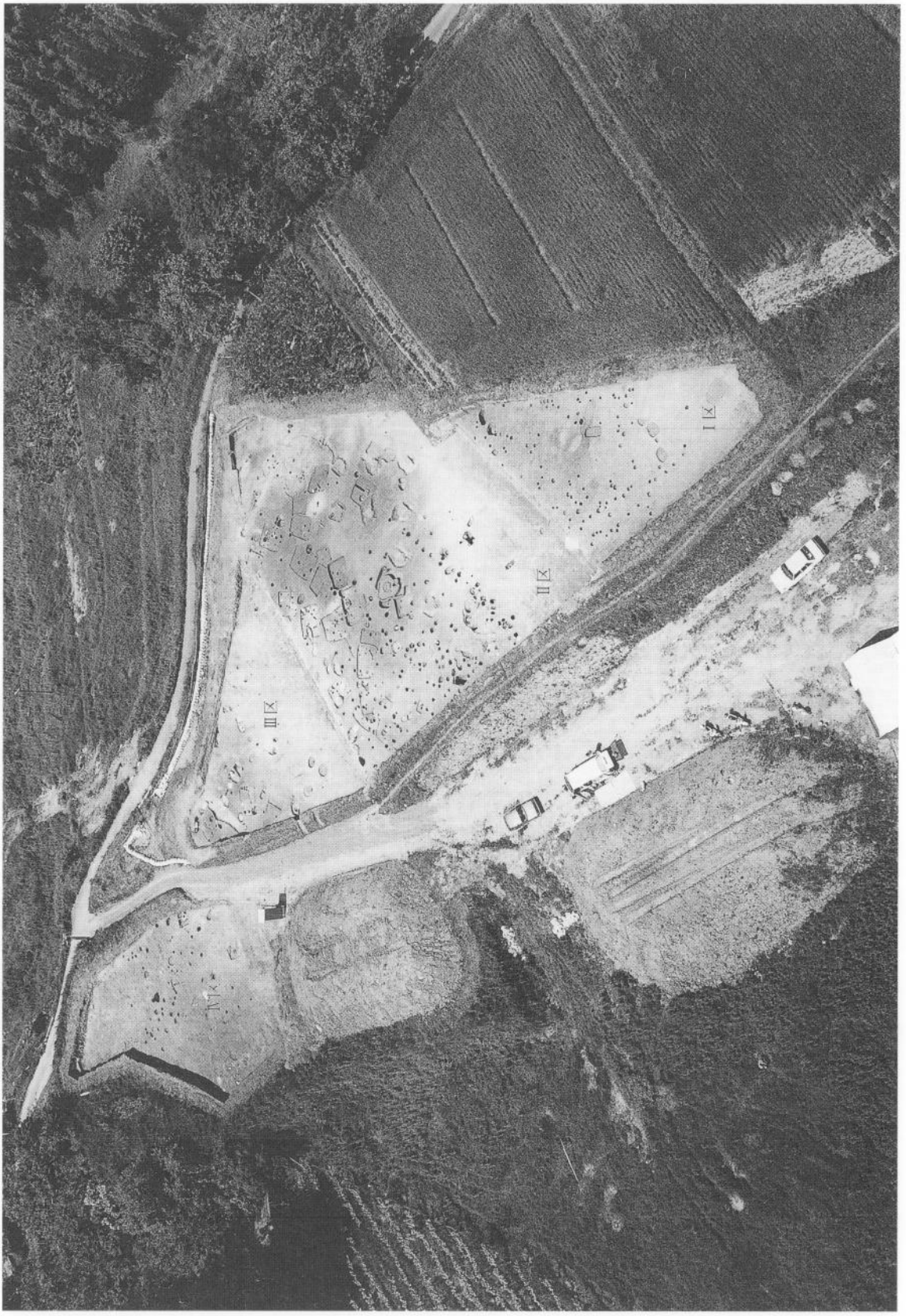
二十谷遺跡は、縄文早期頃と推測される落し穴、縄文晩期の竪穴住居跡と土壙(貯蔵穴)などの生活遺構と中世の掘立柱建物や溝、鍛冶関連遺構と思われる土壙状の掘り込みなどで構成され、大きく3時期にわたる遺構を確認した。

縄文時代の落し穴は隣接する二十谷遺跡第2地点で検出されたものととの連続性が認められてることから、丘陵の尾根線上に沿って落し穴が設営されていたことになる。形態的には楕円形や長方形、底面には1個のピットと複数のピットを掘るものがあり、共通する形状の各々が連続性を持っていないものの、設置方向から若干時期差があると推測される。

晩期の竪穴住居は第2地点では検出されていないものの、当該調査区が著しい削平を受けていることを考える時、今回検出された晩期の集落はかなり広範囲に形成されていたと見てとれよう。33軒の住居の内個々の竪穴住居がかなりの確率で重複しており、出土遺物が少ないこともあって現状では同時併存の住居の単位が把握できない。この遺跡から谷を挟んだ北東側200mの地点で調査された小覚原遺跡からも同時期の竪穴住居十数軒で集落を構成しており、二十谷遺跡の集落もこの程度の単位で集落形成がなされていたと推察される。

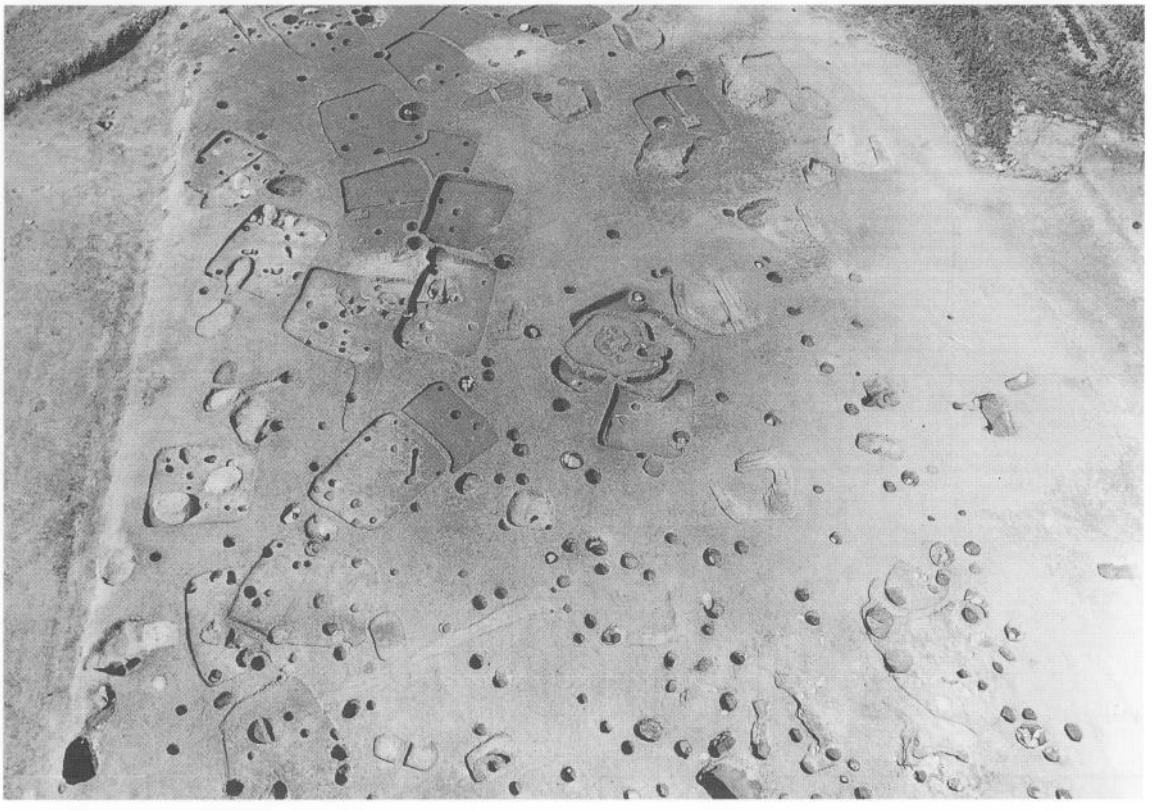
中世の遺構は鍛冶関連遺構と思われる溝・土壙・掘立柱建物で構成されている。明瞭な炉が検出された訳ではないが、11号土壙に著しい焼痕が見られたことから、溶解炉的な機能が想定され、細い溝が囲繞する18号土壙から出土した鉄塊や鉄滓、掘立柱建物の柱穴から出土した鞴羽口などから、これらの遺構は一連の鍛冶関連遺構と推察できよう。

図　　版

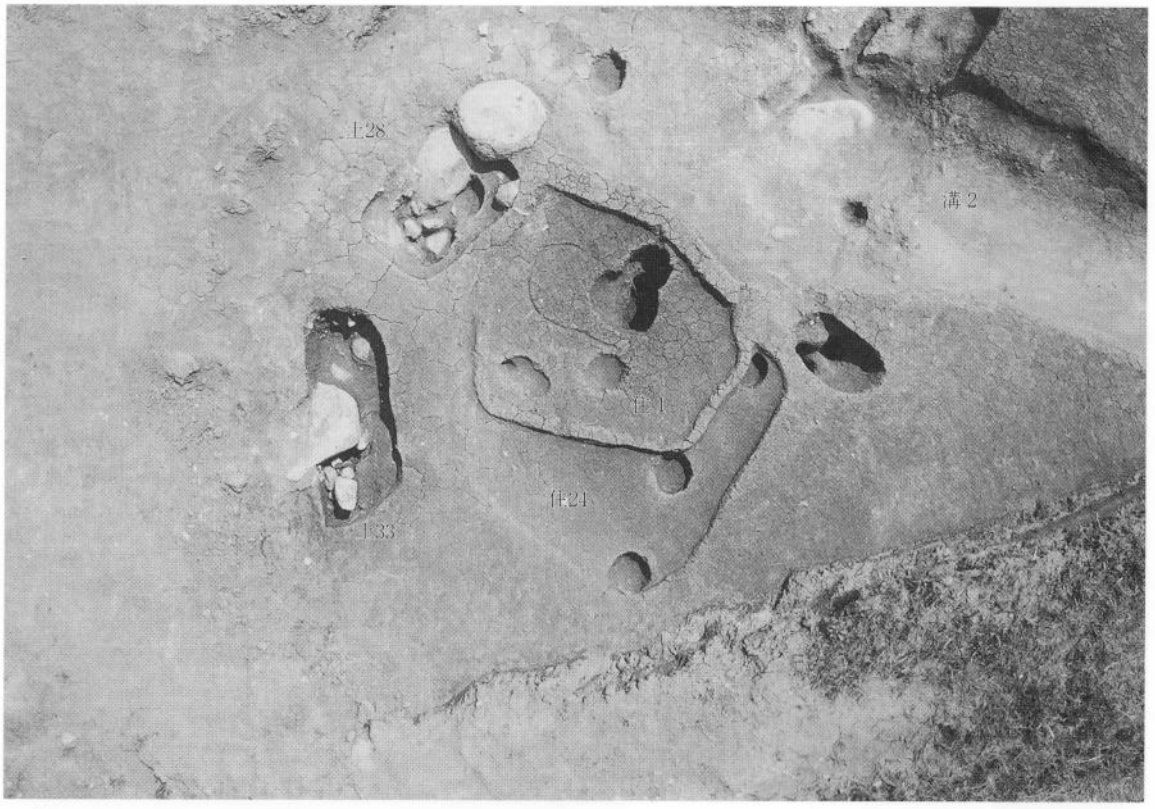


二十谷遺跡俯瞰

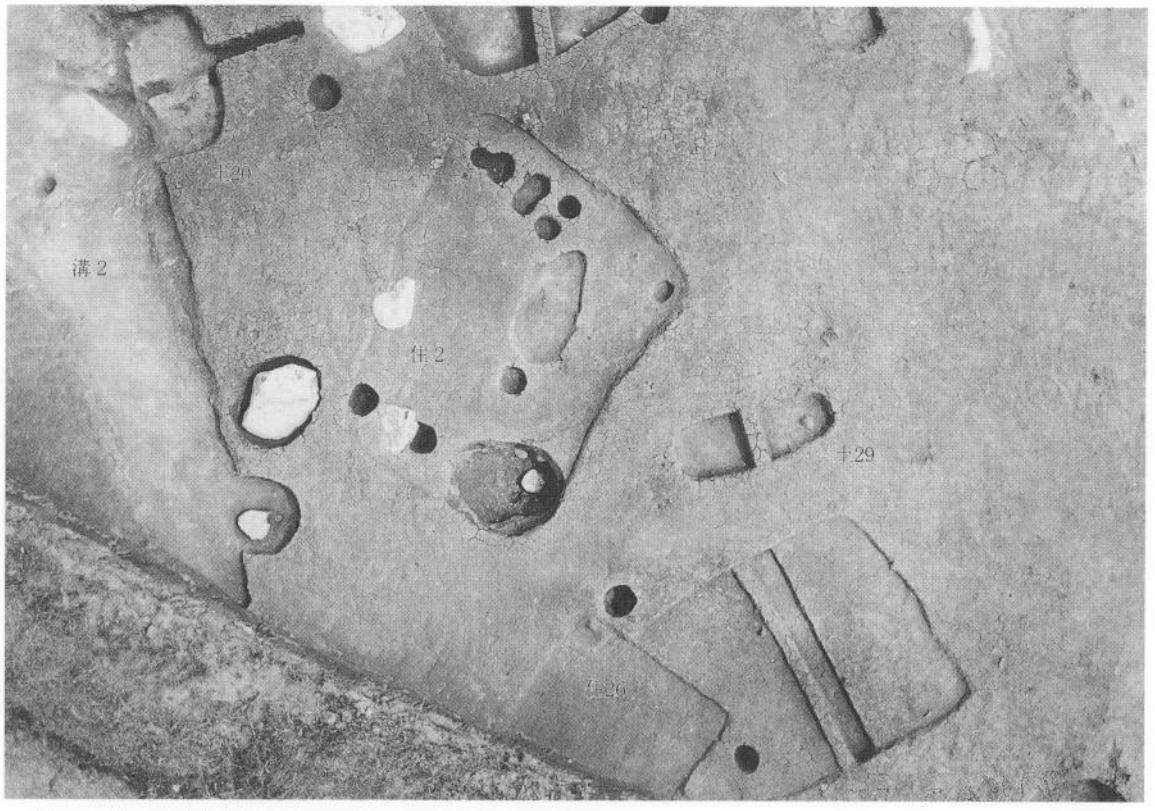
(1)　二十谷遺跡俯瞰



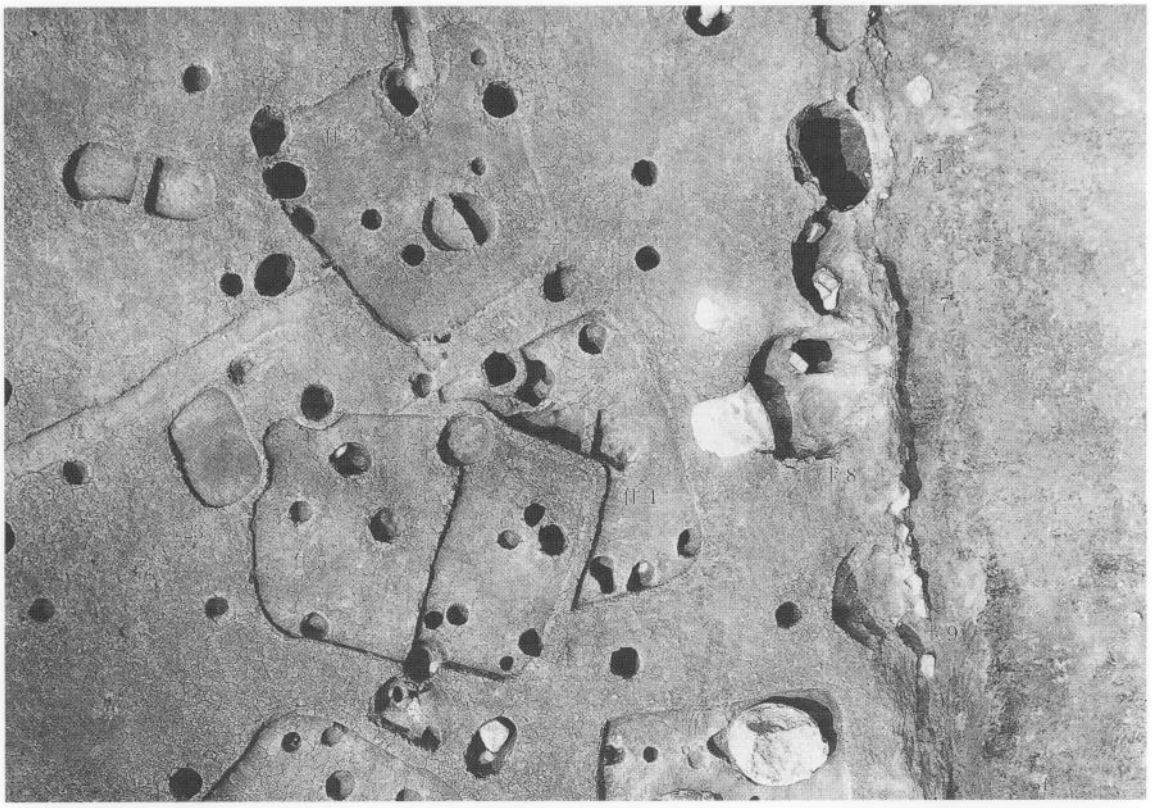
(2)　Ⅱ区竪穴住居跡群



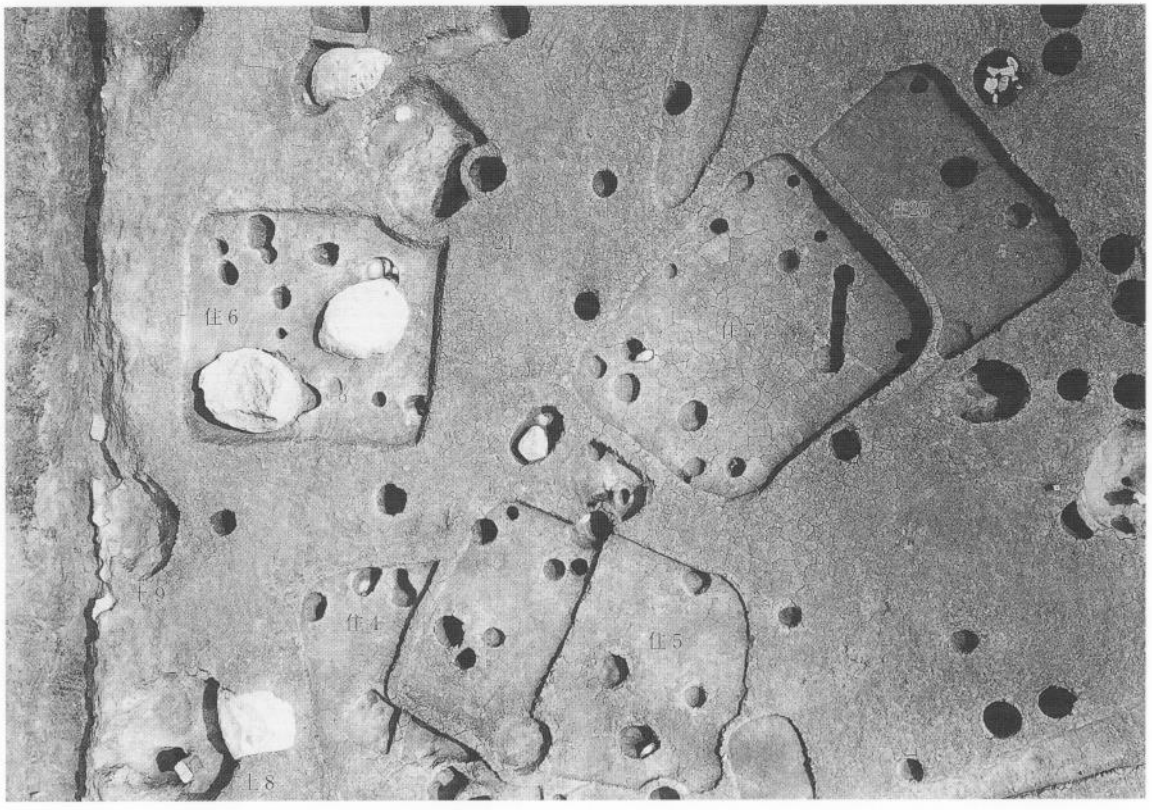
(1) 1号・24号竪穴住居跡・28号・33号土壙、2号溝



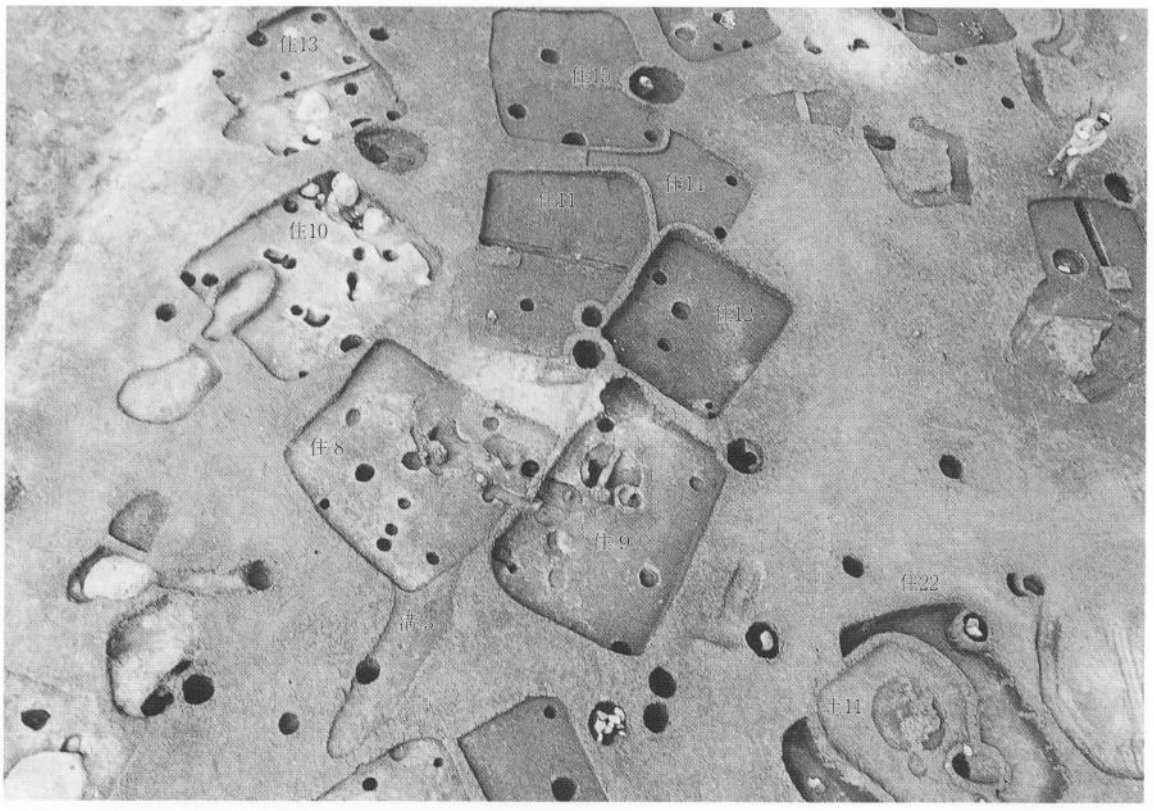
(2) 2号・26号竪穴住居跡・20号・29号土壙、2号溝



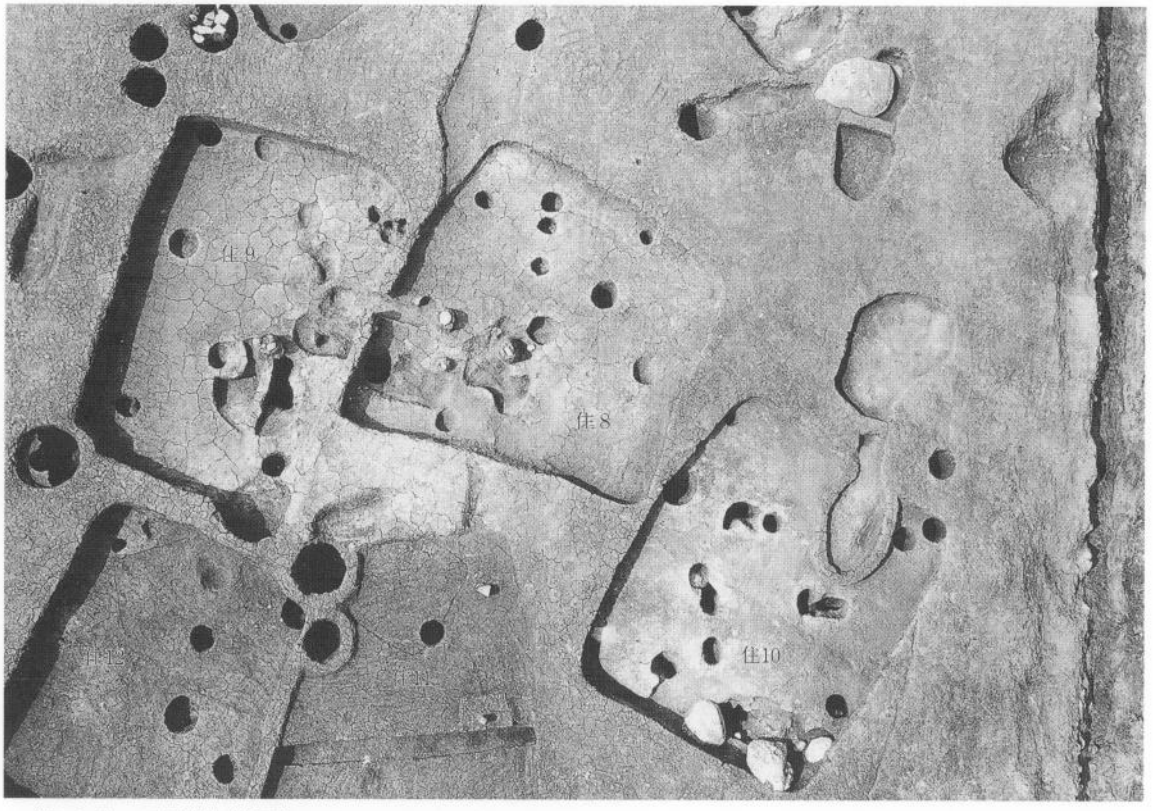
(1)　3号～5号竪穴住居跡・7号～9号・23号土壙、1号落し穴



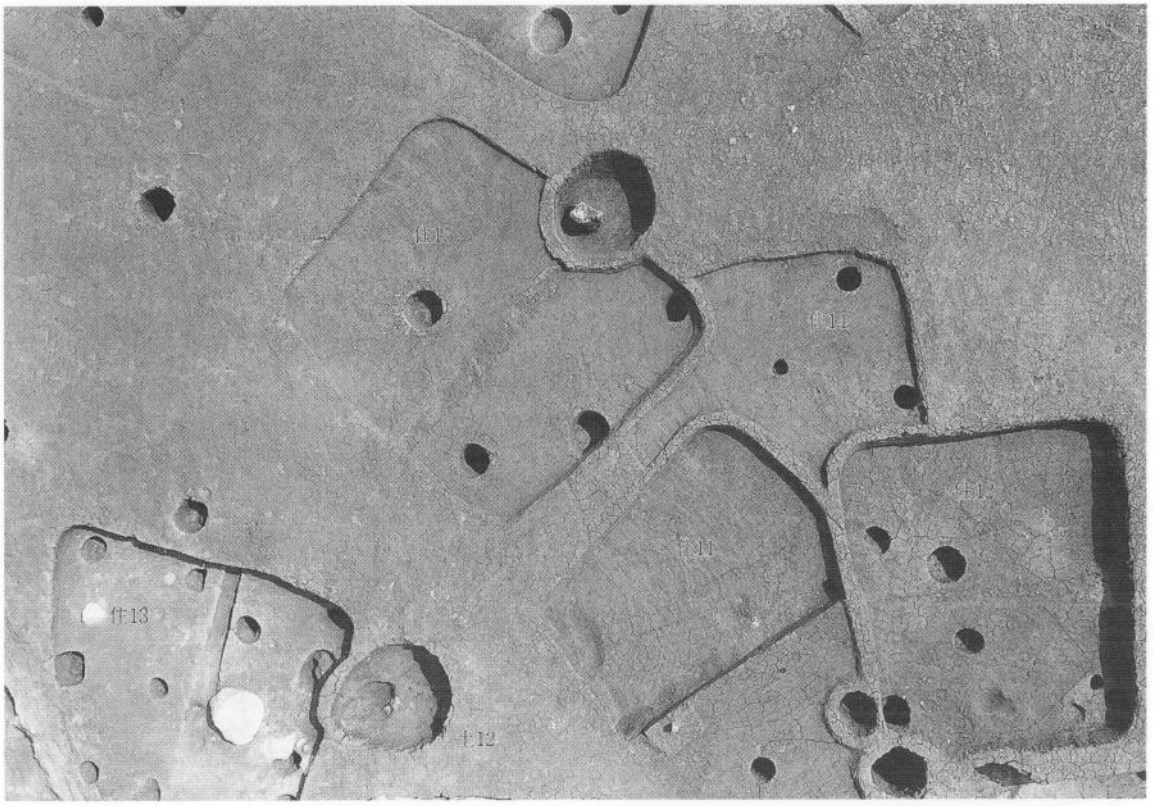
(2)　4号～7号・25号竪穴住居跡、24号土壙



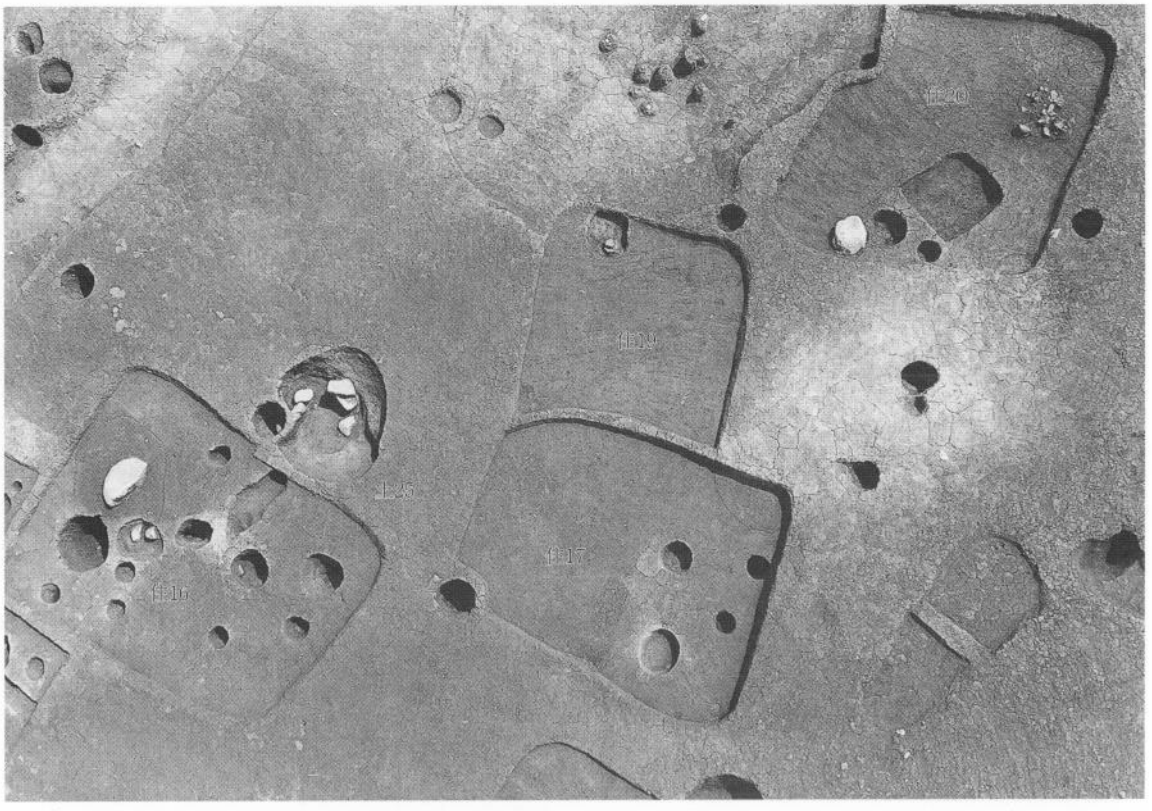
(1)　8号～15号竪穴住居跡、11号・12号・24号土壙



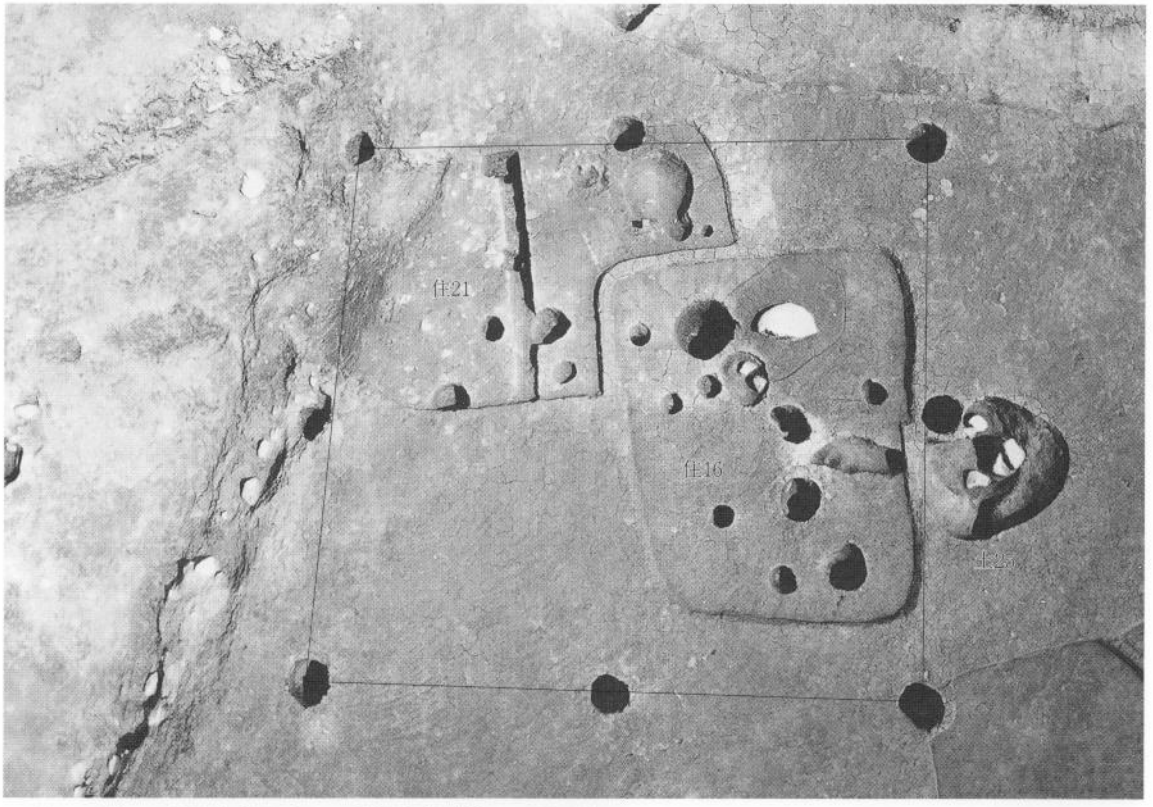
(2)　8号～12号竪穴住居跡



(1)　11号～15号竪穴住居跡、12号土壙

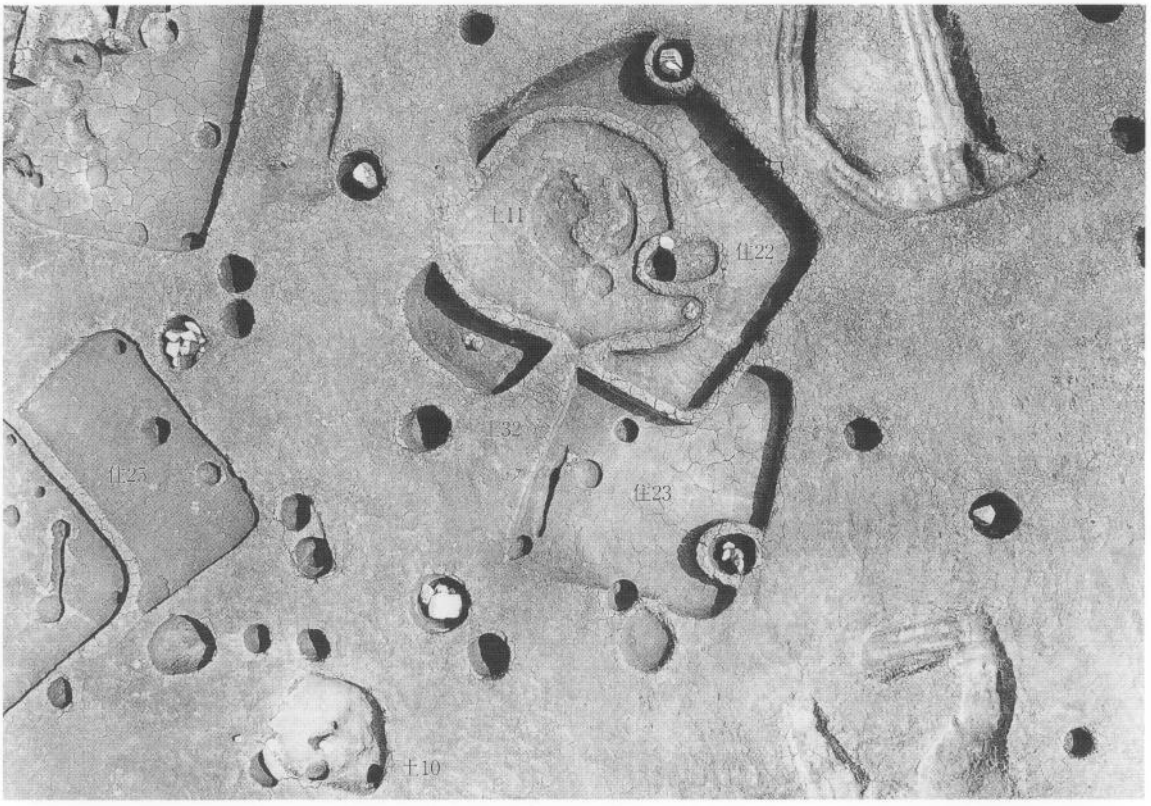


(2)　16号・17号・19号・20号竪穴住居跡、25号土壙



(1)　16号・21号竪穴住居跡・３号掘立柱建物、35号土壙

(2) 18号竪穴住居跡・44号土壙

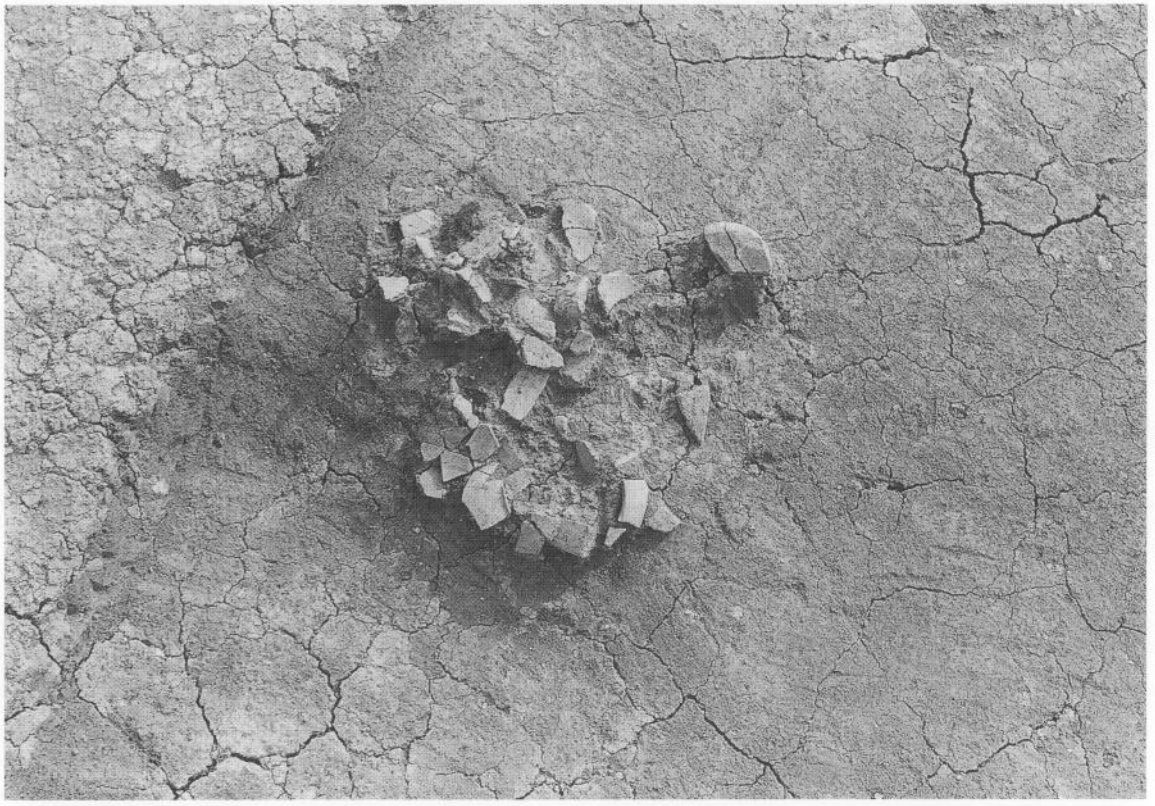


(1)　22号・23号・25号竪穴住居跡、10号・11号・32号土壙

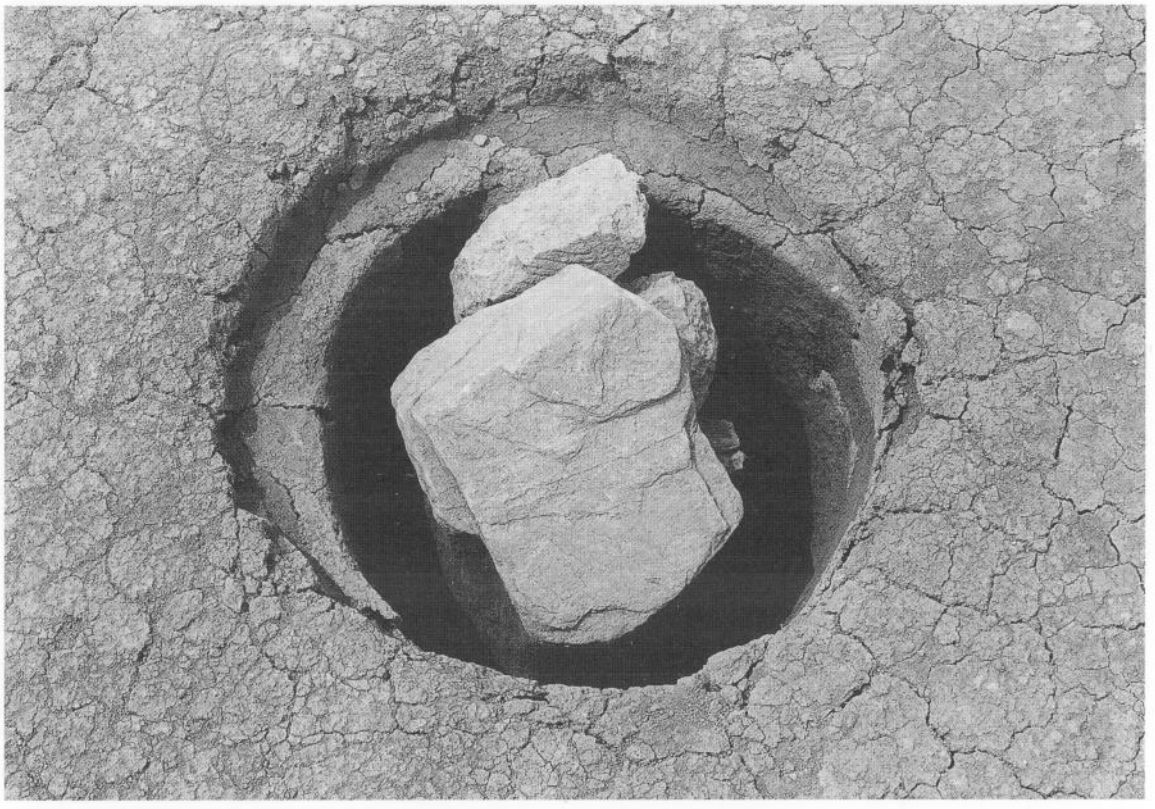
(2)　22号・23号・27号・28号・31号・32号竪穴住居跡、32号土壙

(1)　1号・2号掘立柱建物とその周辺

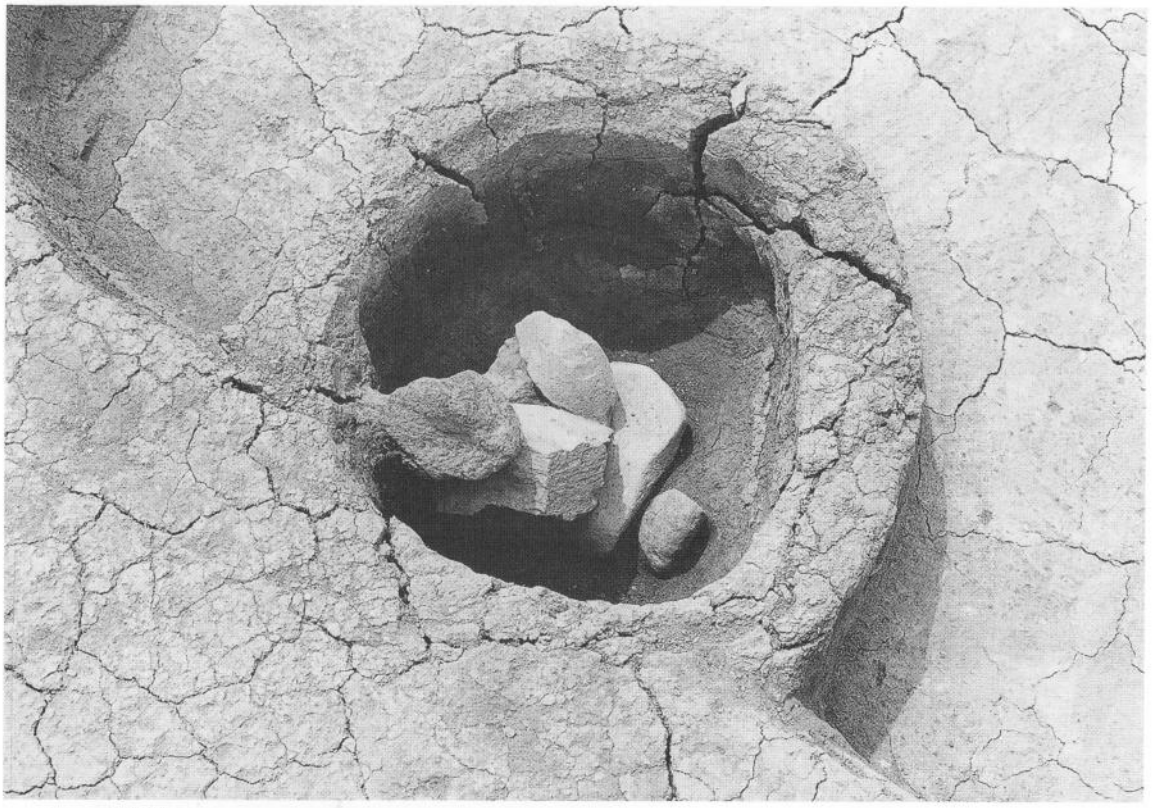
(2)　18号土壙（小鍛冶関連遺構）



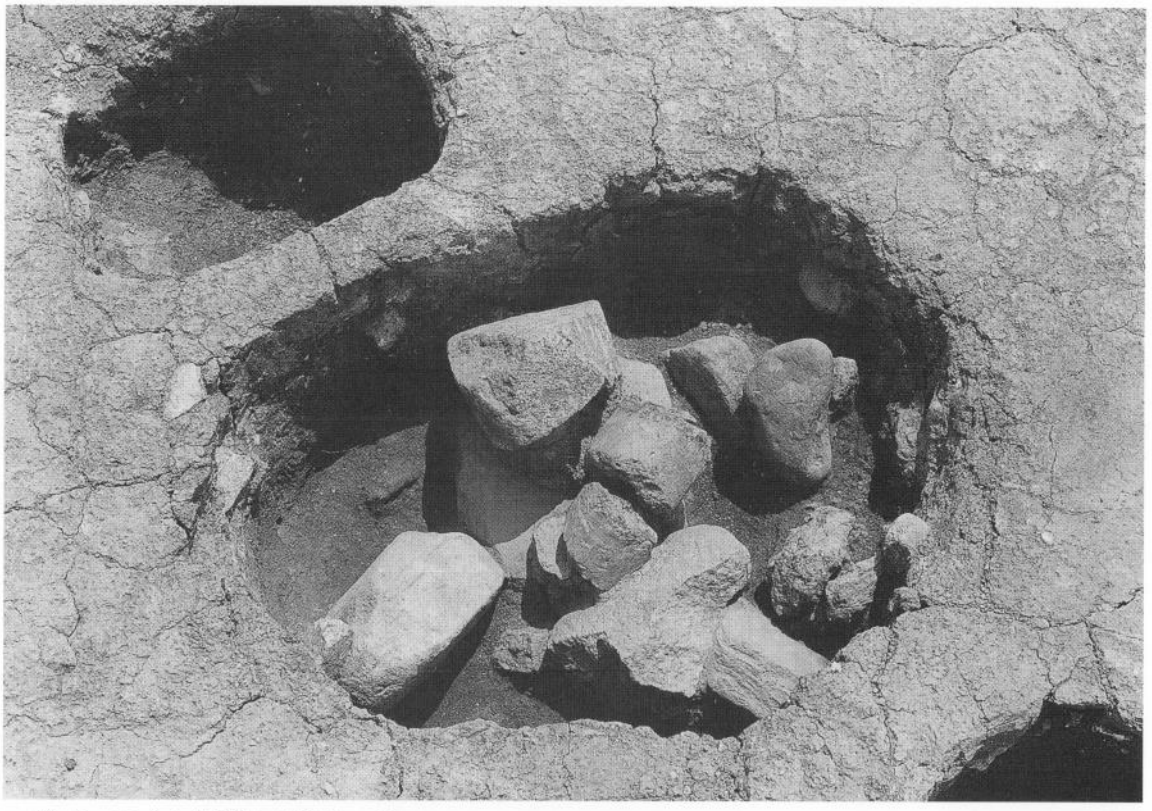
(1)　20号竪穴住居跡出土土器



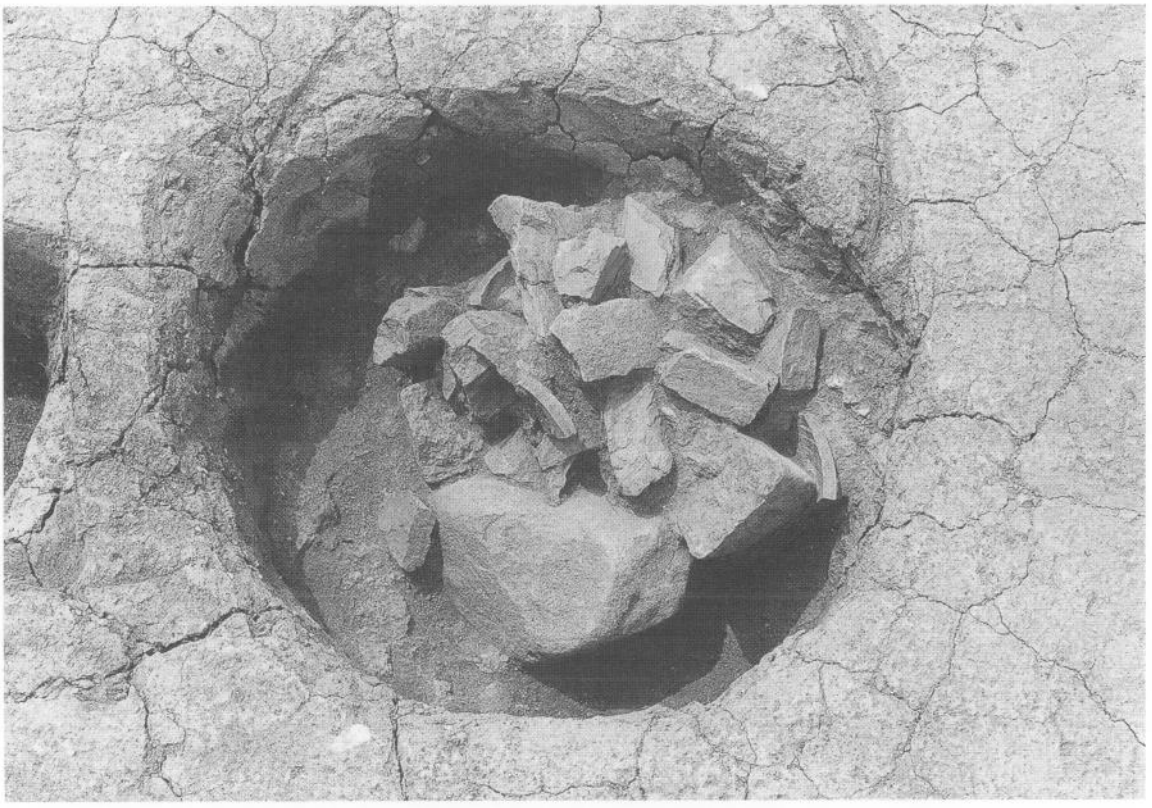
(2)　2号建物Ｐ－1



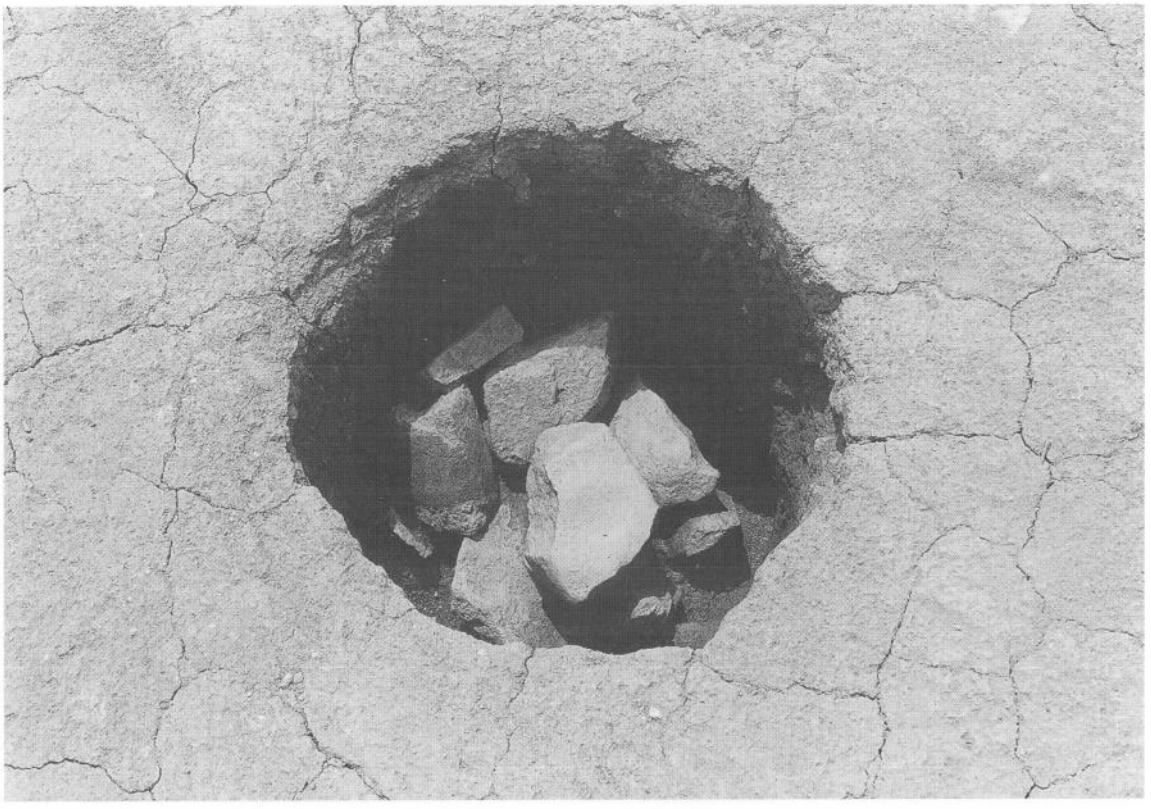
(1)　2号建物P－2



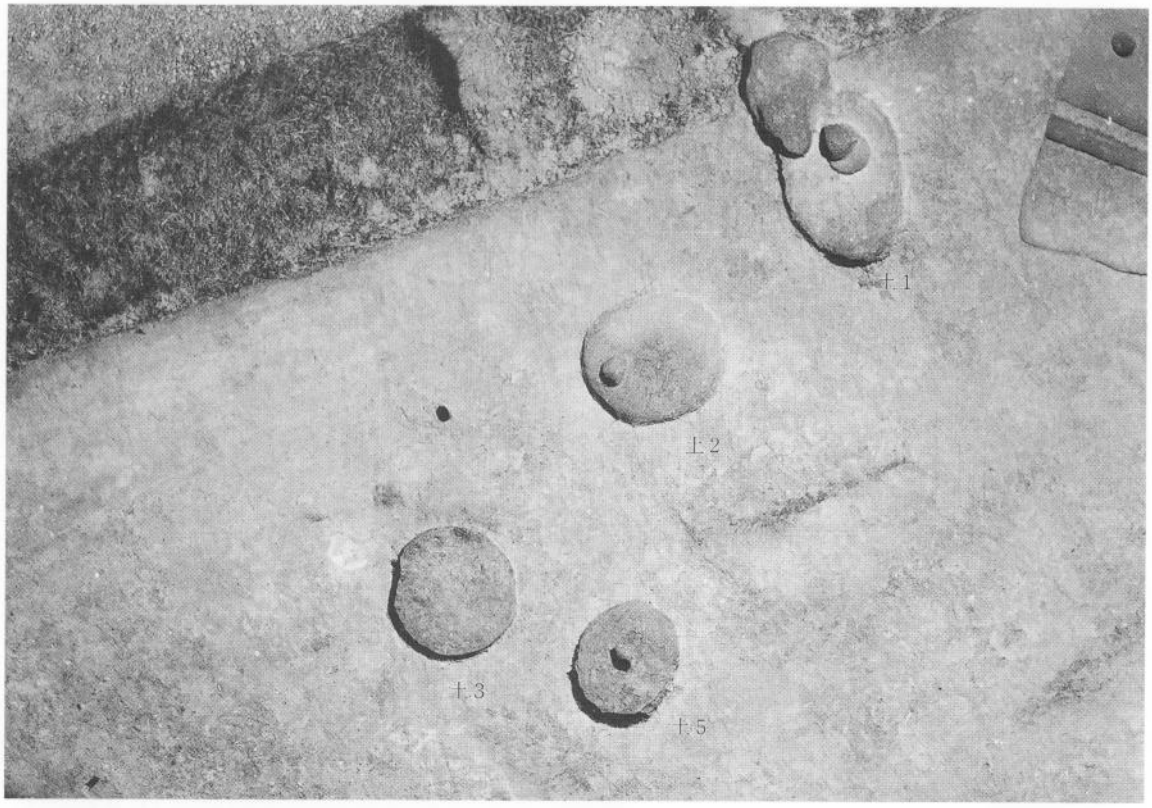
(2) P－17（2号建物に伴うものか）



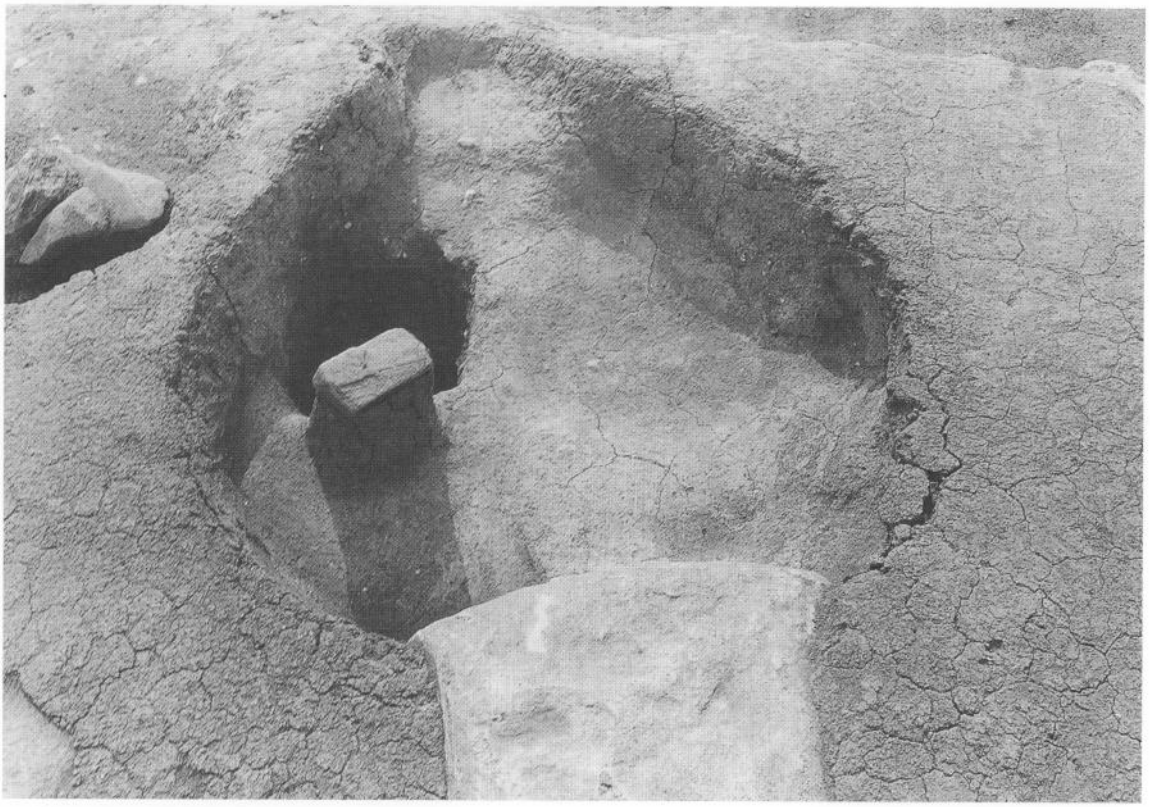
(1)　P－15（２号建物に伴うものか）



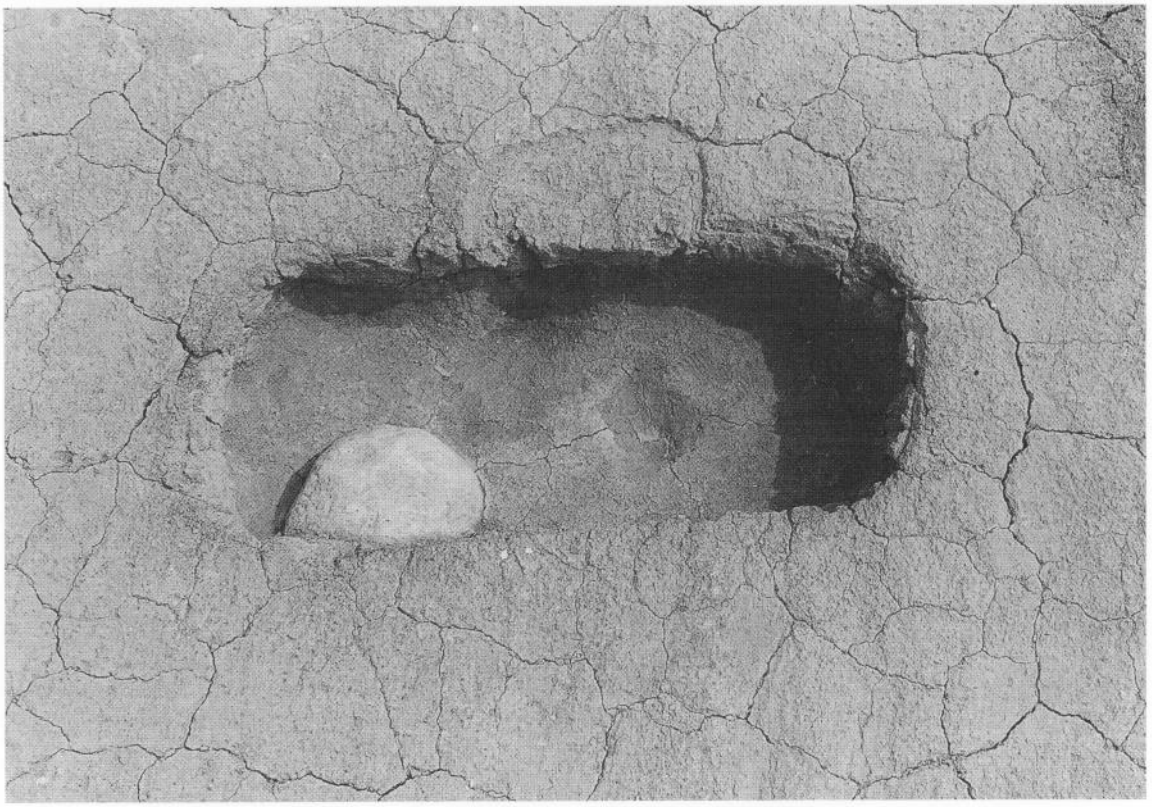
(2)　P－14（２号建物に伴うものか）



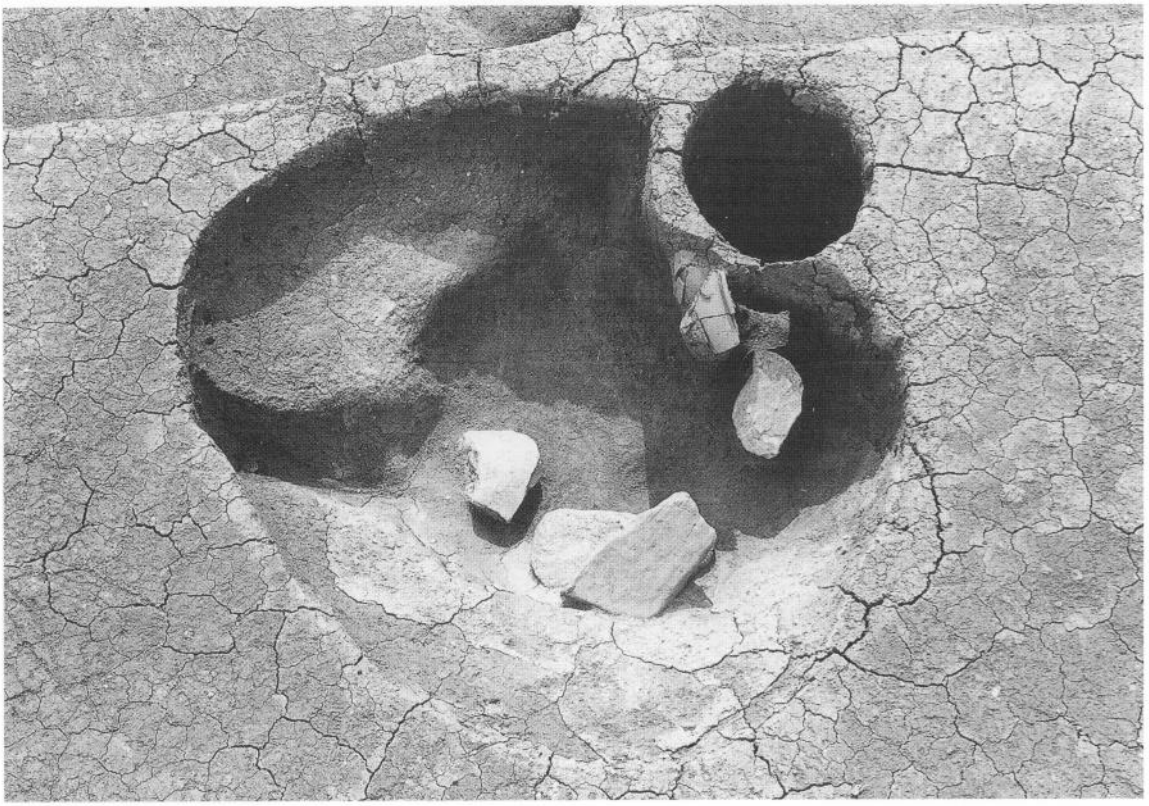
(1)　1号～3号・5号土壙



(2)　8号土壙（東から）

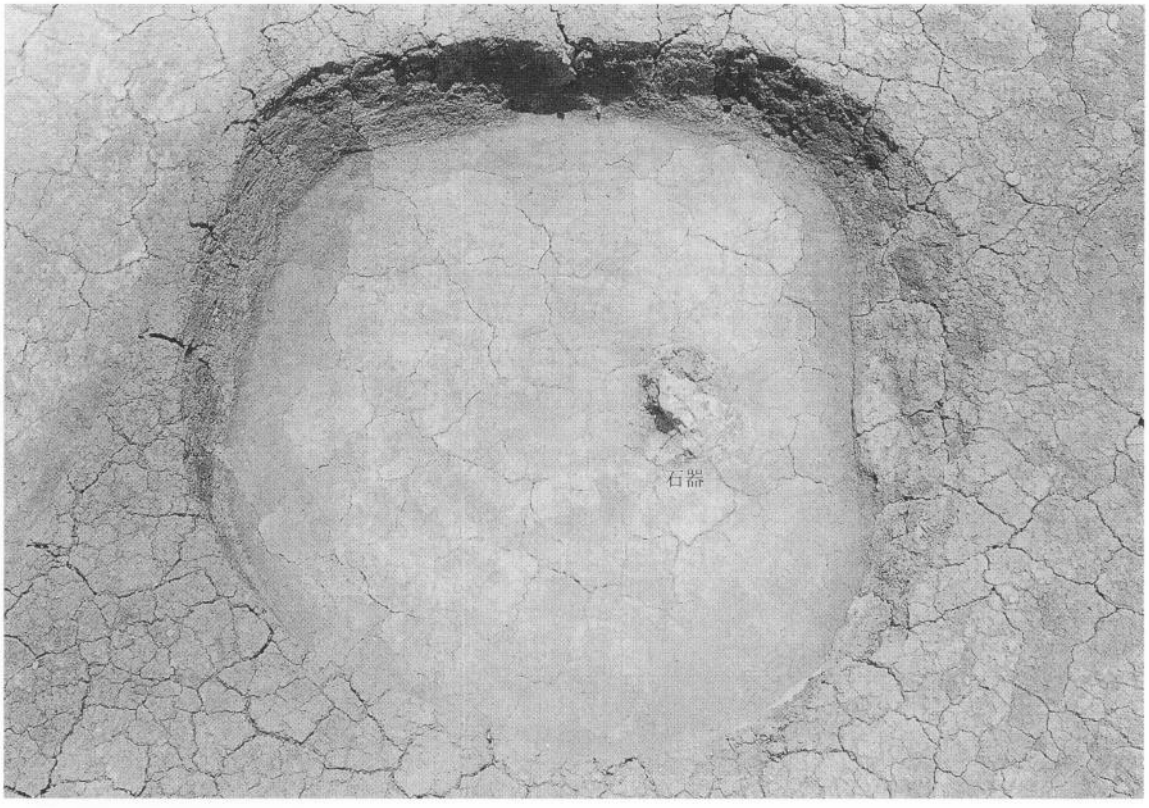


(1)　17号土壙（北から）

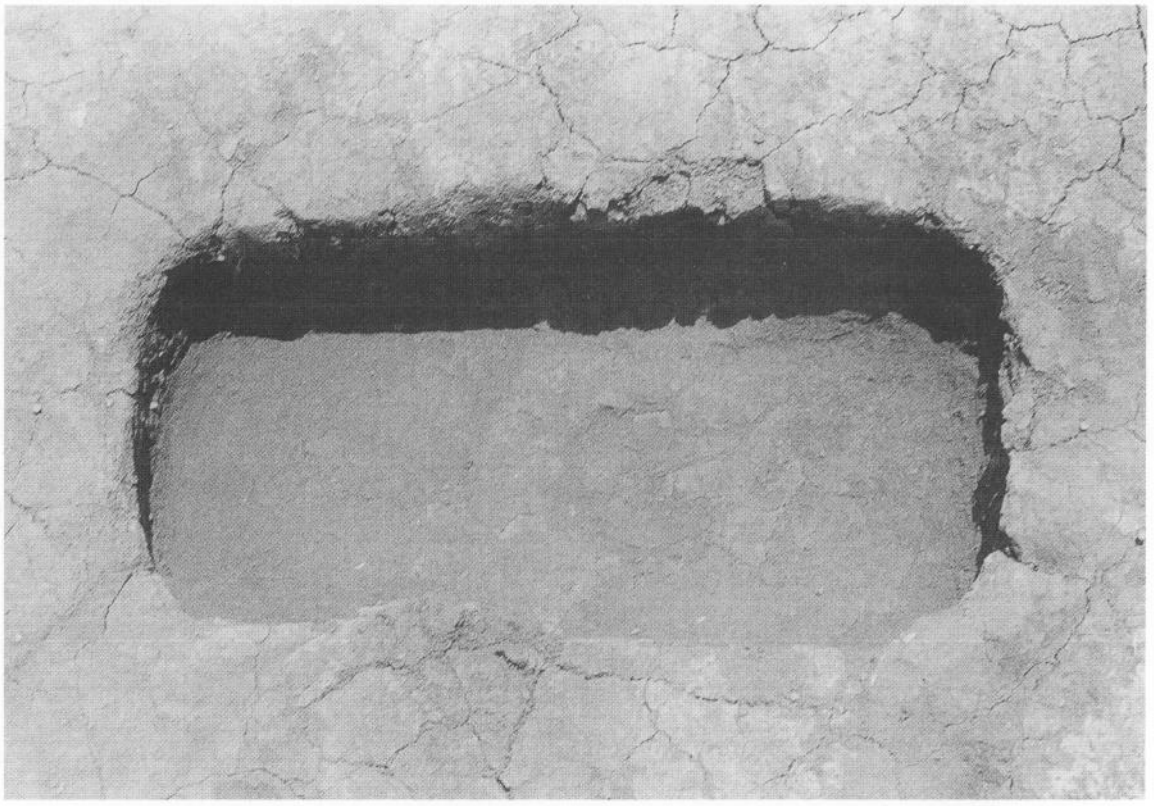


(2)　25号土壙（東から）

(1)　28号土壙（南から）

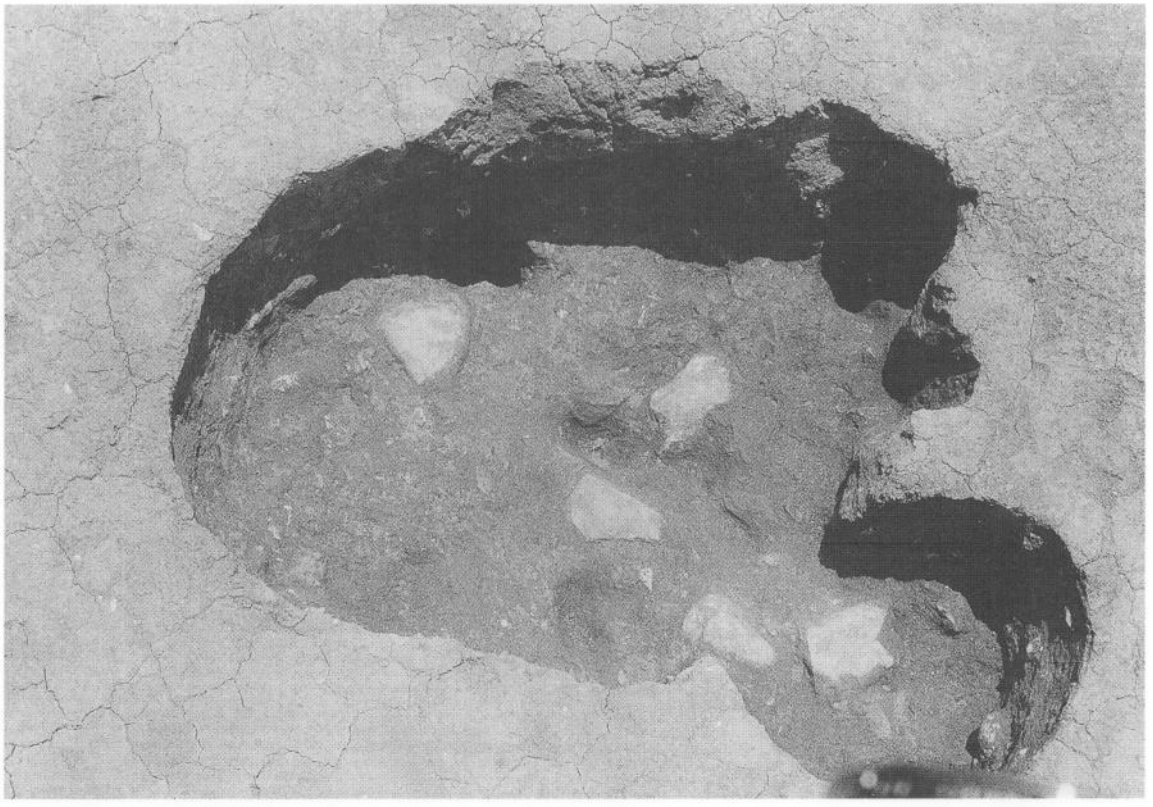


(2) 32号土壙（東から）

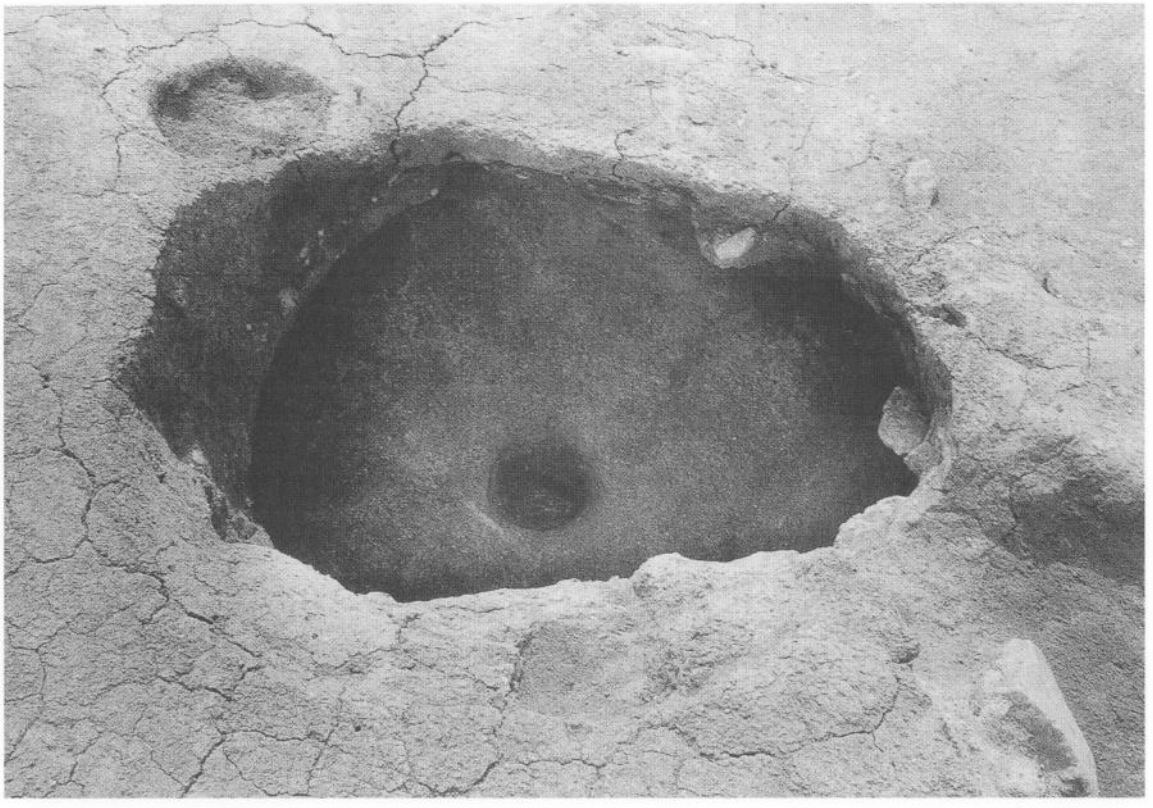


(1)　44号土壙（北から）

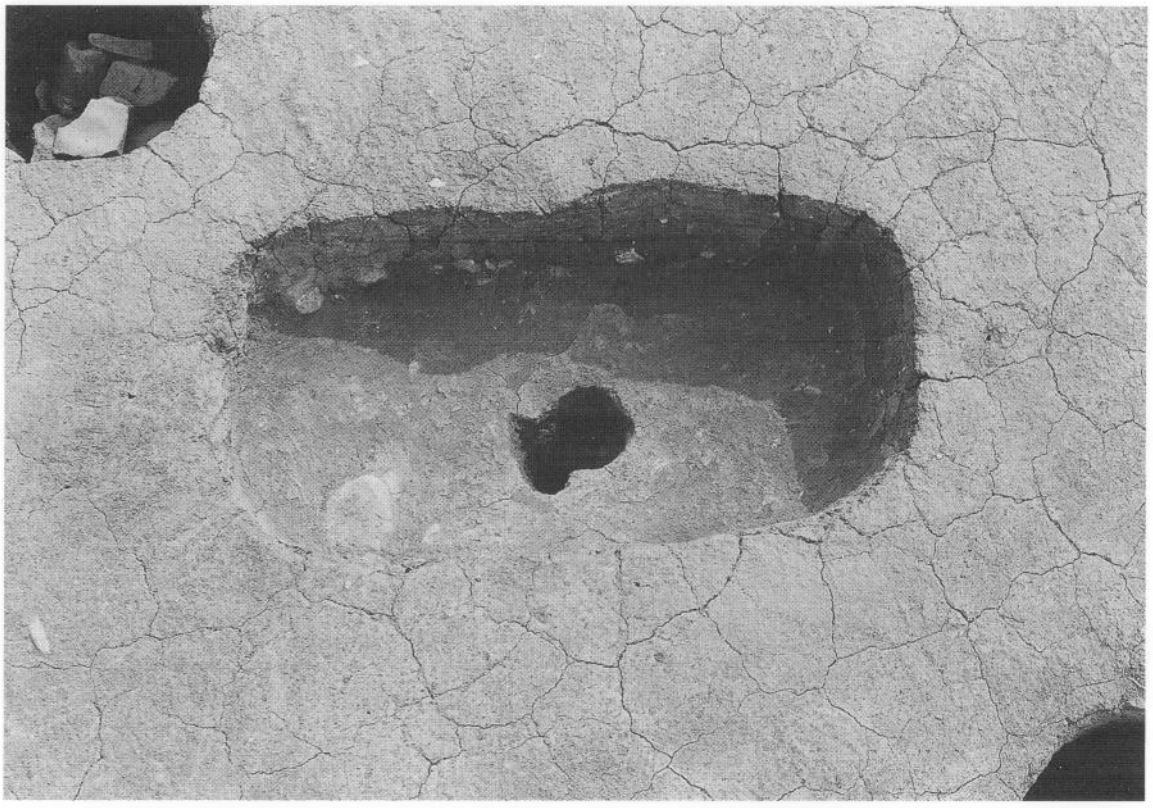
(2) 45号土壙（西から）



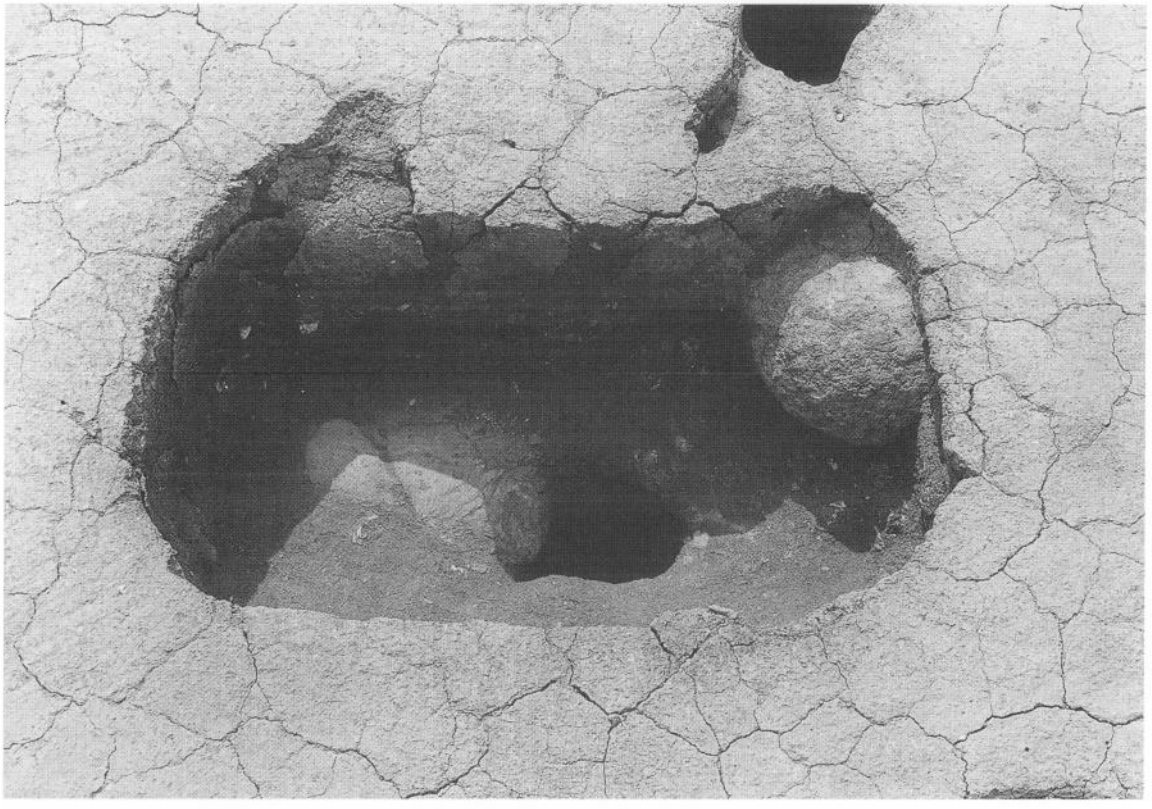
(1)　46号土壙（西から）



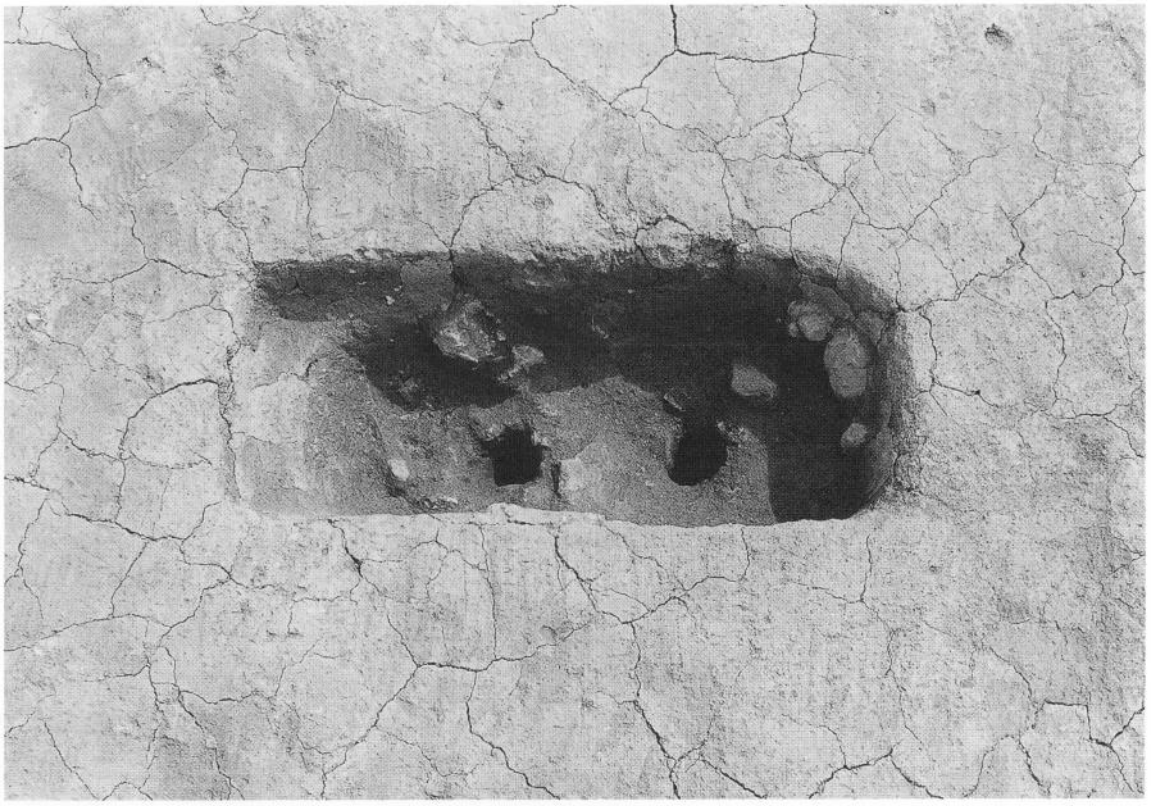
(2)　1号落し穴（東から）



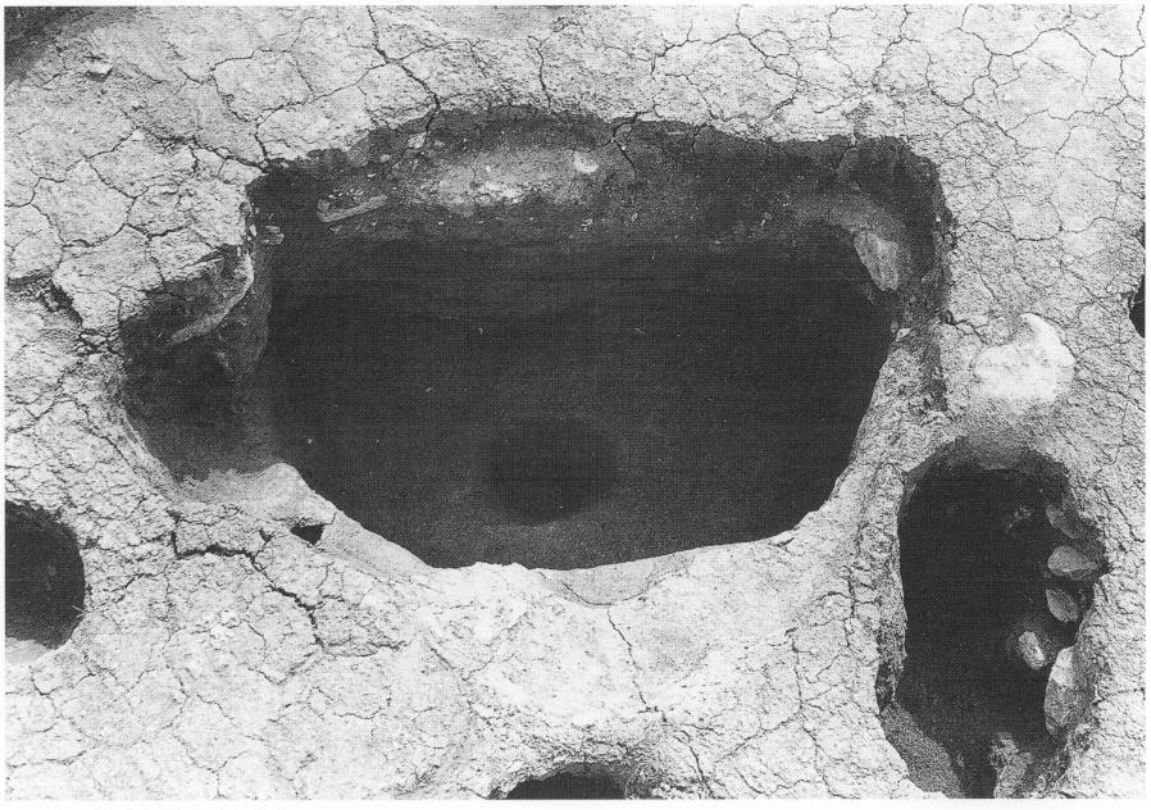
(1) 2号落し穴（東から）



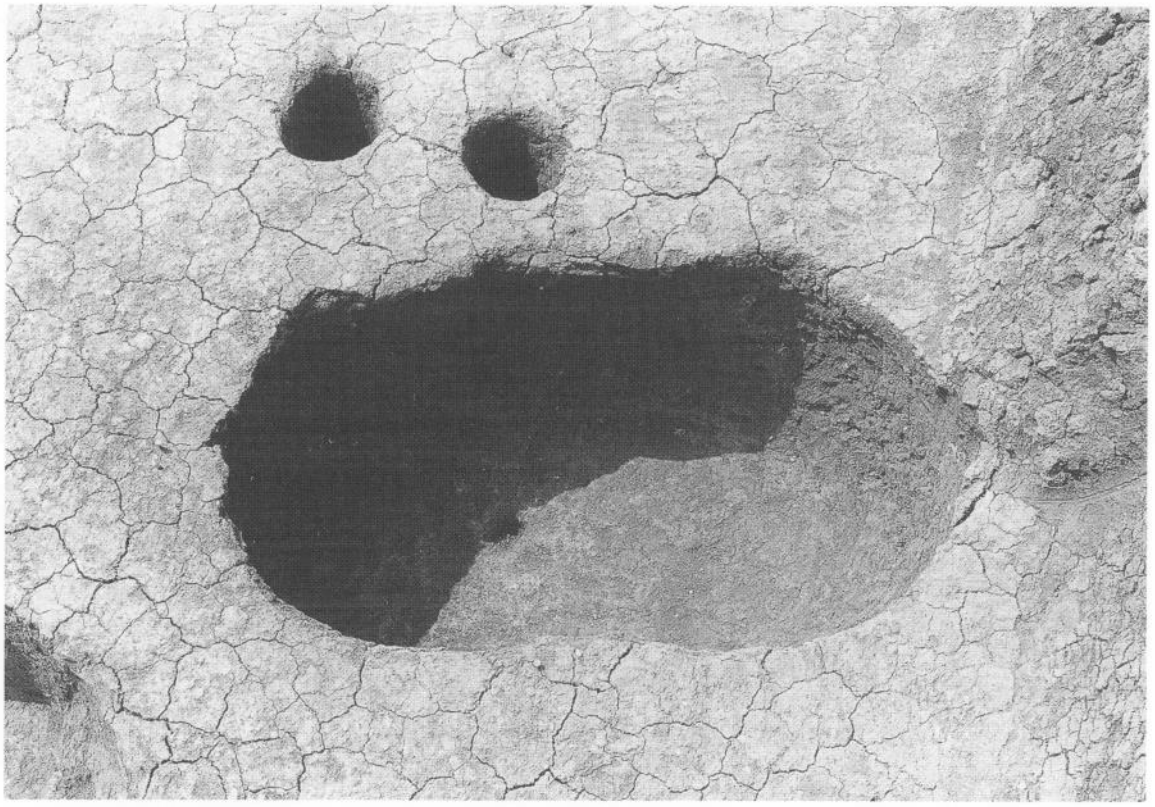
(2) 3号落し穴（東から）



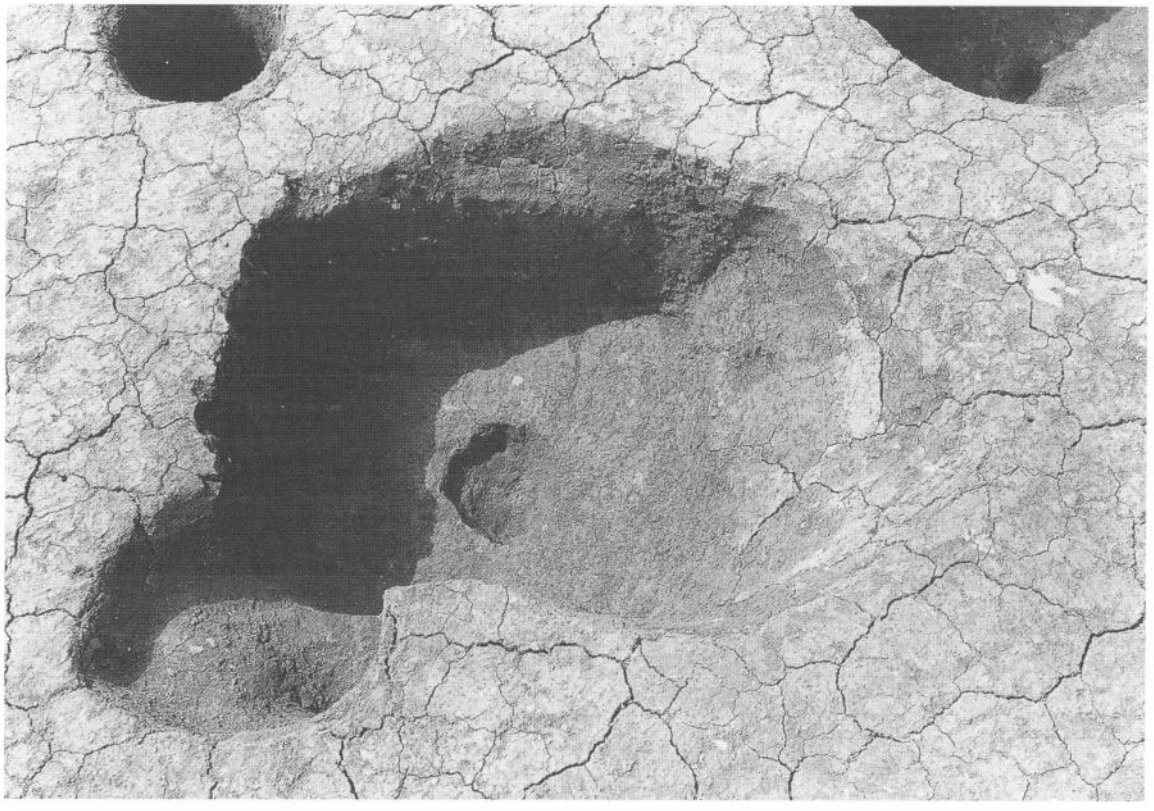
⑴　4号落し穴（北から）



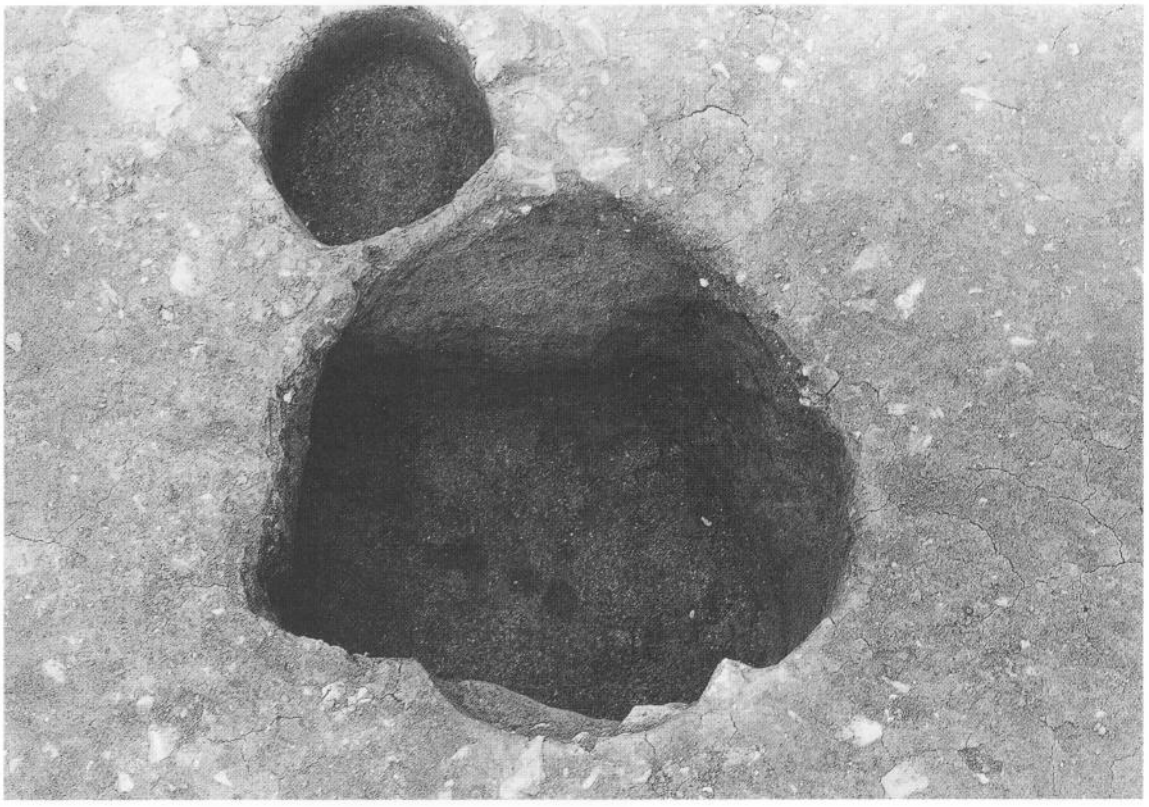
⑵　5号落し穴（東から）



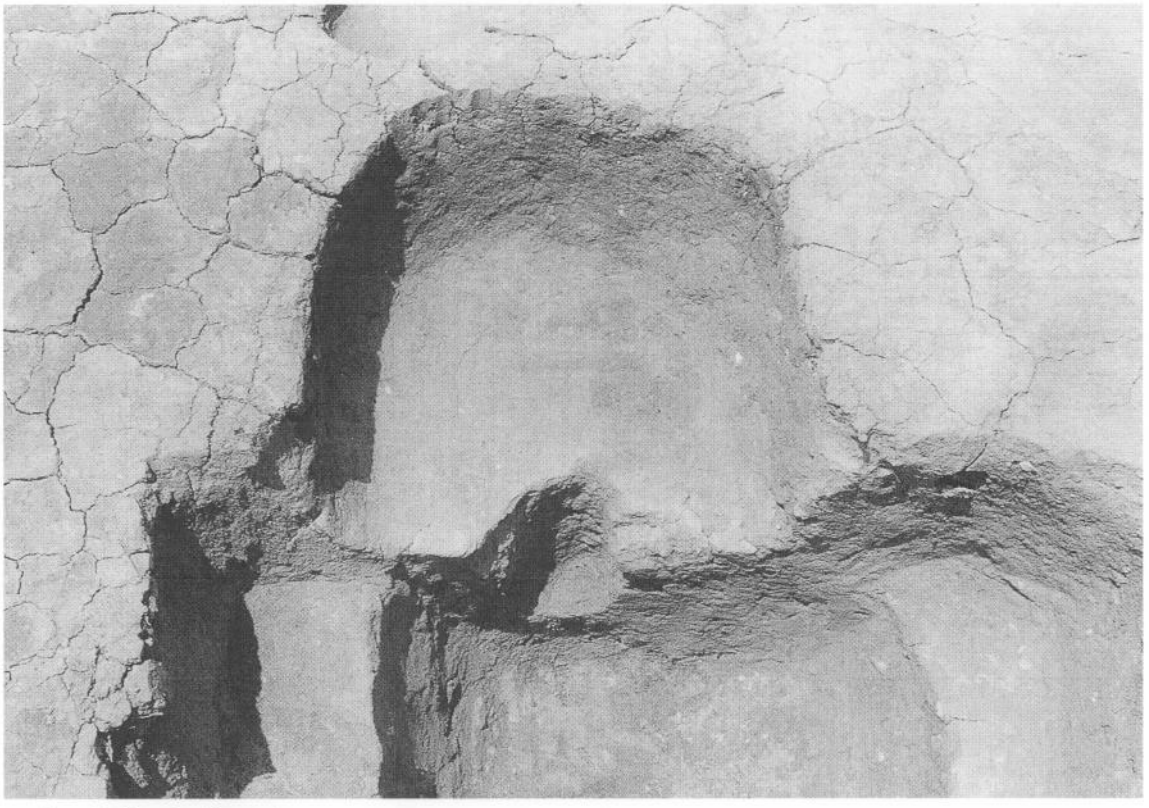
(1) 6号落し穴（南東から）



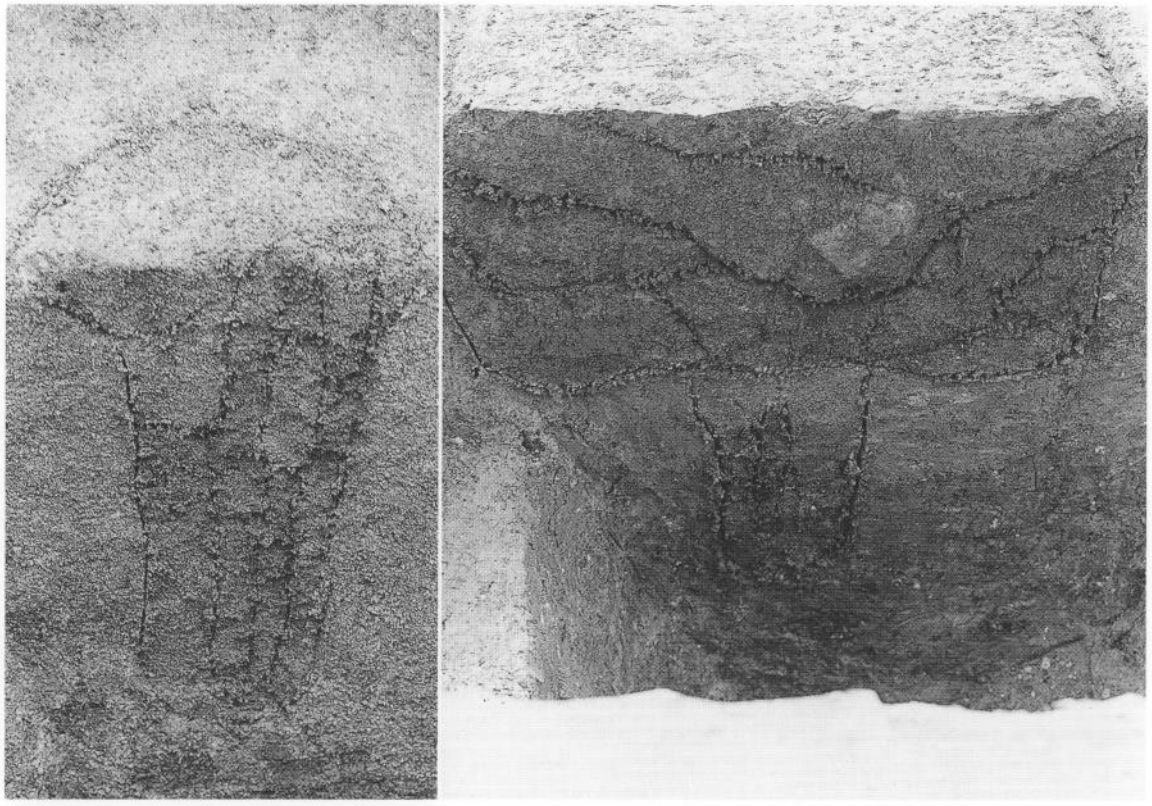
(2) 7号落し穴（南から）



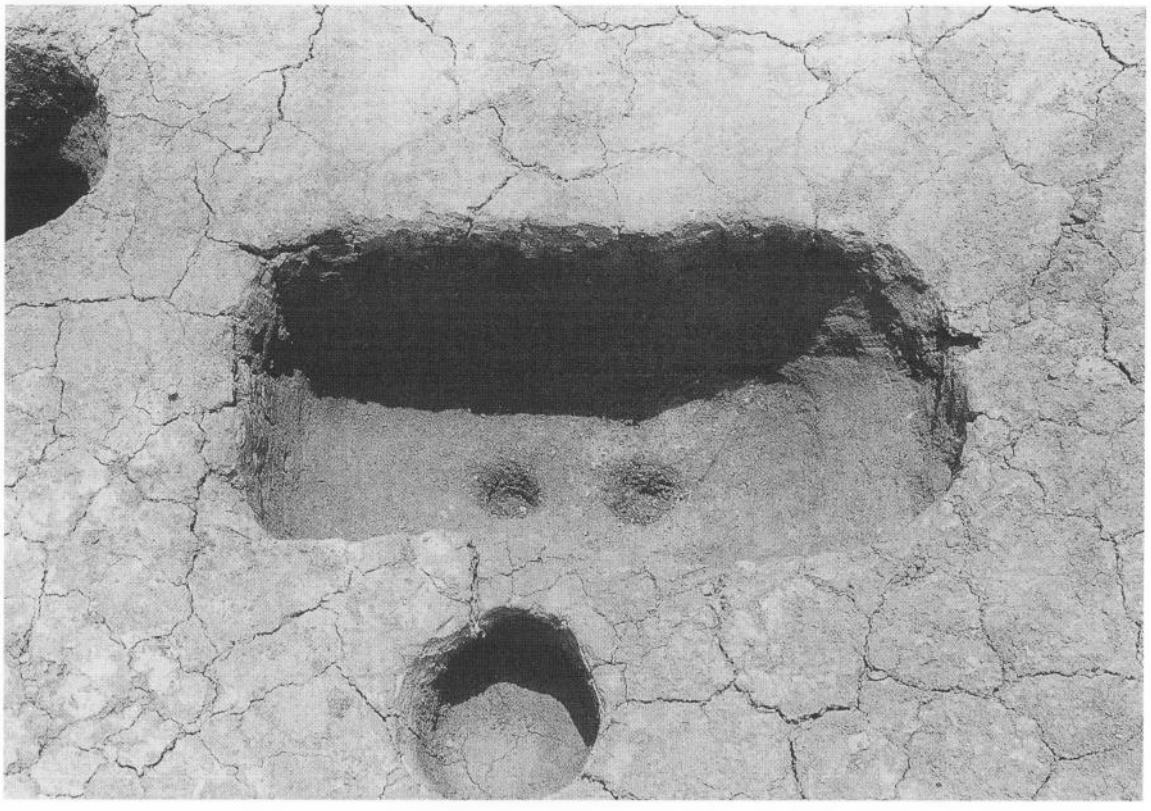
(1) 8号落し穴（南から）



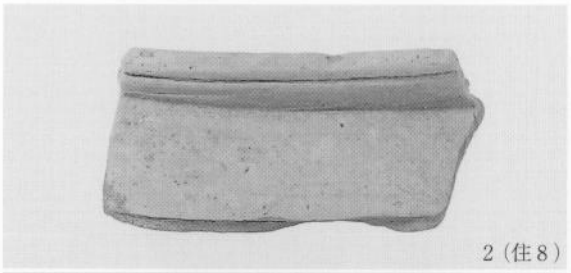
(2) 9号落し穴（東から）

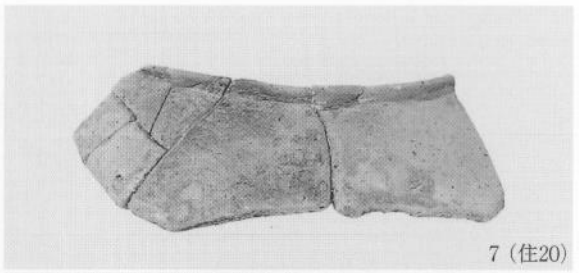


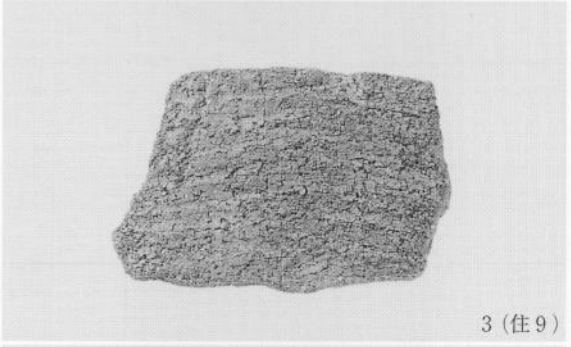
(1)　8号・9号落し穴ピット断面

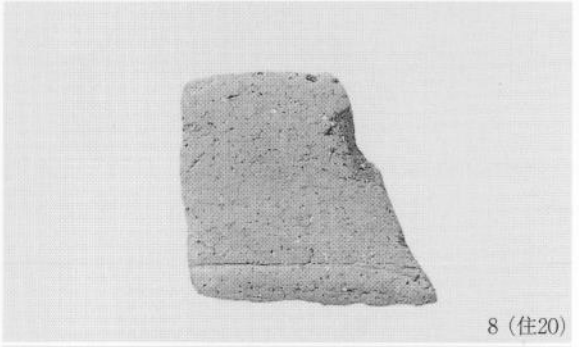


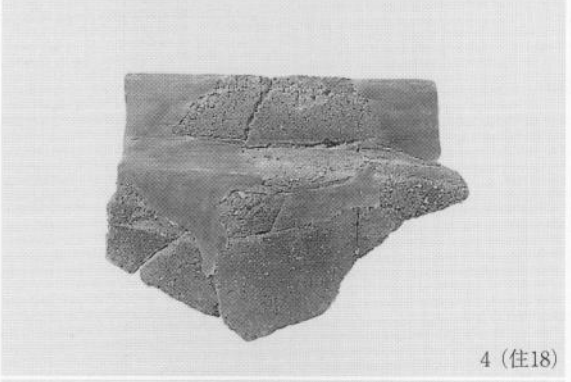
(2)　10号落し穴（北西から）

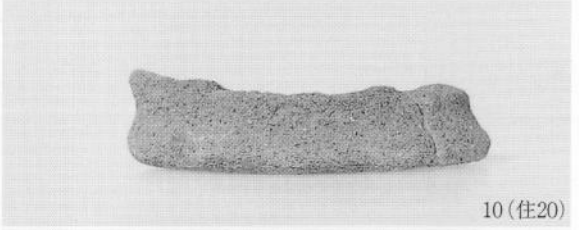

2（住８）

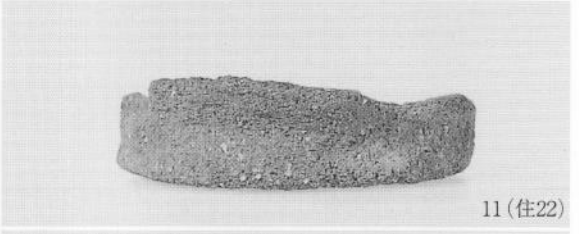

7（住20）


3（住９）


8（住20）


4（住18）

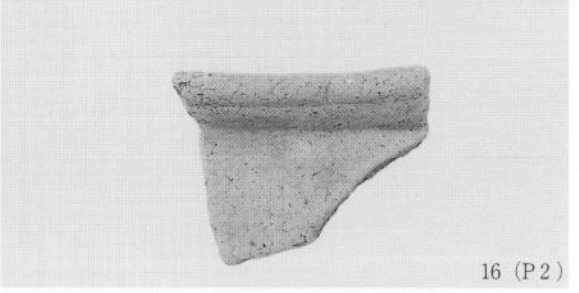

10（住20）


11（住22）

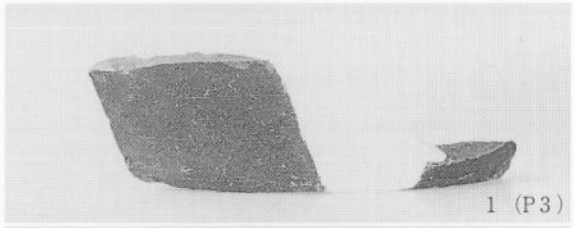
5（住19）

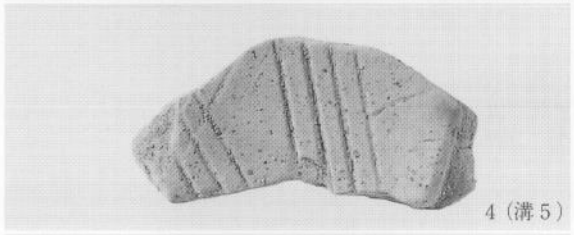
12（土25）

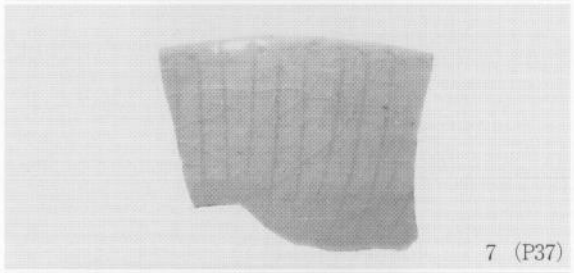
5（住19）

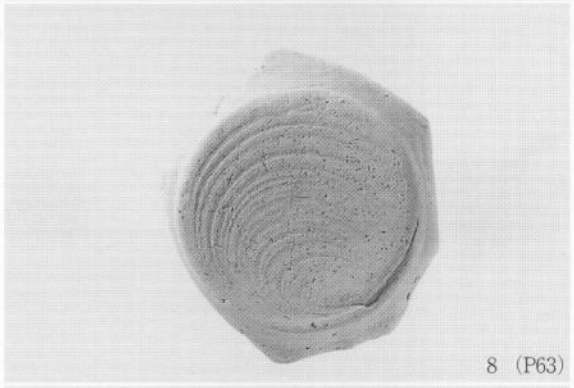

16（Ｐ２）

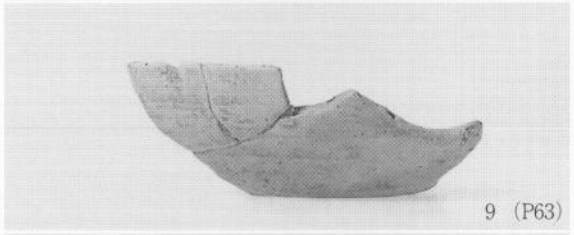
二十谷遺跡出土遺物

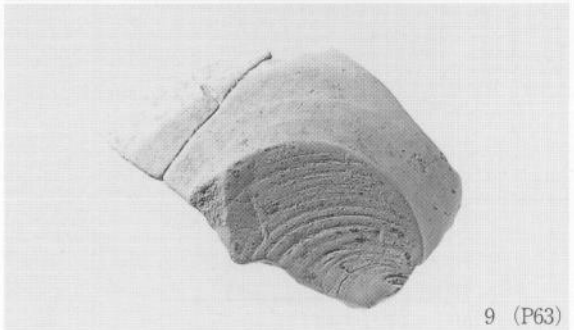

1（P3）

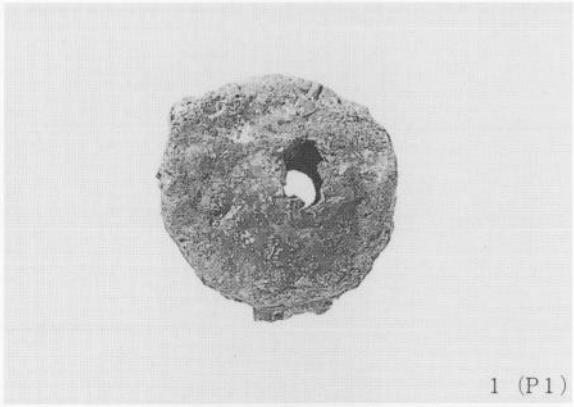

4（溝5）

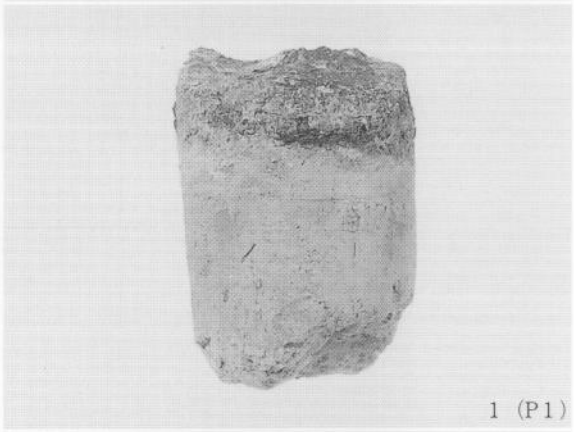

7（P37）


8（P63）

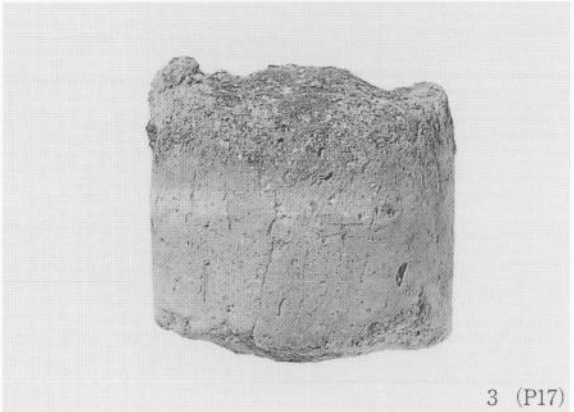

9（P63）


9（P63）

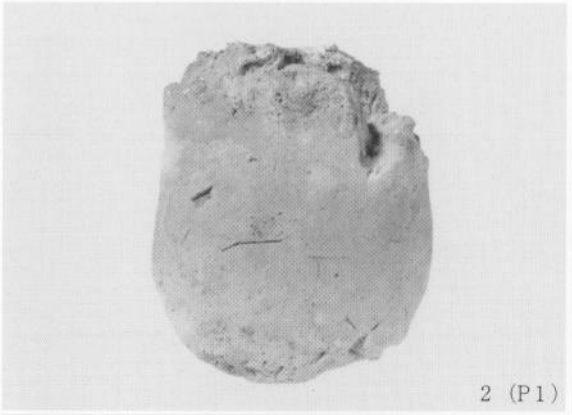

1（P1）


1（P1）

3（P17）

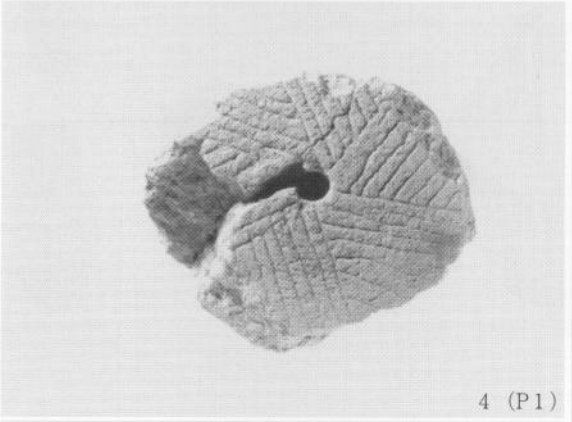

3（P17）

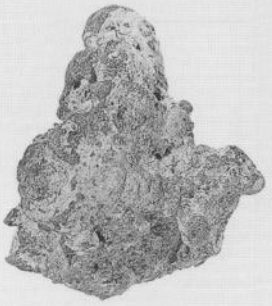
二十谷遺跡出土遺物

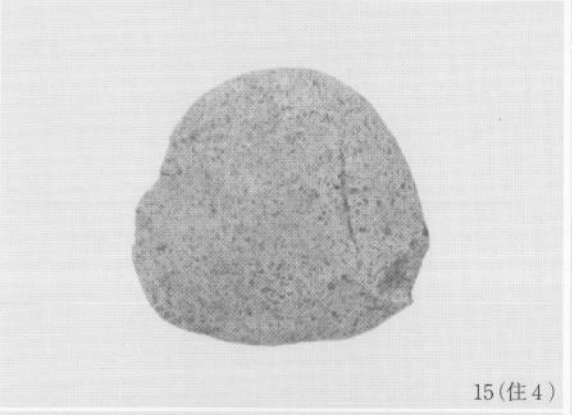

2（P1）

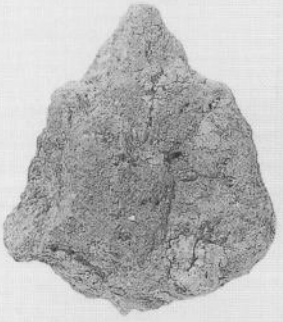
3（P112）

2（表採）

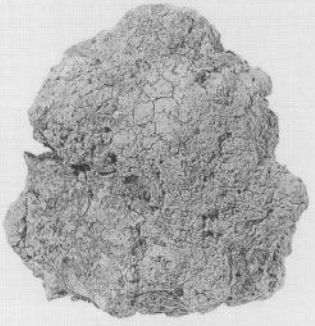

4（P1）


6（土18）

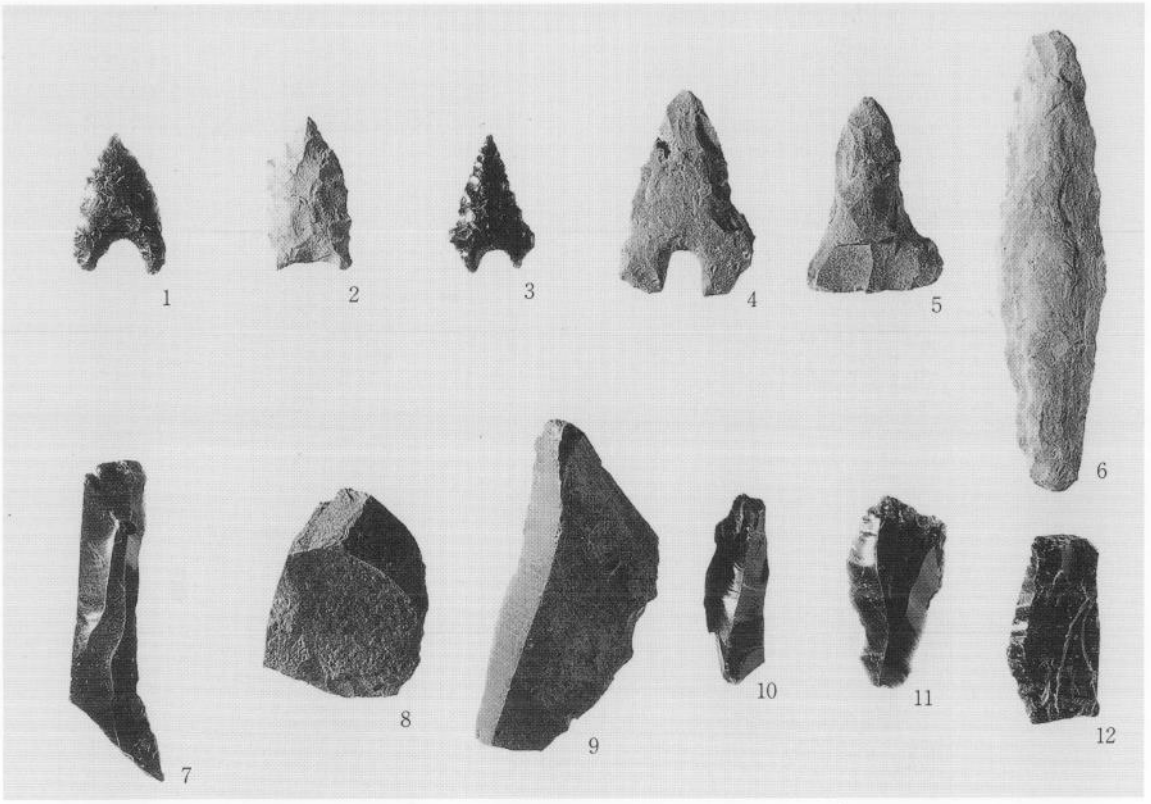

15（住4）


9（溝5）

14（住8）


10（P83）

二十谷遺跡出土遺物



二十谷遺跡出土遺物

VI　陣内遺跡

Ⅵ 陣内遺跡

1 はじめに

陣内遺跡（第53地点）は、福岡県朝倉郡杷木町大字穂坂字陣内に所在する。調査地点は、行政区分で大分県日田市に位置する三日月山（標高496.7m）から谷間筋の南西山麓にあたる。遺跡の北西側600mには国指定史跡である杷木神籠石がある。

調査区は、標高63m前後の山裾で葡萄畑が雛壇状に開墾されていたが、事前の試掘調査で炭焼窯、土壙、溝、ピットなどが確認され、遺物としては黒曜石、中世の土師器類が出土していたことから、本格的な調査に着手した。

調査は、昭和61年８月22日から開始し９月24日の約１か月を要した。調査した面積は5.700㎡で、遺構が検出された範囲は3.500㎡である。

遺構内容は、炭焼窯１基、竪穴状遺構１基、掘立柱建物２棟の他ピットなどで、遺構としては希薄である。もっとも立地が丘陵の谷間に位置しており地形的条件に恵まれていないことがひとつの条件でもあろう。

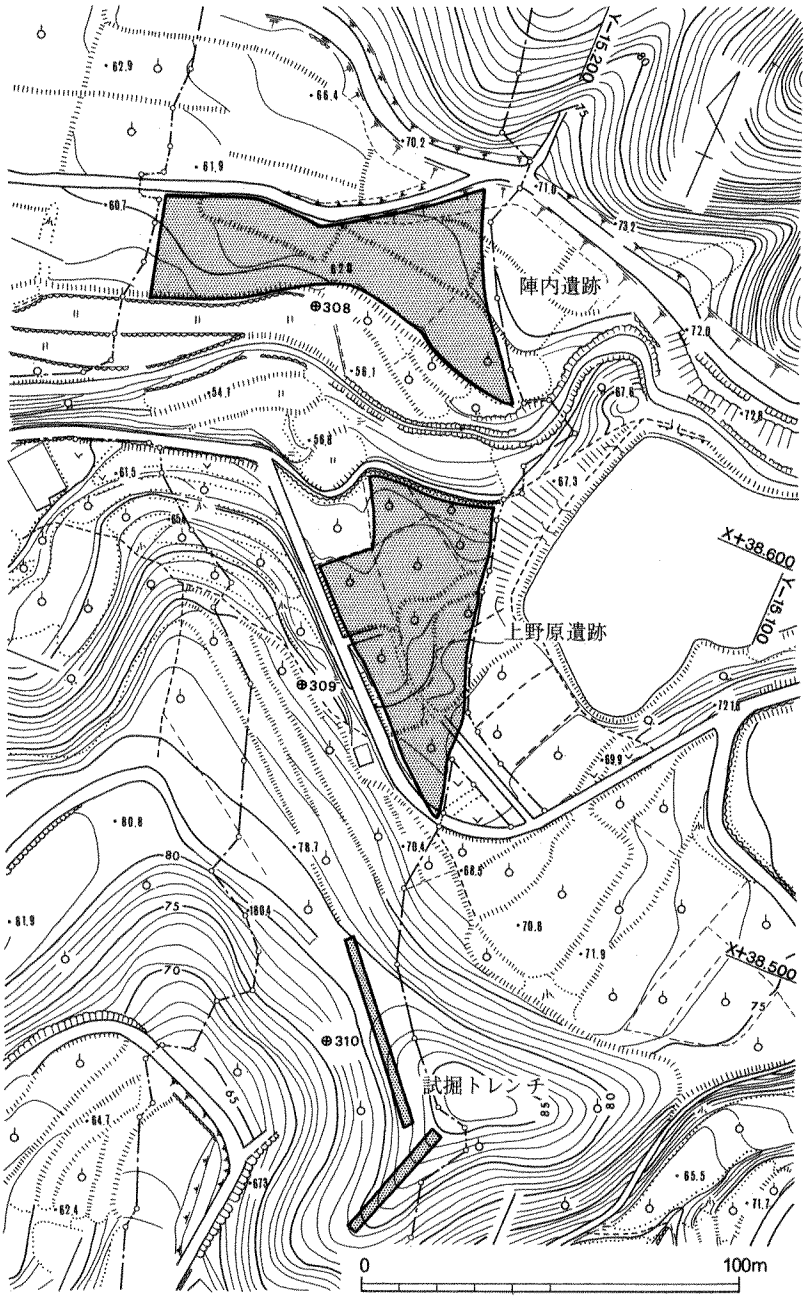
2 遺跡の概要

調査区は、丘陵の谷間に当たる部分の西側の斜面部で、遺構が遺存する箇所は葡萄畑で削平されたため先端部分のみである。検出した炭焼窯は、調査区の東端部で路線境界部まで調査したが先端部が未掘である。炭焼窯に並行するように南側に浅い落ち込みがあり、中から糸切り底の土師器皿が出土したが、これが遺構であるか否かははっきりしない。また、調査区の南東側にある浅い谷部の上層に炭化物と焼土が薄く堆積しており、葡萄畑の耕作時に炭焼窯が破壊された痕跡であろう。

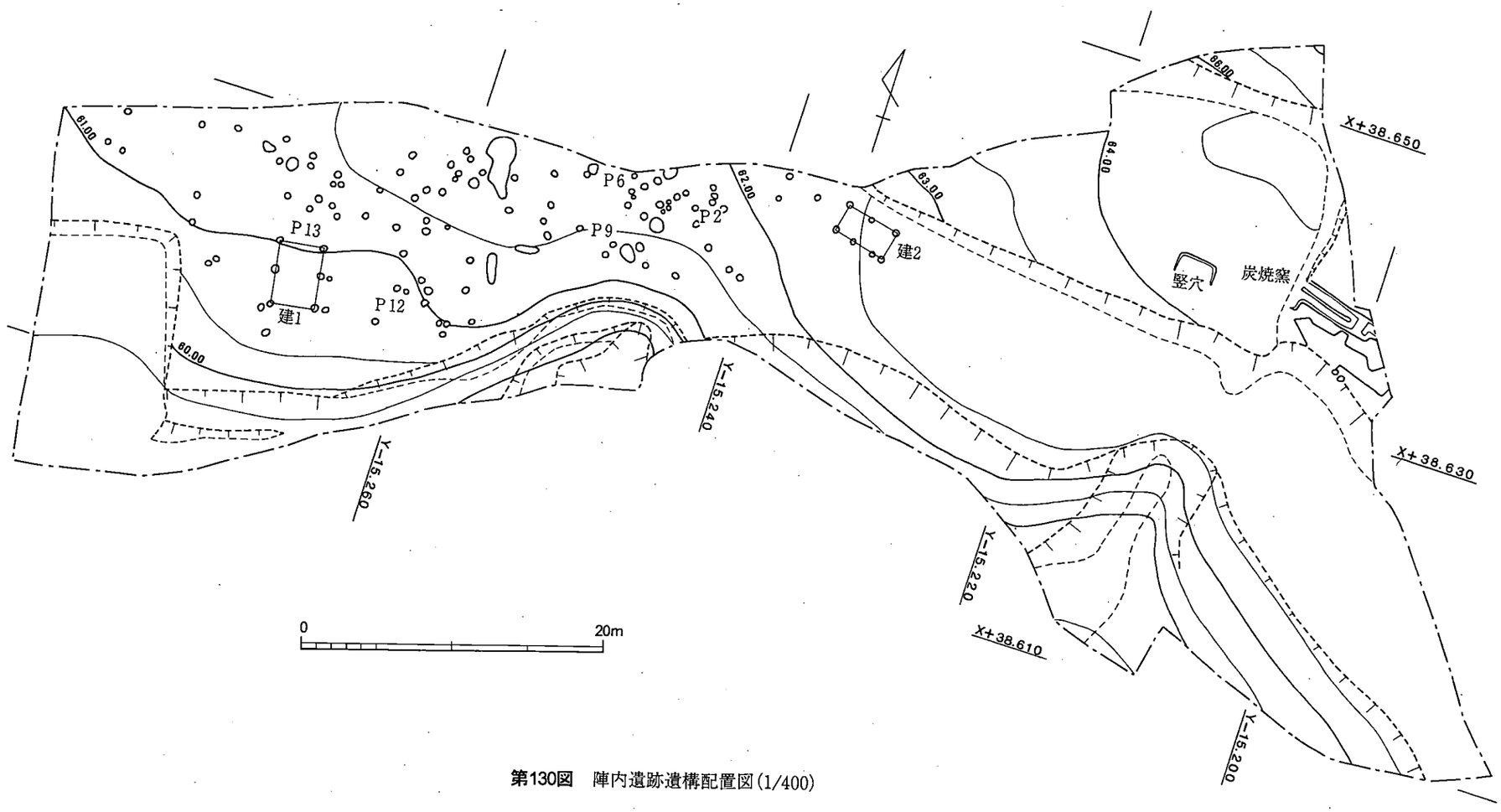
炭焼窯の南側には焼痕のみられる竪穴状遺構があり、窯に伴う作業小屋的な用途が考えられるが、ピットなどはなく簡易な小屋と思われる。また、２棟の掘立柱建物（両者とも２間×２間）は、この炭焼窯に伴う付属施設と考えることもできようが、出土遺物が対比できないことから明確ではない。

出土遺物には、縄文時代の石鏃・トロトロ石器、弥生時代と思われる石斧・石器の未製品、中世の土師器皿・捏鉢・擂鉢・陶磁器のほか近世陶磁器や管状土錘などがあるが、大半が包含層や葡萄畑の撹乱層からの出土で、遺構に伴う遺物は殆どない。

縄文時代の石器は、南側に隣接する上野原遺跡（第54地点）でも包含層から出土しており、当該遺跡も葡萄畑で削平が著しいことから、陣内遺跡や上野原遺跡には縄文時代の遺構の存在が推測され、いづれも畑の耕作により消滅した可能性が強い。



第129図　陣内遺跡周辺地形図(1/2,000)

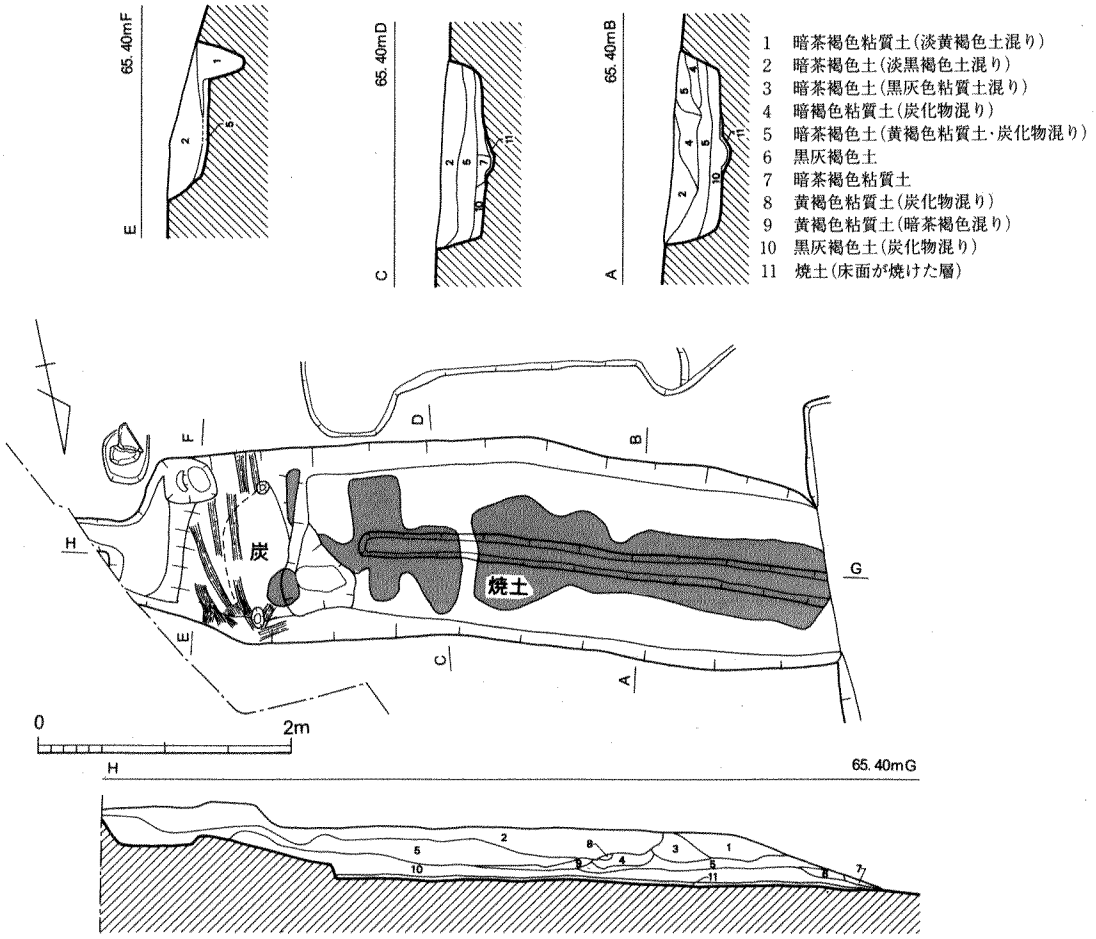


第130図　陣内遺跡遺構配置図(1/400)

3　遺構と遺物

調査区内で検出した遺構は、炭焼窯１、掘立柱建物２、竪穴状遺構１とピットなどである。ピット群は炭焼窯や竪穴状遺構のある周辺には見当たらない。削平を受けているとはいえ、まったく存在しないことからもともと掘られていないと推測される。上記の個々の遺構との関係では、炭焼窯と作業小屋、ここらか約17m西側にある２棟の掘立柱建物とピット群は居住域と位置付けが可能であろう。

また、南東側にある小谷状の落ち込みは、これらの施設と居住域の上り道と考えることも可能で、この谷部からも炭焼窯周辺の包含層と同時期の遺物が出土している。



第131図　陣内遺跡炭焼窯実測図(1/60)

1　窯　跡

炭焼窯（図版94－(1)・(2)、第131図）

調査区の東端で検出した遺構でほぼ東西方向に掘り込まれている。全体の形状は長方形を呈しているが、焚き口部は耕作で破壊されている。現状では基底部が遺存しているのみで上部の構造が不明であるが、地山を掘り込んだ半地下式の構造であったと推測される。

検出した箇所は焼成部と煙道の一部で、現状での焼成部の規模は、長さが4.4m、幅が1.4m～1.6mを測り、焚き口部近くが若干細くなる。深さは焚き口部近くが深く40cm、奥に行くに従ってやや浅く35cmで、底面が東から西方向に若干傾斜をなす。内部の覆土の堆積状況は、上層に茶褐色粘質土が堆積し、下層には全面にわたり竹・茅・木の炭化物の混ざった灰層が10cmほど堆積していた。

底面の中央には長さ3.7m、幅20cm前後、深さ5.0cmの排水溝と考えられる溝が掘られているが、焼成部の奥壁までは掘られていない。この排水溝とそれを挟んだ底面、それに北側壁は著しい焼痕が見られ硬く締まっていたが南側壁はあまり焼けていない。

焼成部と煙道との間には、長さ80cmの地山削り出しの緩斜面状の平坦面が造られその角度は＋14°を測る。両端には小さなピットが掘られ、底面には炭化した竹や木が散在している。煙道部はこの平坦部より10cmほど深く掘り込まれ、それに続くように幅25cmの煙道が設けられている。

出土遺物は、炭焼窯内からは少なく、白磁碗の破片と管状土錘の破片が、周辺の包含層からは土師器皿・土鍋・白磁碗・龍泉窯系青磁碗などの破片が出土している。

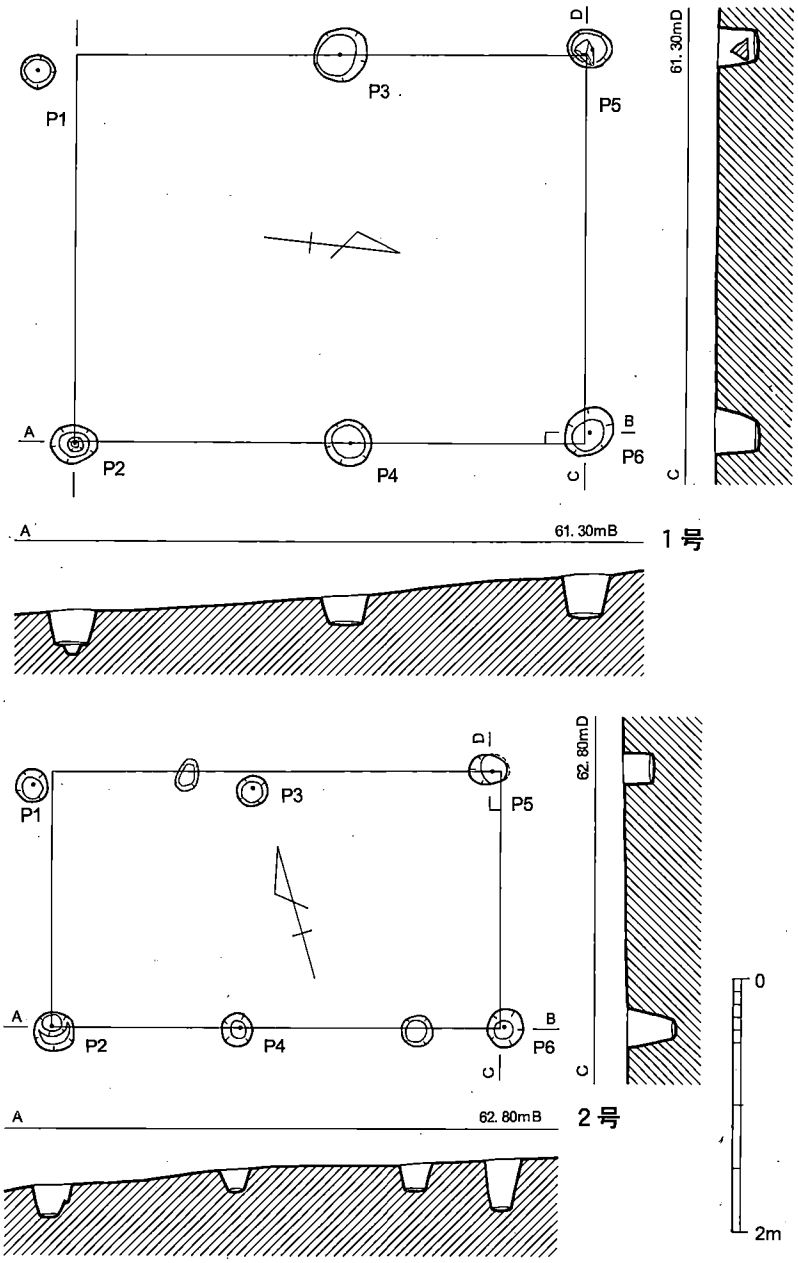
2　掘立柱建物

1号掘立柱建物（図版95－(1)、第132図）

調査区の西側で検出した1間×2間の掘立柱建物で、棟方向をほぼ南北に向けている。おそらく平地式の住居として設営された建物であろう。P2とP4に隣接する形で2本のピットが掘られており（図版95－(1)参照）、出入り口の庇がついていた可能性がある。梁間柱間は若干のばらつきがあるが、近似した数値を示しているのに対し、桁行間は数値に開きがあり造りが雑である。ピットからの出土遺物はない。

2号掘立柱建物（図版95－(2)、第132図）

1号掘立柱建物とほぼ直交する形で作られた1間×2間の粗末な掘立柱建物で、1号同様平地式の住居と考えられる。出土遺物はない。



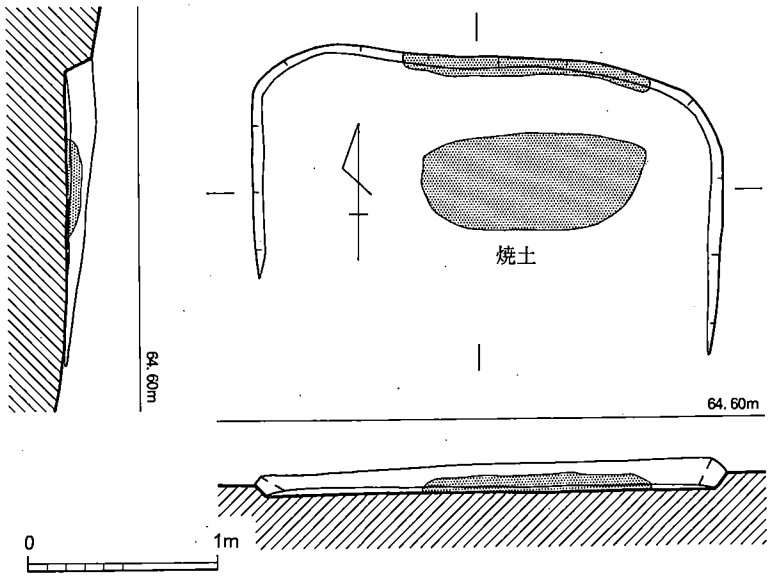
第6表 1号掘立柱建物計測表(単位cm)

梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 295	P3-P4 305	P1-P3 240	P3-P5 200	P1-P5 440
	P5-P6 300	P2-P4 215	P4-P6 190	P2-P6 405

第7表 2号掘立柱建物計測表(単位cm)

梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 190	P3-P4 185	P1-P3 175	P3-P5 190	P1-P5 365
	P5-P6 200	P2-P4 150	P4-P6 210	P2-P6 360

第132図 陣内遺跡1・2号掘立柱建物実測図(1/60)



第133図　陣内遺跡竪穴状遺構実測図(1/40)

3　竪穴状遺構（第133図）

炭焼窯の西側6.0mの所に位置する小形の遺構で、南側が削平されてはいるが方形乃至長方形のプランを有する。北壁の長さは2.50m、深さは15cmを測り、北側の床面には楕円形状に焼土が薄く堆積し、北壁の約1/2が著しく焼けていた。以上のことから、この施設は何か火を使うためのものか、または炭焼きの番小屋的な用途が推測される。

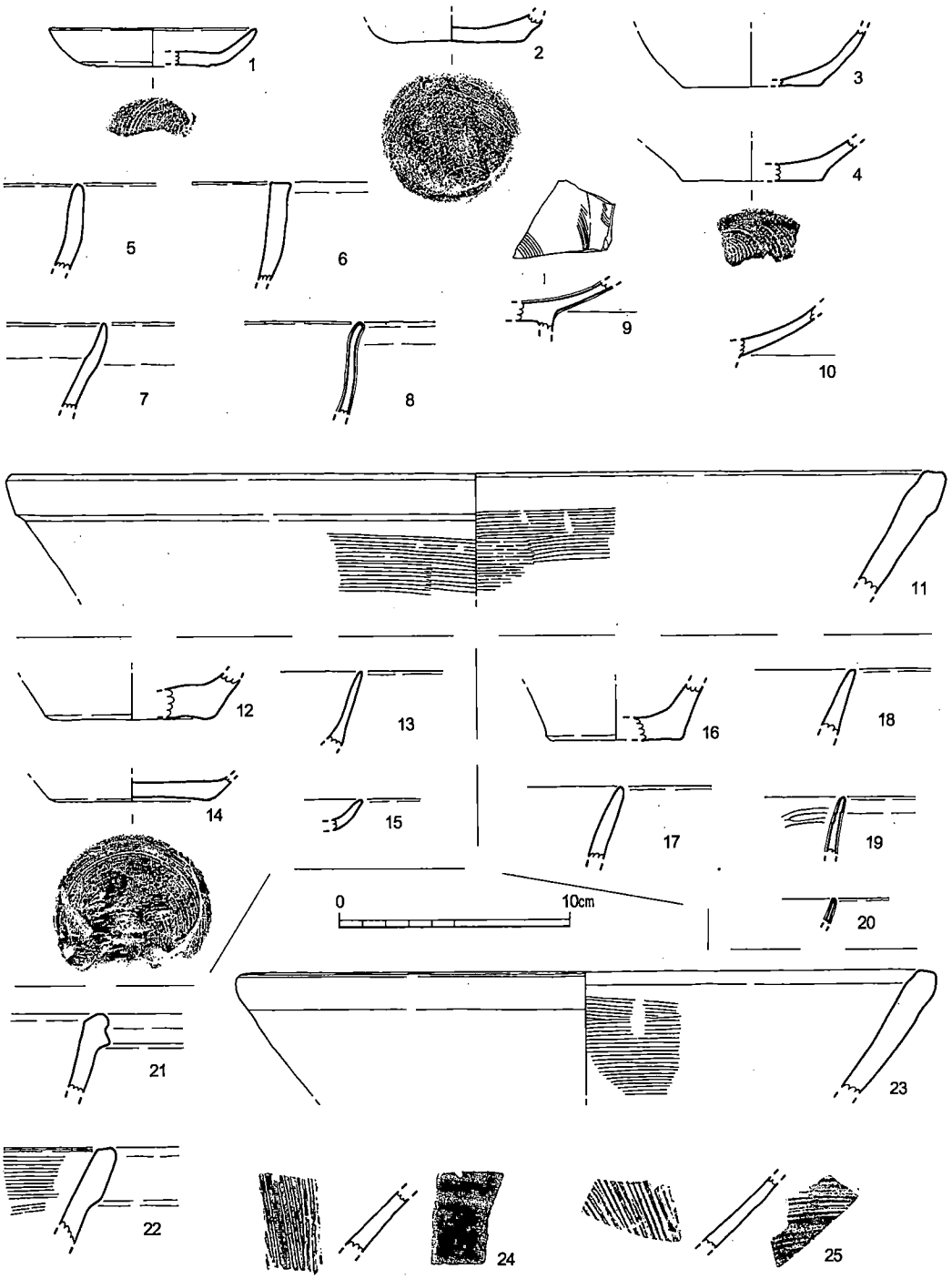
この遺構からの出土遺物はない。

4　出土遺物

①土　器（図版96、第134・135図）

1～11は炭焼窯内及びその周辺の包含層から出土した土器で、土師器皿・坏・土鍋・青磁碗や白磁碗、近世陶磁器類がある。

土師器（1～7・11）　1は器高の低い皿で糸切りの底部をなす。復原口径9.0cm、底径5.0cm、器高は1.6cmで包含層からの出土。2も包含層からの出土で体部上半を欠く。底径が6.0cmを測る。3は包含層出土の坏の破片で復原底径が5.8cmである。4は糸切り底の皿の破片で底部外面付近をヘラ削りし、体部に稜線がつくタイプであろう。炭焼窯の覆土中から出土した。復原底径6.0cm。5は坏の破片で周辺の包含層出土である。6は口唇部を肥厚させた土鍋の口



第134図　陣内遺跡出土土器実測図（その１）(1/3)

縁部片で外面に煤が多く付着する。包含層出土である。７は鉢の口縁部片で口唇部が尖る。胎土には雲母を多く含み包含層出土である。11は口縁部を肥厚させた土鍋の破片で、外面に煮こぼれ痕と弱い二次火熱を受けている。内外面とも横ハケで仕上げる。

陶磁器（８～10）　８は青磁の碗の口縁部片である。口縁下に一条の沈線が巡り貫入がみられる。釉は淡い黄緑色に発色する。胎土はやや粗く灰白色である。包含層からの出土である。９・10は白磁碗の底部片で高台を欠く。９の見込部には界線が巡り櫛目状の文様がみられる。高台下半と底部外面は露胎である。釉の発色は良く、胎土に不純物が多い。炭焼窯内からの出土である。10も見込部に一条の界線が巡る。底部下半は露胎で、外面は気泡が目立つ。包含層の上層から出土。

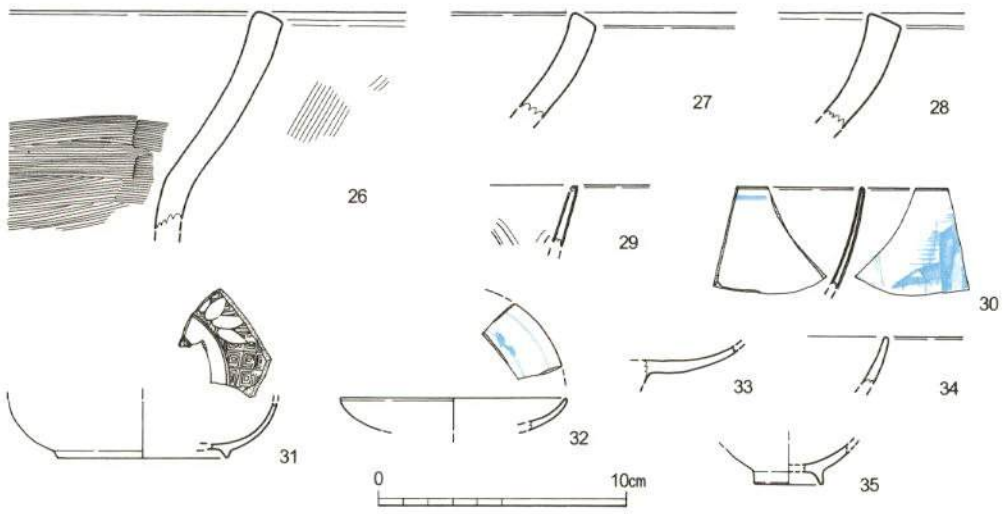
12～15は各ピット内から出土した弥生土器と土師器片である。12は弥生時代の甕の底部片でやや胎土が粗い。Ｐ－２からの出土である。

土師器（13～15）　13は坏の口縁部片でナデ仕上げである。Ｐ－６から出土した。14は糸切りで上げ底の皿の破片で底部径が6.7㎝を測る。Ｐ－９から出土した。15は皿の口縁部片でＰ－13からの出土である。

16～20は調査区南東側の下段にある小さな谷部で採集した土器である。16は弥生時代の甕の底部片で全面に二次火熱を受け赤く変色している。復原底径は5.6㎝である。

土師器（17・18）　両者とも口縁部から体部にかけて直に作られる坏の破片であろう。両者とも胎土は精製されている。

陶磁器（19・20）　19は青磁碗の口縁部片で、内外面に一条の沈線が巡る。胎土は精製され、黄灰色に発色する。20は近世陶磁器の小片である。



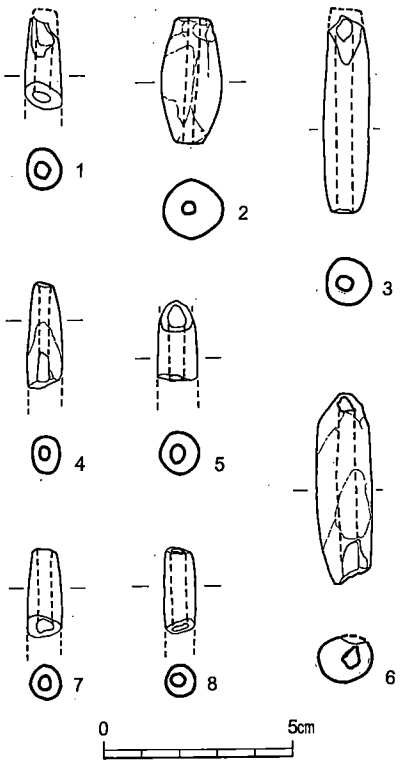
第135図　陣内遺跡出土土器実測図（その２）(1/3)

21～35は遺構検出時や撹乱土からの表採資料で、中世土師器や近世陶磁器などがある。

土師器（21～23・26～28）　21～23・26～28は土師器の土鍋の口縁部片である。口縁部の形態から４タイプがある。21は口縁部に三角凸帯を巡らすもので、22は幅広い有段をなすタイプで、内面に横ハケが残る。23は口唇部が若干肥厚するタイプで同じく横ハケで仕上げる。復原口径は29cmである。26～28は口縁部が内湾するタイプである。26は大型の土鍋で、口縁部が長く、胎土は砂粒が少なく雲母を多く含む。27も同様な胎土であるが同一個体ではない。28は内側に若干肥厚するもので、これも胎土が精製されている。すべての外面に二次火熱を受け変色し煤が付着する。

陶　器（24・25）　２個体とも擂鉢の破片で、24は内面に７本単位、25は５本単位の筋目が入る。筋目は前者が繊細で後者が粗い。近世の所産か。

磁　器（29～35）　29は青磁碗の口縁部小片で内面に文様が彫り込まれているが不明。30は近世陶磁器で、表面に風景画が染め付けされている。深緑に発色する。内側には２本の界線が巡る。表裏に貫入が入る。31～35も近世陶磁器である。33は見込部の釉を掻きとり、底部付近は露胎である。鶯色に発色する。



第136図　陣内遺跡出土土製品実測図(1/2)

②土製品（図版96、第136図）

管状土錘（１～８）　完形品のものは１個のみであるが、形状から細みで小型のもの、太く短いもの、やや大型のものの３タイプの管状土錘がある。

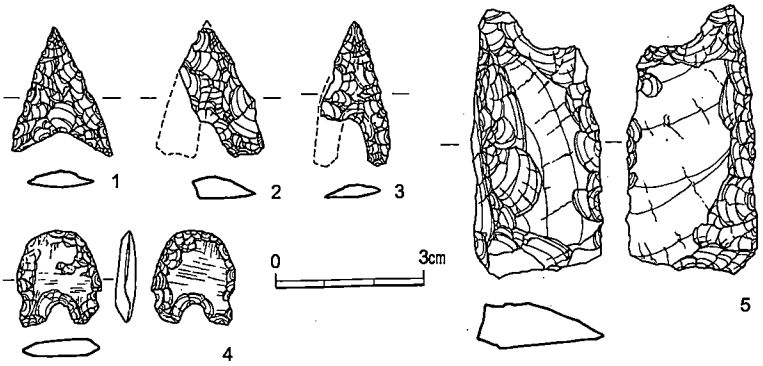
１は炭焼窯の覆土内から出土したもので約1/2が欠損している。細みで小型のタイプである。２は１号掘立柱建物の東にあるＰ12から出土した完形の管状土錘で、丸みのあるずんぐりした棗形のタイプである。長さ3.4cm、最大径は1.6cmを測る。３～６は下段の谷部から出土したもので小型品と大型品とがある。７・８は小型品で、約1/2を欠損している。

③石　器（図版96・97、第137～139図）

石　鏃（１～３）　１は押圧剥離によって丁寧な調整が行われ、両端基部は鋭く尖る。最大長2.45cm、幅2.0cm、厚0.40cm、重0.90ｇである。珪岩製で下段小谷部から出土。２は左基端

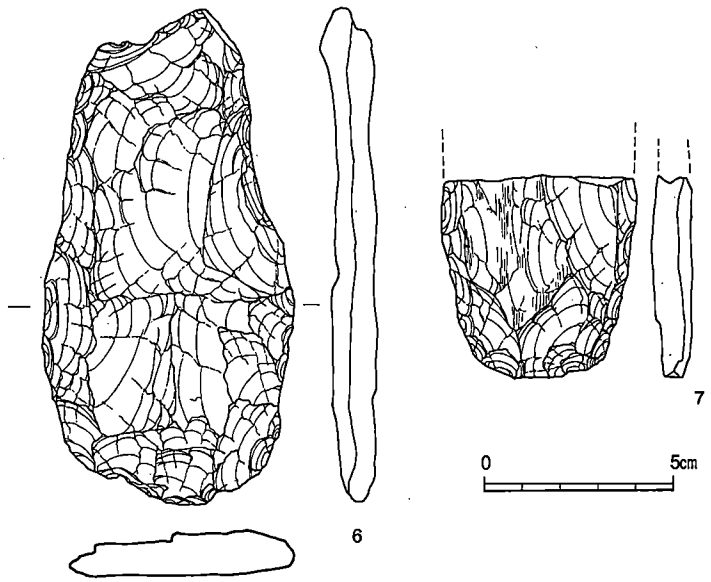
を欠損する。最大長2.80cm、幅1.35cm、厚0.30cm、重0.80ｇである。黒曜石製で表採資料。３は左基端部と先端部が欠損する。最大長2.55cm、幅1.70cm、厚0.45cm、重1.30ｇである。黒曜石製で下段部の表採である。

トロトロ石器（４）　４は端部が円形に調整され、両基端を有すトロトロ石器である。両面胴部は丁寧に磨かれ、整形剥離面は消えている。最大長1.90cm、幅1.65cm、厚0.40cm、重1.40ｇである。チャート製で下段の表採である。



第137図　陣内遺跡出土石器実測図（その１）(2/3)

石　匙（５）　５は幅広不定形剥片の両側縁部に刃部加工を施している。摘み部は浅いノッチを施し作出されている。また、下端部付近には「カジリ」がある。最大長5.30cm、幅2.50cm、厚0.95cm、重15.10ｇである。サヌカイト製で調査区上段コーナーから出土した。

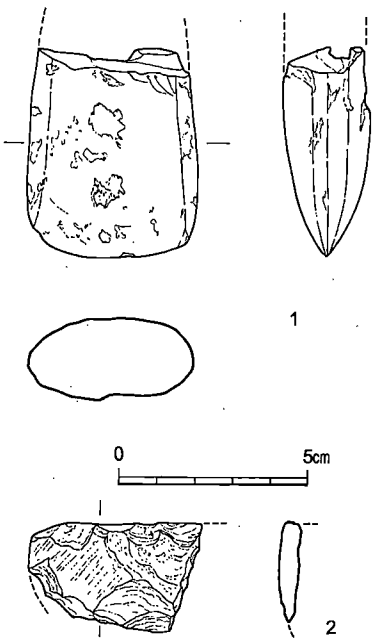


第138図　陣内遺跡出土石器実測図（その２）(1/2)

打製石斧（６・７）　６は粗い両面加工によって仕上げられている。最大長13.10cm、幅6.65cm、厚1.50cm、重137.20ｇである。緑色変岩製で調査区上段隅から出土した。７は胴部から基部を大きく欠損し、刃部から胴部にかけて所々摩滅している。緑色変岩製で重さ47.60ｇである。調査区上段コーナーから出土した。

磨製石斧（1）　頭部を欠いた小型の粘板岩質の磨製石斧の破片がある。表面が若干風化しざらつきがあるが、均整の取れたもので刃部は鋭利に研がれている。調査区下段で採集した遺物である。

不明石器（2）　絹雲母片岩製の石器で、約1/2が欠損しているが半月形を呈すると思われ、図示した面の一部が研磨され石包丁の未製品と考えられる。裏面は剥離し、製作途中で欠損したものであろう。下段谷部から出土した。



第139図　陣内遺跡出土石器実測図(その3)(1/2)

4　おわりに

陣内遺跡で検出した遺構は少なく、炭焼窯1基と竪穴状遺構、掘立柱建物2棟及びピットのみである。立地条件が丘陵の谷部に面した狭い北側斜面に当たることから当初から規模の大きな遺跡はないと考えていた。検出した炭焼窯は下部構造のみが遺存しており、中央床面に浅い配水施設を持つ長方形のプランに煙道が付設される単純な構造であったと推測される。

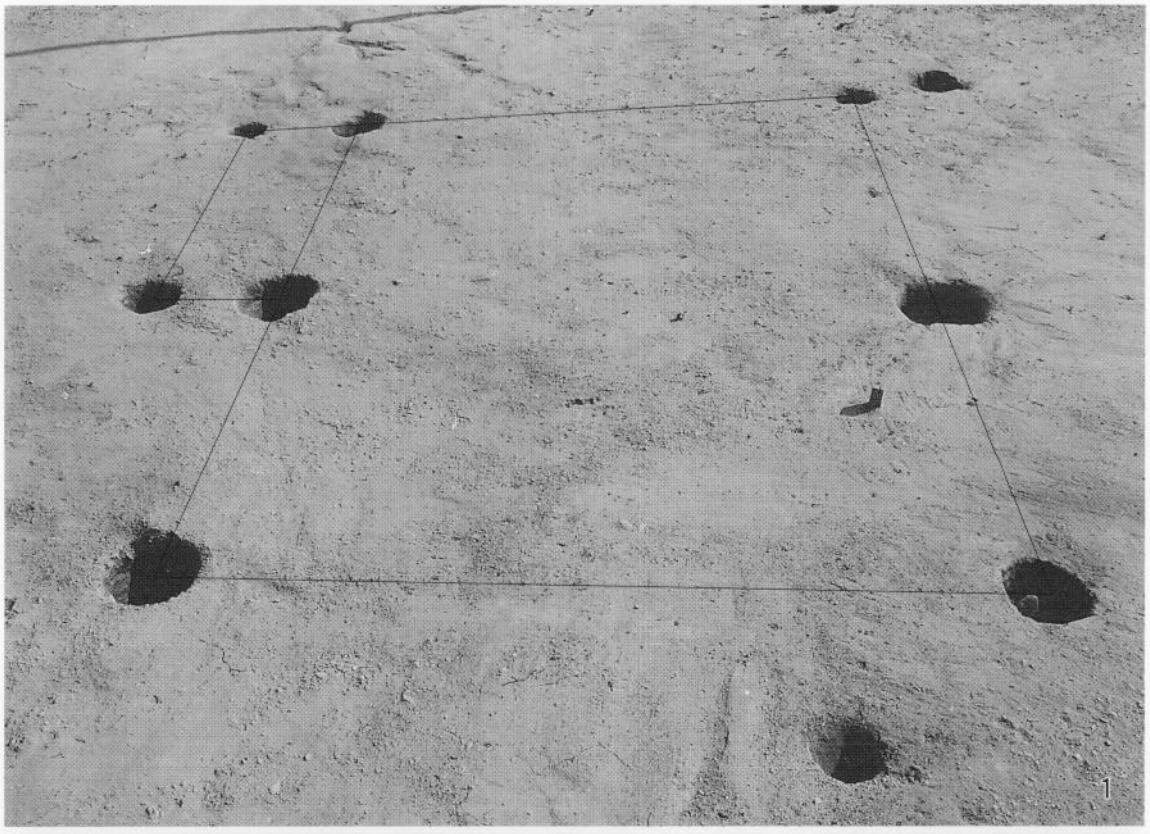
これに伴う竪穴遺構や小規模の掘立柱建物2棟が付属しており、作業小屋か番小屋が想定されるが、建物が住居の可能性もある。遺構に伴う直接の出土遺物は確認できていないが、周囲の包含層や調査区の小谷部で採集した土器は中世と近世陶磁器類があり、ただ一片炭焼窯内から出土した白磁碗の破片で見ると上限が12世紀後半頃で、社団法人日本アイソトープ協会に委託したC－14による年代測定結果によると、西暦1950年を基準にして660±70yearsBP の値が測定されており、概ね13～14世紀頃の所産と推測できる。

この他、縄文時代の石鏃やトロトロ石器、弥生時代の石斧と石包丁の未製品などがあり、北側の丘陵上にこの時期の遺跡が存在するのかも知れない。

図　　版

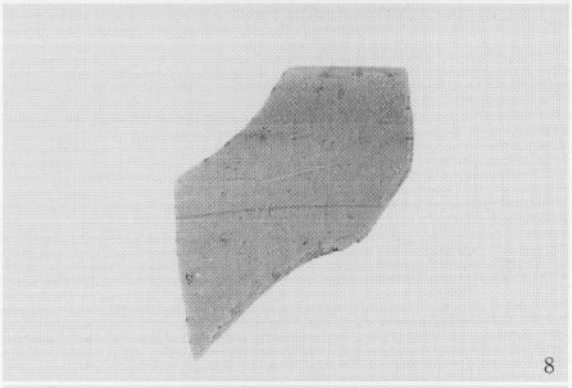
(1)　陣内遺跡遠景（南から）　　(2)　陣内遺跡全景（東から）

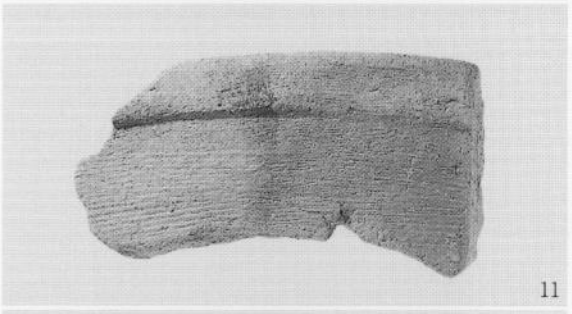
(1)　炭焼窯炭化物出土状態（西から）　　(2)　炭焼窯完掘状態（西から）



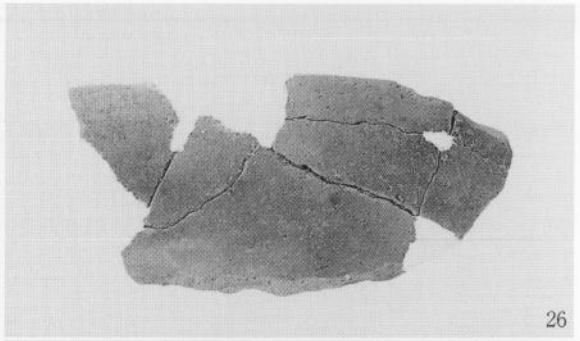
(1)　1号掘立柱建物（北から）　　(2)　2号掘立柱建物（東から）

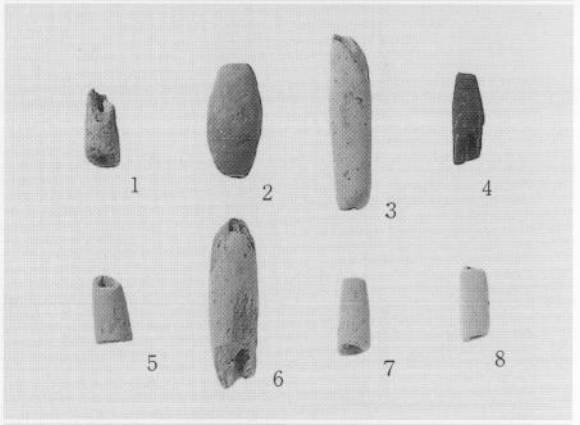
2

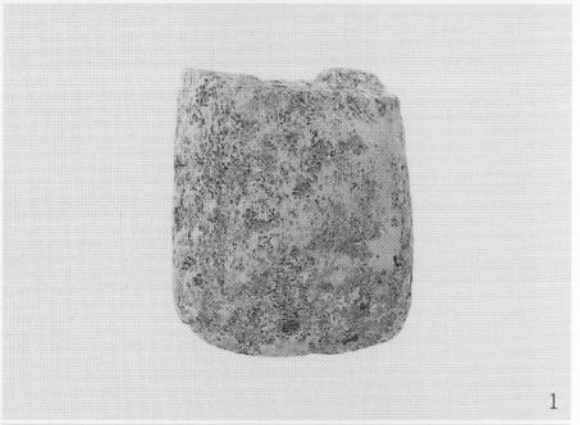

8

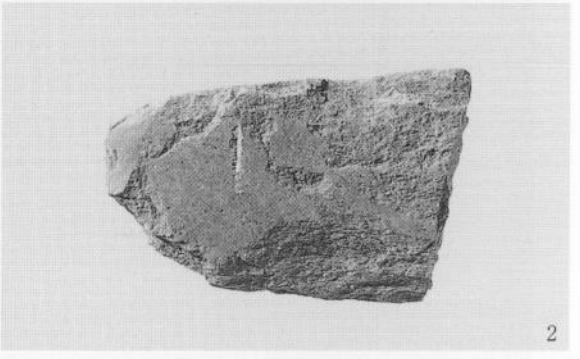

11

14

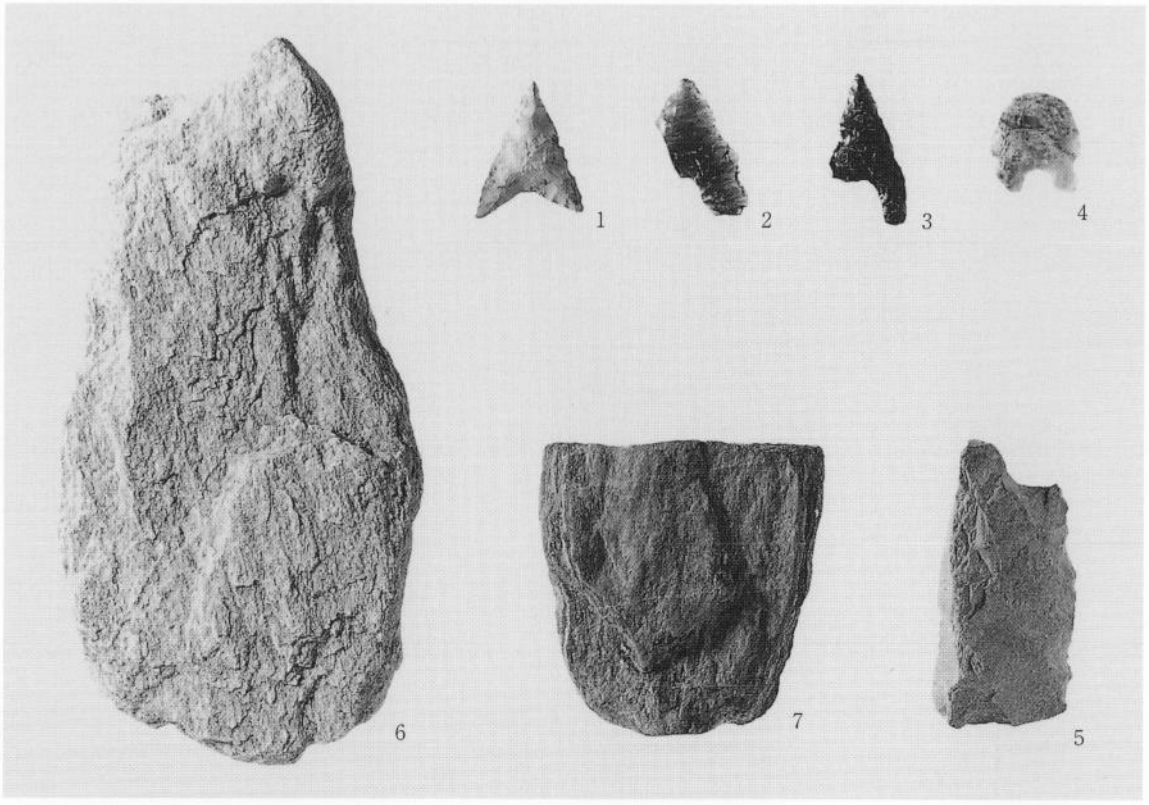

26


1 2 3 4 5 6 7 8


1


2

陣内遺跡出土遺物



陣内遺跡出土遺物

Ⅶ　上野原遺跡

Ⅶ　上野原遺跡

1　はじめに

上野原遺跡は、朝倉郡杷木町大字穂坂字上野原に所在している。陣内遺跡の谷を挟んだ東側にあり、阿蘇山の南西山麓緩斜面に形成されている（第129図）。

調査は、陣内遺跡の調査に引き続いて昭和61年10月３日から17日の間という短期間の調査となった。

調査の結果は、中世のものと思われる火葬墓２基と溝状遺構２条、他にまとまりはないが大小のピットが多数検出された。東側には浅く狭い谷部の包含層があり縄文土器・弥生土器・土師器・瓦質土器・青磁・白磁等が、また、西側にも一部包含層があったが、弥生土器破片などが少量出土しただけである。陣内遺跡と同様に極めて希薄な遺跡であった（図版98、第141図）。

発掘調査の関係者は以下の通りである。

調査担当者

文化課技術主査　井上　裕弘

調査補助員　高田　一弘

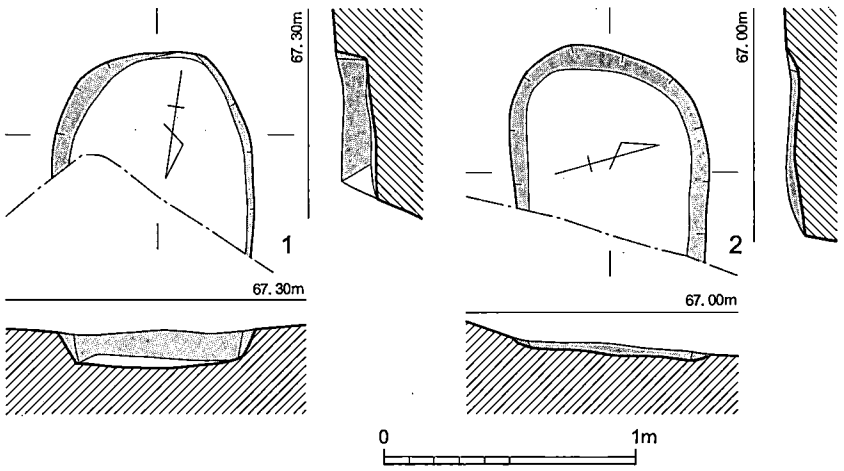
作業員

田中　静夫　仲山　宗利　友納　浩　高倉美智子　石井　律子
山下けさ江　山本チサヨ　青柳　美雪　熊谷ヨリ子　伊藤千代香
武藤ヒデ子　秋吉　初代　藤本　和子　楾村スズ子　井手　和枝
井手　照子　満生アヤ子　日野マツ子　津村カヅ江　塚本ヤエ子
日吉スミ子

2　火葬墓

１号火葬墓（図版99・100、第140図）

発掘区南端部にあり、旧谷部上層に形成された火葬墓であるが、試掘調査時のトレンチで北半部が欠失している。墓壙は楕円形プランを呈すものと思われ、底面は焼けていないが、壁面は火を受けて真っ赤に焼けており、埋土からは焼土や炭化物・灰土とともに焼骨が多数検出さ



第140図　上野原遺跡火葬墓実測図(1/30)

れた。墓壙の規模は、現存部で東西0.8m、南北0.8m、深さ14cmを測る。遺物は何等出土していないが、旧谷部の最終埋没時期が出土遺物から中世と考えられ、切り込み面などから近接する中世の1号溝状遺構とともに同時期のものと思われる。

2号火葬墓（図版99・100、第140図）

1号火葬墓の北側から検出された楕円形プランの土壙で、1号火葬墓と同様に試掘時のトレンチで東半部を消失している。壁面は強い火を受けて焼土化しており、埋土からは焼土・灰土とともに多くの焼骨が検出された。墓壙の規模は、現存部で東西0.79m、南北0.85m、深さ8cmを測る。遺物は土師器小片のみで明確ではないが1号火葬墓と同様、中世の時期のものと思われる。

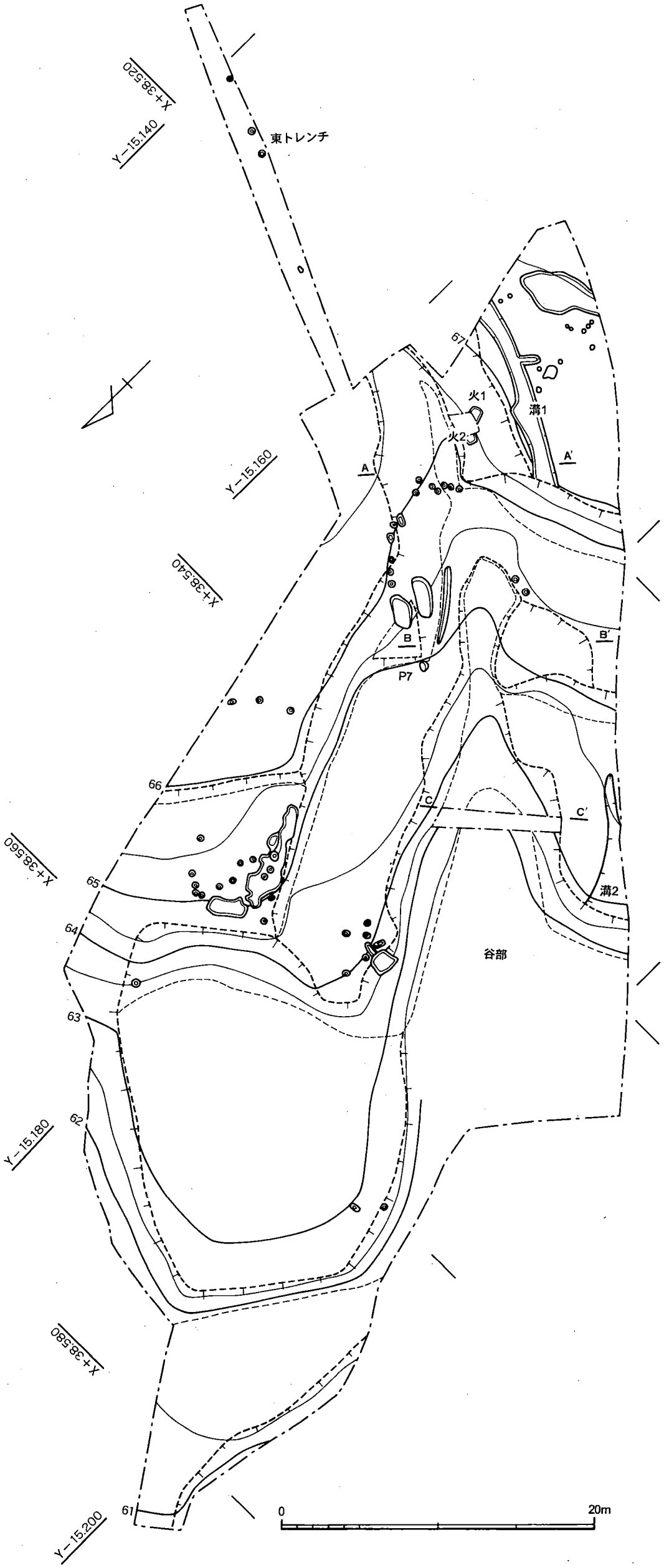
3　溝状遺構及びピット群

1号溝状遺構（図版99、第141図）

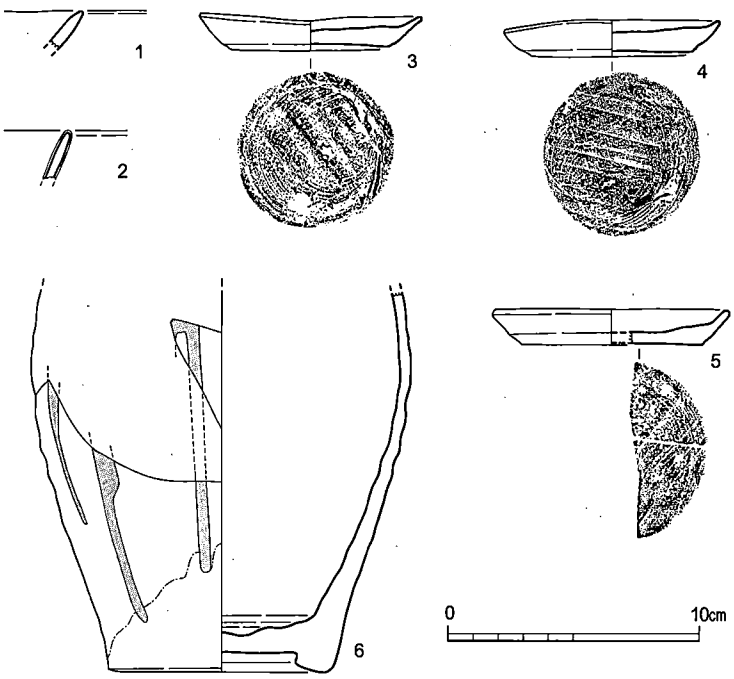
1・2号火葬墓の南側から検出された東西に走る溝で、西端部は畑の段落で欠失しており、確認できた部分で全長12.4m、幅の広い部分で1.5m、深さ23cmを測る。埋土からは少量の炭化物とともに土師器皿片・青磁片、黒曜石片が少量出土しただけである。時期は出土土器から中世と思われる。

出土遺物（図版101、第142図）

土師器(1)　杯の小破片で、大きさなどは不明である。口縁部内外はヨコナデで仕上げた白黄茶色を呈す焼成良好な土器である。



第141図　上野原遺跡遺構配置図(1/300)



第142図　上野原遺跡溝１・Ｐ７出土土器実測図(1/3)

青磁(2)　椀の小破片で、釉調は青灰黄色を呈し、内外に施釉されている。

２号溝状遺構（図版98、第141図）

発掘区北西端部から検出された東から北西に走る溝で、西端部は段落で消失している。確認部分で全長8.3m、最大幅は西端部で西側壁は未確認であるが2.7m、深さ10cmを測る。埋土からは少量の炭化物が出土しただけで、遺物などは何等出土しなかった。

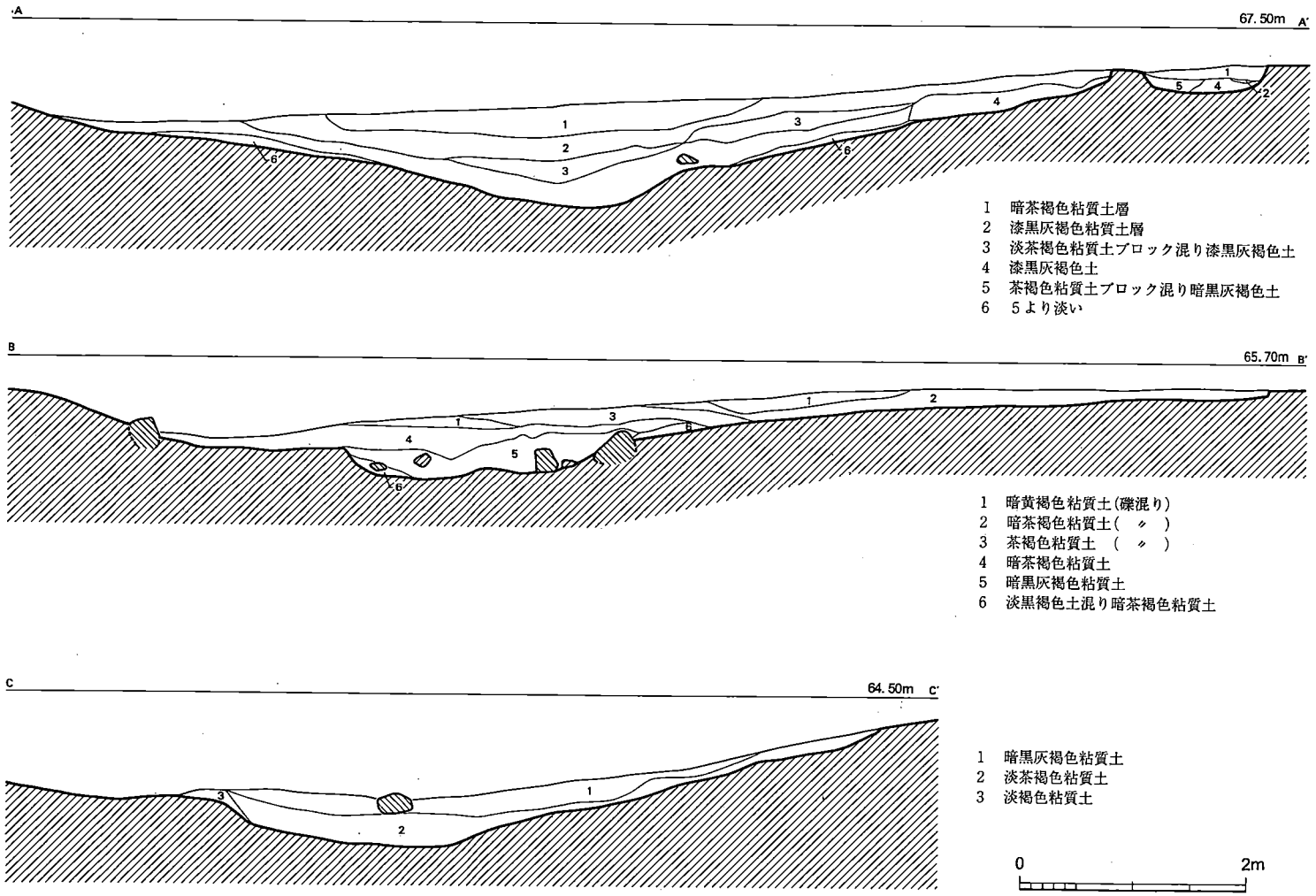
ピット群（図版98、第141図）

発掘区全域から大小のピットが検出されているが、いずれも纏まりもなく散在しており、遺構としては確認できなかった。まとまった遺物が出土したものとしては、発掘区北半部にあるＰ７があり、土師器皿・陶器壺などが出土している。

出土遺物（図版101、第142図）

土師器（３～４）　いずれも小皿で、口縁部内外ヨコナデで、内底部ナデ、底部の切離し手法は糸切りで、底面には板状圧痕を残している。５の内外には煤の付着が見られる。色調は３が白黄茶色、４・５が暗黄茶色を呈し、５の内外に煤の付着が見られる。焼成はいずれも良好である。口径は３が９cm、４が8.6cm、５が復原口径9.4cm、器高は３が1.5cm、４・５が1.4cm、底径は３が6.4cm、４が6.5cm、５が7.2cmを測る。

陶器（６）　長胴の黄釉壺の胴部下半の資料で、胴部上位には耳部が付くものと思われる。



第143図　上野原遺跡谷部土層断面図(1/60)

底部は低い高台をなし、胴部外面には褐釉の流し垂だれが施されている。調整手法は胴部内外と外底部をロクロヨコナデ、内底部をナデて仕上げている。高台径は8.7cm、胴部最大径は15cmを測る。

4　旧谷部及び包含層

発掘区中央から検出された狭く細長い旧谷部で、東側に開口している。発掘した範囲での開口部幅は15m、最奥部での幅は3.3m、深さは中央部で約1mを測る（図版98、第141図）。谷部の埋没状況は、自然堆積のレンズ状堆積をしており、堆積土はいずれも粘質の強い土層が多く、徐々に埋没した様相を呈している（第143図）。最上層から中世の土師器や磁器などが出土しており、最終埋没時期は中世と考えられる。下層の堆積土からは少量ではあるが縄文晩期の土器破片をはじめ、黒曜石剥片も出土している。

発掘区東側（東トレンチ）にも堆積土は薄いが包含層が形成されており、遺構などは確認できないものの弥生時代後期後半の土器が少量出土している（第141図）。

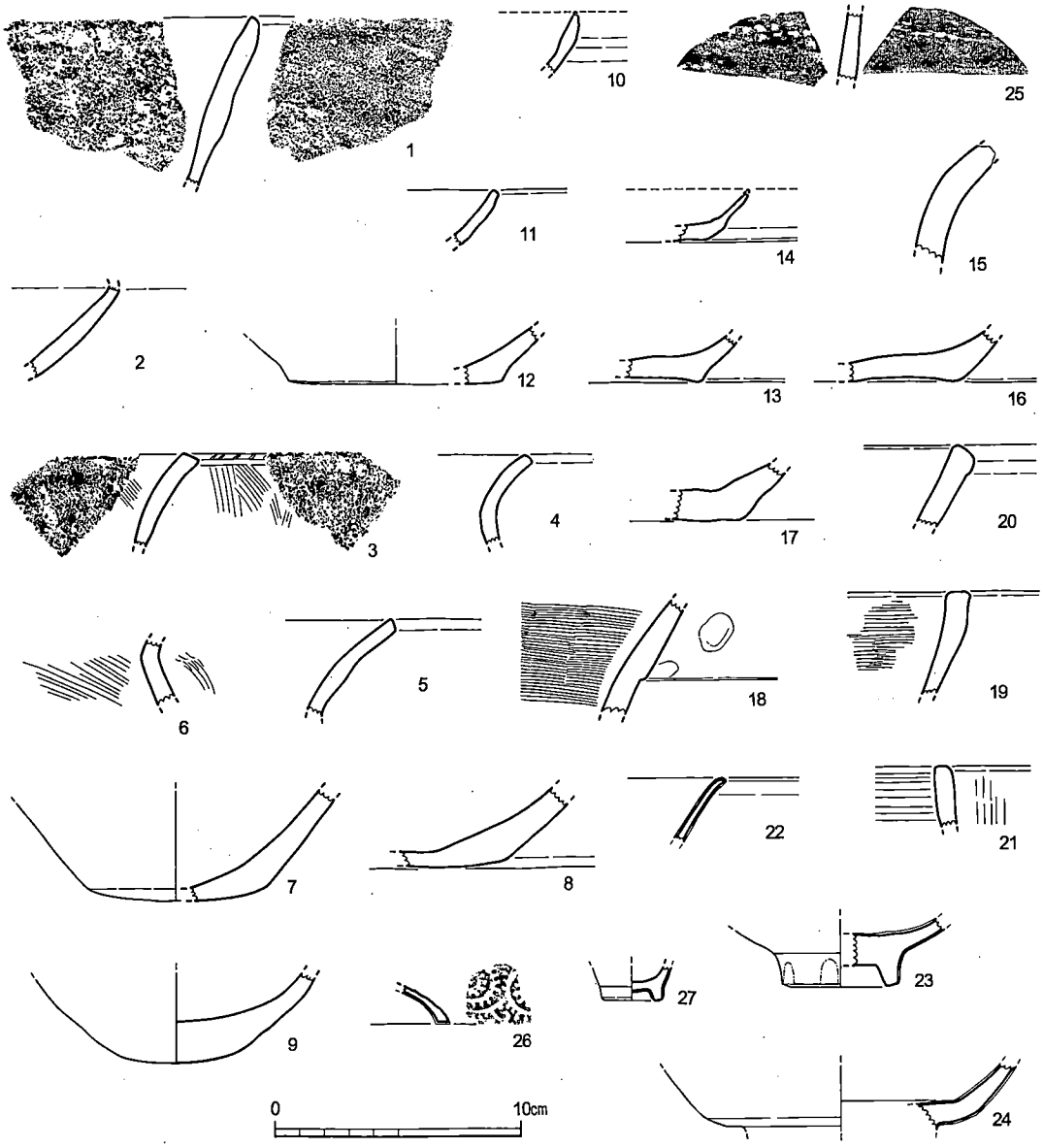
出土遺物（図版101・102、第144・145図）

縄文土器（1・2）　1は粗製の深鉢形土器の口縁部付近の小破片で、2は精製の浅鉢の体部下半の小破片である。調整は器面が風化しているため不明で、色調は暗茶褐色を呈し、焼成も良好である。1が谷部、2が東トレンチ出土のものである。

弥生土器（3～9）　3～6は甕の口縁部付近の破片資料で、3の口縁端部には刻み目が施されている。調整は4・5が器面風化のため不明だが、3・6は内外とも刷毛調整で仕上げている。7～9は底部資料で、7・8がレンズ状、9は丸底状を呈している。色調は6が淡茶褐色、7が淡赤茶褐色の他は暗黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。いずれも東トレンチから出土したものである。

土師器（10～14）　10～13は杯、14は小皿の破片資料である。いずれも器面の風化が著しく調整手法は不明なものが多いが、14の底部の切離しは糸切りで、13の底部には板目状圧痕が残っている。12の復原底径は4.7cmを測る。色調は11・14が白黄茶色、12・13が淡橙褐色を呈し、焼成も良好である。15は甕の口縁部付近の小破片で、緩やかに外反している。調整は器面風化のため不明で、色調は淡橙褐色を呈し、焼成も良い。16～18は土鍋の破片で、16・17が底部付近、18は体部上半の資料である。調整は18が外面ヨコナデ、内面は細かい刷毛で仕上げている。16・17は器面の風化が著しく調整手法は不明である。色調は16が淡白橙色、17が暗黄褐色、18が淡焦茶色を呈し、焼成も良好である。15が東トレンチ出土の他は谷部出土の資料である。

瓦質土器（19～21）　20・21は土鍋の口縁部の小破片で、20の口縁端部は肥厚している。調



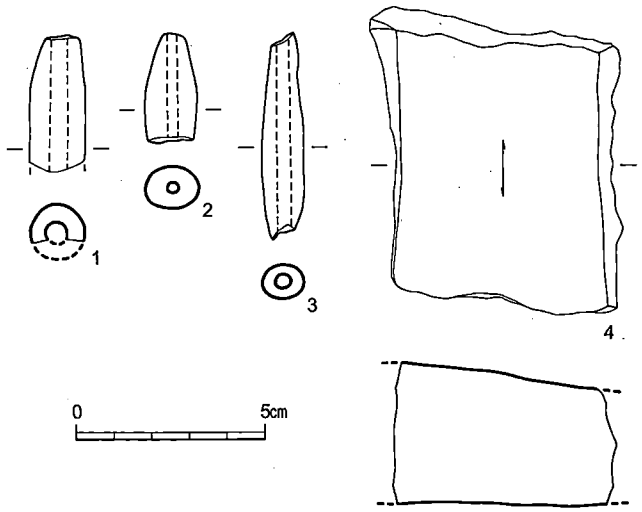
第144図　上野原遺跡谷部包含層出土土器実測図(1/3)

整は風化のため明確ではないが、19の内面は刷毛調整している。21は湯釜の口縁部で、内傾気味に直口し、内外とも刷毛で仕上げている。焼成は良好である。19・20が谷部、21が東トレンチ出土の資料である。

磁器（22～26）　22は白磁の椀の破片資料で、23・24は青磁の高台付椀で、内外とも淡灰色の釉薬が施されているが、23の高台部内面は露胎のままである。23は復原高台径4.8cmを測る。

26・27は近世の磁器で、26は紅皿の蓋、27は高台付の小型の盃で、26の外面には菊花文が刻印されている。乳白色の釉薬が施され、焼成も良好である。24・27が東トレンチ、他は谷部出土の資料である。

陶器（25）　内外とも格子目の叩きを施したあと、ロクロヨコナデで仕上げた暗茶褐色を呈す焼成良好な土器である。谷部出土の資料である。



第145図　上野原遺跡出土土製品・石製品実測図(1/2)

土製品（第145図１～３）　管状の小型の土錘である。１・２に対して３が細身の土錘で、色調は１が淡黄褐色、２が淡灰褐色、３が暗灰色を呈し、焼成も良好である。いずれも谷部出土。

石器（第145図４）　凝灰岩製の平坦な磨石の破片資料で、上下の面を研磨している。

5　おわりに

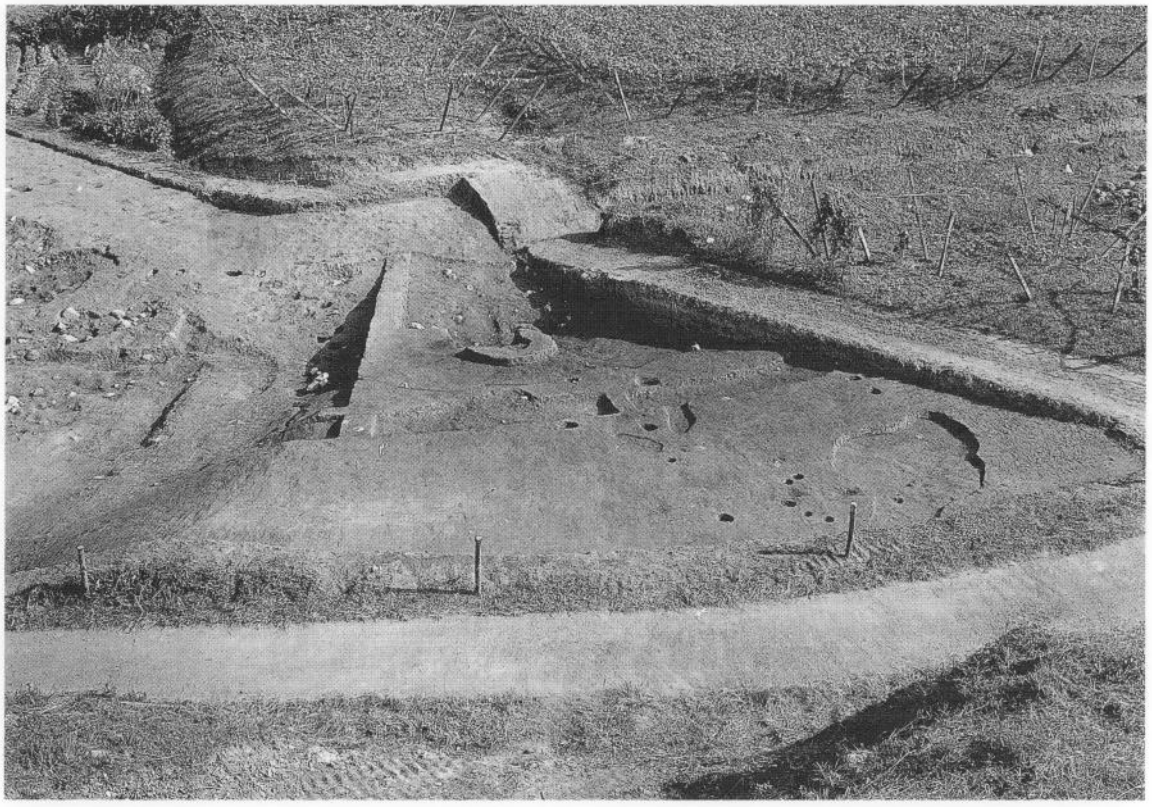
遺構としては、中世のものと思われる火葬墓２基と溝状遺構２条、遺構としての纏まりはないが多数のピットが検出されただけの極めて希薄な遺跡であった。遺物としても遺構と関連する中世の土師器・瓦質土器・磁器・陶器が主体であるが、他に縄文晩期の土器小片と弥生後期後半の土器破片が数点出土しただけで全体的な量としてもパンケース１箱程度と少なく、削平の関係もあるかもしれないが元々密度の低い小規模な遺跡であったものと考えられる。

火葬墓からは土器などは出土していないが、埋土の土質や旧谷部埋没時期などを考慮すれば南側を走る１号溝状遺構や谷部出土の土器が示す12世紀末から13世紀初めの頃のものと思われる。旧谷部上層から出土する土師器や磁器も、一部15世紀代（第144図23）のものもあるが、その多くは12世紀末から13世紀初めのもので占められており、この遺跡の中心時期といえるだろう。ピット７から出土した黄釉壺は一般的に12世紀代のものであり、一緒に出土した土師器小皿は12世紀末から13世紀初めに位置づけられるので、若干の時期差が存在することになる。

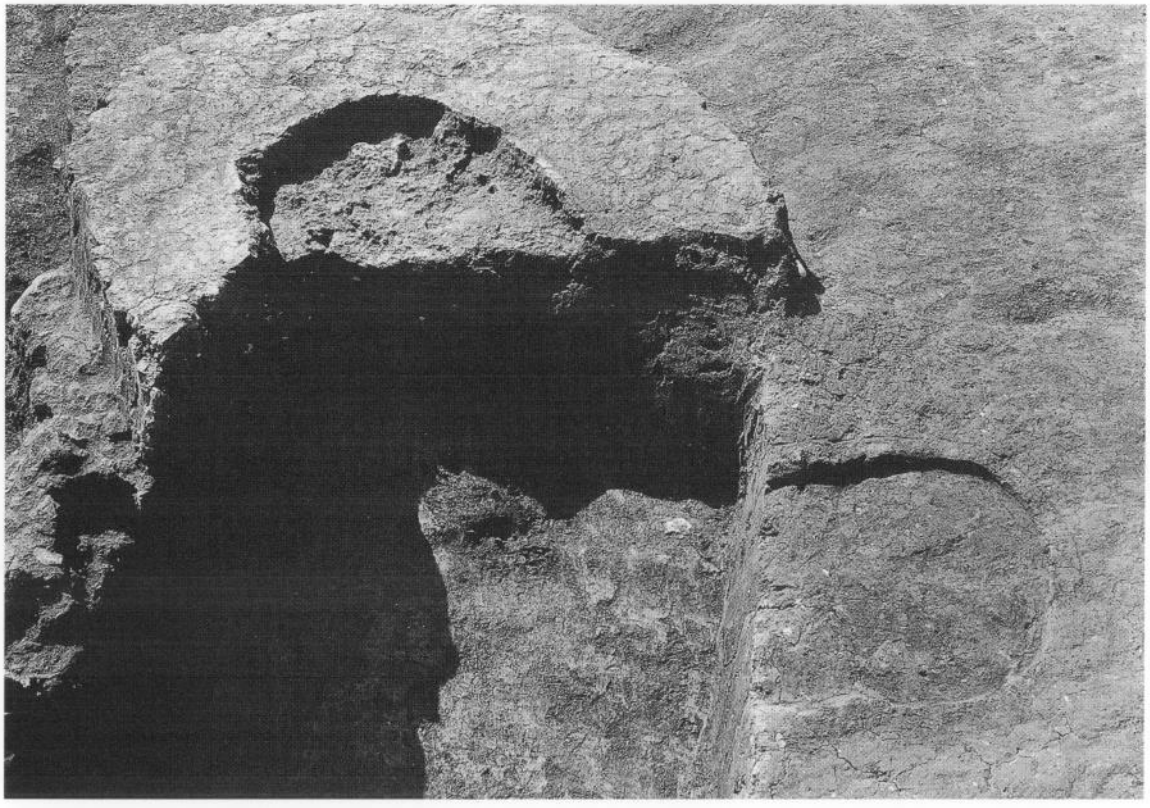
図　　版

(1)　発掘区全景（北から）

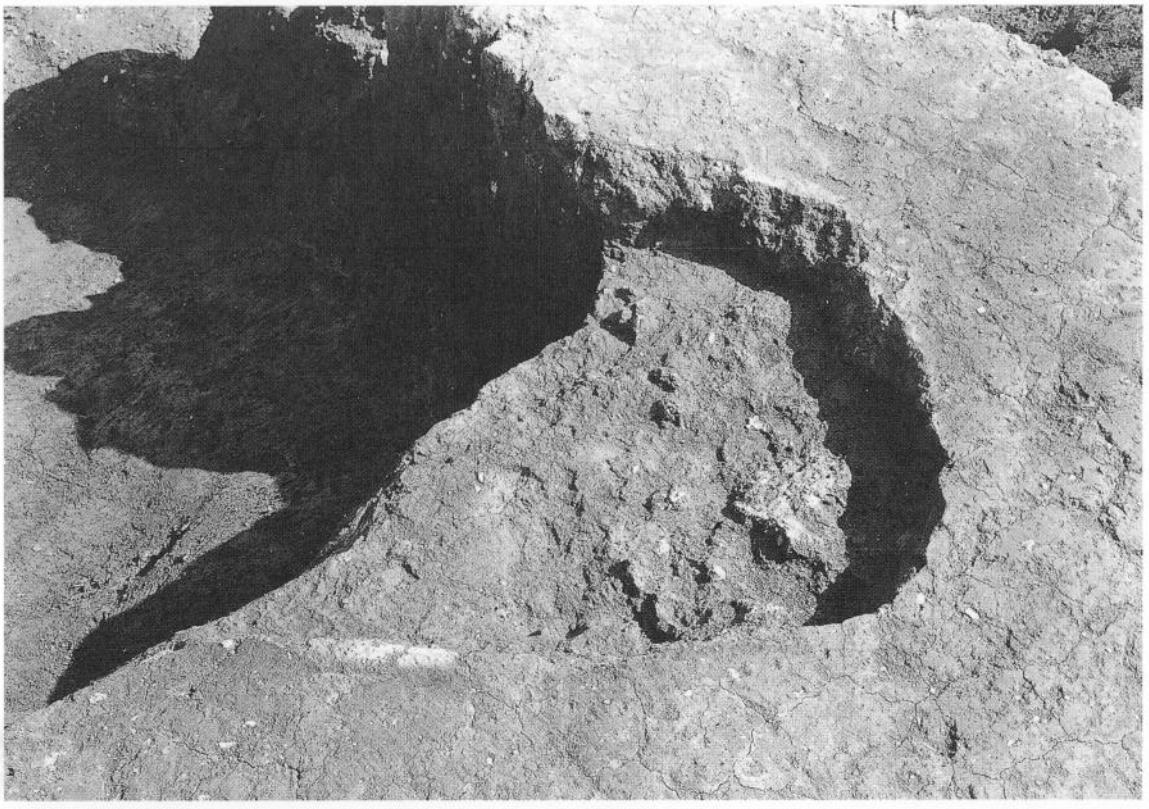
(2)　発掘区南半部全景（西から）



(1)　発掘区南端（西から）

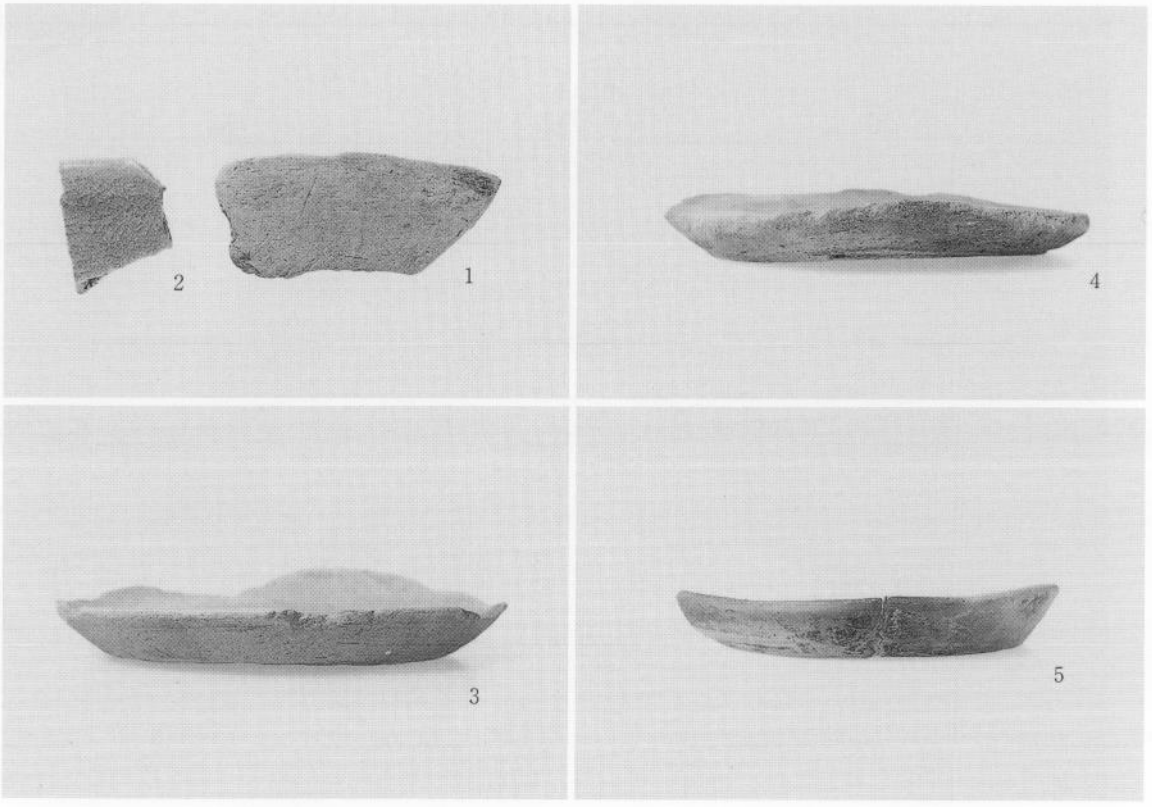


(2)　1号・2号火葬墓全景（北から）



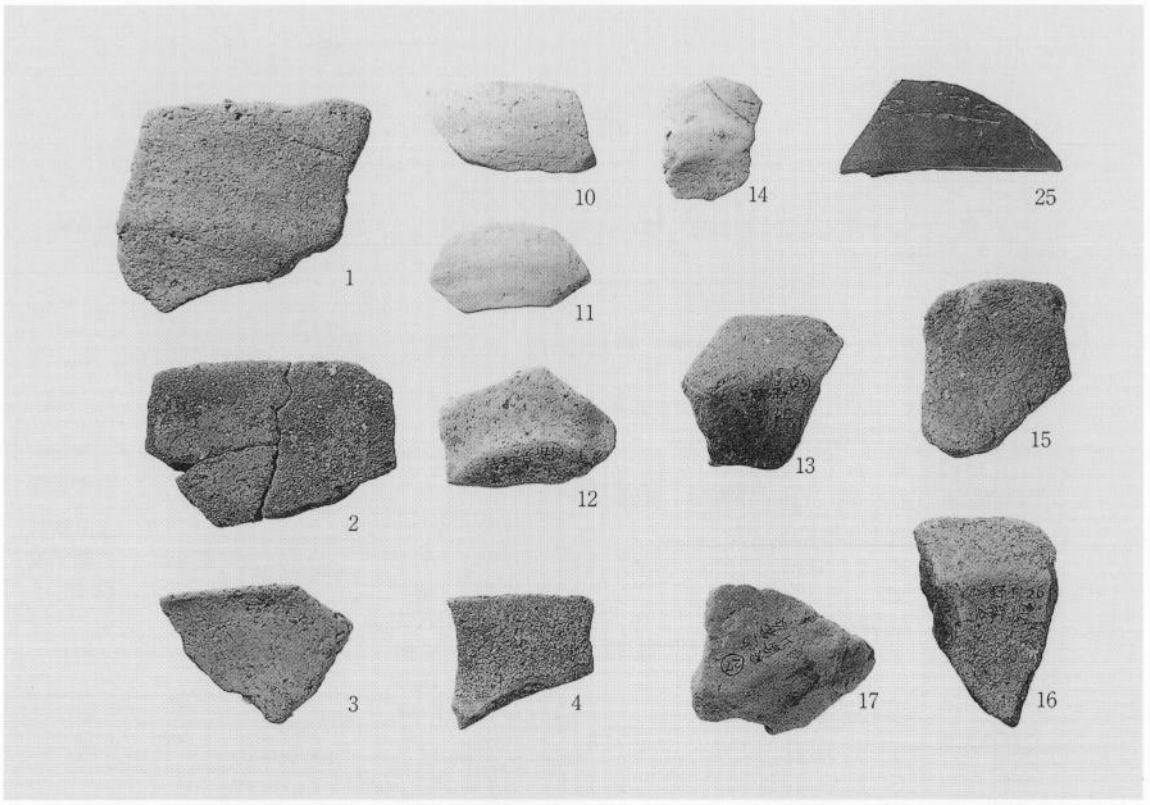
(1)　1号火葬墓（西から）

(2)　2号火葬墓（北から）

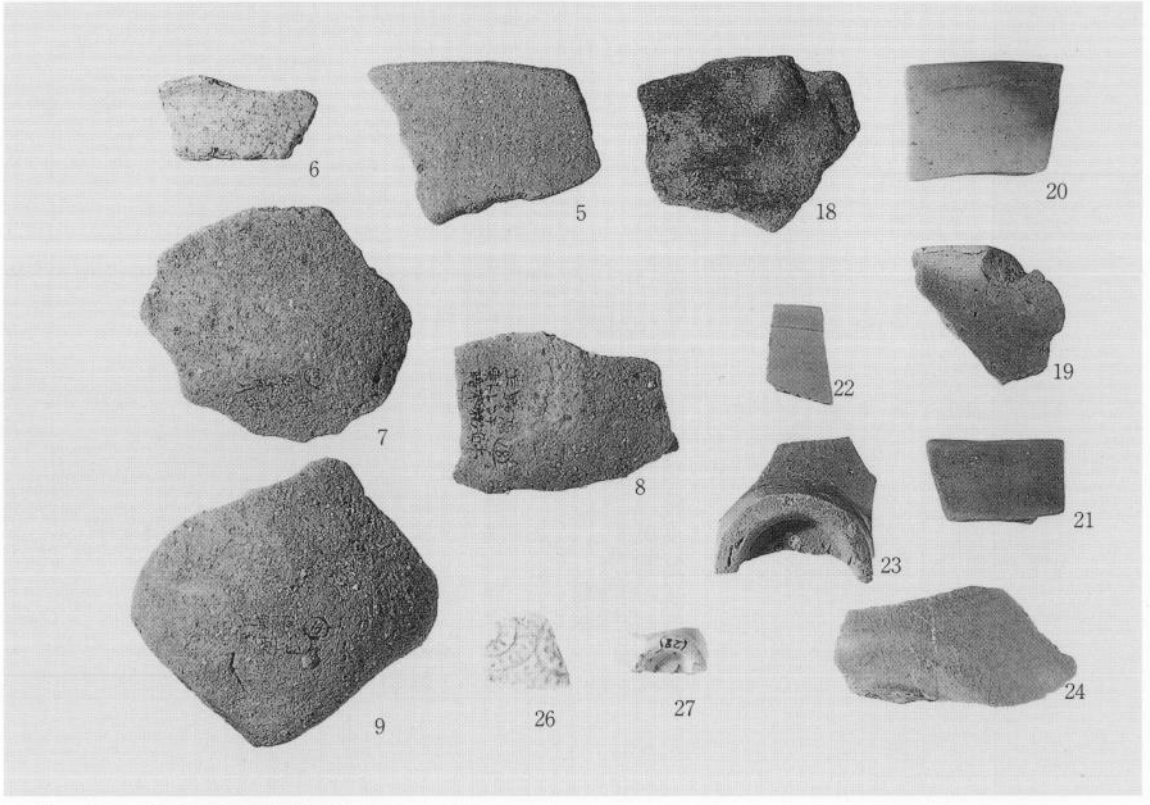


(1) 溝1・ピット7出土土器

(2) ピット7出土土器、包含層出土土製品・石製品



(1) 谷部・包含層出土土器 ①



(2) 谷部・包含層出土土器 ②

報告書抄録

ふりがな	きゅうしゅうおうだんじどうしゃどうかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこく　49
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－49－
副書名	朝倉郡杷木町所在　楠田遺跡　小覚原遺跡　二十谷遺跡　陣内遺跡　上野原遺跡
巻次	
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	49
編著者名	中間研志　伊崎俊秋　佐々木隆彦　井上裕弘　大澤正己　杉原敏之
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812－8575　福岡市博多区東公園７番７号　TEL092－641－2903
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
くすだいせき 楠田遺跡	ふくおかけんあさくらぐんはきまちおおあざやまあざくすだ 福岡県朝倉郡杷木町大字林田字楠田		580161	33度21分42秒	130度49分46秒	19861201～19870328	5,650	九州横断自動車道建設
しょうかくばるいせき 小覚原遺跡	ふくおかけんあさくらぐんはきまちおおあざおおやまあざしょうかくばる 福岡県朝倉郡杷木町大字大山字小覚原		580162	33度21分39秒	130度49分50秒	19870422～19870613	1,332	同上
にじゅうたにいせき 二十谷遺跡	ふくおかけんあさくらぐんはきまちおおあざはやしだあざにじゅうたに 福岡県朝倉郡杷木町大字林田字二十谷		580163	33度21分34秒	130度49分55秒	19870422～19870609	1,500	同上
じんないいせき 陣内遺跡	ふくおかけんあさくらぐんはきまちおおあざはさかあざじんない 福岡県朝倉郡杷木町大字穂坂字陣内		580164	33度20分54秒	130度50分10秒	19860822～19860924	3,500	同上
うえのはるいせき 上野原遺跡	ふくおかけんあさくらぐんはきまちおおあざはさかあざうえのはる 福岡県朝倉郡杷木町大字穂坂字上野原		580165	33度20分52秒	30度50分12秒	19861003～19861017	2,700	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
楠田遺跡	集落跡	縄文後期	土壙	1基	押型文土器	
		縄文晩期	竪穴住居跡	7軒	縄文後・晩期土器多量	
			竪穴	1基	偏平打製石斧、石器	
			土壙	61基		
		弥生中期	土壙	1基		
		古墳時代	竪穴	1基		
小覚原遺跡	集落跡	縄文晩期	竪穴住居跡	12軒	縄文晩期土器	
			土坑	40基	ナイフ形石器	
					細石刃　その他打製石器	
二十谷遺跡	集落跡	縄文晩期	竪穴住居跡	33軒	縄文土器・石器	
		縄文	落し穴	10基		
		中世	掘立柱建物	3棟	鞴羽口	
			溝	5条	陶器・土師器・鉄器	
			土壙	42基	鉄塊・鉄滓	鍛冶関連遺構
陣内遺跡	炭焼窯跡	中世	炭焼窯跡	1基	土師器・青磁・白磁	
			掘立柱建物	2棟	近世陶器	
			竪穴状遺構	1基		
上野原遺跡	火葬墓	中世	火葬墓	2基	焼骨片・土師器片	
			溝状遺構	2条	土師器片・青磁片	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 9	登録番号 6

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－49－

平成10年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　㈱西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚8－2－15

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
— 49 —

朝倉郡杷木町所在
楠田遺跡　小覚原遺跡　二十谷遺跡
陣内遺跡　上野原遺跡

付　　図

付　図　　二十谷遺跡遺構配置図(1/200)